宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）

飯田二反田遺跡

（はんだにたんだ）

1993年

大分県教育委員会

序　　文

九州の東部を南北に縦貫する国道10号線は、大分県と北九州を結ぶ唯一の国道として、産業・経済・文化などの発展にとって重要な役割を果たしてきました。しかし、近年の交通量の増加に伴い、混雑が激しくなり、様々な問題が生じてきました。そこで、これらを解消するため、北九州市と大分市を結ぶ北大道路が計画されました。

この道路は、県下でも有数の埋蔵文化財の包蔵地である宇佐平野とその周辺が計画用地となることから、開発と文化財保護の調整が必要となり、このため宇佐市山本と日出町南端間の宇佐別府道路において幾つかの遺跡が調査されました。

本書は、こうした調査の結果、記録保存となりました飯田二反田遺跡の発掘調査報告書であります。本書が学術研究や郷土の歴史研究のため、また、埋蔵文化財の理解のため役立てば幸いであります。

最後に、現地の発掘調査から報告書作成まで御指導いただきました諸先生方をはじめ調査に御協力いただきました関係者の方々、地元の皆様に対し、深く敬意を表するとともに、厚くお礼を申し上げます。

平成 5 年 3 月

大分県教育委員会

教育長　宮 本 高 志

例　　言

1、本書は一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う事前調査のうち昭和63年から平成2年まで調査した宇佐郡安心院町飯田二反田遺跡の発掘調査報告である。

2、調査は建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。

3、発掘調査にあたっては安心院町教育委員会、並びに地元の方々の御協力を得た。

5、本書の執筆者は次のとおりである。

第1章　序　説

1．調査の経過 ---------- 清水宗昭

2．調査の体制 ---------- 渋谷忠章

3．遺跡の位置と環境 ---------- 坂本嘉弘

第2章　飯田二反田遺跡の調査

1．飯田二反田遺跡出土土器の分類 ---------- 宮内克己

2．1号住居跡 ---------- 坂本嘉弘

3．2号住居跡 ---------- 宮内克己

4．3号住居跡 ---------- 松本康弘

5．4号住居跡 ---------- 宮内克己

6．5号住居跡 ---------- 宮内克己

7．集石遺構・屋外炉 ---------- 後藤一重

8．土　　坑 ---------- 松本康弘

9．掘立柱建物 ---------- 松本康弘

10．溝状遺構 ---------- 松本康弘

11．昭和63年・平成元年度調査区遺物包含層 ---------- 後藤一重

12．平成2年度調査区遺物包含層 ---------- 原田昭一

13．飯田二反田遺跡出土石器 ---------- 牧尾義則・高畠　豊

第3章　まとめ

1．縄文土器の検討 ---------- 宮内克己

2．縄文時代の竪穴住居跡の検討 ---------- 坂本嘉弘

6、遺物の実測・トレース・写真は、それぞれの担当者が古武牧子・安倍聡子（嘱託）の協力を得て行った。また遺物の整理・復元には県文化課資料室の多くの方々の協力を得た。

7、本書の編集は各担当者で協議して行った。

目　　次

第１章　序　説

１．発掘調査の経過 ---------- 1

２．調査体制 ---------- 1

３．遺跡の位置と環境 ---------- 3

第２章　飯田二反田遺跡の調査

１．飯田二反田遺跡出土土器の分類 ---------- 7

２．１号住居跡 ---------- 15

３．２号住居跡 ---------- 65

４．３号住居跡 ---------- 75

５．４号住居跡 ---------- 99

６．５号住居跡 ---------- 113

７．集石遺構・屋外炉 ---------- 120

８．土坑 ---------- 121

９．掘立柱建物 ---------- 127

10．溝状遺構 ---------- 128

11．昭和63年・平成元年度調査区遺物包含層 ---------- 134

12．平成２年度調査区遺物包含層 ---------- 167

13．飯田二反田遺跡出土石器 ---------- 204

第３章　まとめ

１．縄文土器の検討 ---------- 255

２．縄文時代の竪穴住居跡の検討 ---------- 263

図版目次

第1図　飯田二反田遺跡周辺遺跡分布図 ---------- 4
第2図　飯田二反田遺跡周辺地形図 ---------- 6
第3図　飯田二反田遺跡出土土器分類図 ---------- 11
第4図　飯田二反田遺跡遺構分布図 ---------- 13
第5図　1号住居跡石組炉実測図 ---------- 16
第6図　1号住居跡実測図 ---------- 17
第7図　1号住居跡出土土器実測図（1） ---------- 19
第8図　1号住居跡出土土器実測図（2） ---------- 20
第9図　1号住居跡出土土器実測図（3） ---------- 21
第10図　1号住居跡出土土器実測図（4） ---------- 22
第11図　1号住居跡出土土器実測図（5） ---------- 23
第12図　1号住居跡出土土器実測図（6） ---------- 24
第13図　1号住居跡出土土器実測図（7） ---------- 25
第14図　1号住居跡出土土器実測図（8） ---------- 26
第15図　1号住居跡出土土器実測図（9） ---------- 27
第16図　1号住居跡出土土器実測図（10） ---------- 28
第17図　1号住居跡出土土器実測図（11） ---------- 29
第18図　1号住居跡出土土器実測図（12） ---------- 30
第19図　1号住居跡出土土器実測図（13） ---------- 31
第20図　1号住居跡出土土器実測図（14） ---------- 32
第21図　1号住居跡出土土器実測図（15） ---------- 33
第22図　1号住居跡出土土器実測図（16） ---------- 34
第23図　1号住居跡出土土器実測図（17） ---------- 35
第24図　1号住居跡出土土器実測図（18） ---------- 36
第25図　1号住居跡出土土器実測図（19） ---------- 37
第26図　1号住居跡出土土器実測図（20） ---------- 38
第27図　1号住居跡出土土器実測図（21） ---------- 39
第28図　1号住居跡出土土器実測図（22） ---------- 40
第29図　1号住居跡出土土器実測図（23） ---------- 41
第30図　1号住居跡出土土器実測図（24） ---------- 42
第31図　1号住居跡出土土器実測図（25） ---------- 43
第32図　1号住居跡出土土器実測図（26） ---------- 44
第33図　1号住居跡出土土器実測図（27） ---------- 45
第34図　1号住居跡出土土器実測図（28） ---------- 46
第35図　1号住居跡出土土器実測図（29） ---------- 47
第36図　1号住居跡出土土器実測図（30） ---------- 48
第37図　1号住居跡出土土器実測図（31） ---------- 48
第38図　1号住居跡出土土器実測図（32） ---------- 49
第39図　1号住居跡出土土器実測図（33） ---------- 50
第40図　1号住居跡出土土器実測図（34） ---------- 51
第41図　1号住居跡出土土器実測図（35） ---------- 52
第42図　1号住居跡出土土器実測図（36） ---------- 53
第43図　1号住居跡出土土器実測図（37） ---------- 54
第44図　1号住居跡出土土器実測図（38） ---------- 55
第45図　1号住居跡出土土器実測図（39） ---------- 56
第46図　1号住居跡出土土器実測図（40） ---------- 57
第47図　1号住居跡出土土器実測図（41） ---------- 58
第48図　1号住居跡出土土器実測図（42） ---------- 59
第49図　2号住居跡実測図 ---------- 65
第50図　2号住居跡出土土器実測図（1） ---------- 67
第51図　2号住居跡出土土器実測図（2） ---------- 69
第52図　2号住居跡出土土器実測図（3） ---------- 70
第53図　2号住居跡出土土器実測図（4） ---------- 71
第54図　2号住居跡出土土器実測図（5） ---------- 72
第55図　2号住居跡出土土器実測図（6） ---------- 73
第56図　2号住居跡出土土器実測図（7） ---------- 74
第57図　3号住居跡土器炉実測図 ---------- 75
第58図　3号住居跡土器炉土器実測図 ---------- 76
第59図　3号住居跡実測図 ---------- 77
第60図　3号住居跡出土土器実測図（1） ---------- 79
第61図　3号住居跡出土土器実測図（2） ---------- 80
第62図　3号住居跡出土土器実測図（3） ---------- 80
第63図　3号住居跡出土土器実測図（4） ---------- 81
第64図　3号住居跡出土土器実測図（5） ---------- 83
第65図　3号住居跡出土土器実測図（6） ---------- 84
第66図　3号住居跡出土土器実測図（7） ---------- 85
第67図　3号住居跡出土土器実測図（8） ---------- 85
第68図　3号住居跡出土土器実測図（9） ---------- 86
第69図　3号住居跡出土土器実測図（10） ---------- 87
第70図　3号住居跡出土土器実測図（11） ---------- 88
第71図　3号住居跡出土土器実測図（12） ---------- 89
第72図　3号住居跡出土土器実測図（13） ---------- 90
第73図　3号住居跡出土土器実測図（14） ---------- 91
第74図　3号住居跡出土土器実測図（15） ---------- 92
第75図　3号住居跡出土土器実測図（16） ---------- 93
第76図　3号住居跡出土土器実測図（17） ---------- 94
第77図　3号住居跡出土土器実測図（18） ---------- 95
第78図　4号住居跡実測図 ---------- 99
第79図　4号住居跡出土土器実測図（1） ---------- 101
第80図　4号住居跡出土土器実測図（2） ---------- 102
第81図　4号住居跡出土土器実測図（3） ---------- 103
第82図　4号住居跡出土土器実測図（4） ---------- 104
第83図　4号住居跡出土土器実測図（5） ---------- 105
第84図　4号住居跡出土土器実測図（6） ---------- 107
第85図　4号住居跡出土土器実測図（7） ---------- 108
第86図　4号住居跡出土土器実測図（8） ---------- 109
第87図　4号住居跡出土土器実測図（9） ---------- 110
第88図　4号住居跡出土土器実測図（10） ---------- 111
第89図　5号住居跡実測図 ---------- 113
第90図　5号住居跡出土土器実測図（1） ---------- 114
第91図　5号住居跡出土土器実測図（2） ---------- 115
第92図　5号住居跡出土土器実測図（3） ---------- 116
第93図　5号住居跡出土土器実測図（4） ---------- 117
第94図　5号住居跡出土土器実測図（5） ---------- 118
第95図　集石遺構平面図 ---------- 120
第96図　集石遺構周辺土器実測図 ---------- 120
第97図　屋外炉平面図 ---------- 121
第98図　1号土坑実測図 ---------- 122
第99図　2号土坑実測図 ---------- 122
第100図　3号土坑実測図 ---------- 123
第101図　4号土坑実測図 ---------- 123
第102図　3号土坑出土土器実測図 ---------- 124
第103図　5号土坑実測図 ---------- 125
第104図　6号土坑出土土器実測図 ---------- 126

第105図　6号土坑実測図 ---------- 127
第106図　1号掘立柱建物実測図 ---------- 128
第107図　2号掘立柱建物実測図 ---------- 128
第108図　溝1・2出土土器実測図（1） ---------- 129
第109図　溝1・2出土土器実測図（2） ---------- 130
第110図　溝1・2出土土器実測図（3） ---------- 131
第111図　溝1・2出土土器実測図（4） ---------- 132
第112図　溝1・2出土土器実測図（5） ---------- 133
第113図　溝4出土土器実測図 ---------- 133
第114図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代早期土器実測図（1） ---------- 136
第115図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代早期土器実測図（2） ---------- 137
第116図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代早期土器実測図（3） ---------- 138
第117図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代早期土器実測図（4） ---------- 139
第118図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代早期土器実測図（5） ---------- 140
第119図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代早期土器実測図（6） ---------- 141
第120図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代早期土器実測図（7） ---------- 142
第121図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（1） ---------- 145
第122図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（2） ---------- 146
第123図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（3） ---------- 147
第124図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（4） ---------- 148
第125図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（5） ---------- 149
第126図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（6） ---------- 150
第127図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（7） ---------- 151
第128図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（8） ---------- 152
第129図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（9） ---------- 153
第130図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（10） ---------- 154
第131図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（11） ---------- 155
第132図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（12） ---------- 156
第133図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（13） ---------- 157
第134図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（14） ---------- 158
第135図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（15） ---------- 159
第136図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（16） ---------- 160
第137図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（17） ---------- 161
第138図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（18） ---------- 162
第139図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（19） ---------- 163
第140図　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文時代後期土器実測図（20） ---------- 164
第141図　平成2年度調査区平面図 ---------- 167
第142図　平成2年度調査区北壁断面図 ---------- 168
第143図　平成2年度調査区出土硬玉製丸玉実測図 ---------- 168
第144図　平成2年度調査区出土土器実測図（1） ---------- 169
第145図　平成2年度調査区出土土器実測図（2） ---------- 170
第146図　平成2年度調査区出土土器実測図（3） ---------- 171
第147図　平成2年度調査区出土土器実測図（4） ---------- 172
第148図　平成2年度調査区出土土器実測図（5） ---------- 173
第149図　平成2年度調査区出土土器実測図（6） ---------- 174
第150図　平成2年度調査区出土土器実測図（7） ---------- 175
第151図　平成2年度調査区出土土器実測図（8） ---------- 176
第152図　平成2年度調査区出土土器実測図（9） ---------- 177
第153図　平成2年度調査区出土土器実測図（10） ---------- 178
第154図　平成2年度調査区出土土器実測図（11） ---------- 179
第155図　平成2年度調査区出土土器実測図（12） ---------- 180
第156図　平成2年度調査区出土土器実測図（13） ---------- 181
第157図　平成2年度調査区出土土器実測図（14） ---------- 182
第158図　平成2年度調査区出土土器実測図（15） ---------- 183
第159図　平成2年度調査区出土土器実測図（16） ---------- 184
第160図　平成2年度調査区出土土器実測図（17） ---------- 185
第161図　平成2年度調査区出土土器実測図（18） ---------- 186
第162図　平成2年度調査区出土土器実測図（19） ---------- 187
第163図　平成2年度調査区出土土器実測図（20） ---------- 189
第164図　平成2年度調査区出土土器実測図（21） ---------- 191
第165図　平成2年度調査区出土土器実測図（22） ---------- 192
第166図　平成2年度調査区出土土器実測図（23） ---------- 193
第167図　平成2年度調査区出土土器実測図（24） ---------- 195
第168図　平成2年度調査区出土土器実測図（25） ---------- 196
第169図　平成2年度調査区出土土器実測図（26） ---------- 197
第170図　平成2年度調査区出土土器実測図（27） ---------- 198
第171図　各種礫石器出土分布図 ---------- 206
第172図　1号住居跡出土石器実測図（1） ---------- 207
第173図　1号住居跡出土石器実測図（2） ---------- 208
第174図　1号住居跡出土石器実測図（3） ---------- 209
第175図　1号住居跡出土石器実測図（4） ---------- 210
第176図　1号住居跡出土石器実測図（5） ---------- 211
第177図　2号住居跡出土石器実測図（1） ---------- 212
第178図　2号住居跡出土石器実測図（2） ---------- 213
第179図　3号住居跡出土石器実測図（1） ---------- 214
第180図　3号住居跡出土石器実測図（2） ---------- 215
第181図　3号住居跡出土石器実測図（3） ---------- 216
第182図　3号住居跡出土石器実測図（4） ---------- 217
第183図　3号住居跡出土石器実測図（5） ---------- 218

第184図　3号住居跡出土石器実測図（6）--------219
第185図　3号住居跡出土石器実測図（7）--------220
第186図　4号住居跡出土石器実測図（1）--------222
第187図　4号住居跡出土石器実測図（2）--------222
第188図　4号住居跡出土石器実測図（3）--------223
第189図　5号住居跡出土石器実測図（1）--------224
第190図　5号住居跡出土石器実測図（2）--------224
第191図　5号住居跡出土石器実測図（3）--------225
第192図　大型抉入石斧（分銅型）実測図----------226
第193図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（1）----------227
第194図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（2）----------228
第195図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（3）----------229
第196図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（4）----------230
第197図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（5）----------231
第198図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（6）----------232
第199図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（7）----------233
第200図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（8）----------234
第201図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（9）----------235
第202図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（10）----------236
第203図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（11）----------237
第204図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（12）----------238
第205図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（13）----------239
第206図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（14）----------240
第207図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（15）----------241
第208図　昭和63年・平成元年度調査区
出土石器実測図（16）----------242
第209図　県内縄文時代後・晩期出土石鏃
重量分布図----------247
第210図　溝遺構出土石器実測図（1）----------248
第211図　溝遺構出土石器実測図（2）----------249
第212図　平成2年度調査区出土石器実測図（1）---250
第213図　平成2年度調査区出土石器実測図（2）---251
第214図　平成2年度調査区出土石器実測図（3）---252
第215図　平成2年度調査区出土石器実測図（4）---253
第216図　平成2年度調査区出土石器実測図（5）---254
第217図　小池原上層、鍋崎式、同式系有文鉢・
深鉢胴部文様----------258
第218図　山崎鍋崎式有文深鉢胴部文様----------258

表　目　次

表1　1号住居跡出土土器観察表（1）----------60
表2　1号住居跡出土土器観察表（2）----------61
表3　1号住居跡出土土器観察表（3）----------62
表4　1号住居跡出土土器観察表（4）----------63
表5　1号住居跡出土土器観察表（5）----------64
表6　2号住居跡出土土器観察表----------74
表7　3号住居跡出土土器観察表（1）----------96
表8　3号住居跡出土土器観察表（2）----------97
表9　3号住居跡出土土器観察表（3）----------98
表10　4号住居跡出土土器観察表（1）----------111
表11　4号住居跡出土土器観察表（2）----------112
表12　5号住居跡出土土器観察表----------119
表13　4号土坑出土土器観察表----------124
表14　6号土坑出土土器観察表----------127
表15　溝1・2出土土器観察表（1）----------132
表16　溝1・2出土土器観察表（2）----------133
表17　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文早期土器観察表（1）----------143
表18　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文早期土器観察表（2）----------144
表19　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文後期土器観察表（1）----------165
表20　昭和63・平成元年度調査区出土
縄文後期土器観察表（2）----------166
表21　平成2年度調査区
出土土器観察表（1）----------199
表22　平成2年度調査区
出土土器観察表（2）----------200
表23　平成2年度調査区
出土土器観察表（3）----------201
表24　平成2年度調査区
出土土器観察表（4）----------202
表25　平成2年度調査区
出土土器観察表（5）----------203
表26　飯田二反田遺跡石器組成表----------204
表27　飯田二反田遺跡剥片石器石材・器種別組成表--205
表28　1号住居跡出土石器観察表----------212
表29　2号住居跡出土石器観察表----------213
表30　3号住居跡出土石器観察表----------220
表31　4号住居跡出土石器観察表----------223
表32　5号住居跡出土石器観察表----------225
表33　昭和63・平成元年度調査区
出土石器観察表----------243
表34　県内磨石錘多数出土遺跡一覧----------245
表35　飯田二反田遺跡出土石錘縦横比----------246
表36　飯田二反田遺跡出土石錘重量別個体数----------246
表37　溝遺構出土石器観察表----------249
表38　平成2年度調査区出土石器観察表----------254

写真図版目次

図版１　飯田二反田遺跡遠景（その１）、飯田二反田遺跡遠景（その２）----------269
図版２　１・２号住居跡、１号住居跡----------270
図版３　２号住居跡、３号住居跡遺物出土状況----------271
図版４　３号住居跡、４号住居跡----------272
図版５　５号住居跡、５号住居跡遺物出土状況----------273
図版６　屋外炉、１号土坑----------274
図版７　２号土坑、３号土坑----------275
図版８　４号土坑、６号土坑----------276
図版９　１号掘立柱建物跡、平成２年度調査区完掘状況----------277

第1章　序　説

1．発掘調査の経過

宇佐別府道路は一般国道10号バイパスとして計画された北大道路の一部であり、建設省施工区画の院内町香下から安心院町佐田に至る全長8.9kmを昭和61年度より埋蔵文化財発掘調査の対象としてきた。

路線内の分布調査は昭和61年度に行ない、8カ所について埋蔵文化財包蔵地と判断し、試掘調査を昭和61年12月より実施した。飯田二反田遺跡に関しては昭和52年度の圃場整備事業により破壊され、遺構の残存は期待できるものではなかったが、当時としては県下においても類例の少ない縄文時代後期の集落跡を確認し、しかも多量の遺物がみられたため、俄に注目される遺跡となった。

飯田二反田遺跡の本調査は昭和63年度より3カ年にわたり実施した。

まず、昭和63年度・平成元年度は調査区を1500㎡にわたり設定し、縄文時代早期の集石遺構、縄文時代後期の竪穴住居跡、古墳時代後期の掘立柱建物跡・溝状遺構をはじめとして多くの遺構を検出した。この2カ年にわたる発掘調査では県下においても類例の少ない縄文時代後期の竪穴住居跡を検出し、また、その遺存状態がきわめて良好であったため、宇佐風土記の丘歴史民俗資料館の山田拓伸主任研究員に依頼し、1号住居跡・2号住居跡の石囲い炉および屋外炉の切り取り保存作業を行った。

平成2年度は前年度調査区の北側に100㎡の範囲で調査区を設定した。この調査区では前年度調査区の縄文時代後期住居跡に伴う土器群とほぼ同時期の遺物包含層を検出し、前年度調査までの結果とあわせて多くの成果が得られた。

2．調査体制

調査の組織は次のとおりである。

昭和63年度

調査主体　大分県教育委員会

調査委員　賀川　光夫（別府大学学長・大分県文化財保護審議委員）

小田富士雄（福岡大学人文学部教授・大分県文化財保護審議委員）

橘　　昌信（別府大学文学部教授）

家根　祥多（立命館大学文学部助教授）

田中　良之（九州大学医学部助手）

大分県教育委員会

嶋津　文雄（教育長）

小代　基雍（文化課長）

後藤　宗俊（文化課課長補佐）

渋谷　忠章（文化課埋蔵文化財第２係長）

高橋　　徹（文化課埋蔵文化財第２係主査）

宮内　克己（文化課埋蔵文化財第１係主任）

西　　哲弘（文化課埋蔵文化財第２係主任）

小林　昭彦（　　同　　上　　）

友岡　信彦（文化課埋蔵文化財第２係主事）

松本　康弘（　　同　　上　　）

吉田　　寛（　　同　　上　　）

永松みゆき（文化課埋蔵文化財第２係嘱託）

姫野　和子（　　同　　上　　）

吉武　牧子（　　同　　上　　）

平成元年度

調査主体　大分県教育委員会

調査委員　賀川　光夫（別府大学学長・大分県文化財保護審議委員）

小田富士雄（福岡大学人文学部教授・大分県文化財保護審議委員）

石野　博信（奈良県橿原考古学研究所副所長）

山本　輝雄（九州大学工学部助手）

山田　拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員）

大分県教育委員会

嶋津　文雄（教育長）

後藤　正二（文化課課長）

後藤　宗俊（文化課課長補佐）

渋谷　忠章（文化課埋蔵文化財第２係長）

高橋　　徹（文化課埋蔵文化財第２係主査）

小林　昭彦（文化課埋蔵文化財第２係主任）

西　　哲弘（　　同　　上　　）

友岡　信彦（文化課埋蔵文化財第２係主事）

松本　康弘（　　同　　上　　）

吉田　　寛（　　同　　上　　）

永松みゆき（文化課埋蔵文化財第２係嘱託）

姫野　和子（　　同　　上　　）
吉武　牧子（　　同　　上　　）
今泉　正子（　　同　　上　　）

平成２年度

調査主体　大分県教育委員会

調査委員　賀川　光夫（別府大学学長・大分県文化財保護審議委員）
田中　良之（九州大学文学部教授）

大分県教育委員会

嶋津　文雄（教育長）
後藤　正二（文化課長）
林　英輝（文化課課長補佐）
清水　宗昭（文化課埋蔵文化財第１係長）
坂本　嘉弘（文化課埋蔵文化財第１係主査）
西　哲弘（文化課埋蔵文化財第２係主任）
小林　昭彦（文化課埋蔵文化財第１係主任）
原田　昭一（文化課埋蔵文化財第１係主事）
後藤　晃一（　　同　　上　　）
吉田　寛（　　同　　上　　）
丸山　啓子（文化課埋蔵文化財第１係嘱託）
高松　永治（　　同　　上　　）

３．遺跡の立地と環境

(1)　地理的環境

飯田二反田遺跡は、蛇行して流れる深見川沿いの南岸に立地する。深見川は由布院盆地の北に広がる標高約700mの日出生台に源を発し北流する。そして大分県中部にそびえる火山、由布山（1583m）と鶴見山（1374m）の北側に広がる標高600mの塚原高原に達し、北流する津房川と合流し、標高約100mの安心院盆地を形成する。この深見川と津房川の合流地点は方形の形状を見せる安心院盆地の東北隅で、遺跡はこの合流点の約250m下流にある。 また、遺跡から約250m下流は、別府市内の北にある標高約500mの十文字原に源を発する佐田川との合流点でもある。つまり、飯田二反田遺跡は深見川・津房川・佐田川の合流地点に立地する遺跡と言える。

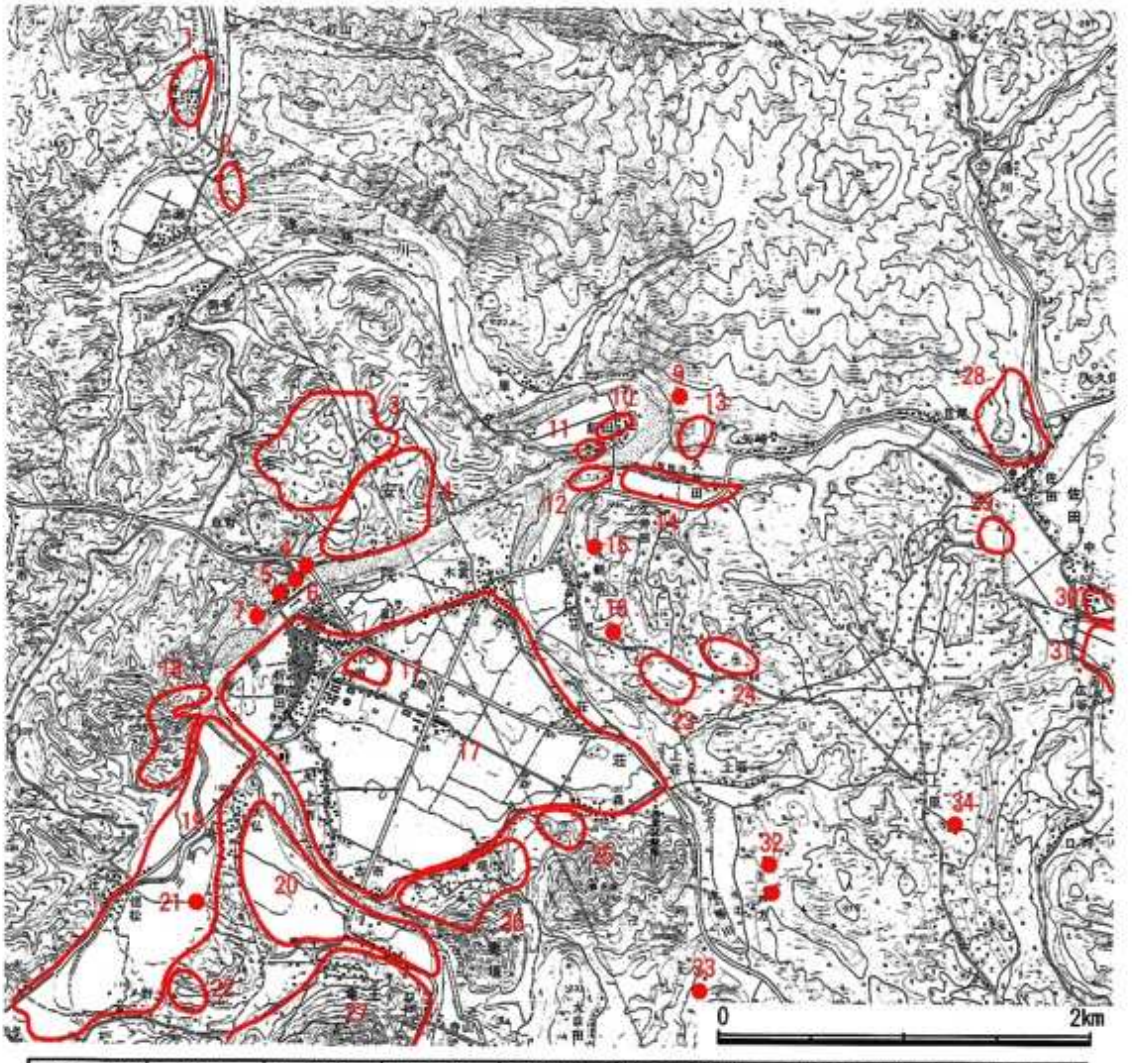
遺跡はほぼ東西に流れる川沿いの標高約80mの狭い谷底平野に立地するため、北側と南側は急な斜面となっている。しかし、同じ斜面でも北は細い痩せ尾根で、南は標高約150mの上ノ原台地へ続いている。また、西側は安心院盆地へと続いており、東側は標高200～300mの山々を

縫うように深見川が蛇行し急峻な地形を呈している。深見川はやがて下流で院内町を流れる恵良川と合流し駅館川となる。そして標高444mの妙見山を迂回し県下最大の穀倉地帯である宇佐平野を北流し周防灘に注いでいる。

(2) 歴史的環境

深見川を含む駅館川流域は、弥生時代から奈良時代にかけての大分県でも重要な遺跡の集中地区として知られている。最近では、これに縄文時代の遺跡もいくつか加わり、さらにその重要性は増している。

縄文時代の遺跡としては、早期の宇佐市別府遺跡と中原遺跡が知られている。これらの遺跡は駅館川の西岸の自然堤防上に立地する遺跡で、別府遺跡から飯田二反田遺跡とほぼ同時期の



1 井手ノ原遺跡	2 広瀬遺跡	3 大平石棺群	4 宮ノ原遺跡	5 不動山横穴墓群	6 下市横穴墓群	7 ヒカケ横穴墓群	8 倉谷山横穴墓群	9 塔ノ山横穴墓群
10 飯田遺跡	11 小原南遺跡	12 飯田二反田遺跡	13 飯田城跡	14 久井田遺跡	15 塔ノ上古墳	16 ホキ横穴墓群	17 三口田遺跡	18 辻横穴墓群
19 安心院条里跡	20 大仏遺跡	21 恒松遺跡	22 ノ野台山城	23 宗禅寺遺跡	24 竹ノ内遺跡	25 小野ノ台遺跡	26 妻垣遺跡	27 竜王城跡
28 赤井城跡	29 上ノ原遺跡	30 中村遺跡	31 広谷遺跡	32 戸方山横穴墓群	33 西戸方遺跡	34 上ノ原財子出土地		

第１図　飯田二反田遺跡周辺分布図

稲荷山式土器・早水台式土器が出土しており、中原遺跡からはさらに古い条痕文土器が出土している。また、後期の遺跡は飯田二反田遺跡の他に、安心院盆地西南部の大仏遺跡があるが、広く宇佐平野を見れば、宇佐市立石貝塚・石原貝塚・西和田貝塚など砂泥性の海岸の近くには後期前半の貝塚が点在している。さらに、豊前地域全体を見れば、最近福岡県側では北九州市下吉田遺跡・菊水町遺跡・苅田町浄土院遺跡・豊津町節丸西遺跡、築上町松丸遺跡、椎田町山崎・石町遺跡、豊前市中村石丸遺跡、新吉富村垂水遺跡、大平村原井三ツ江遺跡・下唐原遺跡・土佐井遺跡が調査されており、大分県側でも三光村佐知遺跡、中津市ボウガキ遺跡、宇佐市尾畑遺跡などが知られ、九州の縄文後期の集落研究の良好な資料を提供している。縄文晩期については、深見川と恵良川の合流点付近の両川遺跡、駅館川が宇佐平野に出た付近の虚空蔵寺遺跡なとで、縄文晩期末の刻目突帯文の時期の遺物が出土している。

弥生時代になると駅館川流域の遺跡は数を増し調査例も多い。広い沖積地を形成する下流域の宇佐平野では特に顕著である。前期では西岸の糸口山丘陵の台ノ原遺跡、東岸の東上田遺跡など袋状貯蔵穴を持つ集落があり、上流の安心院盆地を南に見下ろす宮ノ原遺跡も同様な遺跡である。また、盆地内の西端の大仏遺跡でも弥生前期の遺物が出土している。弥生中期の駅館川流域の遺跡は、宇佐平野では東岸の台地上に野口遺跡・御幡遺跡など大規模な墓地遺跡がある。また、台ノ原遺跡や東上田遺跡では円形住居跡が調査されている。安心院盆地ではやはり、宮ノ原遺跡で弥生中期の遺構や遺物が調査されている。弥生後期の駅館川流域の宇佐平野では二つの環濠に囲まれた川部遺跡、朝鮮式小銅鐸の出土した別府遺跡、広形銅矛の出土した上原遺跡など大規模な集落遺跡が確認されている。一方、安心院盆地では宮ノ原遺跡で多くの方形の住居跡や後漢鏡片が出土している他、盆地東の上ノ原台地で中広銅矛が７口出土している。

古墳時代になると、宇佐平野では九州でも最古の前方後円墳に属する赤塚古墳が、駅館川東岸の平野を西に見下ろす台地の上に築造される。そして、この地では６世紀代の鶴見古墳まで６基の前方後円墳が造られる。これに対し、安心院盆地では、盆地の南の台地に小野ノ台古墳、西の台地に横穴式石室の鬼塚古墳などがあるのみで、地域的な格差が認められるようになる。

白鳳・奈良時代になると、駅館川下流域の宇佐平野では虚空蔵寺跡・法鏡寺跡などの法隆寺式伽藍配置の寺院が立ち並ぶ。また、駅館川の東の寄藻川流域には奈良朝に大きな影響を与えた宇佐神宮がある。安心院盆地では、このような遺構は確認されてないが、古代の官道の駅である「安覆駅」の推定地と考えられ、最近町の中心の役場付近では石帯が出土する建物群が調査されている。

このように、縄文時代から古代にかけての駅館川流域周辺は、この地域のみならず、九州の歴史を明らかにする上で重要な遺跡が点在している。特に、飯田二反田遺跡で明らかになった縄文後期の集落跡は、最近豊前地方で相次いで調査されている縄文時代の集落跡と同時期であり、この時代の集落研究にとって重要な資料と考えている。

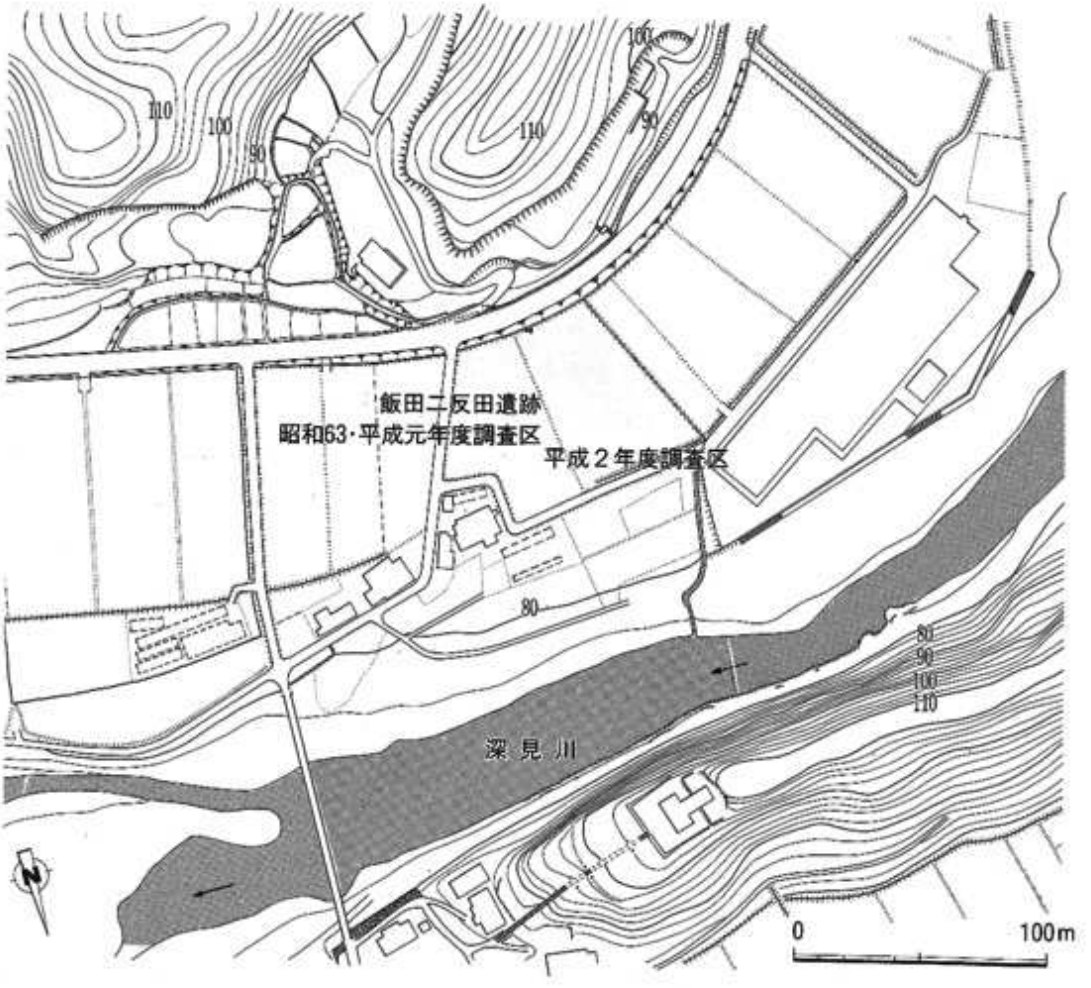
第２章　飯田二反田遺跡の調査

飯田二反田遺跡の発掘調査は昭和63・平成元年度調査区と平成２年度調査区に分けて行った。最終的な整理結果を踏まえると、竪穴住居跡５棟、掘立柱建物跡２棟、集石遺構１基、屋外炉１基、溝状遺構４条、土坑６基、ピット多数などの遺構群が検出できたほか、縄文時代早期遺物包含層と後期遺物包含層が確認できた。

縄文時代早期遺物包含層は昭和63・平成元年度調査区の中央部北寄りの４－Ｂ・４－Ｃグリッドを中心に広がっており、そこからは集石遺構１基が検出している。

縄文時代後期の遺構は竪穴住居跡５棟、屋外炉１基が検出できた。また、昭和63・平成元年度調査区および平成２年度調査区から同時期の遺物包含層が広域に確認でき、多量の遺物が出土した。

縄文時代晩期の遺構としては唯一、土坑が１基検出できたが、同時期の遺物は包含層から全



第２図　飯田二反田遺跡周辺地形図

く確認できなかった。

また、古墳時代後期の遺構としては掘立柱建物跡２棟、溝状遺構４条が検出できた。掘立柱建物跡１からは６世紀末～７世紀初の遺物が出土しているが、掘立柱建物跡２からは遺物の出土は確認できなかった。しかしそれぞれの主軸が同一であることなどから両者は古墳時代後期のものであると判断した。

このほかに土坑やピット群が検出できたが、時期を明確にできなかった。

１．飯田二反田遺跡出土土器の分類

本遺跡では、５基の竪穴住居跡とその周辺の包含層から多量の縄文時代後期前葉～中葉の土器が出土している。各住居跡の土器はいずれも廃棄されたものであるが、多くの完形または完形に近い大形の資料を含み時期的にも若干の混ざりはあるがほぼ単純と見なされるものである。これらの土器は、文様や器形等の要素から以下のⅠ～Ⅳ類に分けられる。

Ⅰ類　やや幅広の沈線（幅５～６㎜）と縄文からなる磨消縄文（疑似縄文）の文様帯に代表される一群。有文土器と無文土器からなり、有文土器には鉢、深鉢、浅鉢または皿の各種が、無文土器は深鉢を主としこれに鉢と皿などが認められる。これらの土器は各々次のように細分される。

有文鉢Ａ１　磨消縄文（疑似縄文）による文様帯をもつもの。口縁部外側は肥厚した文様帯を形成し口縁部は緩い波状を呈する。外に開く口縁部からやや短く締まる頸部に続き、胴部は丸くまたはやや屈曲し張り出す。波頂部の下位に橋状把手を付すものも少数ながら認められる。外面はミガキ、内面は条痕調整によるものが多く、口径20～30cm余りで器高もこれと同様と思われる。

有文鉢Ａ２　上記の鉢とほぼ同様の法量と文様帯を有するが、文様はやや幅広の沈線のみによって構成され縄文は施されないもの。本類の器面調整は外面にも巻貝条痕を残すなどＡ１類にやや劣るものが多い。

有文深鉢Ａ　有文鉢Ａ１類とほぼ同様の器形と文様を示すが、口径・器高とも30cm以上の大形のもの。施文手法や器面調整などは全く変わらないが、沈線文のみによって文様帯を形成する類は認められないようである。また、胴部破片には有文鉢Ａ１類との伴別が困難なものもある。

有文深鉢Ｂ　有文深鉢Ａと同様の器形・文様を呈するが、口縁部は肥厚せず器面調整も巻貝による条痕を主とする。

有文浅鉢Ａ　やや大きく外に開く口縁部からそのまますぼまり底部にいたる器形を示す（皿状を呈するものも含む）。口縁部の四方に隆起部を付すものはその内面にも一部施文するが、外面のほぼ全面に磨消縄文（疑似縄文）による文様を描く。内面はやや丁寧な巻貝条痕またはナデによる。

有文浅鉢Ｂ　沈線文や刺突文のみによって文様を構成するもの。器形は浅鉢Ａ類と大差ないが、法量は全体にやや小形のものが多い。

無文深鉢Ａ１　波状口縁の口縁部は外に開き、頸部で屈曲し肩の張った胴部に至る。波頂部の外面や口唇部に短沈線文や刻目・刺突を加えるが、他に文様はもたない。内外面とも巻貝等による横方向の条痕を主としこれにやや荒いナデを加えるものもある。

無文深鉢Ａ２　上記の深鉢と同じ器形・調整によるが文様を全く施さないもの。ほとんどは波状口縁を呈し平縁の出土例は見ない。また、法量にやや幅が認められる。

無文浅鉢・皿　有文浅鉢・皿とほぼ同様の器形をとるが、文様は施されず内外面とも巻貝等による条痕調整またはナデによるもの。

底部　有文土器と無文土器の底部の判別は、ミガキ等の丁寧な調整によるものを除き困難な場合が多い。平底と上げ底の二者に大別され、上げ底には高台状を呈するものとの緩く窪むものが存在し、中でも高台状の底部の一定量の存在が本類のメルクマールの一つとなる。また、編み物圧痕が残るものも若干認められる。

Ⅱ類　幅２～３㎜余りの沈線によって入組文･渦巻文等の文様を描く有文土器に代表される一群。少数ではあるが磨消縄文が施されるものも残存するものの、疑似縄文によるものはほとんど見ない。有文土器には鉢、深鉢、浅鉢等があり、無文土器には深鉢、鉢、浅鉢・皿が認められる。器面調整は一部の丁寧なものを除き大半は巻貝等による条痕を主とする。本類も以下のように細分される。

有文鉢Ａ１　やや内傾する短い口縁部が屈曲し外に張り出す胴部に続き、胴部上半で反転し底部に至る器形を呈する。胴部を中心に磨消縄文による渦巻文などの文様を描く。口縁部は、平縁を基本とするが橋状把手を付すものなどは四方がわずかに隆起しその口唇部に同心円状の短沈線文やＳ字状文を加え、これを沈線で連絡するものが多い。外面はミガキやナデなどやや丁寧な調整であるが、内面には巻貝等の条痕を残すものが多く、口径30cm以下のものがほとんどである。

有文鉢Ａ２　内傾または短く外反する口縁部からそのまま緩く外に張り出す胴部に至る。四方または対向する二カ所に橋状把手を付すものも少なからず認められ、口縁部は平縁か四方に低い起隆部が形成される。胴部の上半を中心に沈線による入組文や渦巻文などの文様を施す。隆起部分には短沈線文や刺突文を主に入組文やＳ字状文が加えられ、その他は口唇部や口縁端部外側に沈線を巡らす。内外面とも巻貝条痕調整のものが多いが、文様構成がしっかりしたものはナデやミガキなどの丁寧な調整を行う。

有文深鉢Ａ　有文鉢Ａ２類を大形にしたもので、口径30～40数cmを測り器高もほぼこれと同様と思われ深鉢の主体を占めるものである。文様や器面調整にはほとんど差異は認められない。

有文深鉢Ｂ　外に開く口縁部から緩く反転しやや張り出した胴部をもち、口縁部は波状口縁となるもの。波頂部の内外に短沈線による文様を描くほかは口縁部に施文しない。頸部から胴部上半にかけ沈線による文様を施すが、文様構成は一定しない。器面調整は上記の深鉢と変わらないが、出土点数は全体にやや少ない。

有文深鉢Ｃ　内傾またはほぼ直立する口縁部からやや大きく張り出す胴部に至るもので、口縁部とその周辺に沈線による文様を施す。平縁口縁で四方が山形に隆起するものもあり、器面調整は他と変わらない。出土点数はあまり多くない。

有文深鉢Ｄ　外反しながら短く開く平縁の口縁部から張り出した胴部に続き、頸部の無文帯を挟み口縁部外面と胴部に縄文を施す。大小が認められるが大形のものは少なく、器面調整は巻貝などによる条痕を主とする。深鉢Ｃ類よりやや多く、主体とはならないが一定量の割合を占める。

有文浅鉢Ａ　内湾しながら立ち上がる口縁部からそのまますぼまり底部に至るもの。口縁部外

側に磨消縄文を施すが、横走沈線の本数は４条となるものが多くその下位に渦巻文を描く。

有文浅鉢Ｂ　浅鉢Ａと同様の器形をとるが、縄文は施されず沈線や刺突により渦巻文や重弧文等の文様を構成するもの。

有文浅鉢Ｃ　有文鉢Ａ２類を小型化した一群で、口径は15cm以下のものを本類とする。器形や文様・器面調整などに変化はない。

無文深鉢Ａ１　やや低い波状口縁の波頂部に刻目や短沈線文を施すもの。口縁部は短く屈曲し外に開き、ゆるく張り出す胴部をもつ。器面は巻貝を主とする条痕とナデ調整を併用し、口径20～30cm前後のものが多い。

無文深鉢Ａ２　上記の深鉢Ａ１類と同じ器形・調整であるが、全く施文されないもの。

無文深鉢Ｂ　無文深鉢Ａ類とはほぼ同様の器形・調整によるが、口縁は平縁となるもの。橋状把手を付す例や胴部の張りの弱いものも認められる。

無文浅鉢・皿　浅鉢には外に開く口縁部からそのまま平底の底部には至るものと有文鉢を小形化したものの二者が存在し、皿は口縁部がやや大きく外に開き比較的小さい底部を付すものが認められる。

底部　Ⅱ類の底部についても有文土器と無文土器の区別は困難なものが多いが、平底を呈するものが主体を占め、残りをわずかに窪む上げ底からなる。

Ⅲ類　数条の横走沈線による文様を主とする一群。有文鉢と有文深鉢の一部はⅡ類の退化形態を伴うが指標となるのはこの段階において新たに出現した有文深鉢であり、セットを構成する無文深鉢などについてもⅡ類とは異なる要素が出現する。また、有文浅鉢については良好な資料がほとんど出土しておらず、存否と実態はここでは不明である。

有文鉢Ａ　やや内傾する平縁の口縁部からそのまま膨らみをもつ胴部に続くが、口縁部は肥厚しないものや頸部との区別が明確ではないものがやや多く、胴部文様も構成のしっかりした入組文・渦巻文ではなくその退化した同心円文のほかは数条の横走沈線文を主とする。巻貝条痕とナデを主調整とする。

有文鉢Ｂ　外反気味にやや長く延びる口縁部から緩く外に張る胴部に続き、口縁部は波状と平縁の両者がある。波頂部に刻目を加えるものも認められるが、文様は胴部上半を中心としその構成は鉢Ａと同様である。

有文深鉢Ａ　有文鉢Ａを大形にしたもので、口径30cmを超えるものが多い。文様や調整は変わらない。

有文深鉢Ｂ　有文鉢Ｂを大形にしたもの。文様・法量・器面調整等は深鉢Ａと同様である。

有文深鉢Ｃ１　ほぼ直線的に開く波状の口縁部から頸部で屈曲し、肩の張った胴部に至る。波頂部の下にＪ字状とコ字状の沈線文を施し、その左右に２条単位の横走沈線を巡らすほか口唇部にも沈線を加える。器面は巻貝条痕とナデによる調整。

有文深鉢Ｃ２　丸く『く』字状に内傾する口縁部を持ち、頸部は反転しながら締まり張り出した胴部に続く。口縁部は、緩い波状または四方に貼付文による隆起部を有し外面に沈線（３～４条）と縄文または貝殻疑似縄文による文様帯が形成される。また、胴部上半にも同様の文様を施す。

有文深鉢Ｄ　外に開く口縁部から緩く締まる頸部に続き、胴部が膨らむ器形を呈する。頸部の無文帯を挟み、口縁部と胴部に縄文帯または巻貝疑似縄文帯を設ける。口縁部は

平縁であるが四方にやや低い隆起部を付すものも認められる。器具調整は巻貝条痕とナデによる。

無文深鉢A　外に開く低い波状の口縁部にやや肩の張った胴部をもち、波頂部に刻目を加えるものも存在する。調整は主として巻貝条痕、ナデ、ケズリによる。

無文深鉢B　深鉢Aと同様の器形を呈するが、口縁部は平縁となるもの。胴部は肩が張るものと丸みを帯びるもの、あまり張らずそのまますぼまるもの等バリエーションが認められる。器面調整にも大差はないが、胴部が丸みをもつものはやや丁寧なナデやミガキを加えるものがある。

無文浅鉢等　全形の窺える資料は少ないが、皿状・ボウル状の器形を呈すると思われるものが認められる。

底部　皿などの底部を除きほとんどは平底であり、底径10cm前後からそれ以下のあまり大きくないものが多い。

Ⅳ類　代表的な有文深鉢・同浅鉢の口縁部と胴部の主文様は磨消縄文（疑似縄文）であるが沈線は数条の横走沈線を基本とする。

有文鉢　外反しながら短く開く口縁部の外側に１条の沈線と縄文を施す。本例１点のみの出土で胴部以下を欠くため全体ははっきりしないが、Ⅲ類有文鉢Aの系譜を引くと考えられる。

有文深鉢A　口縁部が『く』字状に内傾し緩く反転しながらすぼまる頸部に続き、わずかに膨らむ胴部をもつ。口縁部は平縁または波状を呈し、波頂部や四方に長楕円状の貼付文を施したのち沈線による有軸羽状文等を描く。その左右には２～５条余りの横走沈線や連続山形文と縄文・疑似縄文による文様帯が形成され、胴部上半にも同様の文様帯や縄文帯が設けられる。内外面ともミガキやナデを主調整とするが不十分なものが多く、巻貝等の条痕をそのまま残すものもある。

有文深鉢B　外反あるいは直線的に外に開く口縁部を有し、頸部以下は深鉢Aと同様の器形を示すもの。口唇部や口縁部外側と胴部上半に縄文・疑似縄文による文様を設けるが、その他はナデより巻貝条痕による調整。

有文浅鉢　口縁部は外反しながら開き胴部との境で屈曲し張り出した胴部に続く、胴部最大径の所で折れ曲がり底部に至る。口縁部内側に沈線を外側に縄文を施し、胴部には磨消縄文による文様帯をもつ。外面はミガキを主とし内面はナデやミガキによるがやや粗い調整である。

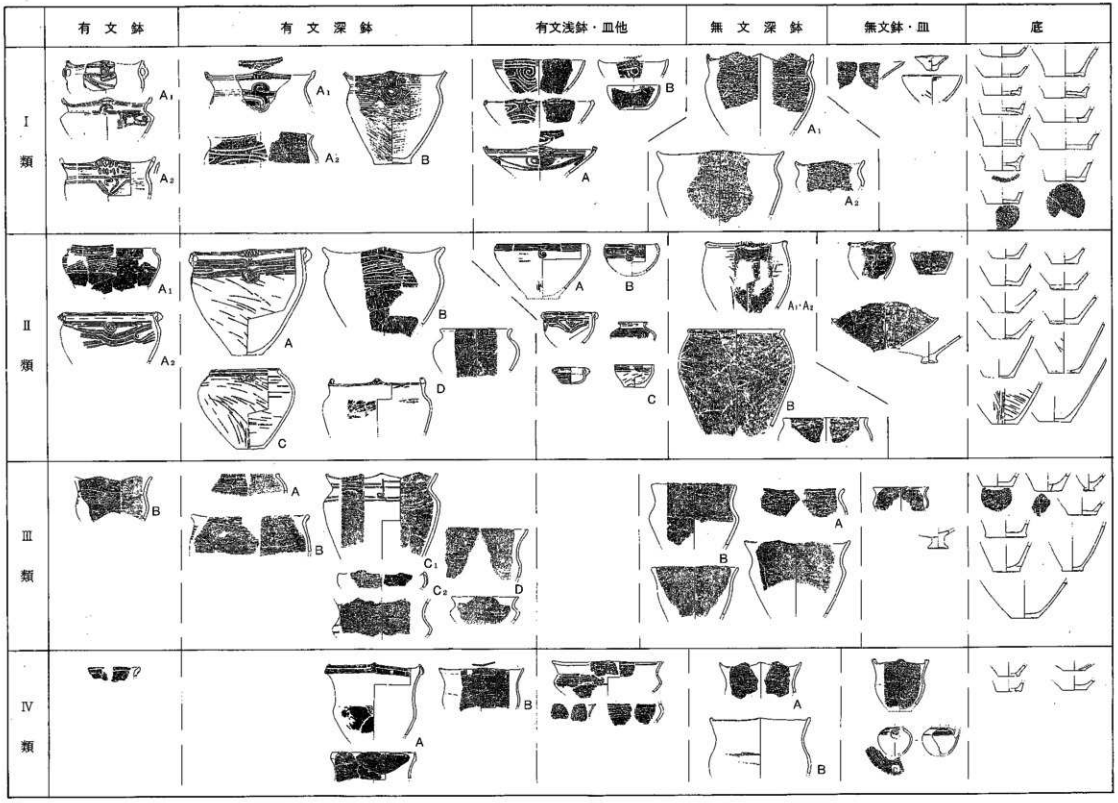
注口土器　ほぼ球形を呈する胴部に注口部を付し、その左右に沈線と巻貝疑似縄文による文様帯を設ける。１点のみの出土で頸部から上を欠くため全体の器形は不明である。

無文深鉢A　波状口縁の口縁部が外に開き、胴部はやや丸く張り出す器形を示す。胴部の張り出しはゆるやかで屈曲の強いものは少ないようである。器面は巻貝条痕とナデを主としてケズリやオサエが認められるものもある。

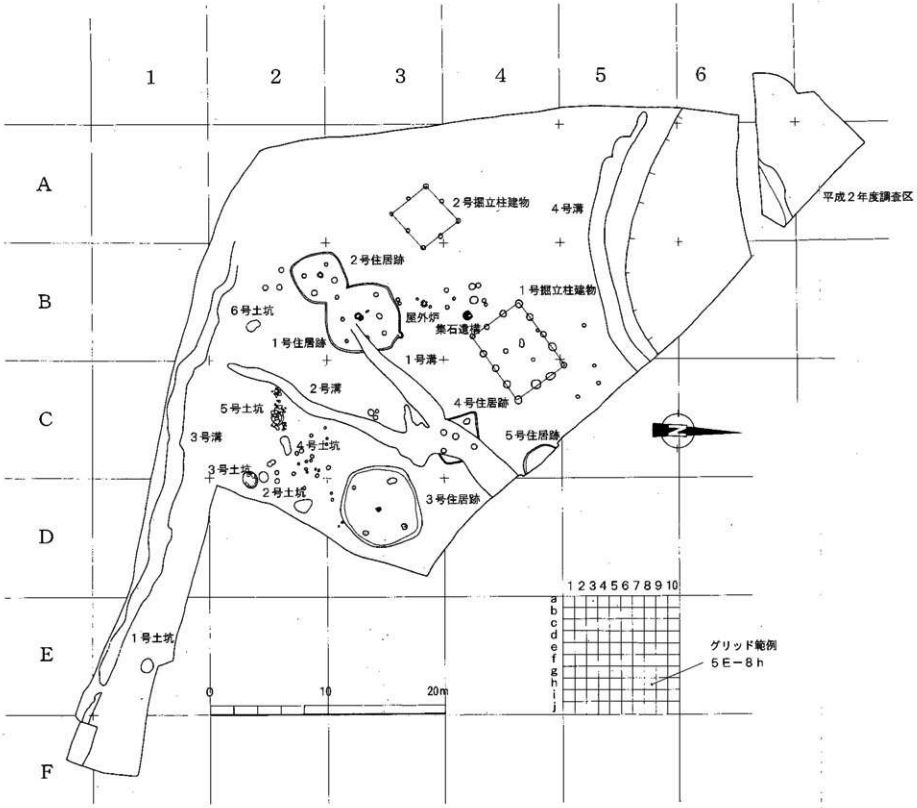
無文深鉢B　器形や調整は変わらないが口縁部が平縁または四方に低い山形隆起部を付すもの。隆起部に刺突や貼付文を加えるものもある。

無文浅鉢等　これらについては良好な資料が出土しておらず、保留しておく。

底部　出土数が少なく不明な点もあるが、平底と上げ底があり全体にやや小型である。



第3図　飯田二反田遺跡出土土器分類図



第4図　飯田二反田遺跡遺構分布図

2．1号住居跡

(1) 遺　溝

1号住居跡は調査区の中央で検出された。この住居跡は南西隅を2号住居跡、中央部を東北かに南西に延びる古墳時代の1号溝で切られている。住居跡の規模は、東西約5.4m、南北約6.1mで、平面形は丸味を帯びた隅丸方形である。検出面から約20cmで床面に達する。床面はほぼ平坦で、中央やや南西寄りに石囲炉が検出され、それを囲み、西に開く〔コ〕の字状に7ヵ所で柱穴が検出された。また、石囲炉から北側約30cm離れた場所で、床面に立てて埋め込まれた扁平な石を検出した。

石囲炉の構造は、直径約60cmの範囲を約10cm皿状に掘り窪め、その周辺に直径約20cm前後の川原石を8個花弁状に配置し、中央部に直径約40cmの炉面を造り出している。また、この石囲炉の北に半円形に配置された4個の石が検出された。使用されている石は、円形に配置された炉の石よりやや小さい。この石組は住居内の位置から、最初に造られた直径約50cmの石囲炉と考えられる。そして、円形に配石された炉は、やや南西にずらして新たに石囲炉を構築したものと考えられる。炉の周辺は南西部に焼土が広がり、その反対側の北東部にかけては粒状の炭化物を多く含む部分が観察できる。

7つの柱穴の規模はP－1が直径45cm・底径28cm・深さ50cmで、P－2は直径36cm・底径30cm・深さ30cm、P－3は直径35cm・底径25cm・深さ40cm、P－4は直径32cm・底径20cm・深さ48cm、P－5は直径26cm・底径30cm・深さ48cm、P－6は直径28cm・底径20cm・深さ34cm、P－7は直径36cm・底径24cm・深さ45cmである。これらの柱穴の間隔は、P1～P3までが3.5m、P1～P4が2.8m、P4～P6が3.8m、P3～P6は3.3mである。

石囲炉の北西に埋め込まれた扁平な石は、長さ45cm、幅5cm、高さ20cmが床面上に出るよう埋め込まれ、約15cmが床面下になっている。

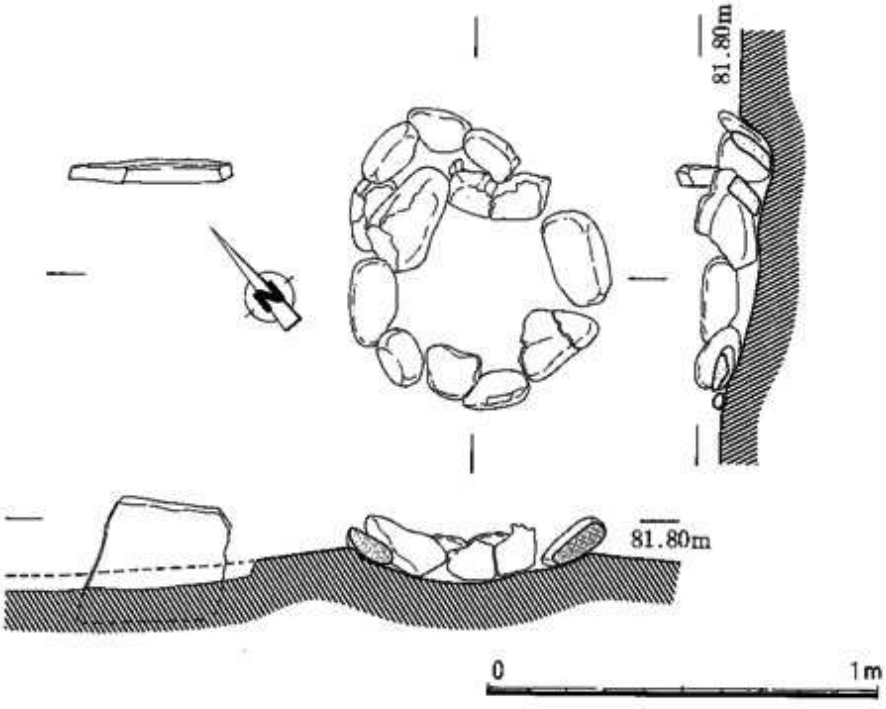
遺構内からは多量の遺物が出土した。その出土状態は3000点以上に及ぶ土器片や、剥片石器や礫石器、獣骨類や川原石が混在したような状況であった。これらの遺物は遺構検出面から床面に至るまで、間層なく同じような状況で出土している。

(2) 遺物

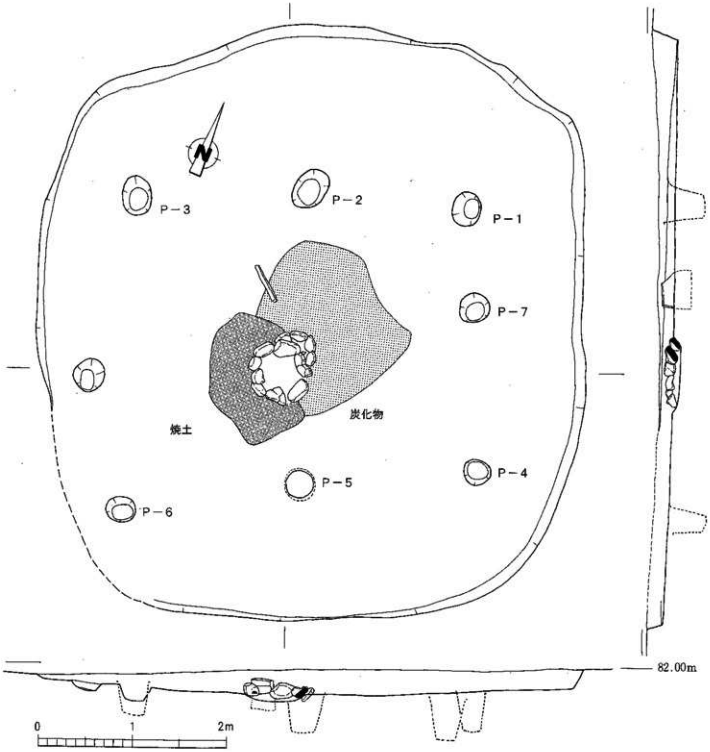
土器は復元がある程度可能な大きな破片が多い。しかも器種は鉢形土器や深鉢形土器などがあり、大きさも大型のものから小型のものまでが認められる。また、粗製土器や製精土器も含まれ、この時期に使われたあらゆる種類の土器のほとんどがあるものと推測される。石器は石鏃や打製石斧、磨石・石皿や石錘が出土しており、これまで他の縄文時代後期の遺跡から出土する石器の様相と違いない。さらに、砕片化した獣骨などが出土している。

以上のような状況から、これらの遺物は1号住居を使用していた縄文人の生活道具とは認め

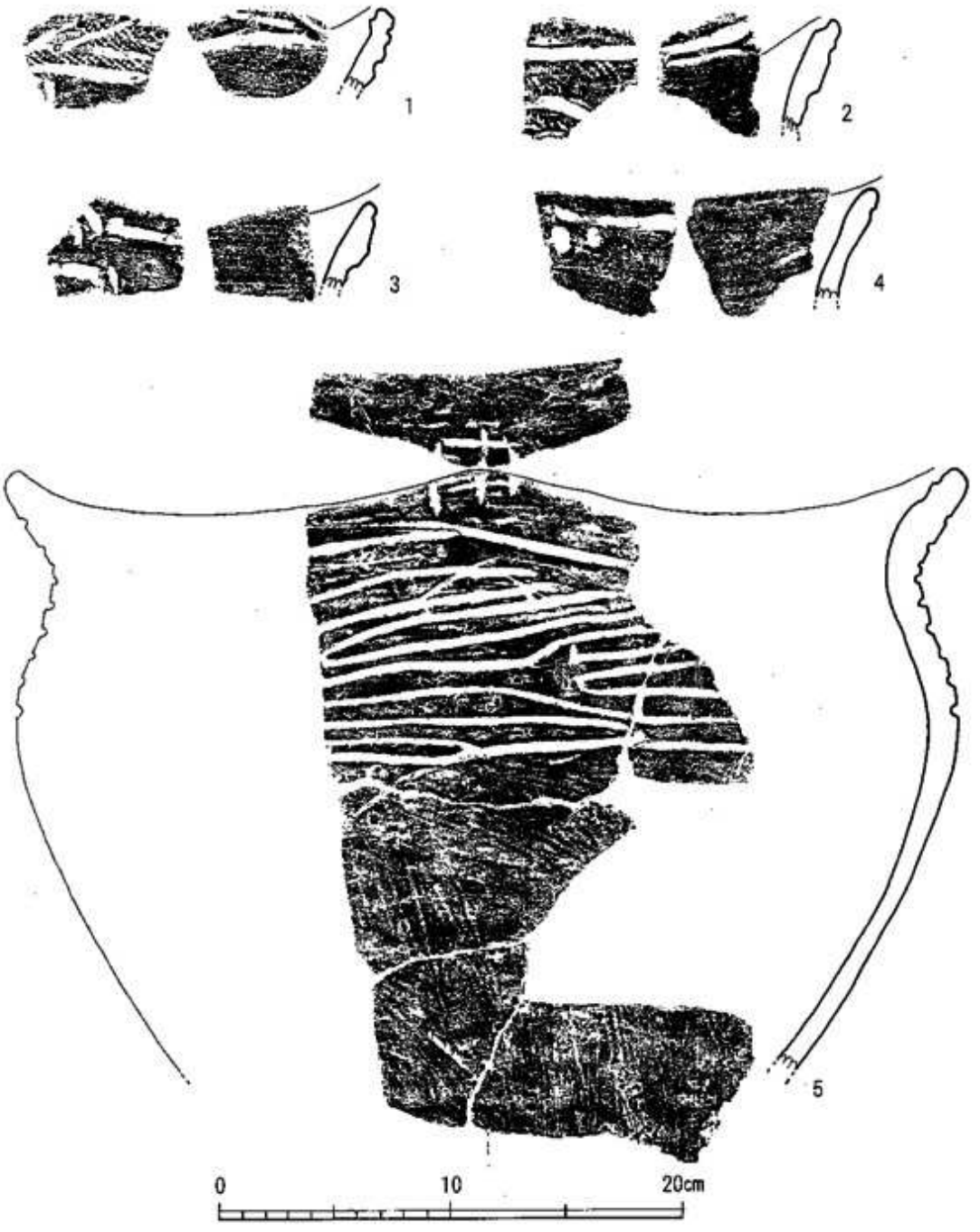
がたい。この遺構が廃棄され、埋まって行く段階で周辺から不要になった土器や石器、食料とした獣の残滓などが投棄され形成されたものと推測される。この土器群の様相はこれまでの縄文土器の編年研究から見ると、前後の時期の土器型式がまったく含まれずほぼ単純な状況をみせる。このため、遺構の床面直上から形成されることや、ひとつの土器型式で構成されることから、この土器群は遺構廃棄直後から極短期間の内に人為的に埋められたものと考えられ、遺構の時期も土器群と極めて近い時期と考えられる。



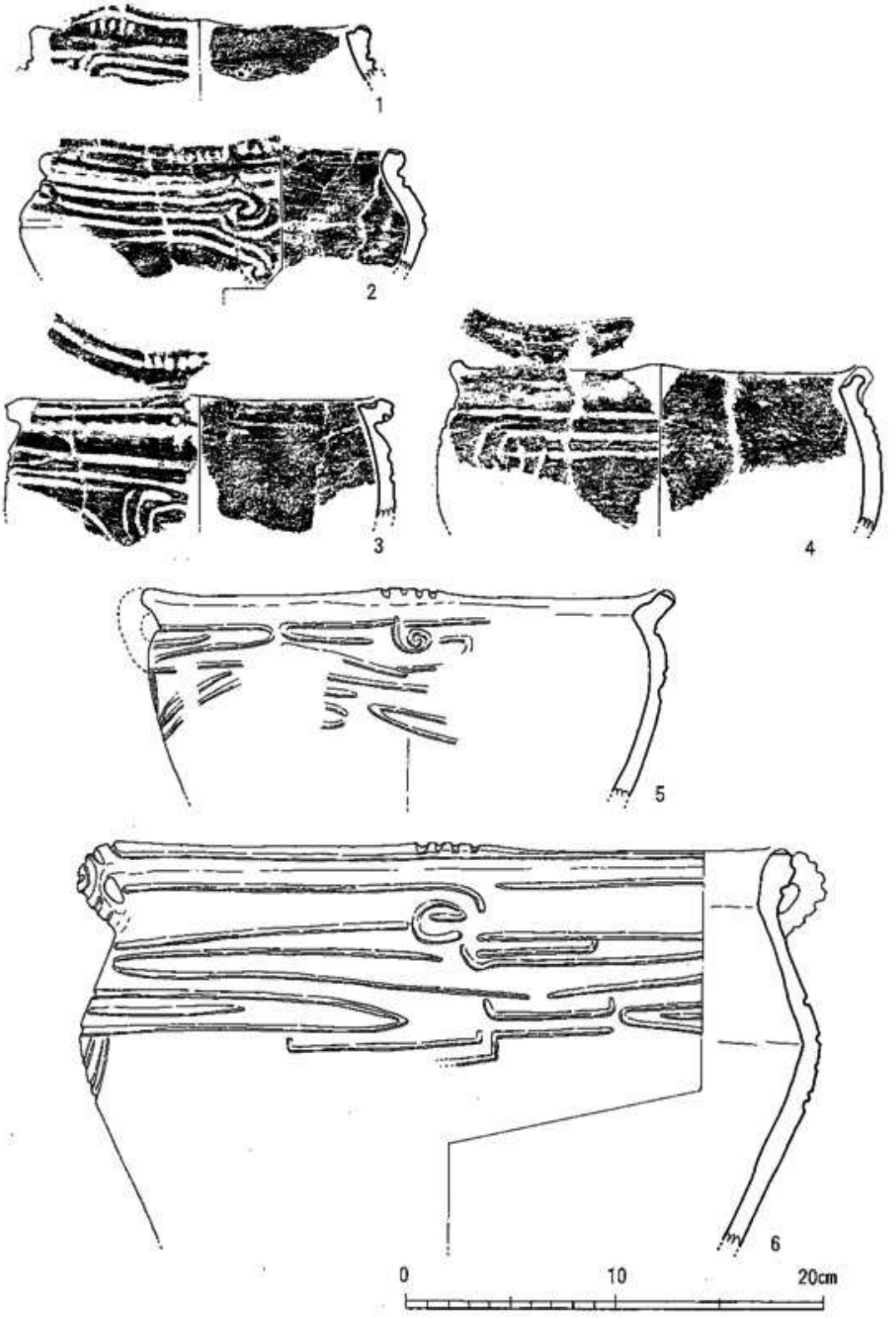
第５図　飯田二反田遺跡１号住居跡石組炉実測図



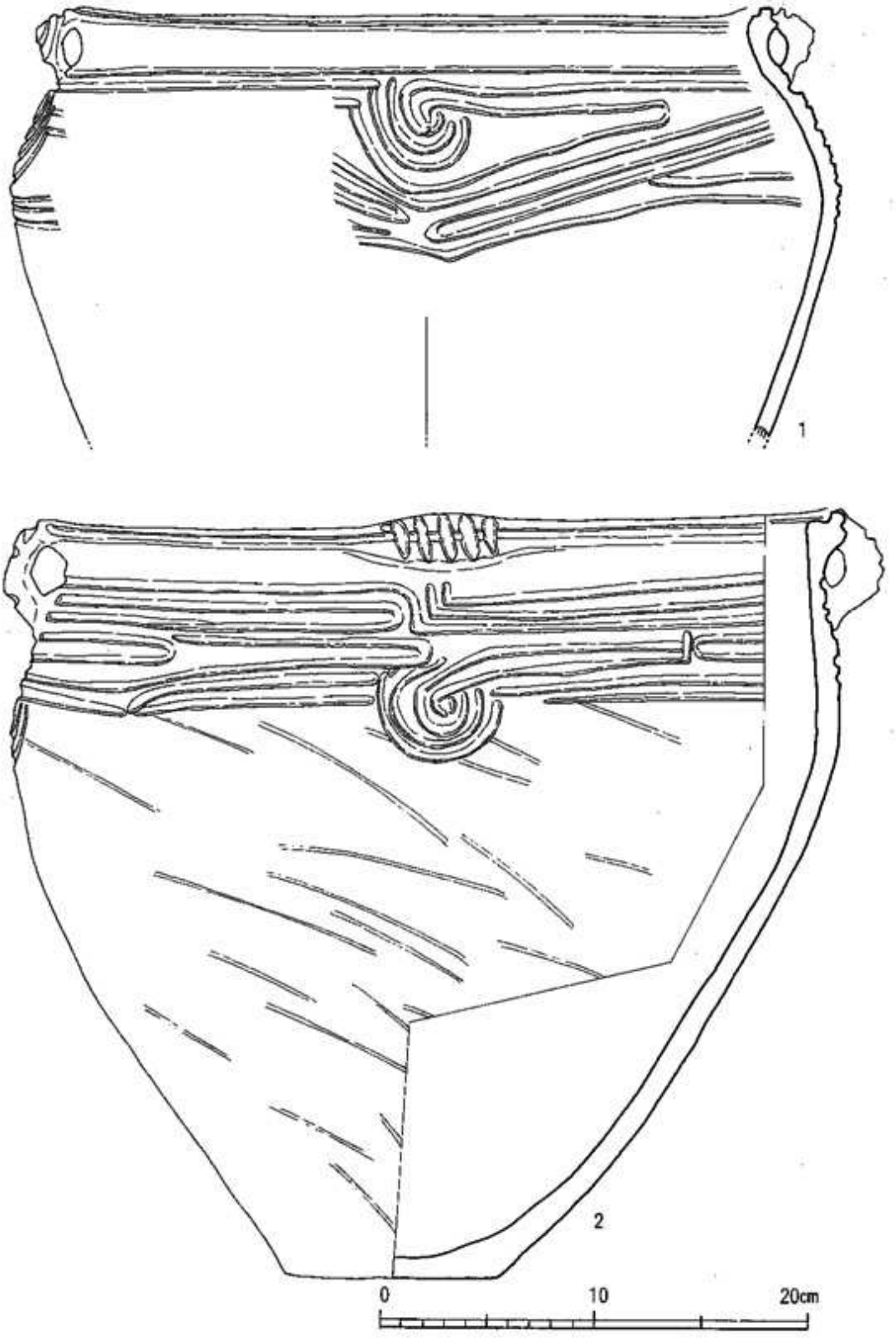
第６図　飯田二反田遺跡１号住居跡実測図



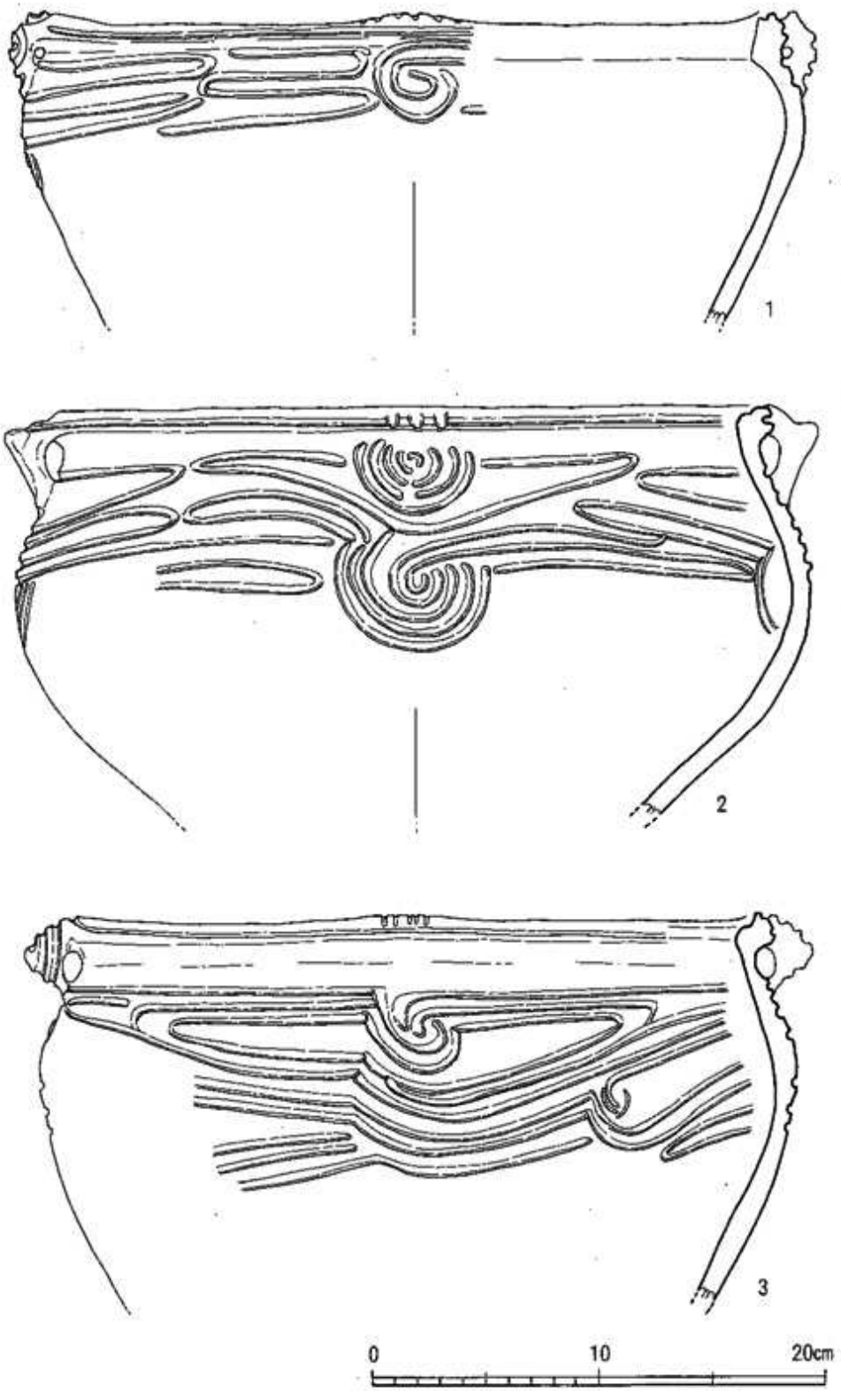
第７図　飯田二反田遺跡１号住居跡出土土器（１）



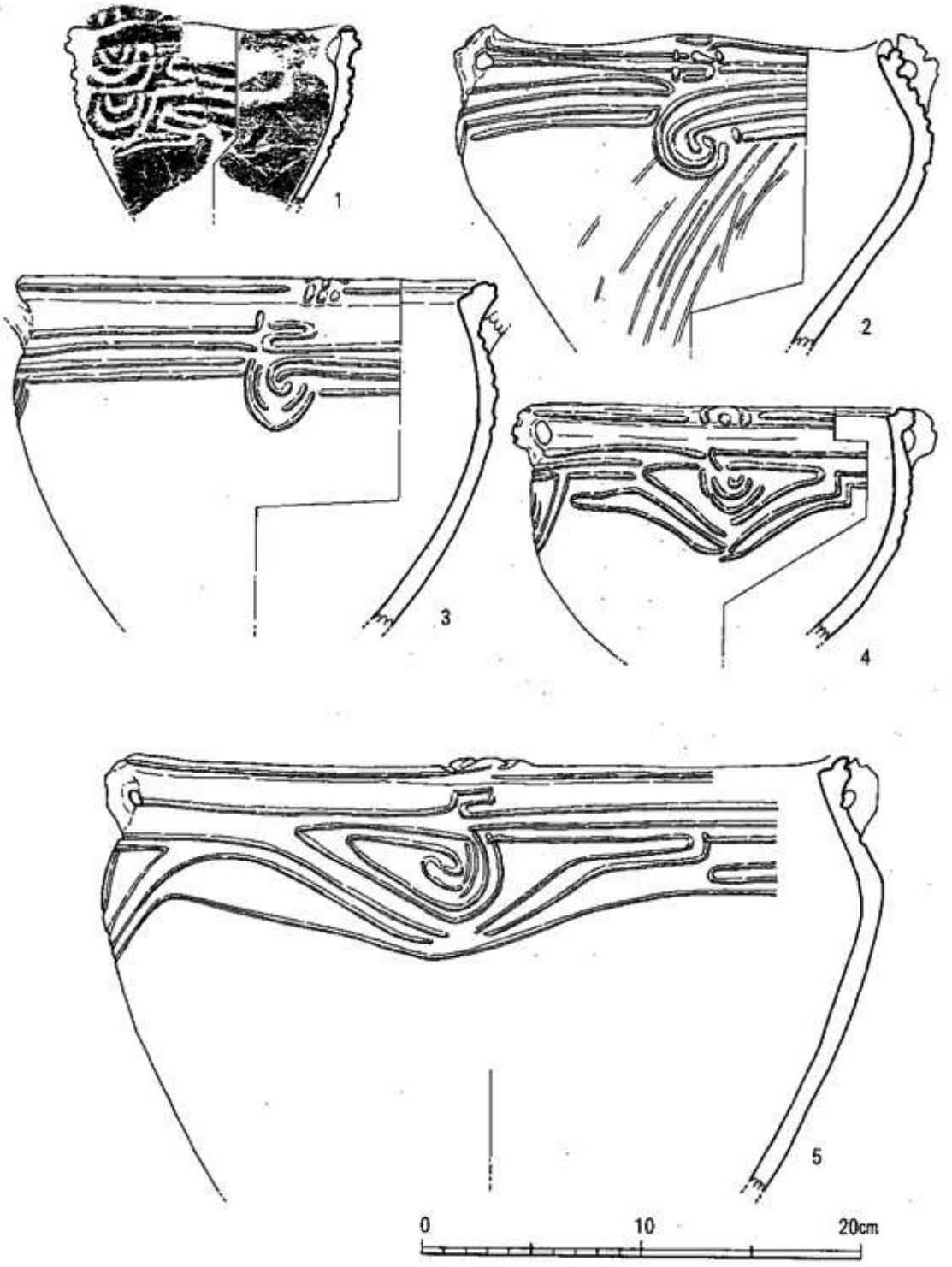
第８図　飯田二反田遺跡１号住居跡出土土器（２）



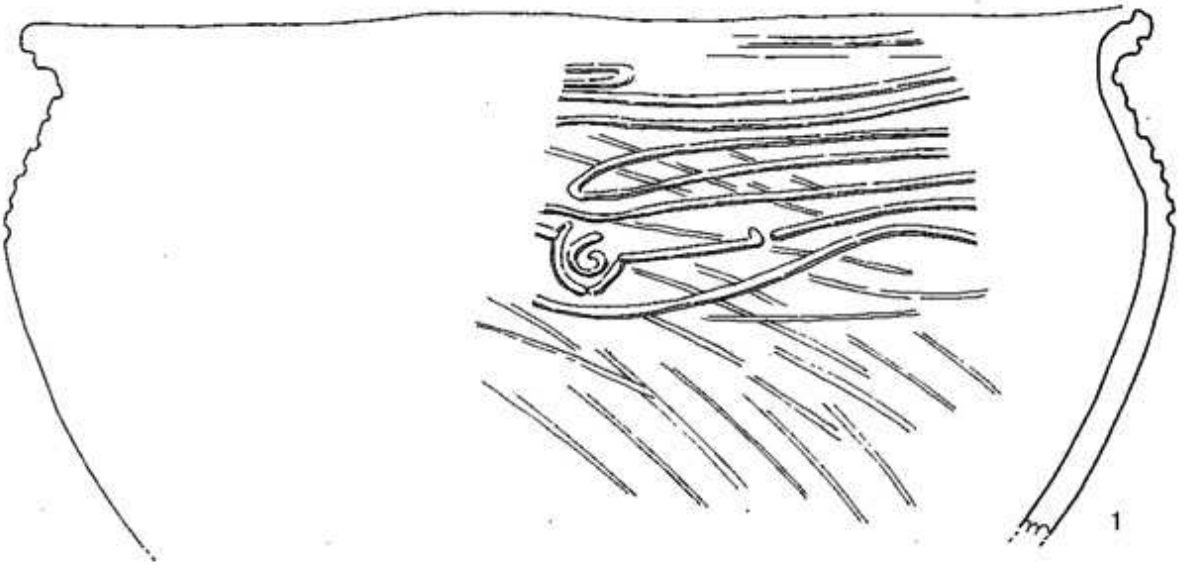
第９図　飯田二反田遺跡１号住居跡出土土器（３）

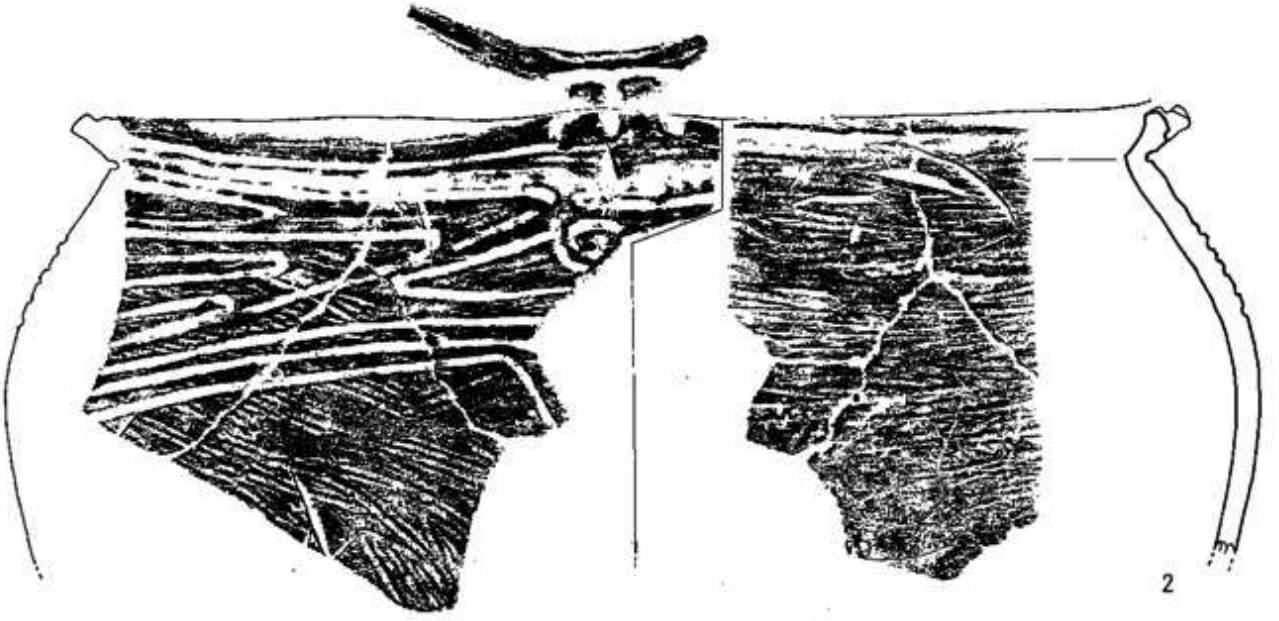


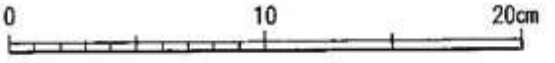
第10図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（4）



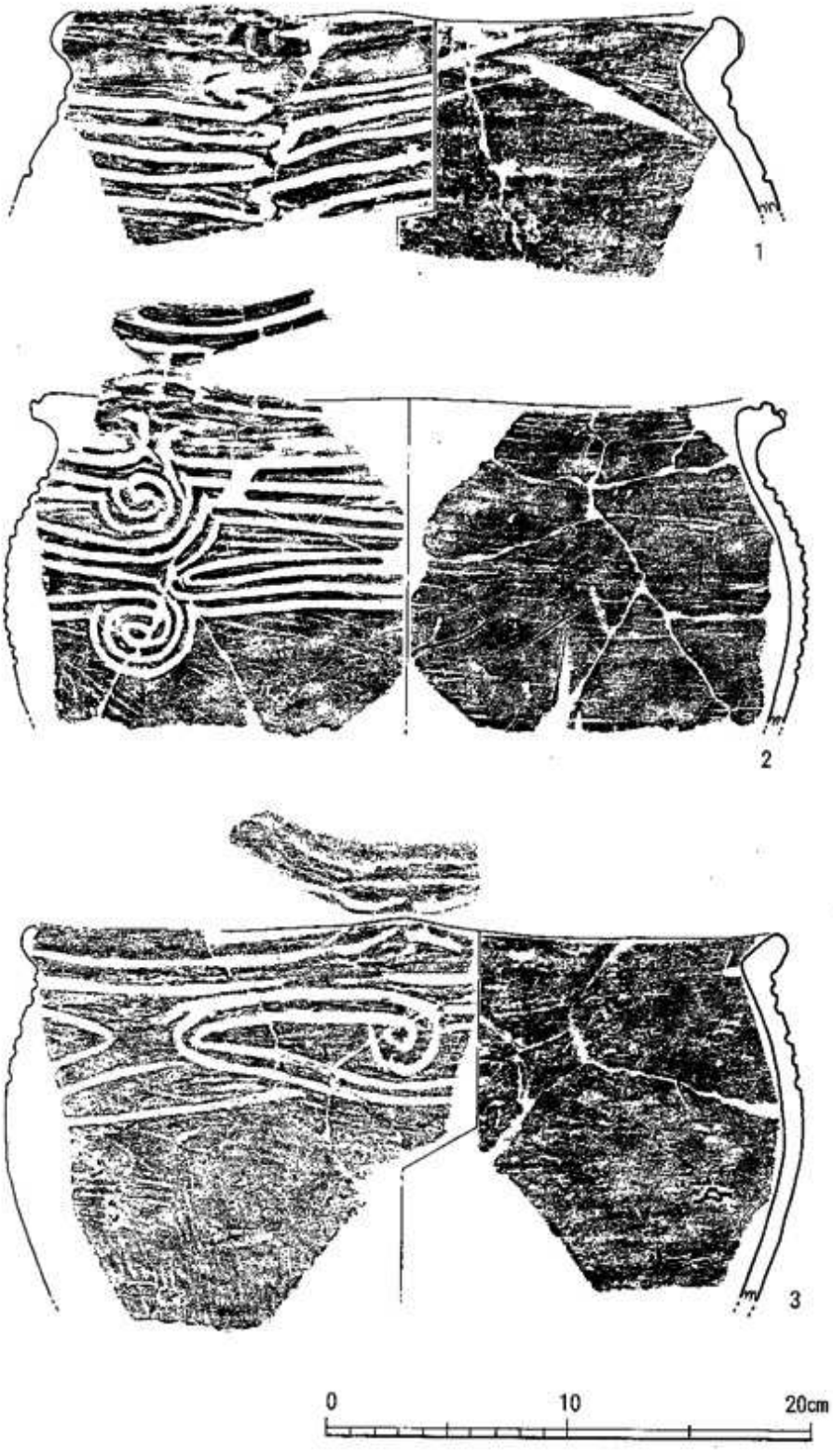
第11図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（5）



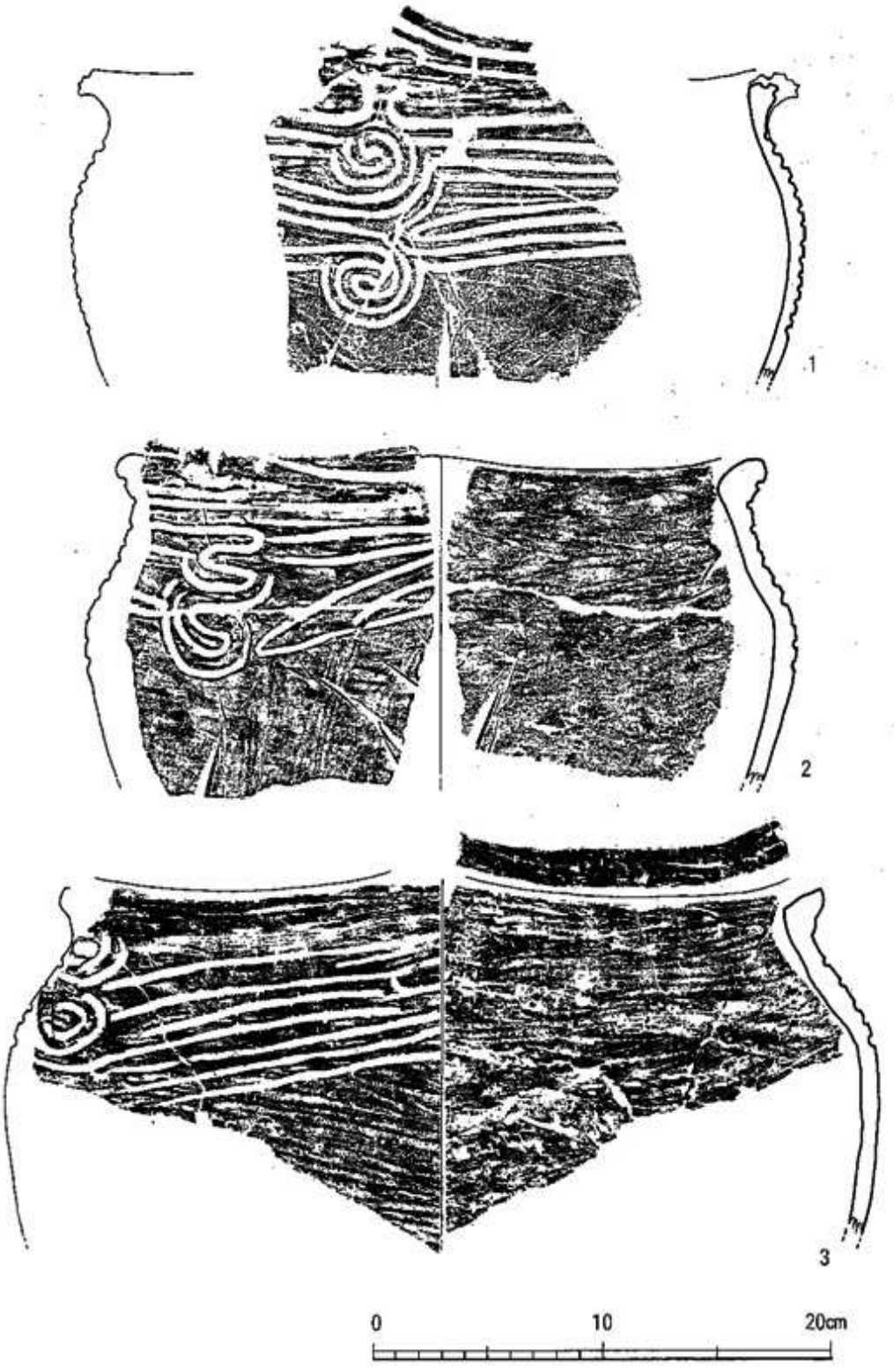




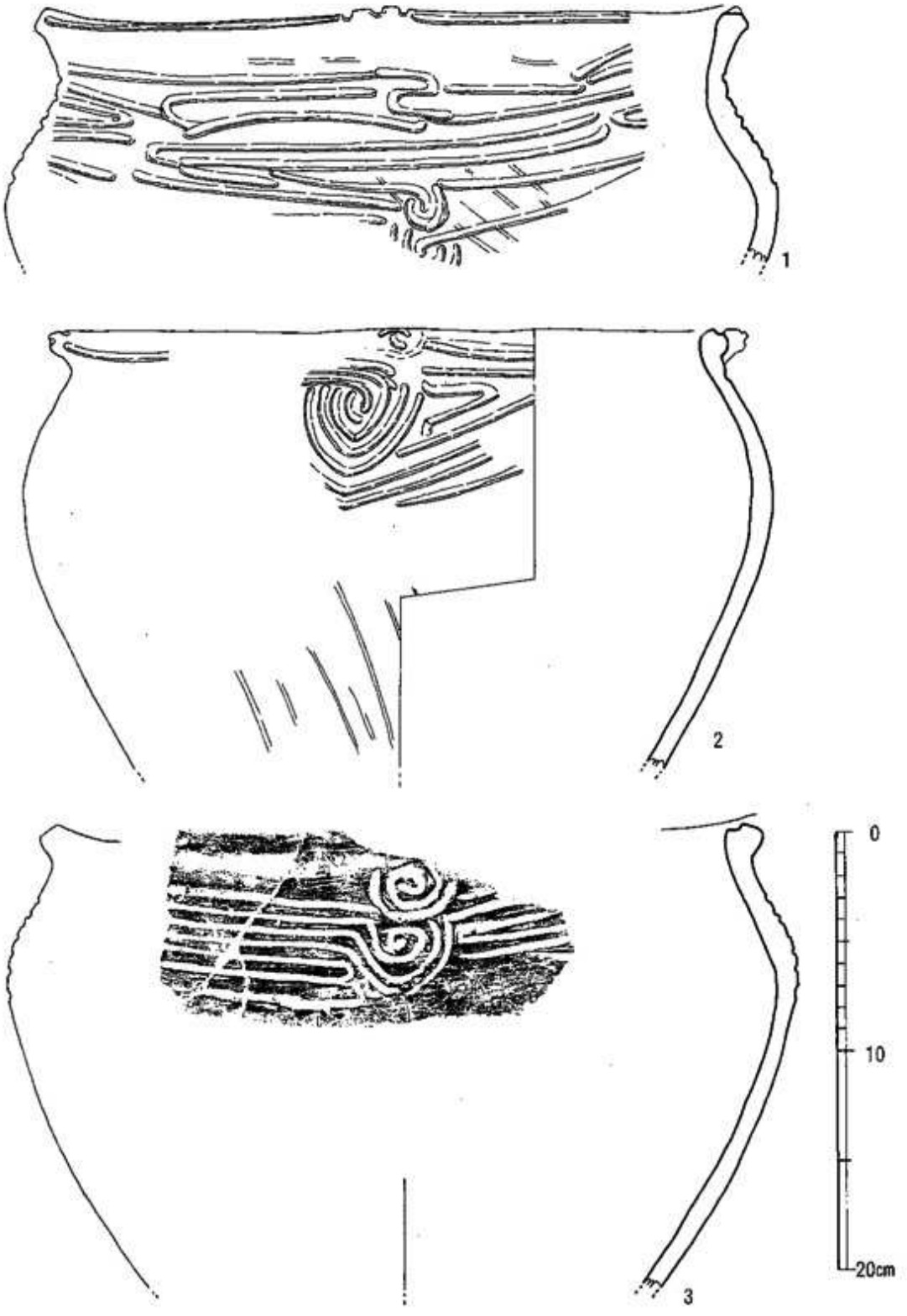
第12図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（6）



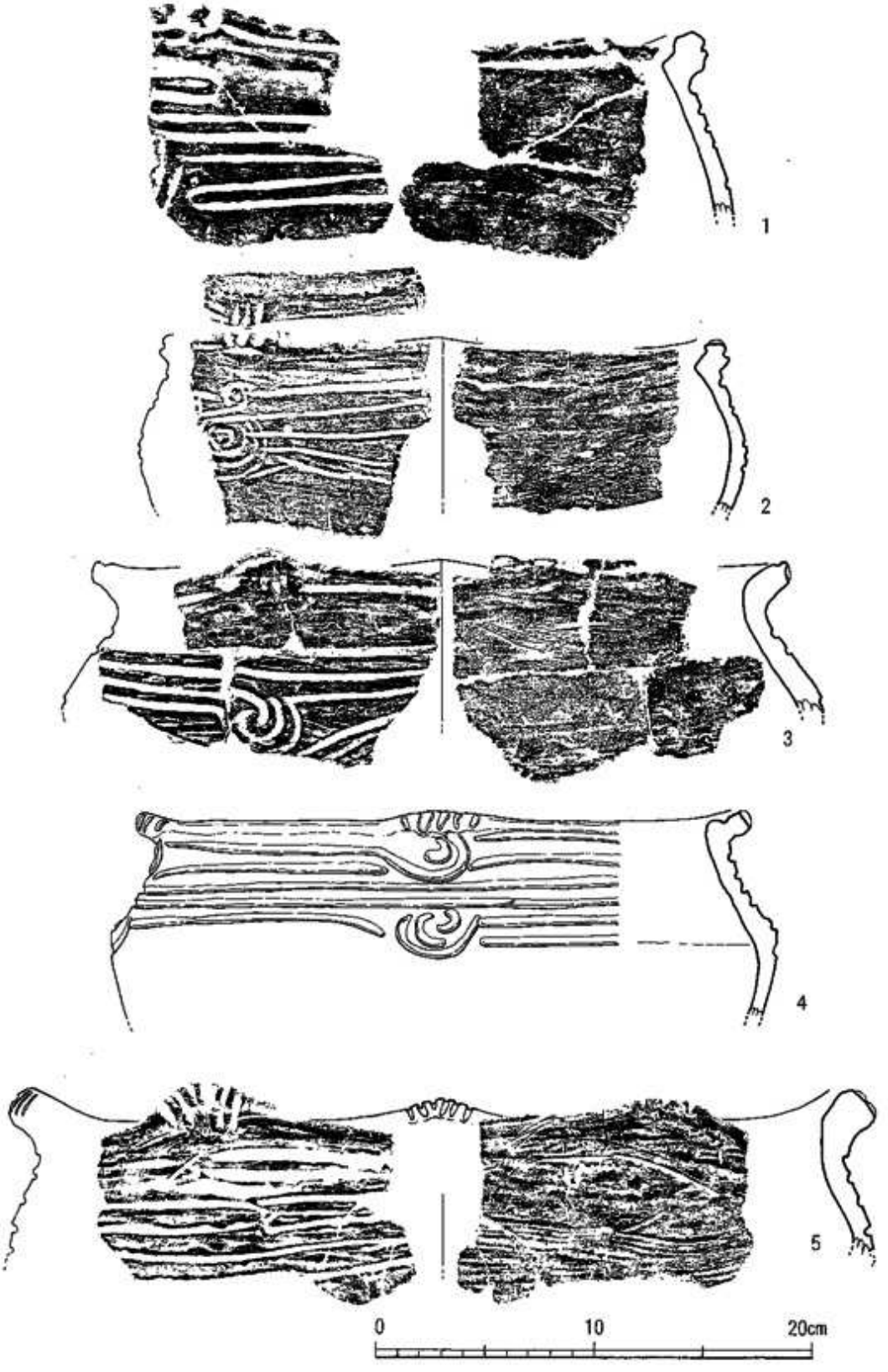
第13図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（7）



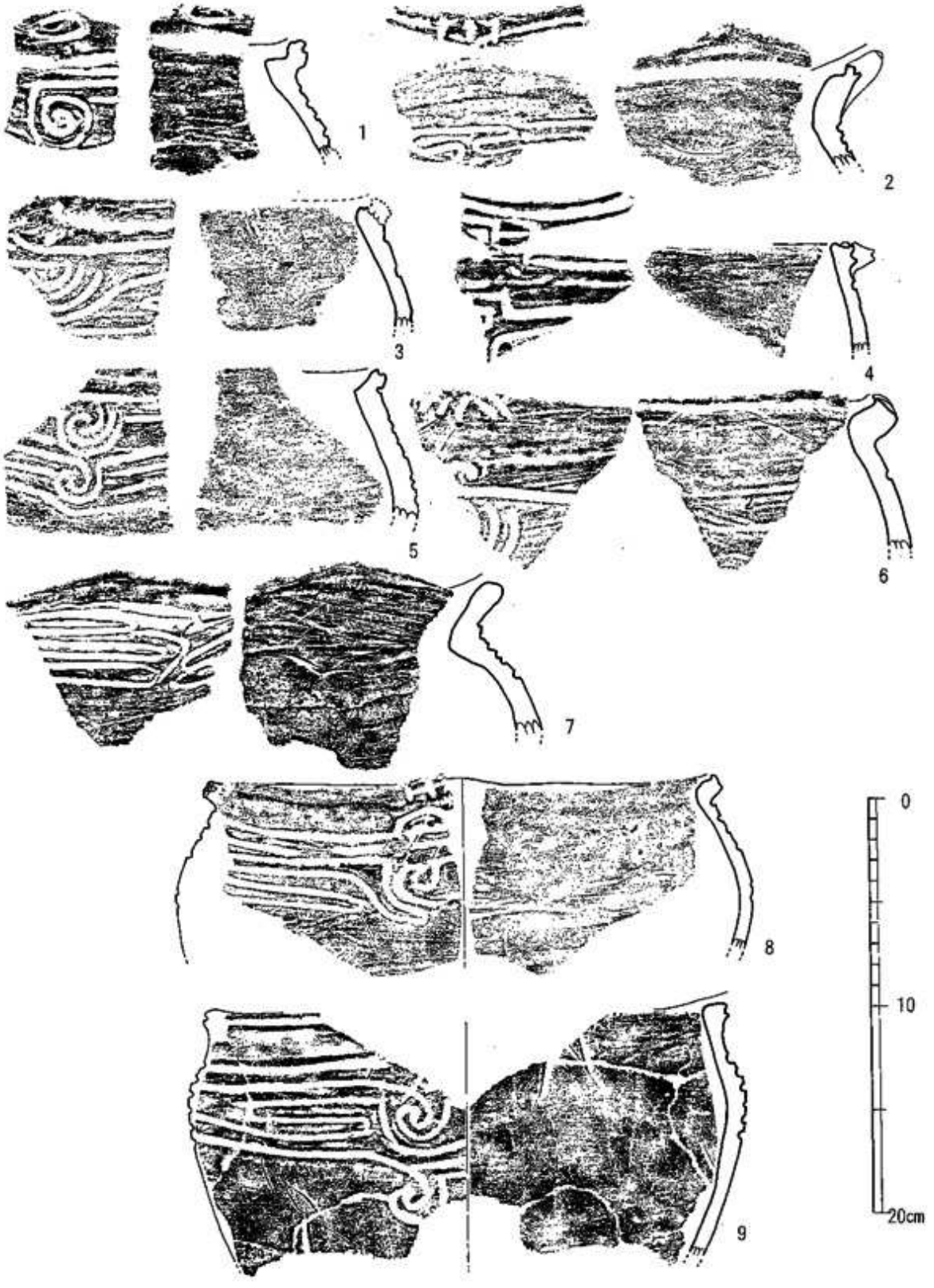
第14図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（8）



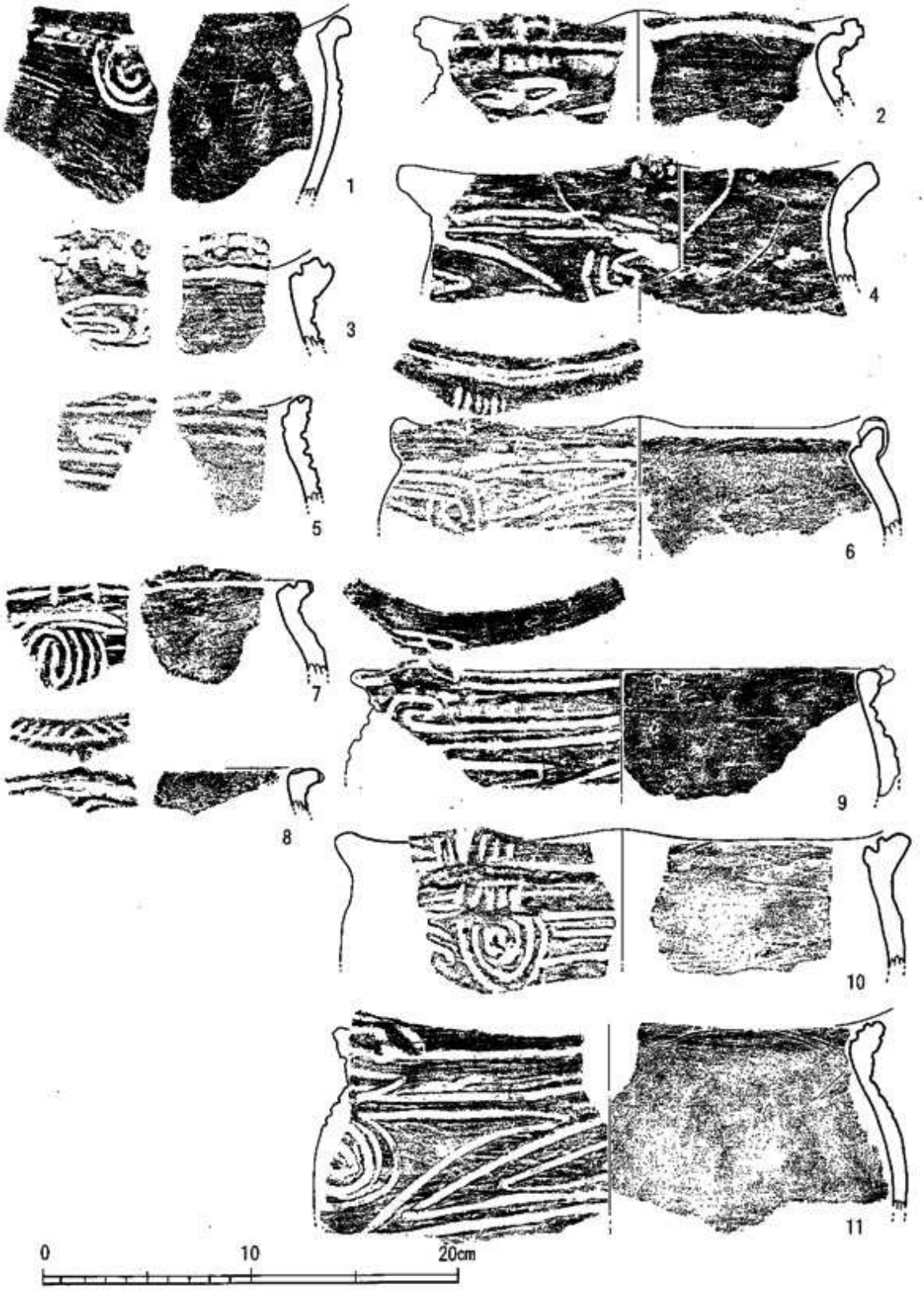
第15図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（9）



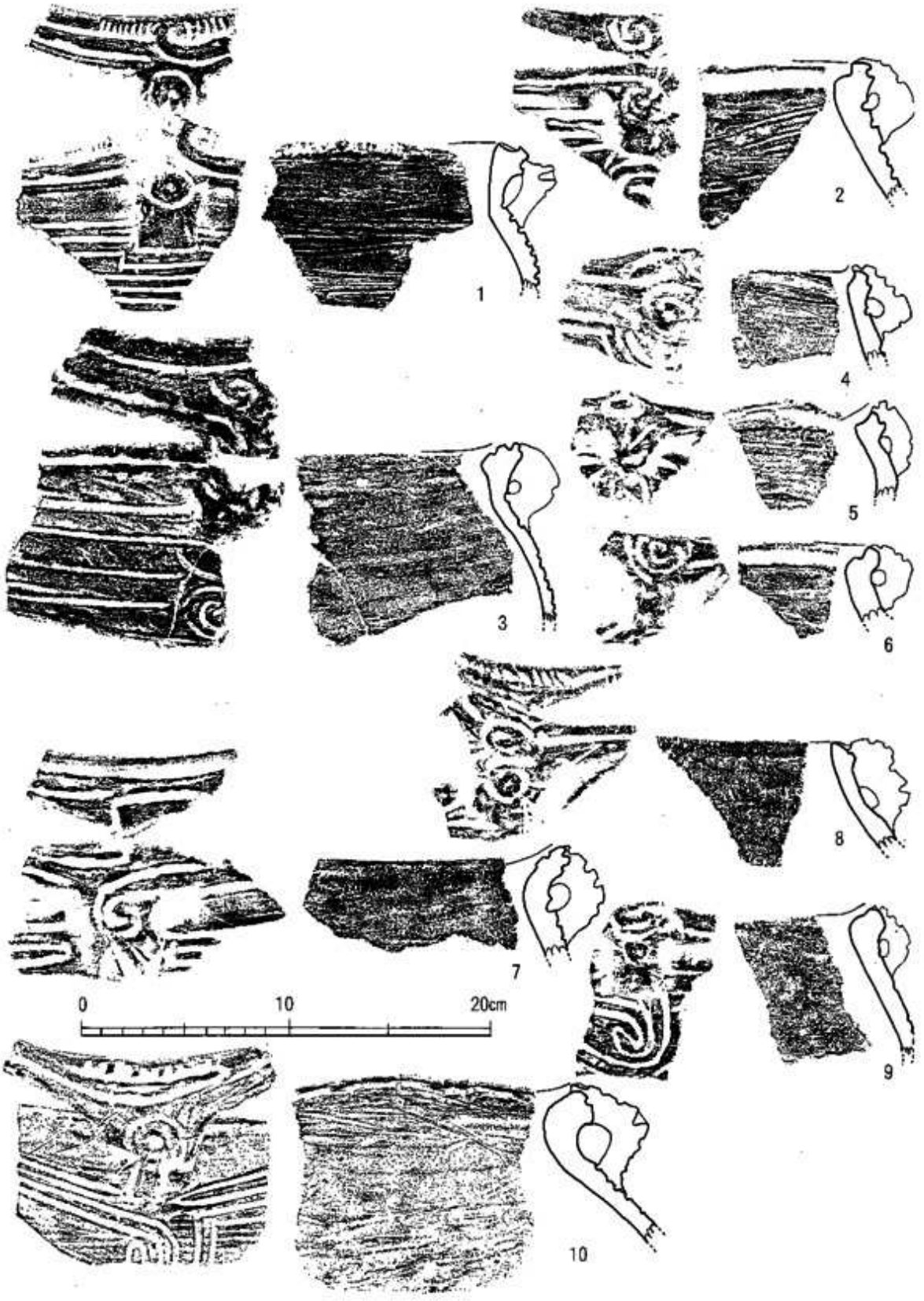
第16図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（10）



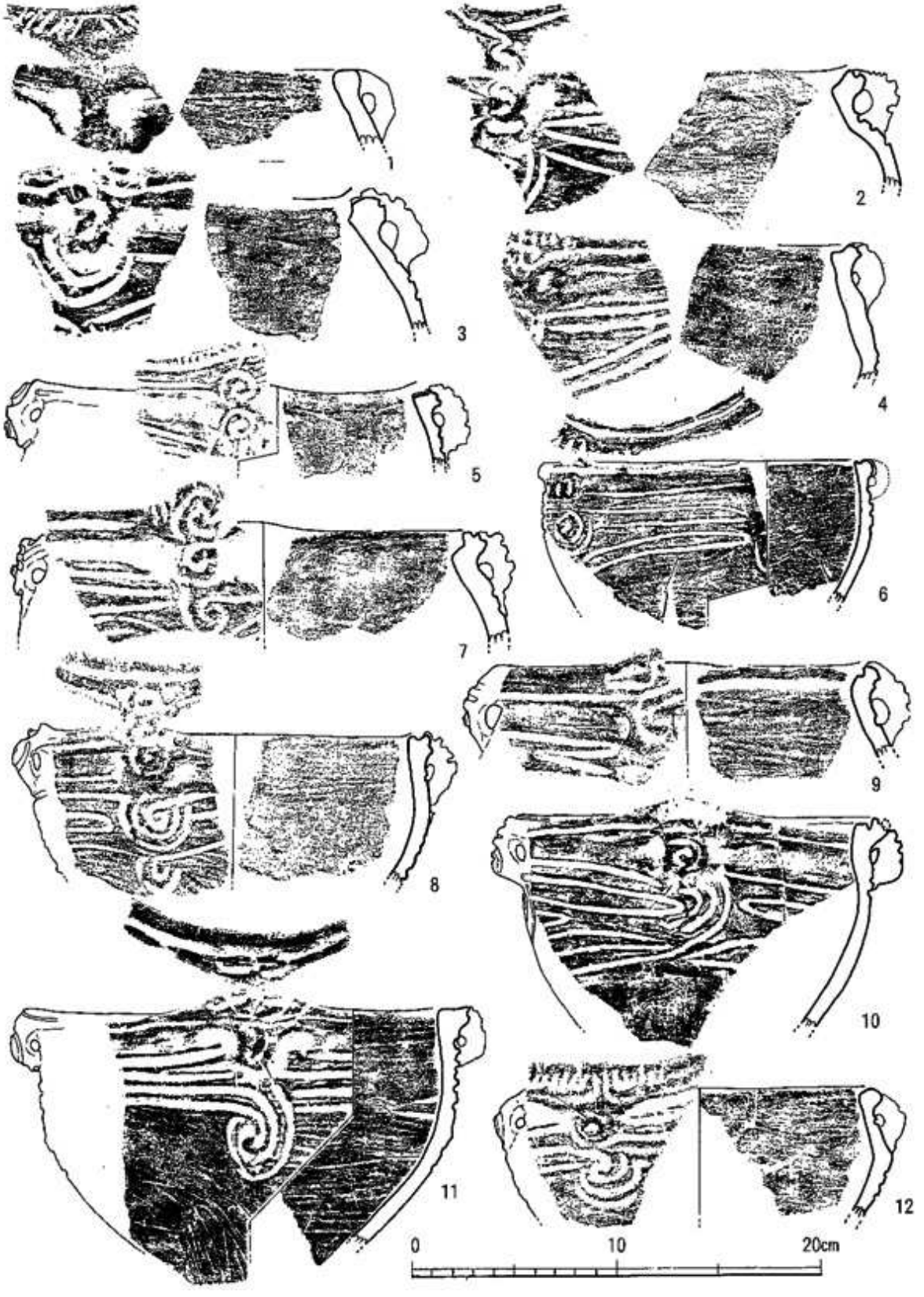
第17図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（11）



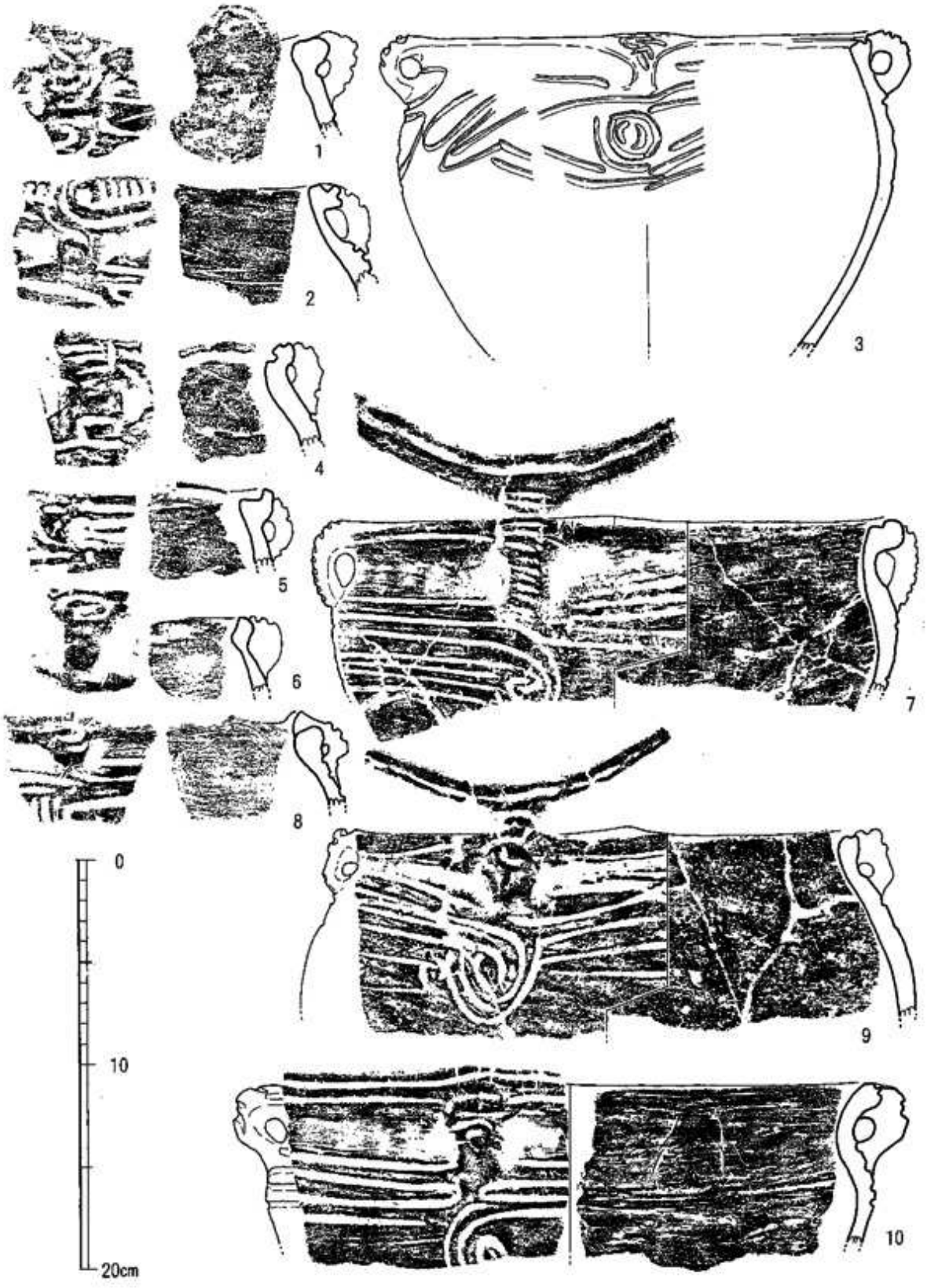
第18図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（12）



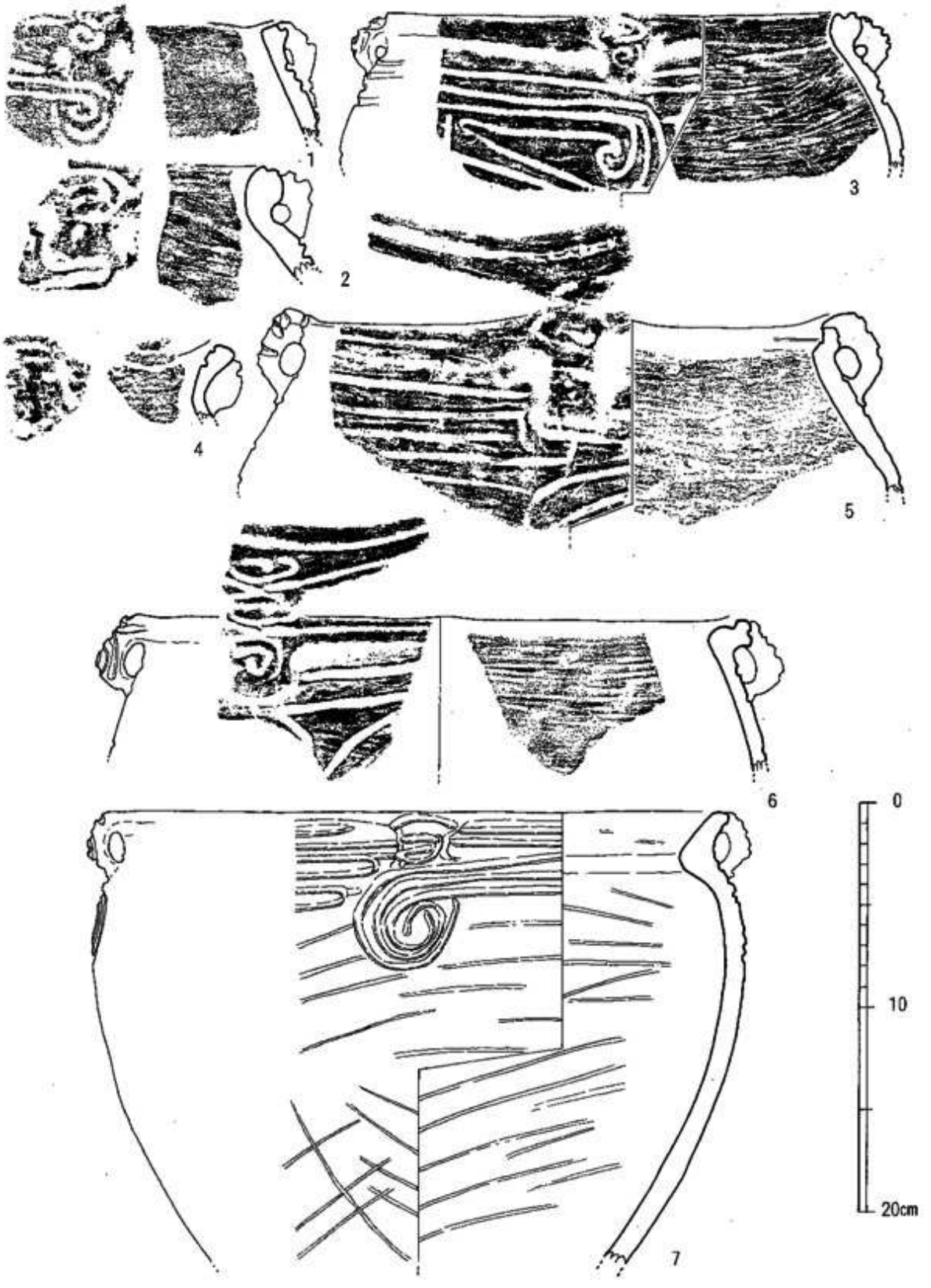
第19図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（13）



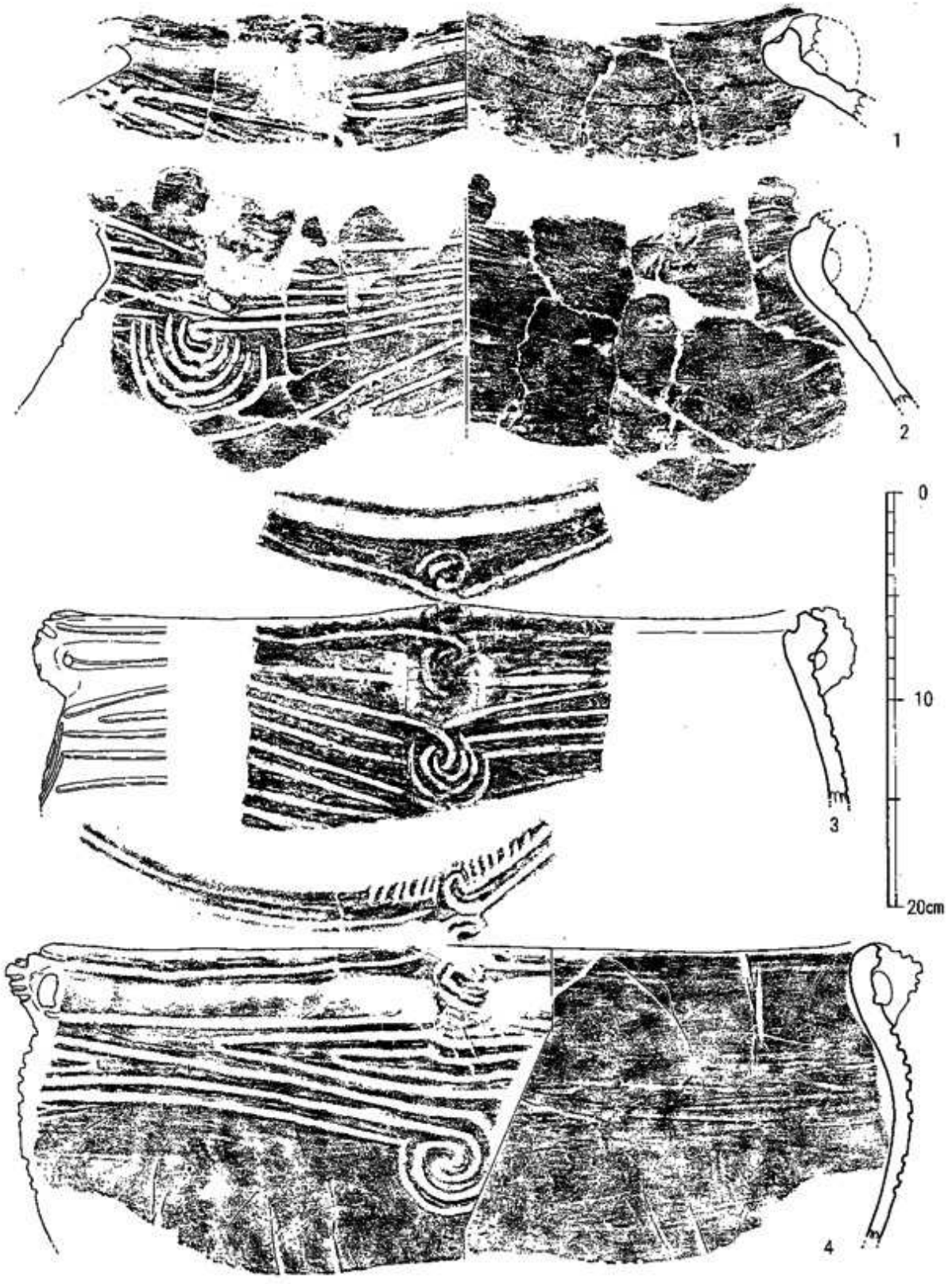
第20図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（14）



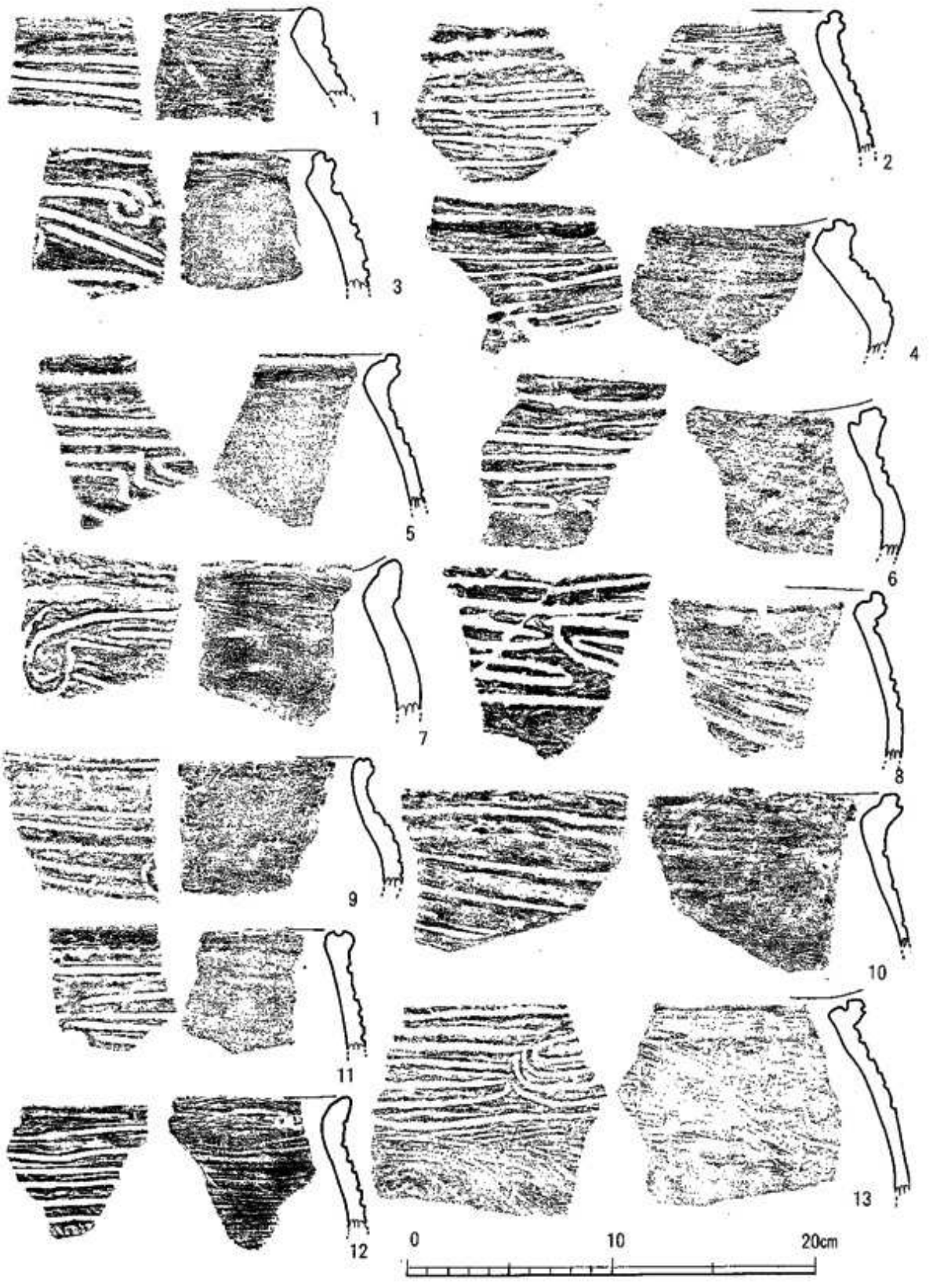
第21図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（15）



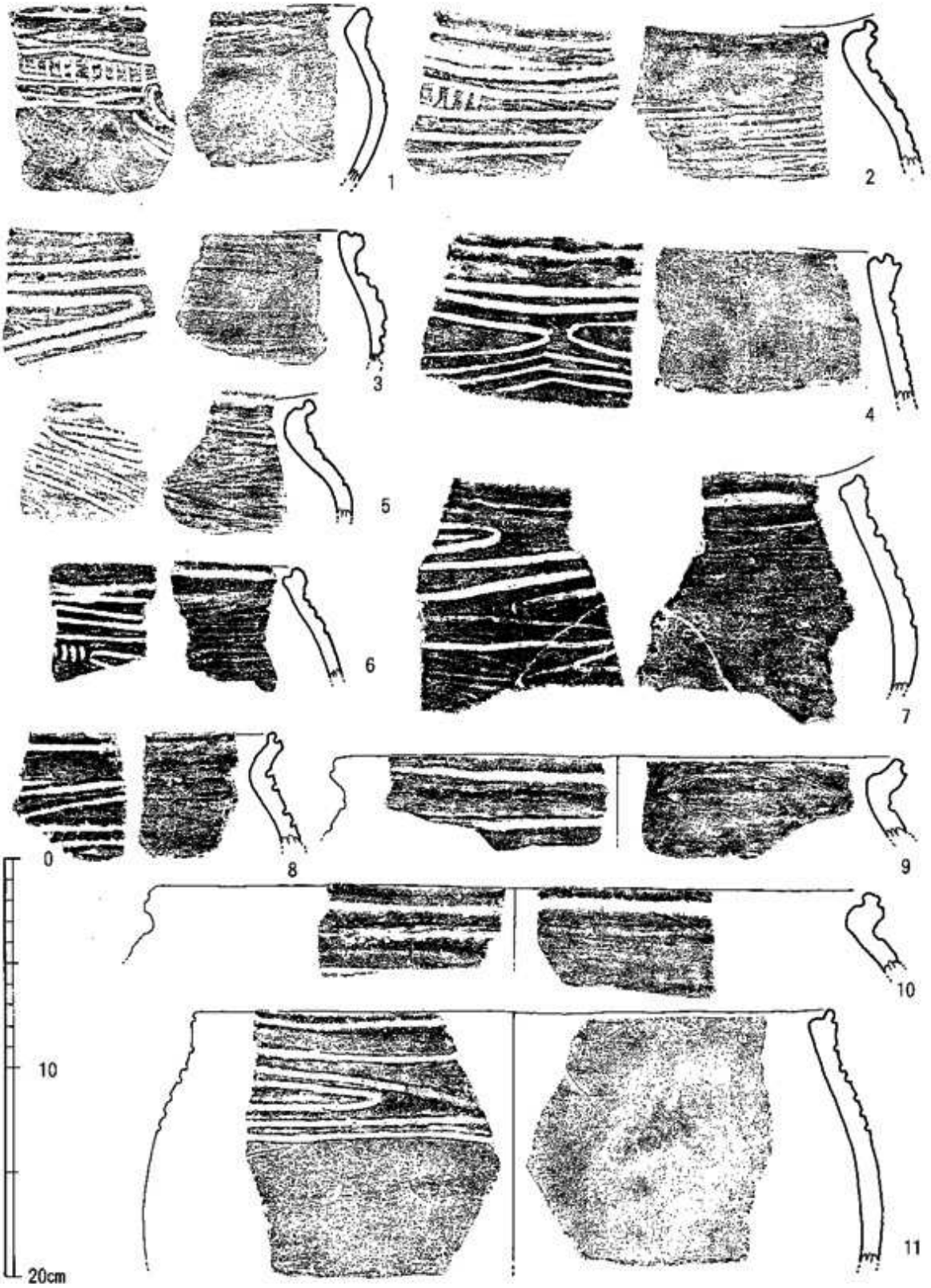
第22図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（16）



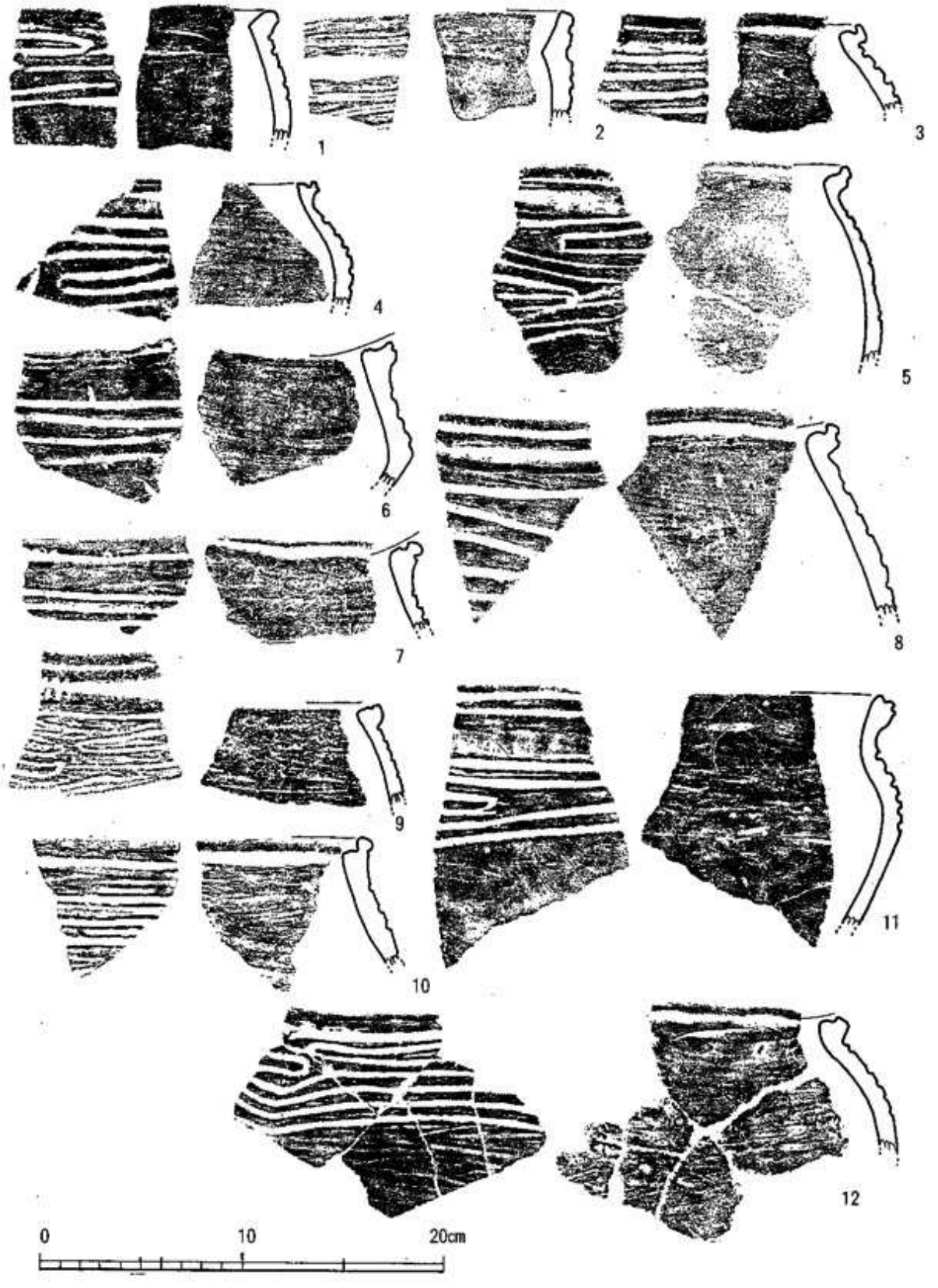
第23図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（17）



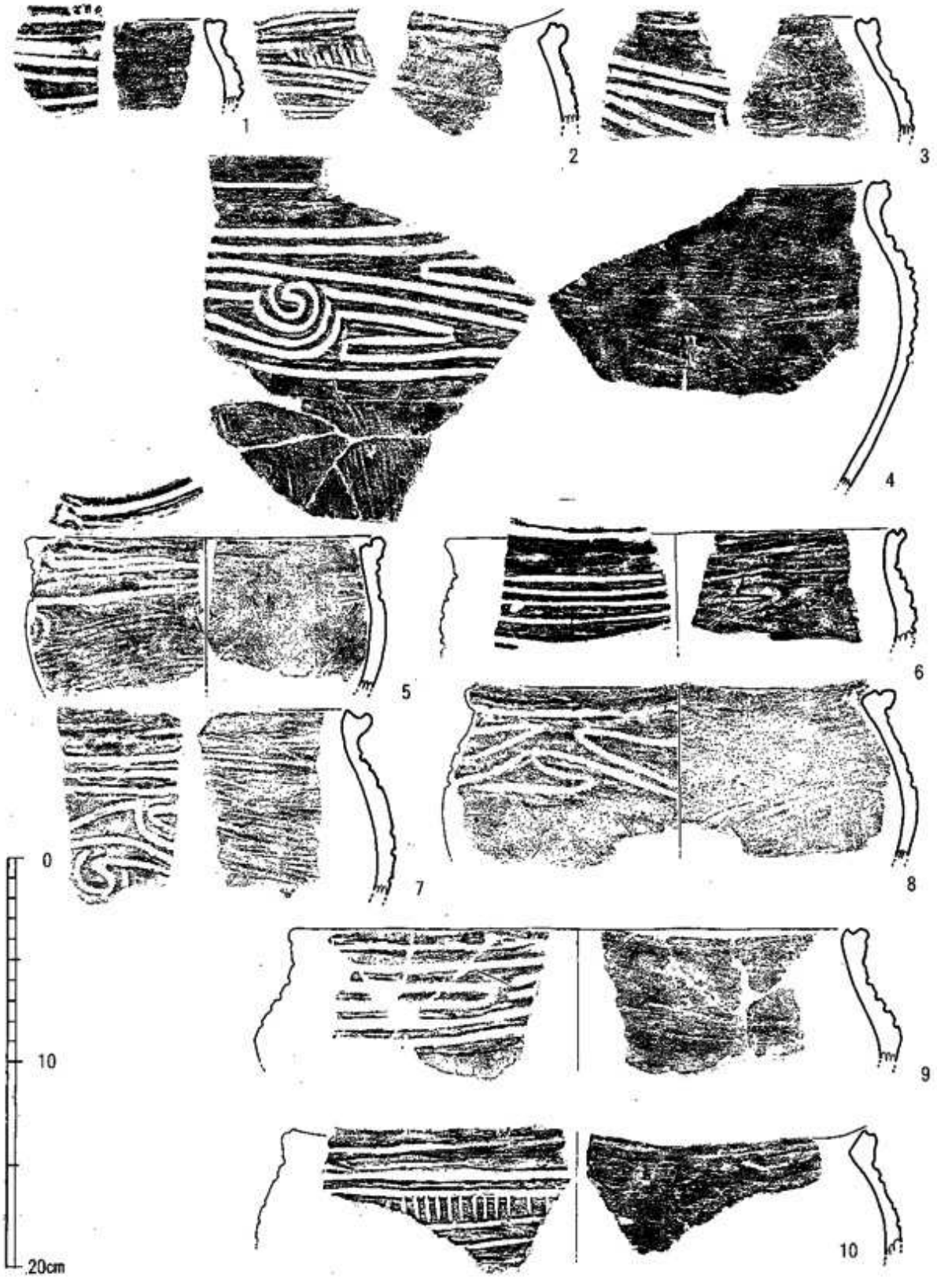
第24図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（18）



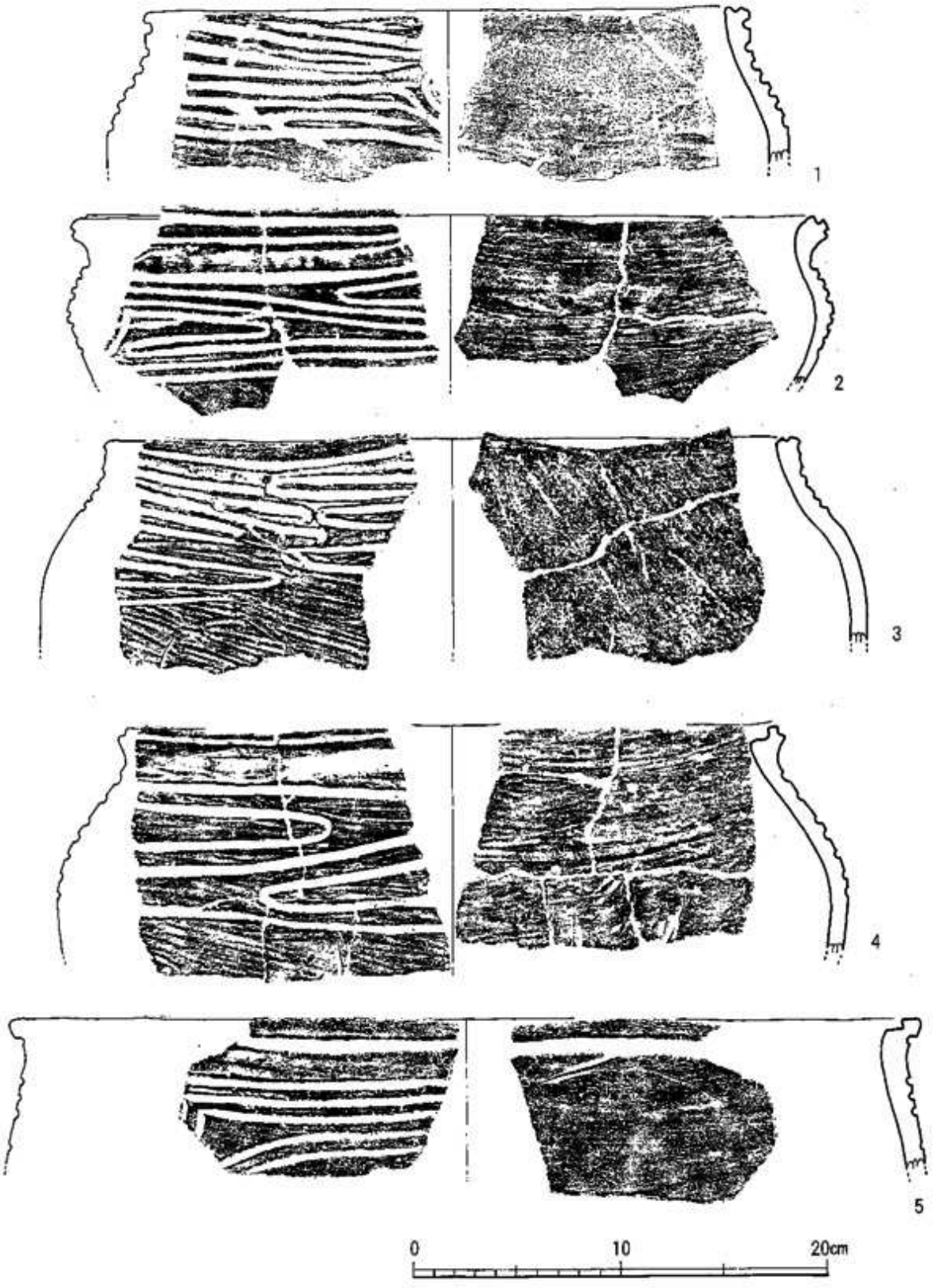
第 25 図　飯田二反田遺跡 1 号住居跡出土土器（19）



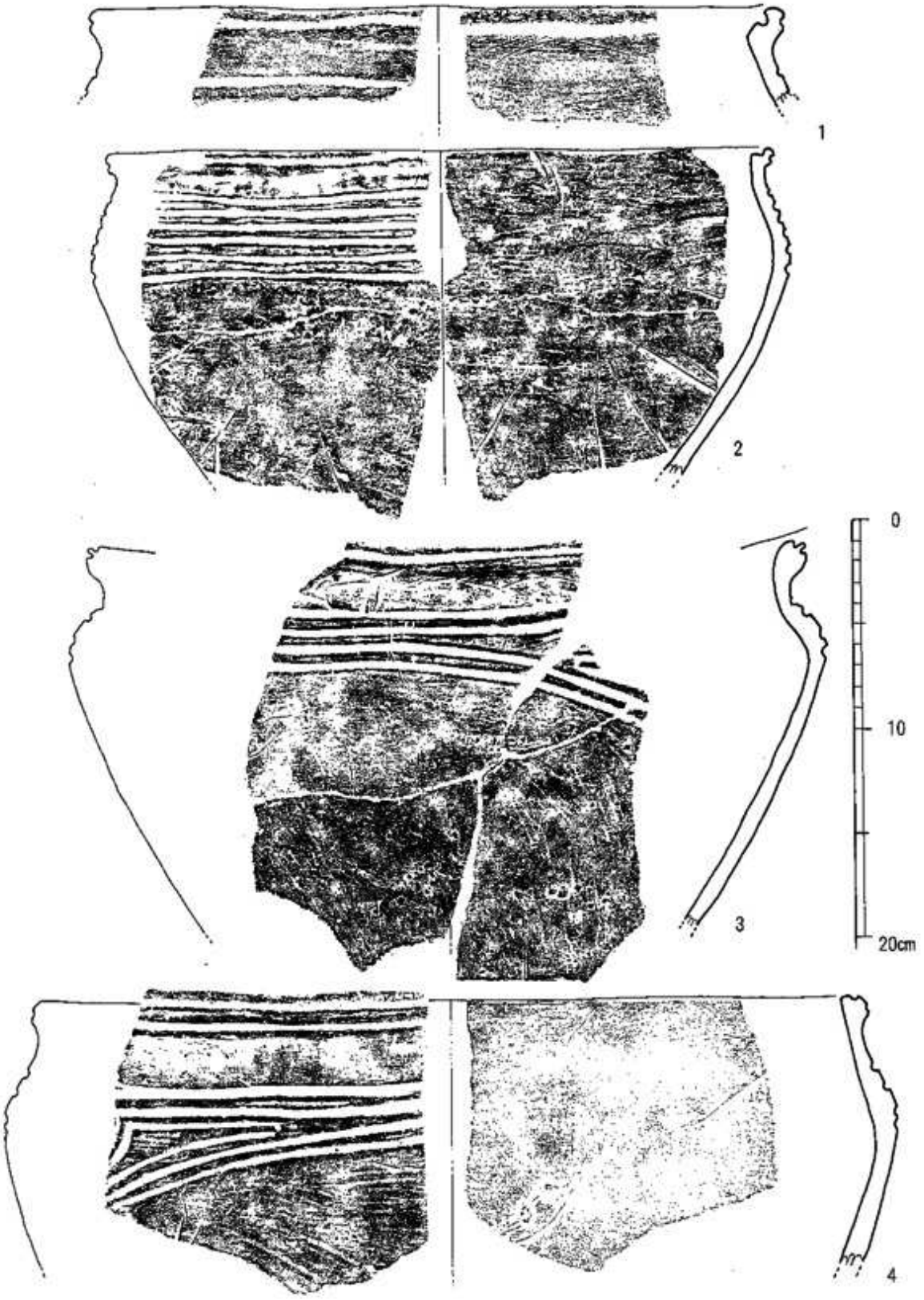
第26図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（20）



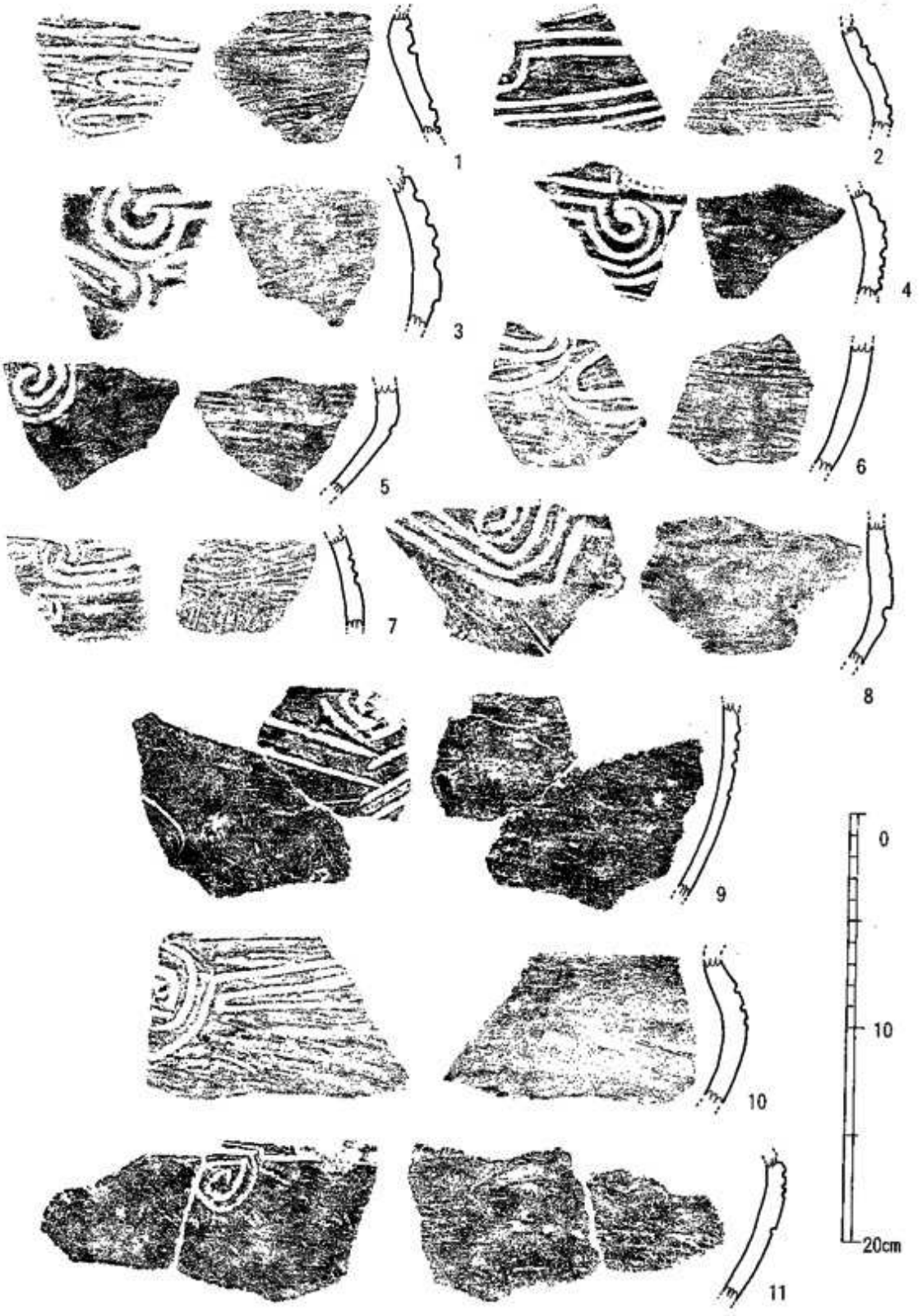
第27図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（21）



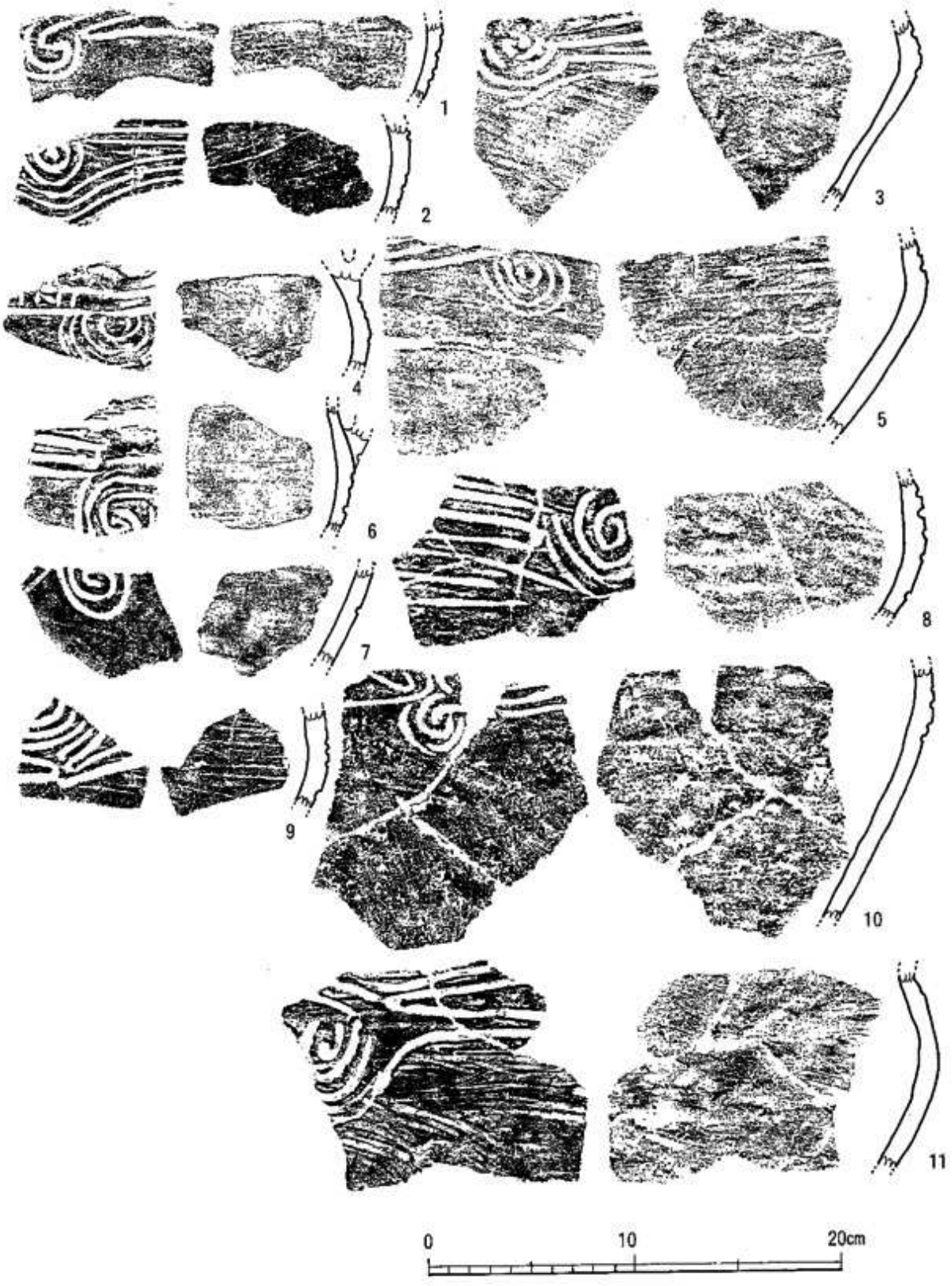
第28図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（22）



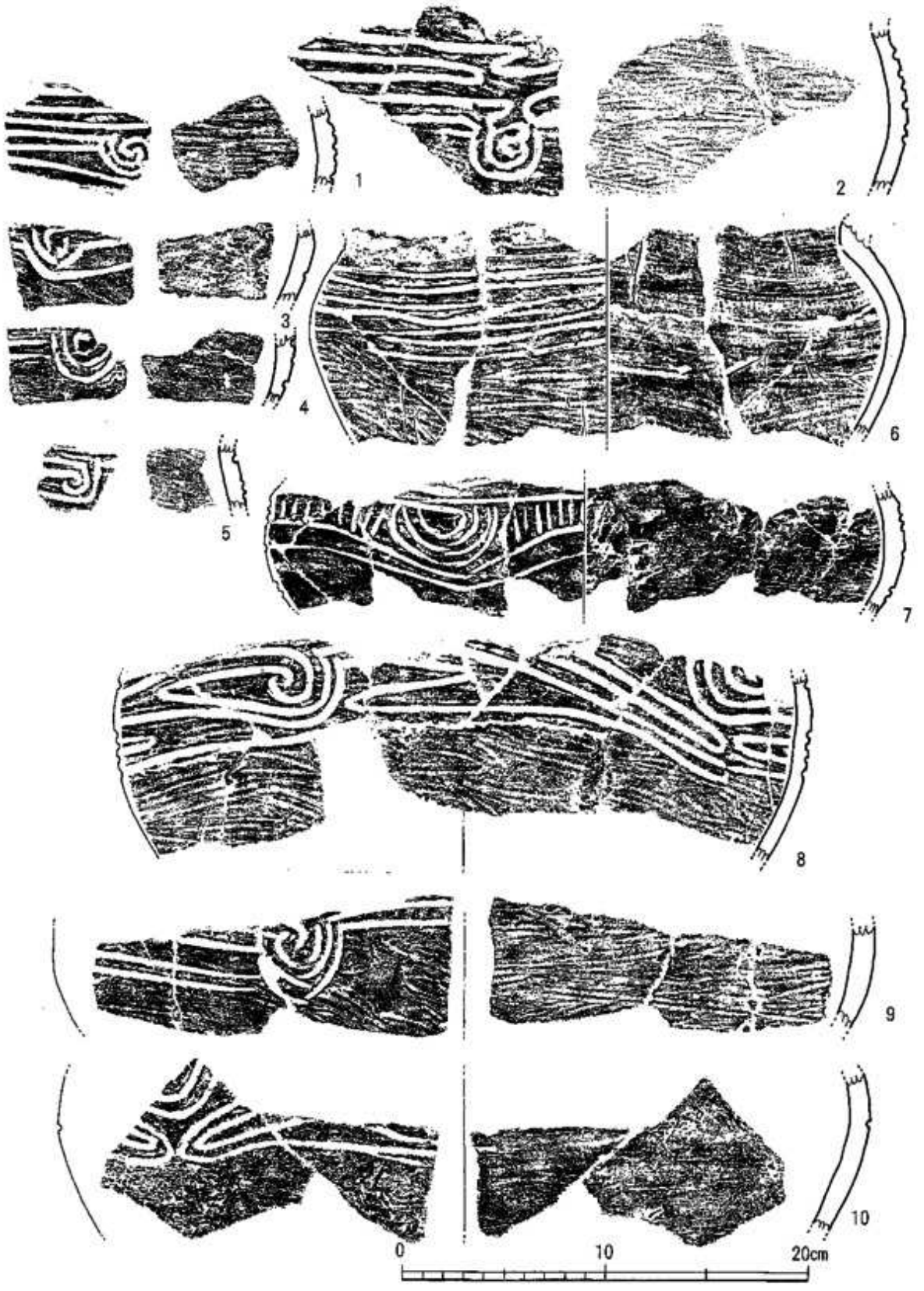
第29図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（23）



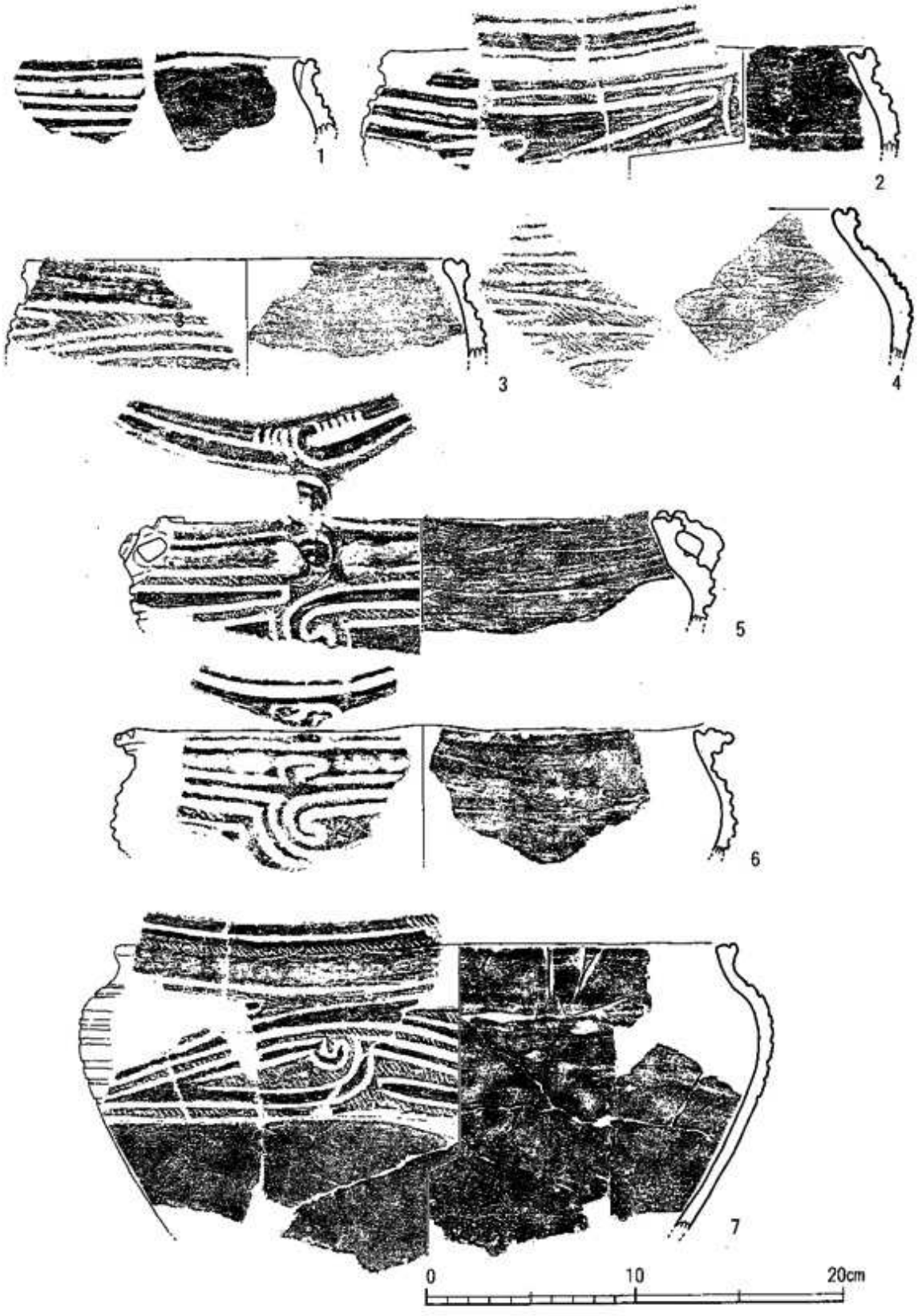
第30図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（24）



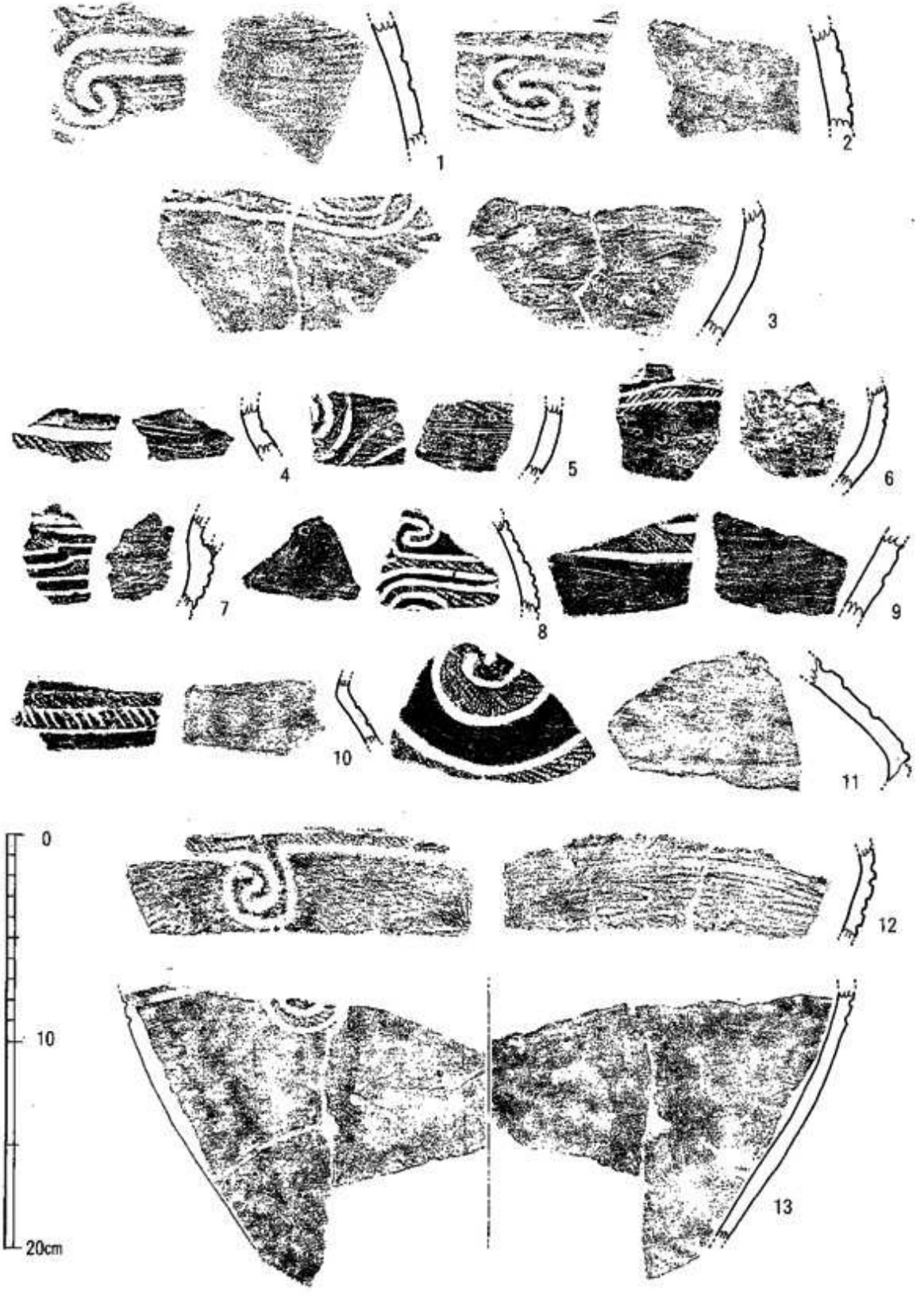
第31図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（25）



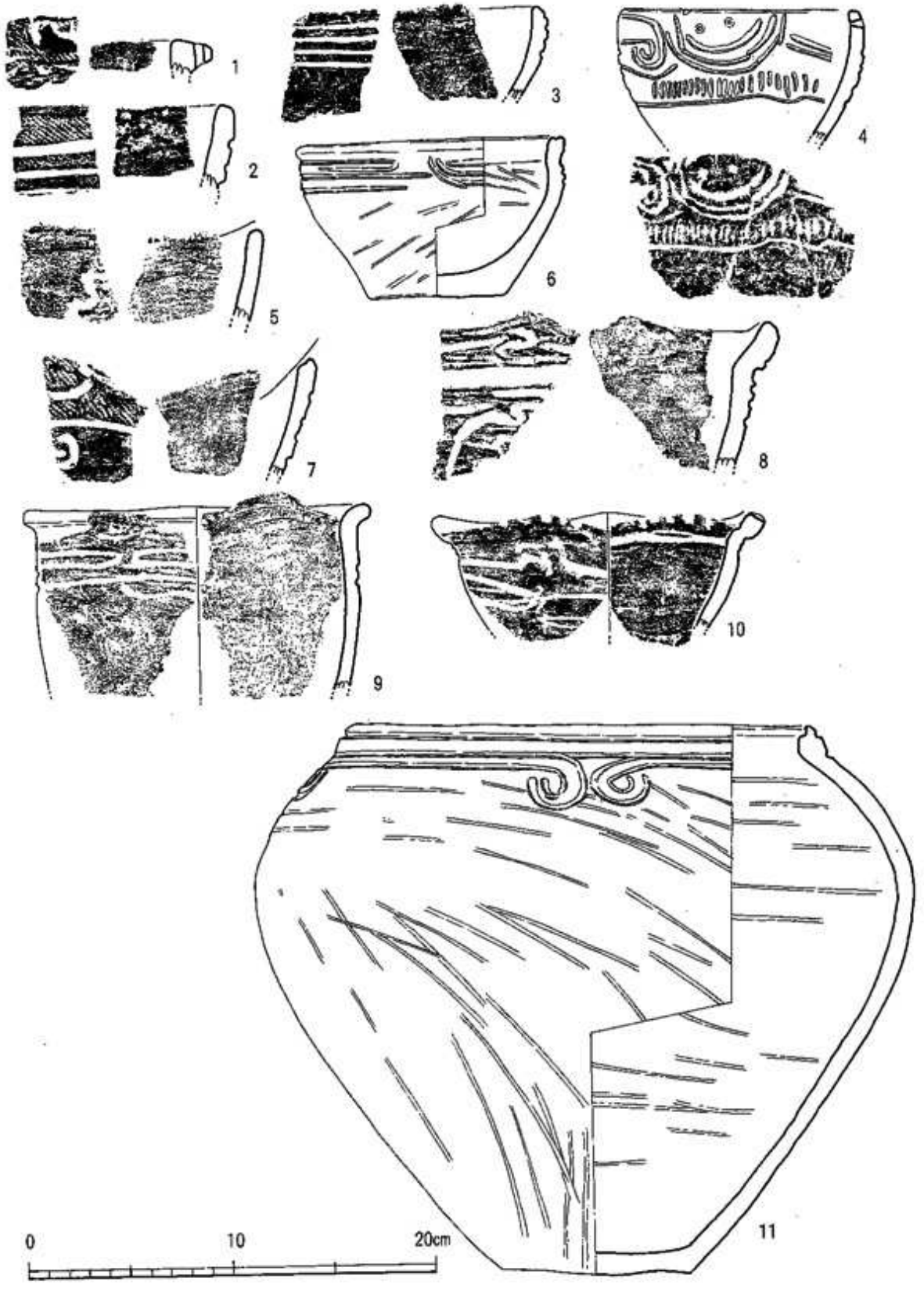
第32図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（26）



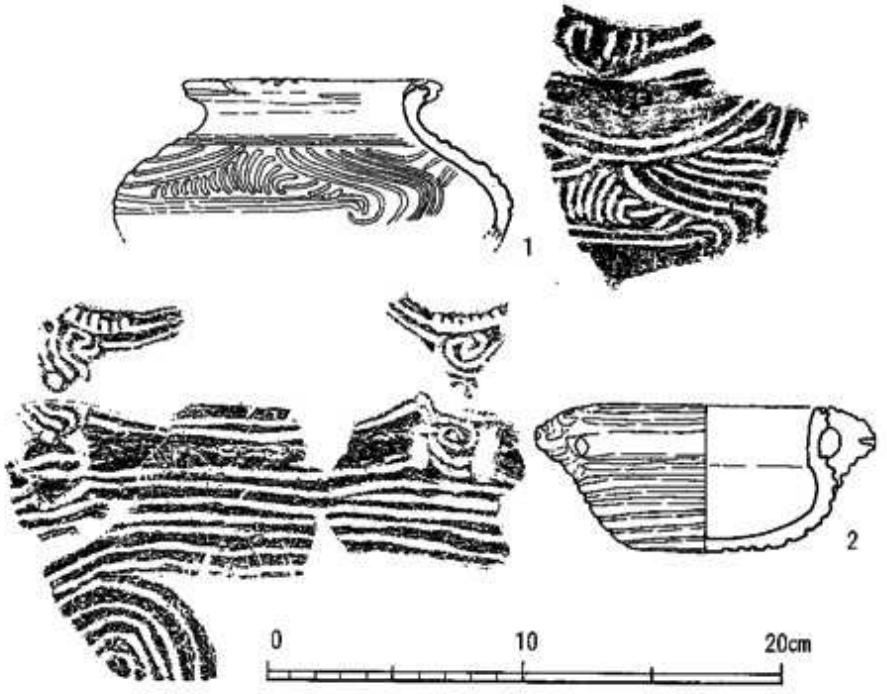
第33図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（27）



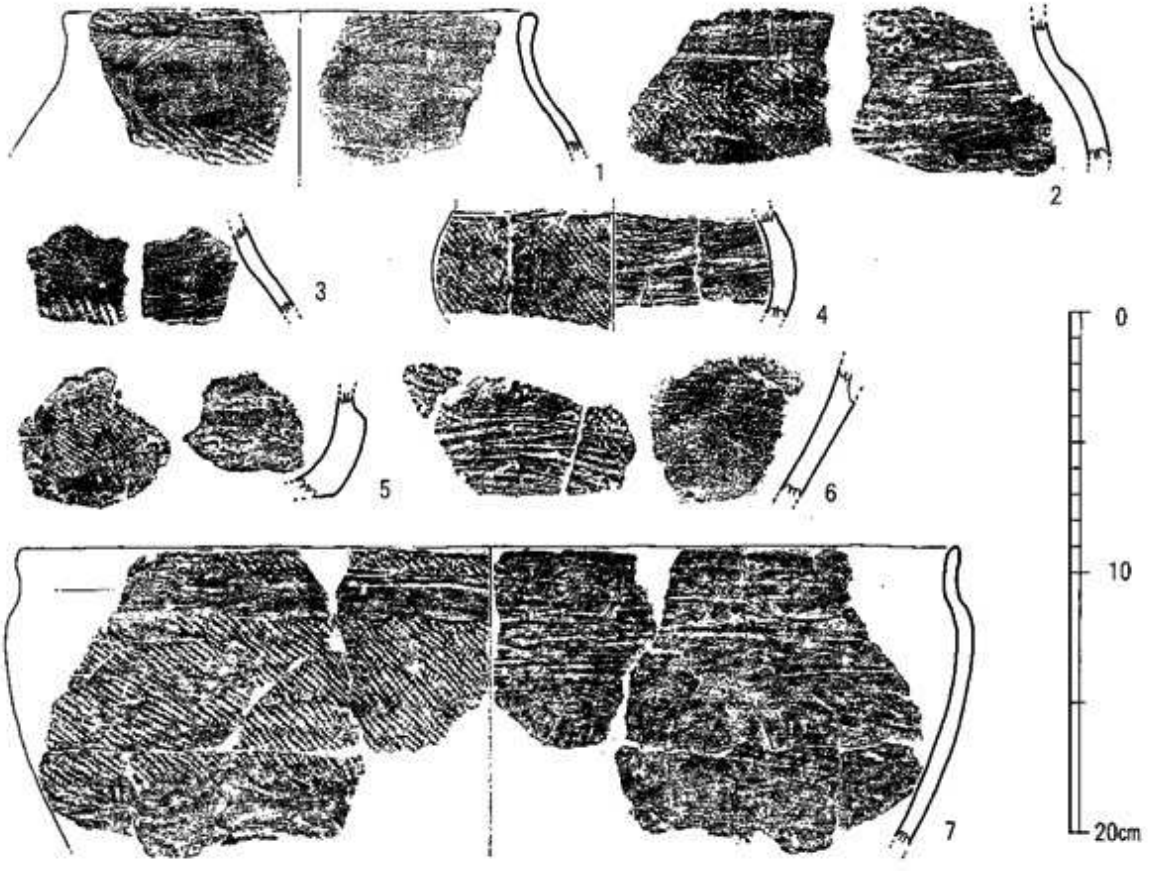
第34図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（28）



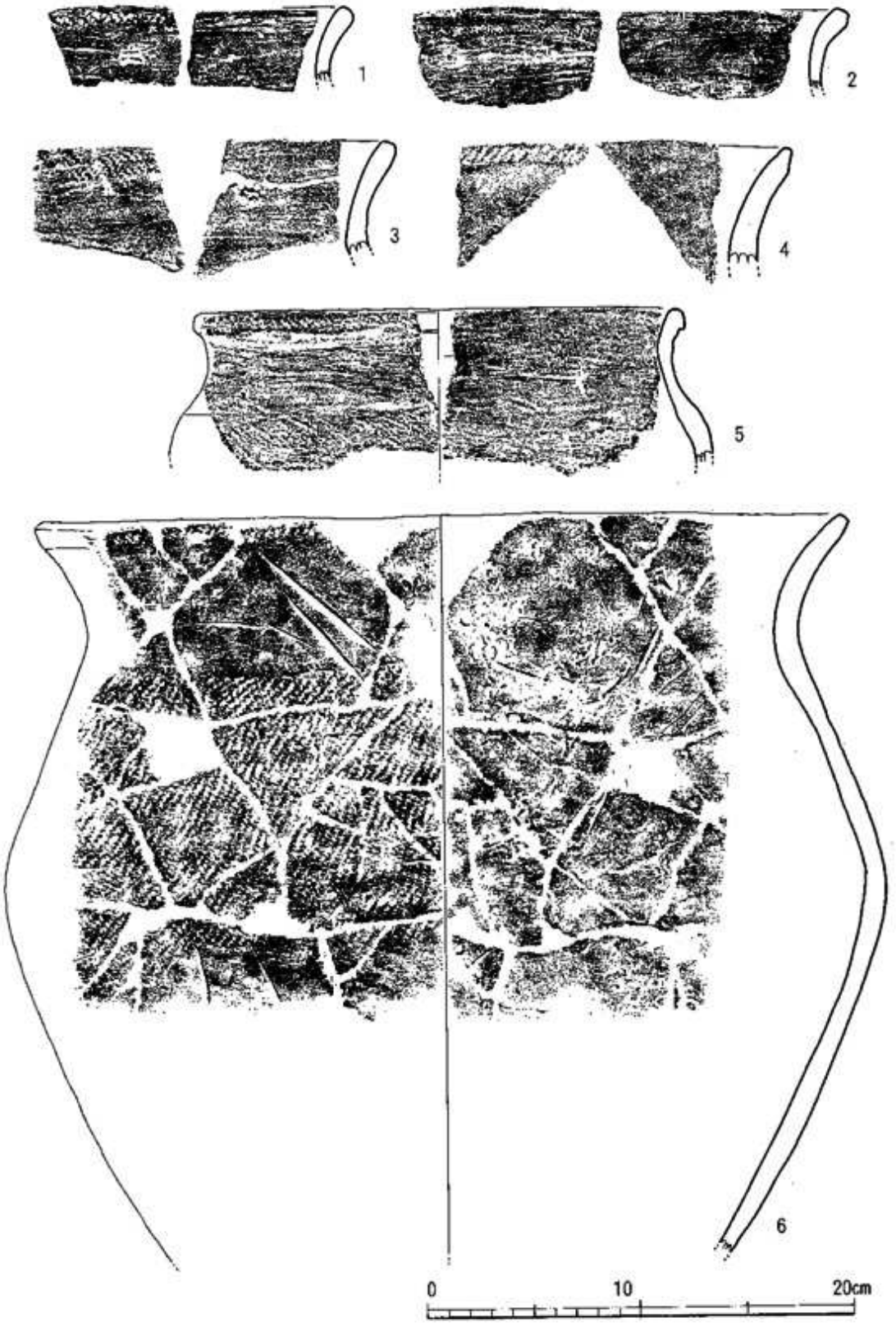
第35図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（29）



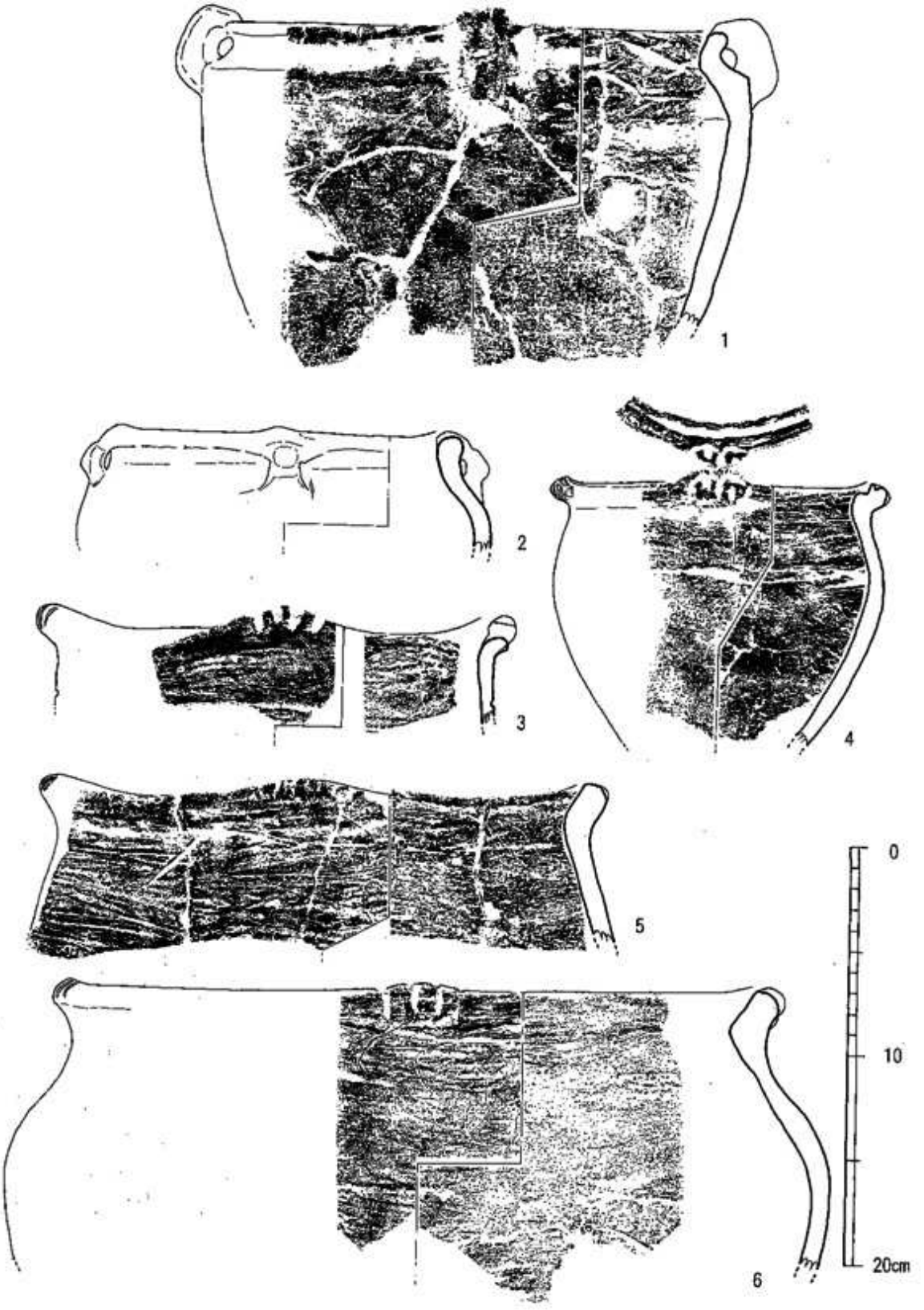
第36図　1号住居跡出土土器（30）



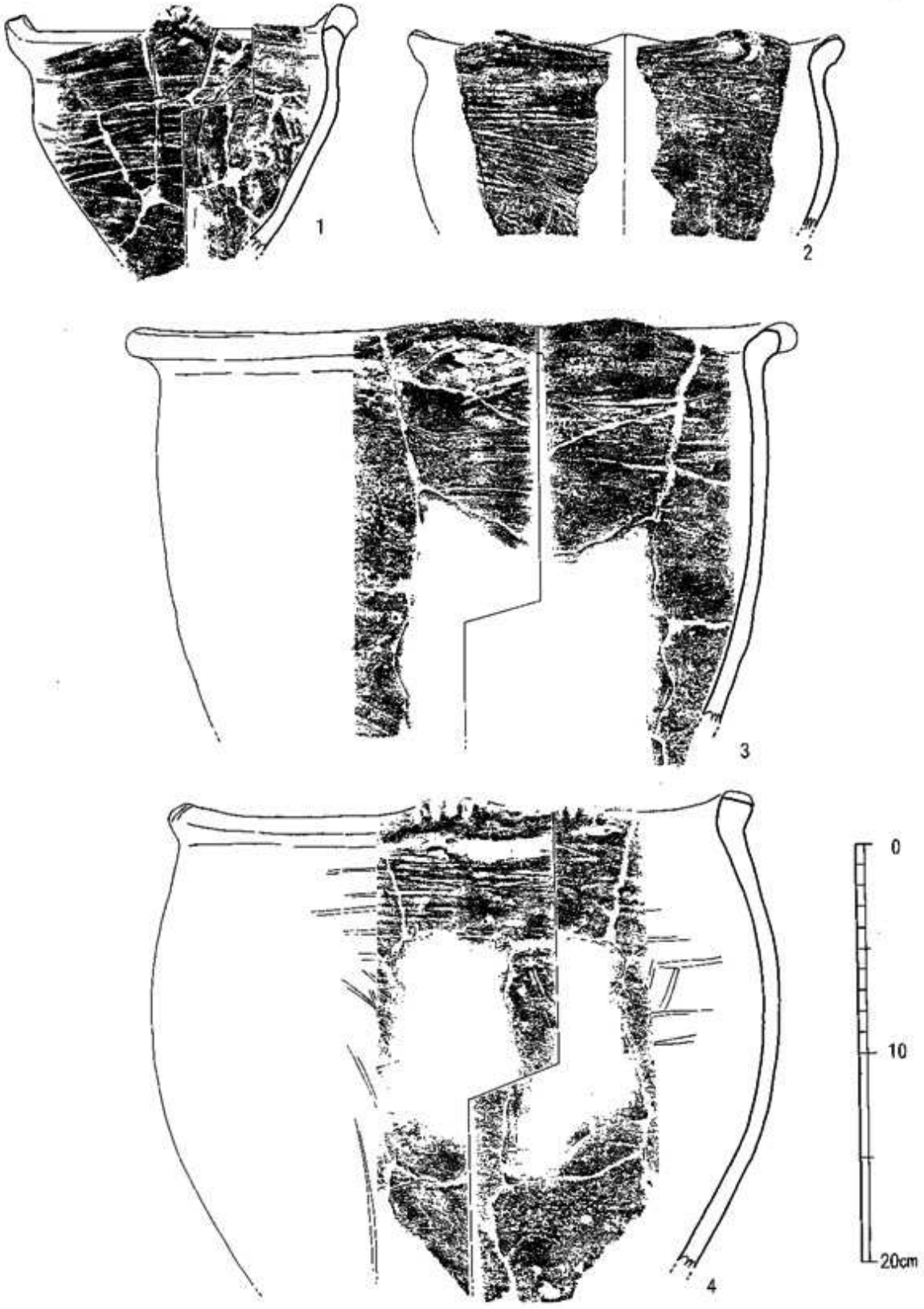
第37図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（31）



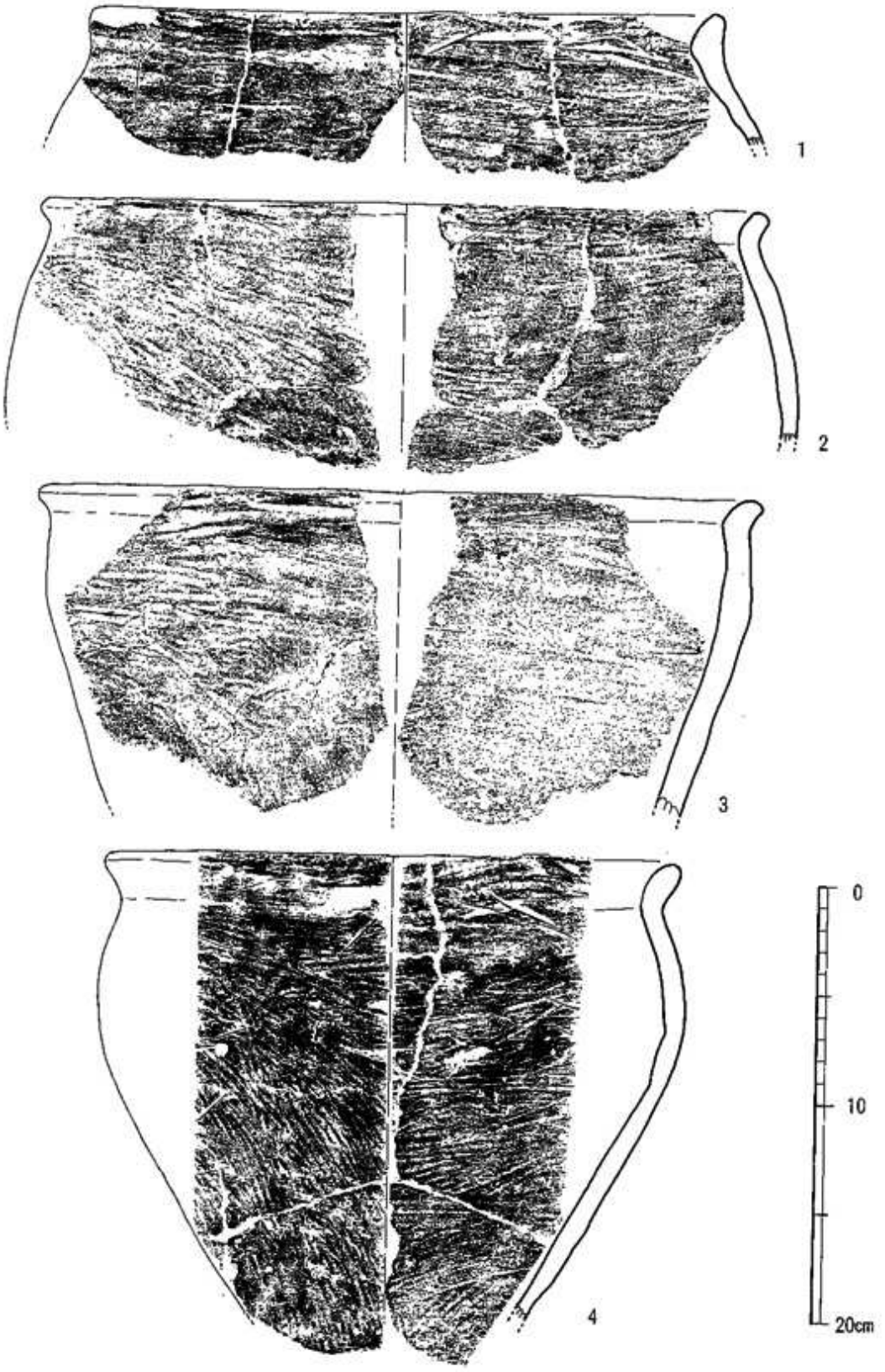
第38図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（32）



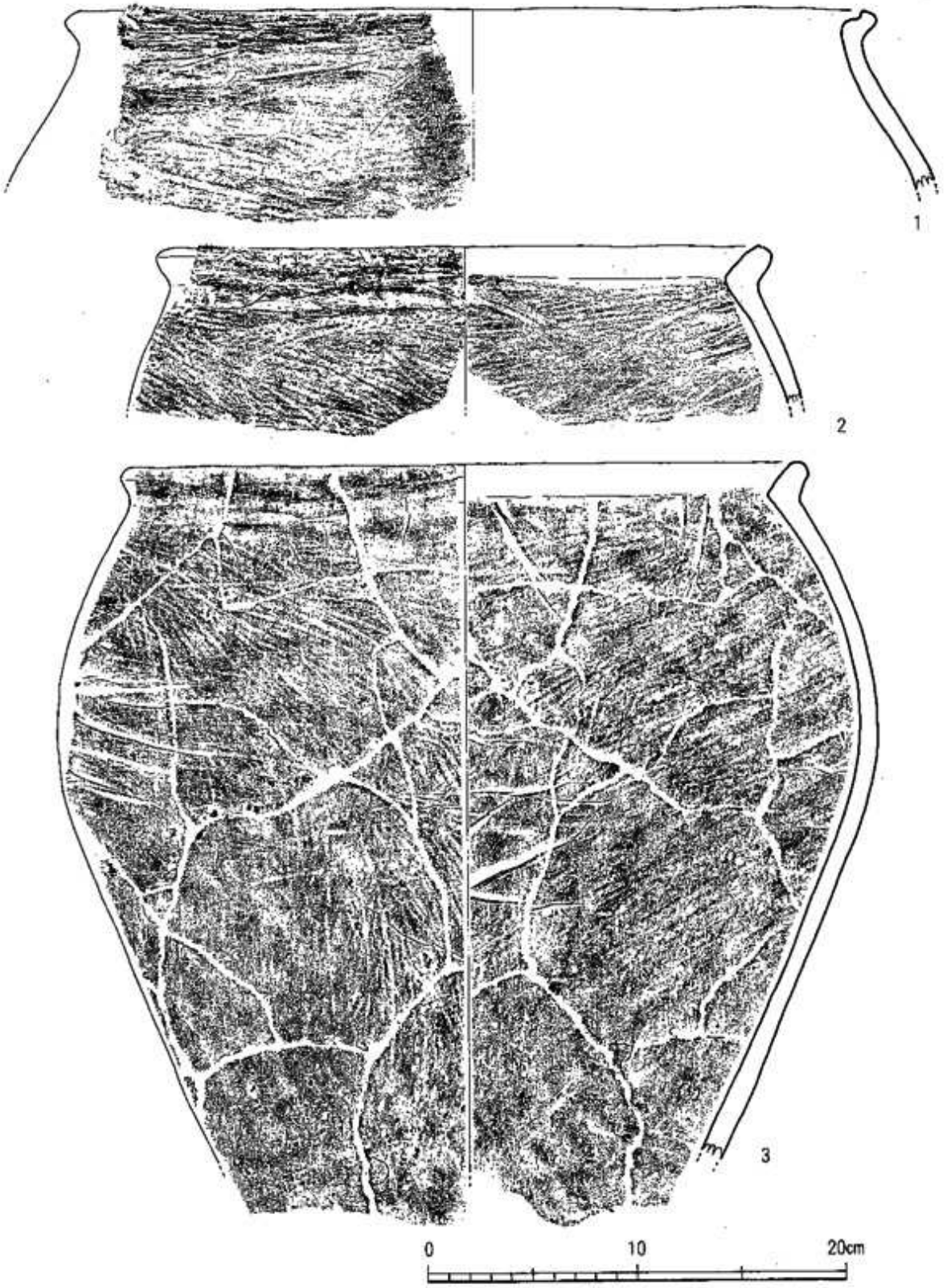
第39図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（33）



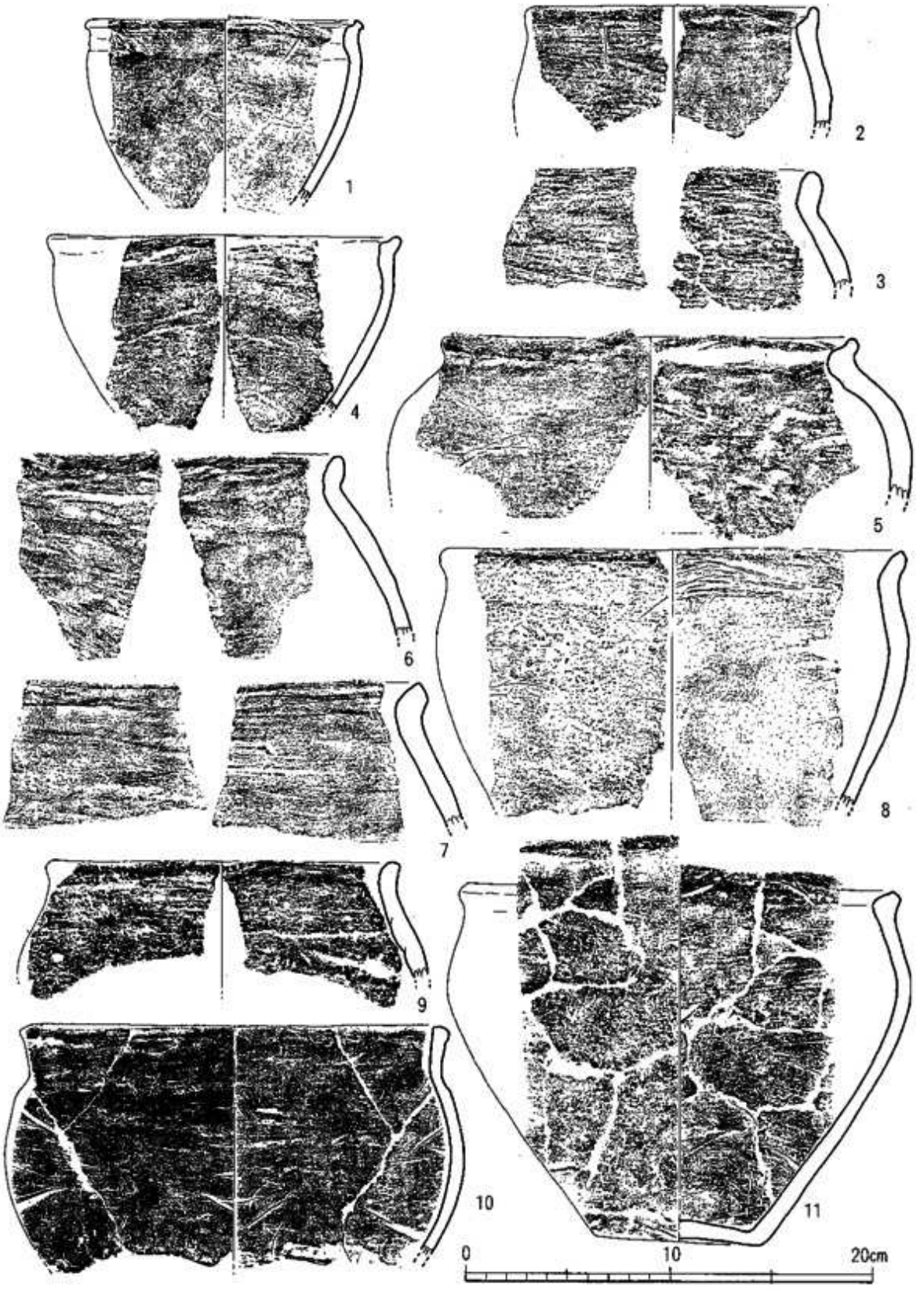
第40図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（34）



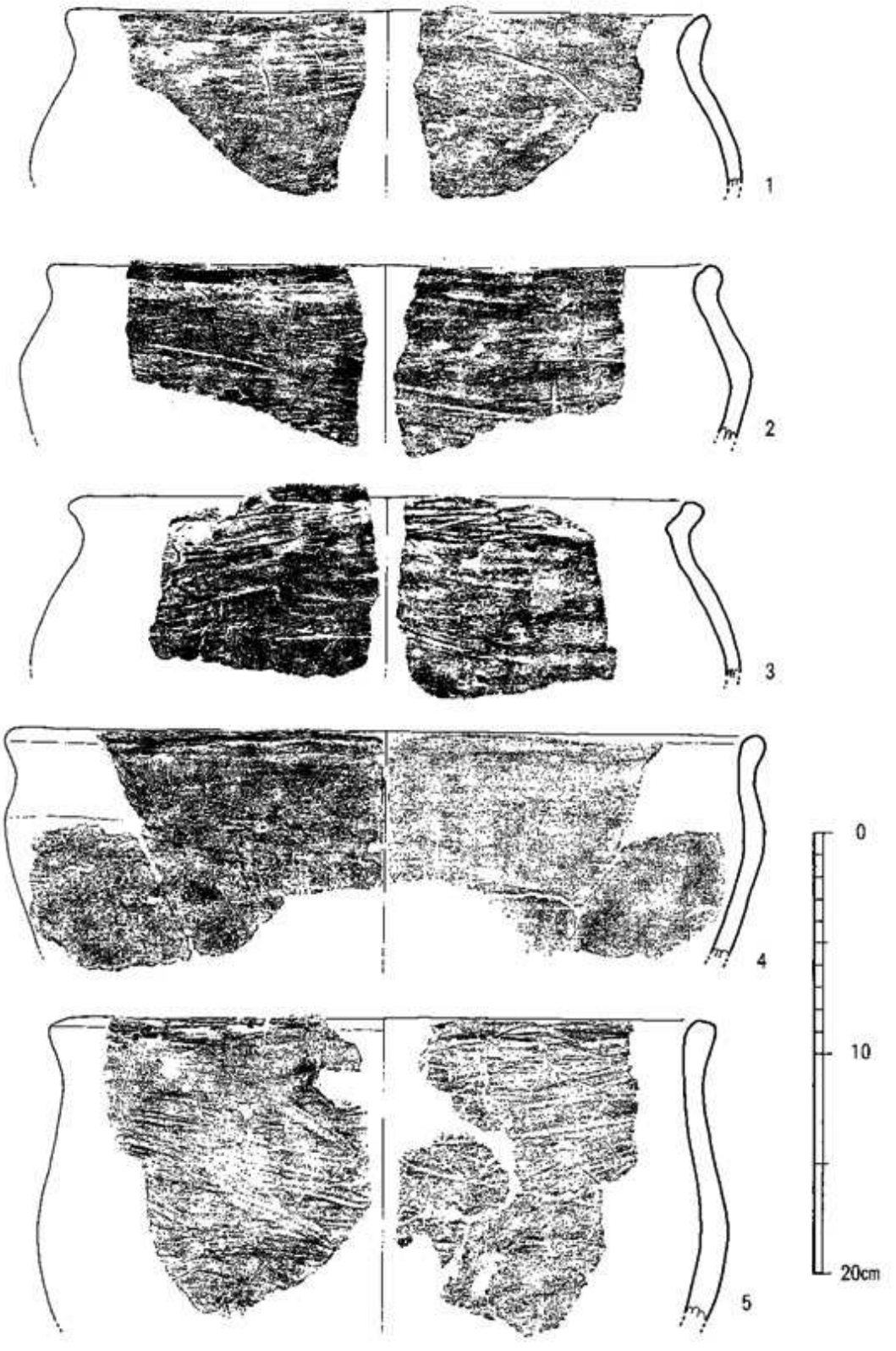
第41図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（35）



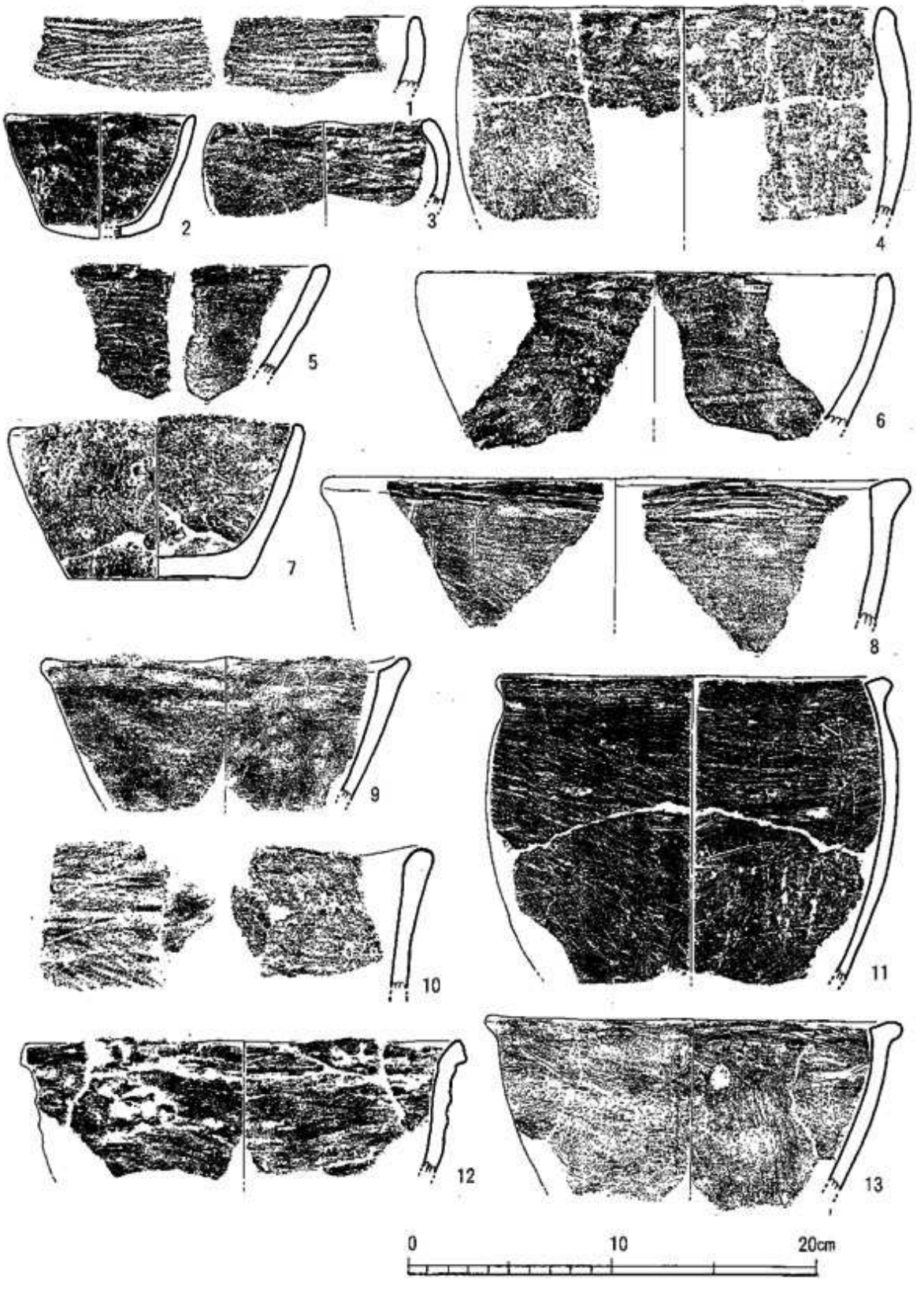
第42図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（36）



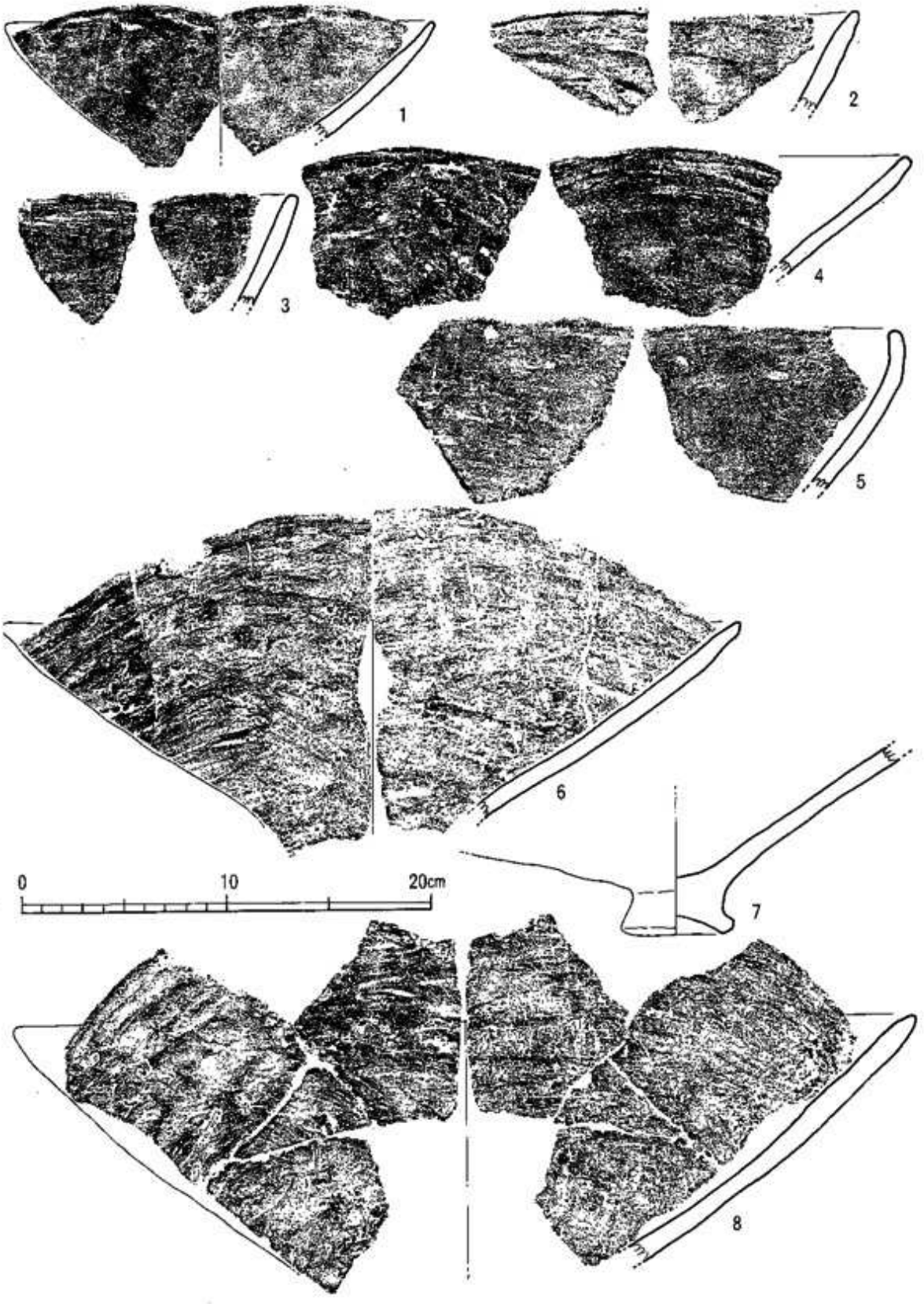
第43図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（37）



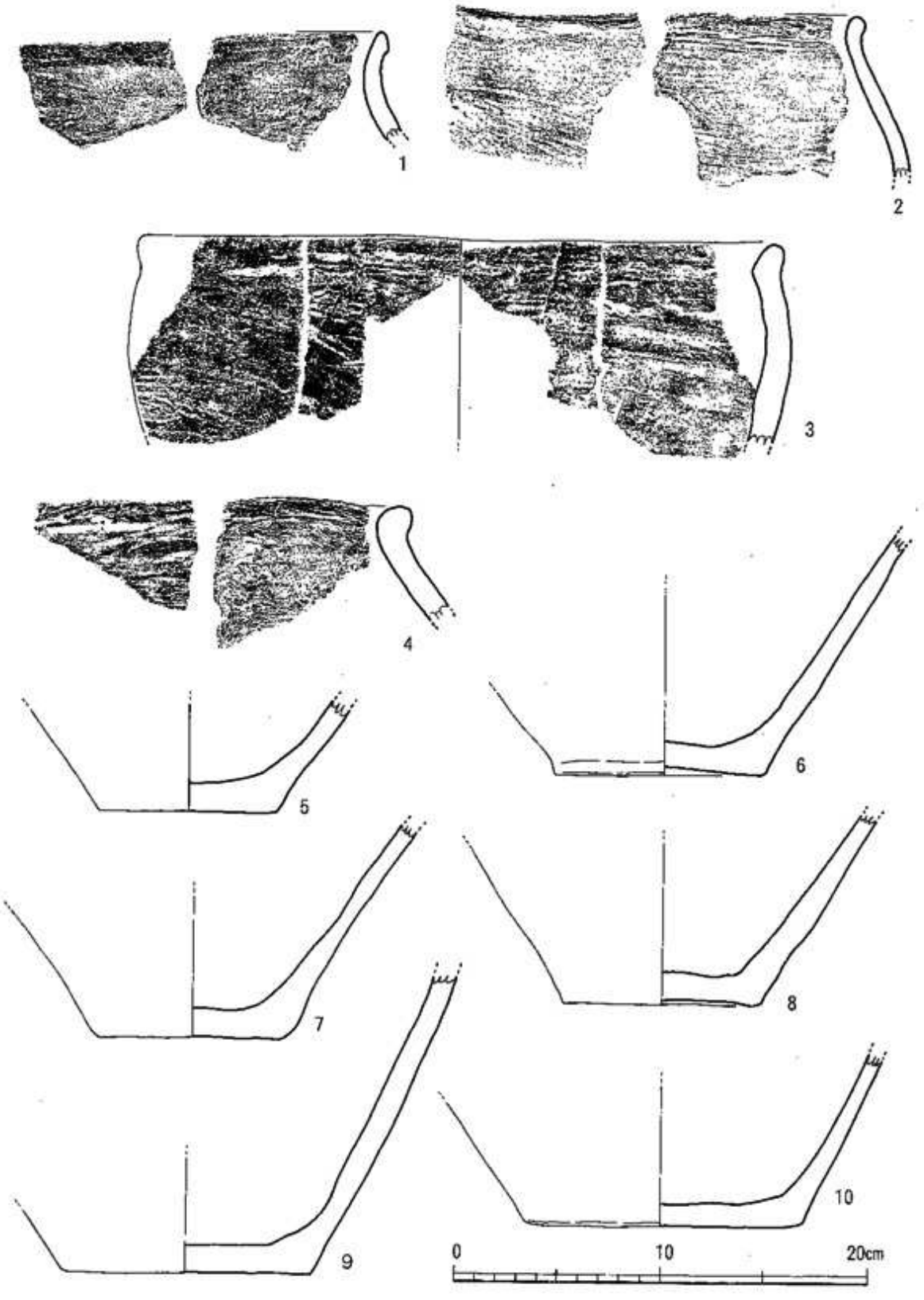
第 44 図　飯田二反田遺跡 1 号住居跡出土土器（38）



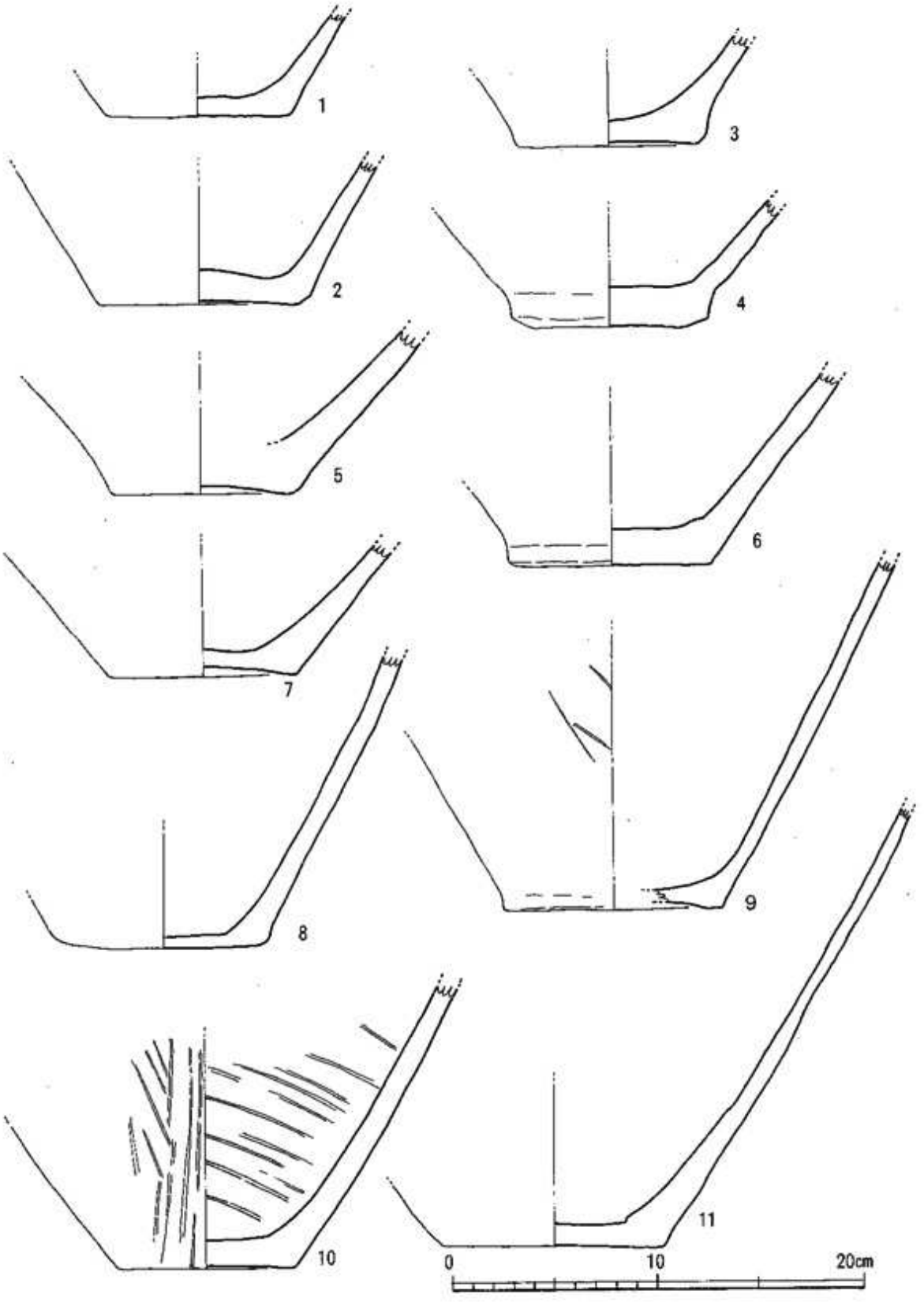
第45図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（39）



第46図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（40）



第47図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（41）



第48図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器（42）

表1　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器観察表（1）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
7	1	1号住	沈線文、縄文、ナデ	ナデ	○	○							スス付着	Ⅰ有文深鉢A1
	2	〃	沈線文、縄文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○		○						Ⅰ有文深鉢A2
	4	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								Ⅱ有文深鉢B
8	1	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								Ⅱ有文深鉢A2
	2	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ミガキ	ナデ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、ナデ	ケズリ	○	○								Ⅱ有文深鉢A
9	1	〃	沈線文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○							スス付着	〃
	2	〃	沈線文、条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
10	1	〃	沈線文、巻貝条痕＋ミガキ	巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	○	○								Ⅱ有文深鉢A2
	2	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○								〃
11	1	〃	沈線文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	2	〃	沈線文、条痕＋ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ナデ＋ミガキ	ナデ	○	○								〃
12	1	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○								Ⅱ有文深鉢B
	2	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
13	1	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○								Ⅱ有文深鉢A2
	2	〃	沈線文、条痕＋ナデ	ミガキ	○	○		○						〃
	3	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
14	1	〃	沈線文、条痕＋ナデ	ミガキ	○	○		○						〃
	2	〃	沈線文、条痕＋ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、条痕＋ナデ	条痕	○	○		○						〃
15	1	〃	沈線文、条痕＋ナデ	二枚貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	2	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ミガキ	○	○								〃
16	1	〃	沈線文、ミガキ	ケズリ	○	○								〃
	2	〃	沈線文、ミガキ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ケズリ	○	○				○				〃
	4	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ミガキ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ミガキ	○	○							桜中山土	〃
17	1	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	2	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○						○		〃
	4	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ミガキ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	7	〃	沈線文、赤色顔料、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	8	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	9	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
18	1	〃	沈線文、条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○								Ⅱ有文鉢A2
	2	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	4	〃	条痕、ナデ	ナデ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	7	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	8	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○						○		〃
	9	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○						○		〃
	10	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○								〃
	11	〃	沈線文、条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
19	1	〃	沈線文、ミガキ	条痕＋ミガキ	○	○		○						Ⅰ有文深鉢A2
	2	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ミガキ	ミガキ＋ナデ	○	○			○					〃
	4	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○								〃

表2　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器観察表（2）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
19	7	1号住	沈線文ーナデ	ナデ	○	○								Ⅱ有文深鉢A1
	8	〃	沈線文ーナデ	ナデ	○	○								〃
	9	〃	沈線文ーナデ	ナデ	○	○			○					〃
	10	〃	沈線文ー巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
20	1	〃	ナデ	ケズリ	○	○								〃
	2	〃	沈線文ーナデ	ケズリ＋ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文ーナデ＋ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	4	〃	沈線文ーナデ	ナデ	○	○								〃
	5	〃	沈線文ーナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	6	〃	沈線文ー条痕＋ナデ	ケズリ＋ミガキ	○	○								〃
	7	〃	沈線文ーナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	8	〃	沈線文ー条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	9	〃	沈線文ーナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	10	〃	沈線文ーナデ	条痕＋ミガキ	○	○								〃
	11	〃	沈線文ー条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	12	〃	沈線文ーナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
21	1	〃	沈線文ーナデ＋ミガキ	ナデ	○	○								〃
	2	〃	沈線文ーミガキ	ミガキ	○	○		○						〃
	3	〃	沈線文ー条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	4	〃	沈線文ーナデ	ナデ	○	○								〃
	5	〃	沈線文ーナデ	ナデ	○	○								〃
	6	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
	7	〃	沈線文ー条痕＋ナデ	条痕＋ミガキ	○	○								〃
	8	〃	沈線文ーナデ	ナデ	○	○								〃
	9	〃	沈線文ーナデ	条痕	○	○		○						〃
	10	〃	沈線文ー条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○	○							〃
22	1	〃	沈線文ーナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	2	〃	沈線文ーナデ	ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文ーナデ	条痕	○	○								〃
	4	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
	5	〃	沈線文ーナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	6	〃	沈線文ーナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	7	〃	沈線文ー巻貝条痕	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
23	1	〃	沈線文ーナデ	条痕＋ナデ	○	○								Ⅱ有文深鉢A
	2	〃	沈線文ー巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文ーナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	4	〃	沈線文ーナデ	条痕＋ミガキ	○	○								〃
24	1	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								Ⅱ有文深鉢A1
	2	〃	沈線文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、ミガキ	ケズリ＋ナデ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、ナデ	ケズリ	○	○								〃
	7	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	8	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	9	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○			○					〃
	10	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○								〃
	11	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○						○		〃
	12	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	13	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○						○		〃
25	1	〃	沈線文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	2	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ミガキ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ミガキ	○	○								〃
	7	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	8	〃	沈線文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	9	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	10	〃	沈線文、ミガキ	ナデ	○	○								〃
	11	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃

表3　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器観察表（3）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
26	1	1号住	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								Ⅱ有文深鉢A2
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ケズリ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	6	〃	沈線文＋ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	7	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	8	〃	沈線文、ミガキ	ナデ	○	○								〃
	9	〃	沈線文、ナデ	ケズリ	○	○								〃
	10	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ケズリ	○	○								〃
	11	〃	沈線文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	12	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
27	1	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	2	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○	○							〃
	5	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	7	〃	沈線文、ミガキ	ナデ	○	○								〃
	8	〃	沈線文、ミガキ	ナデ	○	○								〃
	9	〃	沈線文、ナデ＋ミガキ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	10	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ミガキ	○	○								〃
28	1	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								Ⅱ有文深鉢A
	2	〃	沈線文、ナデ＋ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、巻貝条痕	ナデ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
29	1	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	2	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
30	1	〃	沈線文、条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○								Ⅰ有文深鉢A2
	2	〃	沈線文、条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、条痕、ナデ	条痕＋ミガキ	○	○			○					〃
	7	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕	○	○								〃
	8	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○								〃
	9	〃	沈線文、ナデ	ケズリ	○	○								〃
	10	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	11	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
31	1	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	2	〃	沈線文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、条痕＋ナデ	ケズリ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	7	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	8	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	9	〃	沈線文、条痕＋ナデ	条痕＋ミガキ	○	○								〃
	10	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	11	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ、ミガキ	○	○								〃
32	1	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ミガキ	○	○								Ⅱ有文深鉢A
	2	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、条痕＋ナデ	ケズリ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、巻貝条痕＋ミガキ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○								〃
	7	〃	沈線文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	8	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	9	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕	○	○						○		〃
	10	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃

表4　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器観察表（4）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
33	1	1号住	沈線文、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								Ⅱ有文深鉢A
	2	〃	沈線文、綾縄文、ミガキ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、縄文、ナデ	ミガキ	○	○		○						〃
	4	〃	沈線文、赤色染料、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、赤色染料、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、赤色染料、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○	○							〃
	7	〃	沈線文、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○	○							〃
34	1	〃	沈線文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	2	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	5	〃	沈線文、縄文、ナデ	条痕＋ミガキ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、縄文、ミガキ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	7	〃	沈線文、赤色染料、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	8	〃	沈線文、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○						○		〃
	9	〃	沈線文、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	10	〃	沈線文、縄文、ミガキ	ナデ	○	○								〃
	11	〃	沈線文、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	12	〃	沈線文、縄文、ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	13	〃	沈線文、赤色染料、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
35	1	〃	沈線文、縄文	ミガキ	○	○								Ⅱ有文深鉢A
	2	〃	沈線文、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	3	〃	沈線文、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	4	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○						○		Ⅱ有文深鉢B
	5	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								Ⅰ有文深鉢C
	6	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								Ⅱ有文深鉢A
	7	〃	沈線文、赤色染料、縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	8	〃	沈線文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								Ⅱ有文深鉢A₂
	9	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	10	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○								Ⅱ有文深鉢C
	11	〃	沈線文、巻貝条痕	巻貝条痕＋ミガキ	○	○								〃
36	1	〃	沈線文、ミガキ	ミガキ	○	○	○							〃
	2	〃	沈線文、ナデ	ミガキ	○	○	○							〃
37	1	〃	縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								Ⅱ有文深鉢D
	2	〃	縄文、ナデ	ミガキ	○	○								〃
	3	〃	縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	4	〃	縄文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	5	〃	縄文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	6	〃	縄文、巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○						○		〃
	7	〃	縄文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
38	1	〃	縄文、ミガキ	ミガキ	○	○						○		〃
	2	〃	縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	3	〃	縄文、ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	4	〃	縄文、ナデ	ナデ	○	○						○		〃
	5	〃	縄文、ナデ	条痕、ナデ	○	○						○		〃
	6	〃	縄文、ナデ	ナデ	○	○								〃
39	1	〃	ナデ	ナデ＋ケズリ	○	○						○		Ⅱ有文深鉢A₂
	2	〃	ナデ＋ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	3	〃	条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	4	〃	条痕＋ミガキ	条痕＋ミガキ	○	○								〃
	5	〃	ケズリ＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○								〃
	6	〃	ケズリ＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○								〃
40	1	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○							Ⅱ有文深鉢A₂
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	3	〃	ケズリ＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○	○							〃
	4	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
41	1	〃	ケズリ＋ミガキ	巻貝条痕＋ケズリ	○	○								Ⅱ有文深鉢B
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○								〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	4	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	○	○								〃
42	1	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕	○	○								〃
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃

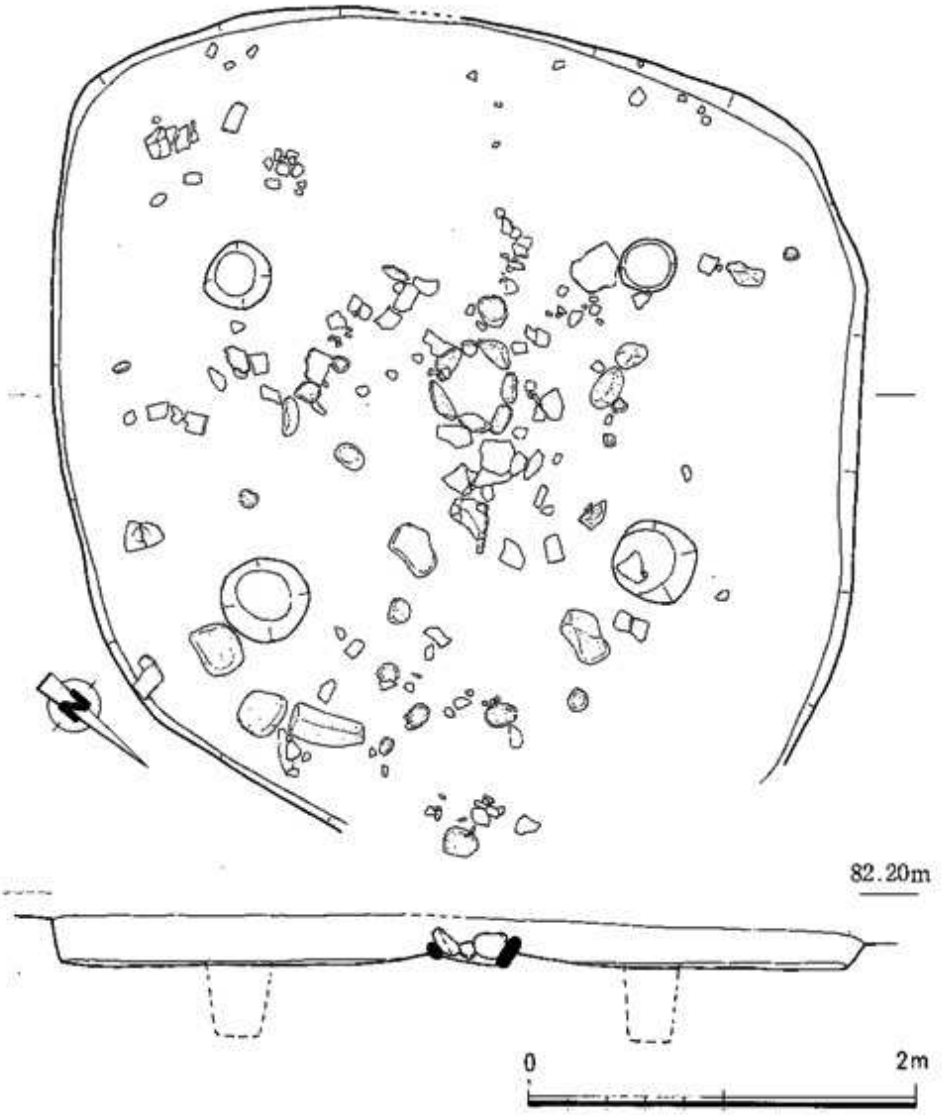
表5　飯田二反田遺跡1号住居跡出土土器観察表（5）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
43	1	1号住	ナデ	ナデ	○	○							スス付着	J縄文深鉢B
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○								〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	4	〃	ナデ＋ミガキ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○								〃
	5	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
	6	〃	条痕＋ナデ	ナデ	○	○						○		〃
	7	〃	巻貝条痕＋ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	8	〃	ナデ	ミガキ										〃
	9	〃	ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○			○					〃
	10	〃	ナデ	ナデ	○		○							〃
	11	〃	条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
44	1	〃	ナデ＋ミガキ	ナデ	○	○			○					〃
	2	〃	条痕＋ミガキ	条痕＋ミガキ	○	○								〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	4	〃	ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	5	〃	巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
45	1	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								Ⅱ縄文深鉢
	2	〃	ナデ	ナデ	○	○						○		〃
	3	〃	ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	4	〃	ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○								〃
	5	〃	ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	6	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
	7	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
	8	〃	ミガキ											〃
	9	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
	10	〃	条痕＋ナデ	ナデ＋ケズリ	○	○								〃
	11	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○							〃
	12	〃	ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	13	〃	ナデ＋ミガキ	ナデ	○	○	○							〃
46	1	〃	ミガキ	ナデ	○	○								Ⅱ縄文深鉢Ⅰ
	2	〃	ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	3	〃	ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	4	〃	ナデ＋ミガキ	ナデ＋ミガキ	○	○								〃
	5	〃	ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	6	〃	ナデ＋ミガキ	ケズリ＋ナデ	○	○								〃
	7	〃	ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	8	〃	ナデ＋ミガキ	ケズリ＋ナデ	○	○								〃
47	1	〃	ナデ	ミガキ	○	○								Ⅱ縄文深鉢B
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○								〃
	3	〃	条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	4	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
	5	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
	6	〃	巻貝条痕＋ミガキ	ミガキ	○	○								底部
	7	〃	ナデ＋ミガキ	ケズリ	○	○							煮コゲ付着	〃
	8	〃	ミガキ	ナデ	○	○								〃
	9	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕	○	○								〃
	10	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
48	1	〃	ナデ	ミガキ	○	○								〃
	2	〃	ナデ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	3	〃	ナデ＋ミガキ	条痕＋ミガキ	○	○								〃
	4	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
	5	〃	ナデ＋ミガキ	ナデ	○	○								〃
	6	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
	7	〃	ミガキ	ナデ	○	○								〃
	8	〃	ミガキ	ケズリ	○	○								〃
	9	〃	条痕＋ナデ＋ミガキ	ミガキ	○	○								〃
	10	〃	巻貝条痕	巻貝条痕	○	○								〃
	11	〃	条痕＋ミガキ	ナデ	○	○							煮コゲ付着	〃

3．2号住居跡

(1) 遺　構

1号住居跡の南西部に位置し、東北隅部分はこれと重複する隅丸方形に近い平面プランを呈する遺構である。全体に削平を受けており1号住との先後関係は不明であるが、出土土器に差はなく、両者は非常に近い時期に営まれたものと考えられる。検出面の南北長4.2m、東西約4.2＋αmを測り、床面までは20cmと浅い。床面中央やや西に10～20cm大の偏平な河原石7個を用い、直径約43cmの円形の石囲炉を設ける。内部には灰や炭化物が堆積し、石の表面は火熱のた



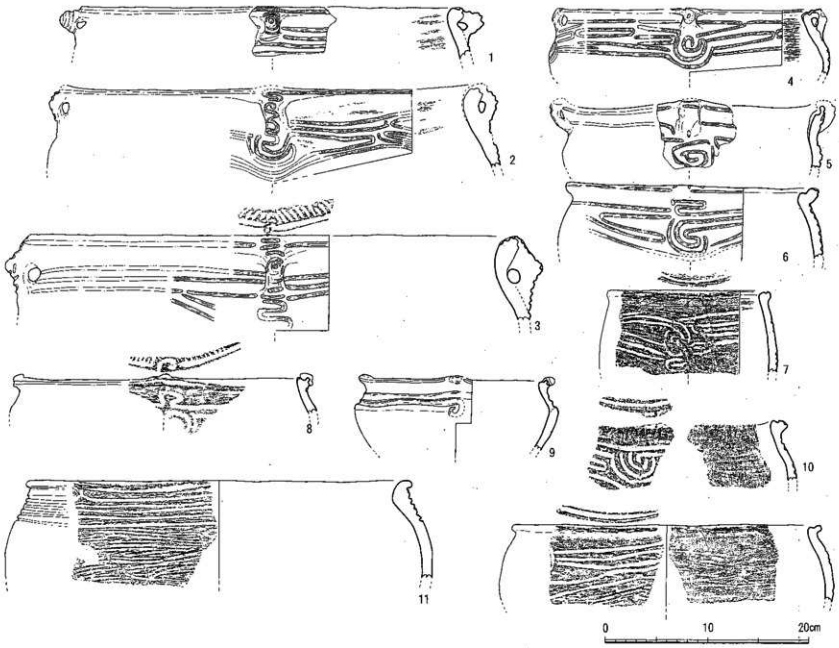
第49図　飯田二反田遺跡2号住居跡実測図

め変色している。主柱穴は４本であり、掘方の直径は28～44cm、深さ約40cmを測り、南北間の心心距離は2.1と2.0m、東西間の心心距離は各々約1.6mであり、南北間が0.5m余り長くなる。

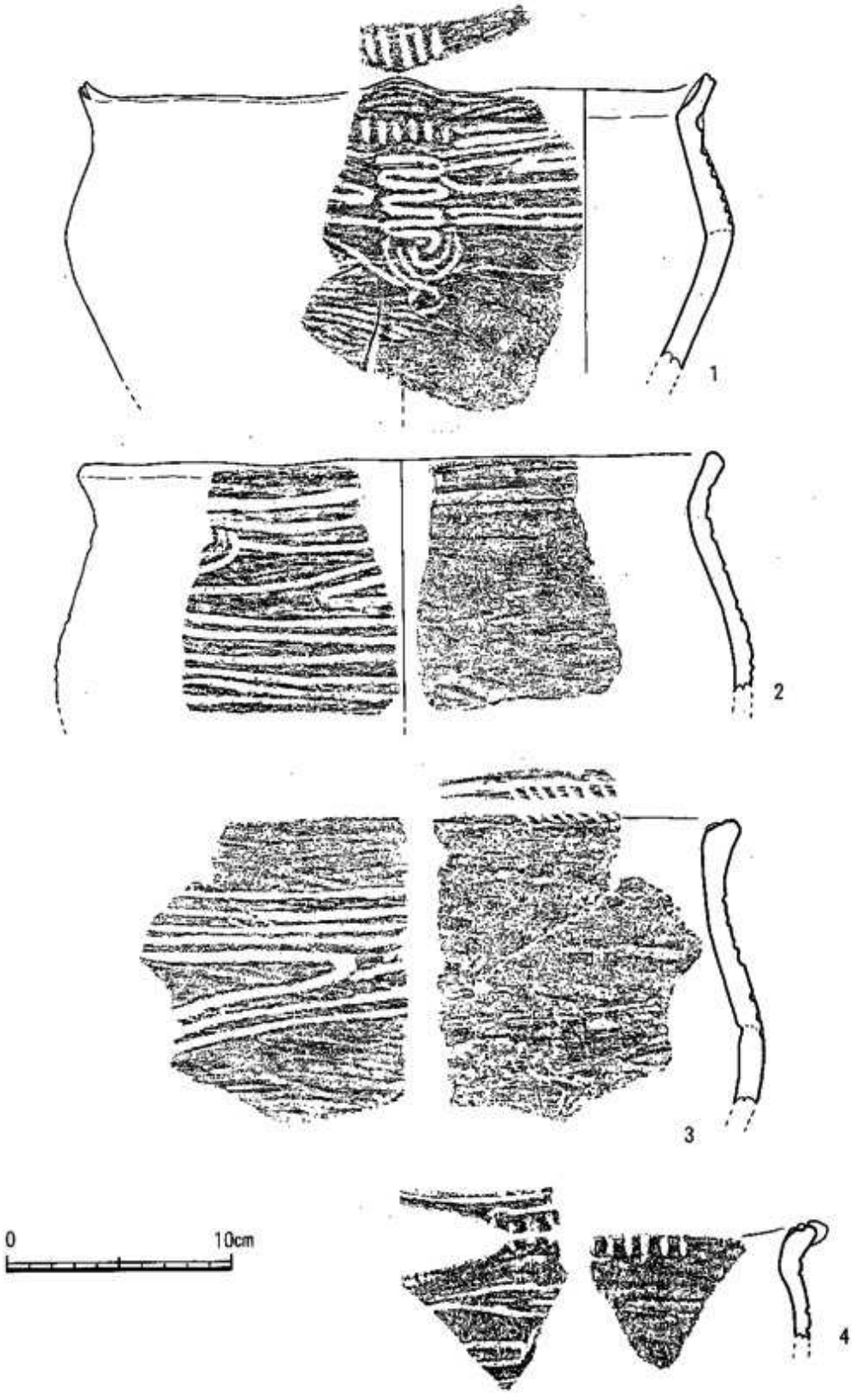
土器を中心とする遺物は、炉跡の周辺にやや多く分布し、この他では１号住居跡との重複部分に若干出土している。土器は、鐘崎式期の１号住居跡と変わらないが、その量ははるかに少ない。しかし、１号住居跡の出土量は異常であり、２号の方はより一般的であると言えよう。石器には剥片石器、石錘、磨石などが認められるが全体にやや少ない。

(2) 遺　物

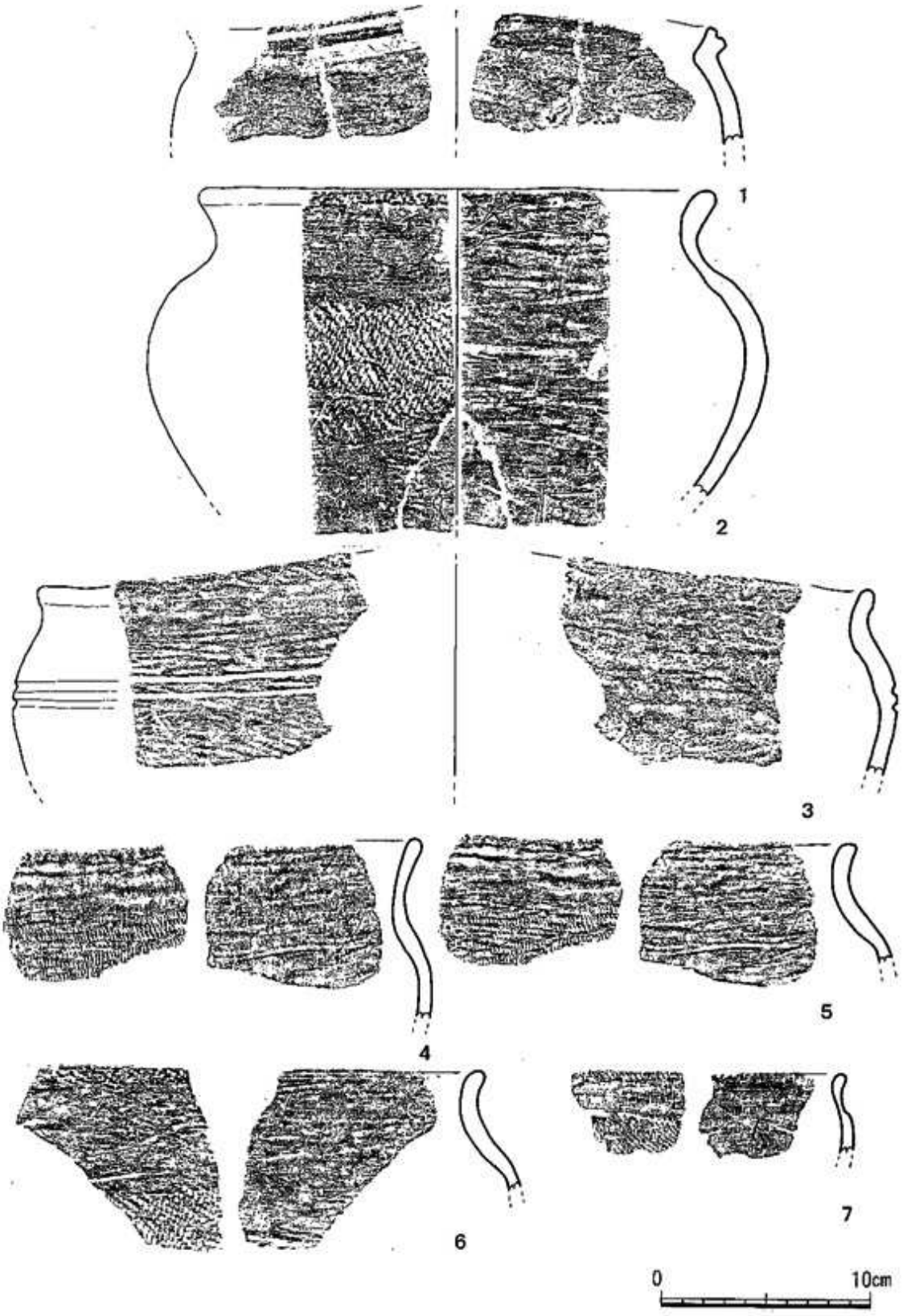
１号住居跡と同様であるが、有文鉢はⅡＡ２類を有文鉢ⅡＡ・Ｂ類を主体とし磨消縄文による文様は認められないようである。有文深鉢にはⅡＣ・Ｄ類が出土しており、Ｄ類は一定量存在する。有文浅鉢には磨消縄文のⅡＡ類と沈線文様のⅡＢ類があり、このほか小形の鉢形のⅡＣ類も認められる。無文土器には、波状口縁の波頂部に一部施文する深鉢ⅡＡ１類、同様の器形を呈し文様をもたないⅡＡ２類、平縁のⅡＢ類があり、この中ではⅡＢ類が多数を占める。これらの無文土器の器面調整は、いずれも横方向の巻貝条痕やナデを主とし全体にやや雑な仕上げとなる。また、無文鉢も４点出土しており、底部は平底または僅かに窪む上げ底である。



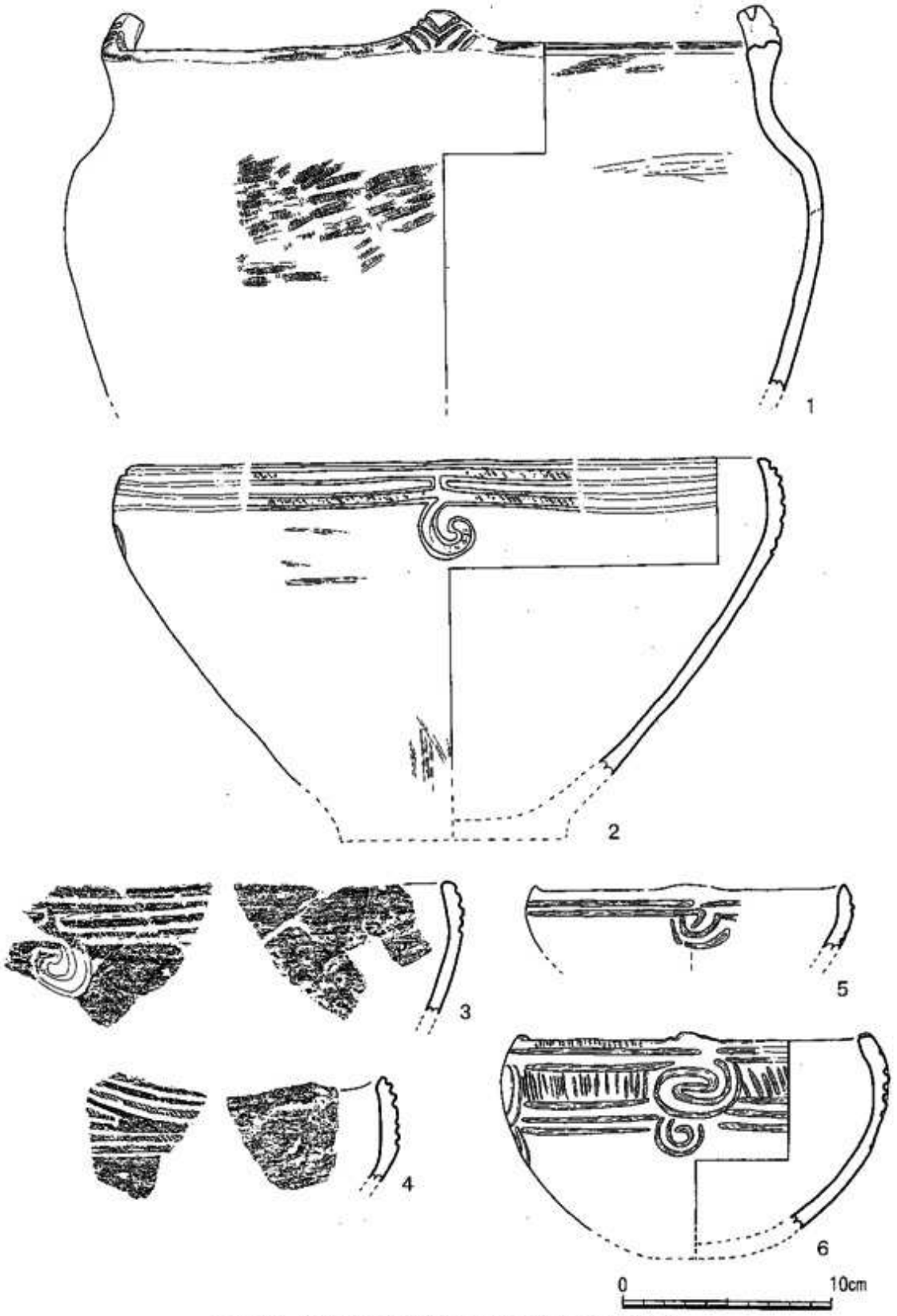
第50図　飯田二反田遺跡2号住居跡出土土器（1）



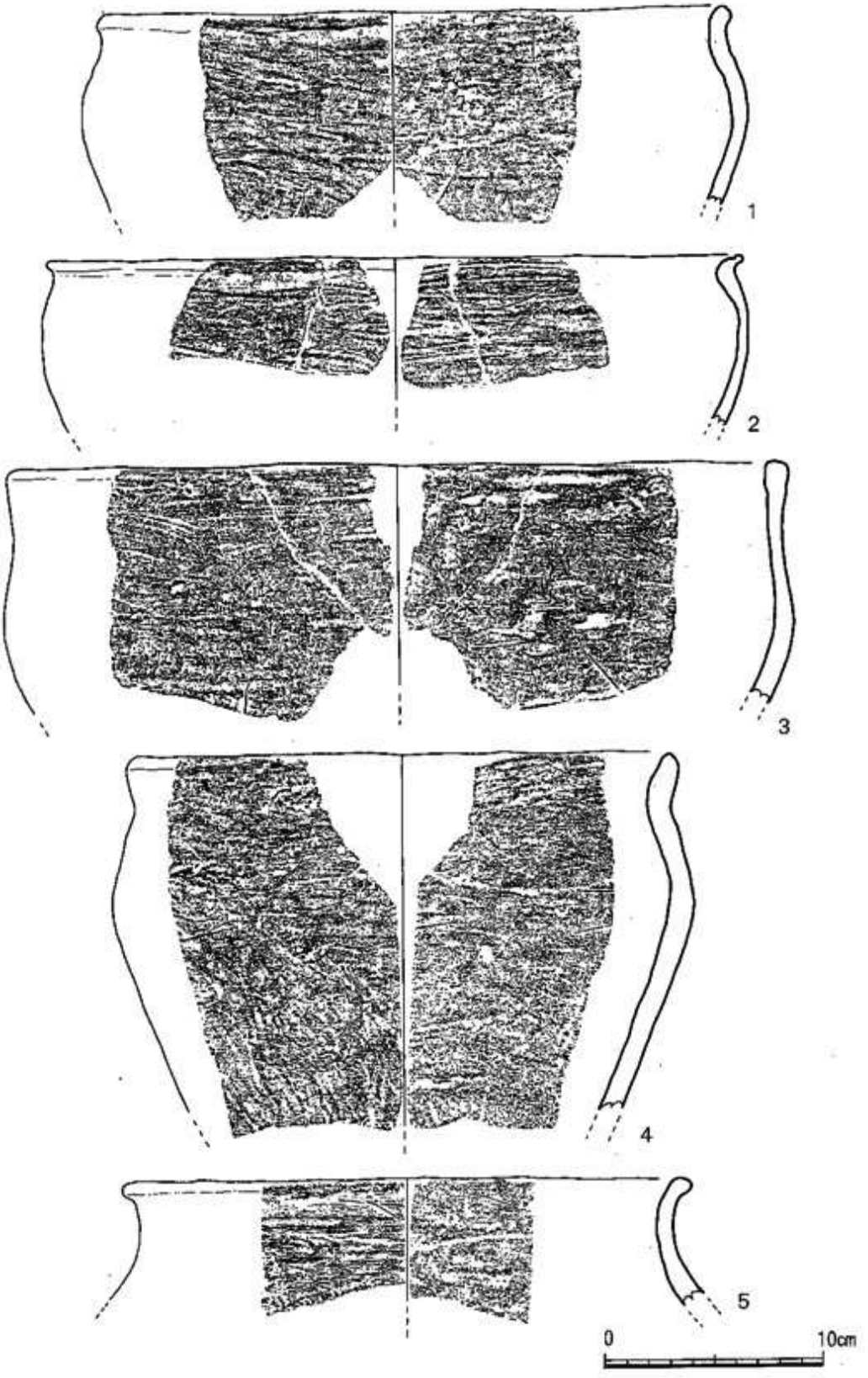
第51図　飯田二反田遺跡２号住居跡出土土器（２）



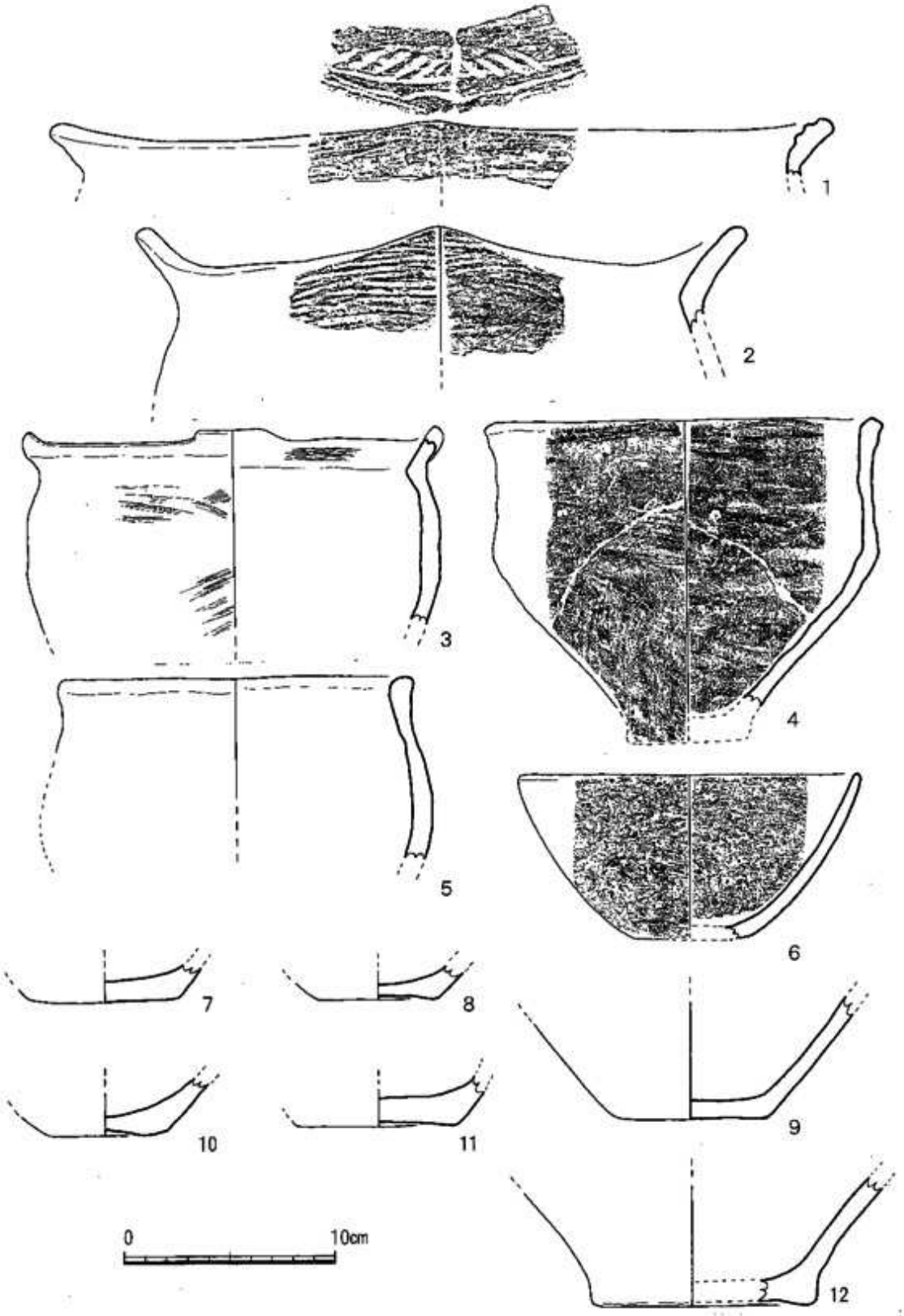
第52図　飯田二反田遺跡2号住居跡出土土器(3)



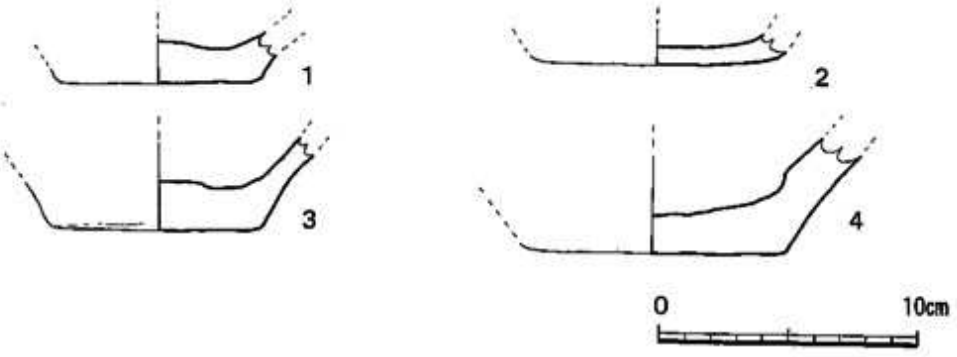
第53図　飯田二反田遺跡2号住居跡出土土器（4）



第54図　飯田二反田遺跡2号住居跡出土土器(5)



第55図　飯田二反田遺跡2号住居跡出土土器(6)



第56図　飯田二反田遺跡２号住居跡出土土器(７)

表６　飯田二反田遺跡２号住居跡出土土器観察表

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	斜長石	石英	白色粒	赤色粒	灰色粒	茶色粒	雲母	備考	分類
50	1	2号住	把手、沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○									Ⅱ有文鉢A 2
	2	〃	把手、沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○			○			〃
	3	〃	把手、沈線文、口唇部指文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○			○						〃
	4	〃	把手、沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕	○	○		○	○					〃
	5	〃	把手、沈線文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○			○			〃
	6	〃	沈線文、口唇部刻目、ナデ	条痕＋ナデ	○			○		○				〃
	7	〃	把手、沈線文、口唇部指文、条痕＋ナデ	ナデ	○			○		○				〃
	8	〃	沈線文、穿孔、ナデ＋ミガキ	ケズリ＋ミガキ	○			○						〃
	9	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕	○			○						〃
	10	〃	把手、沈線文、口唇部指文、条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○			○						〃
	11	〃	沈線文、巻貝条痕	条痕＋ナデ	○			○						〃
	12	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○			○			○			〃
51	1	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○						〃
	2	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○						〃
	3	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○						〃
	4	〃	沈線文、口唇部刻目、	ナデ	○			○						〃
52	1	〃	口唇部沈線、ナデ＋ミガキ	ナデ＋ミガキ	○		○	○						Ⅱ有文深鉢C
	2	〃	縄文、ナデ	条痕＋ナデ	○			○		○				Ⅱ有文深鉢C
	3	〃	口唇部巻貝疑縄文、沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ＋指オサエ	○			○			○			〃
	4	〃	疑縄文、ナデ	条痕＋ナデ	○			○	○					〃
	5	〃	疑縄文、ナデ	条痕＋ナデ	○			○						〃
	6	〃	縄文、条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○	○					〃
	7	〃	縄文、ミガキ	ミガキ	○			○						〃
53	1	〃	突起部・口唇部沈線文、疑縄文、ナデ	条痕＋ケズリ＋ナデ	○			○						〃
	2	〃	磨消縄文、赤色染料、巻貝条痕＋ナデ	ナデ＋指オサエ	○		○	○						Ⅱ有文浅鉢A
	3	〃	磨消縄文、ミガキ	ミガキ	○			○		○				〃
	4	〃	磨消縄文、ミガキ	ナデ	○			○						〃
	5	〃	沈線文、ミガキ	ケズリ＋ミガキ	○			○						Ⅱ有文浅鉢B
	6	〃	突起部刻目、沈線文、赤色染料、ミガキ	ケズリ＋ナデ	○			○		○				〃
54	1	〃	ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○	○	○				Ⅱ無文浅鉢B
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○	○	○				〃
	3	〃	ケズリ＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○				○		〃
	4	〃	条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○		○				〃
	5	〃	条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○		○				〃
55	1	〃	条痕＋ナデ	波頂部短沈線文、ナデ	○			○						Ⅱ無文浅鉢A 1
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						Ⅱ無文浅鉢A 2
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						Ⅱ無文鉢
	4	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○			○	○		○			〃
	5	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						〃
	6	〃	ケズリ＋ナデ	ケズリ	○			○		○				〃
	7	〃	ナデ＋ミガキ	ナデ	○			○						底部
	8	〃	ミガキ	ミガキ	○			○						〃
	9	〃	ミガキ	ナデ	○			○	○					〃
	10	〃	ナデ	ナデ	○			○			○			〃
	11	〃	ナデ	ナデ	○			○						〃
	12	〃	ナデ	ナデ	○			○						〃
56	1	〃	条痕	ナデ	○			○						〃
	2	〃	ケズリ＋ナデ	ナデ	○			○			○			〃
	3	〃	ナデ	ナデ	○			○				○		〃
	4	〃	ナデ	ナデ	○			○	○	○				〃

4．3号住居跡

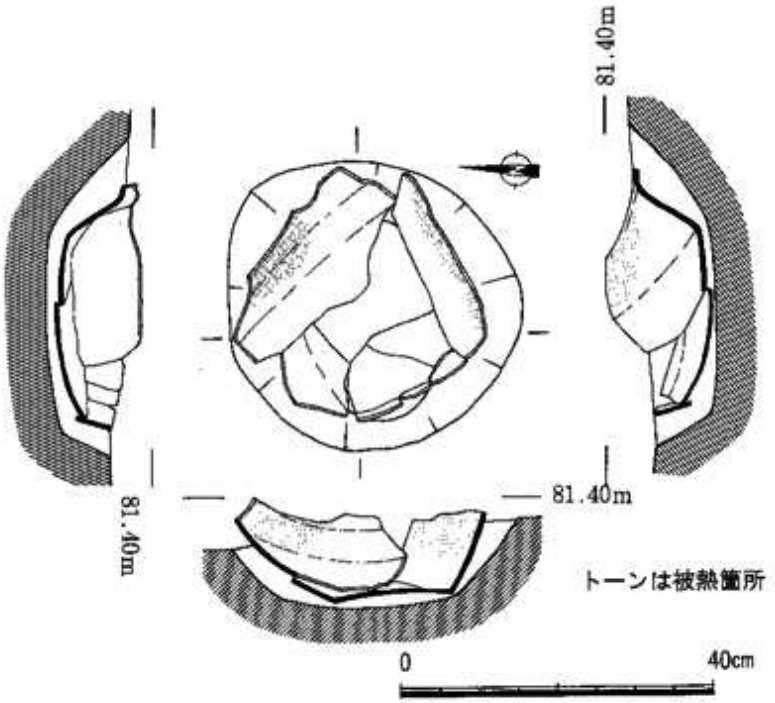
(1) 遺　構

3号住居跡は調査区の東部で検出された。住居の形態は東西長6.8m、南北長6.6m、深さ0.8mを測る不整円形のものである。床面はほぼ平担であるが、住居の北西と東部に一段高い部分が認められた。住居に伴う柱穴は4本検出でき、p1－p2の心心距離は4.0m、p1－p3の心心距離は3.5m、p2－p4の心心距離は3.5m、p3－p4の心心距離は4.0mである。p1は上端直径28cm、底径20cm、深さ13cmであり、p2は同35cm、22cm、15cm、p3は同38cm、22cm、27cm、p4は同40cm、17cm、25cmである。

また住居跡中央部分から、床面を掘り込んで置かれた土器が検出された。これは直径40cm、深さ10cmの皿状の掘りかたの中に、胴部を下に敷き、その回りに口縁部や残りの胴部を立て、約10cmの高さの壁を作ったもので、北久根山期の深鉢の底部を除いた部分を使っている。周辺には焼土や炭化物が認められないが、立てられた土器の内面が火を受けて赤変しているので土器炉と考えられる。

(2) 遺物

1・2号住居跡がほぼⅡ類土器群、4号住居跡が1類土器群、また5号住居跡がⅣ類土器群

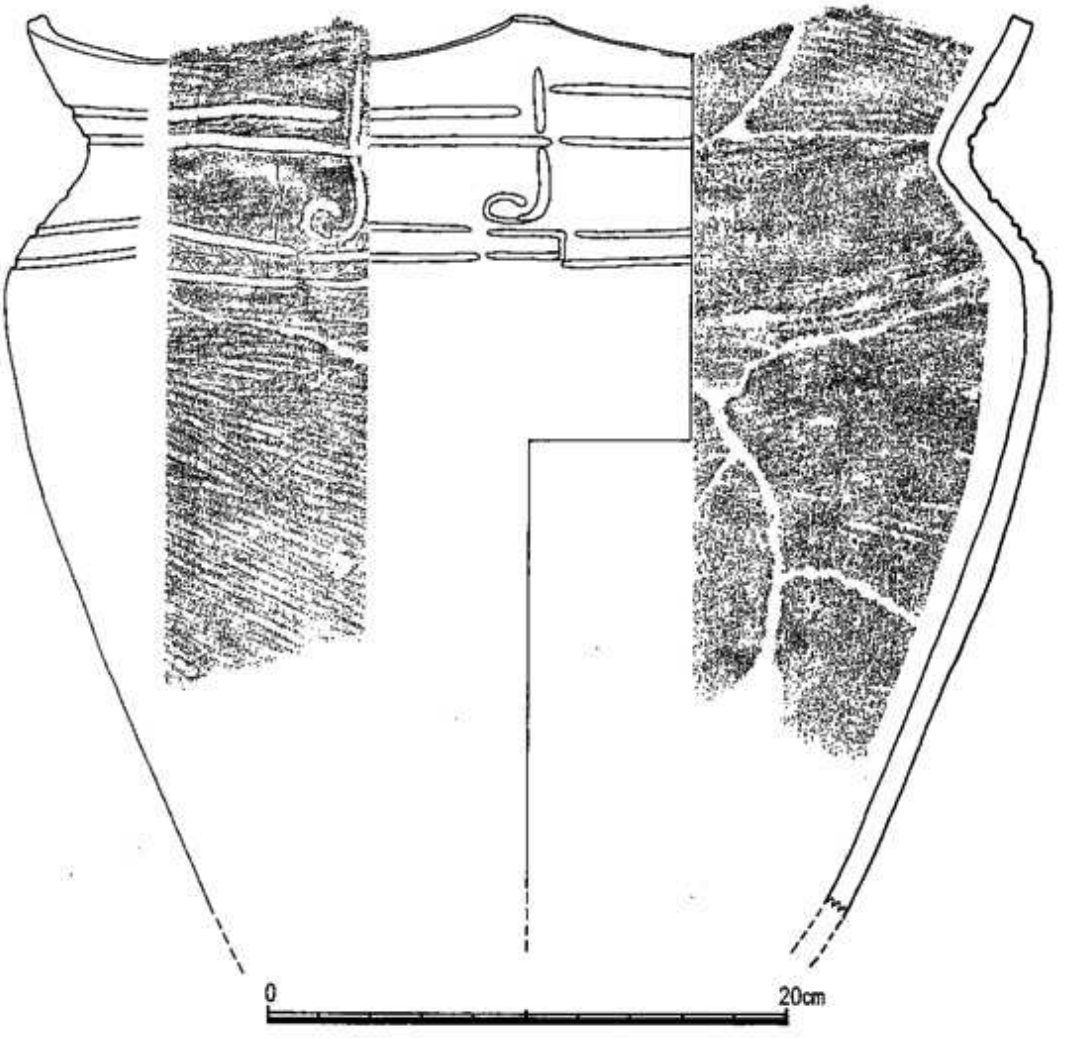


第57図　飯田二反田遺跡3号住居跡土器炉実測図

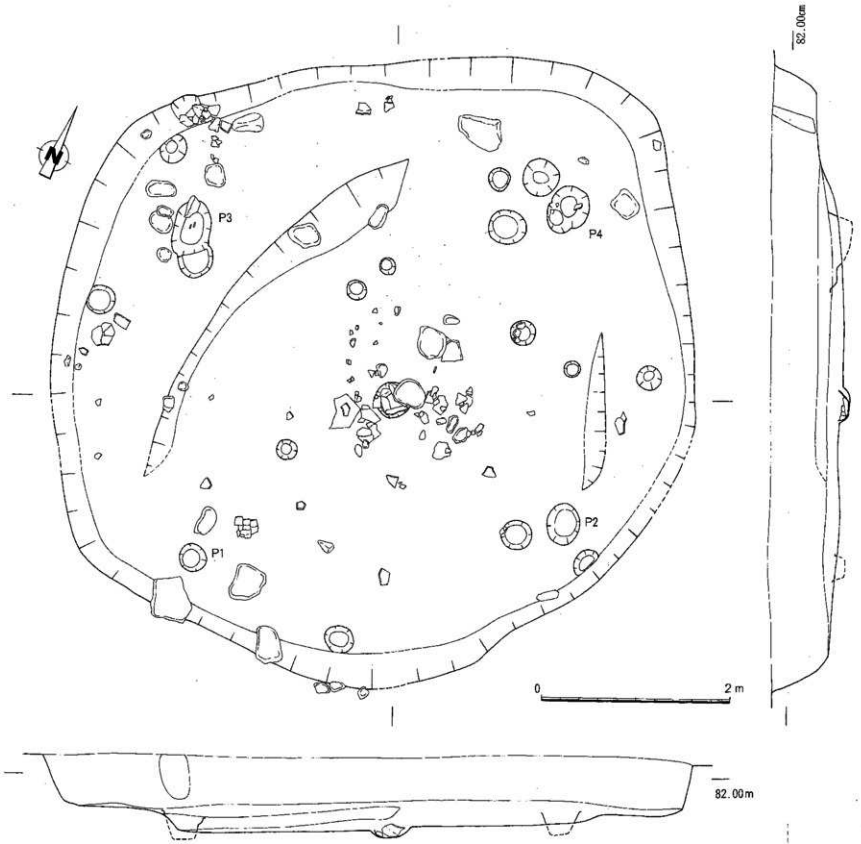
の単純であるのに対し、本住居跡の土器はⅢ類土器のほか、Ⅰ類有文深鉢Ａ１・２やⅡ類有文深鉢Ａ１・２等が出土している。しかし、土器炉に用いられているのがⅢ類有文深鉢Ｃ１であること、数量において多数をしめること等からⅢ類土器群が構成の主体であると言える。

有文鉢は、口縁部が外反気味に延びるⅢＢ類と新たに出現した口縁部と頸部との区別が明瞭なⅢＣ２類およびⅢＤ類がほぼ半数ずつ出土している。また無文深鉢にも同様の傾向がみられ、頸部の未発達な器形を呈するものは少なくなり、無文深鉢ⅢＡ類・ⅢＢ類が主体をしめる。底部はほとんどが平底であり、底径10cm前後と比較的小さなものが多い。

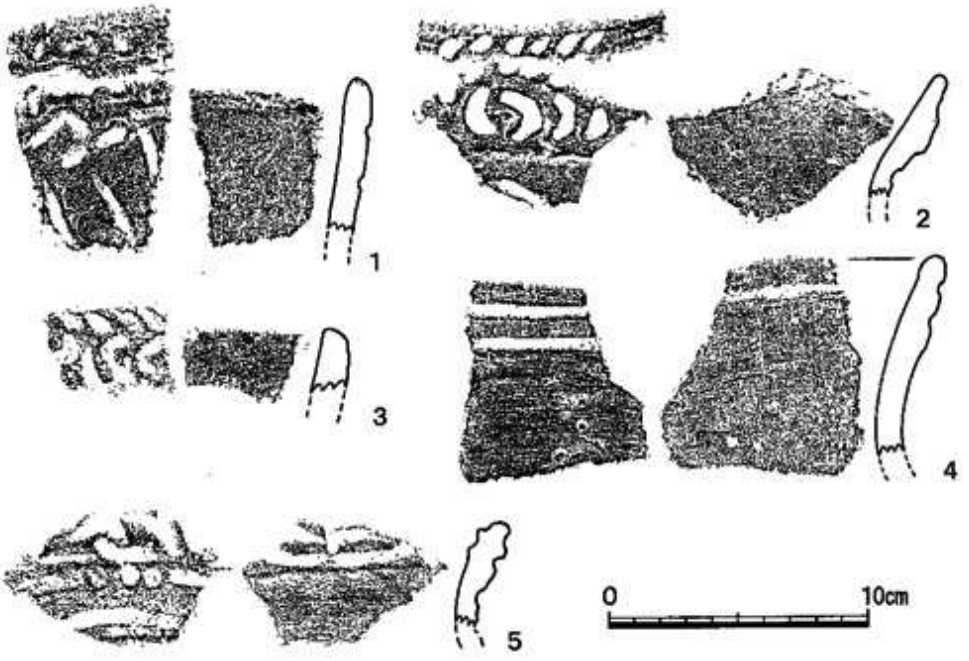
土器炉は口径38.5cm、器高35cm以上のⅢ類有文深鉢Ｃ１であり、ほぼ直線的に開く波状の口縁部から頸部で屈曲し、肩の張った胴部に至る形状である。波頂部の下にＪ字状とコ字状の沈線文を施し、その左右に２条単位の横走沈線を巡らすほか、口唇部にも沈線を加える。器面は巻貝状痕とナデ調整によるものである。



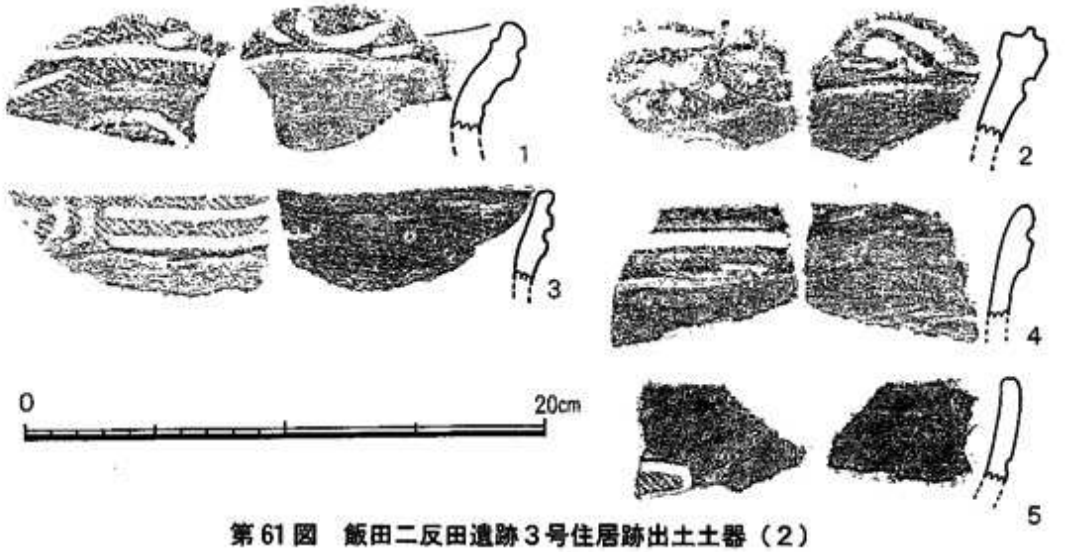
第58図　飯田二反田遺跡３号住居跡土器炉土器実測図



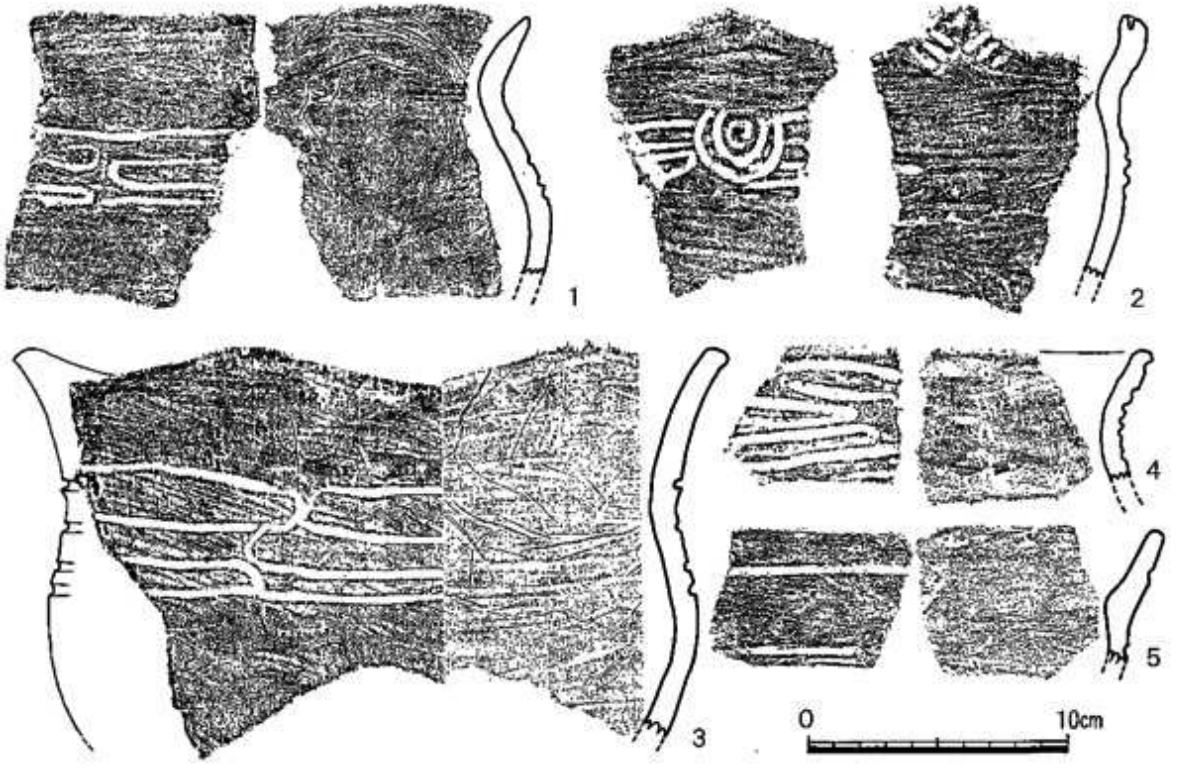
第59図　飯田二反田遺跡3号住居跡実測図



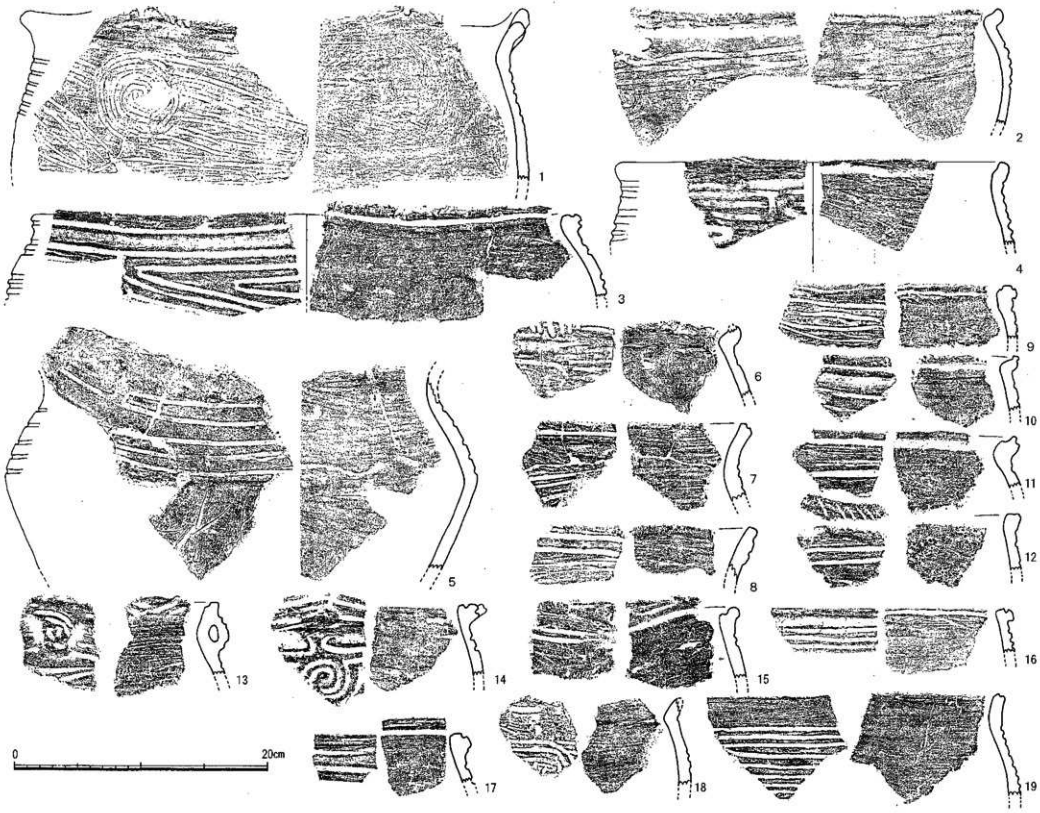
第60図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土土器（１）



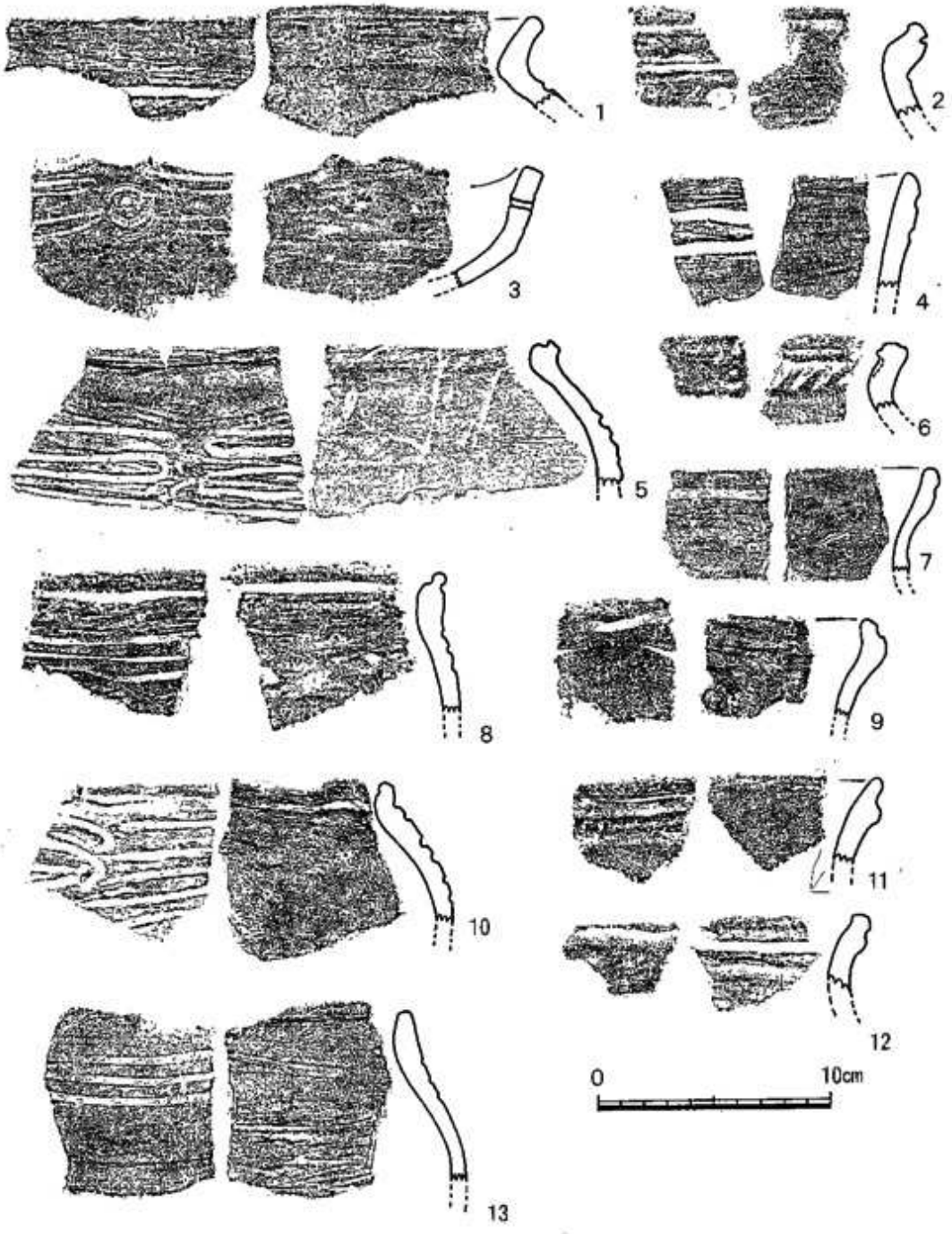
第61図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土土器（２）



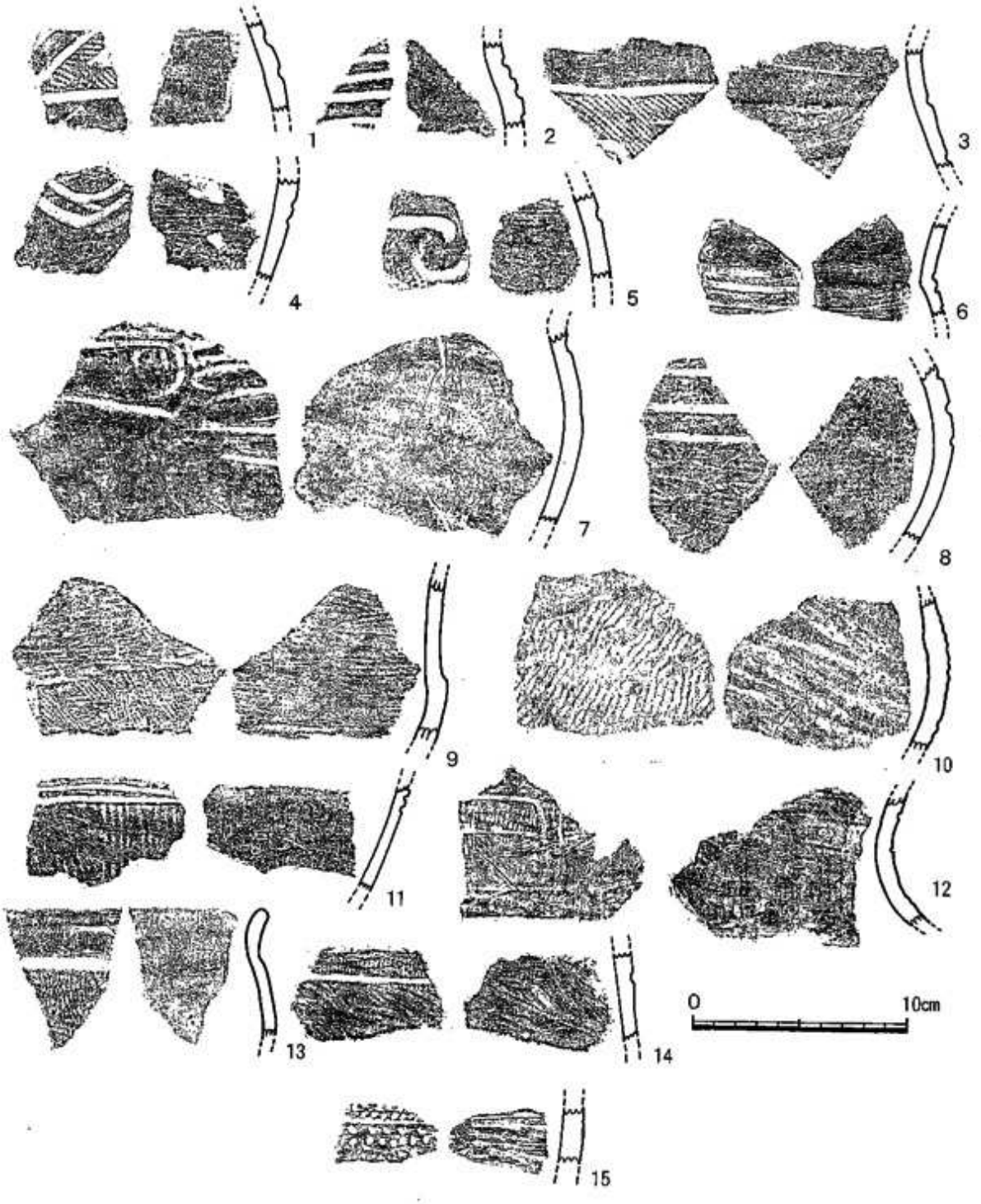
第62図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土土器（３）



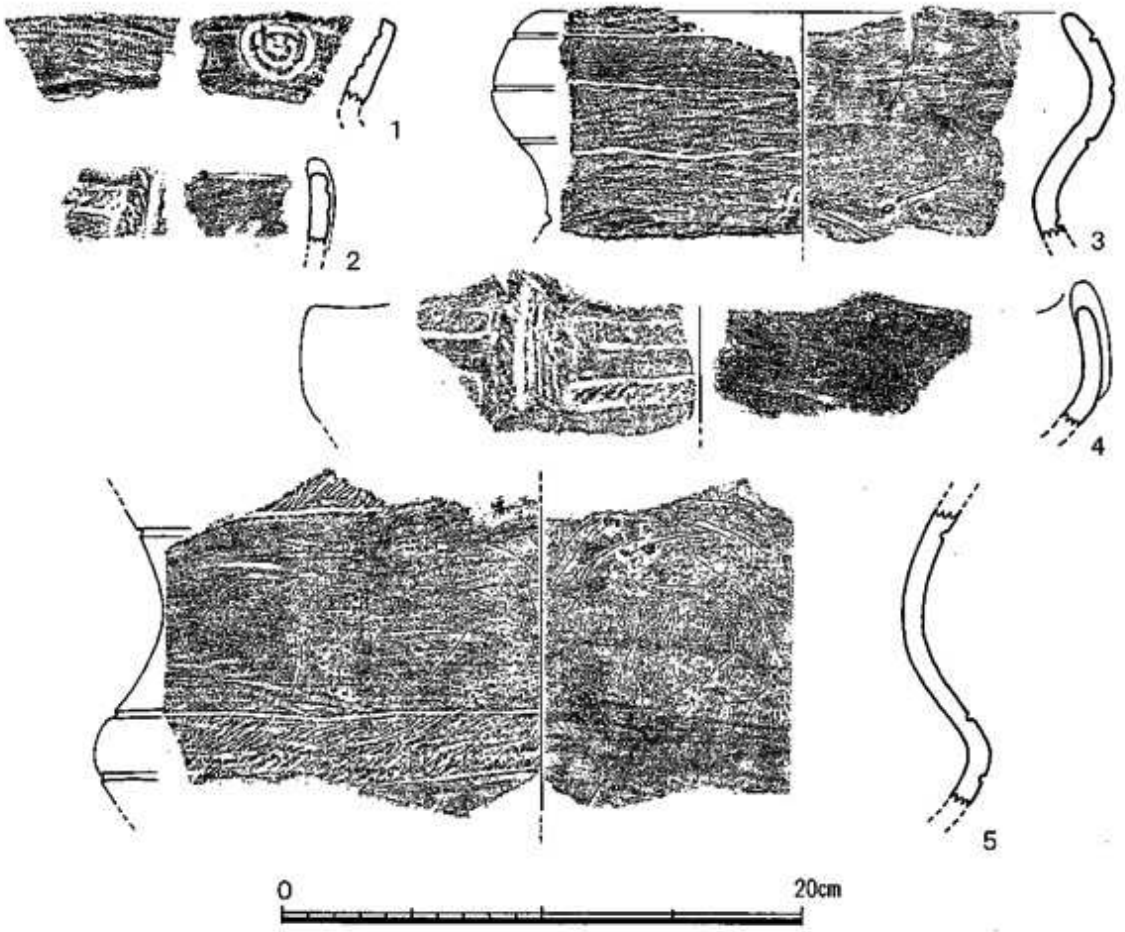
第63図　飯田二反田遺跡3号住居跡出土土器（4）



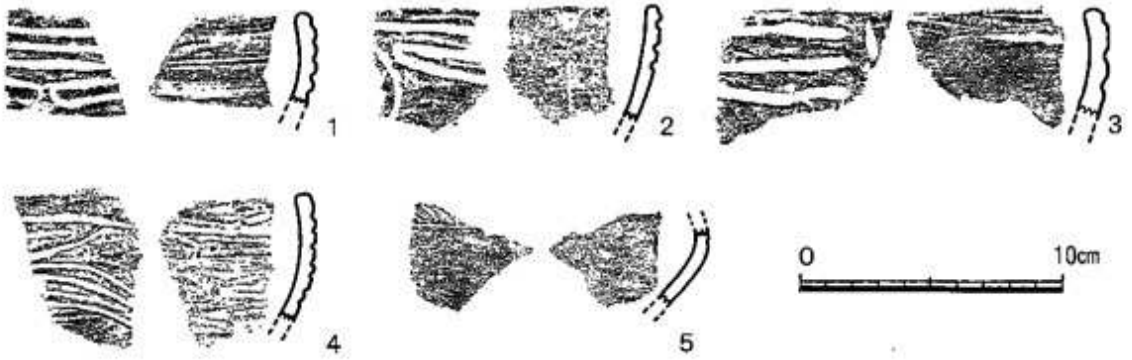
第64図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土土器（５）



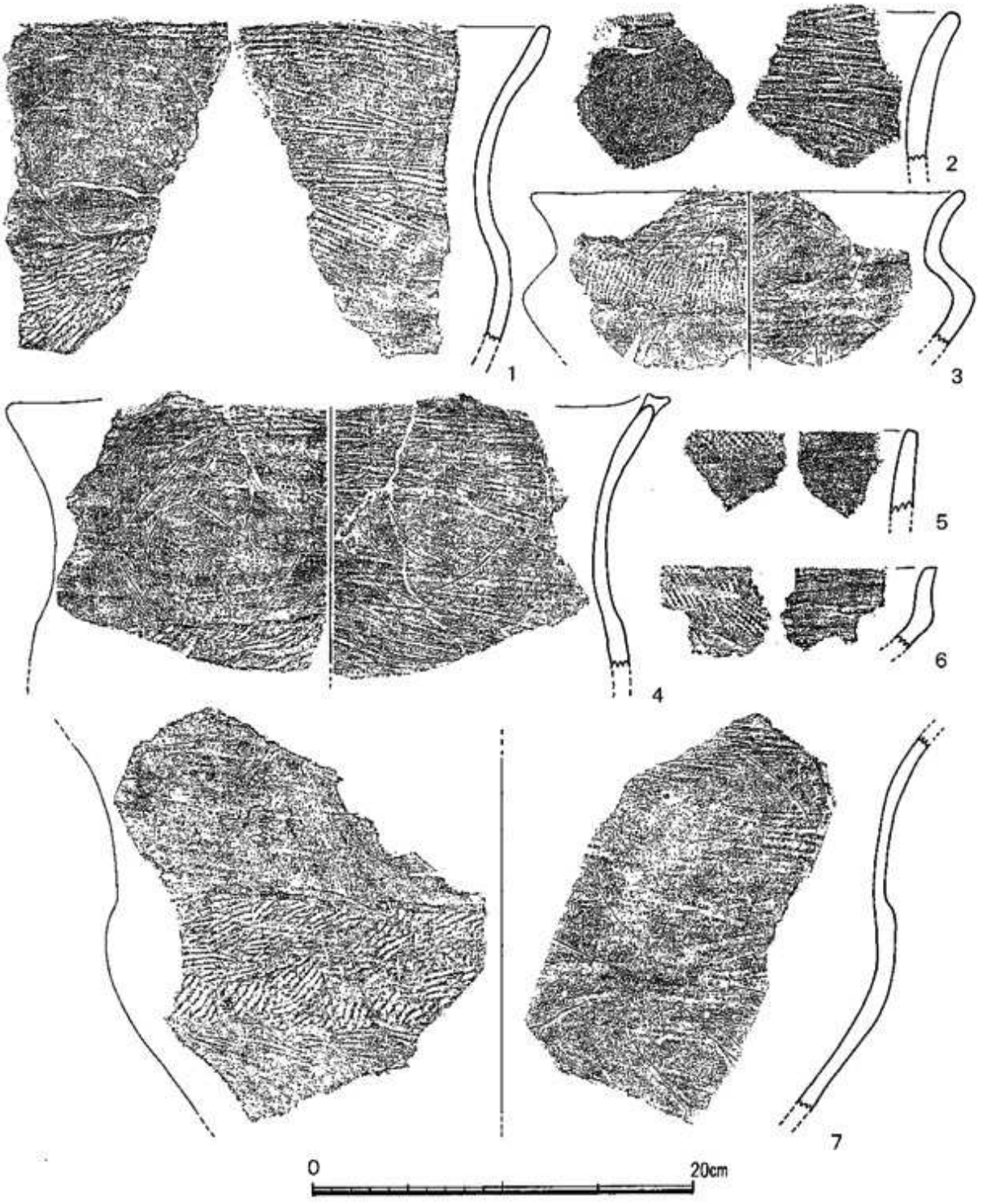
第65図　飯田二反田遺跡3号住居跡出土土器（6）



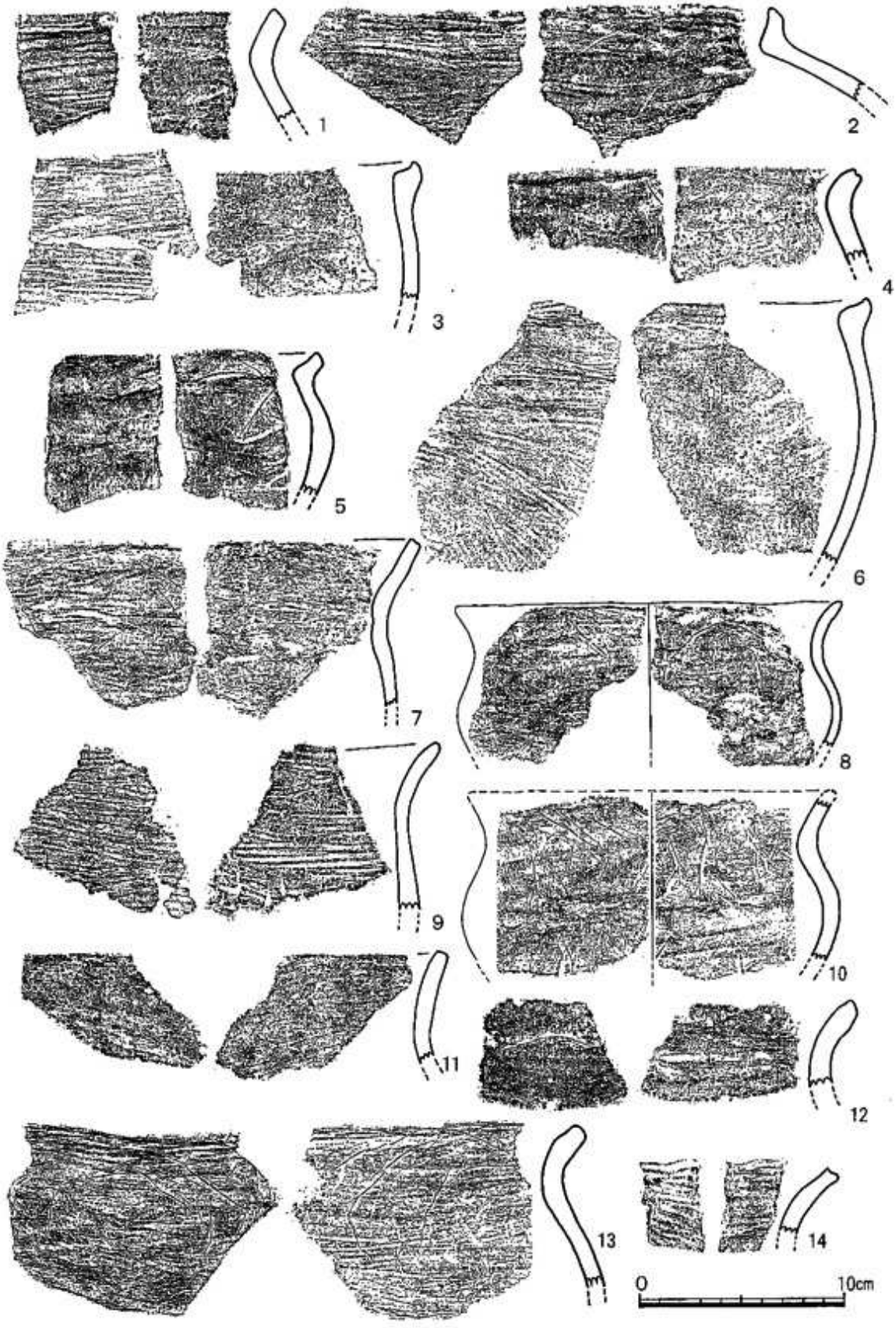
第 66 図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土土器(7)



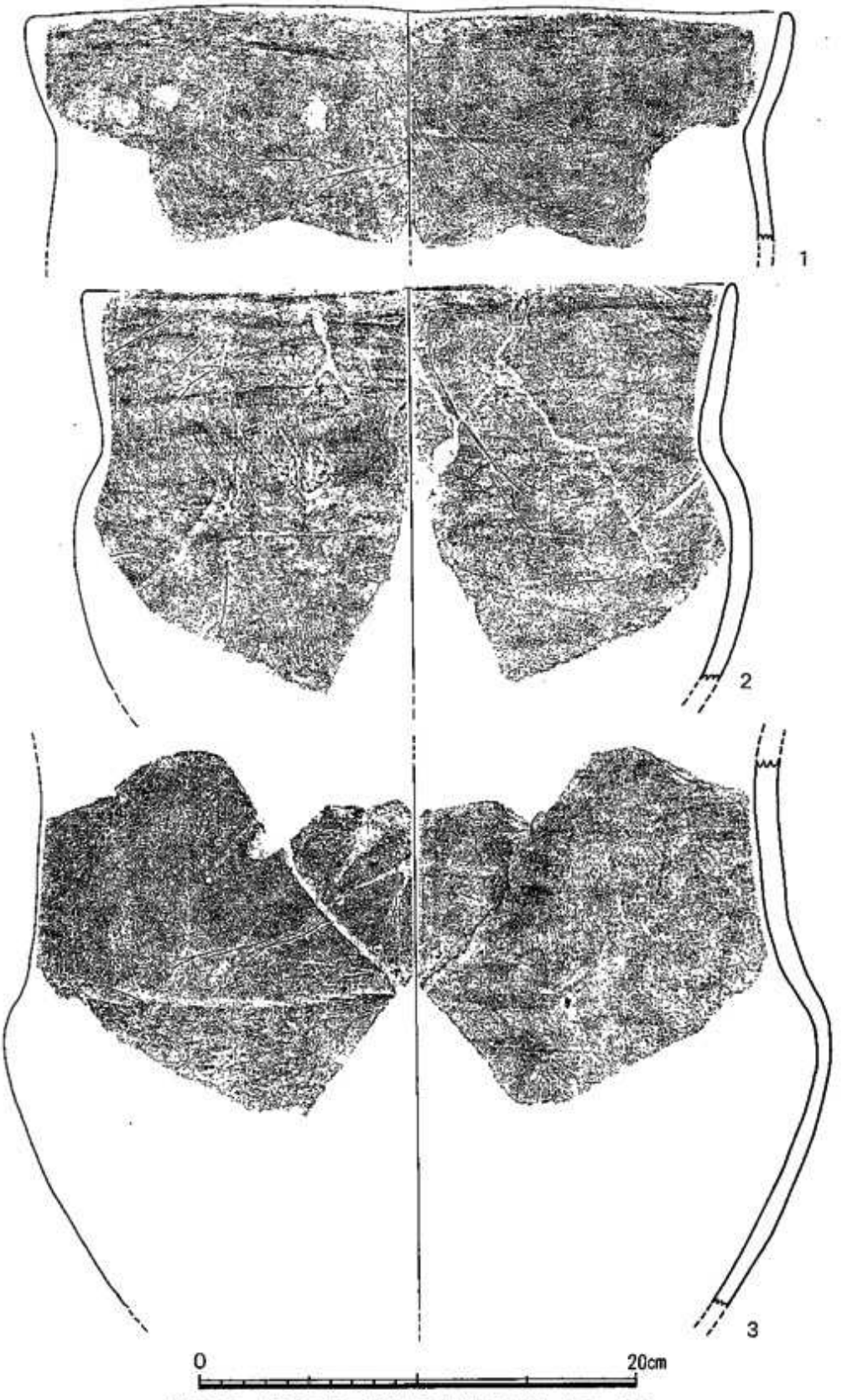
第 67 図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土土器（８）



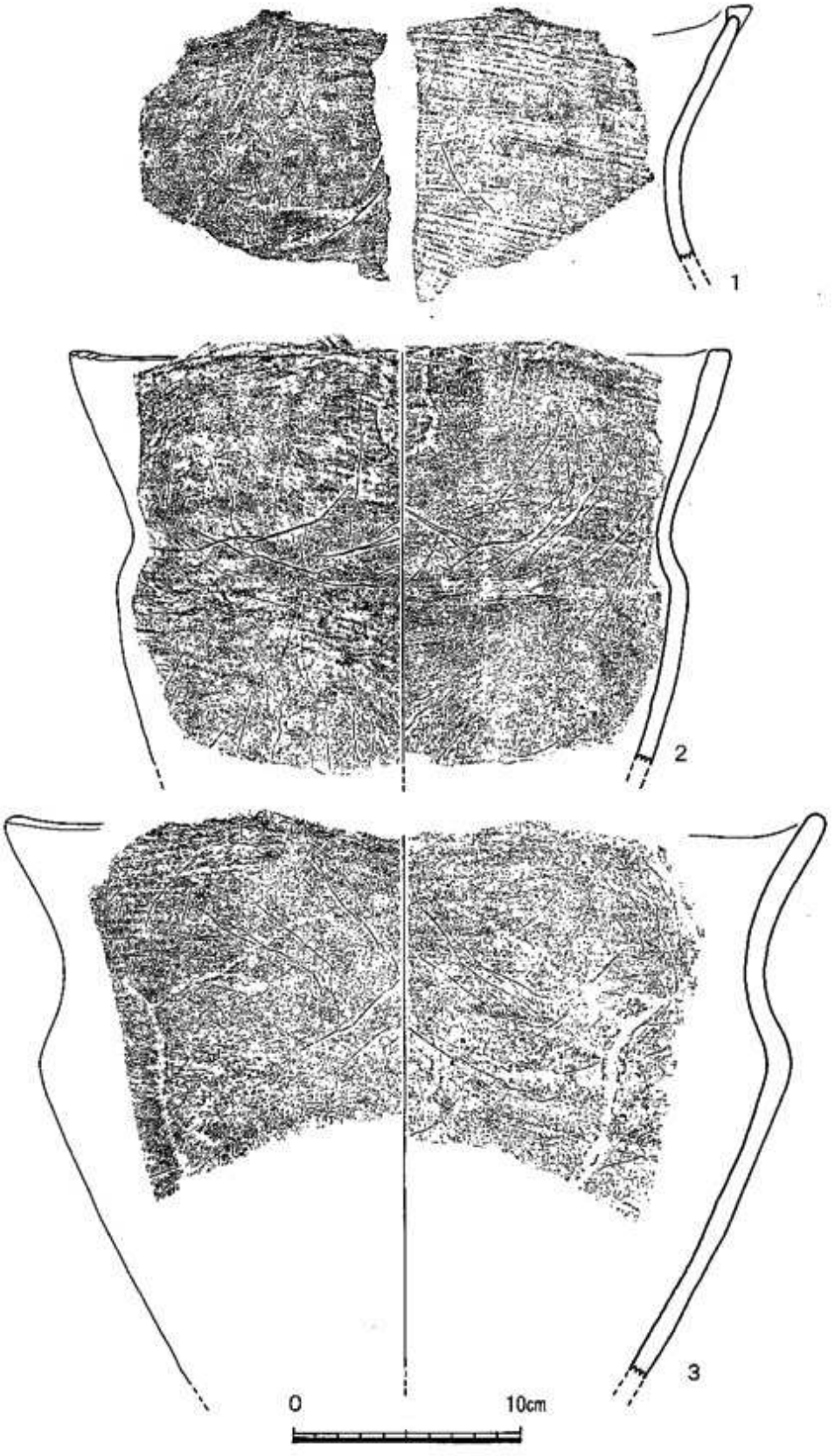
第68図　飯田二反田遺跡3号住居跡出土土器（9）



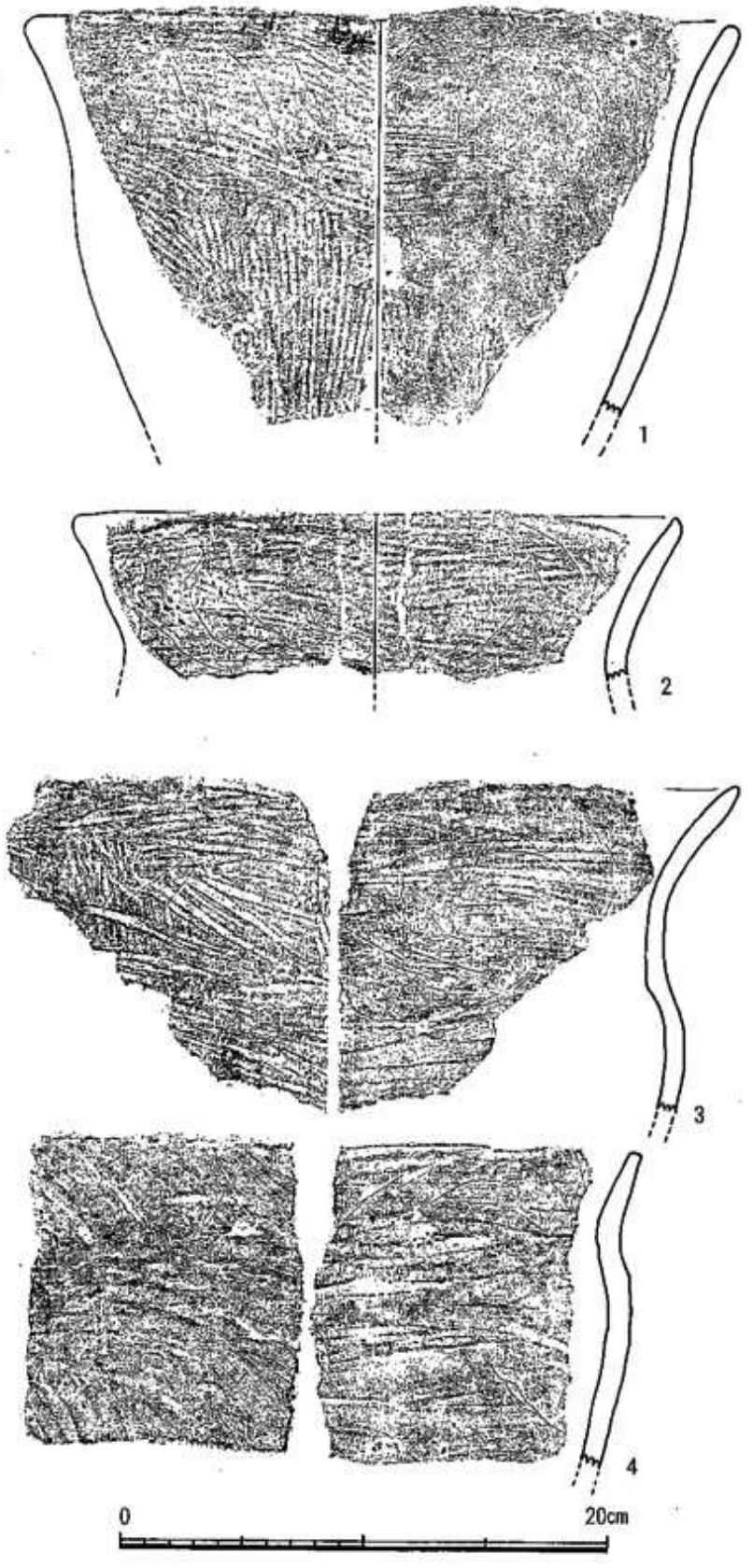
第69図　飯田二反田遺跡3号住居跡出土土器(10)



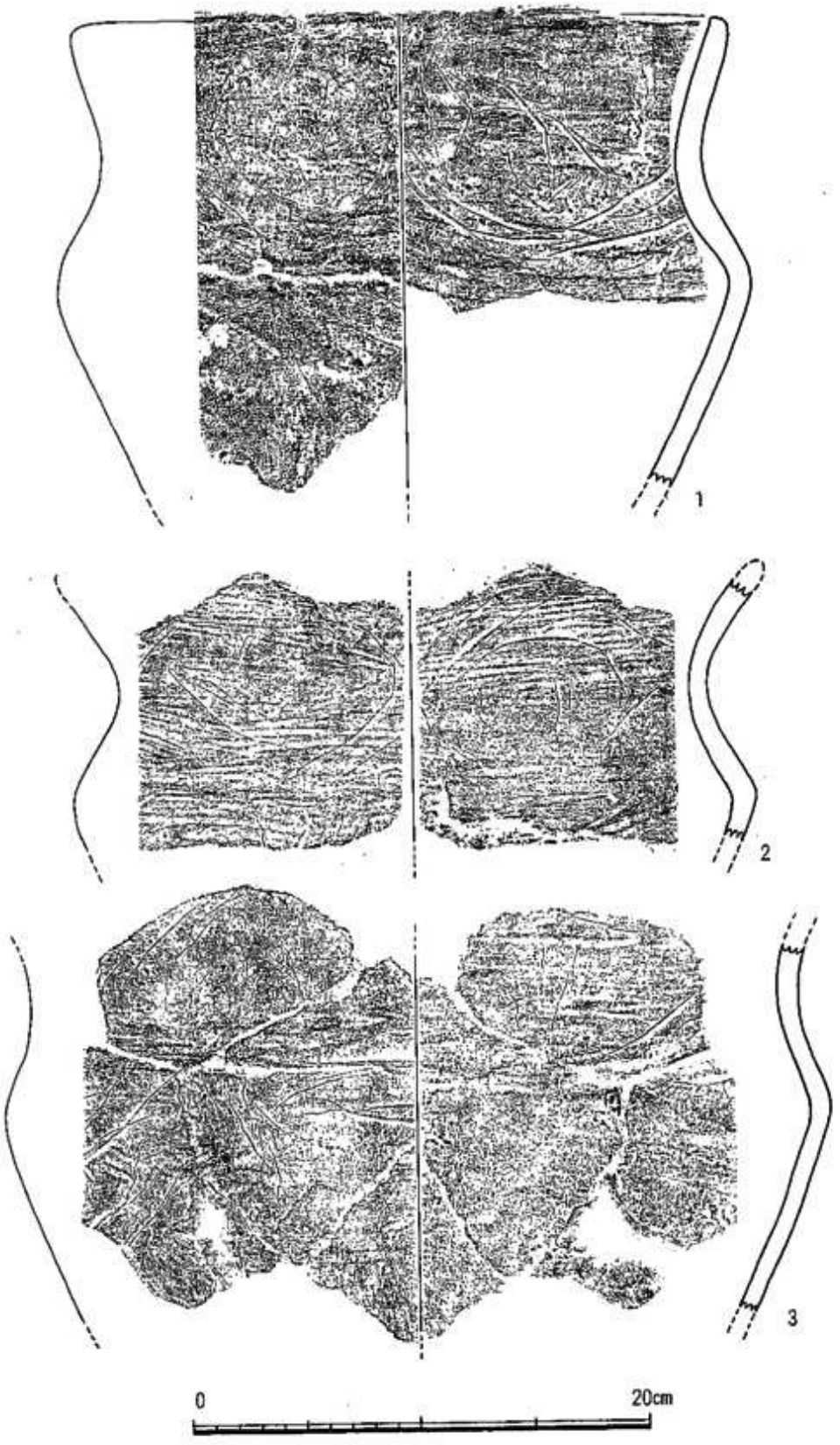
第 70 図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土土器（11）



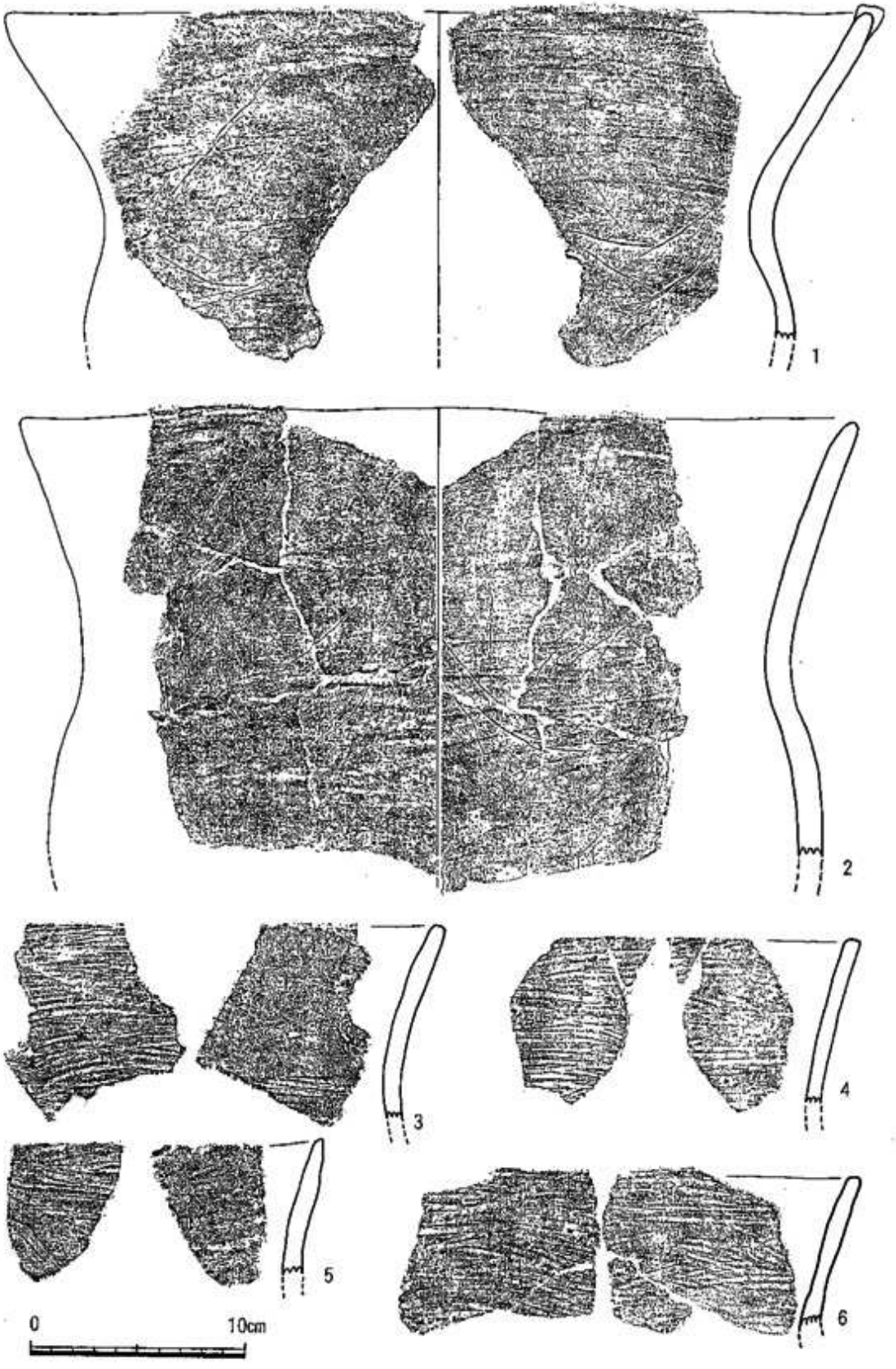
第71図　飯田二反田遺跡3号住居跡出土土器（12）



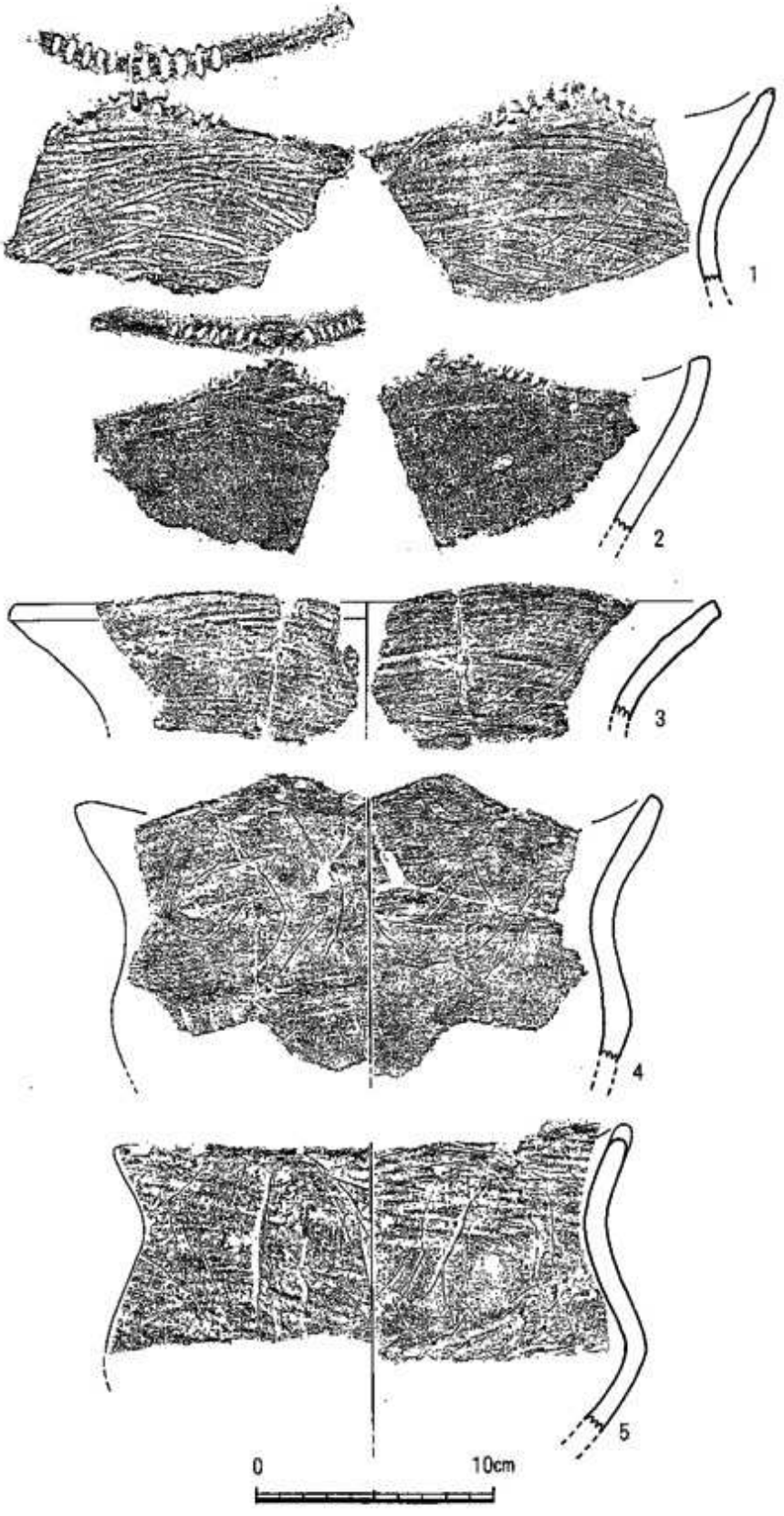
第 72 図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土土器（13）



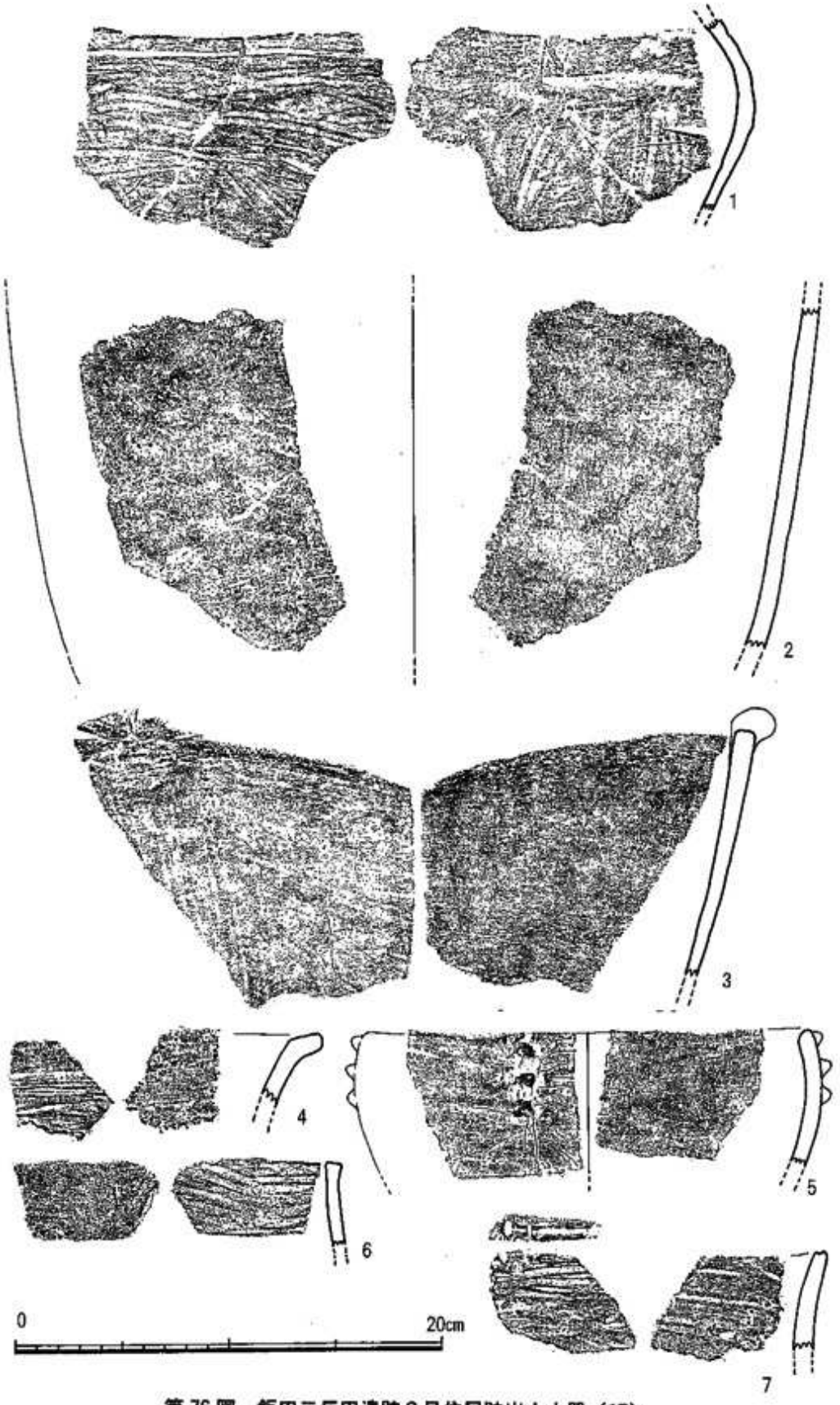
第73図　飯田二反田遺跡3号住居跡出土土器（14）



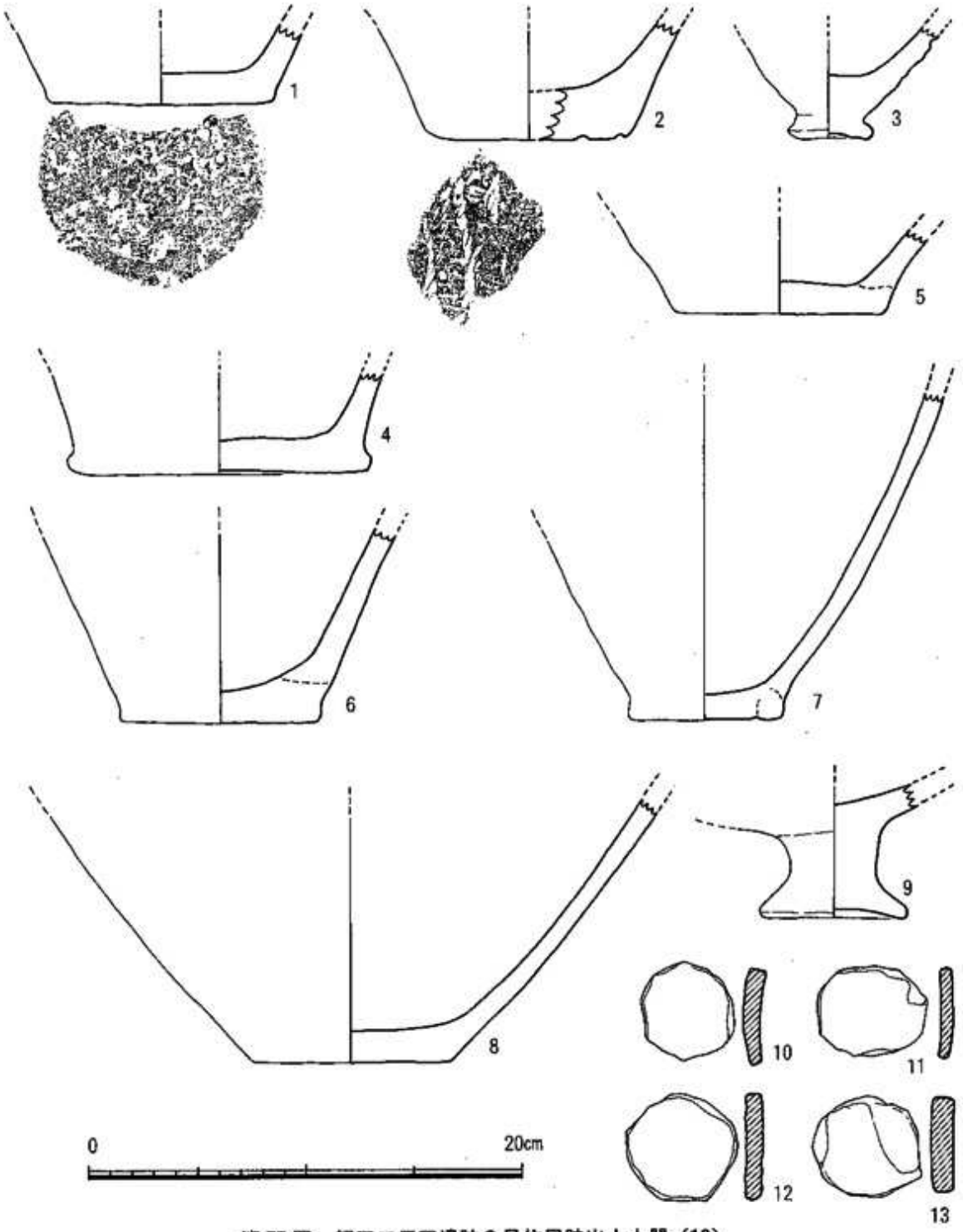
第 74 図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土土器（15）



第 75 図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土土器（16）



第76図　飯田二反田遺跡3号住居跡出土土器（17）



第77図　飯田二反田遺跡3号住居跡出土土器（18）

表7　飯田二反田遺跡3号住居跡出土土器観察表（1）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
60	1	3号住	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						I有文深鉢A 2
	2	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	3	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	4	〃	沈線文、条痕＋ミガキ＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	5	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○			〃
61	1	〃	沈線文、口唇部施文、磨消縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○	○	○			I有文深鉢A 1
	2	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○	○	○	○					〃
	3	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○	○	○					〃
	5	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○	○	○						〃
62	1	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						III有文鉢B
	2	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○			○			〃
	5	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
63	1	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						III有文深鉢B
	2	〃	条痕＋ナデ	条痕	○	○		○						III有文深鉢A
	3	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○				○		〃
	4	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	5	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○		○				III有文深鉢B
	6	〃	沈線文、口唇部施文、条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						III有文深鉢A
	7	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○	○						III有文深鉢B
	8	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	9	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○						〃
	10	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○	○	○						〃
	11	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	12	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○			○		〃
	13	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					I有文深鉢A 2
	14	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○	○	○	○					〃
	15	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	16	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○						〃
	17	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	18	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	19	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
64	1	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○	○	○	○		五有文鉢B
	2	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○	○	○	○					〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○	○	○	○			〃
	4	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	5	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○	○	○				〃
	6	〃	口唇部施文、摩滅	沈線文、ナデ	○	○		○	○					〃
	7	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	8	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○			○		〃
	9	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	10	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	11	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○	○	○	○			○		〃
	12	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	13	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
65	1	〃	沈線文、磨消縄文、赤色顔料、ナデ	ナデ	○	○		○	○					I有文深鉢A 1
	2	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○	○	○	○					〃
	3	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○	○	○						〃
	4	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	5	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○	○	○	○		○		〃
	6	〃	沈線文、磨消縄文、赤色顔料、ミガキ	巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	○	○		○						〃
	7	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					III有文深鉢B
	8	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○	○	○						〃
	9	〃	縄文、巻貝条痕＋ナ	条痕＋ナデ	○	○	○	○		○				III有文深鉢D
	10	〃	縄文、ナデ＋ミガキ	ナデ	○	○		○	○					〃
	11	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ＋ミガキ	○	○	○	○						III有文深鉢C 2
	12	〃	沈線文、疑縄文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○		○				〃
	13	〃	疑縄文、ナデ	ナデ	○	○		○	○	○				〃
	14	〃	沈線文、疑縄文、巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	15	〃	沈線文、列点文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃

表8　飯田二反田遺跡3号住居跡出土土器観察表（2）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
66	1	3号住	疑縄文、巻貝条痕＋ナデ	沈線文、ナデ	○	○		○	○					Ⅱ有文深鉢C2
	2	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	3	〃	沈線文、疑縄文、巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ＋ミガキ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	5	〃	沈線文、磨消縄文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
67	1	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	2	〃	沈線文、条痕＋ナデ	刷毛	○	○		○	○					〃
	3	〃	沈線文、条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○					○			〃
	4	〃	沈線文、条痕＋ナデ	巻貝条痕	○	○		○						〃
	5	〃	沈線文、磨消縄文＋ミガキ	ナデ	○	○		○	○	○				〃
68	1	〃	縄文、条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					Ⅱ有文深鉢D
	2	〃	疑縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	縄文、条痕＋ナデ＋ミガキ	ナデ＋ミガキ	○	○	○	○				○		〃
	4	〃	縄文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	5	〃	縄文、ナデ	ナデ	○	○	○	○						〃
	6	〃	縄文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○				○		〃
	7	〃	縄文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
69	1	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○			○			Ⅲ無文深鉢B
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○		○			〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	5	〃	巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	条痕＋ナデ	○	○		○	○			○		〃
	6	〃	巻貝条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○						〃
	7	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	8	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○						Ⅲ無文深鉢
	9	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					Ⅲ無文深鉢B
	10	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○					Ⅲ無文深鉢
	11	〃	条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						Ⅲ無文深鉢B
	12	〃	条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	13	〃	巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	○	○		○	○					〃
	14	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
70	1	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○		○				〃
71	1	〃	ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					Ⅲ無文深鉢A
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
72	1	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ケズリ＋ナデ	○	○	○	○	○				補修孔	Ⅲ無文深鉢B
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ケズリ＋ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
73	1	〃	条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○	○					Ⅲ無文深鉢A
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
74	1	〃	巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	5	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	6	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
75	1	〃	口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ケズリ＋ナデ	○	○			○					〃
	2	〃	口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	4	〃	ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○	○					〃
	5	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
76	1	〃	沈線文、疑縄文、巻貝条痕＋ナデ	磨滅	○	○		○	○					
	2	〃	ケズリ＋ナデ＋ミガキ	ナデ	○	○		○	○					
	3	〃	口唇部縄文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					
	4	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					
	5	〃	浮文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ＋ケズリ	○	○	○	○		○				Ⅲ無文浅鉢
	6	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						
	7	〃	口唇部縄文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						

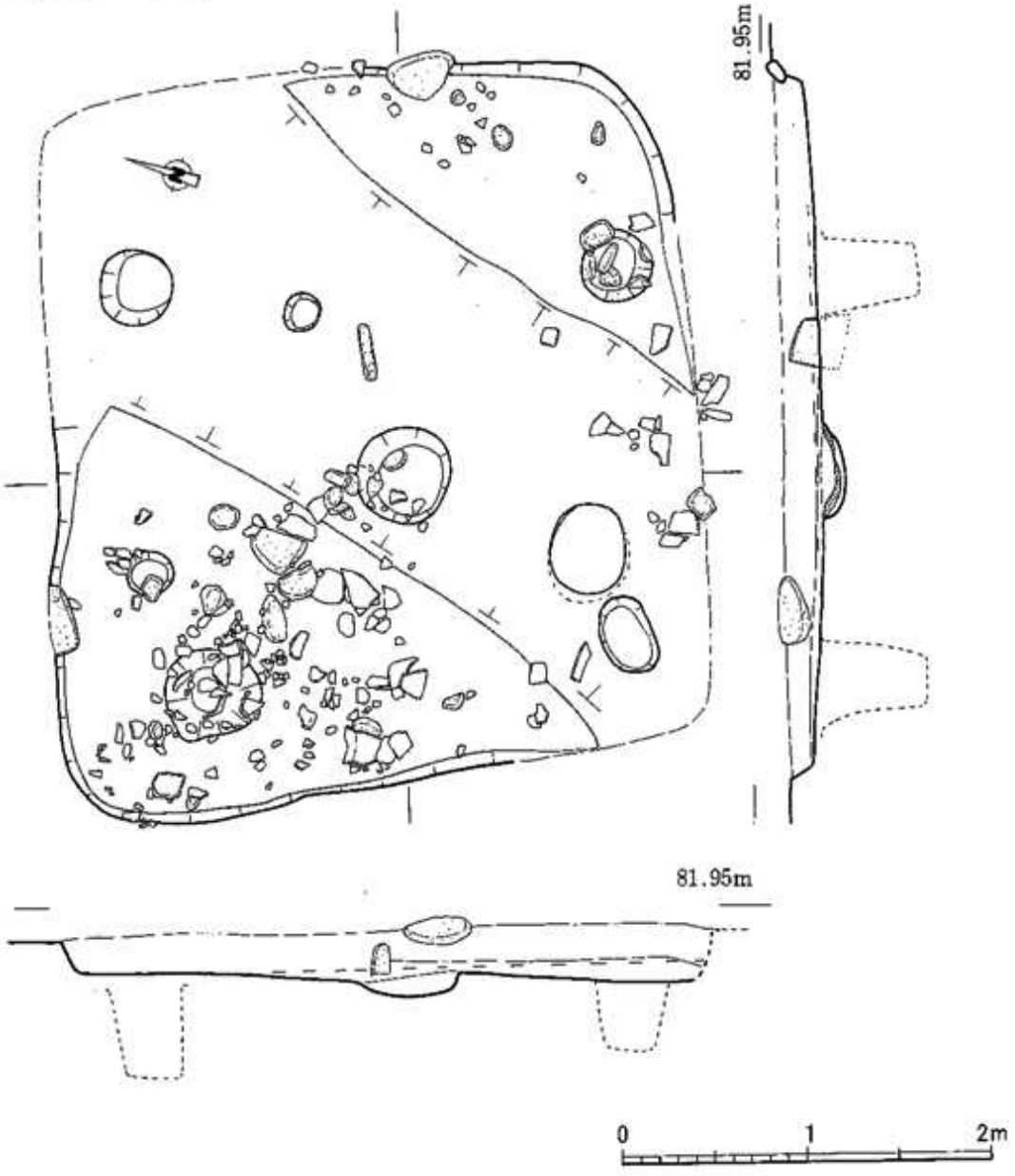
表9　飯田二反田遺跡3号住居跡出土土器観察表（3）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
77	1	3号住	ナデ	ナデ	○	○		○	○					底部
	2	〃	網代圧痕、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	3	〃	沈線文、指オサエ	指オサエ、ナデ	○	○		○						〃
	4	〃	摩滅	摩滅	○	○		○	○					〃
	5	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○	○	○			〃
	6	〃	条痕＋ナデ	摩滅	○	○		○	○					〃
	7	〃	ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	8	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○	○				〃
	9	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○	○	○			〃
	10	〃	摩滅	摩滅	○	○		○	○		○	○	接合資料	
	11	〃	ミガキ	ミガキ	○	○		○	○				〃	
	12	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○					〃	
	13	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○				〃	

5．4号住居跡

(1) 遺　構

調査区の中央やや東側に位置する方形プランの住居跡であるが、北西部から南東コーナーにかけて1号溝によって切られ本来の状況を留めない。しかし、東北隅部と南西隅部分は残存しており、全体の復原は可能である。この場合、東西長4.0m、南北長3.3mとやや東西に長い方形プランとなる。ほぼ中央部分に直径0.55m、深さ0.1mの素掘りの地床炉を配置し、内部には灰層と焼土が堆積する。



第78図　飯田二反田遺跡4号住居跡実測図

主柱穴は４本であり、掘方は直径0.4～0.5m、深さ0.4～0.6mを測り、内部に控えとも考えられる小礫が残るものもある。柱穴の東西間の心心距離は2.2m、南北間は2.5mであり、平面プランと異なり南北間がやや長い。

炉跡の東側約0.3mの所に、幅4cm、長さ32cm、高さ17～28cm余りの偏平な石が設置され、上面は水平にならないがあたかも肘掛けを想定させるものである。同様の例は１号住居跡でも認められ、肘掛けではないとしても炉と関係する施設であることは間違いないであろう。また、前者の場合性別による住居内部の機能分化を示すものとして重要な施設となる。

(2) 遺　物

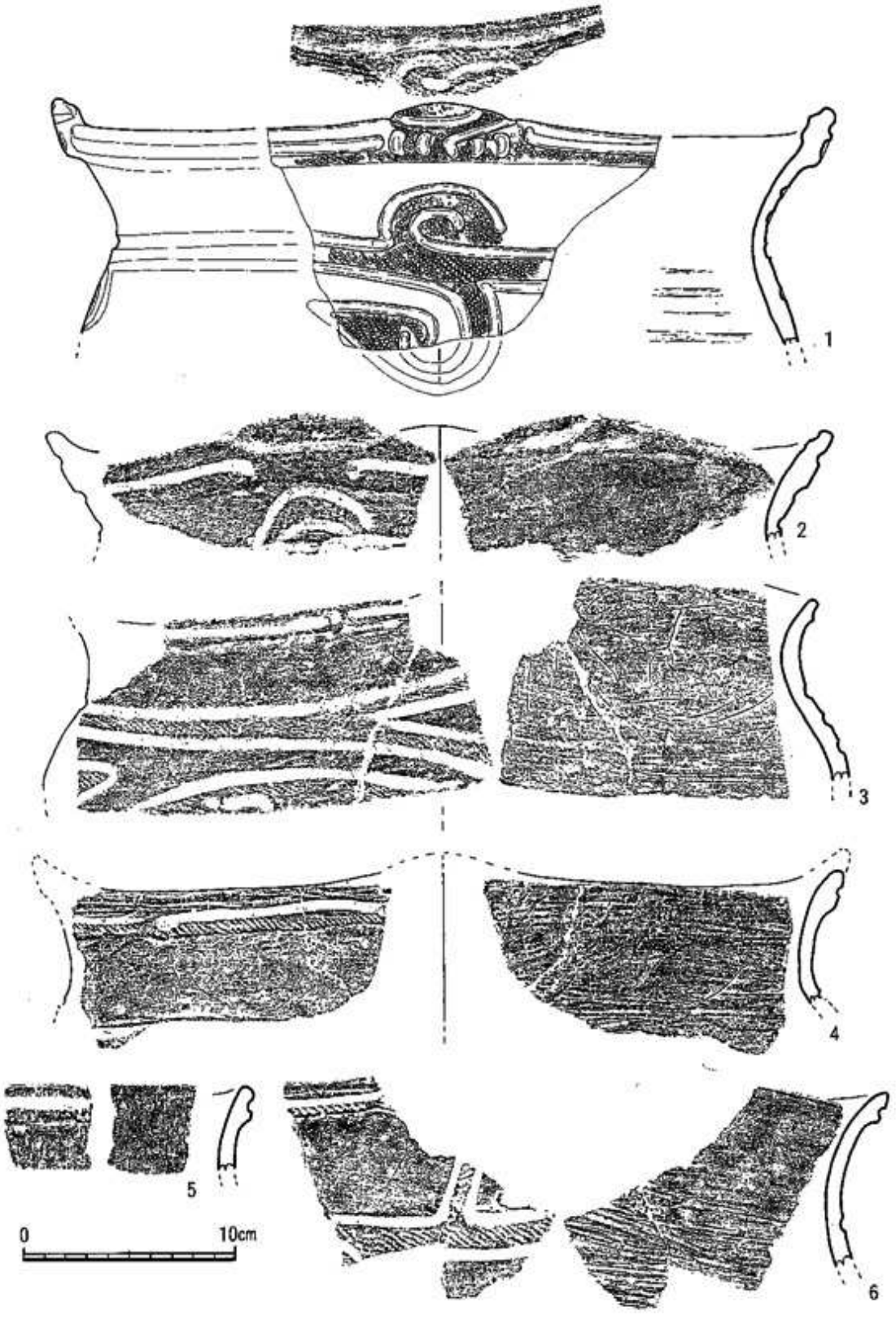
土器を中心とする遺物の多くは北西部に集中しほぼ廃棄時のままと考えられるが、この他では南東隅付近にも若干分布するものの原位置を保つものは少ない。土器は、幅広の沈線と縄文からなる磨消縄文に代表されるＩ類（小池原上層式）のほぼ単純資料であり、有文・無文の鉢、深鉢、浅鉢等のセットが揃う。

有文深鉢は、波状口縁を呈し頸部が締まり胴部の張り出す器形をとり、磨消縄文による文様をもつＩＡ１類が過半数を占め、沈線文のみのＩＡ２類や口縁部に肥厚帯のないＩＢ類は少数である。ＩＡ類の外面はヘラミガキを主とする丁寧な器面調整であるが、ＩＢ類は内外面とも巻貝等の条痕調整による。有文鉢は深鉢と同様の器形で磨消縄文によるＩＡ１類が主体を占め、沈線文のみのＩＡ２類やＩＢ類はやや少ない。また、深鉢に比べ口径が30cm以内とやや小さく頸部の延びも短くなる。

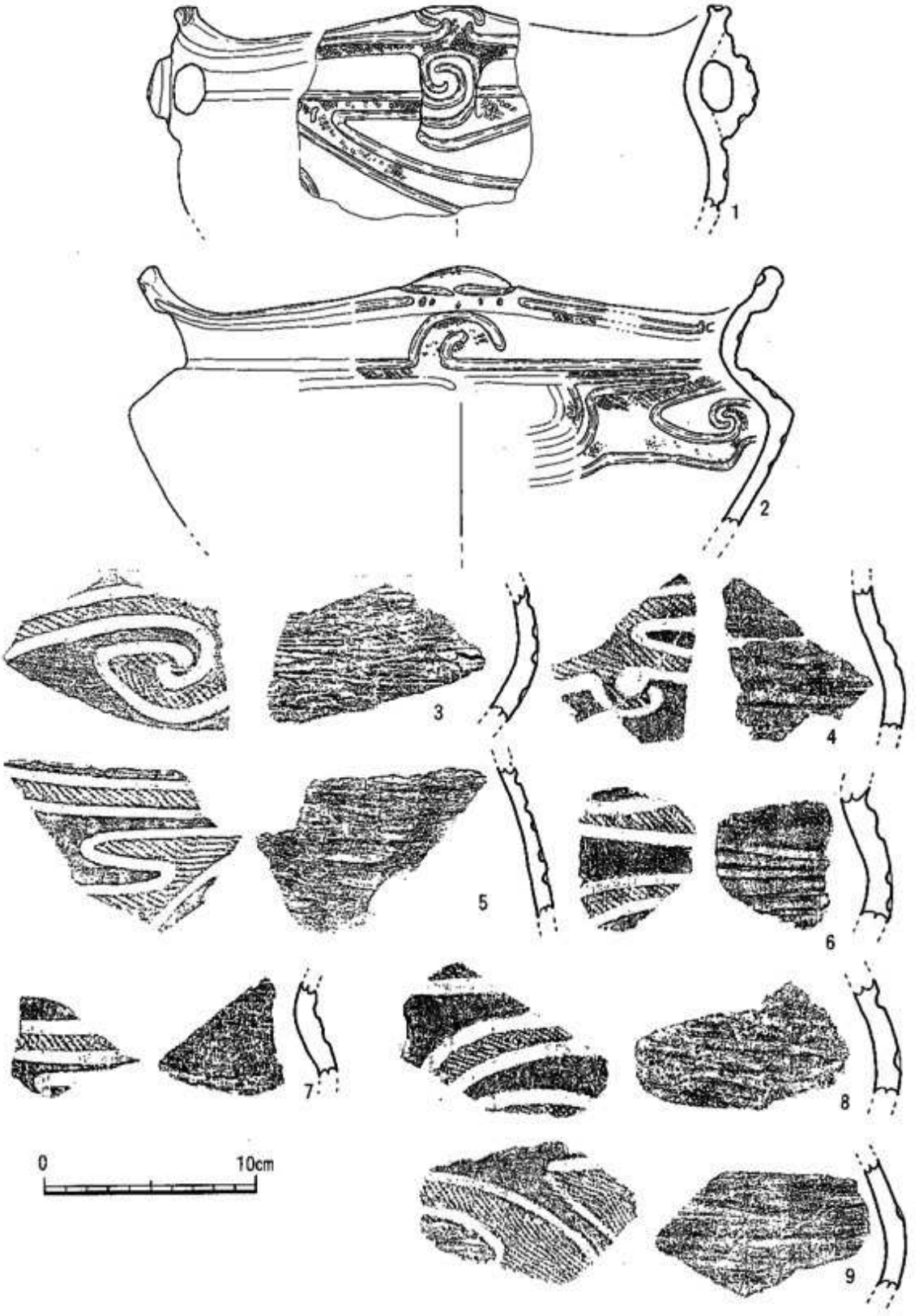
有文浅鉢は、大きく外に開く口縁部から緩くカーブを描きながらすぼまり底部に至る器形を示し、外面に磨消縄文による渦文等の文様を描くＩＡ類が多い。口縁部の四方にやや低い隆起部を設けるものや、縄文の代替に巻貝疑似縄文を施すものもある。縄文をもたず沈線文様のみのＩＢ類も少数ではあるが存在し、器形等は前者とほぼ同じである。

無文土器はいずれも巻貝等の条痕調整によるものであるが、波頂部に一部施文するものもこの中に含めることとする。無文深鉢は波状口縁を呈するものがほとんどであり、平縁のものは存在するとしても非常に少数であろう。波頂部に短沈線文などの文様をもつものをＩＡ１類、全く施文のないものをＩＡ２類とするが、後者が多数であり大小が認められる。この他、無文鉢や皿、浅鉢などが出土している。

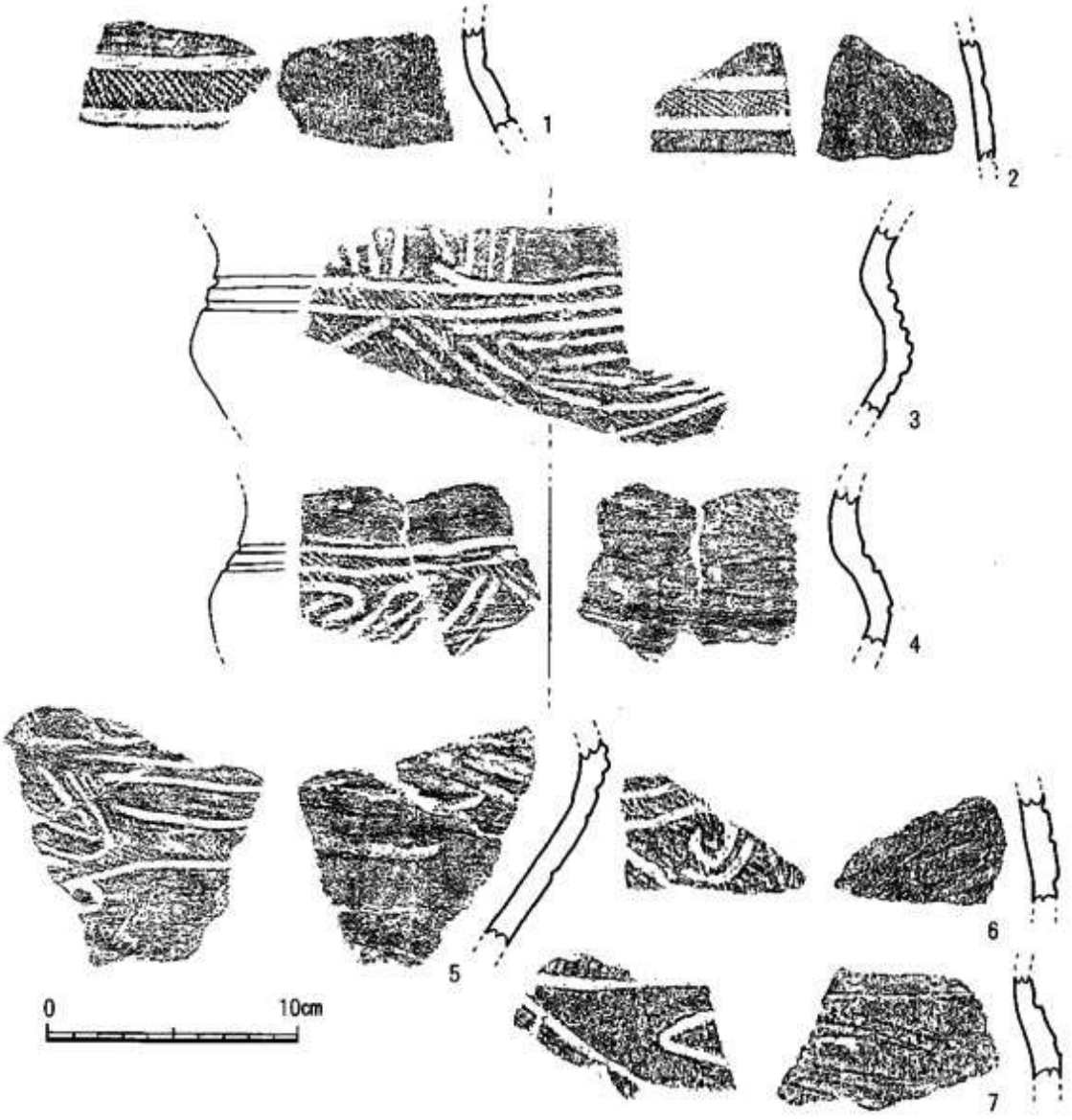
底部は、平底および僅かに窪む平底と高台状を呈する上げ底が認められ、両者は各々ほぼ半数を占めるようである。また、底部径が15cm前後の比較的大型のものがある程度存在することや、アンペラやスダレ状圧痕など編物痕跡を残すものも出土している。



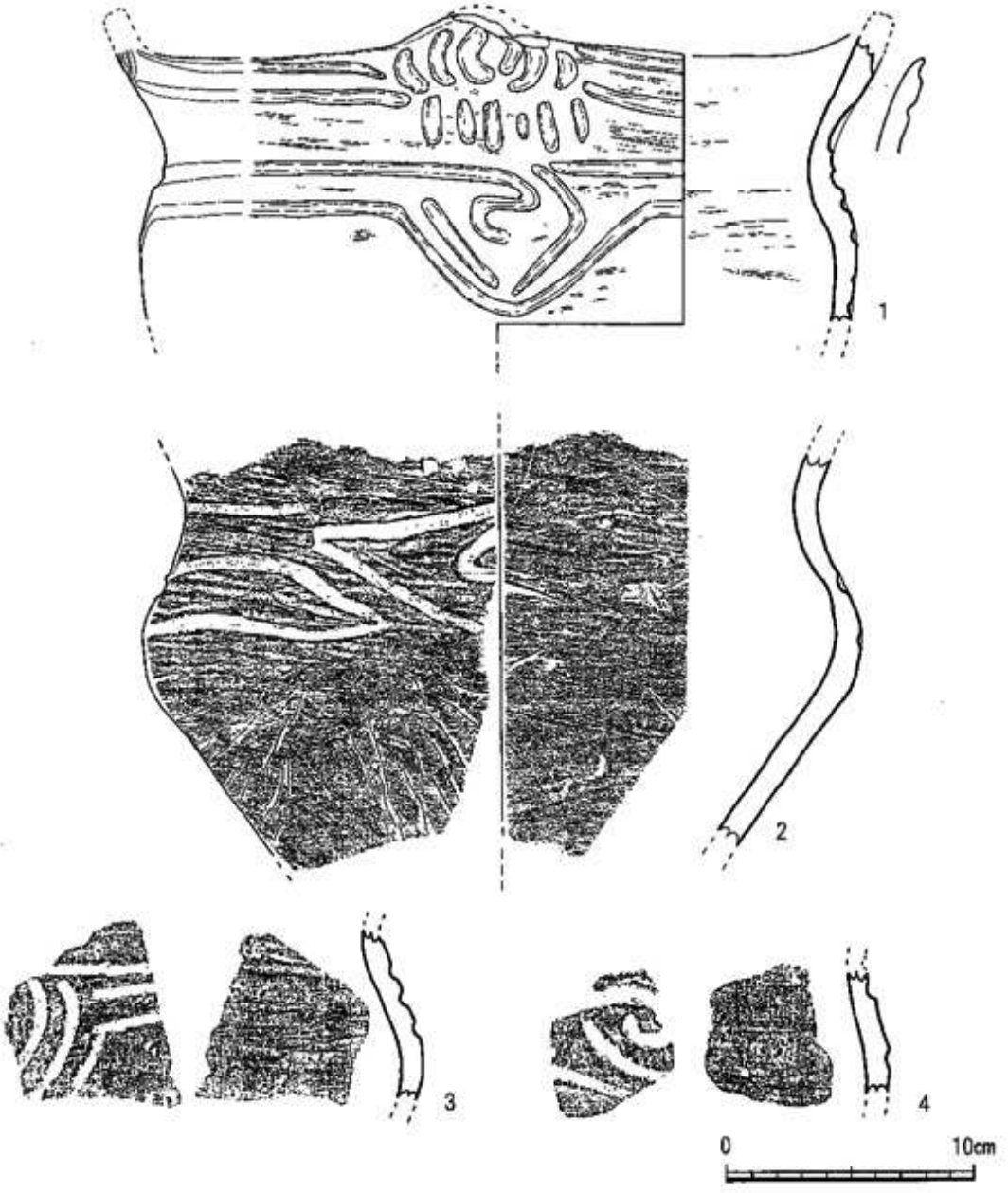
第79図　飯田二反田遺跡4号住居跡出土土器（1）



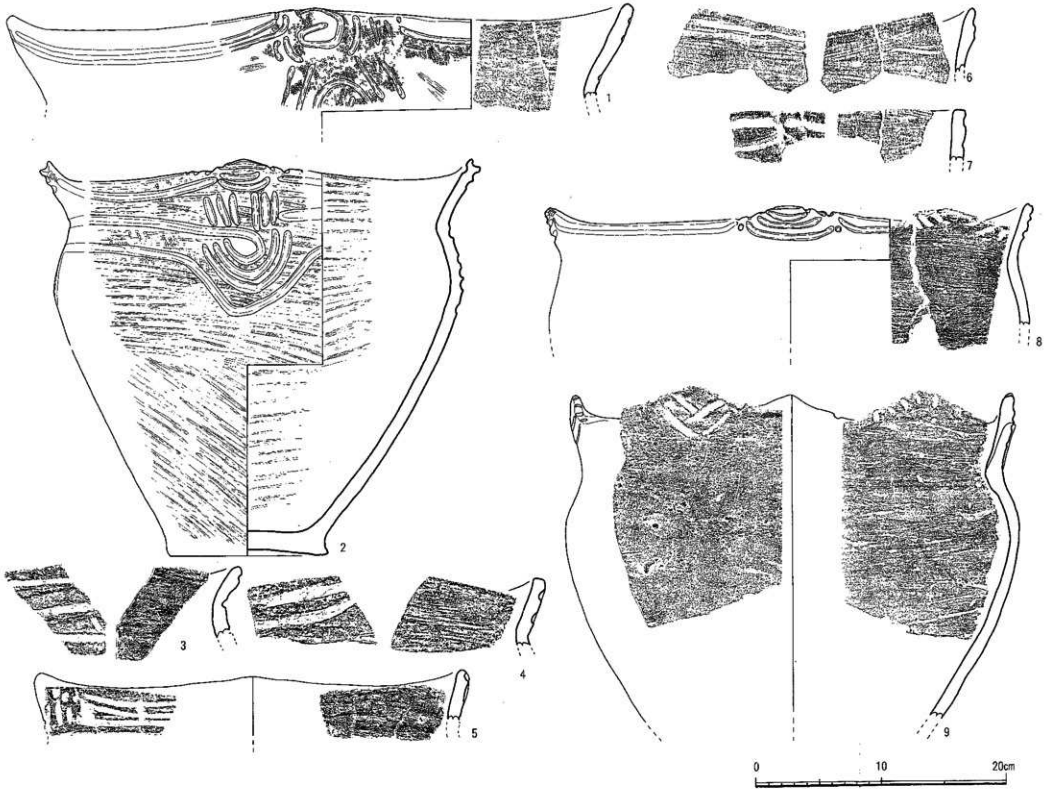
第80図　飯田二反田遺跡4号住居跡出土土器（2）



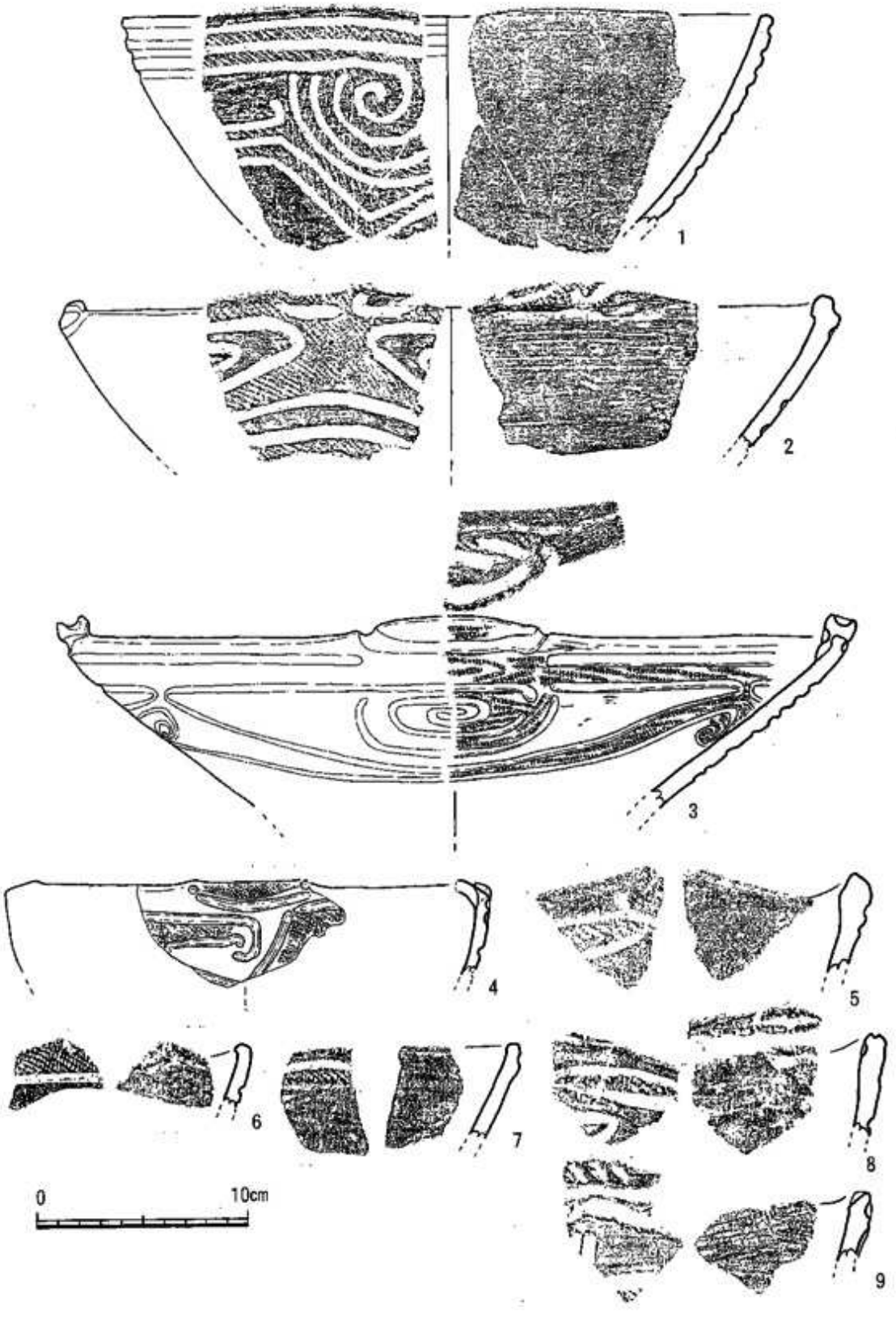
第81図　飯田二反田遺跡4号住居跡出土土器（3）



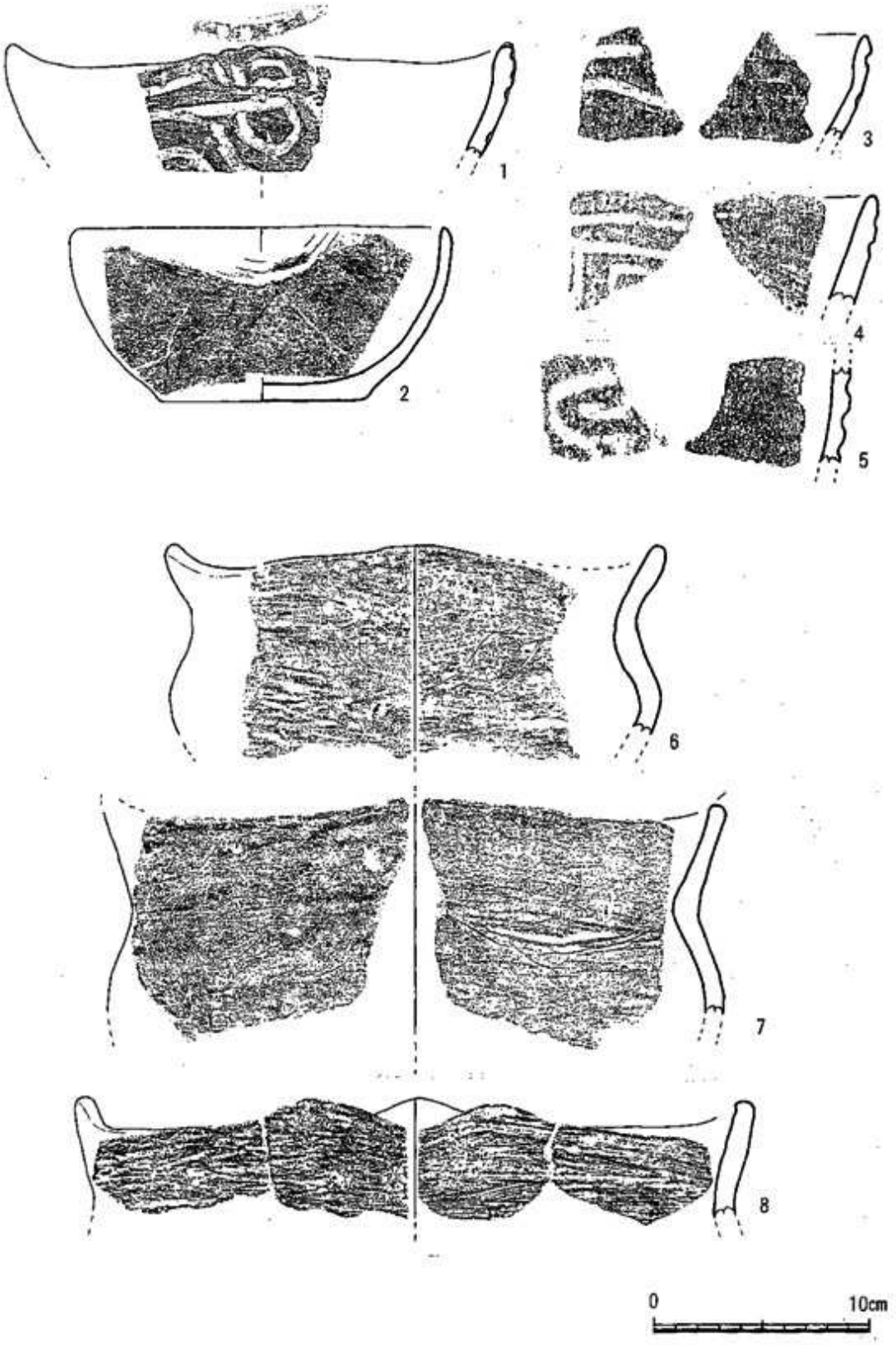
第82図　飯田二反田遺跡4号住居跡出土土器（4）



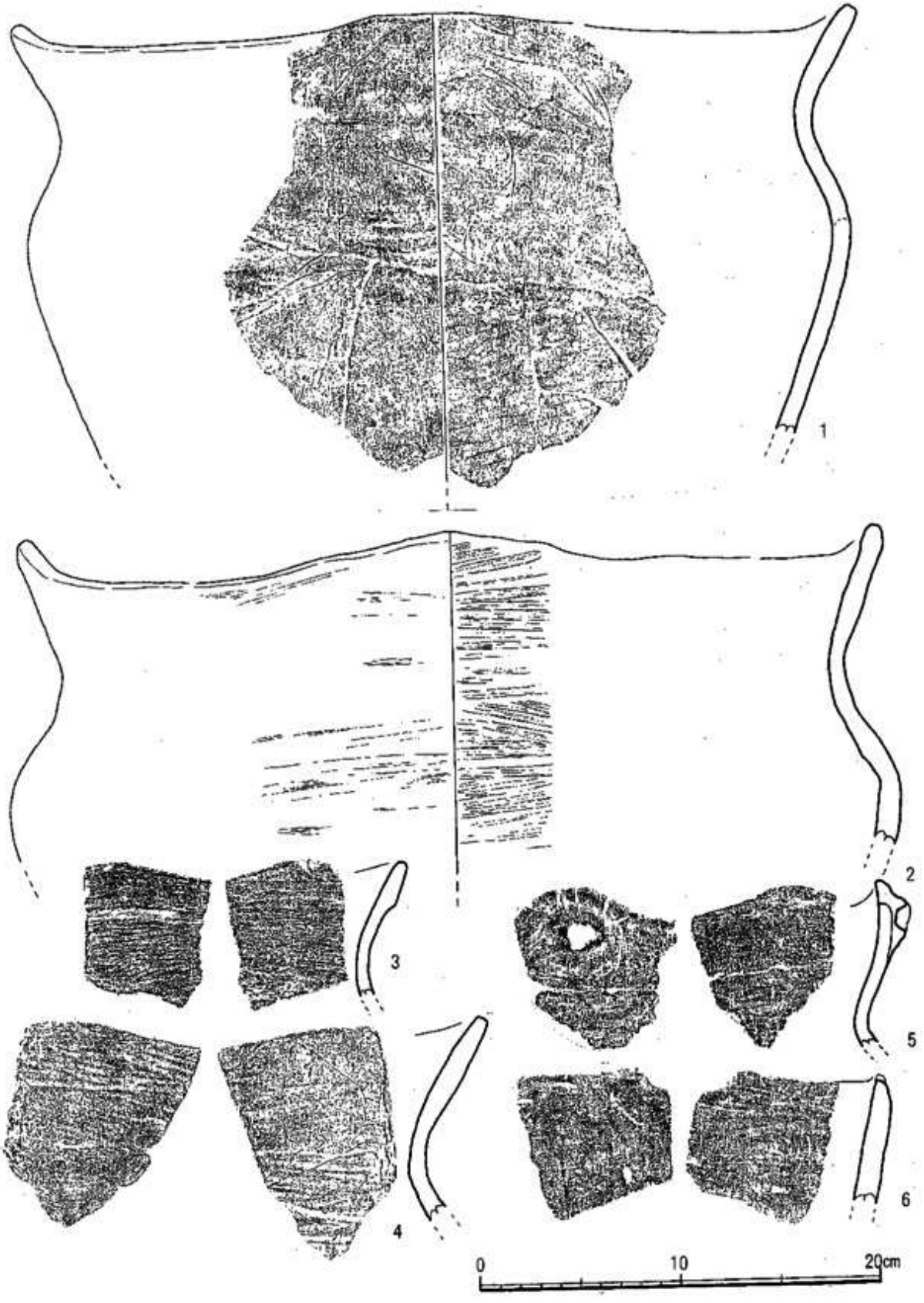
第83図　飯田二反田遺跡4号住居跡出土土器（5）



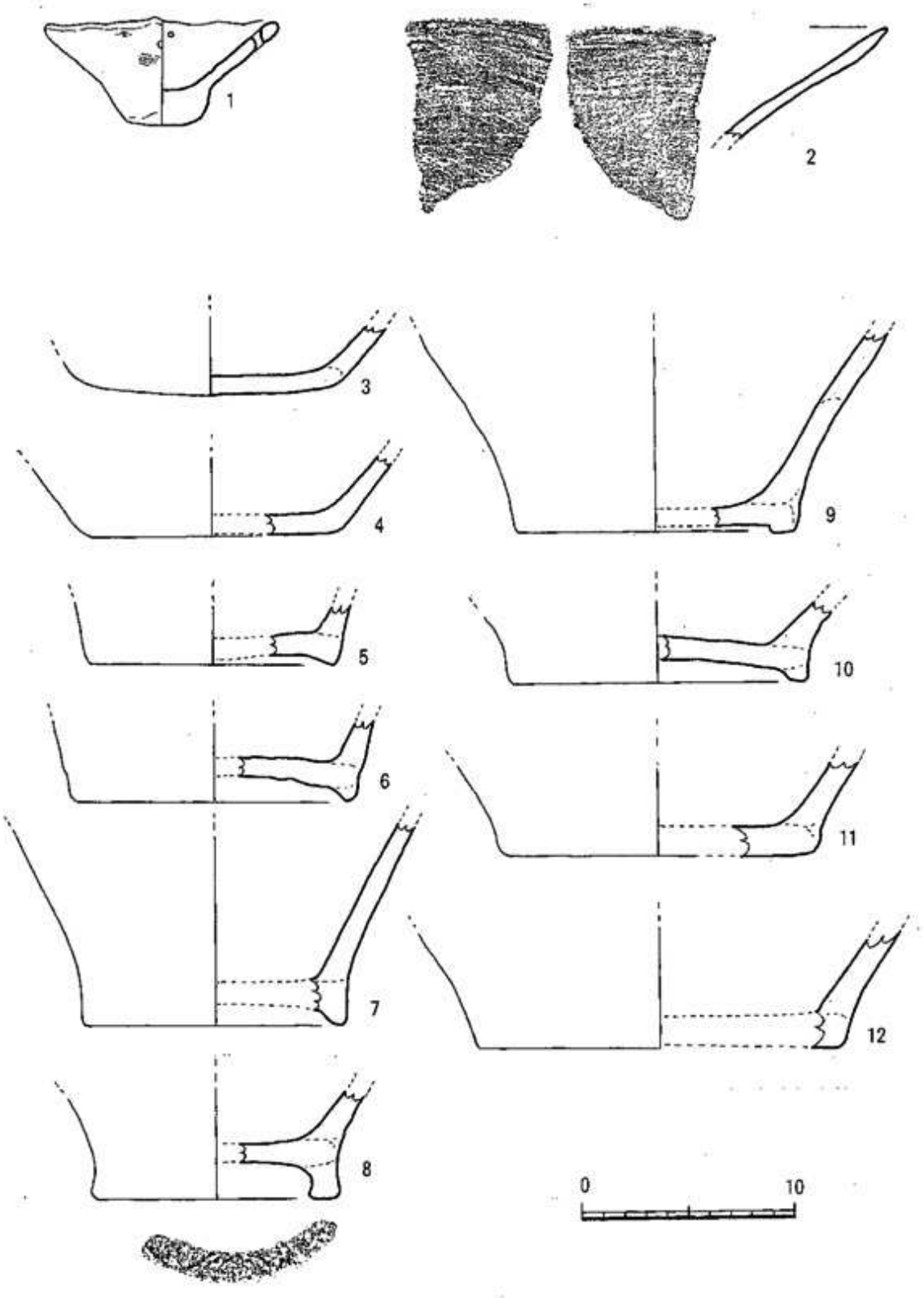
第84図　飯田二反田遺跡4号住居跡出土土器（6）



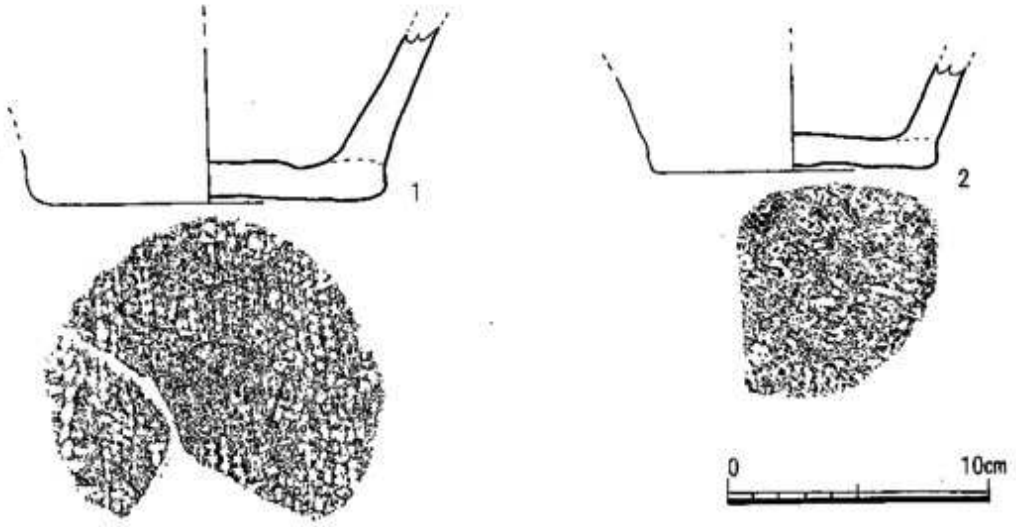
第85図　飯田二反田遺跡4号住居跡出土土器（7）



第86図　飯田二反田遺跡4号住居跡出土土器（8）



第87図　飯田二反田遺跡4号住居跡出土土器（9）



第 88 図　飯田二反田遺跡４号住居跡出土土器（10）

表 10　飯田二反田遺跡４号住居跡出土土器観察表（１）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
79	1	4 号住	口縁部・胴部上半磨消縄文,ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						Ⅰ有文深鉢A 1
	2	〃	口縁部・胴部上半磨消縄文,ミガキ	ミガキ	○		○							〃
	3	〃	口縁部・胴部上半磨消縄文,ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						〃
	4	〃	口縁部・胴部上半磨消縄文,ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○		○							〃
	5	〃	口縁部・胴部上半磨消縄文,ミガキ	ミガキ	○			○						〃
	6	〃	口縁部・胴部上半磨消縄文,ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○		○	○						〃
80	1	〃	口縁部・胴部上半磨消縄文,ミガキ	巻貝条痕＋ミガキ	○		○	○						Ⅰ有文鉢A 1
	2	〃	口唇部・胴部上半磨消縄文,ナデ	ナデ	○			○						〃
	3	〃	胴部上半磨消縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						
	4	〃	胴部上半磨消縄文、ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○		○	○						
	5	〃	胴部上半磨消縄文、ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						
	6	〃	胴部上半磨消縄文、ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○		○	○						
	7	〃	胴部上半磨消縄文、ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						
	8	〃	胴部上半磨消縄文、ミガキ	ケズリ＋ナデ	○		○	○						
	9	〃	胴部上半磨消縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						
81	1	〃	胴部上半磨消縄文、ミガキ	ナデ	○		○	○						
	2	〃	胴部上半磨消縄文、ミガキ	ミガキ	○		○	○						Ⅰ有文鉢A 1
	3	〃	胴部上半磨消縄文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○						〃
	4	〃	胴部上半磨消縄文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○		○	○						
	5	〃	胴部上半磨消縄文,ケズリ＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○						
	6	〃	胴部上半磨消縄文,条痕＋ナデ	ナデ	○			○						
	7	〃	胴部巻貝疑縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						
82	1	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○		○	○				○		Ⅰ有文鉢A 2
	2	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○						○		〃
	3	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○			○						〃
	4	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○			○						〃
83	1	〃	口縁部充填縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						Ⅰ有文深鉢B
	2	〃	口縁部・胴部上半縄文,口唇部施文,巻貝条痕	巻貝条痕	○		○	○						〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○						〃
	4	〃	沈線文、ケズリ＋ナデ	巻貝条痕	○			○						〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○						〃
	6	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						
	7	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						Ⅰ無文深鉢A 1
	8	〃	沈線文,口唇部施文,巻貝条痕＋ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○			○				○		〃
	9	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○								〃

表11　飯田二反田遺跡4号住居跡出土土器観察表（2）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
84	1	4号住	充填縄文、ミガキ	ミガキ	○									Ⅰ有文浅鉢A
	2	〃	磨消縄文、ミガキ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○		○						〃
	3	〃	疑縄文，巻貝条痕＋ミガキ	巻貝条痕＋ミガキ	○			○	○					〃
	4	〃	磨消縄文、赤色顔料、ミガキ	巻貝条痕＋ミガキ	○		○							〃
	5	〃	磨消縄文、ミガキ	ミガキ	○			○			○			〃
	6	〃	磨消縄文、ナデ	ミガキ	○	○		○						〃
	7	〃	磨消縄文、ナデ	ミガキ	○			○						〃
	8	〃	磨消縄文、ナデ	ミガキ	○			○						
	9	〃	磨消縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						
85	1	〃	波頂部刻目、沈線文、ナデ＋ミガキ	巻貝条痕＋ミガキ	○			○						Ⅰ有文浅鉢B
	2	〃	沈線文、ミガキ	ミガキ	○			○						〃
	3	〃	沈線文、ナデ＋ミガキ	ミガキ	○			○						〃
	4	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○			○						〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○			○						
	6	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○				○		Ⅰ無文深鉢A2
	7	〃	ケズリ＋ナデ	ナデ	○			○						〃
	8	〃	巻貝条痕	巻貝条痕	○			○						〃
86	1	〃	条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○	○					〃
	2	〃	条痕＋ナデ	巻貝条痕	○			○						〃
	3	〃	ナデ＋ミガキ	条痕＋ナデ	○	○								〃
	4	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						〃
	5	〃	波頂部浮文、巻貝条痕	巻貝条痕＋ナデ	○	○								
	6	〃	ナデ	ケズリ＋ナデ	○		○	○				○		
87	1	〃	焼成前穿孔、条痕＋ナデ	ナデ	○			○						Ⅰ縄文Ⅲ
	2	〃	巻貝条痕＋ミガキ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○		○						〃
	3	〃	ミガキ	ナデ	○			○						底部
	4	〃	ナデ	ナデ	○			○	○					〃
	5	〃	ナデ	ナデ	○			○						〃
	6	〃	ナデ＋指オサエ	ナデ	○	○		○				○		〃
	7	〃	ミガキ	ナデ	○			○						〃
	8	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ミガキ	○			○				○		〃
	9	〃	ナデ	ナデ	○			○						〃
	10	〃	ケズリ＋ナデ	条痕＋ナデ	○			○						〃
	11	〃	ナデ	ナデ	○			○						〃
	12	〃	ケズリ＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○			○			〃
88	13	〃	指オサエ＋ナデ	ナデ	○			○						〃
	14	〃	条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○			○			○			〃

6．5号住居跡

(1) 遺　構

4号住居跡の北側約5mのところで検出された遺構であるが、調査区内では全体の約4割の検出であり残りは調査区の外に続く。この為、全体規模は明確にし得ないが現存東西長3.5m、深さ0.3mを測り、直系3.4mの円形プランに復原される。また、柱穴や炉跡などの施設についても確認されず、住居跡と断定はできないがその可能性が強い遺構である。

内部からは、約200点の土器を中心とする遺物が出土している。土器は本遺跡の中では最も新しいⅣ類のほぼ単純と考えられる一群であり、この中では底部を欠く以外は完形の深鉢が中央付近で直立に近い状況で出土し注目された。

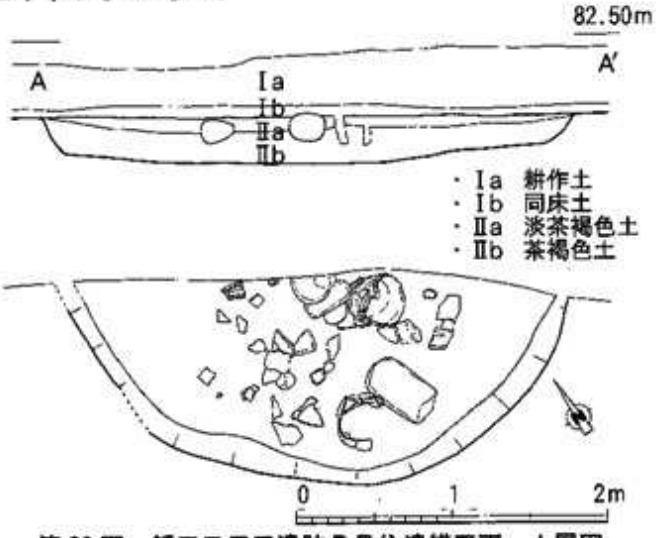
(2) 遺　物

有文鉢は、ⅣA類が僅かに1点認められるのみであり、その主体は有文深鉢と有文浅鉢からなる。有文深鉢は口縁部が「く」字状に近いⅣA類と、口縁部が屈曲しないⅣB類の2タイプが存在する。有文浅鉢は緩い波状口縁を呈し、口縁部と胴部上半部に文様を施すⅣA類のみに限られるようである。

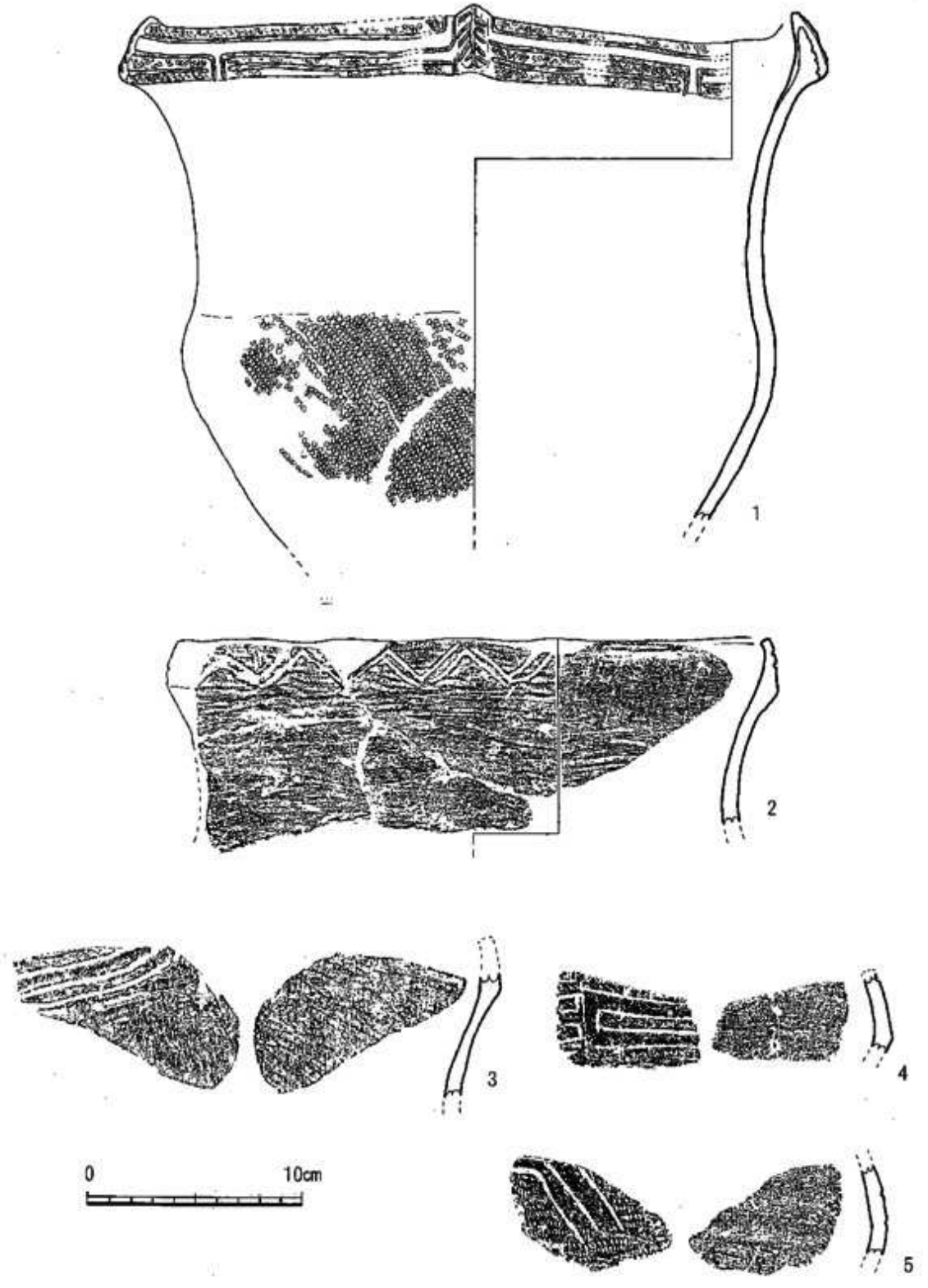
注口土器は口縁部を欠くため全体の器形は不明であるが、直径11.7cmのほぼ球形を呈し上半部分に注口部を付したものである。注口部の左右に沈線と巻貝疑似縄文の文様帯が形成される。

無文深鉢は、波状口縁のⅣA類と平縁のⅣB類があり前者がやや多い。器面調整はいずれも条痕（巻貝）を主とし、これとナデを加えるものもある。また、小形の無文鉢には、波状口縁の波頂部に刺突を施すものも出土している。

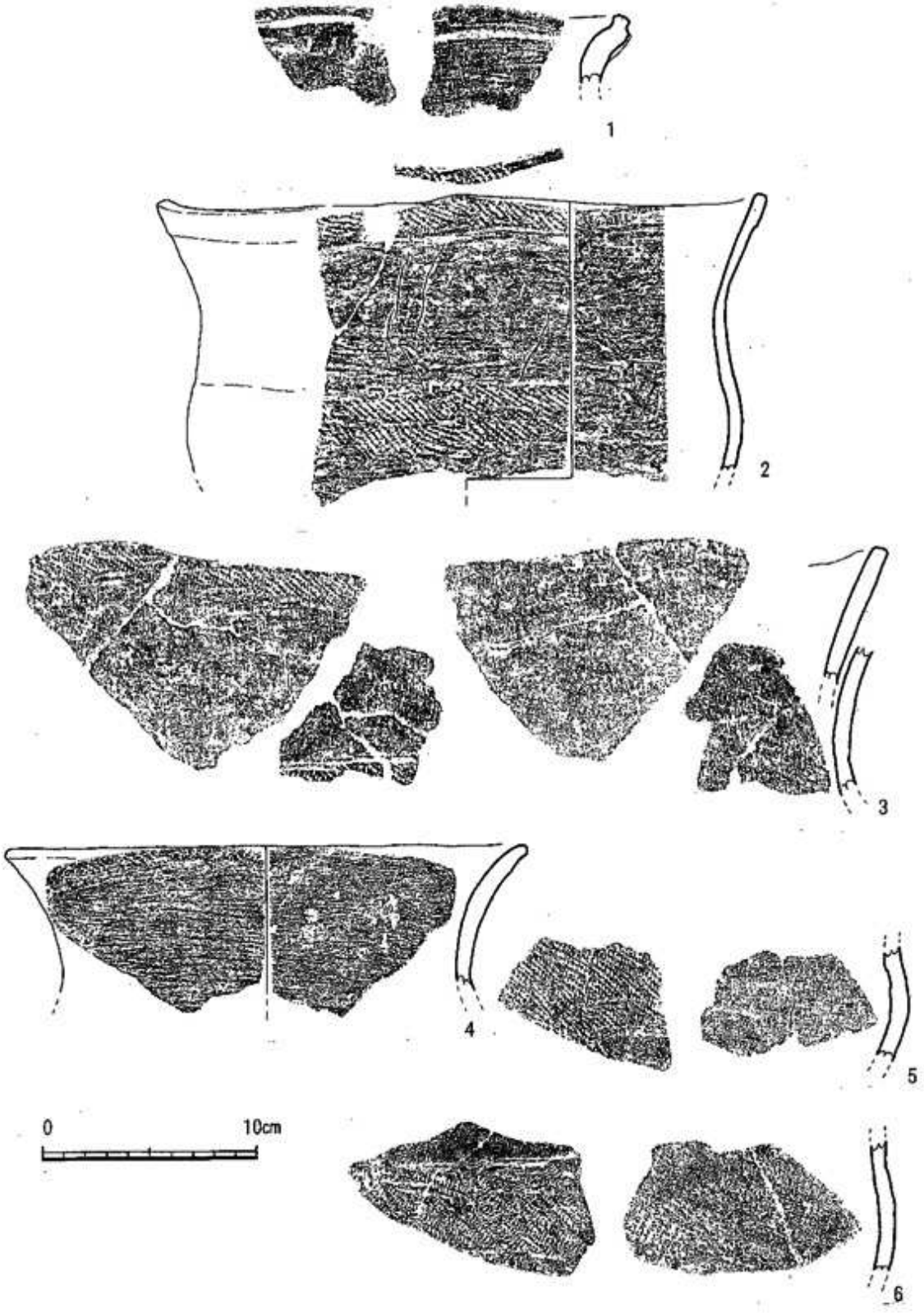
底部は、平底またはわずかに窪む上げ底であるが小形のものは有文土器の底部と考えられ器面調整もミガキなど丁寧なものが多い。



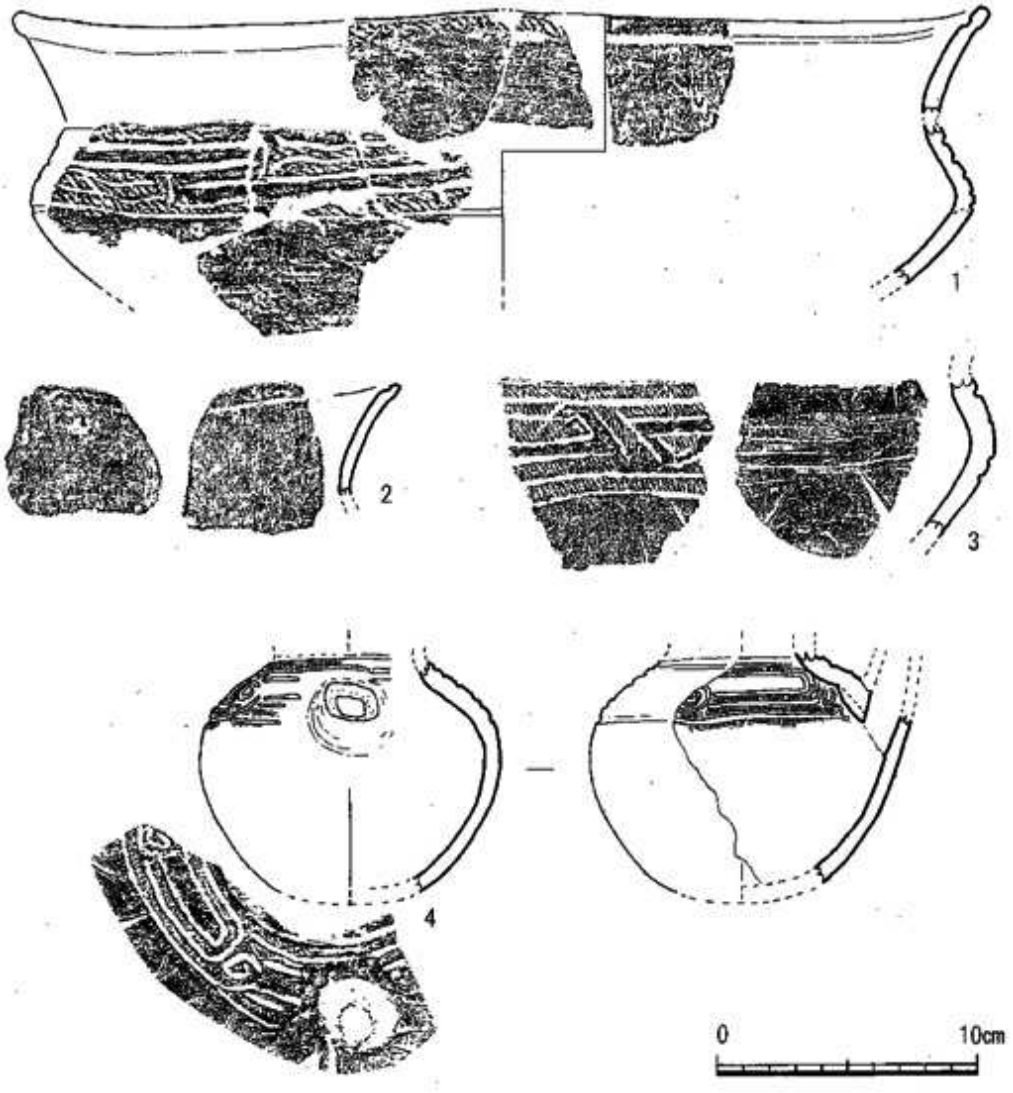
第89図　飯田二反田遺跡5号住遺構平面・土層図



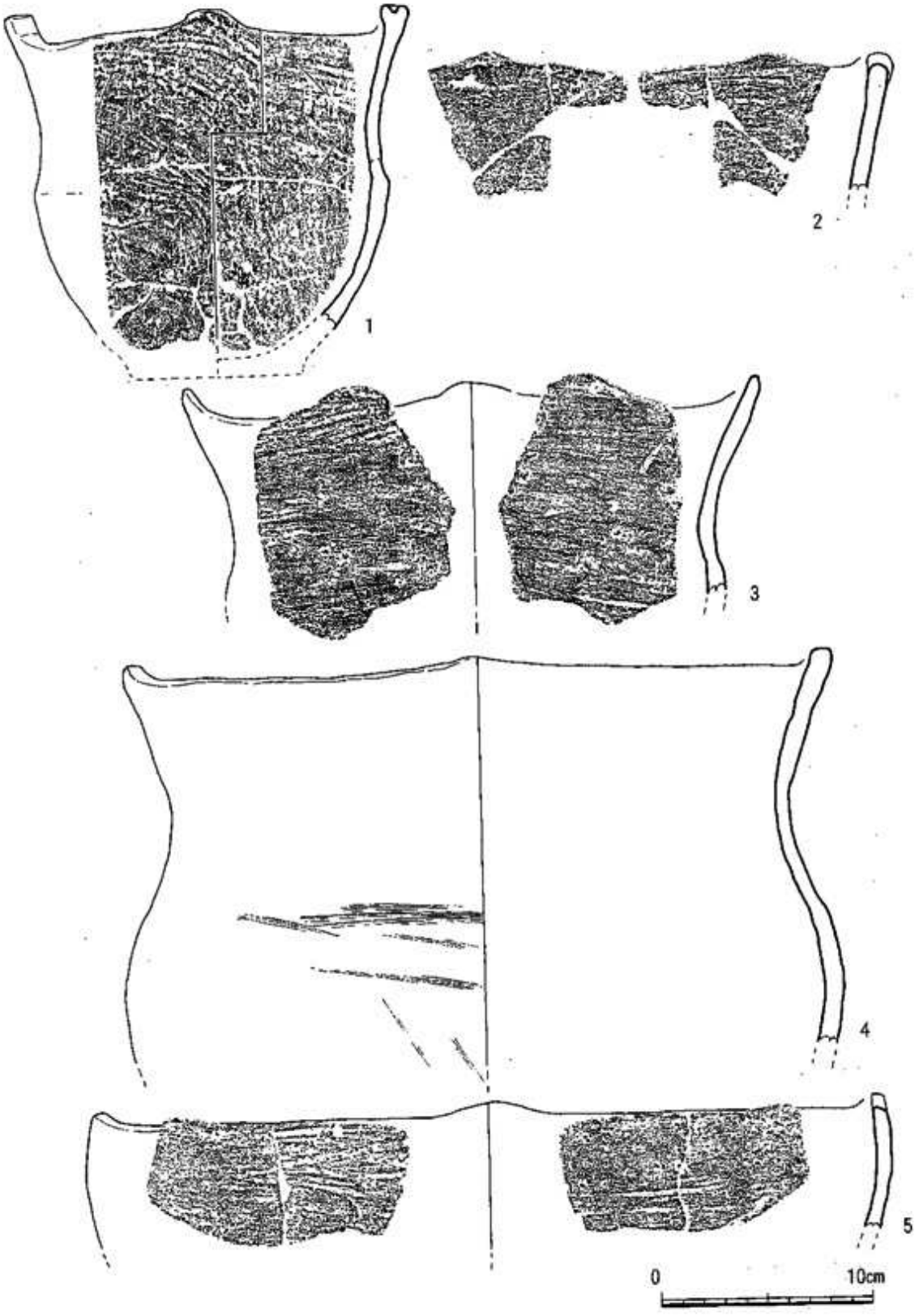
第 90 飯田二反田遺跡５号住居跡出土土器実測図（１）



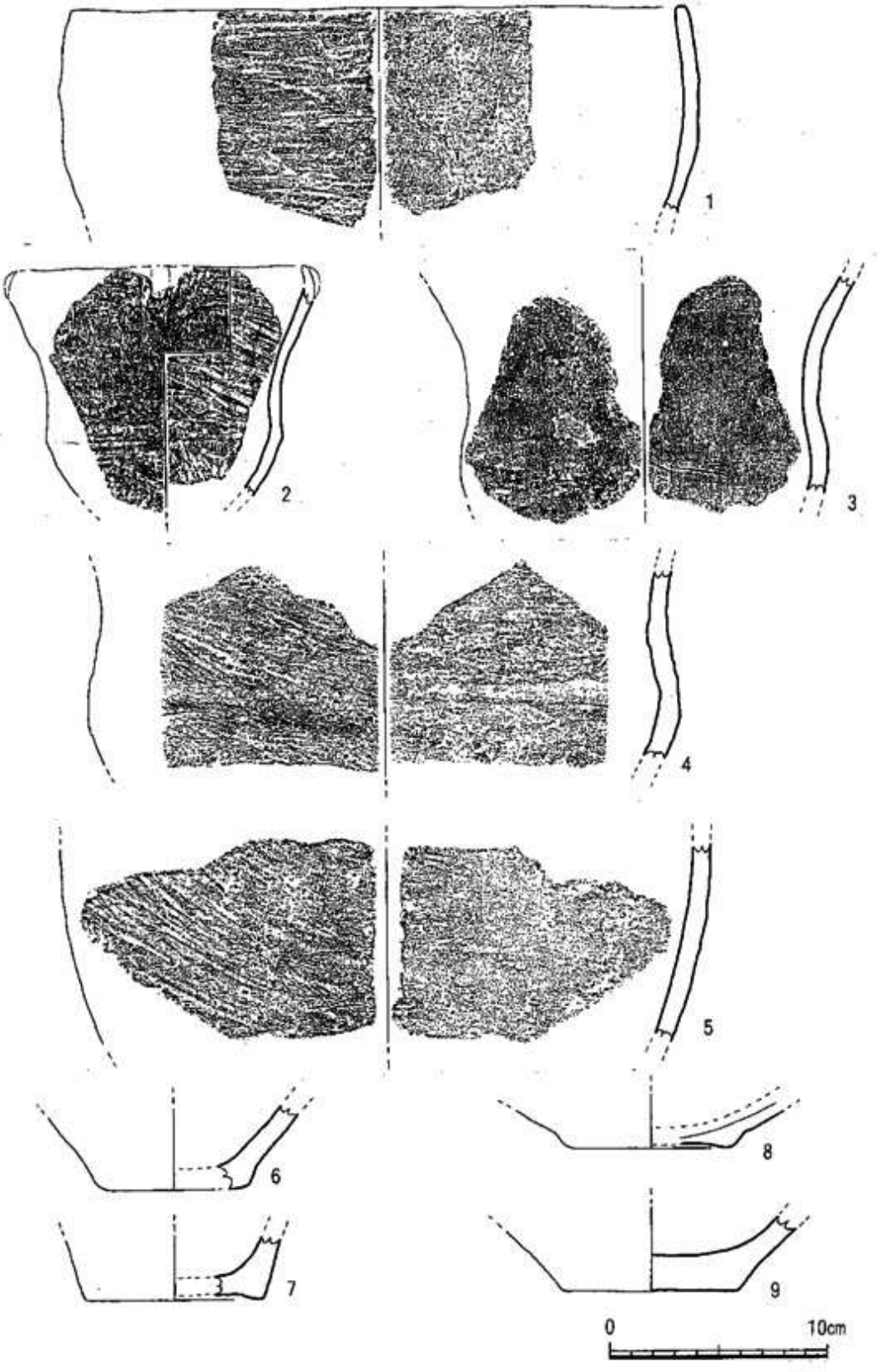
第91図　飯田二反田遺跡5号住居跡出土土器実測図（2）



第92図　飯田二反田遺跡5号住居跡出土土器実測図（3）



第93図　飯田二反田遺跡５号住居跡出土土器実測図（４）



第94図　飯田二反田遺跡5号住居跡出土土器実測図（5）

表 12　飯田二反田遺跡５号住居跡出土土器観察表

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法		胎土								備考	分類
			表	裏	角閃石	斜長石	石英	白色粒	赤色粒	灰色粒	茶色粒	雲母		
90	1	5号住	口縁部磨消縄文、胴部縄文、ミガキ	ナデ＋ミガキ	○			○						Ⅳ有文浅鉢A
	2	〃	口縁部疑縄文、山形沈線文、巻貝条痕	巻貝条痕＋ナデ	○			○						〃
	3	〃	口縁部疑縄文、沈線文、ミガキ	ミガキ	○			○						〃
	4	〃	口縁部磨消縄文	ケズリ＋ナデ	○									〃
	5	〃	疑縄文	ケズリ＋ナデ	○									〃
91	1	〃	口縁部縄文、沈線文、頸部ケズリ	巻貝条痕＋ナデ				○						Ⅳ有文鉢
	2	〃	縄文、ミガキ	巻貝条痕＋ナデ				○						Ⅳ有文浅鉢B
	3	〃	縄文、ミガキ	ナデ	○			○						〃
	4	〃	口唇部縄文		○			○						〃
	5	〃	縄文＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○			○			〃
	6	〃	疑縄文＋頸部ミガキ	ケズリ＋ナデ	○			○						〃
92	1	〃	口縁部縄文、胴部磨消縄文、ミガキ	口縁部沈線文、ナデ＋ミガキ				○						Ⅳ有文浅鉢
	2	〃	口縁部縄文、ミガキ	口縁部沈線文、ミガキ				○						〃
	3	〃	磨消縄文、ミガキ	ケズリ＋ナデ	○			○						〃
	4	〃	磨消疑縄文、ミガキ	ケズリ＋ナデ	○	○		○	○		○		注口土器	
93	1	〃	口縁部浮文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						Ⅳ無文鉢
	2	〃	口縁部隆起、ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○						Ⅳ無文深鉢A
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○			○			〃
	4	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○			○			○			Ⅳ無文浅鉢B
	5	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○			○			〃
94	1	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○			○						〃
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○			○						Ⅳ無文鉢
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○			○			○			〃
	4	〃	条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○						
	5	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○			○			○			
	6	〃	指オサエ＋ナデ	ナデ				○				○		底部
	7	〃	ケズリ＋ナデ	摩滅				○						〃
	8	〃	ナデ	ナデ	○			○						〃
	9	〃	条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○			○			○			〃

7．集石遺構・屋外炉

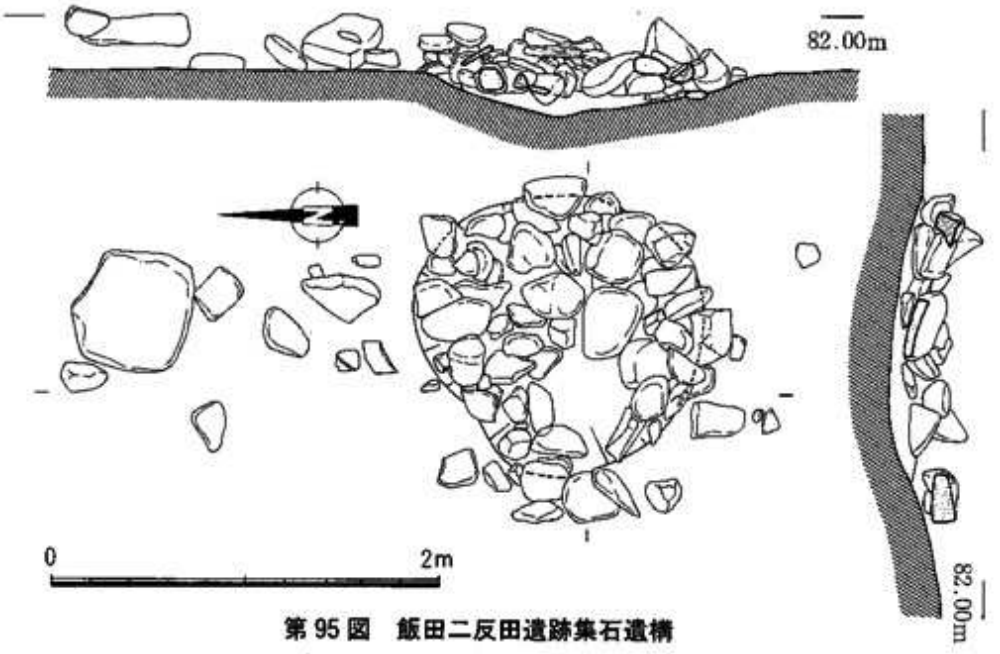
(1) 集石遺構（第95図）

縄文時代早期の遺物を出土する包含層は、4－B、3－B、4－Cグリットを中心に広がるが、このなかで集石遺構は4－Bグリッドから検出された。

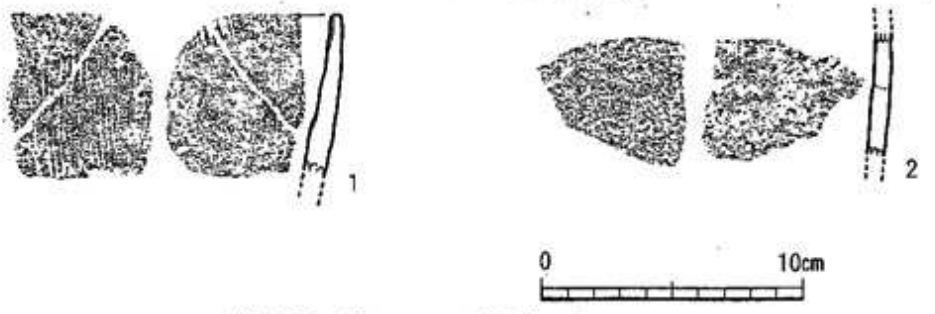
集石遺構は下部に径約80cmの円形を呈する皿状の堀り込みを伴う。礫は拳ほどのものから30～40cmを測るものまであり、全体に偏平なものが多い。集石の基底部に大形の礫を底石として花弁状に配したりする状況はみられず、皿状の堀り込みに礫を密着させたものである。

礫は被熱した状況がうかがえ、なかには破砕したものもみられる。しかし、集石下部の堀り込み自体は被熱した様子がなく、他の場所で熱を受けた礫が円形を呈する皿状の堀り込みに集められたものと思われる。

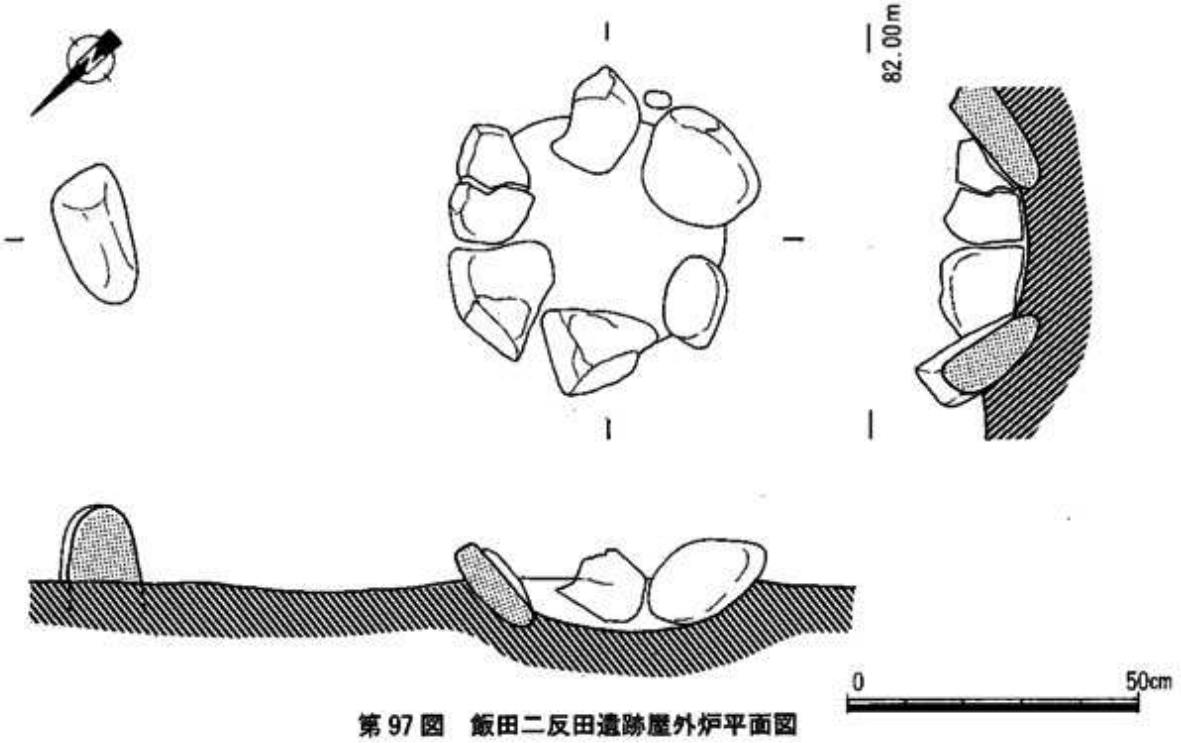
集石周辺には良好な縄文時代早期包含層がみられるが、集石内からも土器（第96図）が出土した。1は外面に縦方向の撚糸文を施し、内面には原体条痕を付す。2は外面に横走の山形押型文がみられる。



第95図　飯田二反田遺跡集石遺構



第96図　飯田二反田遺跡集石出土土器



第97図　飯田二反田遺跡屋外炉平面図

(2)　屋外炉（第97図）

1号住居跡の北側約2mの3－Bグリットで屋外炉が1基検出された。

炉は長径60cm、短径45cm、深さ15cmの楕円形を呈する掘り込みに、20～30cm大の偏平な河原石を6個配した石組炉である。石はほぼ全面が被熱している。

飯田二反田遺跡では、小池原上層式、鐘崎式、北久根山式に相当する1～5号住居跡が確認されている。このうち、住居跡の大半が調査区外に及ぶ5号住居跡を除き、1、2号住居跡で石組炉が、3号住居跡で土器炉が、4号住居跡で地床炉が住居内で確認されている。1号住居跡北側で検出されたこの炉については、屋外炉と仮称しているが、炉をはさんで両側に直径20cm程の柱穴が1本ずつ確認されていることから、中央に石囲い炉をもつ2本柱の竪穴住居跡であった可能性も考えられる。また、竪穴住居跡に伴わない場合でも2本の柱穴があることから、炉に付属するなんらかの施設が存在したことが想定される。

8．土　坑

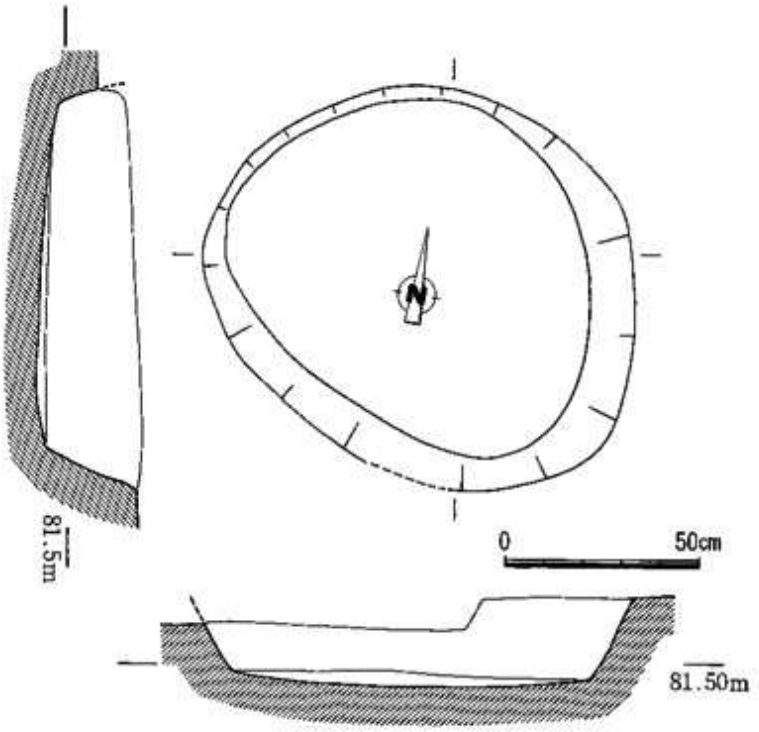
(1)　1号土坑（第98図）

長径約115cm、短径約100cm、深さ23cmを測る楕円形の土坑である。土坑内からは土器片や小礫が出土したが、図化できる大きさではなかった。

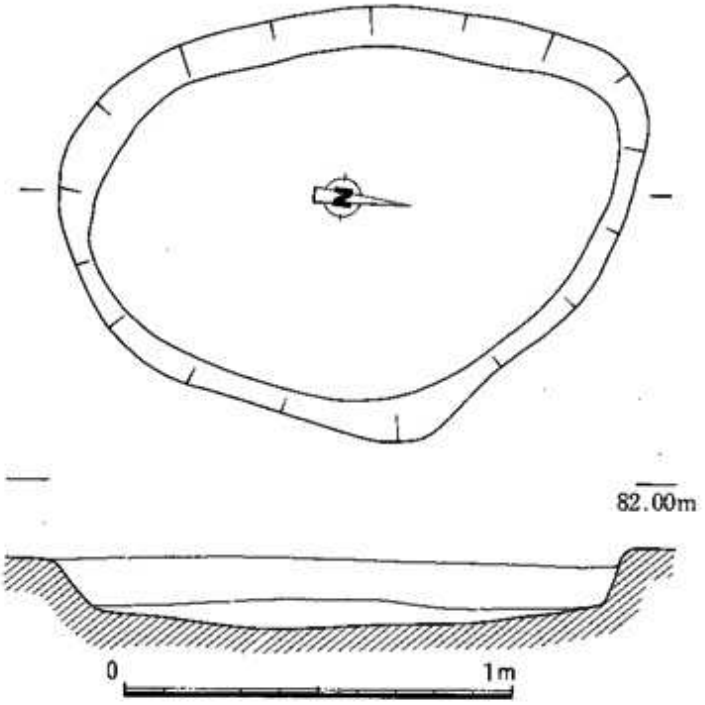
(2)　2号土坑（第99図）

長径約150cm、短径約110cm、深さ18cmを測る楕円形の土坑である。土坑内からは土器片や小礫が出土したが、図化できる大きさではなかった。

0



第 98 図　飯田二反田遺跡 1 号土坑実測図



第 99 図　飯田二反田遺跡 2 号土坑実測図

(3)　3号土坑（第100図）

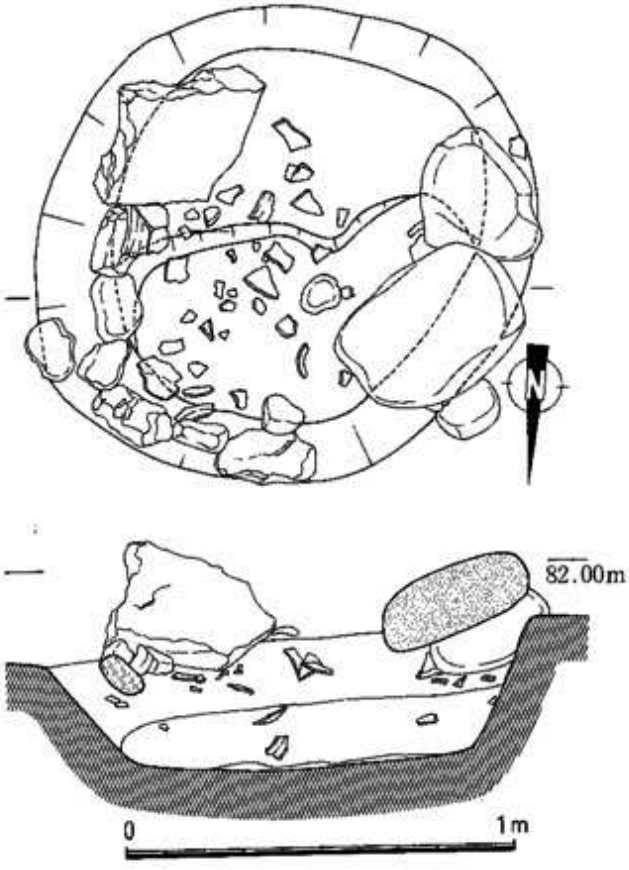
径約130cm、深さ33cmを測る円形の土坑である。土坑内からは人頭大以上の扁平な礫が3点埋土中から出土している。その他、第102図で示した土器片や小礫が出土した。

(4)　4号土坑（第101図）

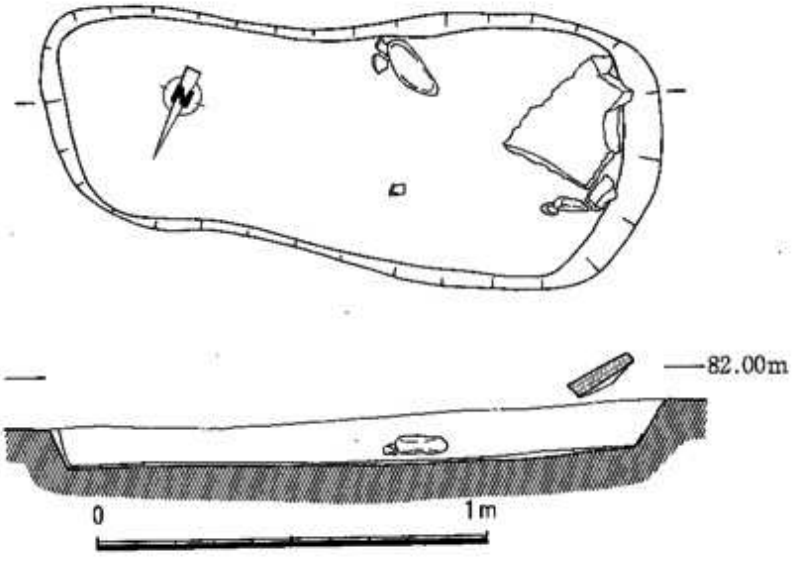
長径約160cm、短径約70cm、深さ13cmを測る長楕円形の土坑である。土坑内からは人頭大の扁平な角礫が1点端から出土しているほかは、土器片や小礫が若干出土したが、図化できる大きさではなかった。

(5)　5号土坑（第103図）

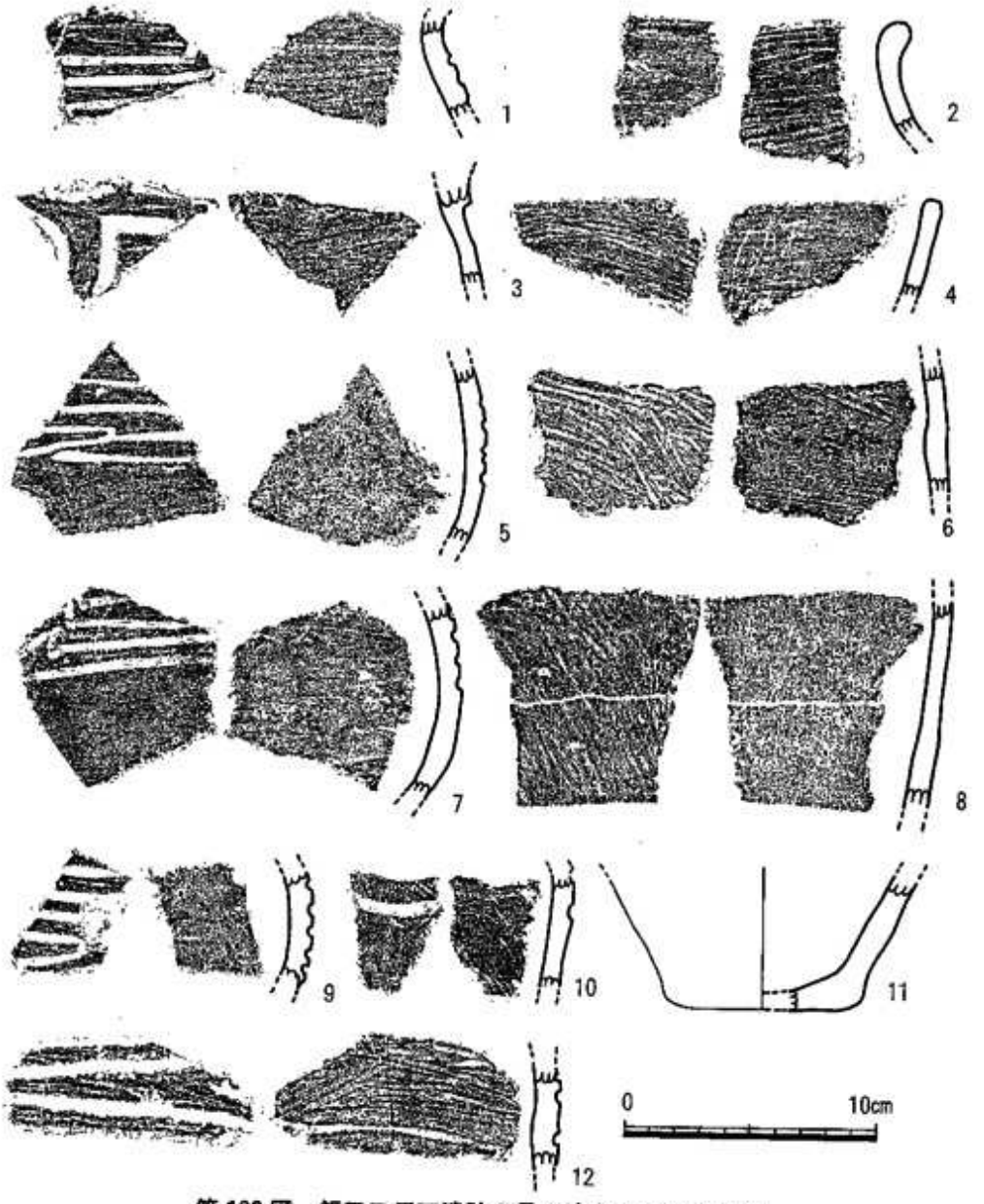
長径約115cm、短径約100cm、深さ25cmを測る楕円形の土坑である。土坑内からは人頭大以下の川原石が数点、出土しているほかは、土器片や小礫が若干出土したが、図化できる大きさではなかった。



第100図　飯田二反田遺跡3号土坑実測図



第101図　飯田二反田遺跡4号土坑実測図



第 102 図　飯田二反田遺跡３号土坑出土土器実測図

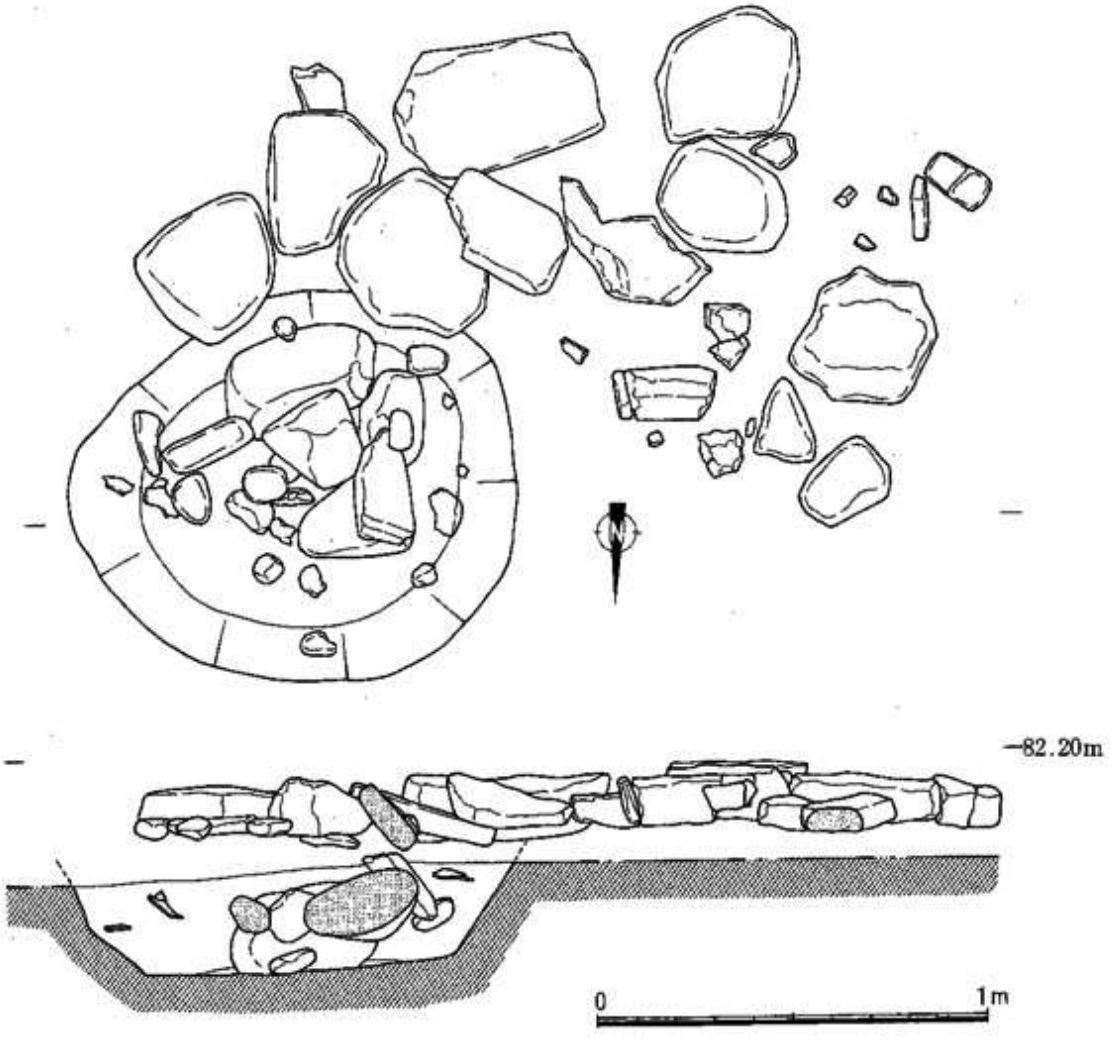
表 13　飯田二反田遺跡３号土坑出土土器観察表

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
102	1	3号土坑	沈線文、巻貝条痕、ナデ	巻貝条痕、ナデ	○	○								Ⅱ有文鉢A₂
	2	〃	巻貝条痕、ナデ	巻貝条痕、ナデ	○	○								Ⅱ無文深鉢
	3	〃	沈線文、巻貝条痕、ナデ	巻貝条痕、ナデ	○	○								Ⅱ有文鉢A₂
	4	〃	巻貝条痕、ナデ	巻貝条痕、ナデ	○	○								Ⅱ無文深鉢
	5	〃	沈線文、巻貝条痕、ナデ	巻貝条痕、ナデ	○	○								Ⅱ有文鉢A₂
	6	〃	巻貝条痕、ナデ	巻貝条痕、ナデ	○	○								Ⅱ無文深鉢
	7	〃	沈線文、巻貝条痕、ナデ	巻貝条痕、ナデ	○	○								Ⅱ有文鉢A₂
	8	〃	巻貝条痕、ナデ	巻貝条痕、ナデ	○	○								Ⅱ無文深鉢
	9	〃	沈線文、巻貝条痕、ナデ	巻貝条痕、ナデ	○	○								Ⅱ有文鉢A₂
	10	〃	沈線文、磨消縄文、巻貝条痕、ナデ	巻貝条痕、ナデ	○	○								〃
	11	〃	ナデ	ナデ	○	○								底部
	12	〃	沈線文、巻貝条痕、ナデ	巻貝条痕、ナデ	○	○								Ⅱ有文鉢A₂

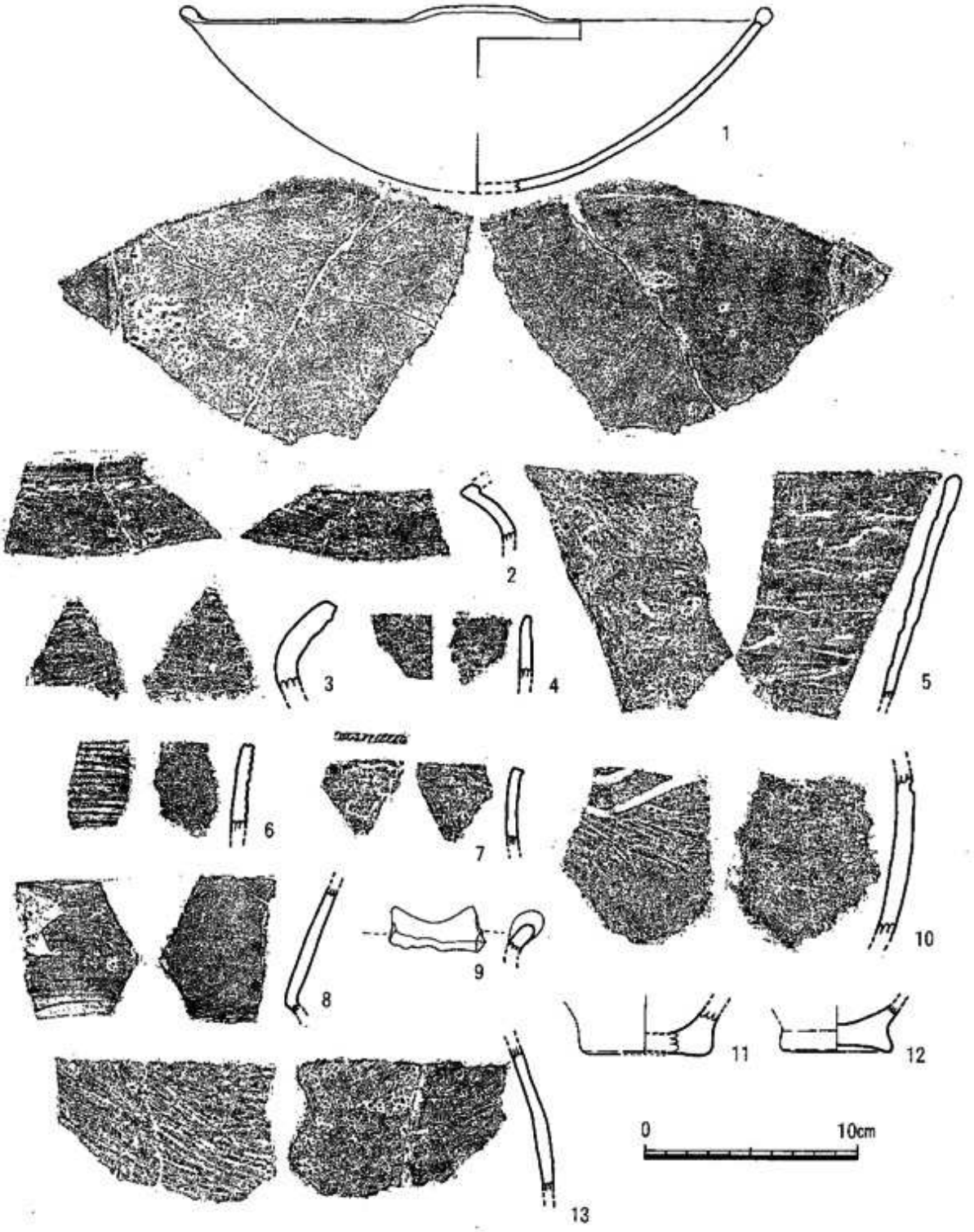
なお、５号土坑の南西方向に横２ｍ、縦１ｍの範囲で人頭大の扁平な礫が、同一レベルで確認できたが、５号土坑と関連性をもつものかどうかは明らかでない。

(6)　６号土坑（第105図）

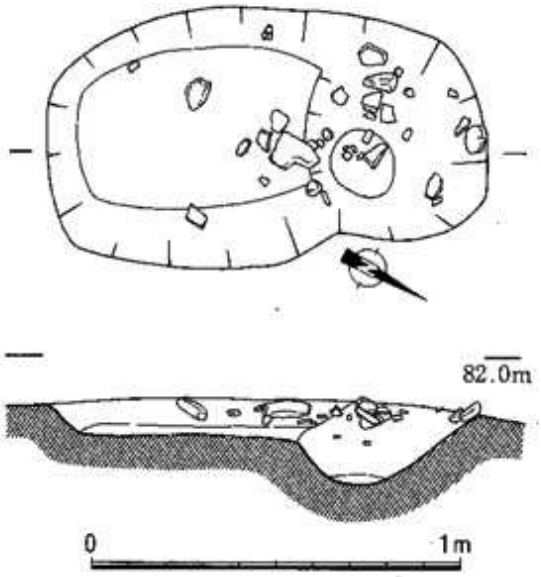
長径約120cm、短径約70cm、深さ25cmを測る長楕円形の土坑である。土坑内からは土器片や小礫が若干出土したが、図化できるもののみ第105図のとおり図化した。飯田二反田遺跡における縄文時代の遺物はそのほとんどが早期あるいは後期のものであるが、この土坑の出土土器のみ晩期のものが出土している。



第103図　飯田二反田遺跡５号土坑実測図



第104図　飯田二反田遺跡6号土坑出土土器実測図



第105図　飯田二反田遺跡6号土坑

表14　飯田二反田遺跡6号土坑出土土器観察表

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
104	1	6号土坑	突起、ミガキ	ミガキ	○	○								
	2	〃	ミガキ	ミガキ	○	○			○					
	3	〃	ナデ	ナデ	○	○			○	○				
	4	〃	摩滅	ナデ	○	○			○					
	5	〃	二枚目条痕＋条痕	ナデ	○	○			○					
	6	〃	二枚目条痕	ナデ	○	○		○						
	7	〃	口唇部刻目、ナデ	ナデ	○	○							注記無し	
	8	〃	ミガキ	ミガキ	○	○		○						
	9	〃	蝶ネクタイ状突起、ナデ		○	○		○	○					
	10	〃	沈線文、撫	摩滅	○	○		○						
	11	〃	ナデ	ナデ	○	○		○						
	12	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○					
	13	〃	条痕	条痕＋ナデ	○	○		○						

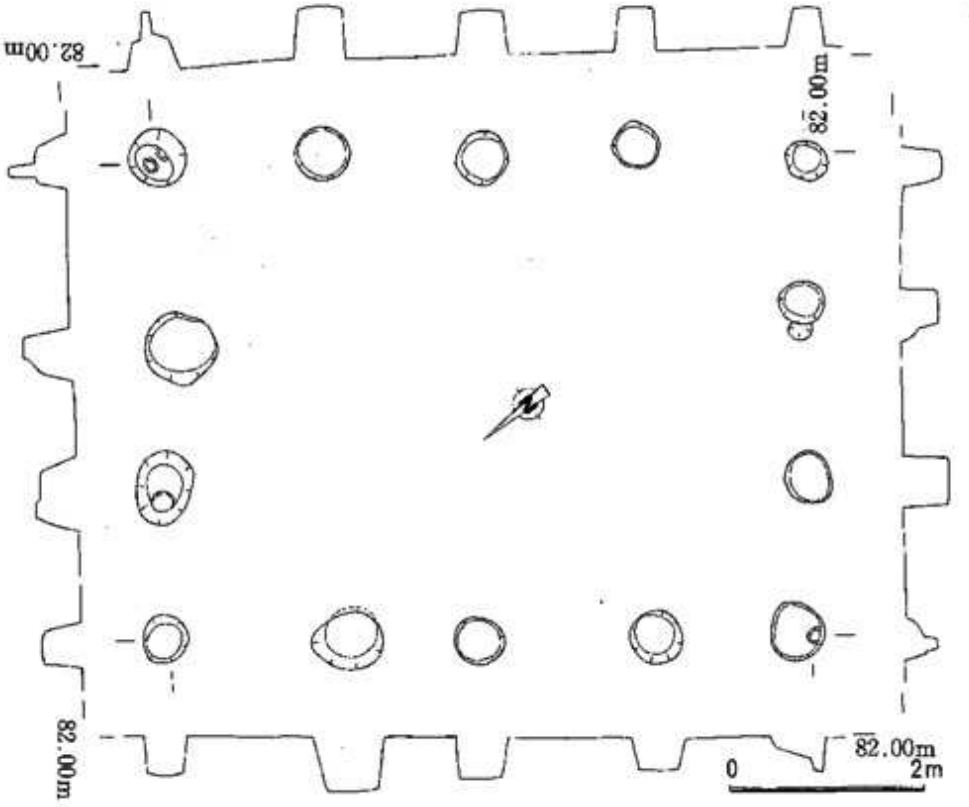
9．掘立柱建物

(1)　1号掘立柱建物（第106図）

調査区の中央部に2棟の掘立柱建物跡が並んで検出されたが、1号掘立柱建物は北東側に位置するものである。建物の規模は桁行4間（約7.9m）、梁行3間（約4.8m）であり、面積は37.9㎡を測る。柱穴からは6世紀末から7世紀初の遺物が出土している。

(2)　2号掘立柱建物（第107図）

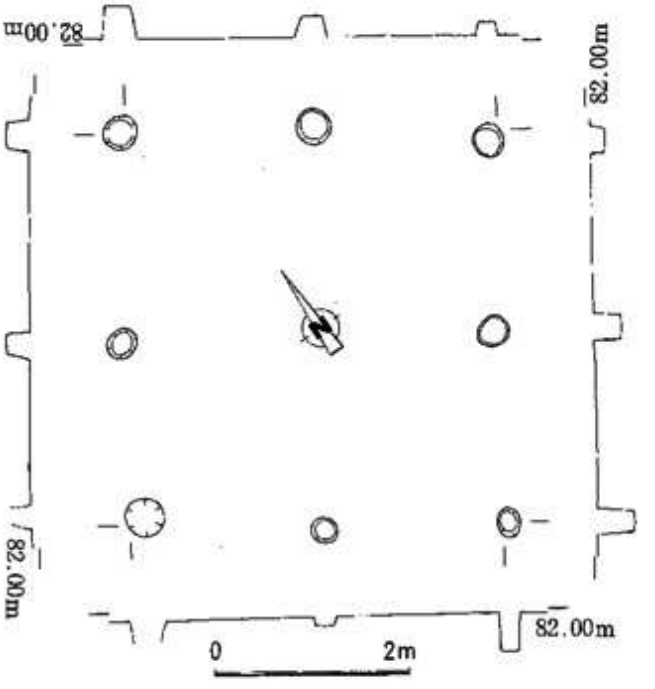
2号掘立柱建物は、1号掘立柱建物の南西約8mに位置するものである。1号掘立柱建物と方位をほぼ等しくするものであり、建物の規模は桁行2間（約3.8m）、梁行2間（約3.8m）であり、面積は14.4㎡を測る。なお、柱穴からは遺物はほとんど出土しておらず、その時期は明らかでない。



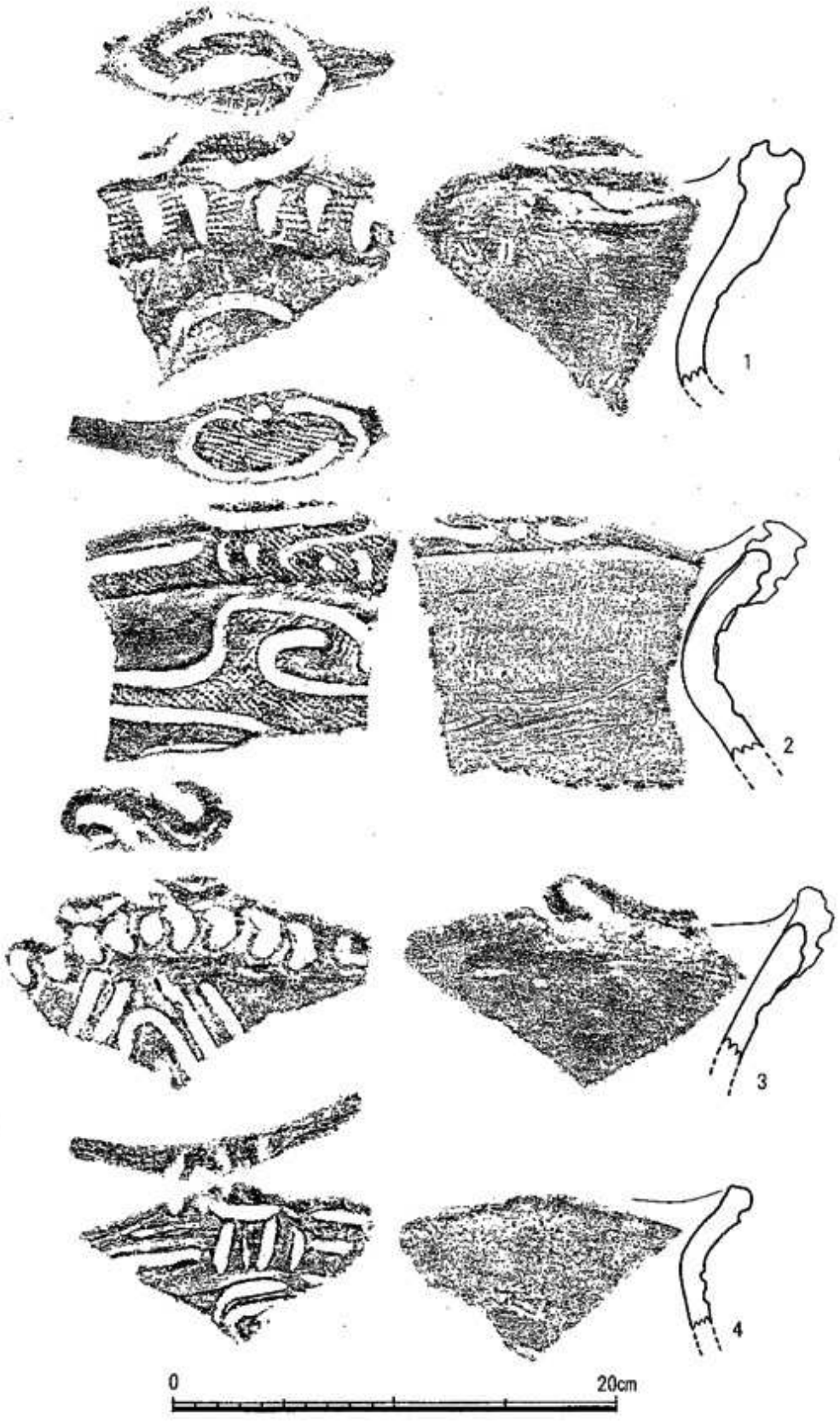
第106図　飯田二反田遺跡1号掘立柱建物実測図

10. 溝状遺構（第4図）

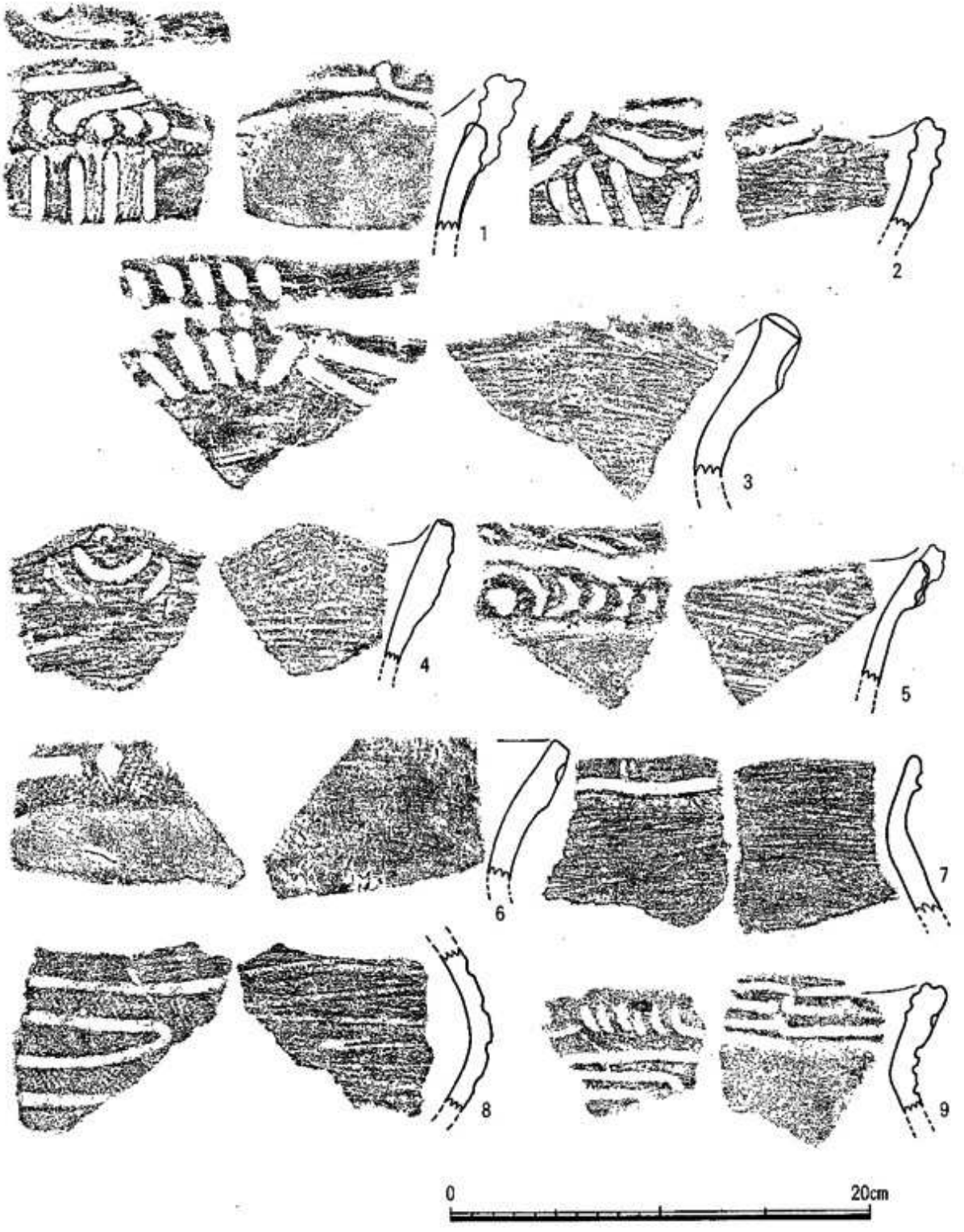
調査区から4条の溝状遺構が検出されている。1号溝状遺構と2号溝状遺構は合流しており、1号溝状遺構が1・2・4号住居跡を切っているため、これらの住居跡よりは新しいことがわかるが、その出土遺物は縄文時代早期・後期および古墳時代後期の土器が出土しているため、古墳時代後期以降に営まれたものであることがわかる。また、4号溝状遺構からも古墳時代後期の須恵器坏蓋が出土しており、これらの溝状遺構は同時期の可能性が高いと考えられる。



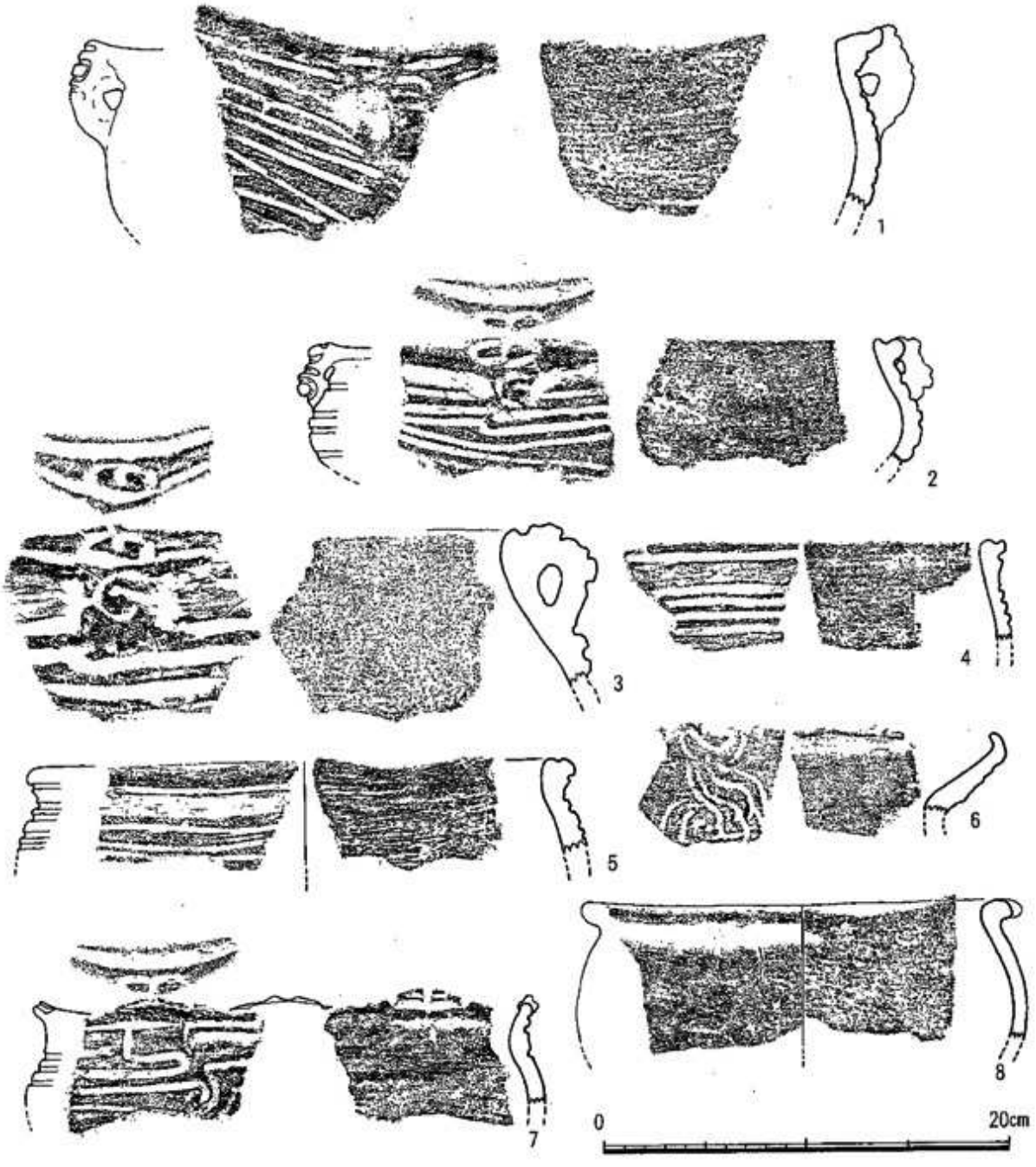
第107図　飯田二反田遺跡2号掘立柱建物実測図



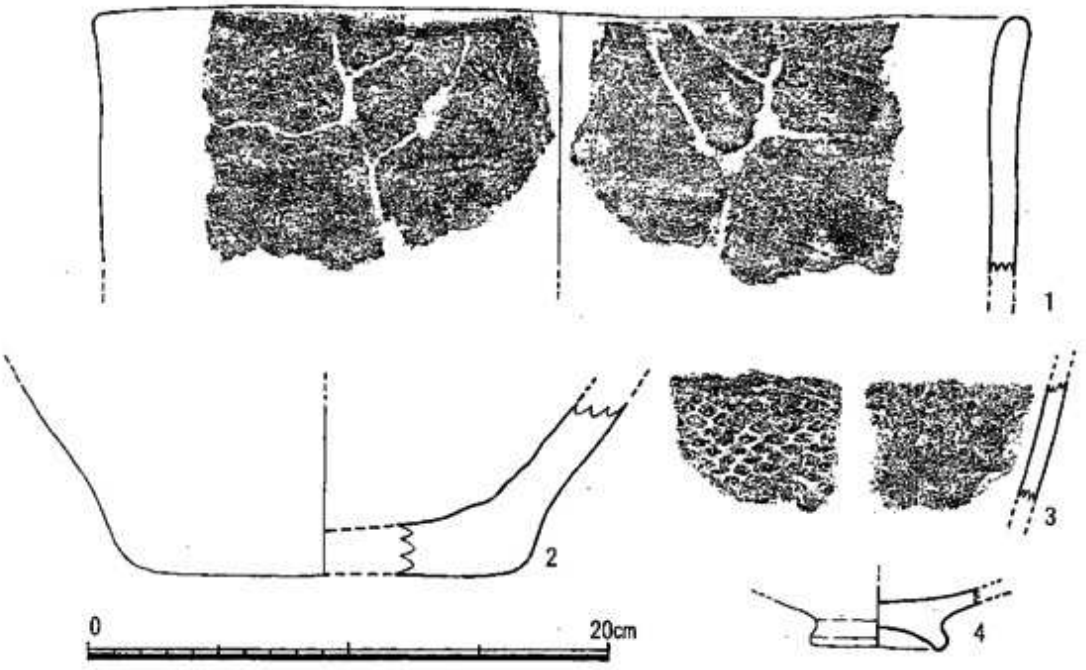
第108図　飯田二反田遺跡溝1・2出土土器実測図（1）



第109図　飯田二反田遺跡溝1・2出土土器実測図（2）



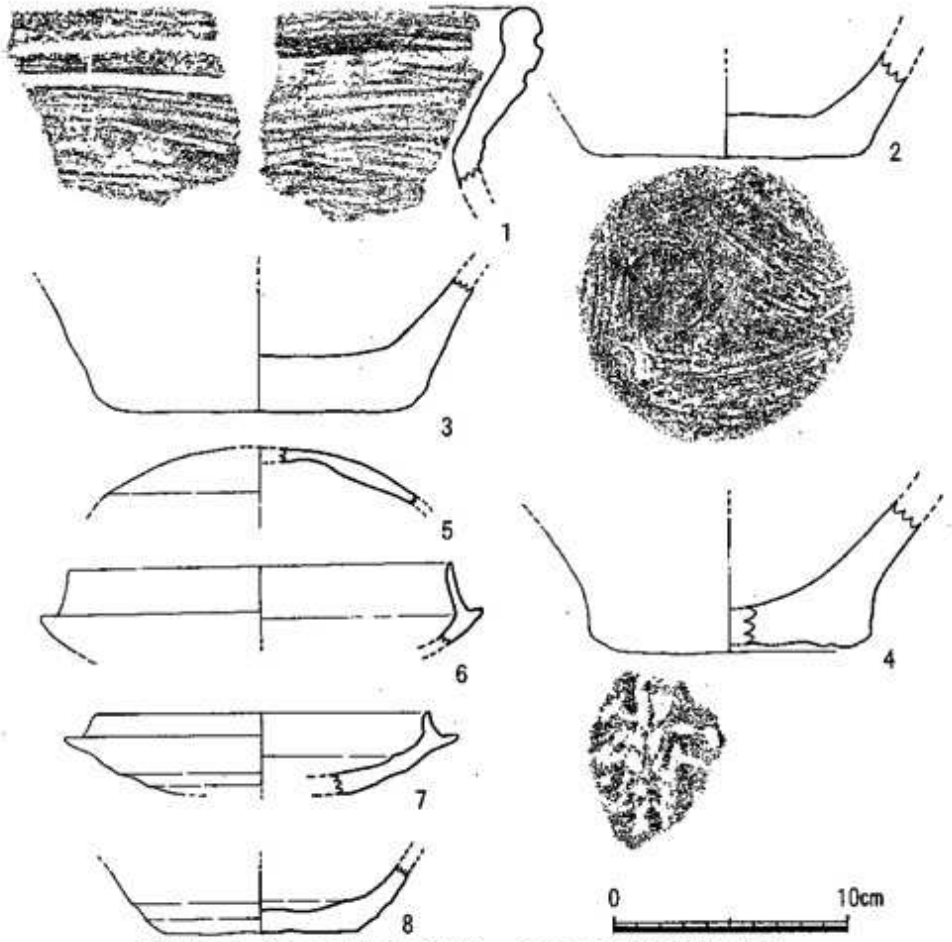
第110図　飯田二反田遺跡溝1・2出土土器実測図（3）



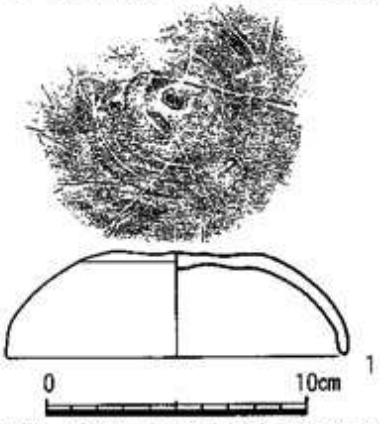
第111図　飯田二反田遺跡溝1・2出土土器実測図（4）

表15　飯田二反田遺跡溝1・2出土土器観察表（1）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
108	1	溝1・2	沈線文、口唇部施文、縄文＋ナデ	条痕＋ミガキ	○	○		○						Ⅰ有文深鉢A1
	2	〃	沈線文、口唇部施文、磨消縄文＋ナデ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○	○	○						〃
	3	〃	沈線文、口唇部施文	巻貝条痕＋ミガキ	○	○	○							Ⅰ有文深鉢A1
	4	〃	沈線文、ミガキ	ミガキ	○	○		○	○					〃
109	1	〃	沈線文、口唇部施文、磨消縄文＋ナデ	摩滅	○	○		○						Ⅰ有文深鉢A1
	2	〃	沈線文、口唇部施文、縄文＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	3	〃	沈線文、口唇部施文、条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○		○						Ⅰ有文深鉢A1
	4	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○	○						〃
	5	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○	○				○		〃
	6	〃	沈線文、縄文、ナデ	摩滅	○	○		○						Ⅰ有文深鉢A1
	7	〃	沈線文、疑縄文、ミガキ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○	○	○	○					〃
	8	〃	沈線文、磨消縄文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	9	〃	沈線文、口唇部施文、摩滅	摩滅	○	○		○	○					Ⅰ有文深鉢A1
110	1	〃	把手、沈線文、口唇部施文	ナデ	○	○	○	○	○		○	○		Ⅰ有文深鉢A
	2	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○	○	○			〃
	3	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○	○	○	○					〃
	4	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	5	〃	沈線文、磨消縄文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	6	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○		○		○		〃
	7	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○	○	○			〃
	8	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○					Ⅰ有文深鉢B
111	1	〃	ナデ	ナデ	○	○		○						
	2	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○	○				底部
	3	〃	押型文	摩滅	○	○	○	○						
	4	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○					底部
112	1	〃	沈線文、縄文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	摩滅	○	○	○	○	○					底部
	3	〃	ナデ、底部外面末調整	摩滅	○	○		○						底部
	4	〃	網代底、巻貝条痕＋ナデ	ミガキ	○	○		○						底部



第112図　飯田二反田遺跡溝1・2出土土器実測図（5）



第113図　飯田二反田遺跡溝4出土土器

表16　飯田二反田遺跡溝1・2出土土器観察表（2）

図番号	遺物番号	出土場所	器面調整の方法		胎土	焼成	色調	備考
			表	裏				
112	5	溝2	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ、一方方向ナデ	密	良好	青灰色	
	6	〃	回転ナデ	回転ナデ	〃	〃	〃	
	7	〃	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	〃	〃	〃	
	8	〃	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	〃	〃	〃	
113	1	溝4	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	〃	〃	〃	外面にヘラ記号あり

11. 昭和63・平成元年度調査区遺物包含層

(1) 縄文時代早期の土器

縄文時代早期の土器は3－B、3－C、3－D、4－B、4－C、4－Dグリットなどの包含層から出土した。

これらは縄文時代早期の稲荷山式に位置づけられるものである。

1 無文土器（第114、115図、第116図1～3）

器形からA類、B類、C類に分けられる。

① A類（第114図、第115図、1、2、8～10、第116図1～3）

体部から口縁にむかい直線的にのび、口縁部は直立あるいは若干内傾する。器厚は1cm程のやや薄手のものもみられるが、多くは1.5～2cmの厚手のものである。第115図1は外から内に向かっての焼成前の穿孔がみられる。

また、口縁ちかくや口縁上面にコブ状あるいはアーチ状の貼り付けを付すものもあり、口縁直下にコブ状の貼り付けを付するもの（第115図8、9）、口縁付近に粘土を偏平に貼り付け口縁部を形成するもの（第115図10、第116図1）、口縁付近に粘土を偏平に貼り付け口縁上面に粘土紐をアーチ状に付すもの（第16図2、3）などがみられる。

② B類（第115図3～5）

体部から口縁にむかい内傾気味に立ち上がり、端部を短く外反させる。

③ C類（第115図6、7）

口縁が体部からそのまま外反するもの。

2 押型文土器（第116図4～11、第117、118図、第119図1～11）

山形文、楕円文、格子目文がある。

① 山形文（第116図4～11、第117図1～5）

器形的には口縁直立し、器厚は無文土器などにくらべると薄手である。

外面には横走山形文が施文され、一部にナデ消しが見られる。内面は口縁直下のみに横走山形文が施文され、原体条痕などは施されない。

② 楕円文（第117図6～11、第118図、第119図1～10）

器形、器厚とも山形文と同様である。

外面には全面に横走楕円文が施文され、一部にナデ消しがみられる。内面は口縁直下のみに横走楕円文が施文され、原体条痕などは施されない。これらのうち第117図10、11、第118図1～5、7は同一個体である。

③ 格子目文（第119図11）

体部の破片が1点のみ出土している。比較的細かな格子目文が外面に横走施文される。

3　撚糸文（第119図12，13、第120図1～3）

第119図12，13は口縁部で、12は内外面に、13は外面に撚糸文が施される。また、第120図1は口縁ちかくで内外面に施文される。

4　底部（第120図4～10）

押型文などの施文は認られない。やや偏平気味のものもあるが大部分は尖底を呈する。

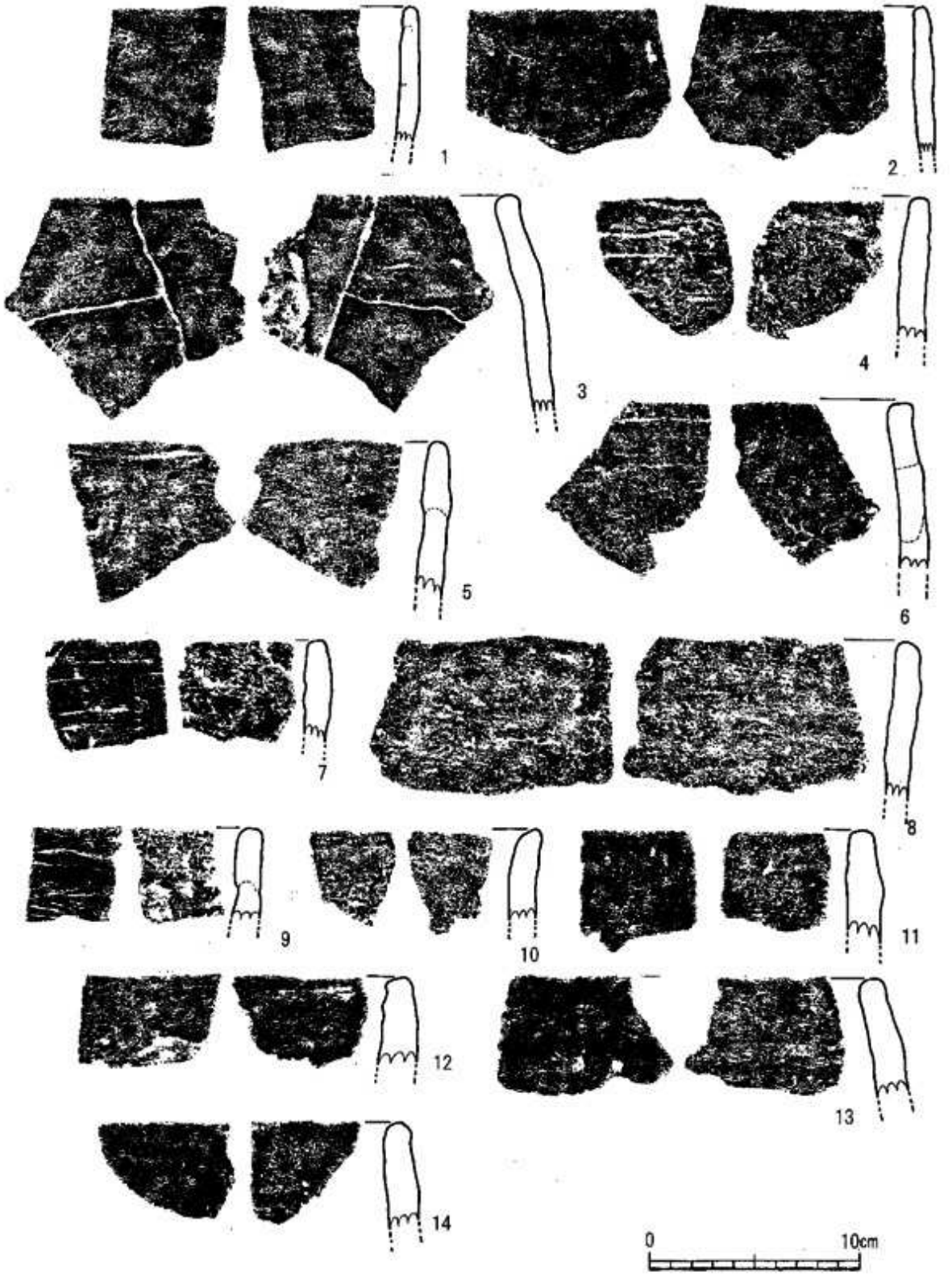
(2)　縄文時代後期の土器

縄文時代後期の包含層は調査区全体に広がるが、２－Ｂ、２－Ｃ、４－Ｃグリッド等で土器のまとまった出土をみた。土器に有文と無文のものがみられ、器形により鉢、深鉢、浅鉢、皿等に分けることができる。

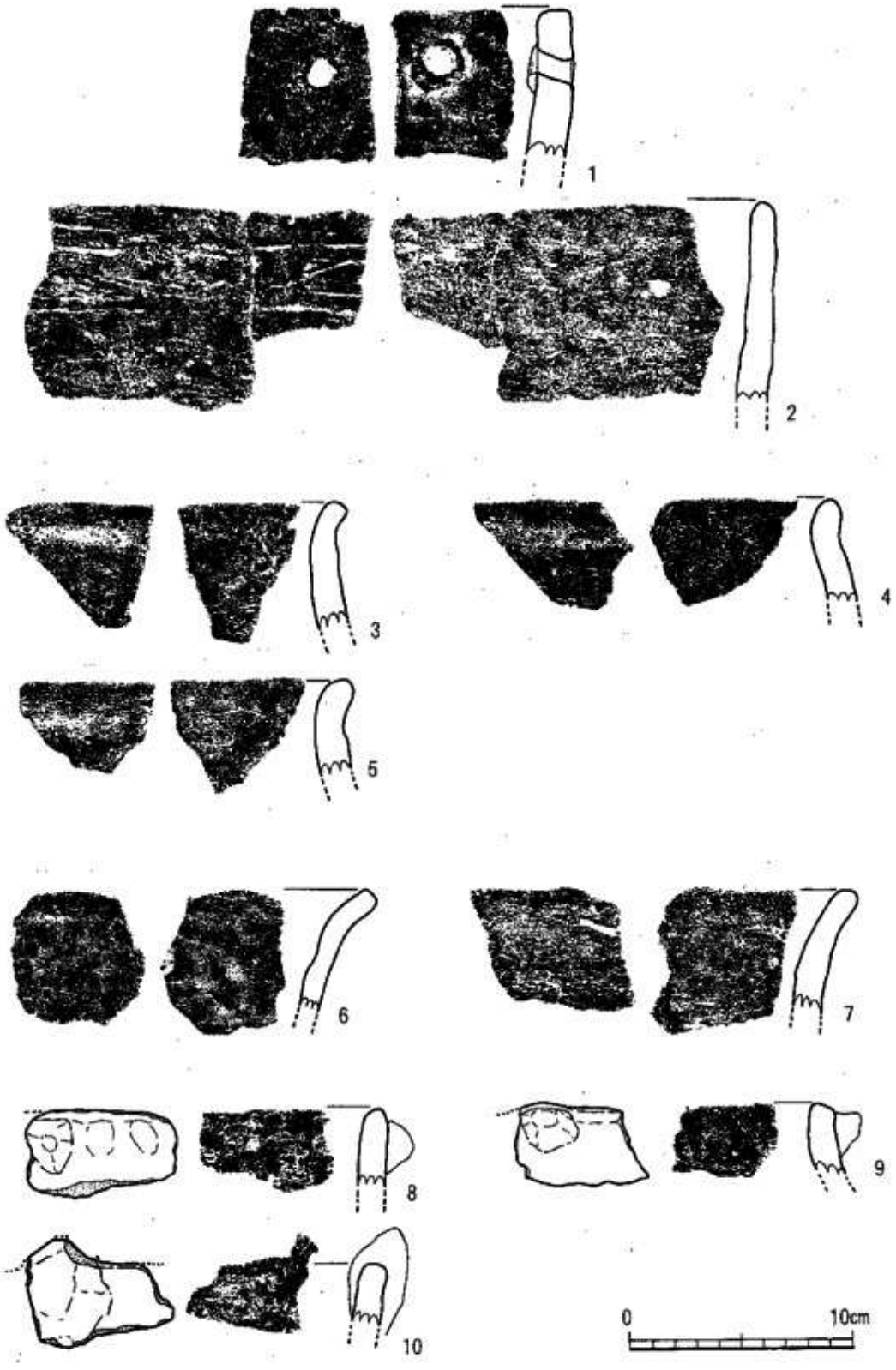
有文の鉢、深鉢については全形を復元しうるものが少ないため、どちらに帰属するものか明確ではないものも多いが、全形の判明するものからみれば鉢の方が多い傾向にある。確認されたものとし有文鉢ⅠＡ1、有文鉢ⅠＡ2、有文深鉢ⅠＡ1、有文深鉢ⅠＡ2、有文鉢ⅡＡ1、有文鉢ⅡＡ2、有文深鉢ⅡＡ、有文深鉢ⅡＢ、有文深鉢ⅡＣ、有文鉢ⅢＡ、有文鉢ⅢＢ、有文深鉢ⅢＡ、有文深鉢Ⅲなどがある。また、有文浅鉢もわずかながら確認でき有文浅鉢ⅠＡ、有文浅鉢ⅡＣなどがみられるが、有文深鉢に比べ圧倒的に少ない。

無文については深鉢のほか鉢、皿が若干確認されている。無文深鉢はⅠＡ、ⅡＢ、ⅢＡなどがある。有文に比べ無文のほうが量的には少ない。

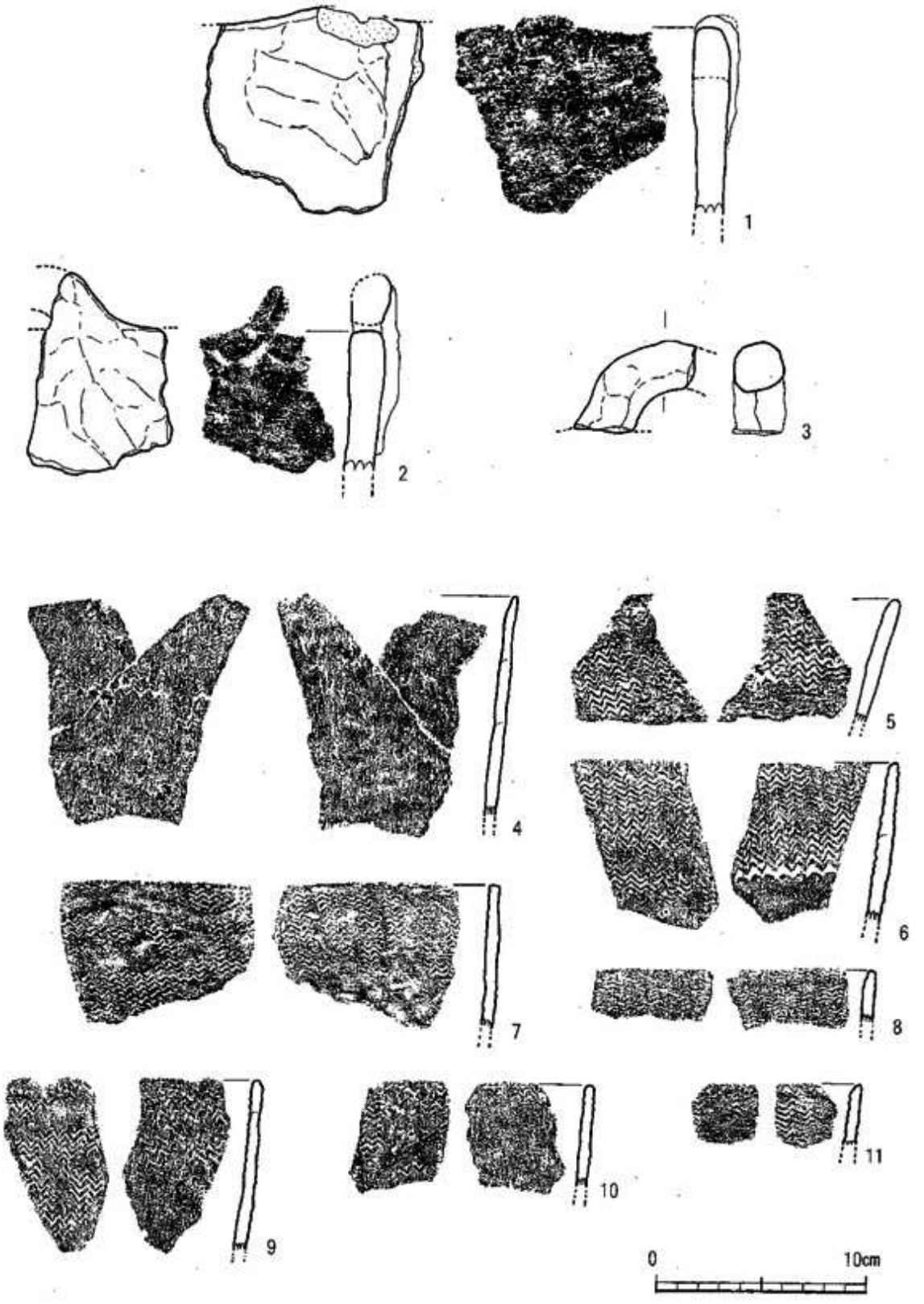
以上のように包含層出土の縄文時代後期土器は、Ⅱ類が最も多く、次いでⅠ類、Ⅲ類で、Ⅳ類はほとんどみられない傾向にある。また出土グリッドからみるとⅠ類は４－Ｃグリッドに、Ⅱ・Ⅲ類は２－Ｂ、２－Ｃグリッドに各々集中する状況が読み取れる。



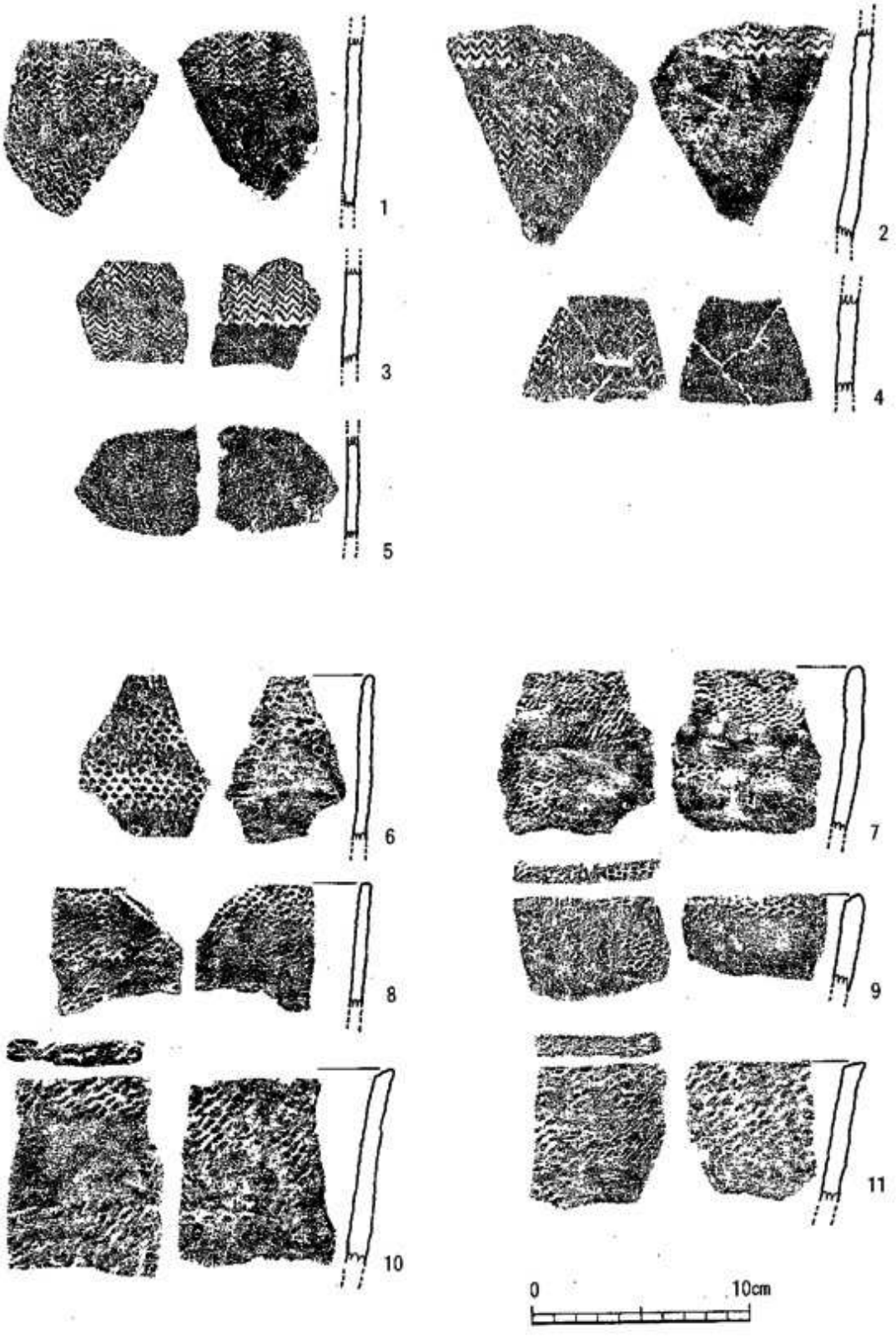
第114図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代早期土器（1）



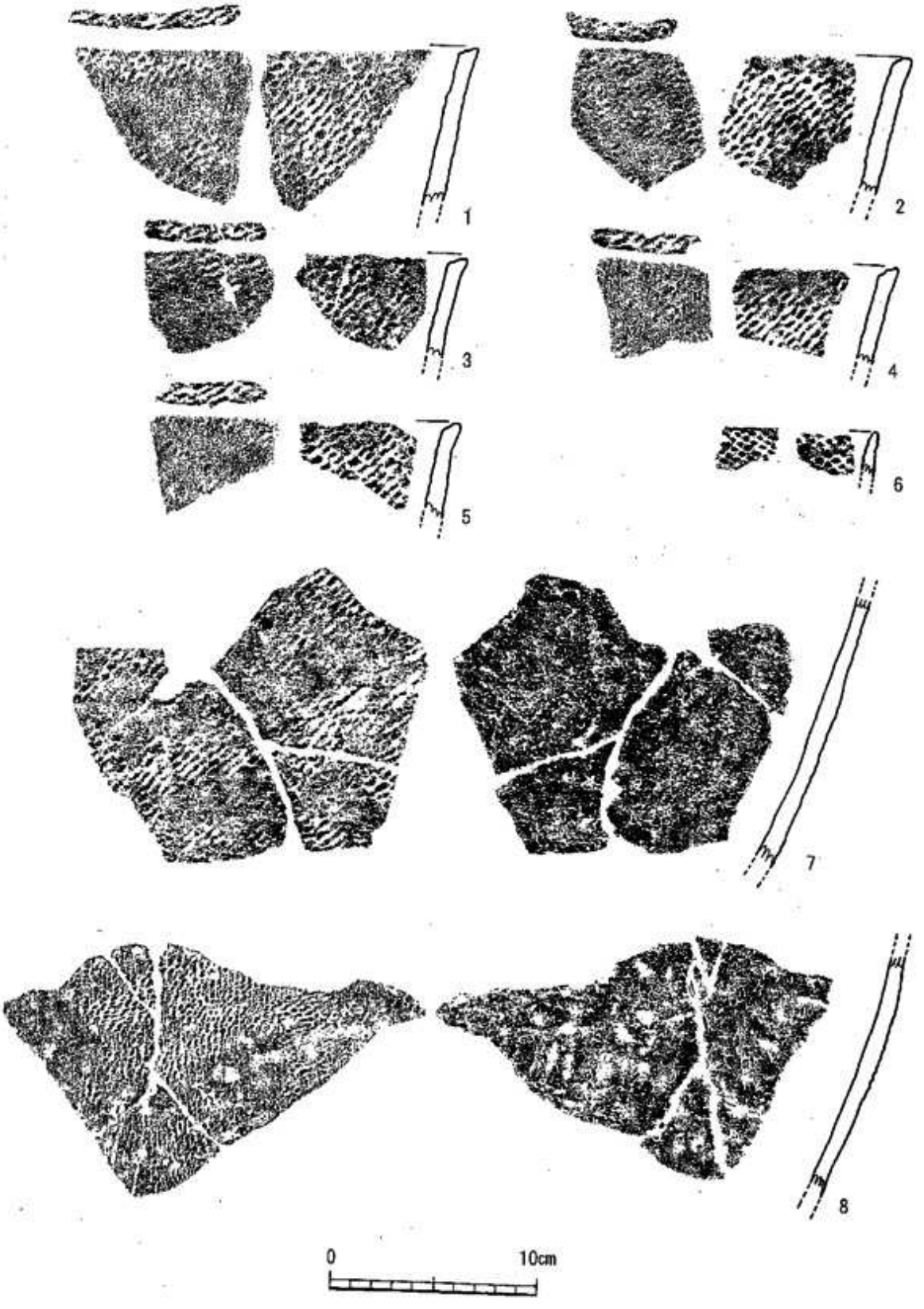
第115図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代早期土器（2）



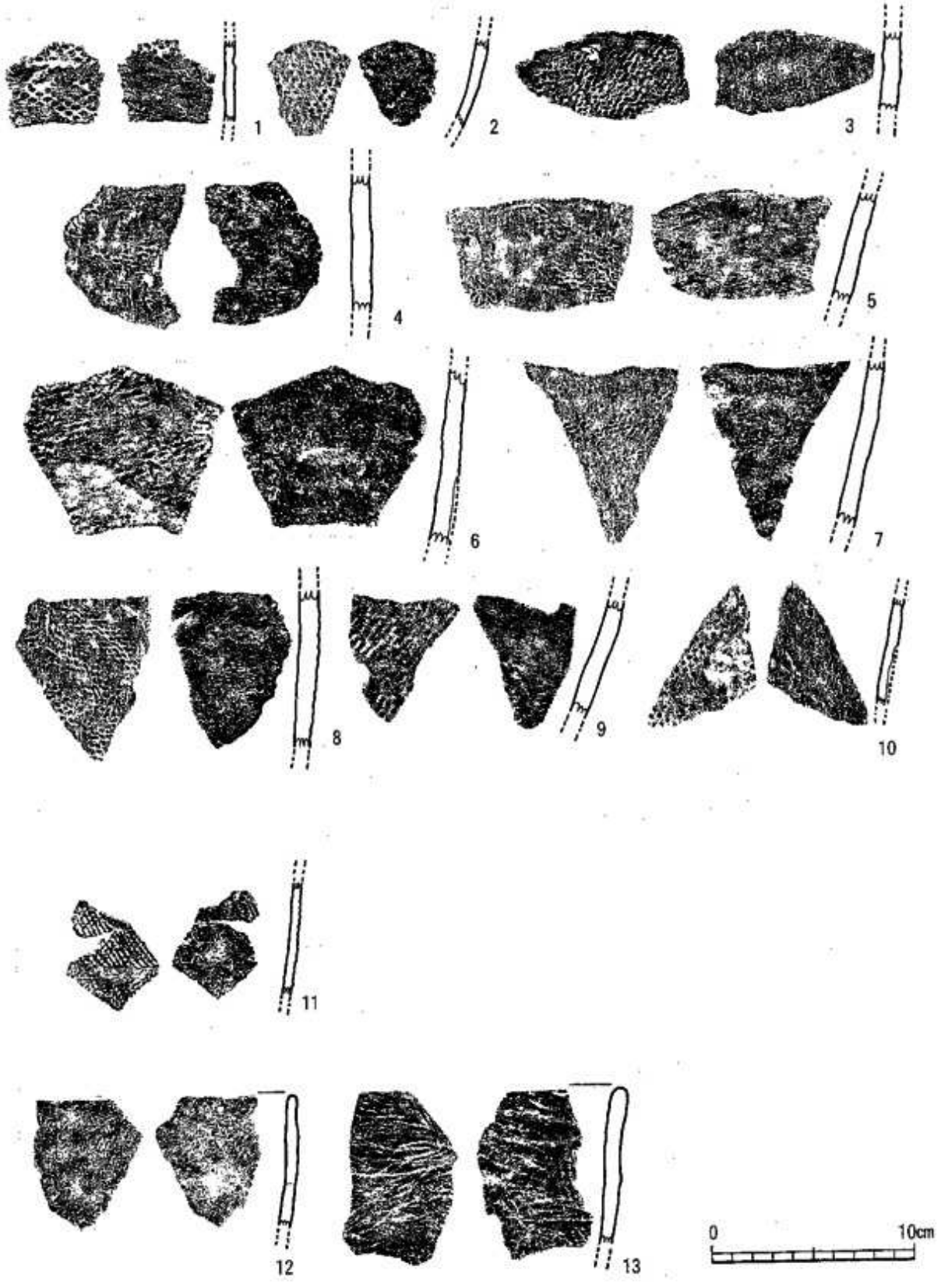
第116図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代早期土器（3）



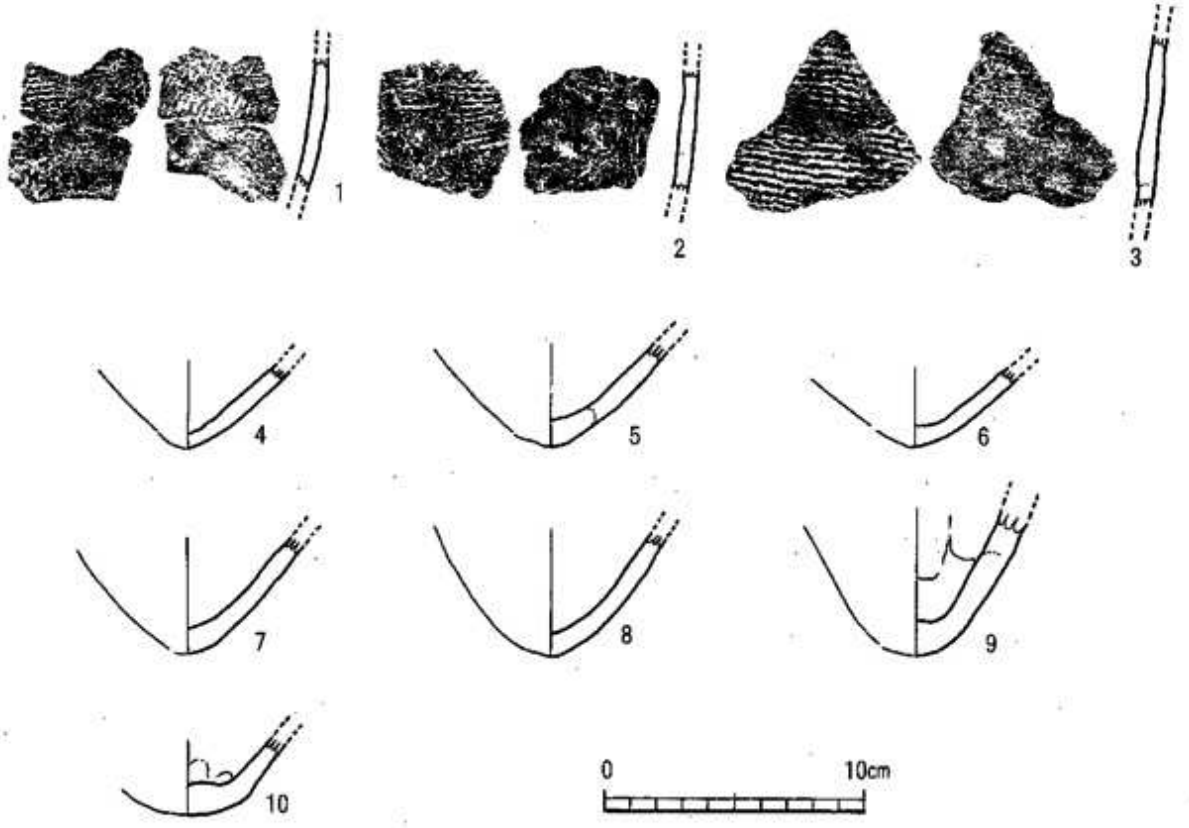
第117図　飯田二反田遺跡 昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代早期土器（4）



第118図　飯田二反田遺跡 昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代早期土器（5）



第119図　飯田二反田遺跡 昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代早期土器（6）



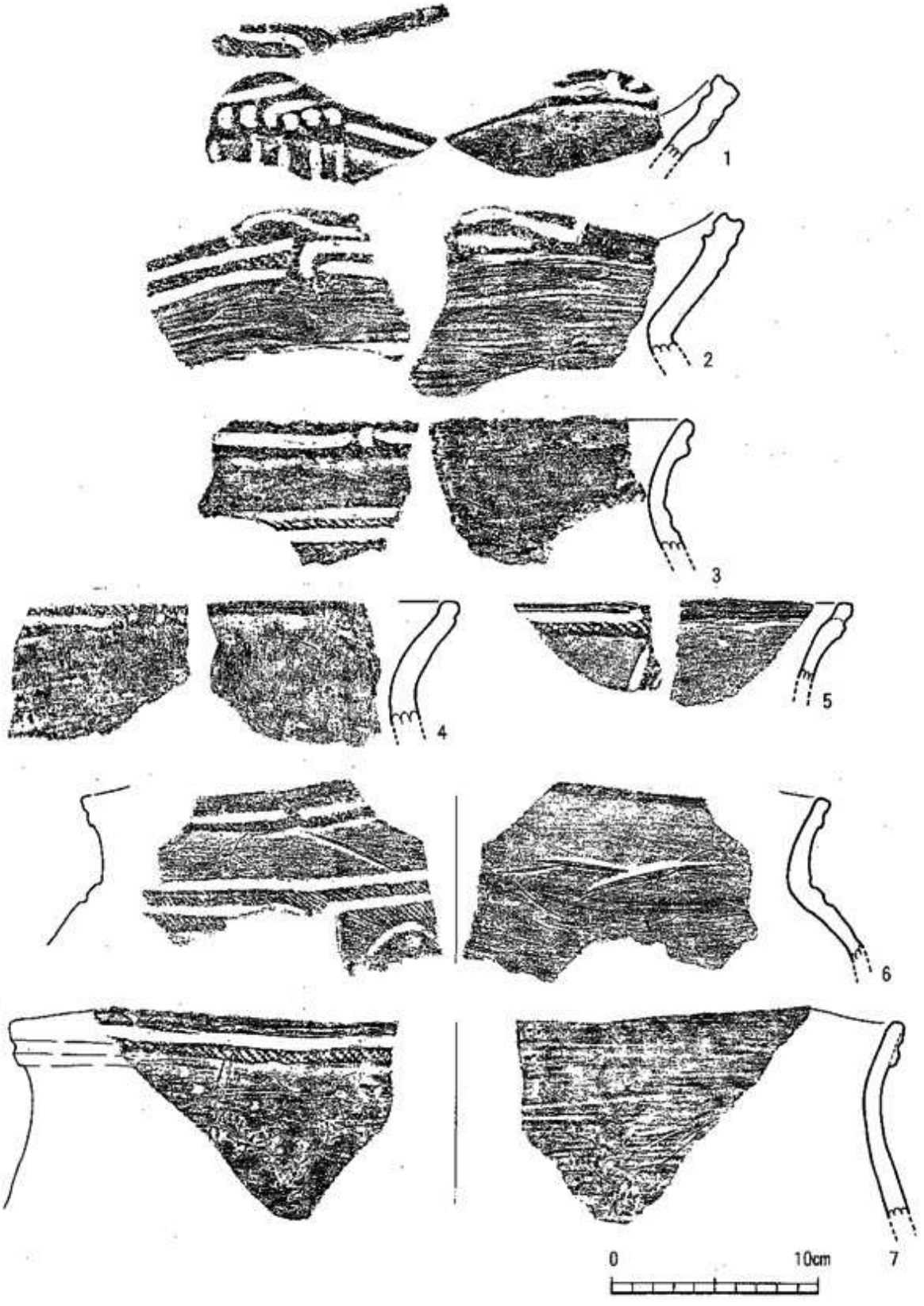
第 120 図　飯田二反田遺跡 昭和 63・平成元年度調査区出土縄文時代早期土器（7）

表17　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代早期土器観察表（1）

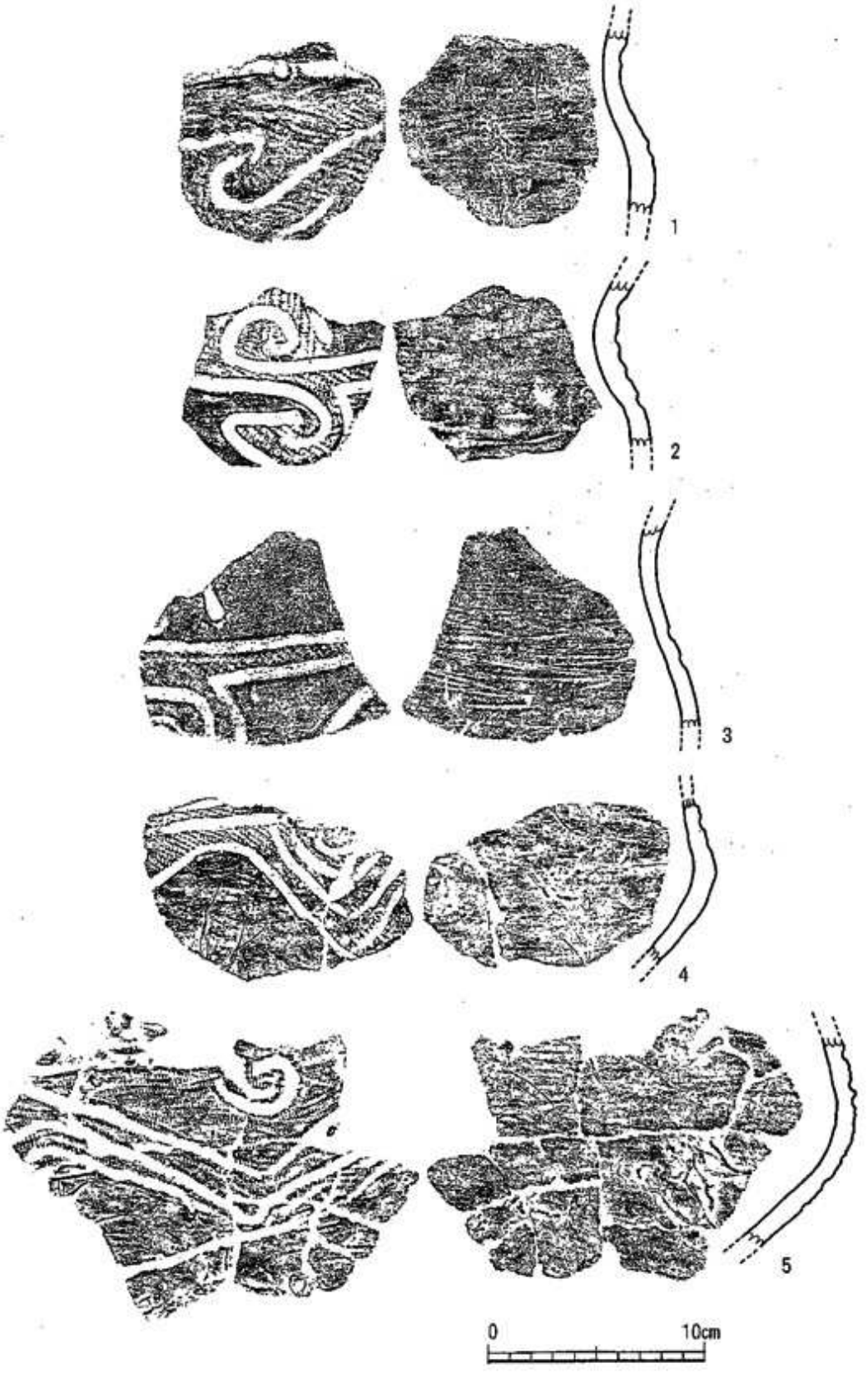
図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 その他 白	胎土 その他 赤	胎土 その他 灰	胎土 その他 茶	胎土 その他 雲母	備考	分類
114	1	4 C 区	ナデ、一部指おさえ	ナデ、指おさえ	○	○								
	2	4 C 区	ナデ	ナデ、一部指おさえ	○	○			○					
	3	3 C 区	ナデ、一部指おさえ	ナデ、一部指おさえ	○	○		○	○					
	4	3 D 区	ナデ,口縁下に沈線文状のもの	ナデ	○	○		○						
	5	3 D 区	ナデ、一部指おさえ	ナデ、一部指おさえ	○	○		○						
	6	3 D 区	ナデ,口縁下に沈線文状のもの	ナデ	○	○		○						
	7	3D区土坑	ナデ	ナデ	○	○		○						
	8	4 号溝	ナデ、オサエによる凹凸	ナデ、一部指おさえ	○	○	○							
	9	3D区土坑	横方向のナデ	ナデ	○	○		○						
	10	3 D 区	ナデ	ナデ、一部指おさえ	○	○		○						
	11	不　明	ナデ	ナデ	○	○		○						
	12	4 C 区	ナデ	ナデ	○	○		○						
	13	4 C 区	ナデ、一部指おさえ	ナデ	○	○		○				○		
	14	4 C 区	ナデ	ナデ	○	○		○				○		
115	1	4 C 区	ナデ,外から内への焼成前の穿孔	ナデ	○	○		○						
	2	3D区土坑	ナデ,口縁下に沈線文状のもの	ナデ、指おさえ	○	○		○						
	3	4 C 区	ナデ	ナデ	○	○		○	○					
	4	3 B 区	ナデ	ナデ	○	○		○					結晶質凝灰石片	
	5	3 B 区	ユビナデ、ナデ	ナデ	○	○		○						
	6	3 B 区	ナデ、一部指おさえ	ナデ、一部指おさえ	○	○		○	○					
	7	4 C 区	ナデ	横方向のナデ、指おさえ	○	○		○	○	○				
	8	4 B 区	コブ状の貼り付け突起,指おさえ	ナデ	○	○	○	○						
	9	5 B 区	コブ状の貼り付け突起,ナデ	ナデ、指おさえ	○	○	○							
	10	3 D 区	口縁付近に扁平な貼り付け	ナデ	○	○		○				○		
116	1	4 C 区	口縁付近に扁平な貼り付け,ナデ,ユビナデ	ナデ、一部指おさえ	○	○		○						
	2	4 C 区	口縁付近に扁平な貼り付け,ナデ,ユビナデ	ナデ、一部指おさえ	○	○		○						
	3	4 C 区	把手状貼り付け		○	○		○						
	4	4 C 区	口縁下横走山形押型文,以下ナデ	口縁下横走山形押型文,ナデ,一部指おさえ	○	○		○						
	5		横走山形押型文	口縁下横走山形押型文,ナデ	○	○								
	6	3 C 区	横走山形押型文	口縁下横走山形押型文,ナデ	○	○		○				○		
	7	4 C 区	口縁下横走山形押型文,一部ナデ消し	口縁下横走山形押型文,ナデ	○	○		○	○					
	8	4 D 区	横走山形押型文	横走山形押型文	○	○		○						
	9	3 D 区	横走山形押型文	口縁下横走山形押型文,ナデ	○	○								
	10	4 C 区	口縁下横走山形押型文,一部ナデ消し	口縁ちかく横走山形押型文,ナデ,ユビおさえ	○	○		○						
	11	不　明	横走山形押型文	横走山形押型文	○	○								
117	1	3 B 区	横走山形押型文	横走山形押型文、ナデ	○	○		○						
	2	4 C 区	無文帯をもち横走山形押型文	横走山形押型文、ナデ	○	○								
	3	3 C 区	横走山形押型文	横走山形押型文、ナデ	○	○								
	4	4 D 区	横走山形押型文	ナデ、指おさえ	○	○		○						
	5	4 D 区	横走山形押型文	ナデ、指おさえ	○	○		○						
	6	3 D 区	無文帯をもち横走楕円押型文	口縁下横走楕円押型文	○	○	○							
	7	4 B 区	横走楕円押型文、一部ナデ消し	口縁下横走楕円押型文、ナデ	○	○		○						
	8	5 B 区	無文帯をもち横走楕円押型文	口縁下横走楕円押型文、ナデ	○	○								
	9	4 D 区	横走楕円押型文のち一部コビナデ	口縁端部上面,口縁下横走楕円押型文	○	○								
	10	4 C 区	横走楕円押型文、一部ナデ消し	口縁端部上面,口縁下横走楕円押型文	○	○								
	11		横走楕円押型文	口縁端部上面,口縁下横走楕円押型文	○	○								
118	1	3 A 区	横走楕円押型文、一部ナデ消し	口縁端部上面,口縁下横走楕円押型文	○	○		○						
	2	3 B 区	横走楕円押型文	口縁端部上面,口縁下横走楕円押型文	○	○								
	3	4 C 区	横走楕円押型文	口縁端部上面,口縁下横走楕円押型文	○	○								
	4	3 B 区	横走楕円押型文	口縁端部上面,口縁下横走楕円押型文	○	○								
	5	4 C 区	ナデか	口縁端部上面,口縁下横走楕円押型文	○	○								
	6	3 D 区	横走楕円押型文	横走楕円押型文、ナデ	○	○						○		
	7	4 C 区	横走楕円押型文、一部ナデ消しか	ナデ	○	○		○						
	8	4 D 区	横走あるいは不定方向の楕円押型文、一部ナデ消し	ナデ、指おさえ	○	○		○						
119	1	4 C 区	横走楕円押型文	横走楕円押型文、ナデ	○	○		○						
	2	4 D 区	横走（?）楕円押型文	ナデ、指おさえ	○	○		○						
	3	4 C 区	横あるいは斜走の楕円押型文	ナデ、指おさえ	○	○		○						
	4	4 C 区	横走楕円押型文	ナデ、指おさえ	○	○		○						
	5	4 D 区	横走楕円押型文	ナデ、指おさえ	○	○		○						
	6	4 C 区	横走楕円押型文	ナデ、指おさえ	○	○		○						
	7	4 D 区	横走楕円押型文	ナデ	○	○		○						
	8	4 D 区	横あるいは斜走の楕円押型文	ナデ、指おさえ	○	○		○						
	9	4 C 区	横走楕円押型文	ナデ	○	○								

表 18　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土縄文時代早期土器観察表（2）

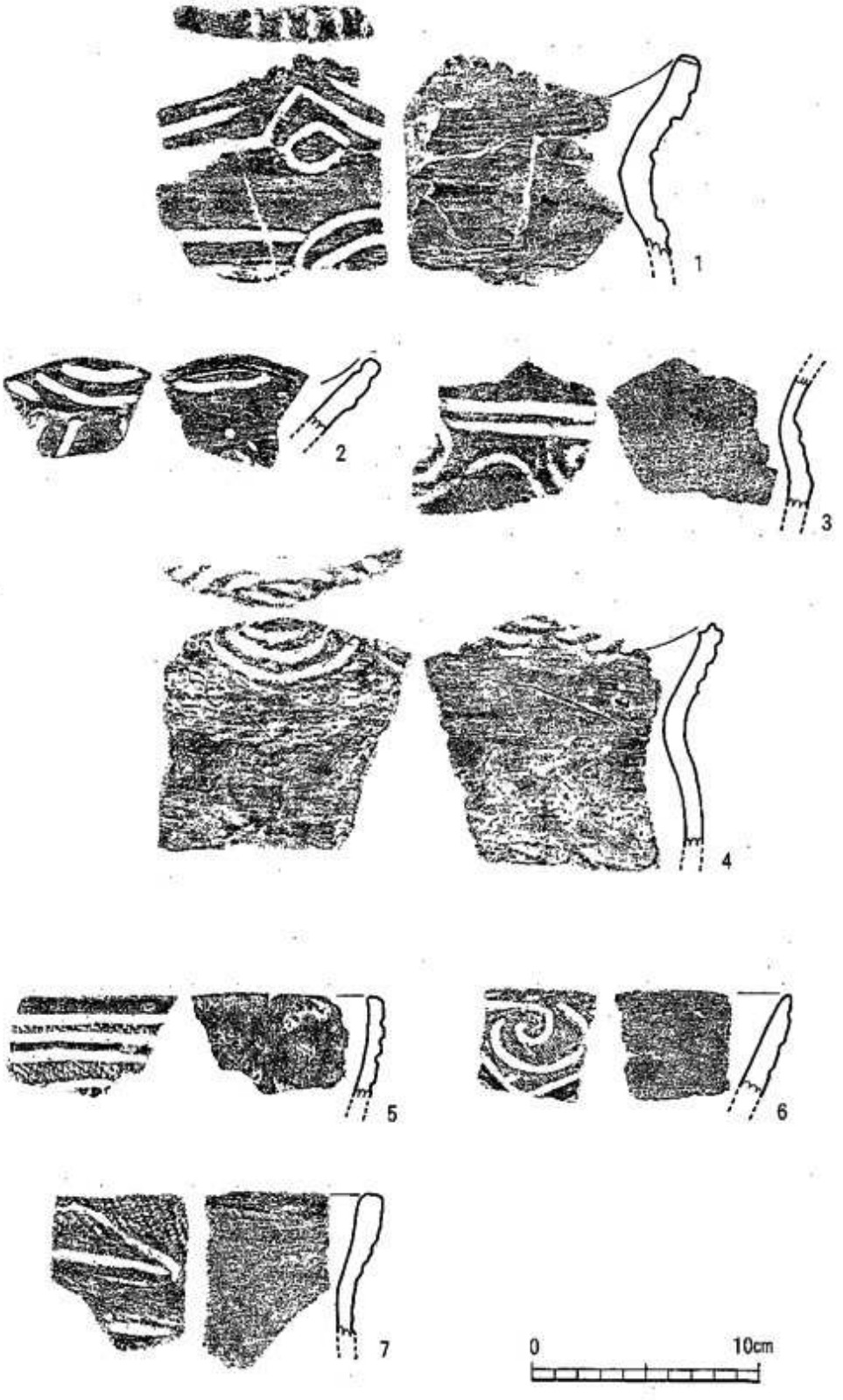
図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法		胎土							備考	分類
			表	裏	角閃石	斜長石	石英	その他					
								白	赤	灰	茶	雲母	
119	10	4C区溝	横走楕円押型文	ナデ	○	○		○					
	11	4C区	横走格子目押型文	ナデ	○	○		○					
	12	3D区	撚糸文	口縁下撚糸文か、ナデ	○	○							
	13	4C区	撚糸文か	ナデ	○	○		○	○	○			
120	1	4C区	撚糸文	撚糸文、ナデ	○	○		○					
	2	4C区	撚糸文	ナデ	○	○		○					
	3	3B区	撚糸文	ナデ、指おさえ	○	○		○					
	4	3C区	ナデ、指オサエ	ナデ、指おさえ	○	○		○					
	5	3C区	ナデ	ナデ、指おさえ	○	○		○					
	6	5B区	ナデ	ナデ	○	○		○					
	7	3B区	ナデ	ナデ、指おさえ	○	○		○					
	8	4C区	ナデ	ナデ	○	○		○		○			
	9	4C区	ナデ	ナデ、指おさえ	○	○		○	○				
	10	4C区	ナデ	ナデ、指おさえ	○	○		○	○				



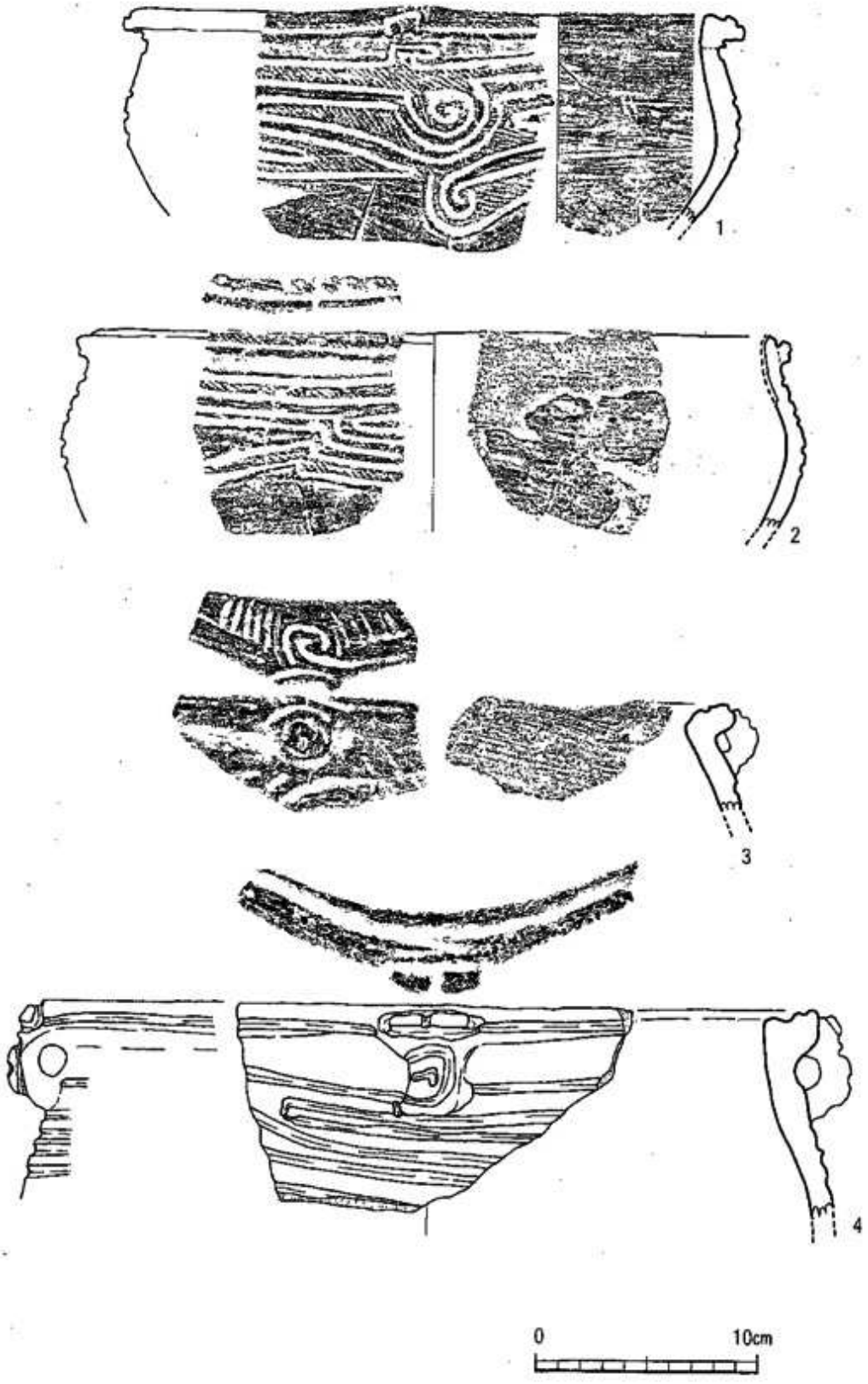
第121図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（1）



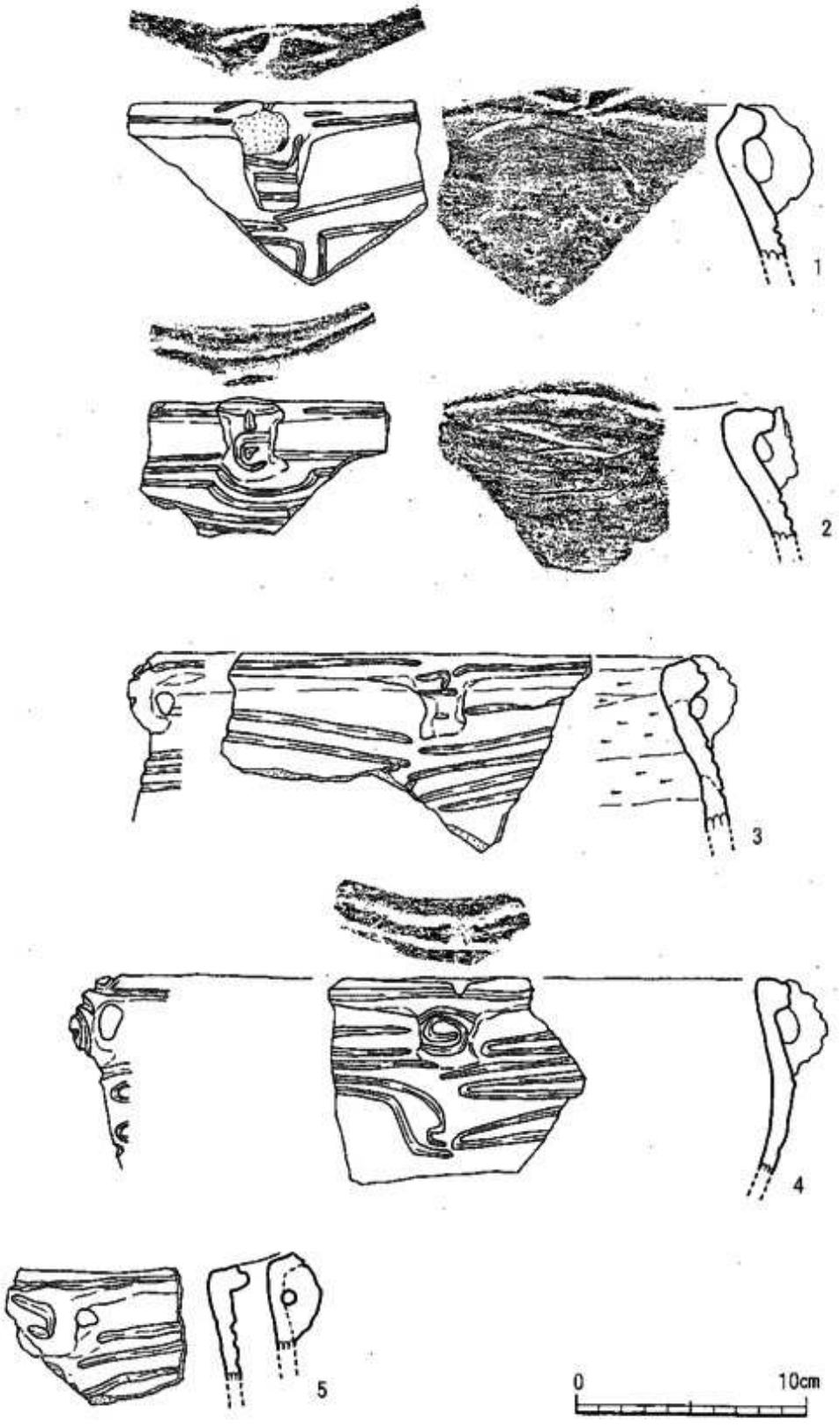
第122図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（2）



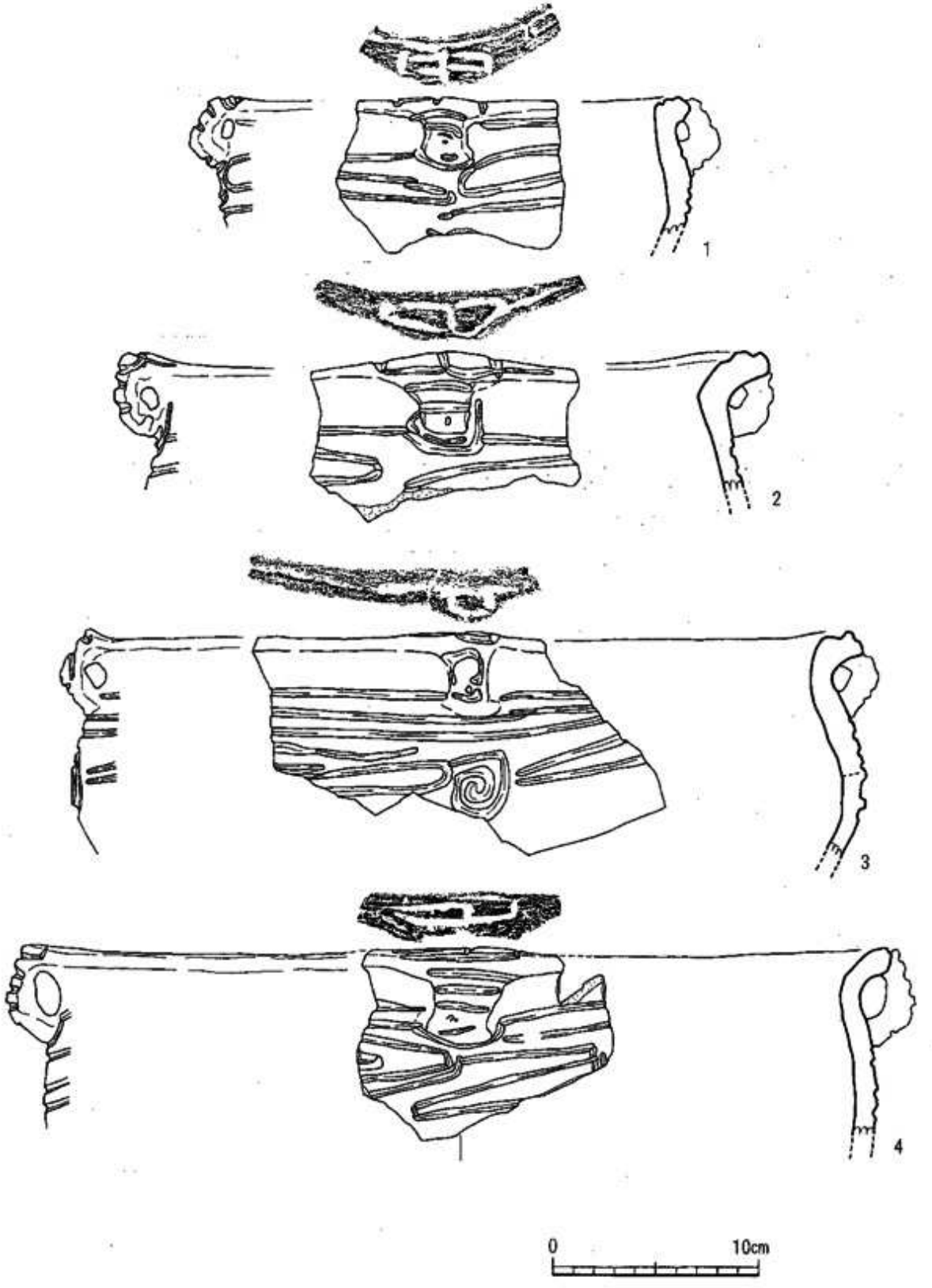
第 123 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（3）



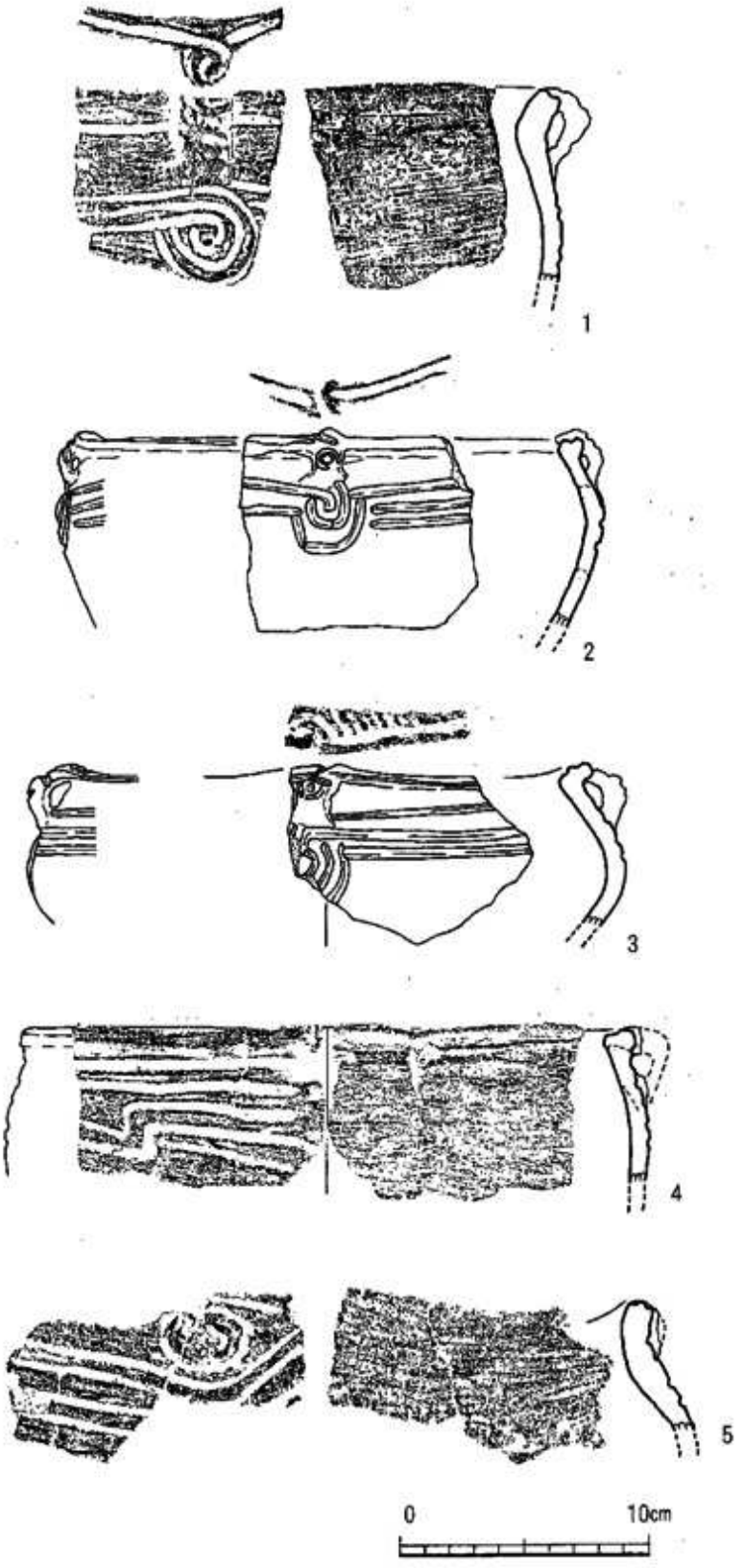
第124図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（4）



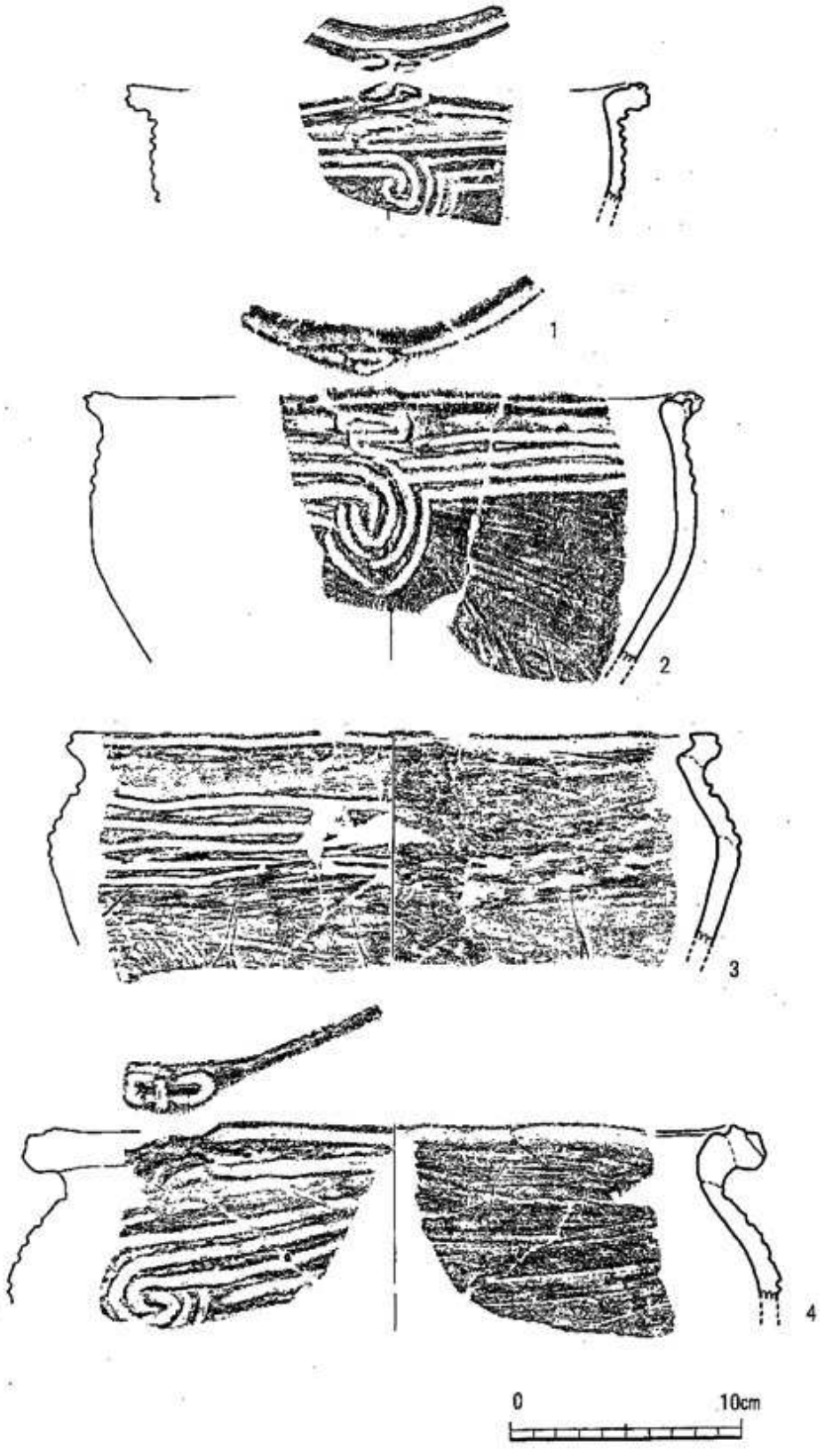
第125図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（5）



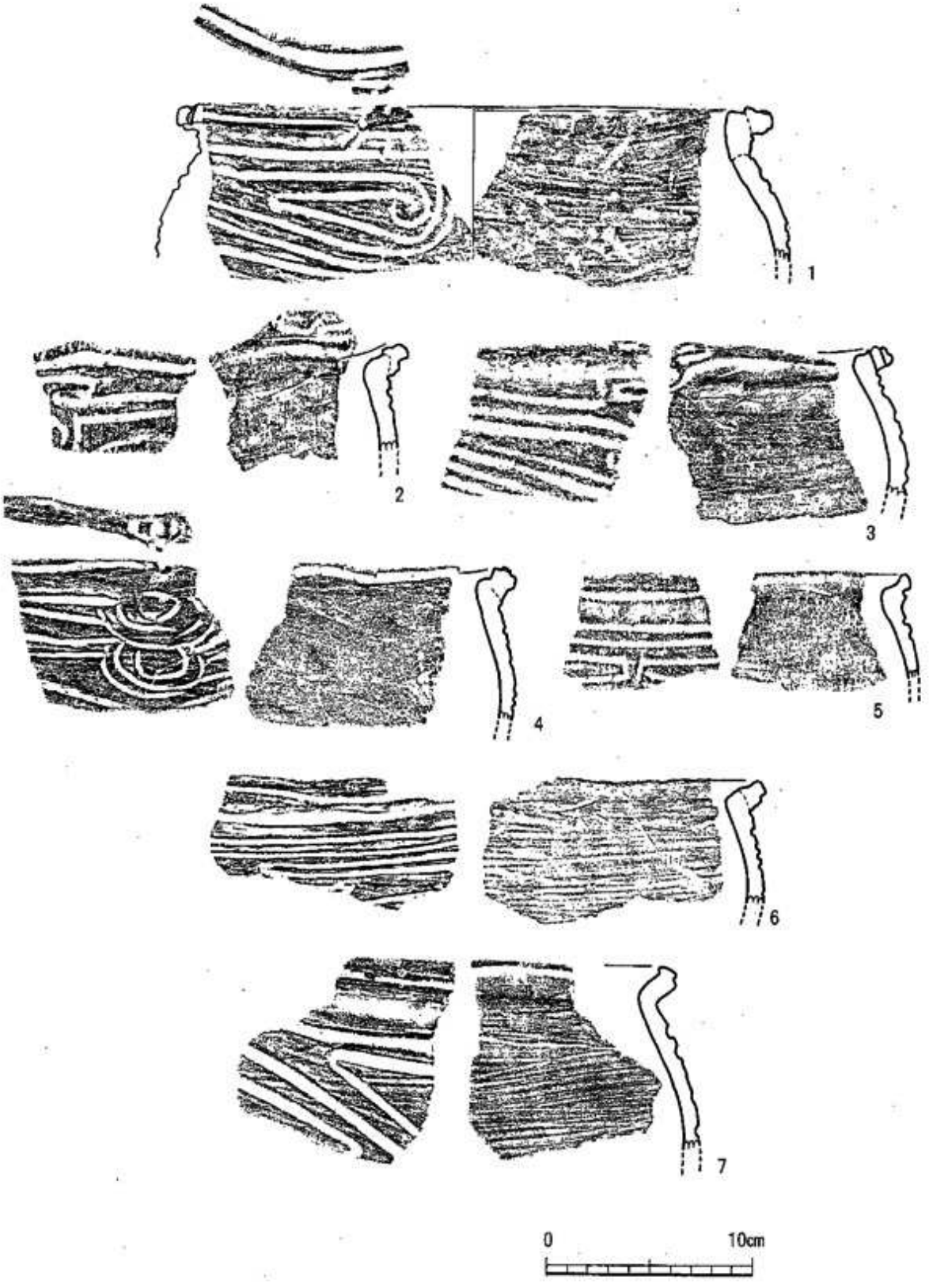
第 126 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（6）



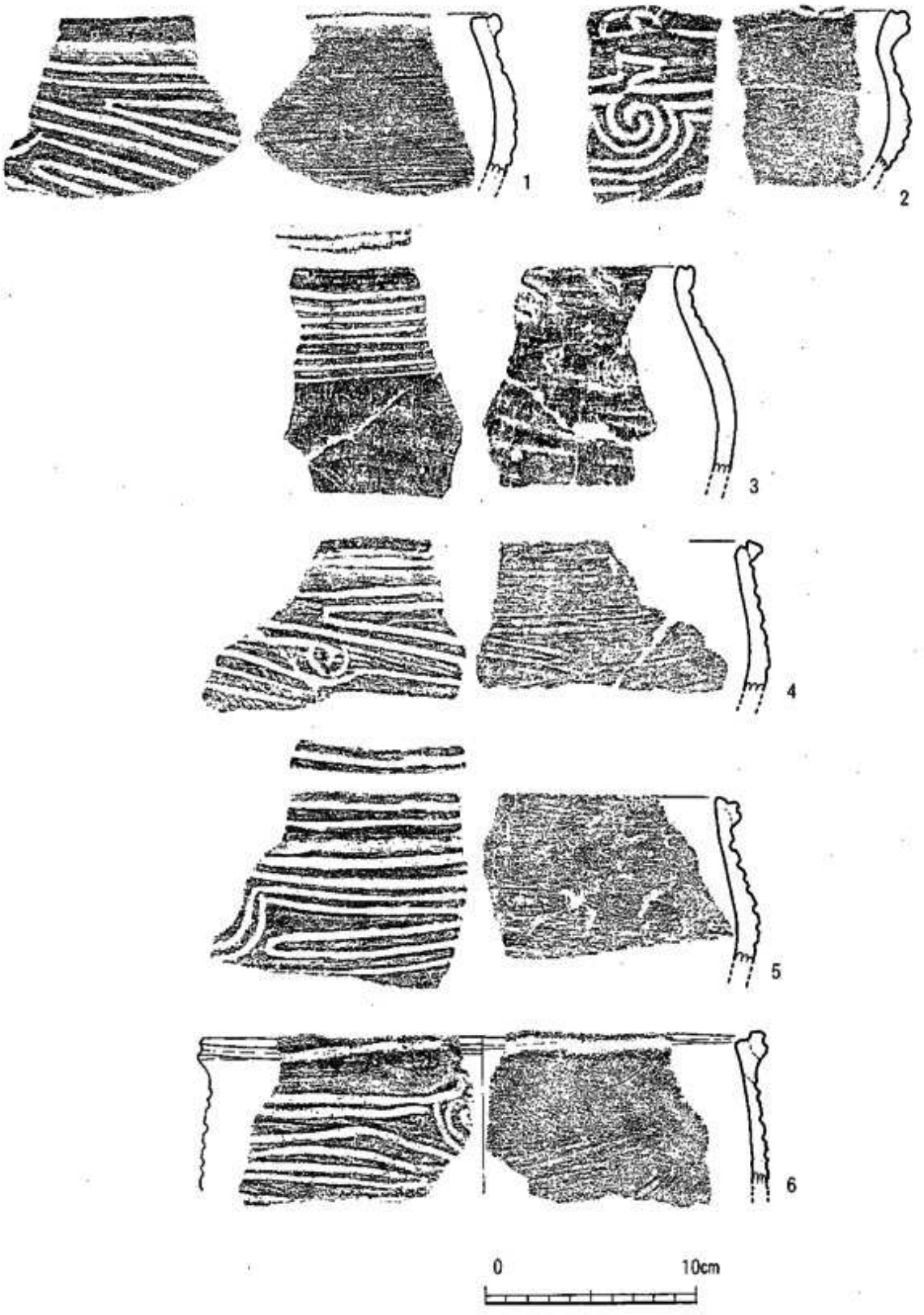
第 127 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（7）



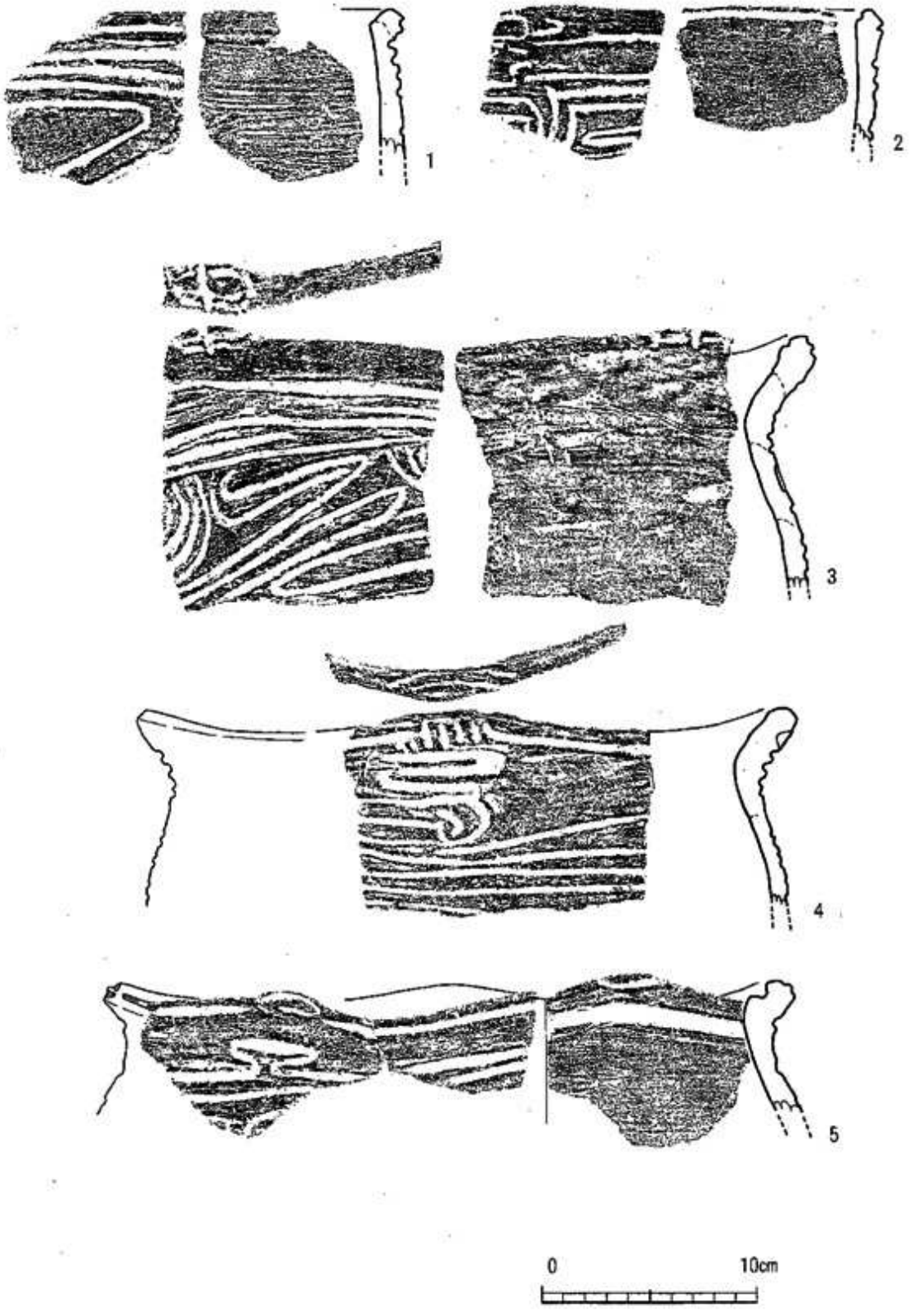
第128図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（8）



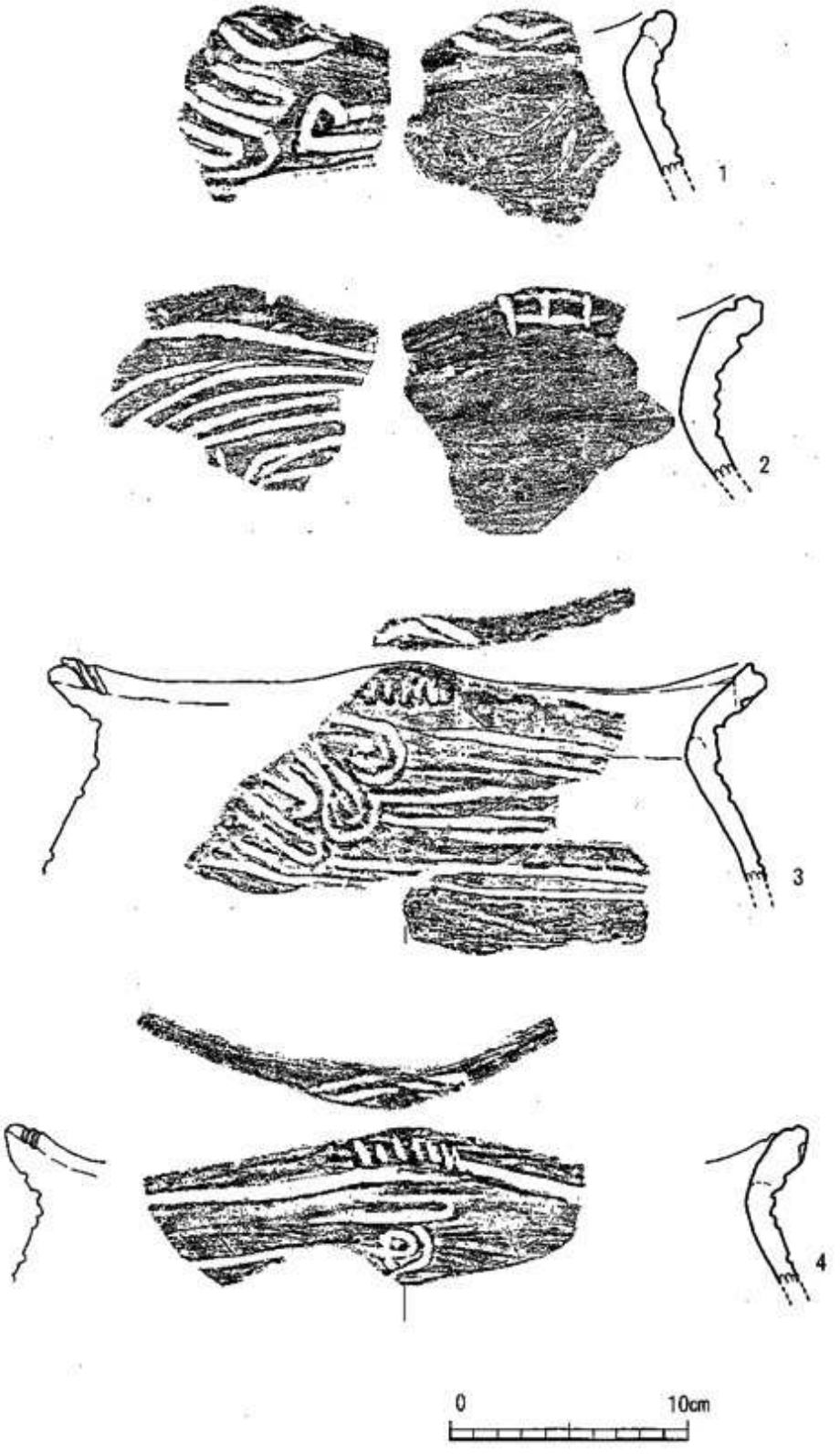
第129図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（9）



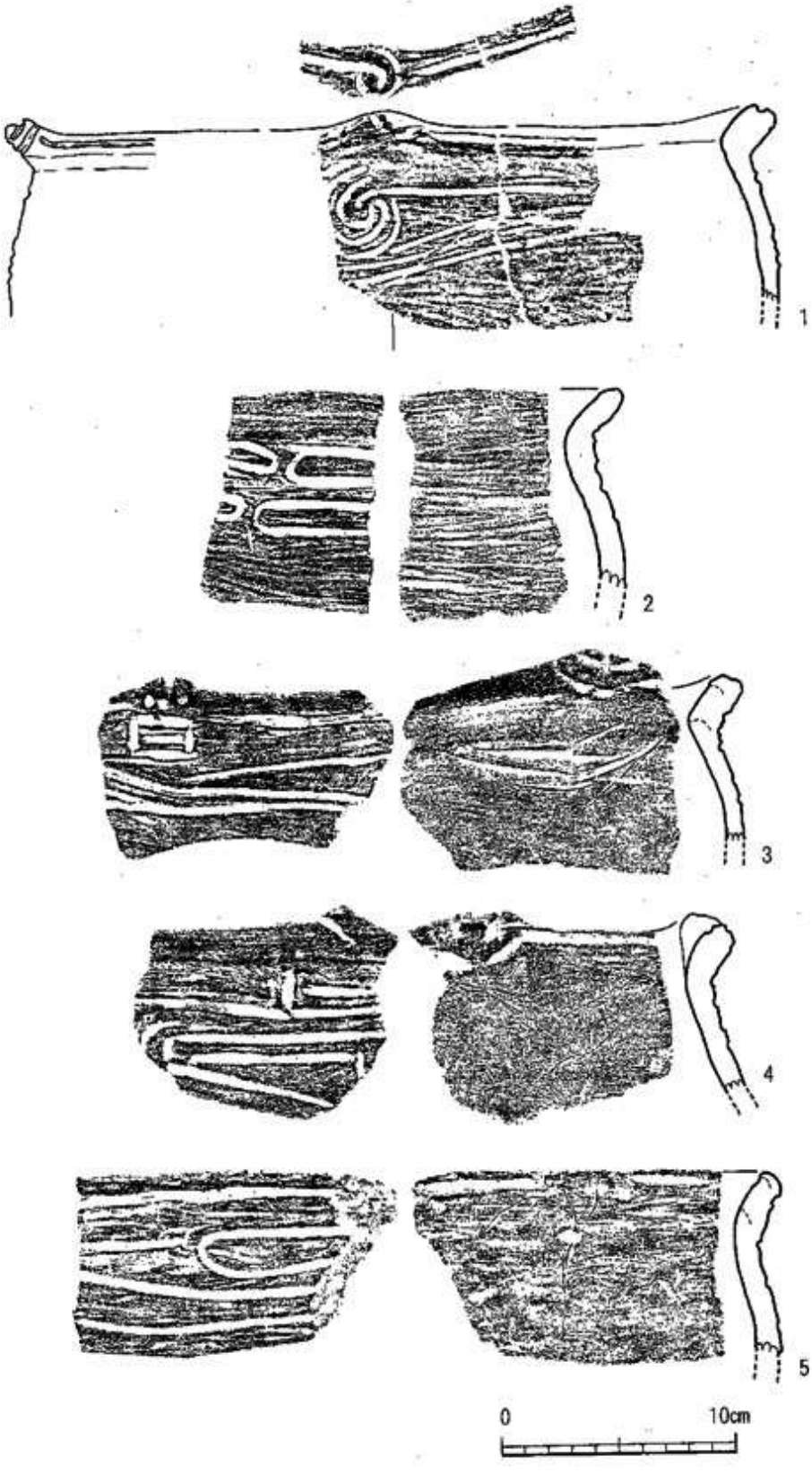
第130図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（10）



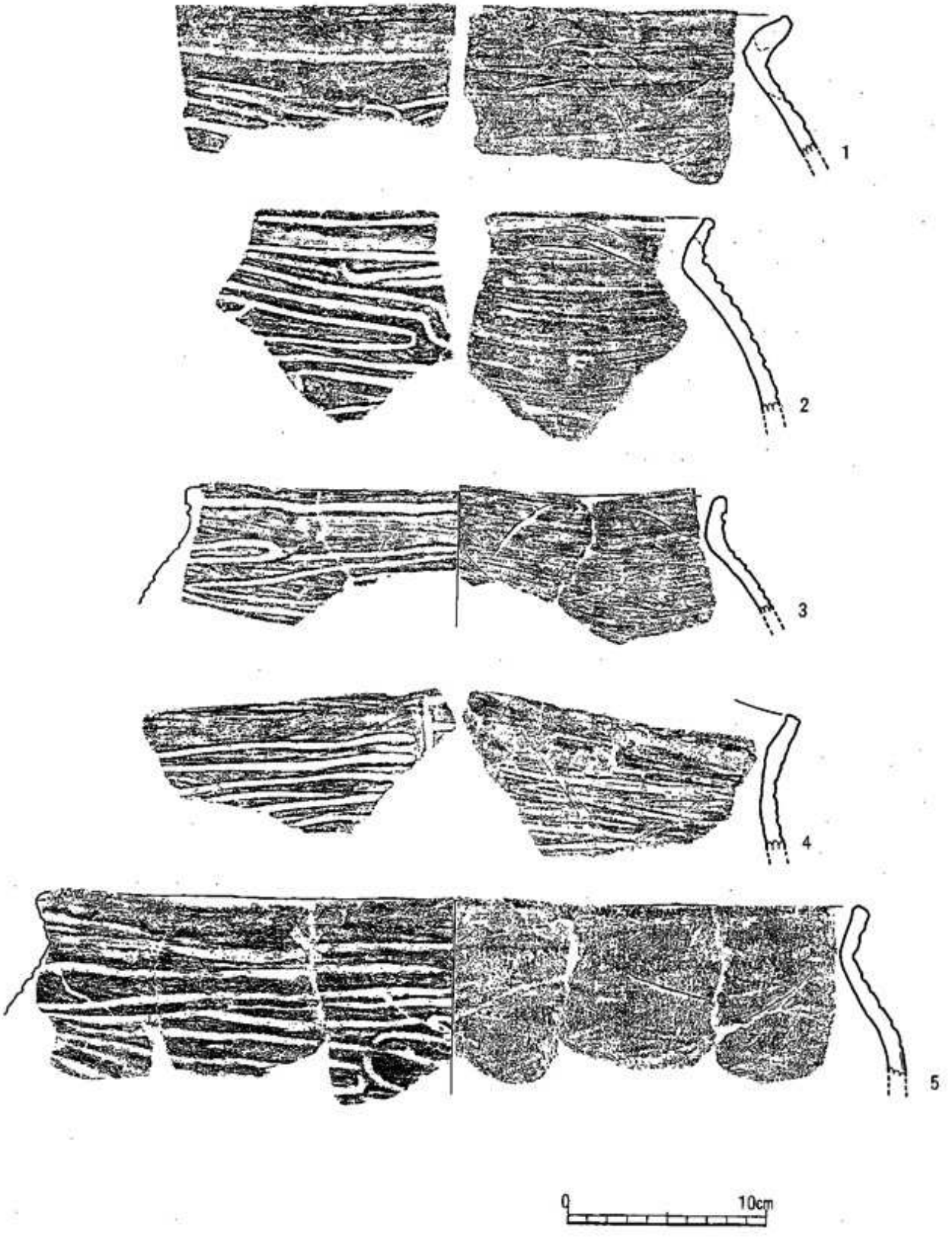
第 131 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（11）



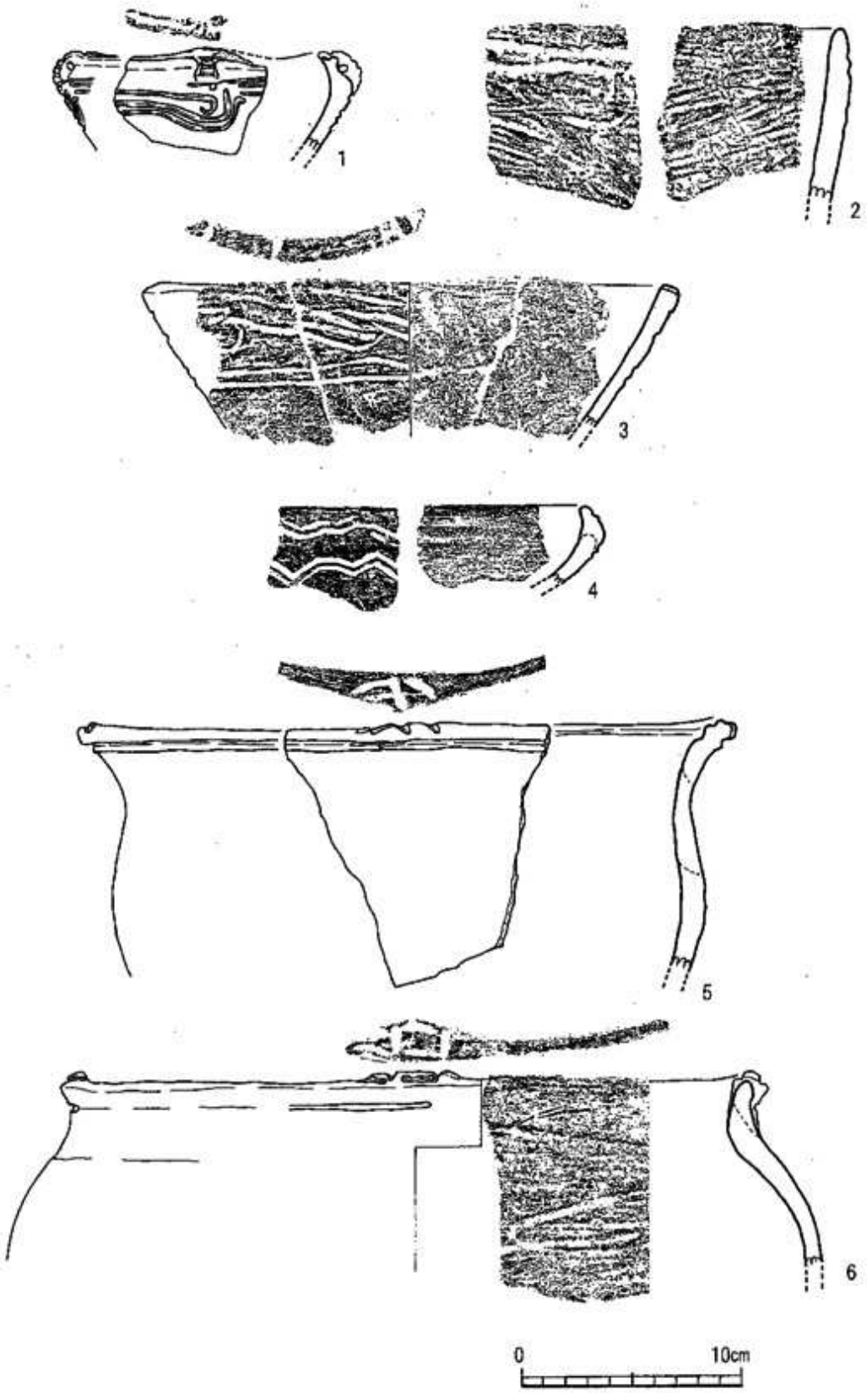
第 132 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（12）



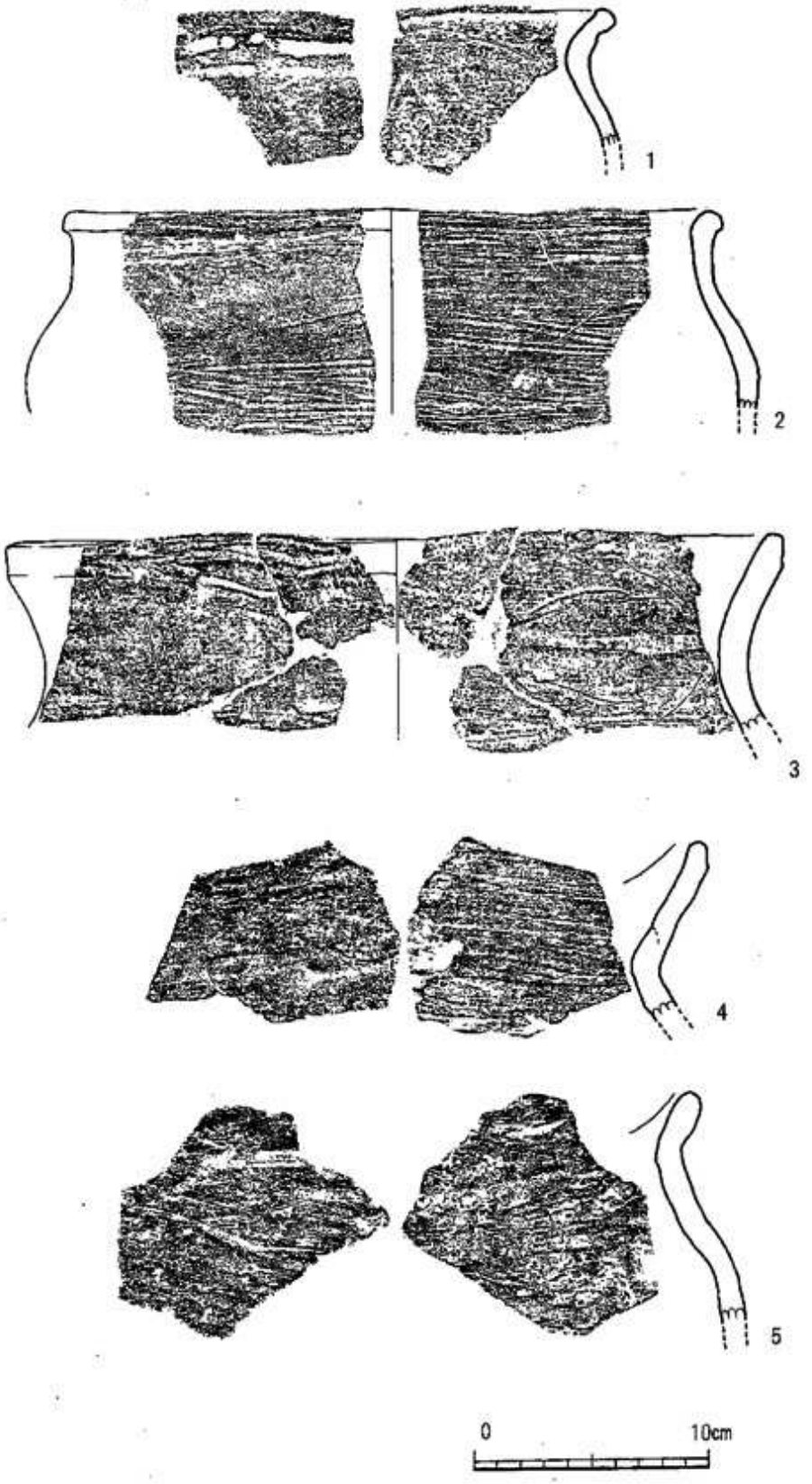
第133図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（13）



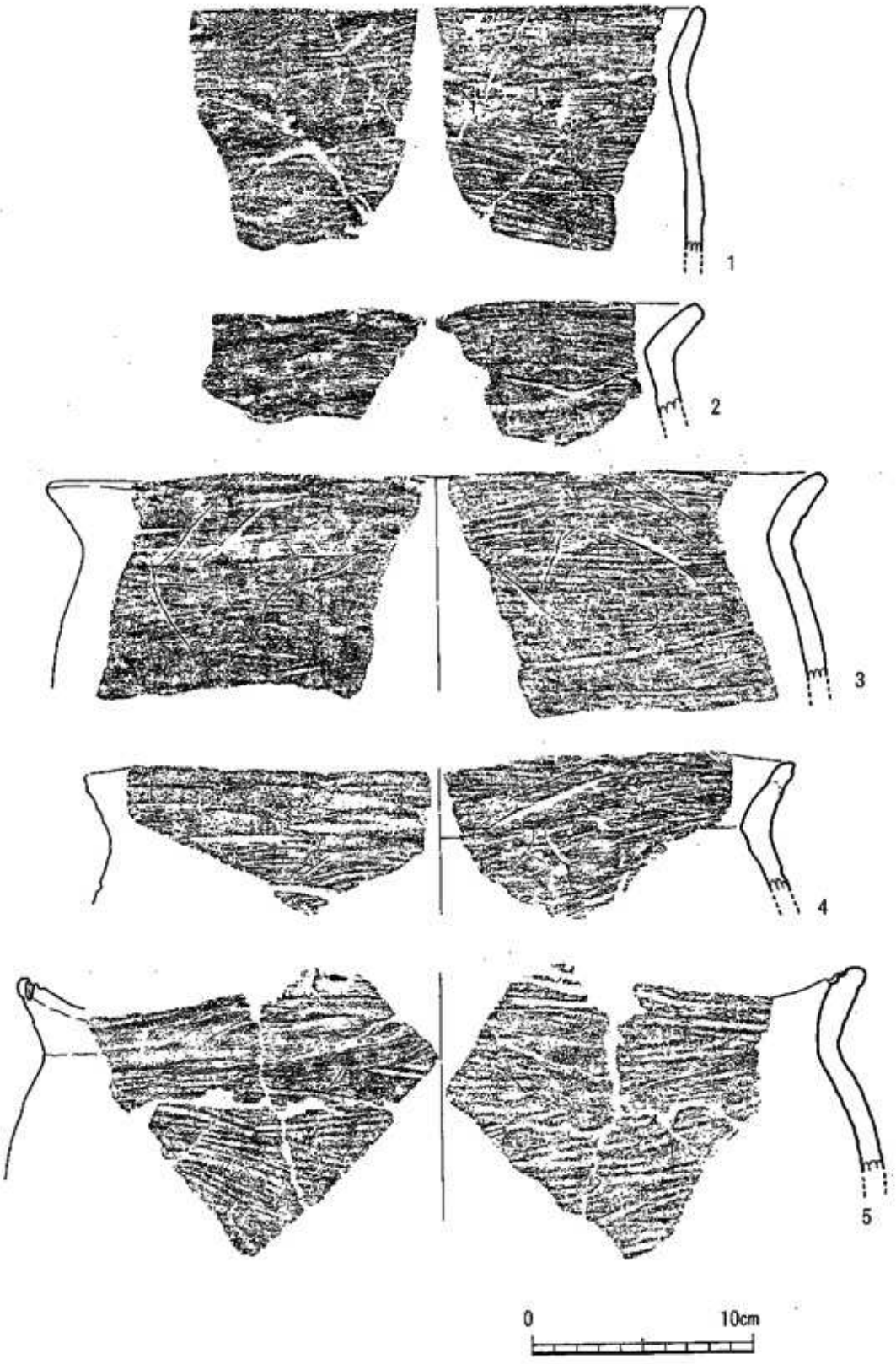
第134図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（14）



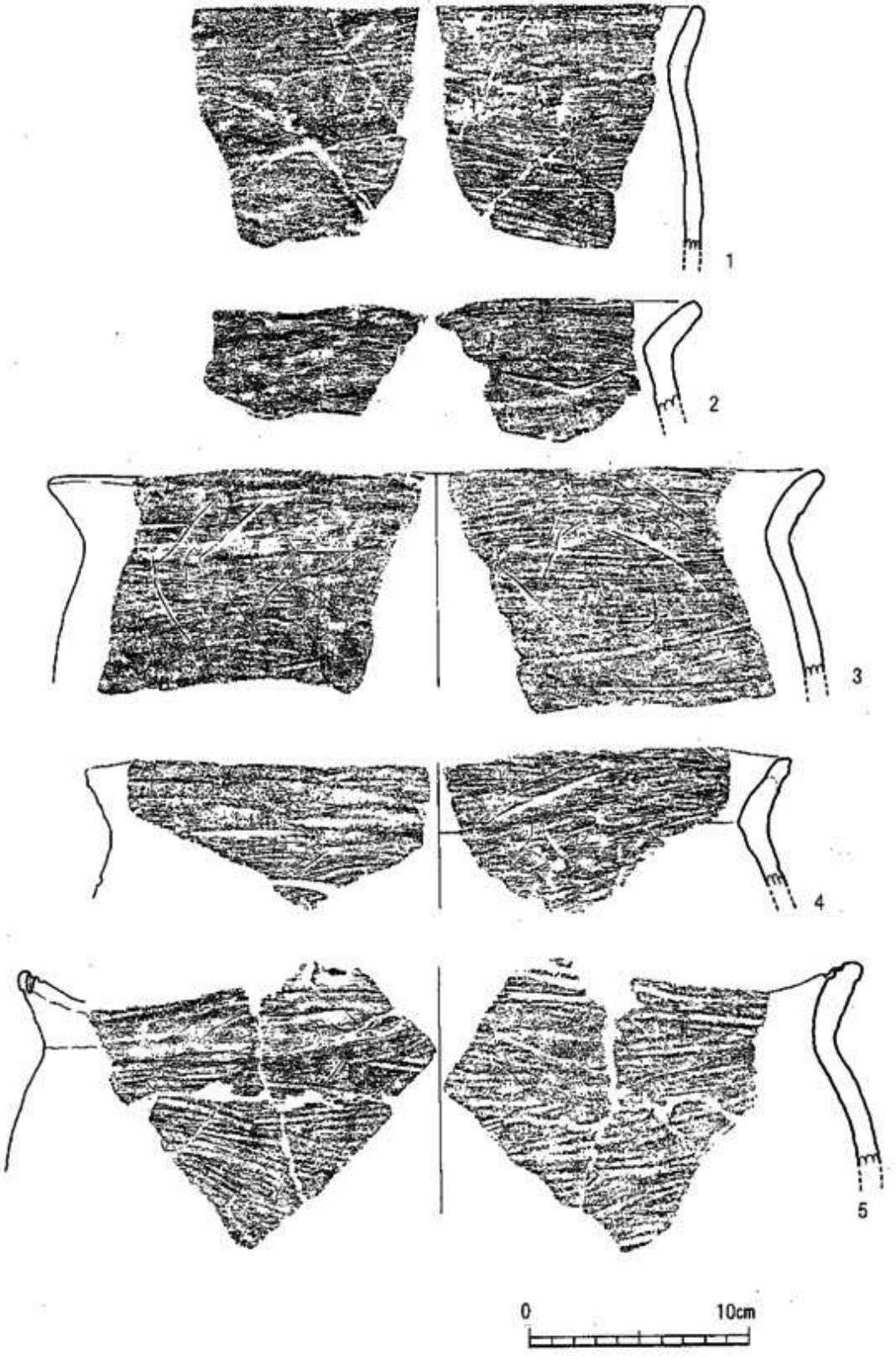
第135図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（15）



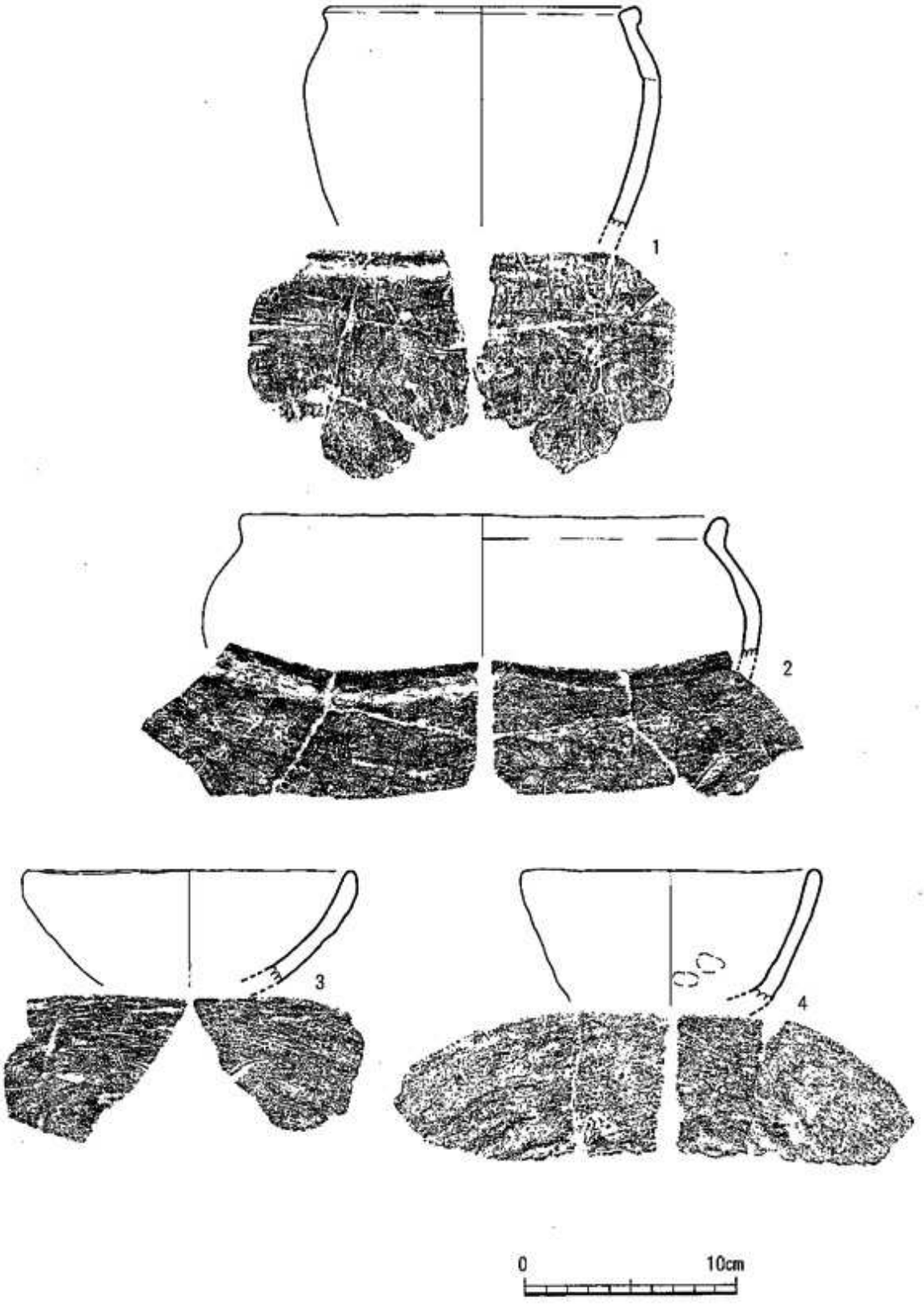
第 136 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（16）



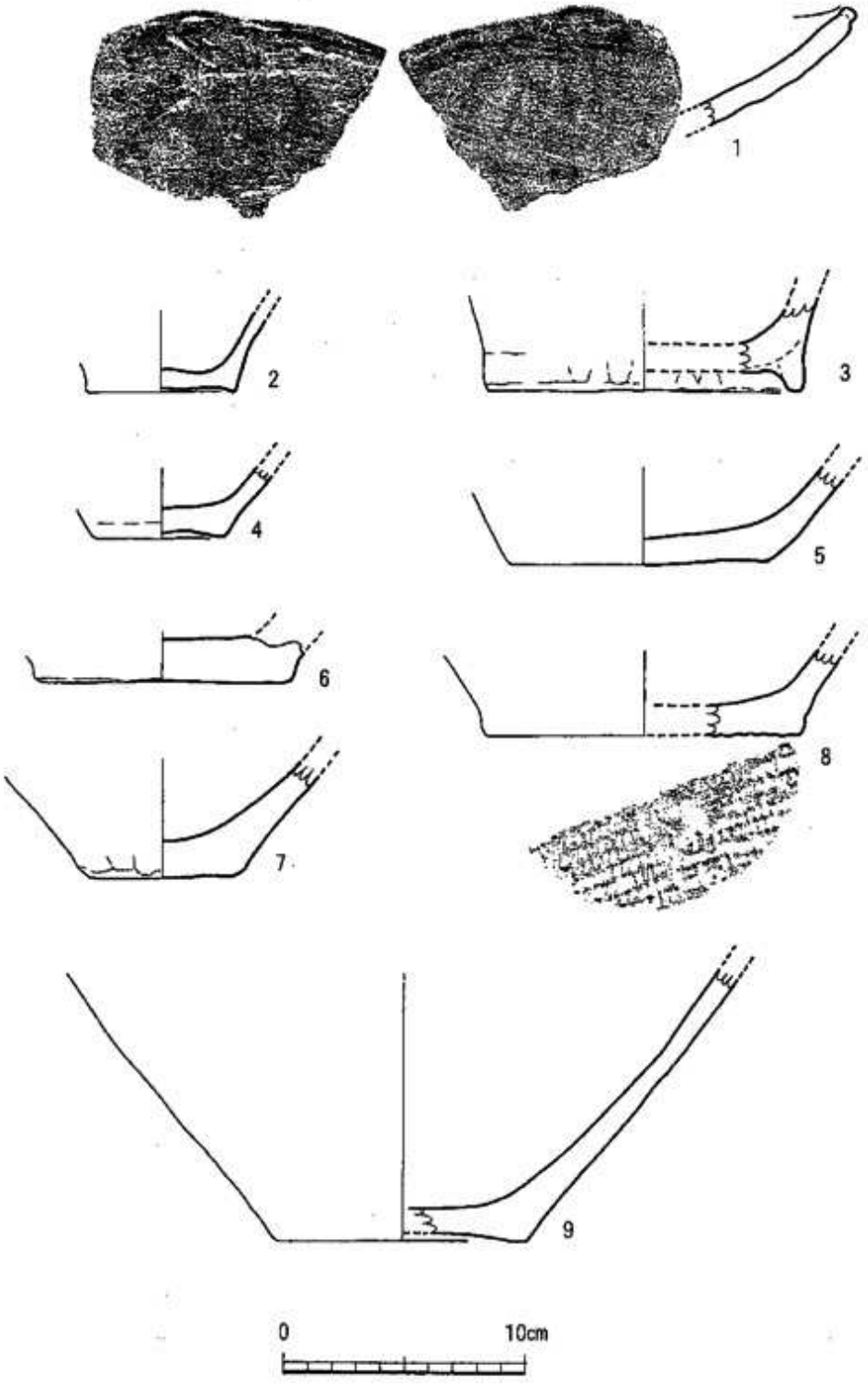
第137図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（17）



第 138 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（18）



第139図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（19）



第 140 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器（20）

表19　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器観察表（1）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
121	1	4C区	沈線文、口唇部施文、縄文、ナデ	沈線文、ナデ＋ミガキ	○	○		○				○		Ⅰ有文深鉢A1
	2	2C区	沈線文、口唇部施文、縄文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	3	4C区	沈線文、縄文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	4	2B区	口唇部施文、縄文、ナデ	ナデ	○	○		○		○				〃
	5	4C区	沈線文、縄文、ナデ	ナデ	○	○		○			○			〃
	6	2C区	沈線文、縄文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○		○	○			○		〃
	7	4C区	口唇部施文＋縄文、ナデ＋ミガキ	条痕＋ナデ＋ミガキ	○	○		○				○		〃
122	1	4C区	沈線文、縄文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○		○						Ⅰ有文鉢A1
	2	〃	沈線文、縄文、ナデ	ナデ＋指オサエ	○	○		○						〃
	3	〃	沈線文、縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	4	〃	沈線文、縄文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○		○						〃
	5	〃	沈線文、疑似縄文、ナデ＋ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
123	1	2C区	沈線文、口唇部施文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						Ⅱ有文深鉢B
	2	4C区	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○						○		
	3	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						Ⅰ無文深鉢A1
	4	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ＋ミガキ	ナデ	○	○		○				○		
	5	2B区	沈線文、縄文、ナデ	ミガキ	○	○		○						Ⅱ有文浅鉢A
	6	2C区	沈線文、縄文	ナデ	○	○		○	○					〃
	7	4C区	沈線文、縄文、ナデ	ナデ	○	○								
124	1	2C区	沈線文、口唇部施文、縄文、条痕＋ナデ＋ミガキ	ナデ＋ミガキ	○	○	○	○		○				Ⅱ有文鉢A1
	2	〃	沈線文、口唇部施文、縄文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○		○		○				〃
	3	1C区	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○								Ⅱ有文鉢A2
	4	2C区	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○	○		○					〃
125	1	1C区	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○			○		〃
	2	〃	把手、沈線文、ナデ	ナデ	○	○	○	○	○					〃
	3	2B区	把手、沈線文、ナデ	ケズリ										〃
	4	2C区	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○	○	○						〃
	5	〃	把手、沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○						○		〃
126	1	2C区	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	2	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ＋ケズリ	○	○		○			○			〃
	3	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ										〃
	4	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○			○			〃
127	1	2B区	把手、沈線文、口唇部施文、条痕＋ナデ	ミガキ	○	○		○						〃
	2	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ＋ミガキ	ナデ＋ミガキ	○	○		○						〃
	3	3B区	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	4	2C区	把手、沈線文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○		○						〃
	5	2B区	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
128	1	2C区	沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ＋ナデ＋ミガキ	○	○		○						〃
	2	3B区	沈線文、口唇部施文、条痕＋ナデ	巻貝条痕	○	○		○						〃
	3	2C区	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	条痕、ナデ	○	○		○	○	○	○			〃
129	1	2C区	沈線文、口唇部施文、ナデ＋ミガキ	条痕＋ナデ＋ミガキ	○	○	○							〃
	2	2B区	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ＋ケズリ＋ミガキ	○	○		○						〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○		○	○					〃
	4	1C区	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○								〃
	5	2B区	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	6	2C区	沈線文、ナデ	条痕	○	○			○					〃
	7	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	巻貝条痕＋ミガキ	○	○		○	○					〃
130	1	2C区	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○	○	○						〃
	2	1B区	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	3	2B区	沈線文、口唇部施文、ナデ＋ミガキ	ナデ＋ケズリ	○	○		○	○					〃
	4	2C区	沈線文、口唇部施文、条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○	○						〃
	5	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	6	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○		○				〃
131	1	2B区	沈線文、ナデ	巻貝条痕	○	○		○						〃
	2	1D区	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	3	2C区	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ＋ミガキ	○	○		○	○					〃
	4	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ＋ケズリ	○	○		○	○					〃
	5	1B区	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○		○				〃
132	1	1C区	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	2	2C区	沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○			○			〃

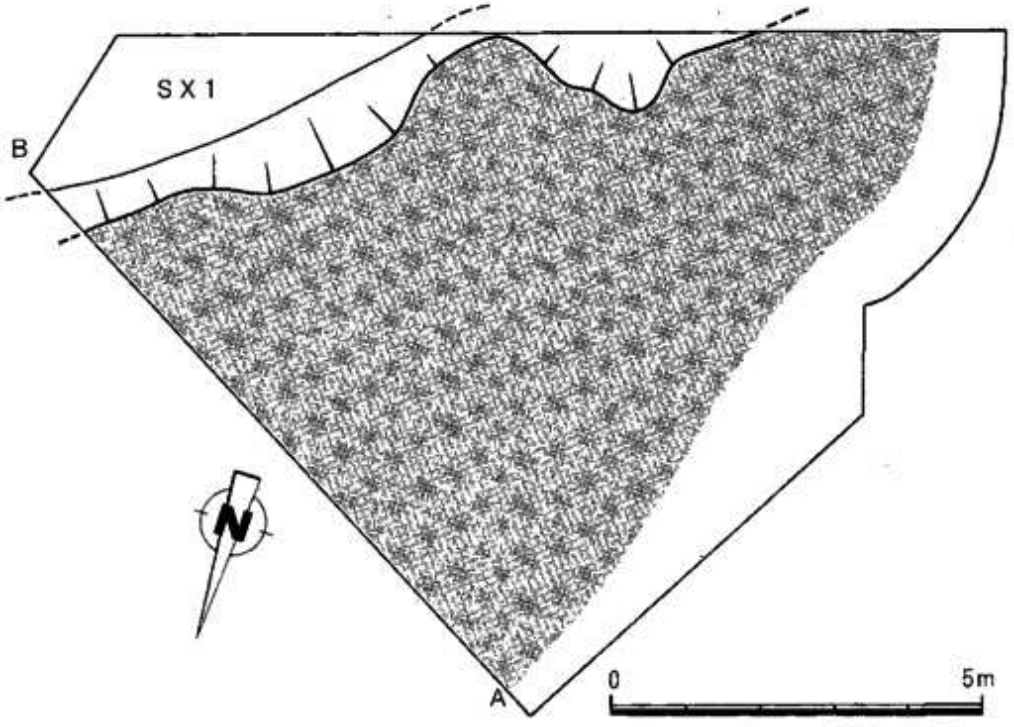
表 20　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土縄文時代後期土器観察表（2）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
132	3	2 B区	沈線文、ナデ、巻貝条痕	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					Ⅱ有文鉢A 2
	4	2 C区	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ミガキ	○	○		○	○					〃
133	1	2 B区	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	2	2 B区	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕	○	○		○						〃
	3	1 C区	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	4	1 C区	沈線文、ナデ	沈線文、ナデ	○	○		○	○	○				〃
	5	1 B区	沈線文、条痕＋ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○		○	○					〃
134	1	2 C区	沈線文、ナデ	ナデ＋ケズリ＋ミガキ	○	○		○	○					
	2	2 C区	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ケズリ＋ナデ	○	○		○						
	3	2 C区	沈線文、ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○		○						
	4	2 C区	沈線文、巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	巻貝条痕＋ナデ＋ミガキ	○	○		○			○			
	5	1 B区	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					
135	1	2 B区	把手、沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						
	2	4 C区	巻貝による沈線文、条痕	巻貝条痕	○	○		○	○					
	3	2 C区	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						
	4	2 C区	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						
	5	2 C区	口唇部施文、条痕＋ナデ＋ミガキ	沈線文、ナデ＋ミガキ	○	○		○						Ⅱ無文深鉢A
	6	4 C区	口唇部施文、条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○			○			〃
136	1	2 C区	沈線文、円形刺突文、ナデ	ナデ	○	○								Ⅱ無文深鉢
	2	1 D区	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕	○	○		○	○					〃
	3	4 C区	ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	4	4 C区	ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	5	2 B区	ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
137	1	2 C区	条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	2	4 C区	ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○		○		○	○			〃
	3	2 C区	条痕＋ミガキ	条痕	○	○		○		○		○		〃
	4	2 C区	沈線文、条痕＋ナデ、口縁付近ユビナデ	条痕	○	○		○	○	○				〃
	5	2 C区	口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	条痕	○	○		○	○	○	○			〃
138	1	2 C区	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○		○			Ⅱ無文鉢
	2	2 C区	条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○		○			〃
	3	2 B区	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					Ⅱ無文Ⅲ
	4	2 B区	ナデ	ナデ＋指オサエ	○	○		○						〃
139	1	2 B区	ナデ＋ミガキ	ケズリ＋ミガキ＋ナデ	○	○		○						〃
	2	2 B区	ナデ	ナデ＋指オサエ	○	○		○	○					底部
	3	2 C区	条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	4	2 C区	ナデ	ナデ＋指オサエ	○	○		○						〃
140	1	1 B区	ナデ	ナデ＋ミガキ	○	○		○						〃
	2	2 C区	ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	3	2 C区	ナデ＋指オサエ	ナデ＋指オサエ	○	○		○						〃
	4	2 C区	ナデ＋指オサエ	ナデ	○	○		○						〃
	5	2 C区	ナデ	ナデ	○	○		○		○				〃
	6	2 C区	ナデ	ナデ	○	○			○					〃
	7	2 C区	ナデ、底部外面網代圧痕	ナデ＋ケズリ＋指オサエ	○	○		○		○				〃
	8	2 C区	条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	9	2 C区	ナデ	ナデ	○	○	○	○		○				〃

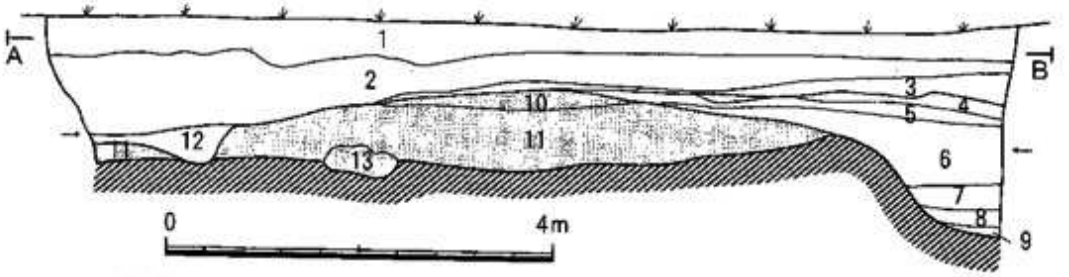
12. 平成２年度調査区遺物包含層

平成２年度は６カ所のトレンチを配した。これらは昭和63・平成元年度調査区の深見川寄りの位置に設定したが、昭和63・平成元年度調査区北端の落ち込み状遺構に隣接する箇所で遺物包含層が確認できた。平成２年度調査区からは淡茶褐色土・茶褐色土からなる遺物包含層が確認できた。この遺物包含層は最も厚いところで約80cmを測るが、１～３層が昭和40年代に行われた圃場整備事業により形成されたものであるから、この遺物包含層はより厚いものであったことが考えられる。またその範囲をみると、西側においてはしだいに薄くなり消えているが、南側においてはＳＸ１により削平されている。ＳＸ１は昨年度調査区の北側にみられた落ち込み状遺構の北側肩部にあたるものとして考えられよう。その埋土としては粘質土が均質に堆積しているが、８層では砂混じりの粘土、９層では砂礫層と、旧河道としての様相をもっている。この８・９層からは縄文時代後期の遺物のみが出土しているが、上層からは若干であるが中世の遺物もみられるため、中世に河川の氾濫により包含層中を流路が走ったと理解すべきであろう。

10・11層からはコンテナ20箱をこえる縄文土器が出土している。これらの縄文土器は小池原上層式・鐙崎式土器が大部分を占めており、前年度までの調査により出土した縄文土器が北久根山式土器の段階まで下がることから、平成２年度検出した遺物包含層が前年度調査の住居跡群の時期幅の一時期のみで形成されていることがわかる。

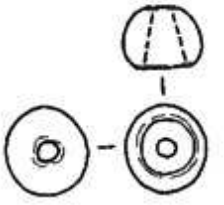


第141図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区平面図（トーンの部分は遺物包含層）

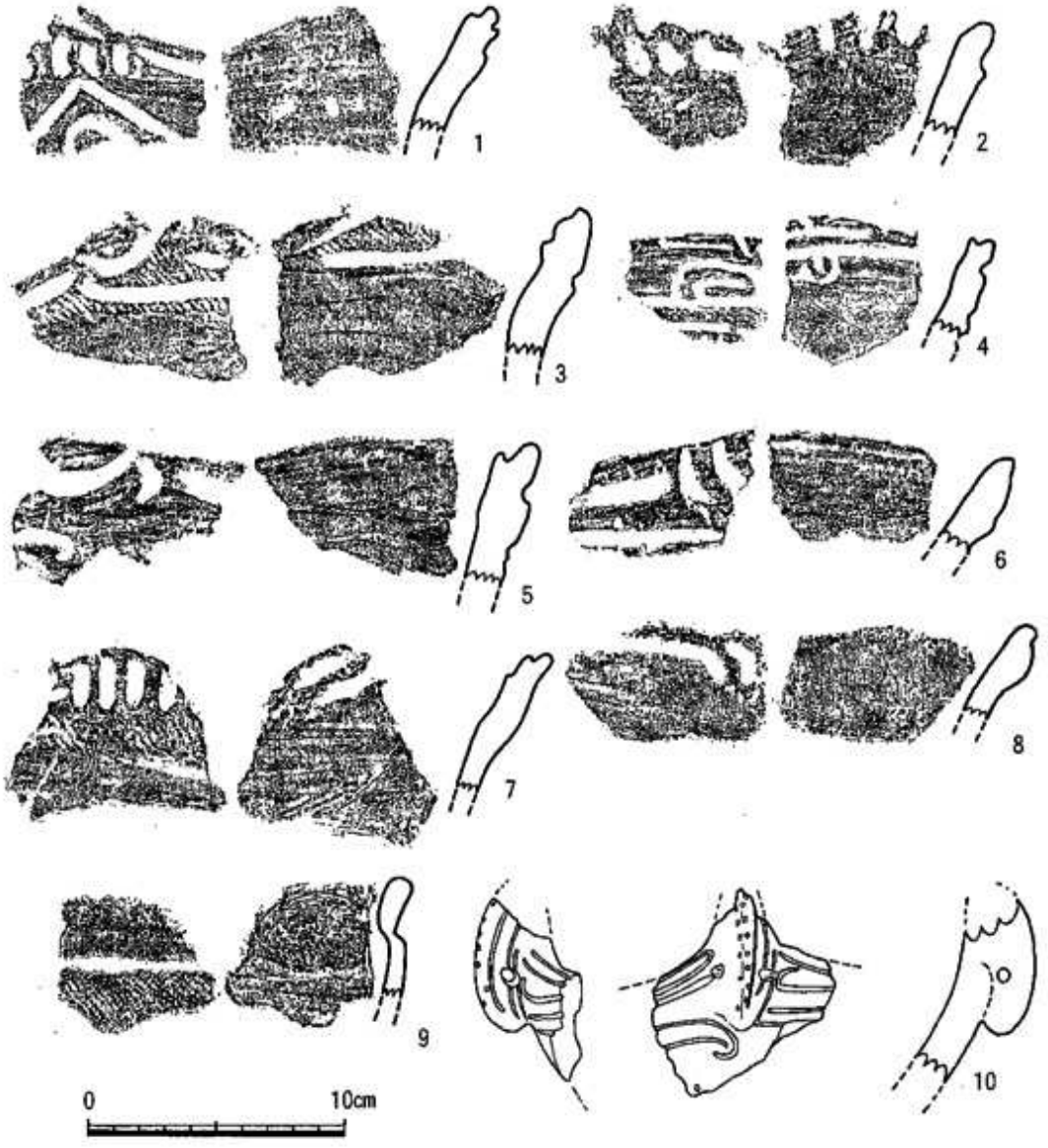


1.表土(耕作土)　2.床土(灰褐色土)　3.黄褐色土　4.淡灰色粘質土　5.灰色砂質土
6.灰色粘質土　7.灰色粘土　8.灰色砂粘土　9.灰色砂礫　10.淡茶褐色土
11.茶褐色土　12.灰色粘土　13.灰色砂礫
トーンの部分は縄文時代後期の遺物包含層

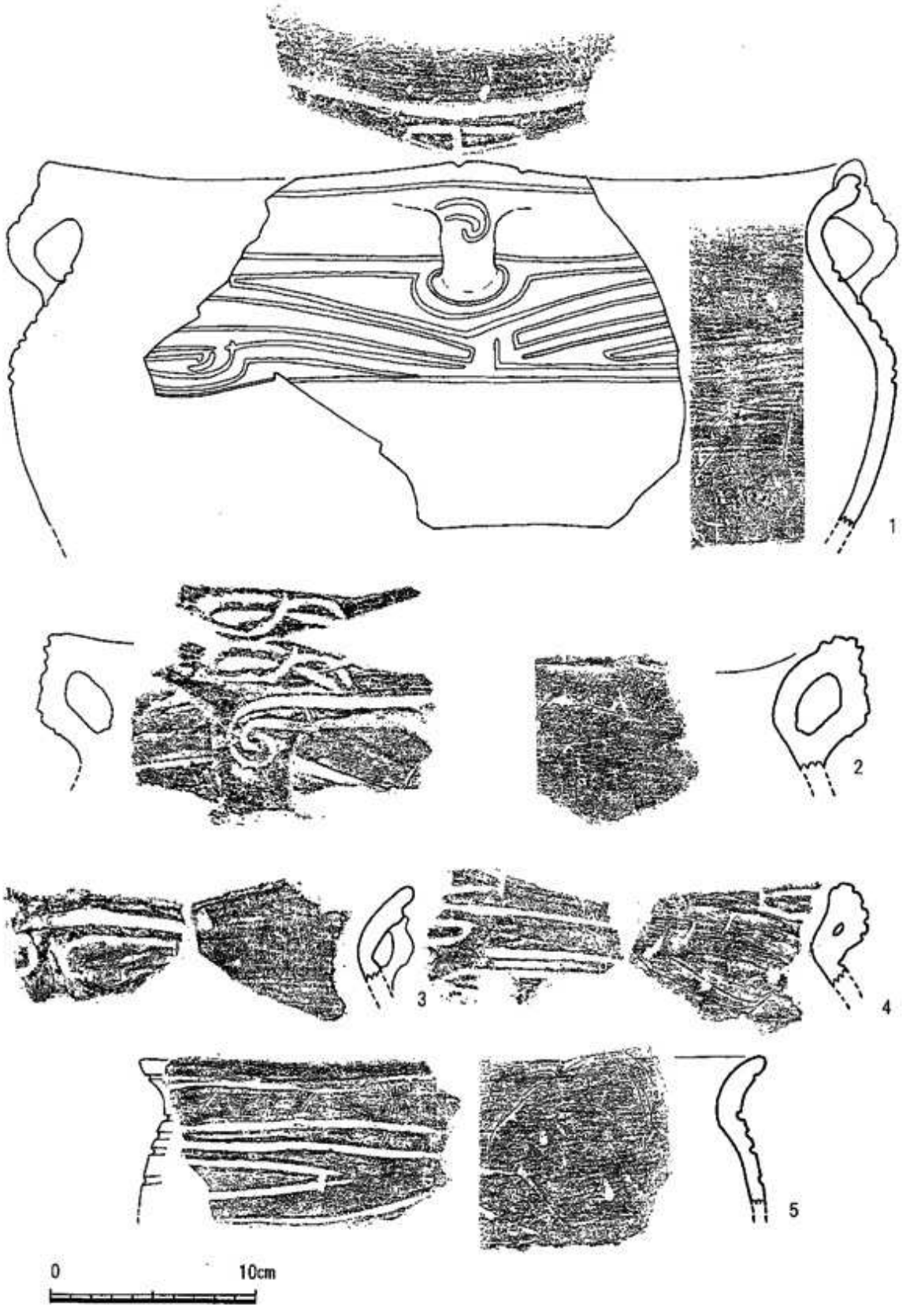
第142図　飯田二反田遺跡平成2年度調査区北壁断面図



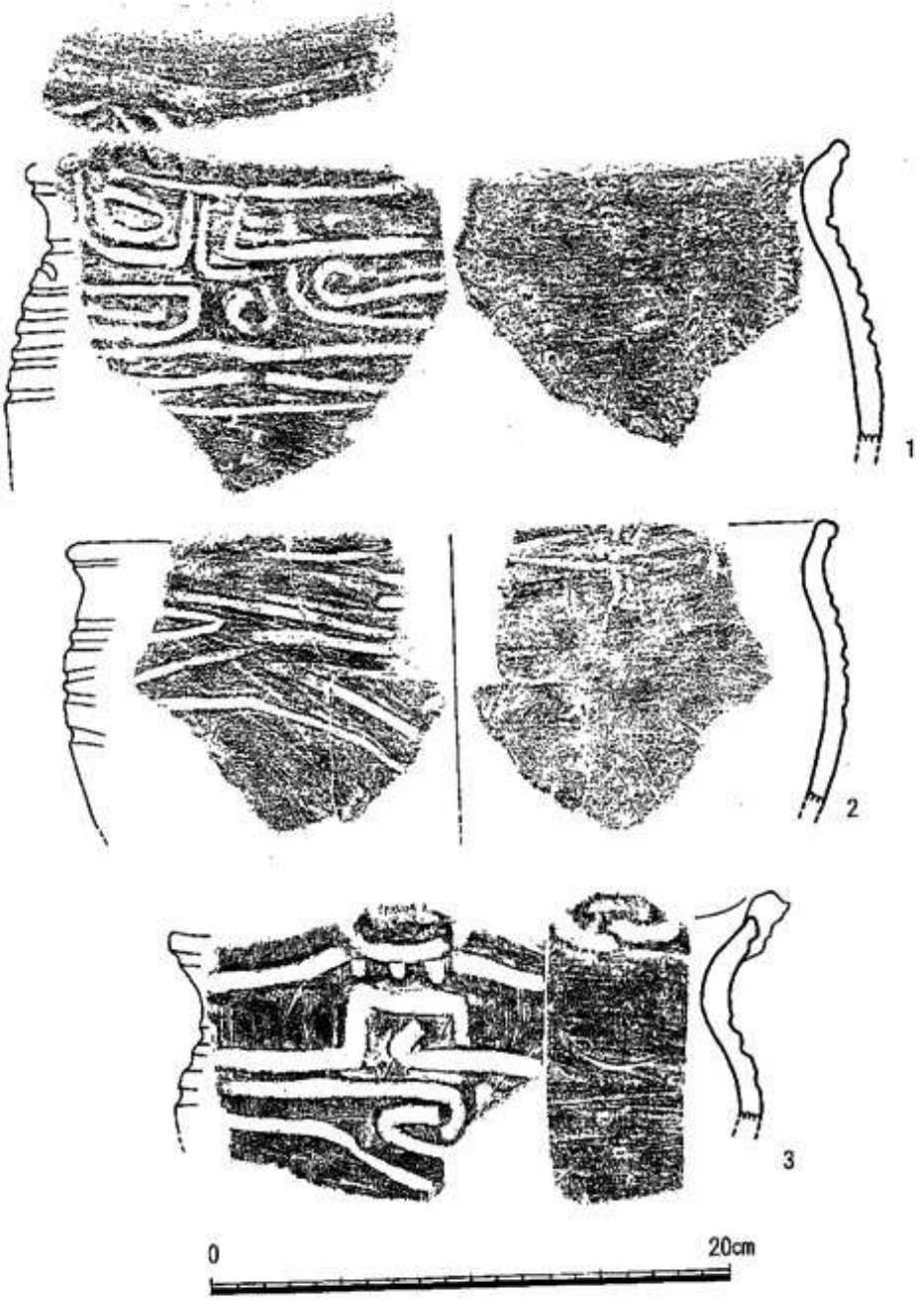
第143図　硬玉製丸玉
(原寸大)



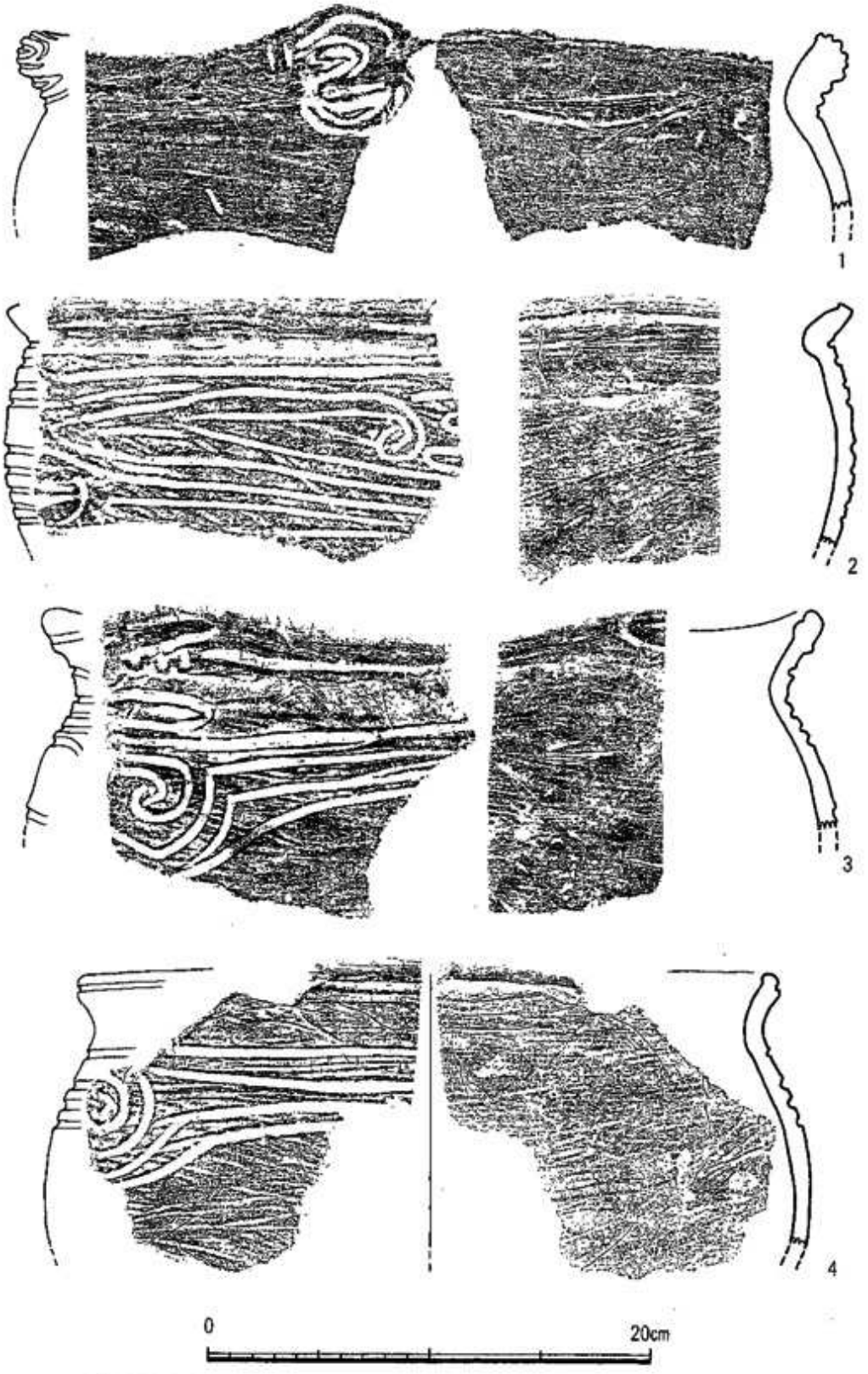
第 144 図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（１）



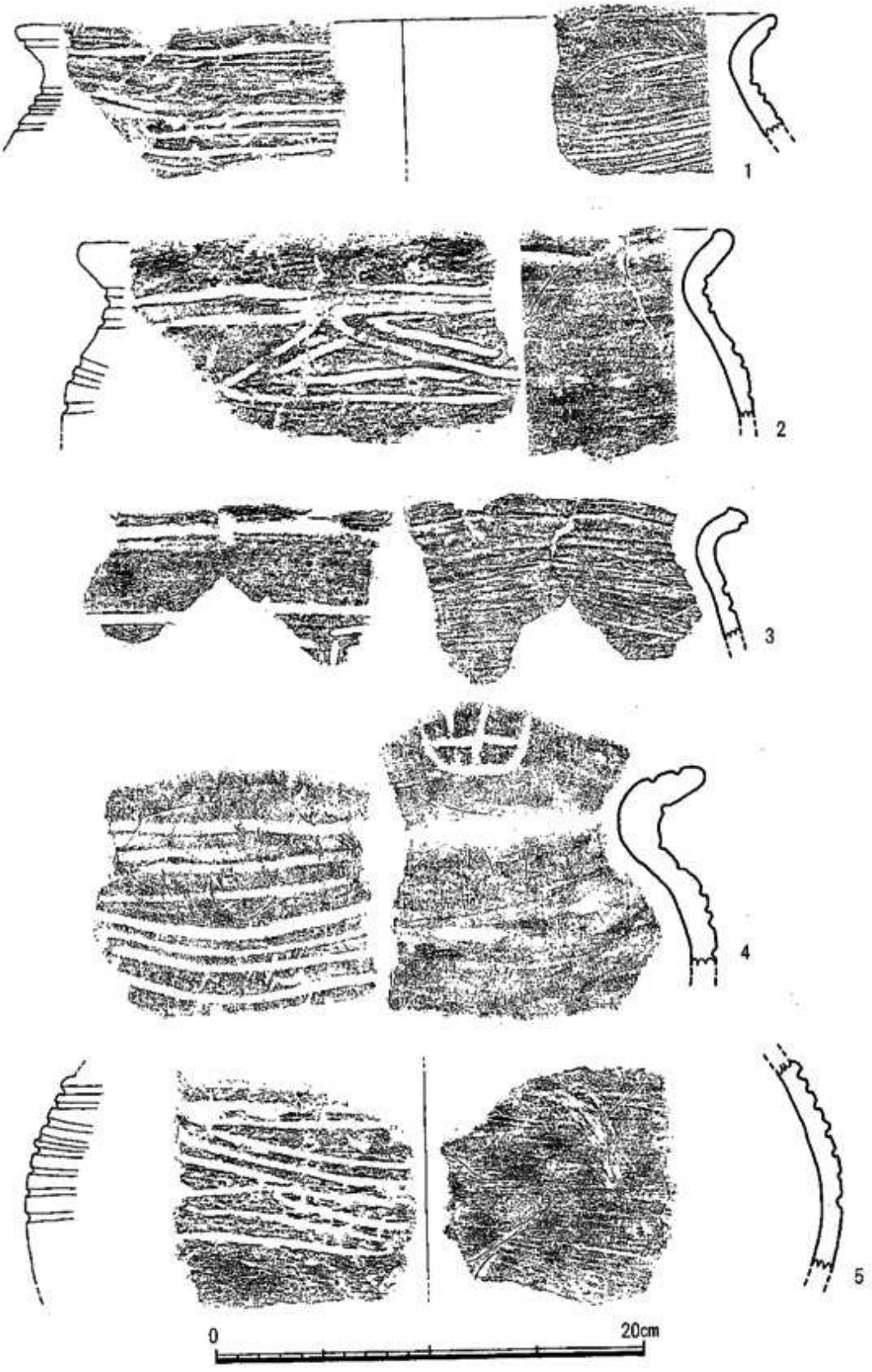
第145図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（２）



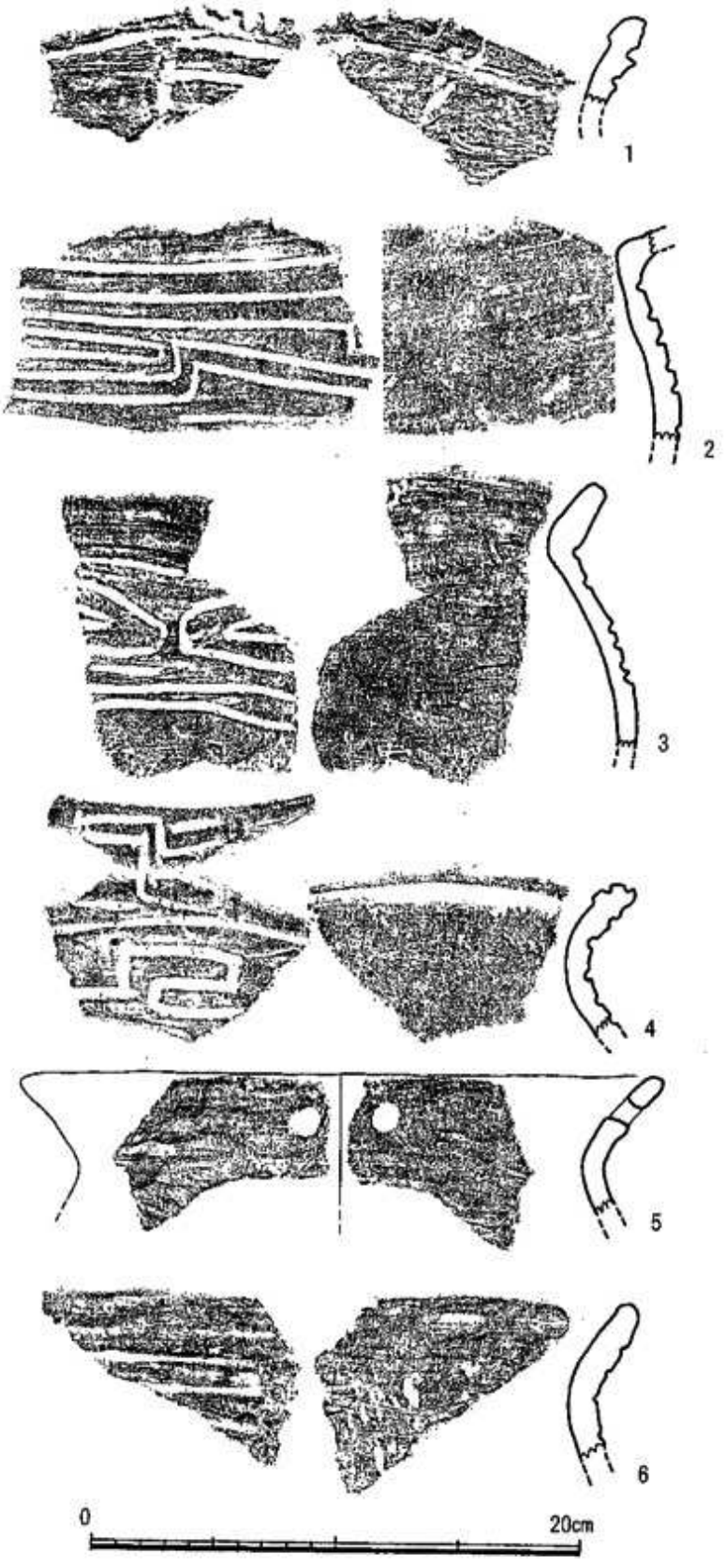
第146図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（３）



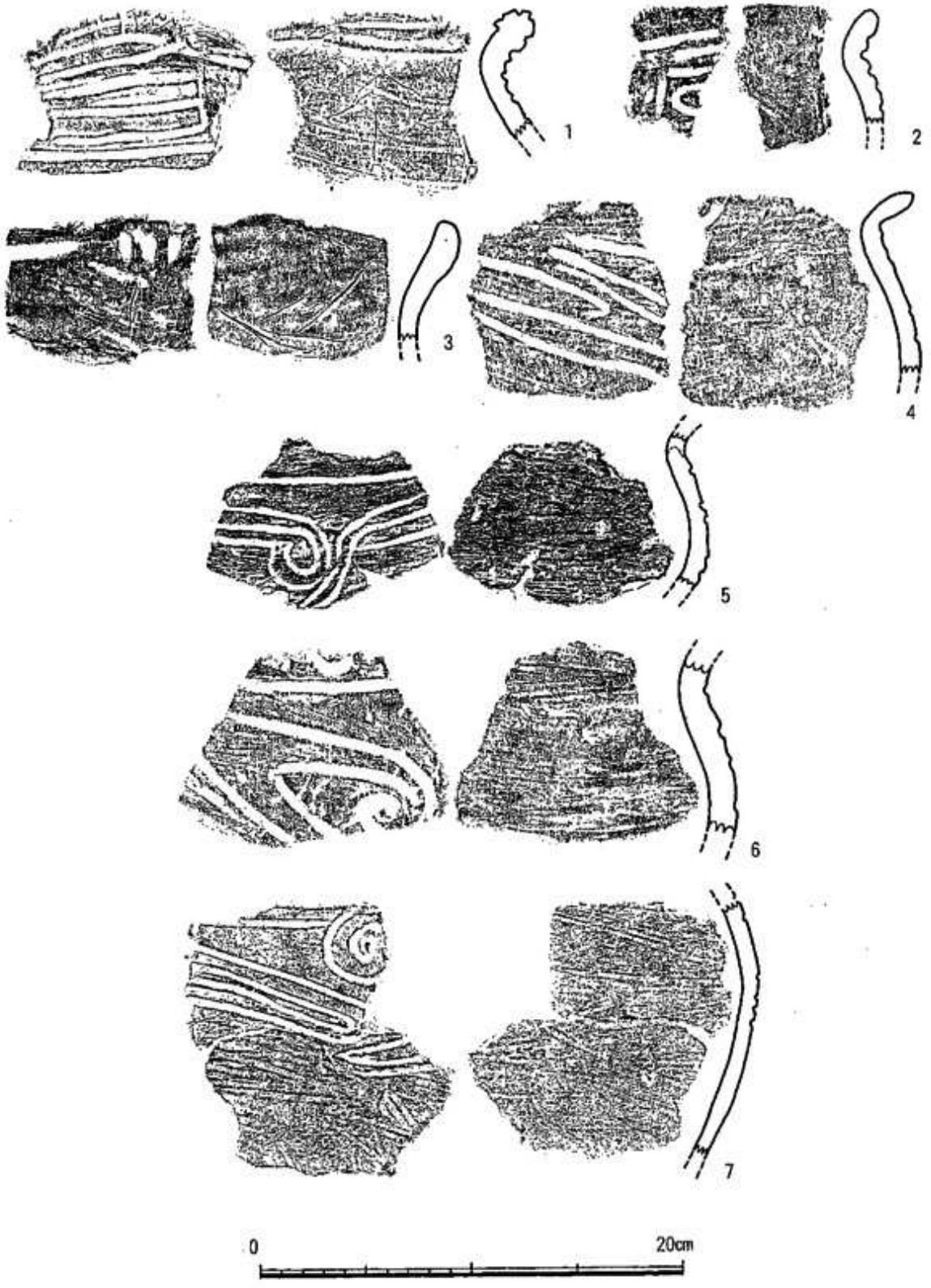
第147図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（４）



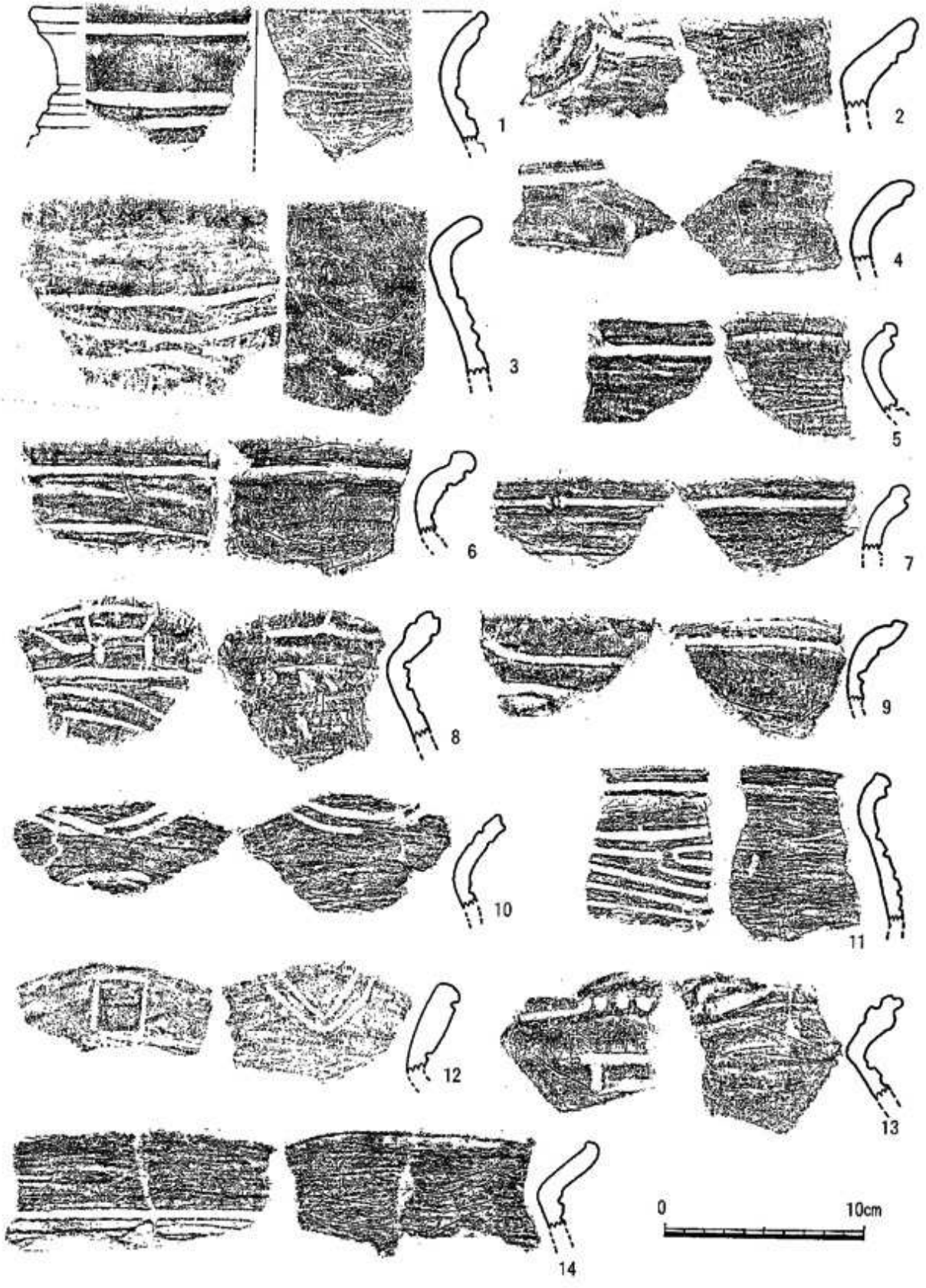
第148図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（５）



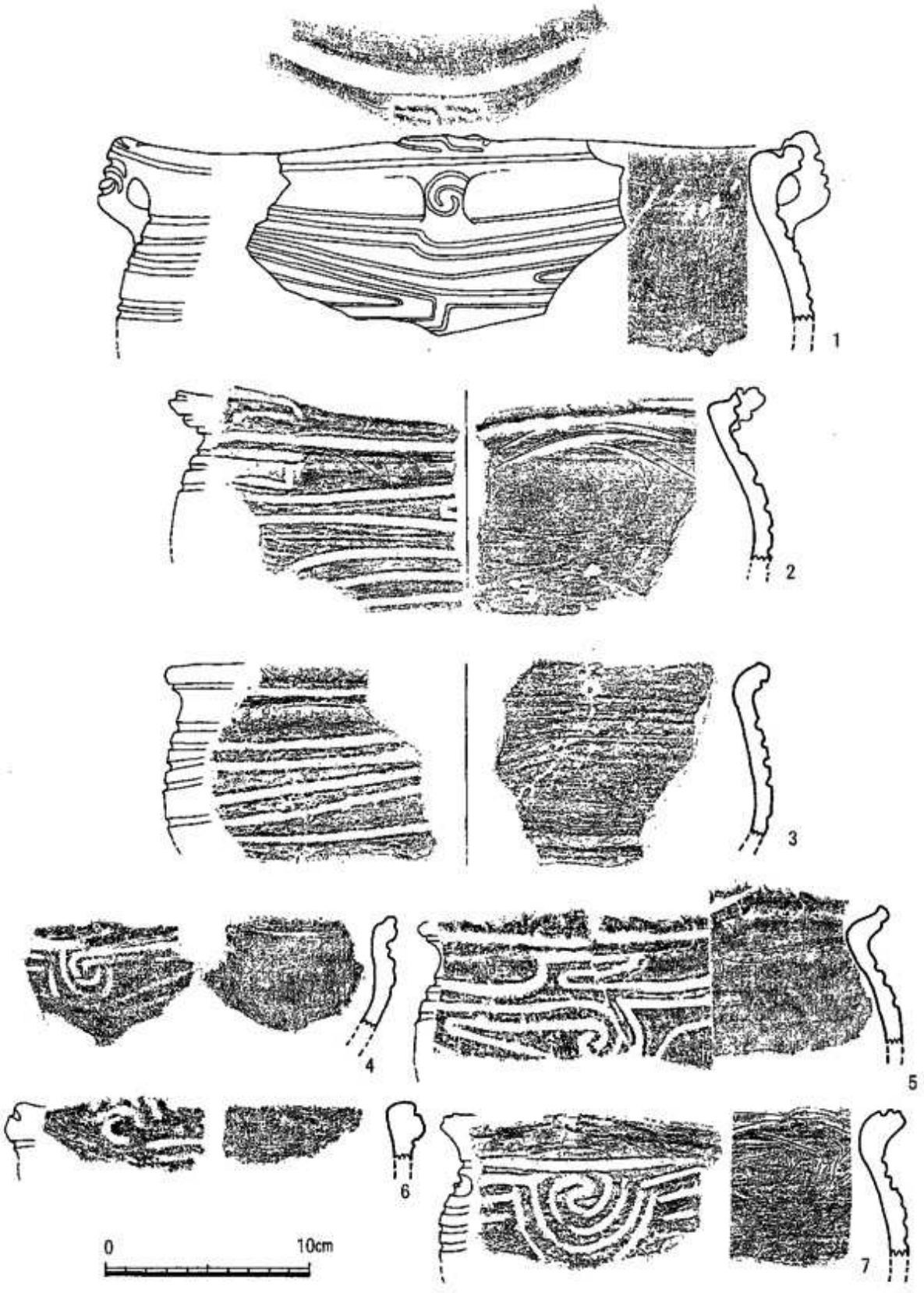
第149図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（６）



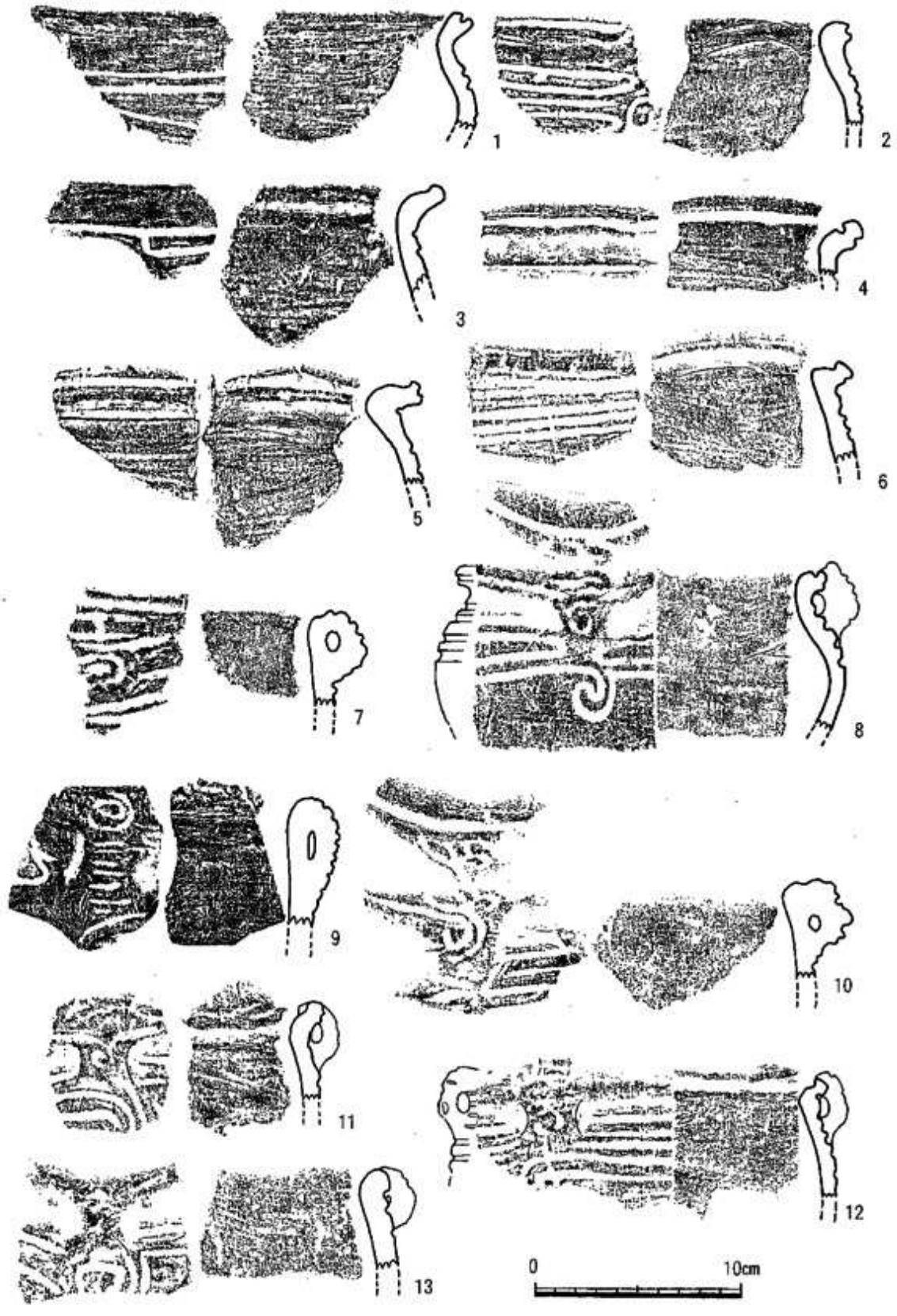
第150図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（７）



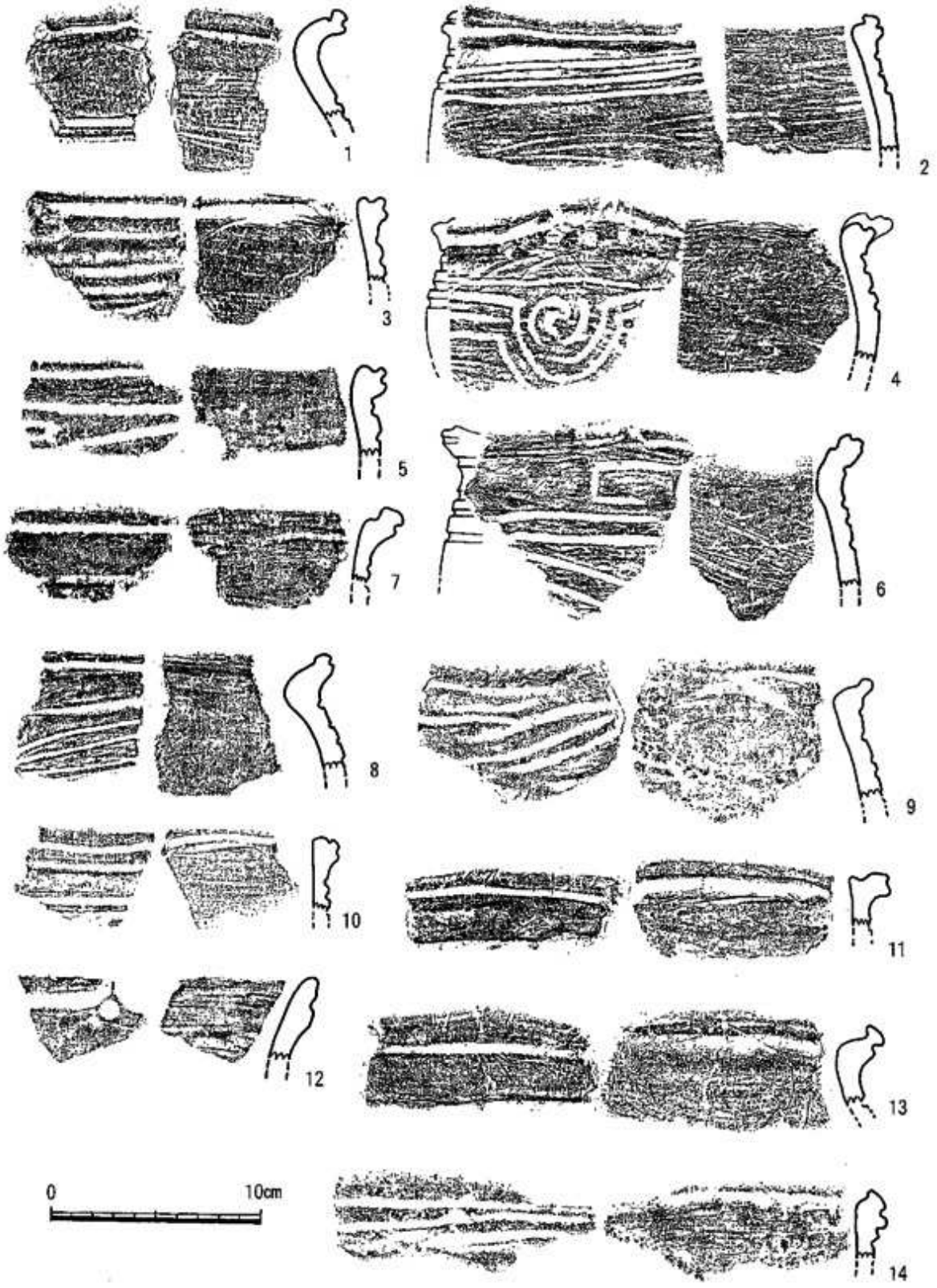
第151図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（８）



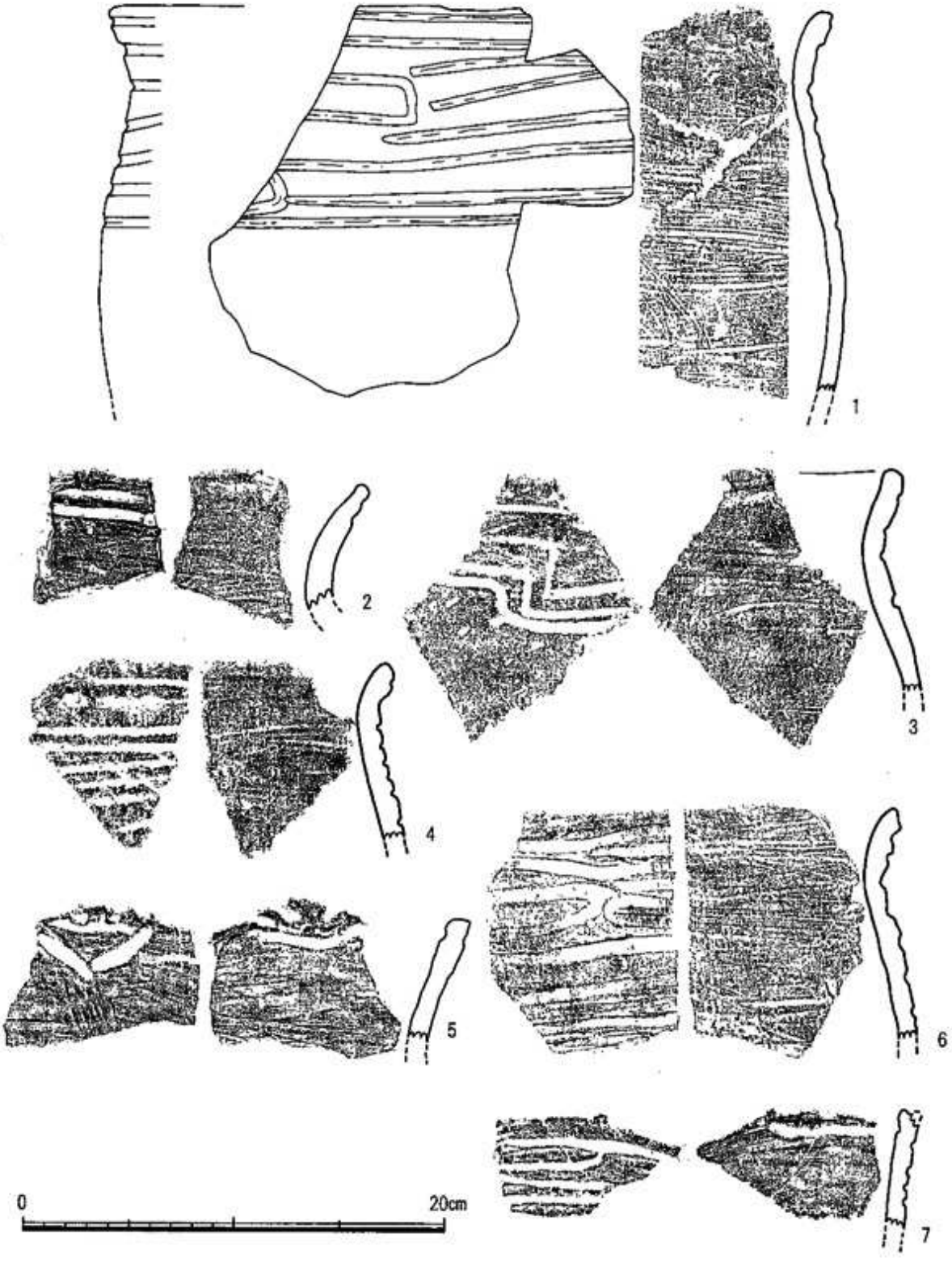
第 152 図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（９）



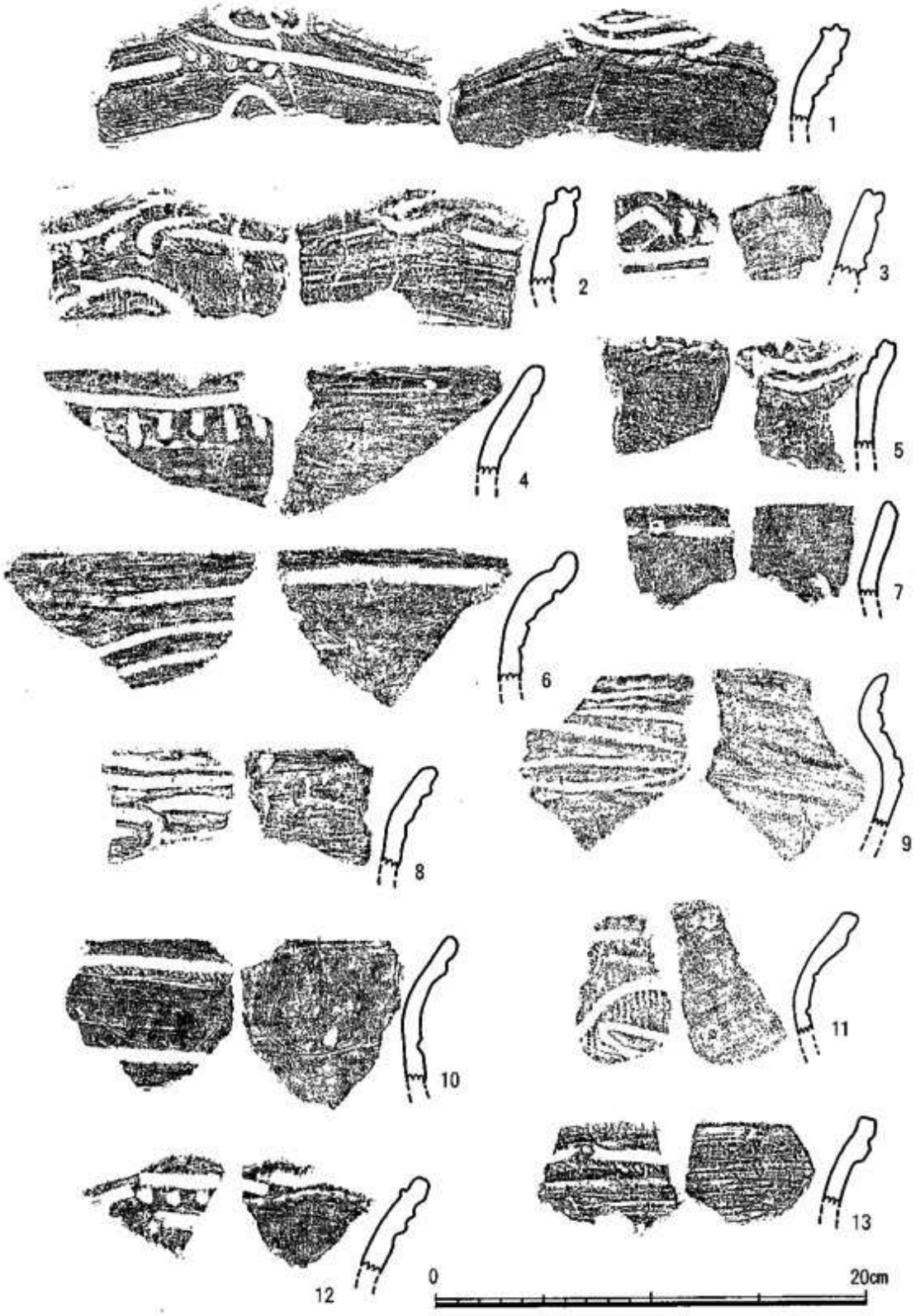
第153図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（10）



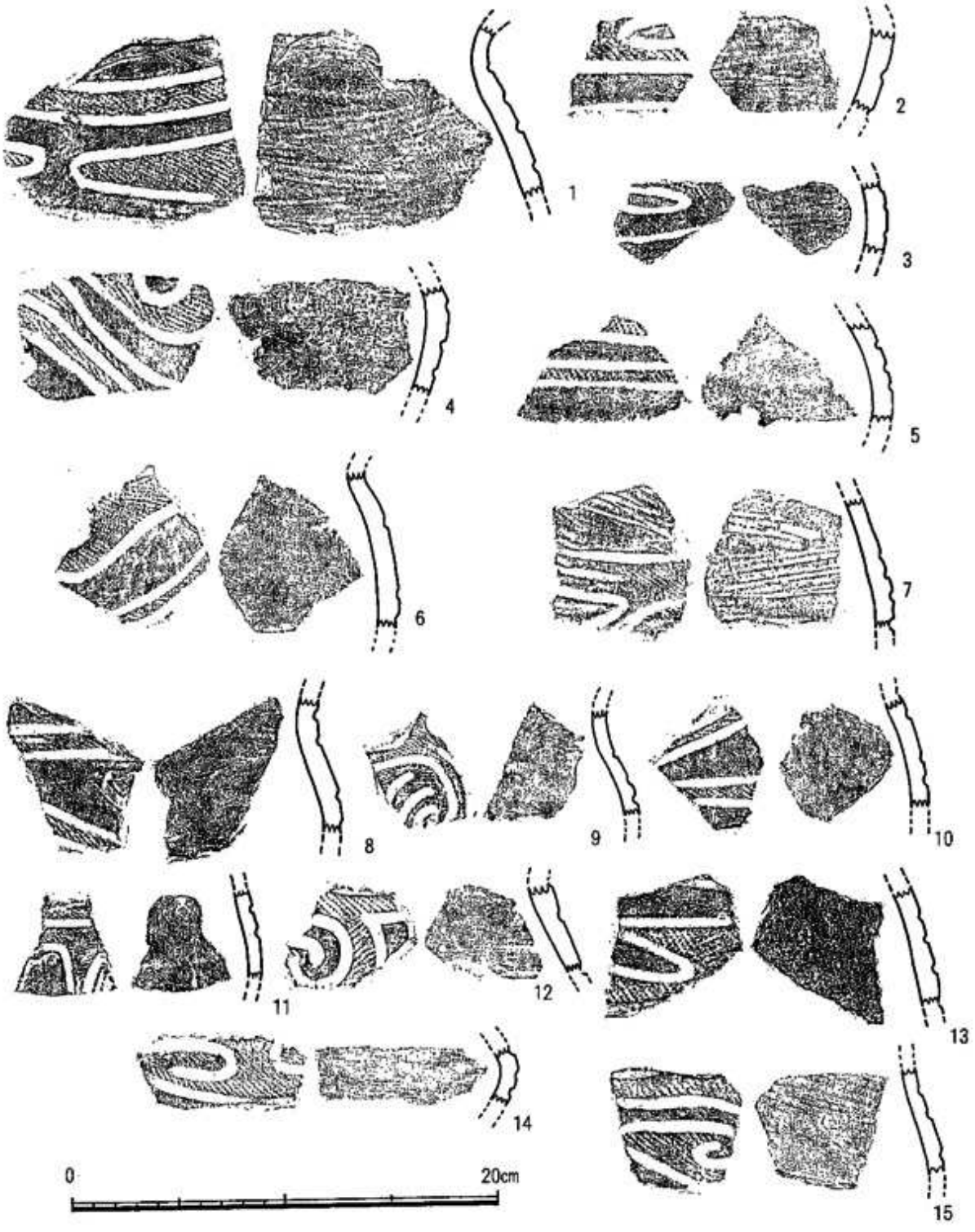
第 154 図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（11）



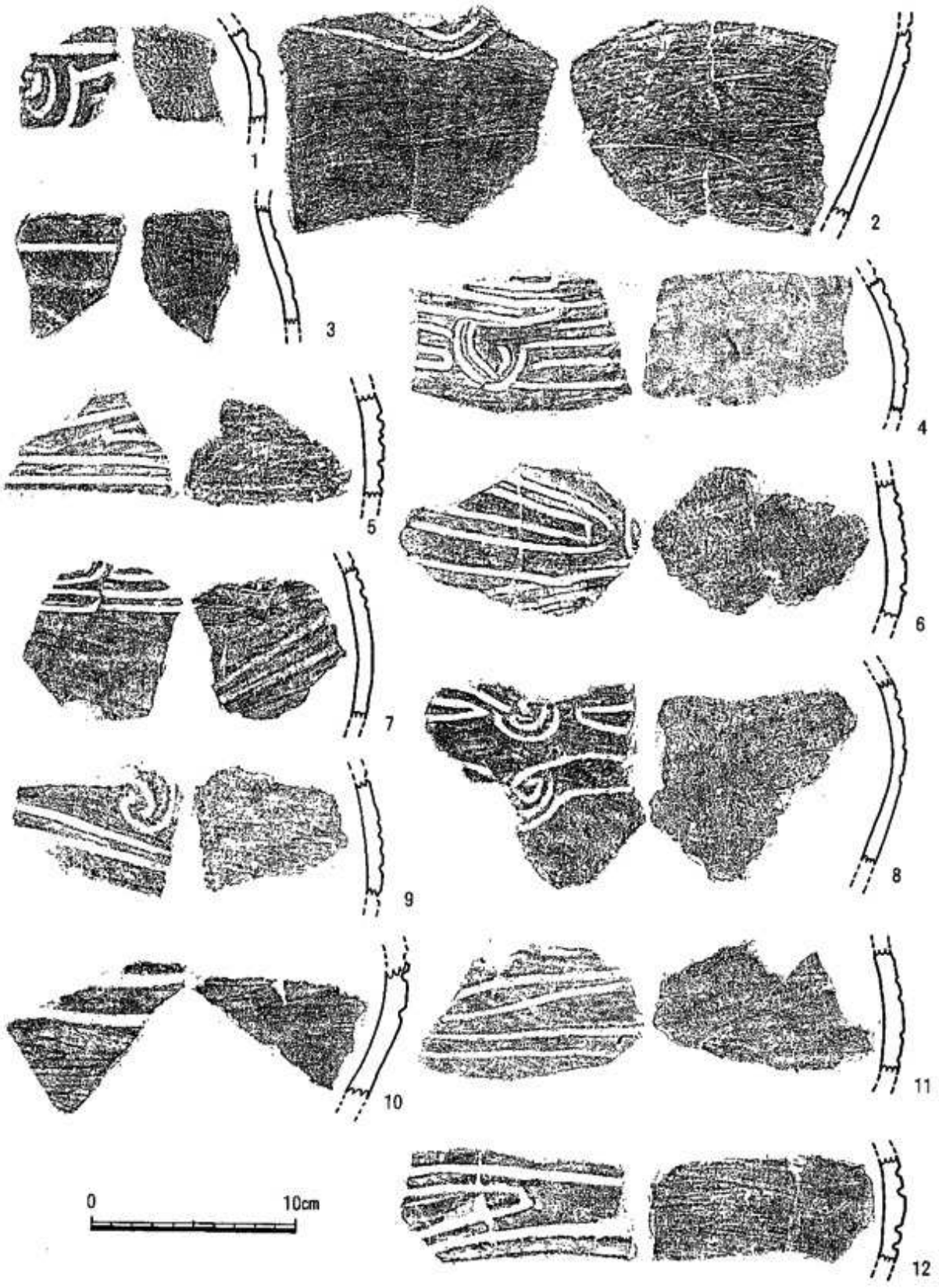
第155図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（12）



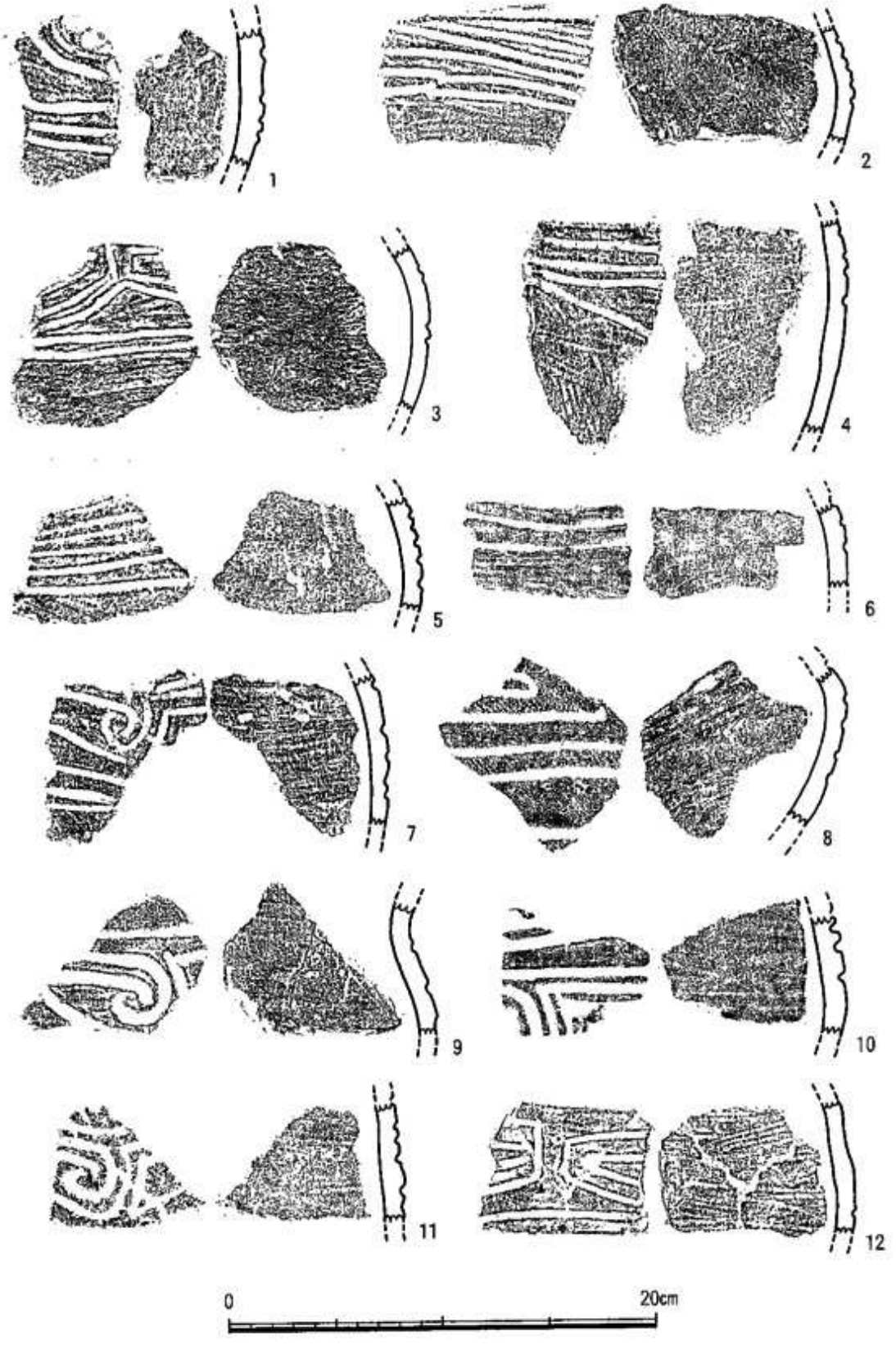
第 156 図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（13）



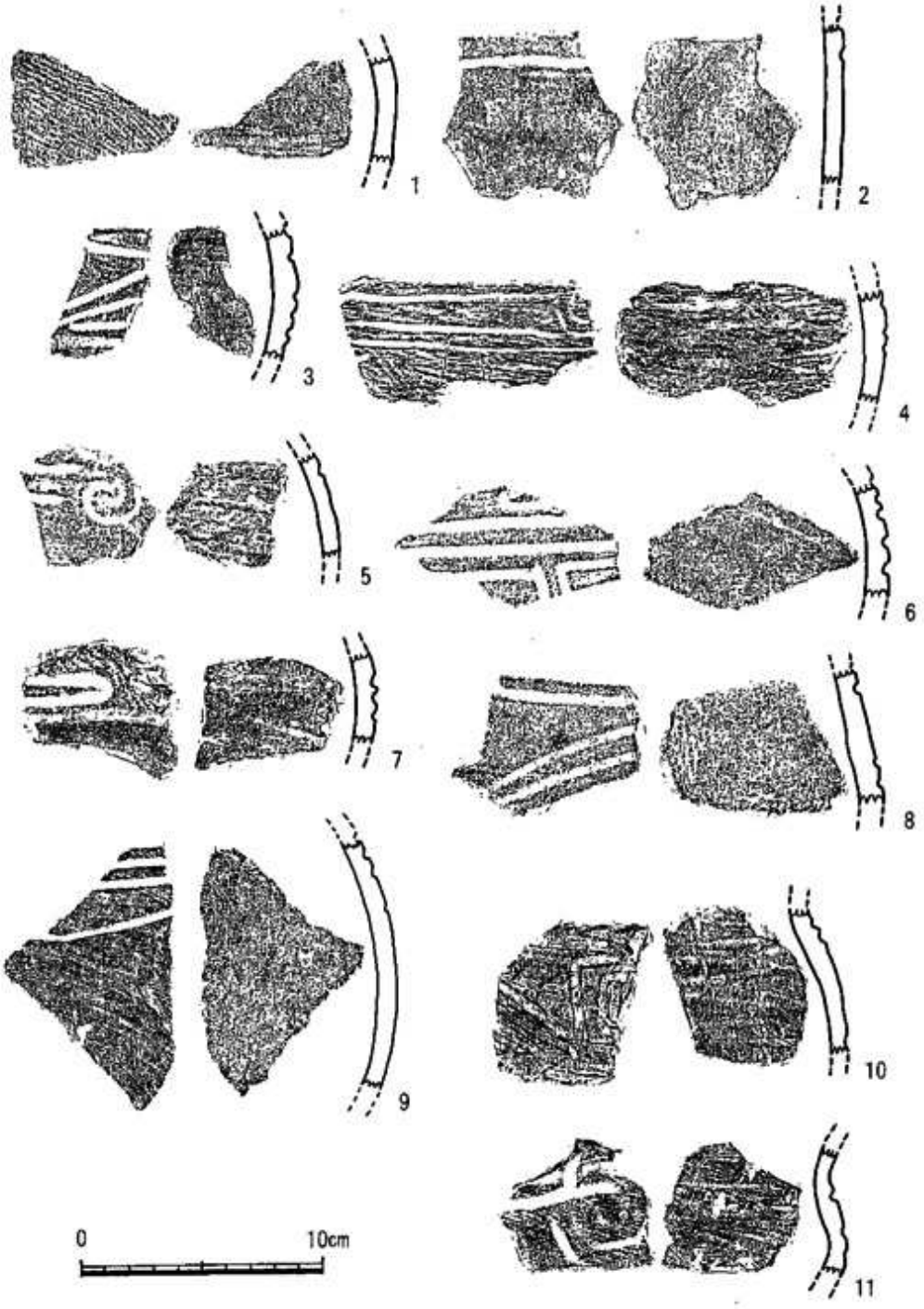
第157図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（14）



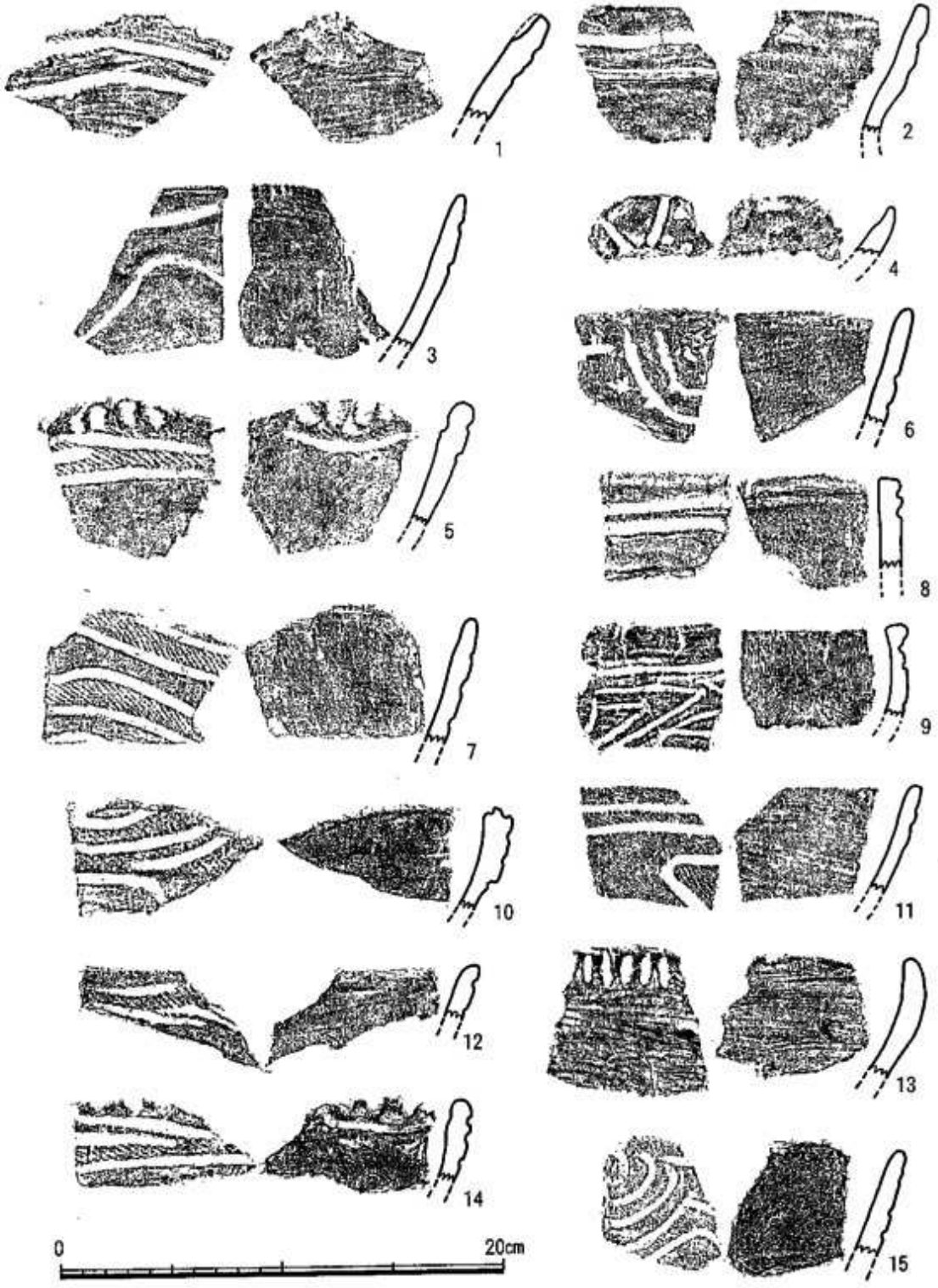
第158図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（15）



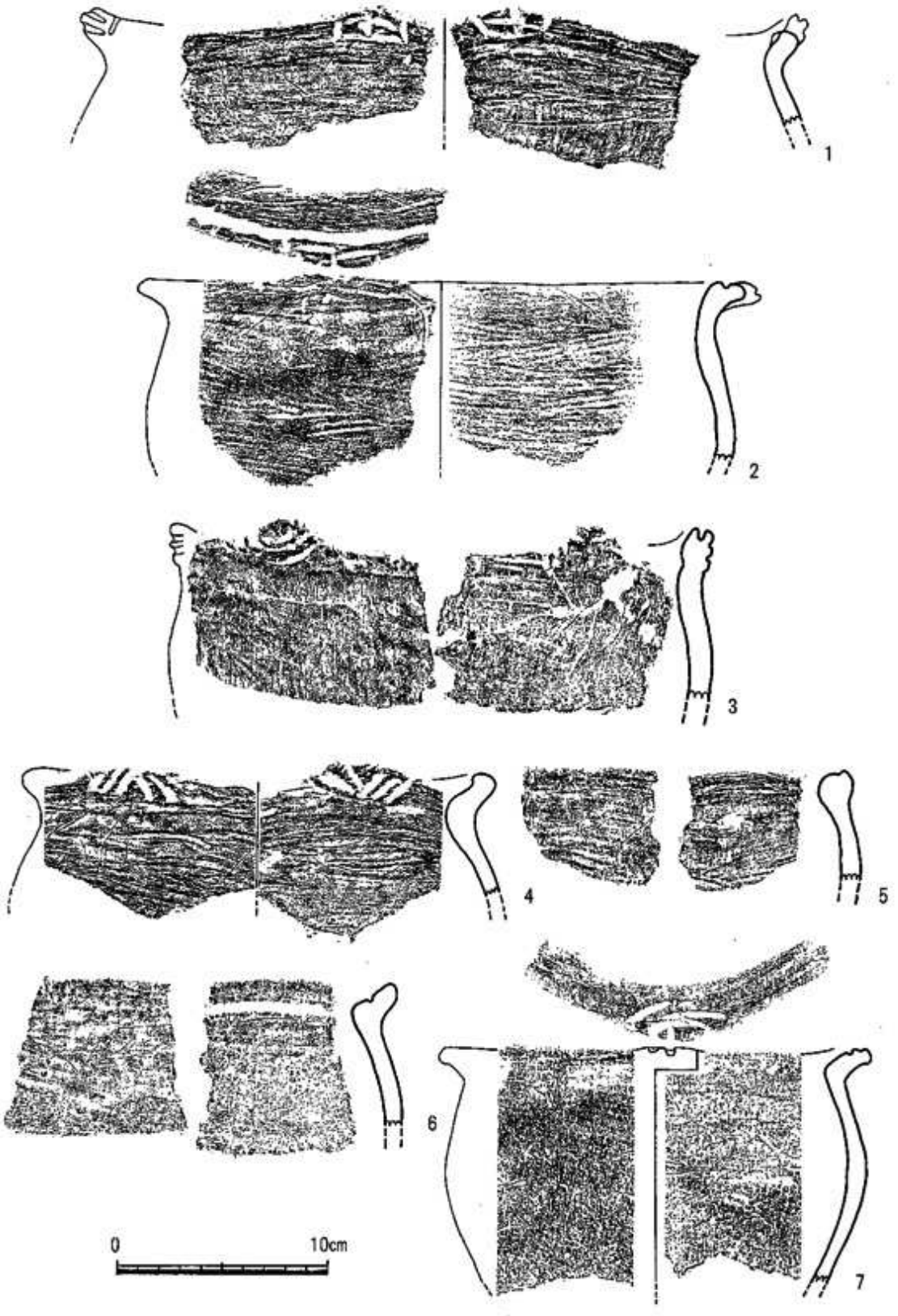
第159図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（16）



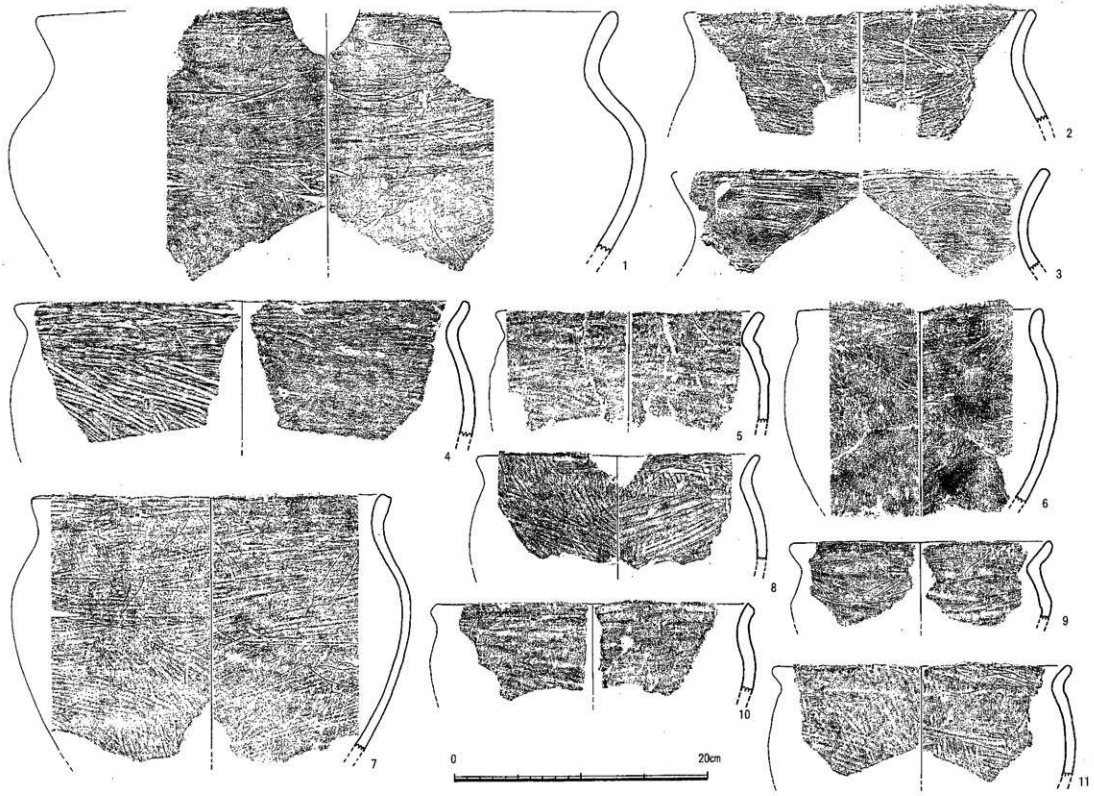
第 160 図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（17）



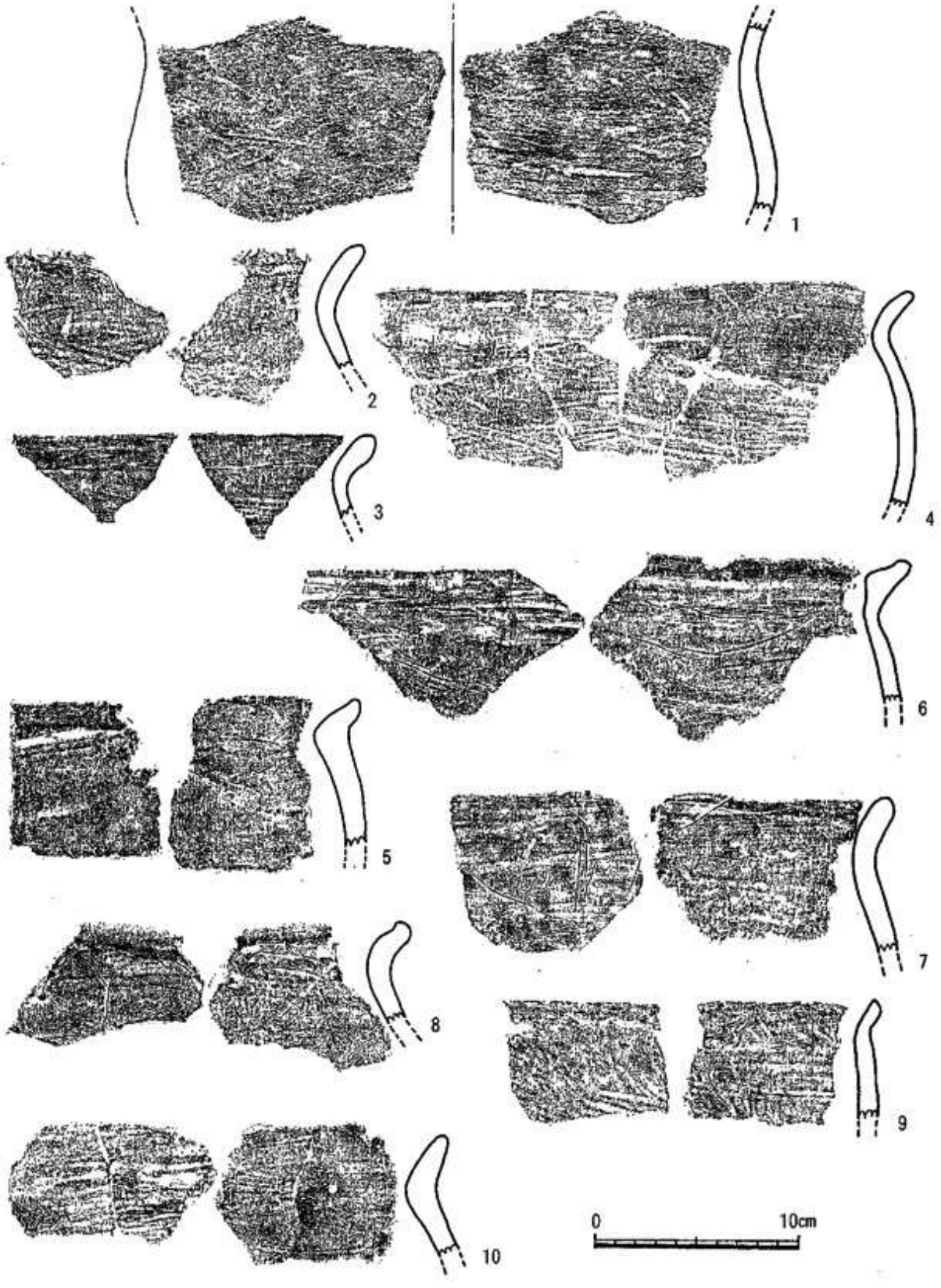
第161図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（18）



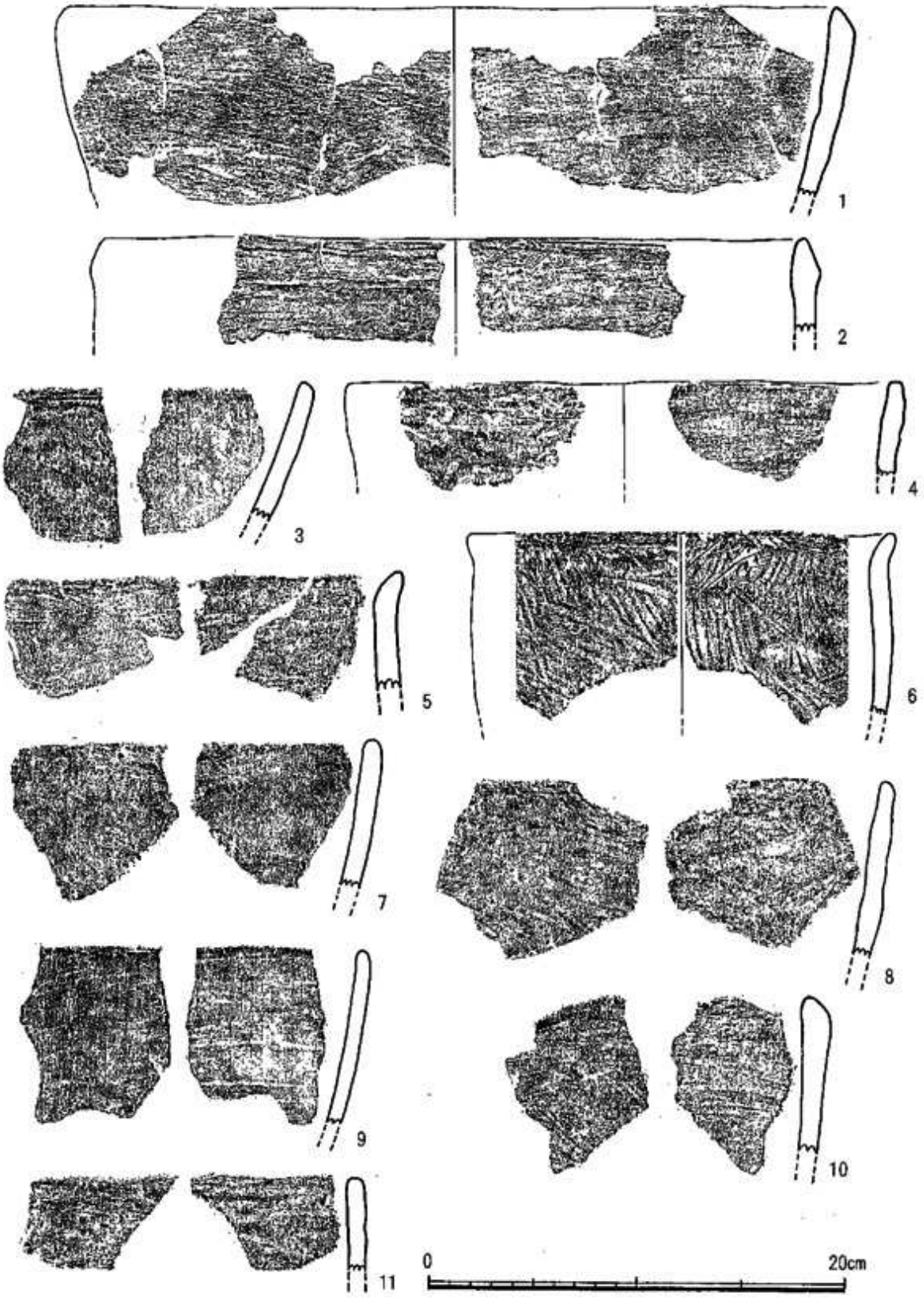
第 162 図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（19）



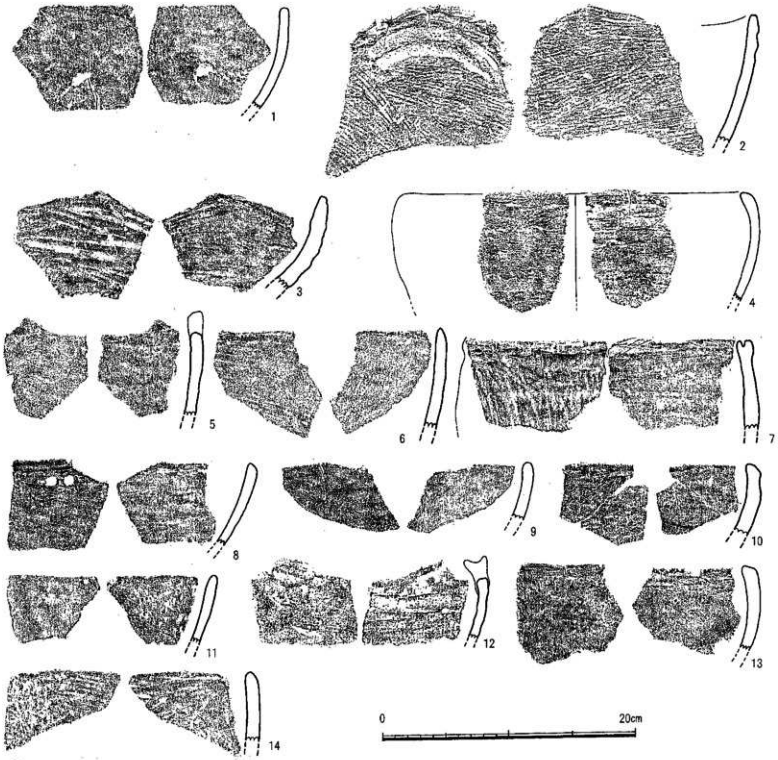
第163図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（20）



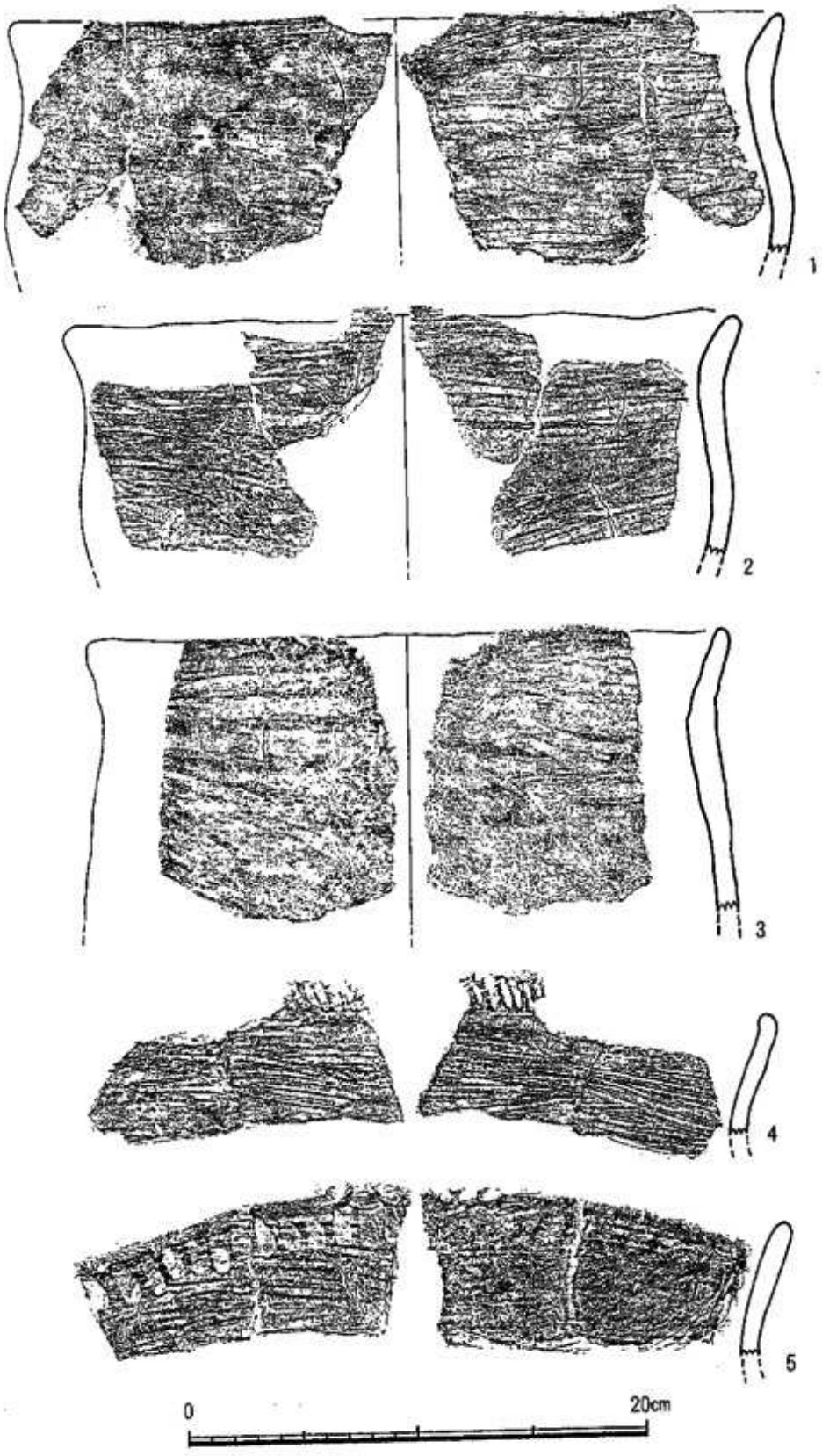
第164図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（21）



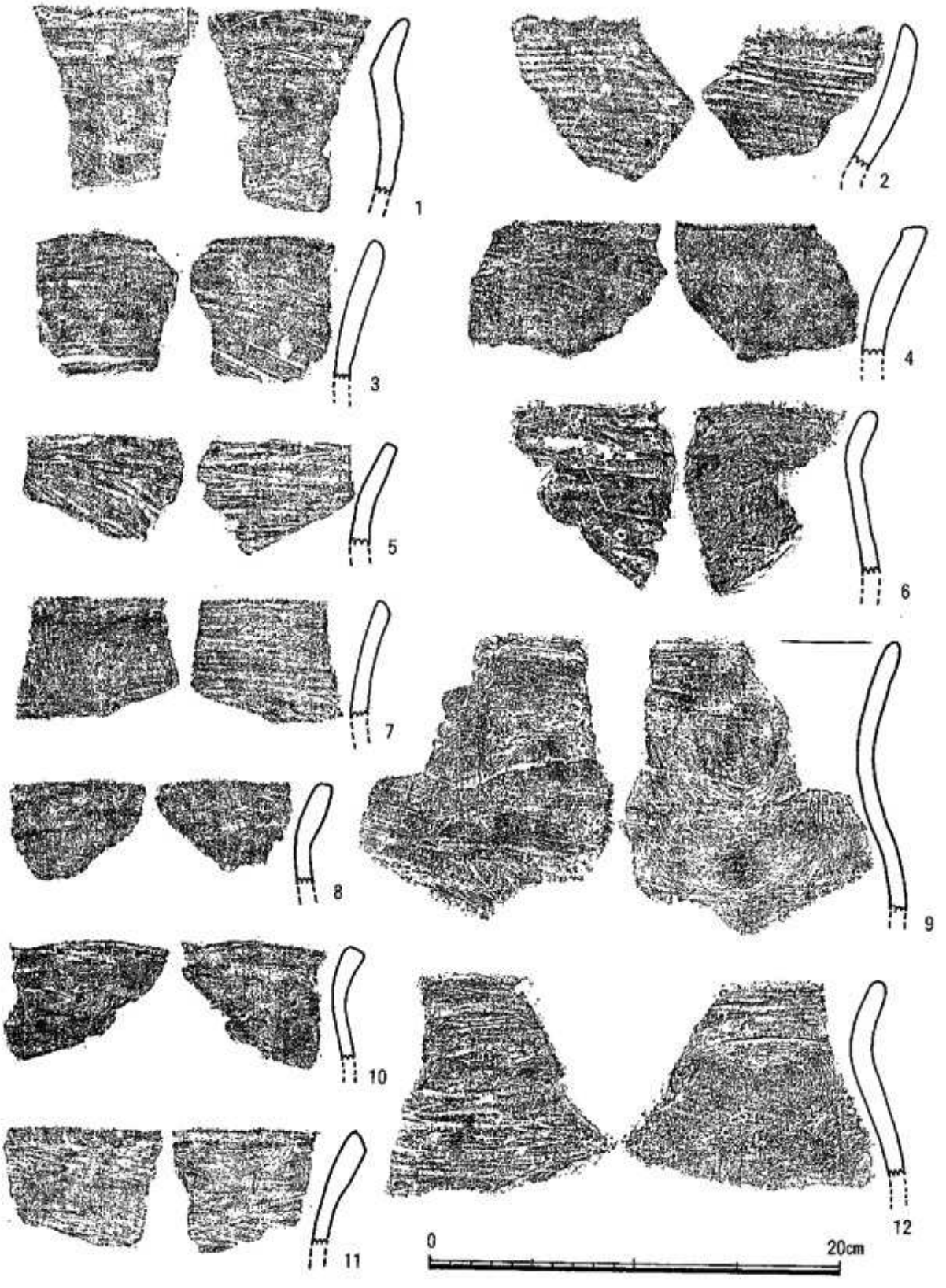
第165図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（22）



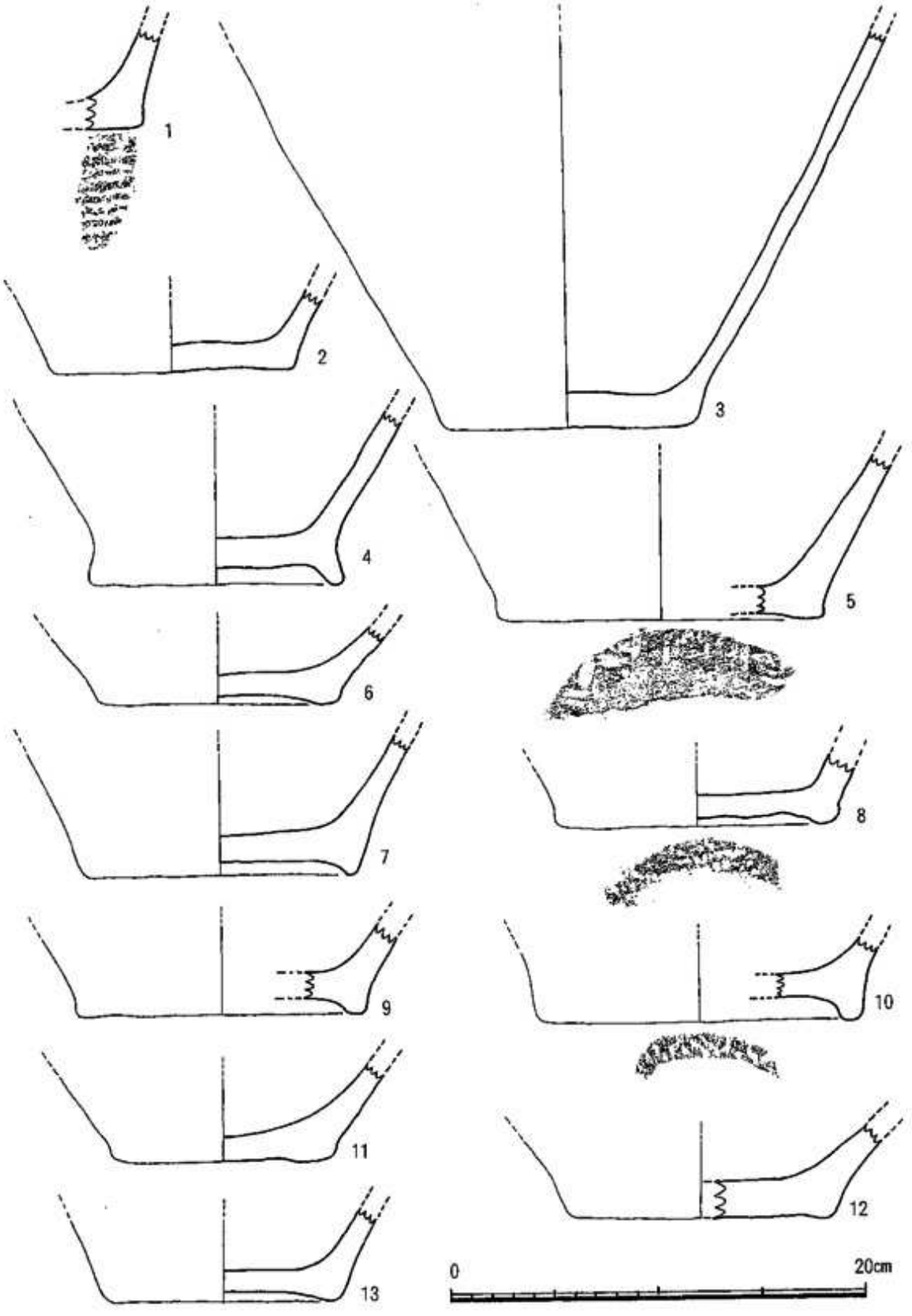
第 166 図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（23）



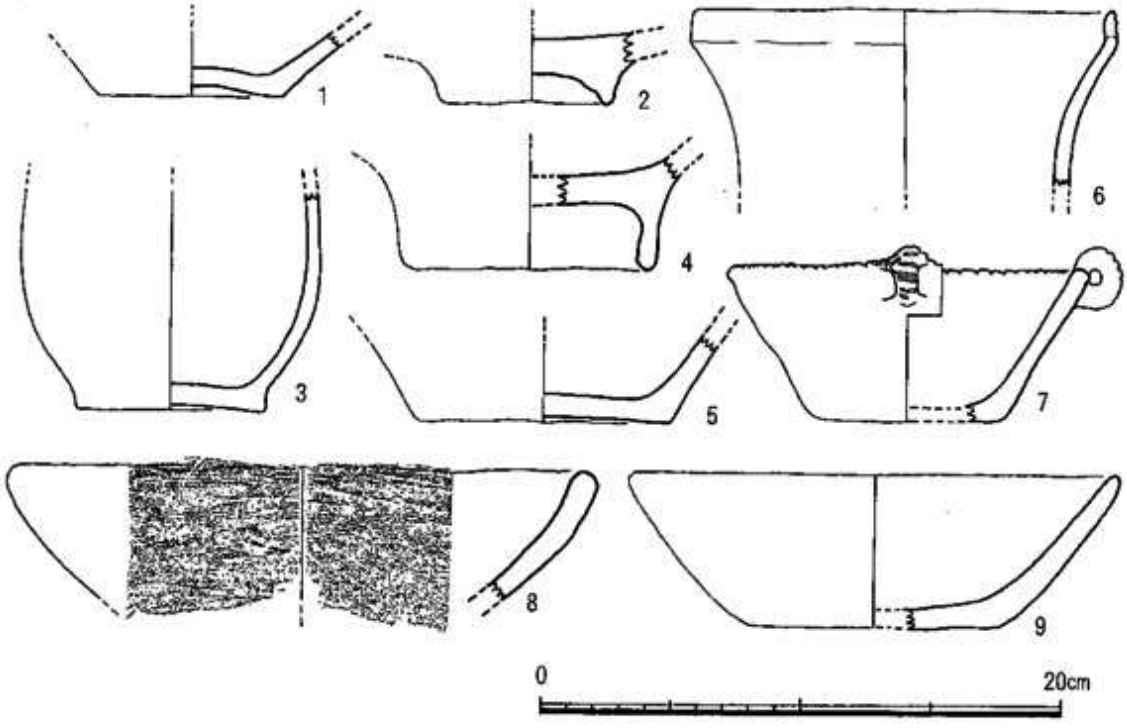
第167図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（24）



第168図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（25）



第169図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（26）



第170図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器実測図（27）

表21　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器観察表（１）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
144	1	平成2年度調査区	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕+ナデ	ナデ	○	○	○	○						Ⅰ有文深鉢A₂
	2	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○	○	○	○					〃
	3	〃	沈線文、磨消縄文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○	○	○	○					〃
	4	〃	沈線文、磨消縄文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○	○	○	○			○		〃
	5	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	条痕+ナデ	○	○		○	○					〃
	6	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○	○					〃
	7	〃	沈線文、磨消縄文、口唇部施文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○	○		○					Ⅰ有文深鉢A₂
	8	〃	沈線文、巻貝条痕+ナデ	ナデ	○	○		○		○				〃
	9	〃	磨消縄文、ナデ	条痕+ナデ	○	○	○	○				○		Ⅰ無文鉢
	10	〃	把手、沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					Ⅱ有文浅鉢
145	1	〃	把手、沈線文、口唇部施文、巻貝条痕+ナデ	条痕+ナデ	○	○	○	○						Ⅱ有文深鉢A
	2	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	条痕+ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	把手、沈線文、口唇部施文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	把手、沈線文、ナデ	巻貝条痕	○	○		○						〃
	5	〃	沈線文、ナデ+ミガキ	ナデ+ミガキ	○	○		○	○					〃
146	1	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○			○			Ⅱ有文深鉢B
	2	〃	沈線文、巻貝条痕+ナデ	ナデ	○	○		○						Ⅱ有文鉢A₁
	3	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○						〃
147	1	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○		○				Ⅱ有文深鉢A
	2	〃	沈線文、巻貝条痕+ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○			○			〃
	3	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕+ナデ	巻貝条痕+ケズリ+ナデ	○	○		○						〃
	4	〃	沈線文、巻貝条痕+ナデ	巻貝条痕+ケズリ+ナデ	○	○	○	○			○			〃
148	1	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○						〃
	2	〃	沈線文、巻貝条痕+ナデ	巻貝条痕+ケズリ+ナデ	○	○		○						〃
	3	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○						〃
	4	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	5	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○	○			○		〃
149	1	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	2	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○	○	○	○					〃
	3	〃	沈線文、巻貝条痕+ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○	○	○				○		〃
	4	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○					○			〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ケズリ+ナデ	○	○		○	○					Ⅱ無文鉢
	6	〃	口縁部穿孔、巻貝条痕+ナデ+ミガキ	ナデ+ミガキ	○	○		○				○		〃
150	1	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ+ミガキ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○						Ⅱ有文深鉢A
	2	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○		○	○			〃
	3	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○	○					Ⅱ有文深鉢B
	4	〃	沈線文、巻貝条痕+ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○	○	○	○			Ⅱ有文深鉢A
	5	〃	沈線文、巻貝条痕+ナデ+ミガキ	ケズリ+ナデ	○	○		○	○					〃
	6	〃	沈線文、巻貝縦縄文	巻貝条痕+ケズリ+ナデ	○	○	○	○	○					〃
	7	〃	沈線文、巻貝条痕+ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○	○	○				〃
151	1	〃	沈線文、ナデ+ミガキ	巻貝条痕+ナデ+ミガキ	○	○		○	○					Ⅰ有文鉢A₂
	2	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○	○	○				〃
	3	〃	沈線文、巻貝条痕+ナデ	ナデ	○	○		○		○		○		〃
	4	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕+ナデ+ミガキ	○	○	○	○	○			○		〃
	5	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○		○	○			〃
	6	〃	沈線文、ナデ	ナデ+ミガキ	○	○		○						〃
	7	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○			○			〃
	8	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○	○	○	○					〃
	9	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	10	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕+ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○		○				〃
	11	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○						〃
	12	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ+ナデ	○	○		○						〃
	13	〃												〃
	14	〃	沈線文、巻貝条痕+ナデ	ナデ	○	○	○	○						〃
152	1	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○			○		Ⅱ有文鉢A₂
	2	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕+ナデ	ナデ+ミガキ	○	○		○	○			○		〃
	3	〃	沈線文、ナデ	条痕+ナデ	○	○		○				○		〃
	4	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○		○				〃
	5	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ+ナデ	○	○		○		○				〃
	6	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	7	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	巻貝条痕+ナデ	○	○		○	○	○	○			〃
153	1	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ+ナデ	○	○		○	○					〃
	2	〃	沈線文、ナデ	ケズリ+ナデ	○	○		○	○					〃

表22　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器観察表（２）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
153	3	平成2年調査区	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					Ⅱ有文縄A1
	4	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○						〃
	5	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	6	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○		○				〃
	7	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	8	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	9	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	10	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○						〃
	11	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	12	〃	把手、沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○								〃
	13	〃	把手、沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
154	1	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	2	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	3	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	4	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○	○					〃
	5	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	6	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	7	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	8	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	9	〃	沈線文	摩滅	○	○		○		○		○		〃
	10	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○						〃
	11	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○						〃
	12	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕	○	○		○	○					〃
	13	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	14	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
155	1	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					Ⅱ有文縄B
	2	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ケズリ＋ナデ	○	○	○	○	○					〃
	4	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○				○		〃
	5	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	6	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○		○				〃
	7	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○						〃
156	1	〃	沈線文、口唇部施文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					Ⅰ有文縄A1
	2	〃	沈線文、口唇部施文、磨消縄文、ナデ	二枚貝条痕＋ナデ	○	○	○	○						〃
	3	〃	沈線文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					Ⅱ有文縄B
	4	〃	沈線文、磨消縄文＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○	○				Ⅰ有文縄C
	5	〃	口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ケズリ＋ナデ	○	○		○	○	○				Ⅱ有文縄A1
	6	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					Ⅱ有文縄B
	7	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	8	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	9	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	10	〃	沈線文、磨消縄文、ミガキ＋ナデ	ミガキ＋ナデ	○	○		○						〃
	11	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					Ⅰ有文縄A1
	12	〃	沈線文、ナデ	ミガキ＋ナデ	○	○		○	○					〃
	13	〃	沈線文、磨消縄文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○				○		Ⅱ有文縄B
157	1	〃	沈線文、磨消縄文、ミガキ	条痕＋ナデ	○	○		○	○			○		Ⅰ有文縄A1
	2	〃	沈線文、磨消縄文	条痕＋ナデ	○	○		○	○	○	○	○		〃
	3	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○		○	○	○				〃
	4	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	5	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○		○	○			○		〃
	6	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○	○					〃
	7	〃	沈線文、磨消縄文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○	○				○		〃
	8	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○		○		○				〃
	9	〃	沈線文、縄文	ナデ	○	○		○						〃
	10	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	11	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○	○	○						〃
	12	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○		○					〃
	13	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ミガキ	○	○		○						〃
	14	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○	○				○		〃
	15	〃	沈線文、磨消縄文	巻貝条痕	○	○	○	○				○		〃
158	1	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						Ⅱ有文縄A1
	2	〃	沈線文、条痕＋ナデ	巻貝条痕＋条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	3	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○						○		〃

表 23　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器観察表（３）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
158	4	平成2年調査区	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○						Ⅱ有文群A₂
	5	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	6	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○	○					〃
	7	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	8	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○	○	○	○			〃
	9	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○	○		○		○		〃
	10	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	11	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	12	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○	○	○	○			○		〃
159	1	〃	沈線文、ナデ	磨滅	○	○		○						〃
	2	〃	沈線文、条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	3	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○						〃
	4	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	5	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	6	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○		○				〃
	7	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○	○	○						〃
	8	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	9	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○	○	○						〃
	10	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○		○				〃
	11	〃	沈線文、ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	12	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
160	1	〃	縄文	ナデ	○	○		○						〃
	2	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	磨消縄文＋ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	沈線文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○	○	○			〃
	5	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○								〃
	6	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	7	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○		○	○	○		○		〃
	8	〃	沈線文	ナデ	○	○	○	○	○					〃
	9	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○	○	○	○					〃
	10	〃	沈線文、条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	11	〃	沈線文、磨消縄文	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
161	1	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						Ⅰ有文群A
	2	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	沈線文、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						Ⅰ有文群A
	4	〃	ナデ	沈線文、ナデ	○	○		○	○					〃
	5	〃	沈線文、磨消縄文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	6	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	7	〃	沈線文、磨消縄文、赤色顔料、ナデ	ナデ	○	○		○		○				〃
	8	〃	沈線文	ナデ	○	○		○	○					Ⅰ有文群A
	9	〃	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	10	〃	沈線文、磨消縄文、口唇部施文、ナデ	ナデ	○	○		○						Ⅰ有文群A
	11	〃	沈線文、磨消縄文	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	12	〃	沈線文、磨消縄文	ナデ	○	○	○	○		○				〃
	13	〃	巻貝条痕、口唇部施文	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	14	〃	沈線文、磨消縄文、口唇部施文	ナデ	○	○		○	○					〃
	15	〃	沈線文、磨消縄文、ナデ	ナデ	○	○		○		○				〃
162	1	〃	口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						Ⅱ無文群A₁
	2	〃	口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○	○	○	○				〃
	3	〃	口唇部施文、条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ケズリ＋ナデ	○	○		○				○		〃
	4	〃	口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	5	〃	口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	6	〃	口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○						〃
	7	〃	口唇部施文、ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○		○				〃
163	1	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					Ⅱ無文群B
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	4	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	5	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○		○			〃
	6	〃	ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○	○					〃
	7	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	8	〃	巻貝条痕	巻貝条痕	○	○		○						〃
	9	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃

表 24　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器観察表（４）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
163	10	平成1年度調査区	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					Ⅱ縄文時代B
	11	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
164	1	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	ケズリ＋ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○				○		〃
	5	〃	ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	6	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ケズリ＋ナデ	○	○		○	○					〃
	7	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	8	〃	ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	9	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ケズリ＋ナデ	○	○		○						〃
	10	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
165	1	〃	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○					Ⅱ縄文時
	2	〃	ミガキ＋ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	3	〃	ミガキ	ミガキ	○	○		○						〃
	4	〃	条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	5	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	6	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	7	〃	ナデ	摩滅	○	○		○	○					〃
	8	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	9	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	10	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	11	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○	○	○						〃
166	1	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	2	〃	沈線文、巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○	○	○	○					〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	5	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	6	〃	巻貝条痕＋ナデ	摩滅	○	○		○	○					〃
	7	〃	条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	8	〃	巻貝条痕＋ナデ	条痕	○	○		○	○					〃
	9	〃	ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	10	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	11	〃	ナデ	ナデ	○	○								〃
	12	〃	摩滅	ナデ	○	○		○	○		○			〃
	13	〃	摩滅	条痕	○	○		○						〃
	14	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○						〃
167	1	〃	ケズリ＋ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					Ⅱ縄文時代B
	2	〃	巻貝条痕＋ミガキ＋ナデ	ケズリ＋ミガキ	○	○		○	○					〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○			○		〃
	4	〃	口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○		○		○		Ⅱ縄文時代A1
	5	〃	沈線文、口唇部施文、巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○	○	○	○			○		〃
168	1	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○	○	○			Ⅱ縄文時代B
	2	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○	○	○	○			○		〃
	5	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○	○	○	○					〃
	6	〃	条痕＋ミガキ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○						〃
	7	〃	巻貝条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○						○		〃
	8	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	9	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	10	〃	条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	11	〃	条痕＋ミガキ＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○					〃
	12	〃	条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○	○				〃
169	1	〃	網代底、ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○	○				Ⅰ底部
	2	〃	ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	3	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	4	〃	条痕＋ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	5	〃	網代底、ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	6	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○	○	○						〃
	7	〃	巻貝条痕＋ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○		〃
	8	〃	網代底、ナデ	ナデ	○	○		○	○	○				〃
	9	〃	ナデ	ナデ	○	○		○						〃

表 25　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土土器観察表（５）

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法 表	文様の特徴と器面調整の方法 裏	胎土 角閃石	胎土 斜長石	胎土 石英	胎土 白色粒	胎土 赤色粒	胎土 灰色粒	胎土 茶色粒	胎土 雲母	備考	分類
169	10	第Ⅲ層	網代底、ナデ	ナデ	○	○		○	○					Ⅰ底部
	11	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	12	〃	ナデ	ナデ	○	○		○		○				〃
	13	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○		○	○	○	○			〃
170	1	〃	巻貝条痕	ナデ	○	○		○						〃
	2	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	3	〃	ナデ	ナデ	○	○		○			○			Ⅰ無文体
	4	〃	ナデ	ナデ	○	○		○						Ⅰ底部
	5	〃	ナデ	ナデ	○	○		○	○					〃
	6	〃	ナデ	ナデ	○	○		○						〃
	7	〃	把手、口唇部刻目、条痕＋ナデ	条痕＋ナデ	○	○		○				○		Ⅰ有文体
	8	〃	巻貝条痕＋ナデ	巻貝条痕＋ナデ	○	○	○		○					Ⅰ無文体
	9	〃	条痕＋ミガキ	条痕＋ミガキ	○	○		○						Ⅱ無文体

13. 飯田二反田遺跡出土石器

当遺跡の主体となる時期は縄文時代後期であり、一部縄文時代早期の包含層が確認されているが、出土した石器類の大部分は後期遺構に伴うと考えられるものである。縄文時代後期の遺構としては、1～5号住居跡が確実なものであり、他は溝遺構があるが遺構内に包含された遺物も流れ込みの可能性があり、溝遺構の時期決定の資料とはなり得ない。

遺跡から出土した石器の各遺構内の組成は表26に示すとおりであるが、全体的に狩猟、漁撈、栽培の可能性を示唆する非常に安定した石器組成と言える。

しかし、この中で縄文時代後期中葉頃に出現したと考えられる扁平打製石斧の石器組成の中で占める割合を見てみると、後期後葉期の遺跡で見られるような石鏃の減少とは逆に50%～70%を占める圧倒的な優位性は認められず、むしろ扁平打製石斧出現から石器組成の主体となる過渡的な様相を示すものとして把握できよう。

また、剥片石器については石鏃を中心に石匙、石錐が住居跡から出土し、各々石核や剥片、砕片を有する事から見て、住居跡内における石器製作が実施されていたことが伺える。しかし、石鏃や他の石器も種類や量は決して多くなく、剥片石器について言えば全体的には衰退傾向にあると言える。

礫石器類は石皿、磨石といった主として住居内で使用するものと扁平打製石斧、磨製石斧、石錘等、住居外で使用する石器が各々の住居内に残存しており、剥片石器類の各住居内製作も含めて考えるとここではいわゆる石器製作を専業しとた人々の姿を思い浮かべることはできない。

出土した剥片石器石材については、表27に示したが、姫島産黒曜石が圧倒的に多く、以下、サヌカイト、ガラス質安山岩、黒色黒曜石、チャート、頁岩と続く。この中で若干であるが、ガラス質安山岩とチャート製の石器が確認されるが、県内ではこの石材はほぼ縄文時代早期に限って使用された傾向があり、この2種類の石材利用の石器については縄文時代早期包含層からの流れ込みの可能性がある。

（　）は台風による紛失遺物量

遺構名／器種名	石鏃	石匙	スクレイパー	楔形石器	石錐	RF	UF	石核	その他	剥片砕片	扁平打製石斧	扁平打製石器	円形石器	磨製石斧	石錘	磨石	敲石	石皿	砥石	凹石
1号住居跡	12(1)	1	1	7	1	4	6	7		113	2			2	5	4		1		
2号住居跡	(2)	(1)	(1)	1			1	1		9	1				4	2				
3号住居跡	4(21)	5	5	17	1	5	1	19		249	10			1	13	4	1	8	1	
4号住居跡	(2)			4						6		3			2	3		2		
5号住居跡	1(4)	1	1	1	1	1		2		39	2				6	1		4		1
包含層	17(13)	7	7	29	6	25		51		705	19	4	3	9	53	6	2	2		2
平成2年調査区	18	2	2	14		16	5	20		313	5			3	1			1		
溝	8(10)	6	6	8	3	14	3	20	1	328				3	5		1		1	
表採				3	1			6		36										

表26　飯田二反田遺跡石器組成表

（　）は台風による紛失遺物量

出土地区	石　材	石鏃	掻器	楔形石器	石錐	R F	U F	石核	剥片砕片	重量計(g)	%
1号住居跡	姫島産黒曜石	9	2	7	1	3	4	5	102	299.9	51.26
	サヌカイト	1(1)					1		4	81.8	13.98
	ガラス質安山岩								1	1.5	0.26
	黒色黒曜石	1				1	1		2	11.6	1.98
	チャート							2	3	117.7	20.12
	頁岩	1								0.9	0.32
	ギョクスイ								1	71.7	12.25
2号住居跡	姫島産黒曜石	(2)		1			1	1	9	50.0	
	サヌカイト		(1)								
3号住居跡	姫島産黒曜石	4(17)	5	13	1	5	1	18	235	471.6	83.71
	サヌカイト	(2)	(1)	3					9	19.5	3.46
	ガラス質安山岩								1	0.9	0.16
	黒色黒曜石								1	0.5	0.09
	チャート	(2)							3	5.1	0.91
	水晶							1		49.3	8.75
	頁岩			1						16.5	2.95
4号住居跡	姫島産黒曜石	(1)		1					6	61.9	
	サヌカイト	(1)									
5号住居跡	姫島産黒曜石	1(1)		1	1	1		2	33	140.7	81.95
	サヌカイト	(3)	1						2	19.1	11.12
	ガラス質安山岩								1	3.4	1.98
	チャート								3	8.5	4.95
包含層	姫島産黒曜石	12(4)	8	22	6	25		48	619	3546.9	87.84
	サヌカイト	1(3)	(2)	4						190.5	4.72
	ガラス質安山岩									152.9	3.79
	チャート	1(2)		3						121.6	3.01
	黒色黒曜石	3(4)								26.0	0.64
平成2年度調査区	姫島産黒曜石	17	1	13		15	5	20	301	1541.8	97.39
	サヌカイト	1	1	1		1			10	37.7	2.38
	ガラス質安山岩								1	2.7	0.17
	黒色黒曜石								1	1.0	0.08
溝	姫島産黒曜石	5(8)	5	7	1	14	3	19	285	1222.4	87.55
	サヌカイト	1(2)	1	1	2				25	112.3	8.04
	ガラス質安山岩								2	9.5	0.68
	チャート								11	27.6	2.00
	黒色黒曜石	1						1	5	21.6	1.55
	水晶	1								2.9	0.21
表採	姫島産黒曜石			3	1			6	33	192.7	93.27
	チャート								2	12.2	5.87
	黒色黒曜石								1	1.7	0.82

表 27　飯田二反田遺跡剥片石器石材・器種別組成表

姫島産黒曜石が剥片石器素材の主体を占めることは前述したが、具体的に出土重量からも明らかであり、総出土重量約85%が姫島産黒曜石である。しかし、姫島産黒曜石の個別の状態を見ると、県内の縄文時代前期遺跡で比較的多く見られる大型の姫島黒曜石の石核あるいは原石の遺構内への持ち込みは当遺跡でも確認されず、この原因として前期以降に姫島黒曜石の交易や運搬、搬出に何らかの変化が生じたものと考えられている。

礫石器に使用された石材は安山岩と輝石安山岩が大部分であり、この石材が遺跡周辺地域で産出され入手や加工が容易であったことが原因として考えられる。このことは安心院、院内、

宇佐地域に所在する縄文時代後期遺跡の礫石器類に普遍的な石材利用であると言える。

第171図は礫石器類の出土分布図である。これは上段では、磨製石斧と扁平打製石斧、中段では石錘、下段は磨石、凹石、砥石、敲打石、石皿の分布状況を表している。

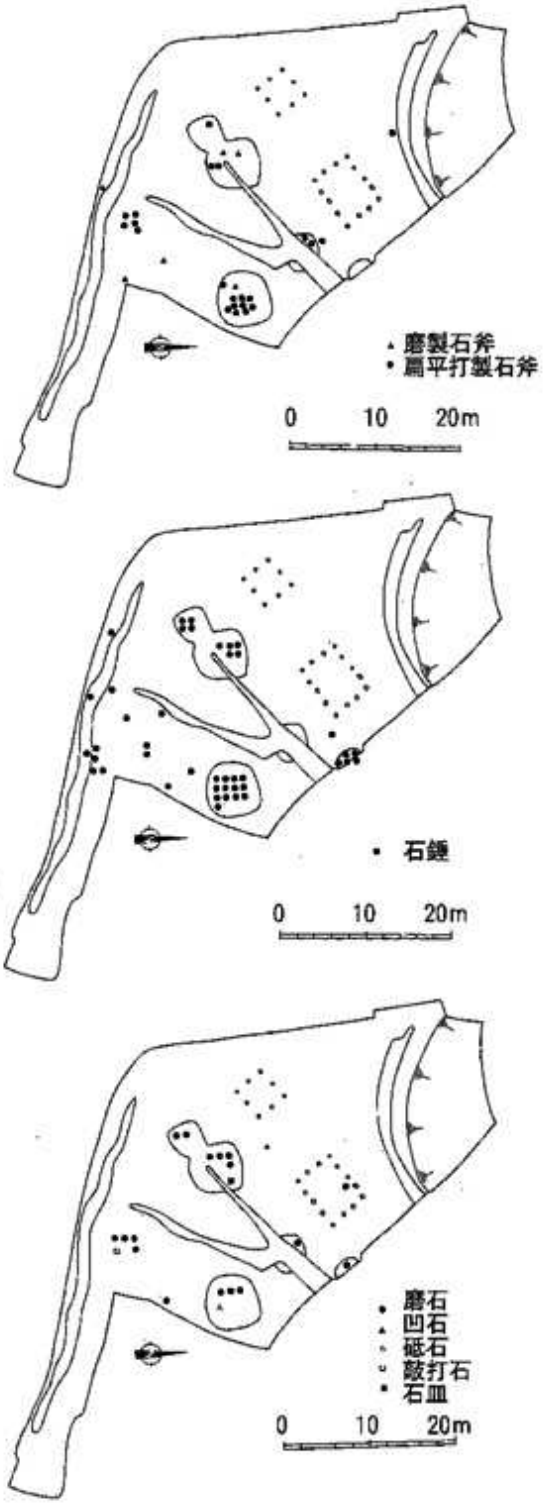
これによると、各種礫石器の大部分が縄文時代後期住居内に集中しており、住居毎の石器の保有の状況を示すものとして注目されるが、出土した扁平打製石斧や磨製石斧には欠損したものも多く、これが住居跡に伴う遺物か流れ込みによるものかの判断は非常に困難である。

住居跡以外の遺物の分布状況を見ると、調査区南側3号溝遺構の南中央部にも各種礫石器の集合状態が確認でき、1、2号集石とも関連して見ると少なくとも1軒ないし2軒の住居跡があった可能性がある。また、1号住居跡の北西に隣接して屋外炉が確認されており、これも住居跡に伴うことが考えられるが、石器の分布状況からはその存在は想定できない。

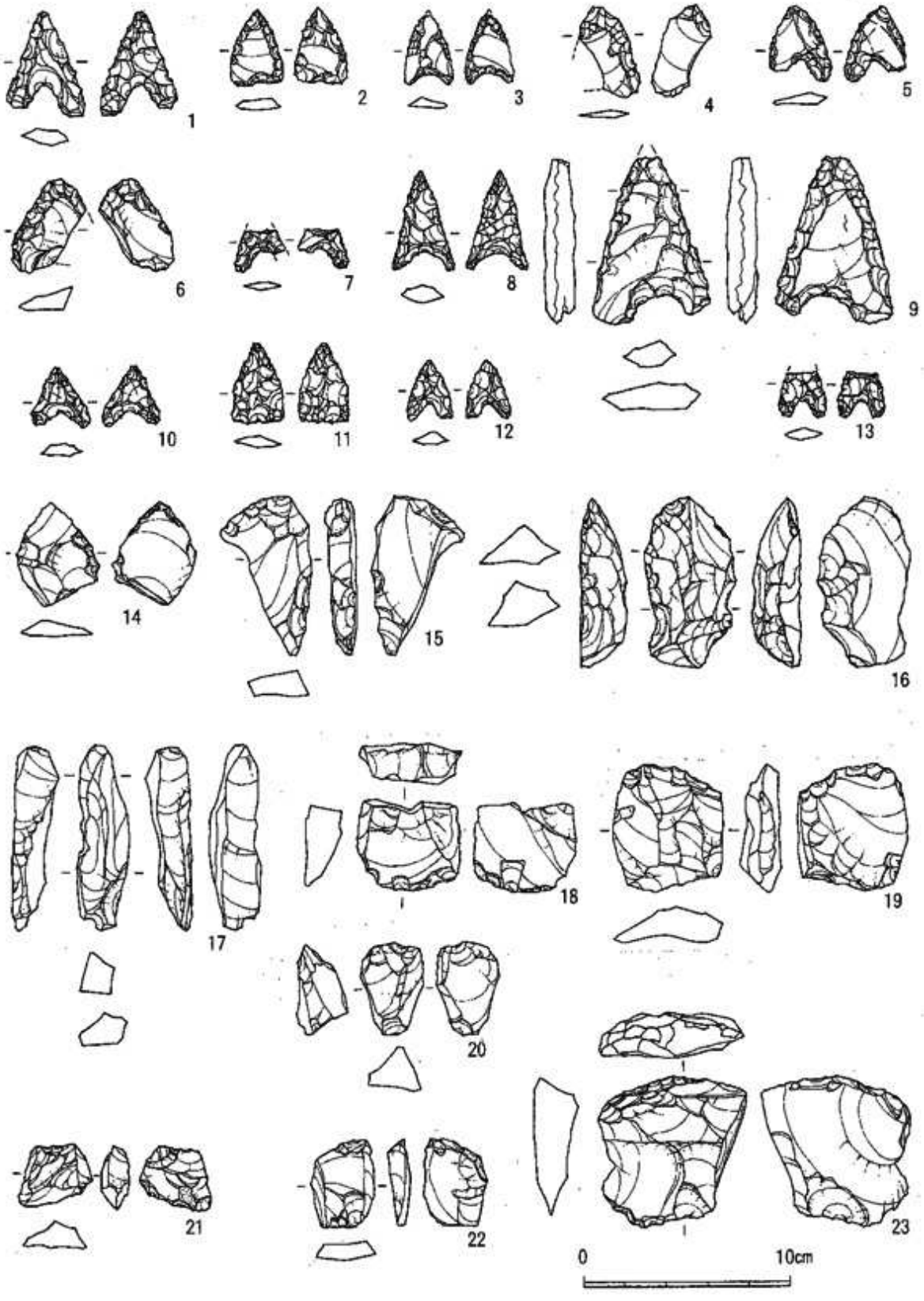
(1) 1号住居跡出土石器

1号住居跡は鐘崎式土器主体の時期であり石鏃、石匙、掻器、石錐等の剥片石器と扁平打製石斧、磨製石斧、石錘、磨石、石皿といった礫石器類が出土している。

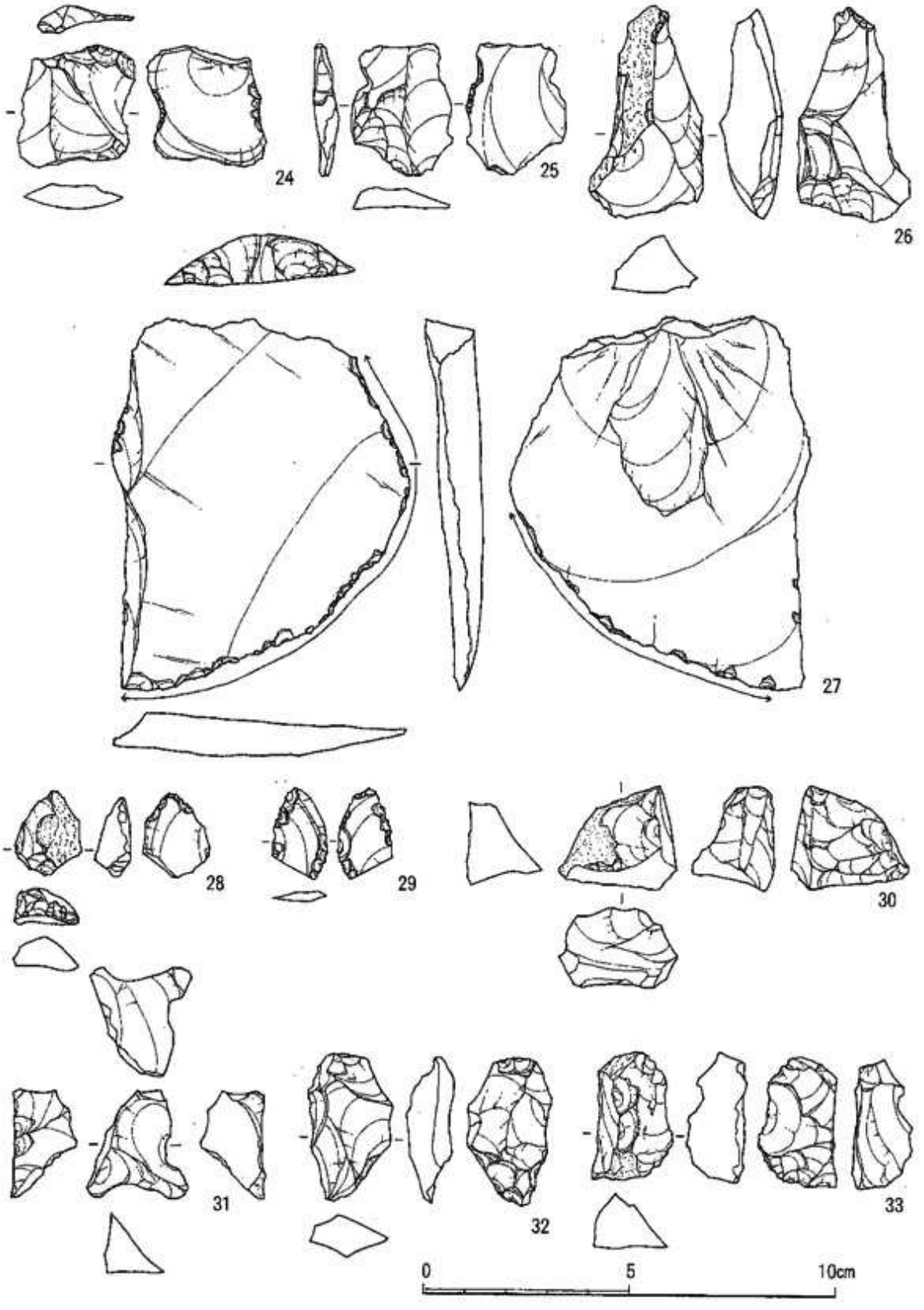
石鏃は円基式の二等辺三角鏃でほとんど姫島産黒曜石製である。サヌカイト、チャートも若干使用されているが、剥片石器の9割は姫島産黒曜石である。同石材の石核や砕片、剥片等も出土しており、当住居内での剥片石器製作が実施されたことが考えられる。



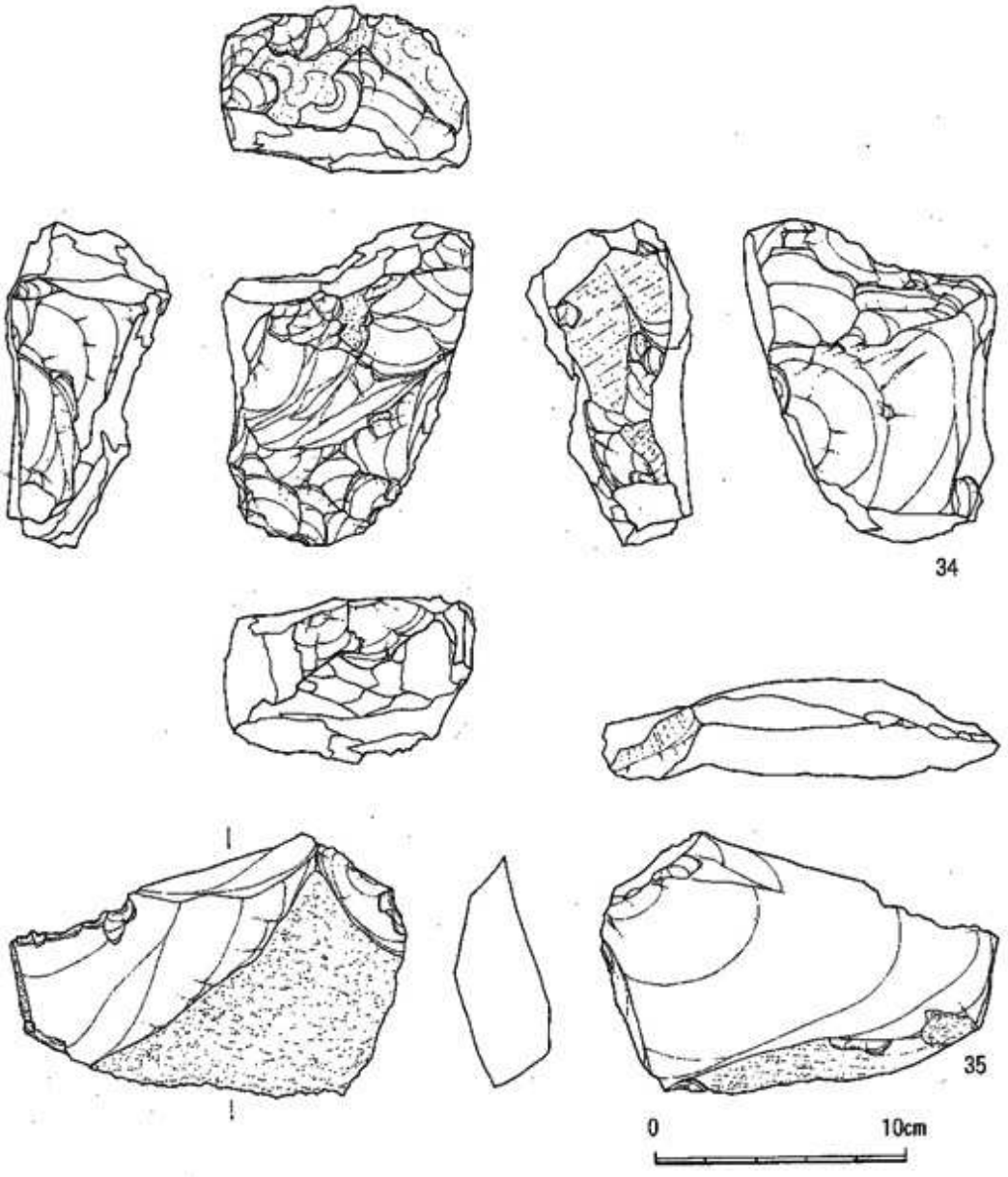
第171図 飯田二反田遺跡各種礫石器出土分布図



第172図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土石器（1）



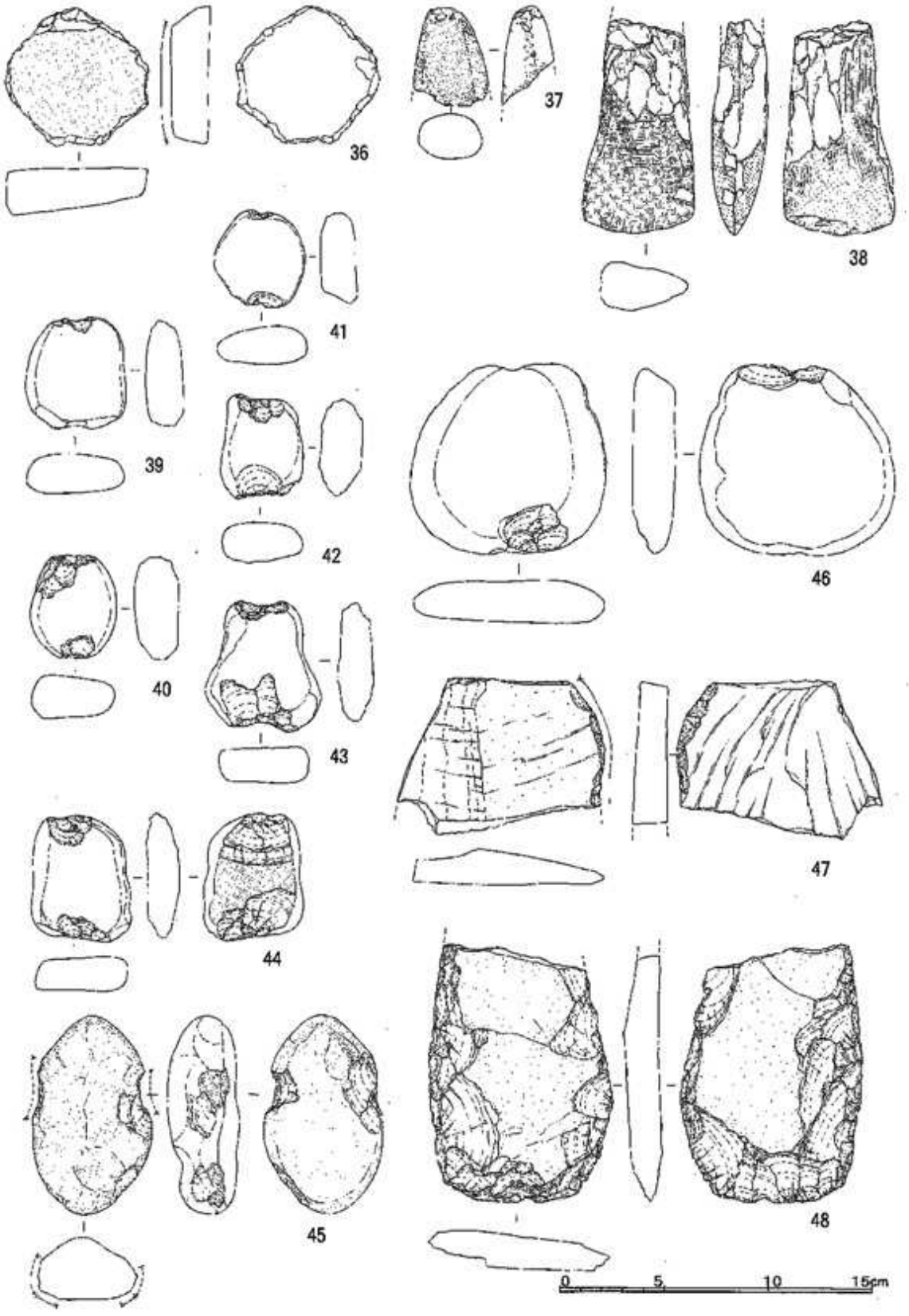
第173図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土石器（2）



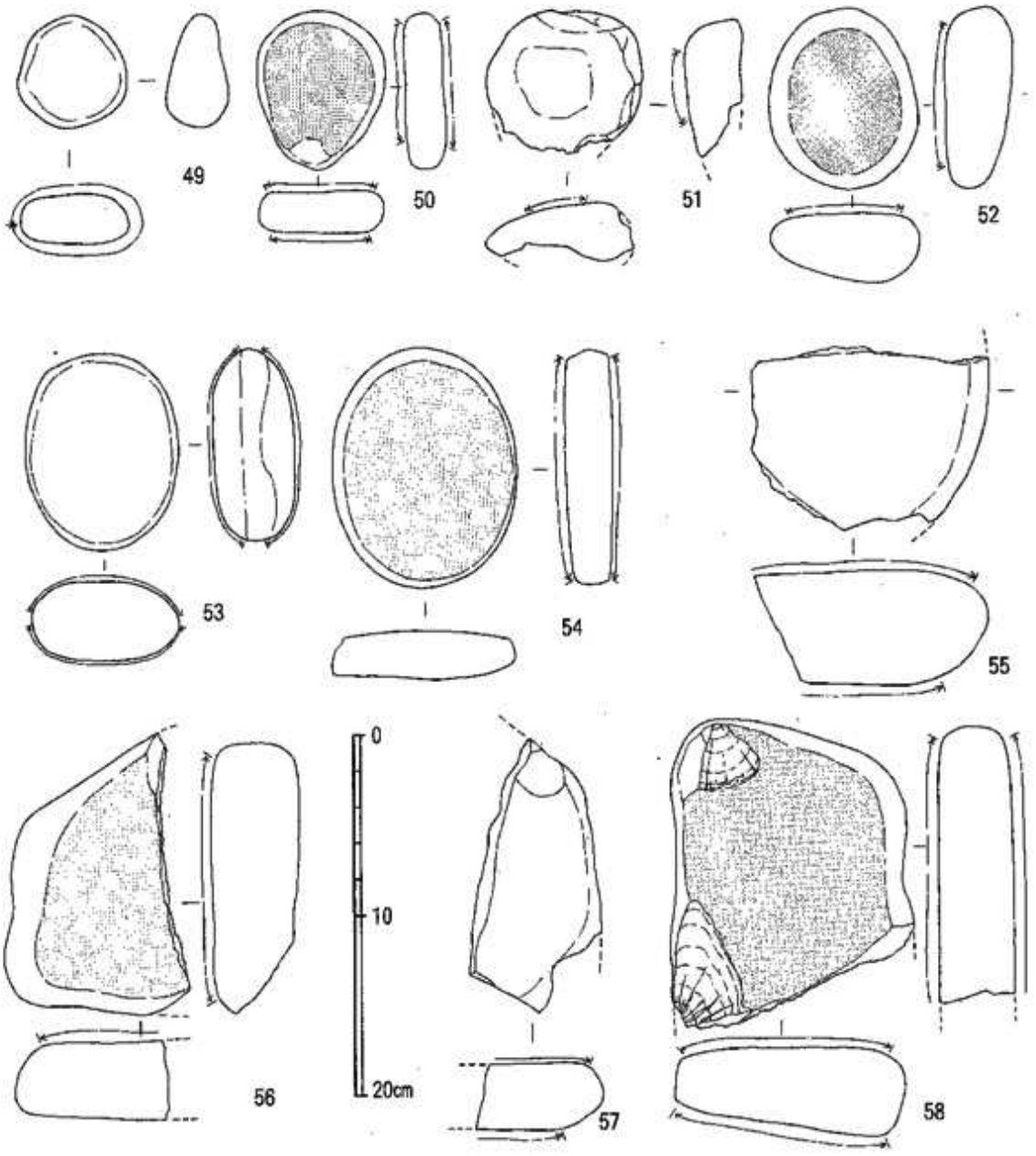
第174図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土石器（3）

礫石器類は石錘、磨石の他はほとんどが欠損した石器であるが、時期的には後期に伴うものと考えられる。石錘はいずれも安山岩の扁平な小礫の両端を打ち欠いたもので、30 g～200 g と重量に幅があり均一ではない。また、扁平打製石斧は基部だけのものと基部を欠損したものが2点のみ出土しているが、片面あるいは両面に自然面（節理面）を残すといった、粗い加工によって整形されたものである。

磨石は安山岩円礫を利用したもので、片面を利用したものと両面を利用したものがある。



第175図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土石器（4）



第176図　飯田二反田遺跡1号住居跡出土石器（5）

単位(cm、g)

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
1	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.8	0.4	1.3	19	楔形石器	姫島産黒曜石	3.0	2.7	1.0	7.1
2	〃	〃	1.8	1.2	0.3	0.5	20	〃	〃	2.2	1.5	1.2	3.0
3	〃	〃	1.7	1.1	0.3	0.5	21	〃	〃	1.4	1.8	0.7	1.4
4	〃	〃	2.2	(1.6)	0.2	0.6	22	〃	〃	2.1	1.5	0.5	1.8
5	〃	サヌカイト	1.9	1.4	0.3	0.8	23	〃	〃	3.4	3.6	1.2	12.2
6	〃	姫島産黒曜石	2.3	(1.9)	0.5	1.6	24	U F	〃	2.6	2.6	0.8	5.8
7	〃	サヌカイト	(1.0)	(1.3)	0.2	0.2	25	〃	黒色黒曜石	3.1	2.4	0.5	3.7
8	〃	チャート	2.4	1.5	0.5	0.9	26	R F	姫島産黒曜石	4.8	3.0	1.5	13.1
9	〃	姫島産黒曜石	(3.9)	2.8	0.8	7.2	27	U F	サヌカイト	9.2	7.3	1.1	71.3
10	〃	〃	1.4	1.4	0.4	0.5	28	R F	黒色黒曜石	2.0	1.5	0.7	2.1
11	〃	〃	1.9	1.2	0.3	0.5	29	〃	姫島産黒曜石	2.2	1.3	0.3	1.0
12	〃	〃	1.4	1.1	0.3	0.3	30	石核	〃	2.5	2.4	2.0	10.1
13	〃	黒色黒曜石	(1.1)	1.1	0.3	0.4	31	〃	〃	2.6	2.4	1.5	4.2
14	石鏃未製品	姫島産黒曜石	2.5	1.9	0.4	1.5	32	〃	〃	3.5	2.0	0.9	5.3
15	掻器	〃	3.9	2.3	0.7	4.6	33	〃	〃	3.1	1.9	1.4	
16	〃	〃	4.1	2.1	1.2	9.1	34	〃	チャート	6.2	5.1	3.0	106.8
17	楔形石器	〃	4.4	1.1	1.0	5.3	35	剥片	メノウ	5.2	7.9	2.0	71.7
18	〃	〃	2.1	2.5	0.9	4.9							

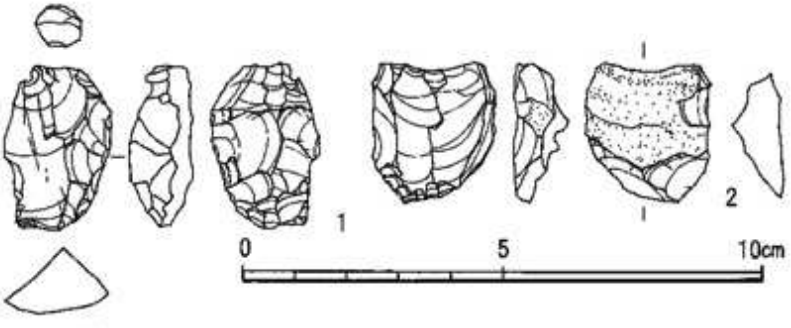
No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
36	円形石器	安山岩	6.7	7.0	2.2		片面摩滅
37	磨製石斧	粘板岩	(4.8)	3.86	2.2		基部のみ、敲打痕
38	〃	緑泥片岩	(10.3)	5.4	2.3		基部欠損
39	礫石錘	安山岩	5.4	4.8	1.9	81	
40	〃	〃	5.0	4.2	2.1	66	
41	〃	〃	4.7	4.4	1.9	39	
42	〃	凝灰岩	5.1	4.0	1.9	55	
43	〃	安山岩	6.3	5.7	1.8	82	
44	〃	〃	6.1	4.9	1.2	85	
45	〃	〃	9.6	5.7	3.0	218	両抉入り部敲打
46	〃	〃	9.2	9.5	2.1	2178	
47	扁平打製石斧	輝石安山岩	(7.6)	10.0	1.7		基部のみ
48	〃	〃	(12.5)	8.9	1.8		基部欠損
49	磨石	安山岩	6.3	6.1	2.8		ほぼ全面摩滅
50	〃	〃	8.8	7.1	2.3		表裏面摩滅
51	〃	〃	(8.0)	8.8	3.2		片面のみ摩滅
52	〃	〃	10.0	8.4	3.8		片面のみ摩滅
53	〃	〃	10.9	8.4	4.4		表裏面摩滅
54	〃	〃	13.3	10.3	2.7		表裏面摩滅
55	石皿	〃	(10.2)	(13.2)	6.3		片面のみ摩滅
56	〃	〃	(10.5)	(15.6)	4.4		片面のみ摩滅
57	〃	〃	(15.3)	(7.3)	1.9		表裏面摩滅
58	〃	〃	(17.1)	(13.7)	4.9		表裏面摩滅

表 28　飯田二反田遺跡１号住居跡出土石器観察表

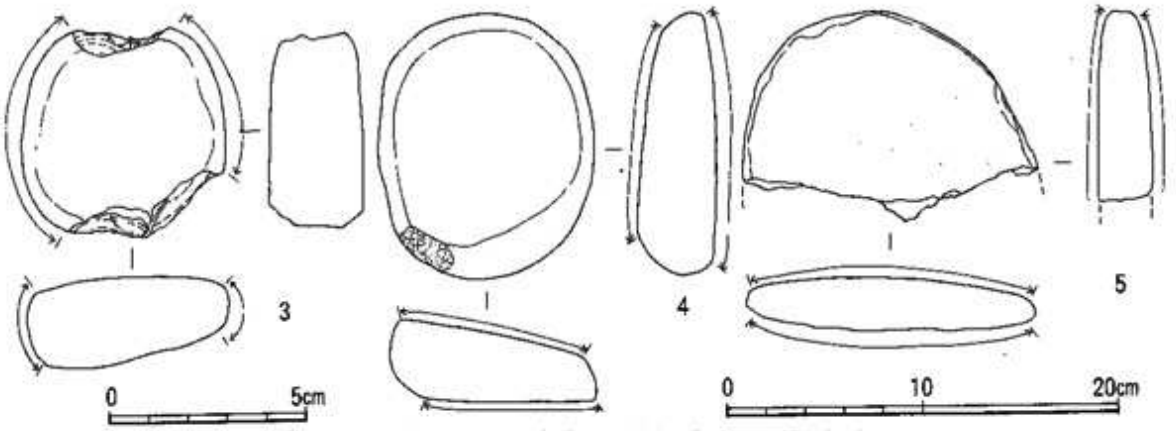
(2)　２号住居跡出土石器

２号住居跡は１号住居跡の西南部と一部切り合っている。出土石器量は少なく、石鏃、石錘、磨石等の一部は紛失している。従って図化できたものは５点のみであったが、石核、剥片、砕片等が出土しており、住居内の石器製作が他同様に実施されている。

磨石は円礫の両面を使用しており、縁辺部には敲打痕が残るものと扁平な円礫の両面を使用するものがあるが、前者ほど摩滅していない。



第 177 図　飯田二反田遺跡２号住居跡出土石器（１）



第178図　飯田二反田遺跡2号住居跡出土石器（2）

単位(cm、g)

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	備考
1	楔形石器	姫島産黒曜石	3.1	2.0	1.1	
2	石核	〃	2.6	2.3	0.9	
3	石錘	安山岩	5.2	5.2	2.5	104g
4	磨石	〃	12.6	10.4	4.0	表裏面摩滅
5	〃	〃	(10.0)	14.6	3.4	表裏面摩滅

表29　飯田二反田遺跡2号住居跡出土石器観察表

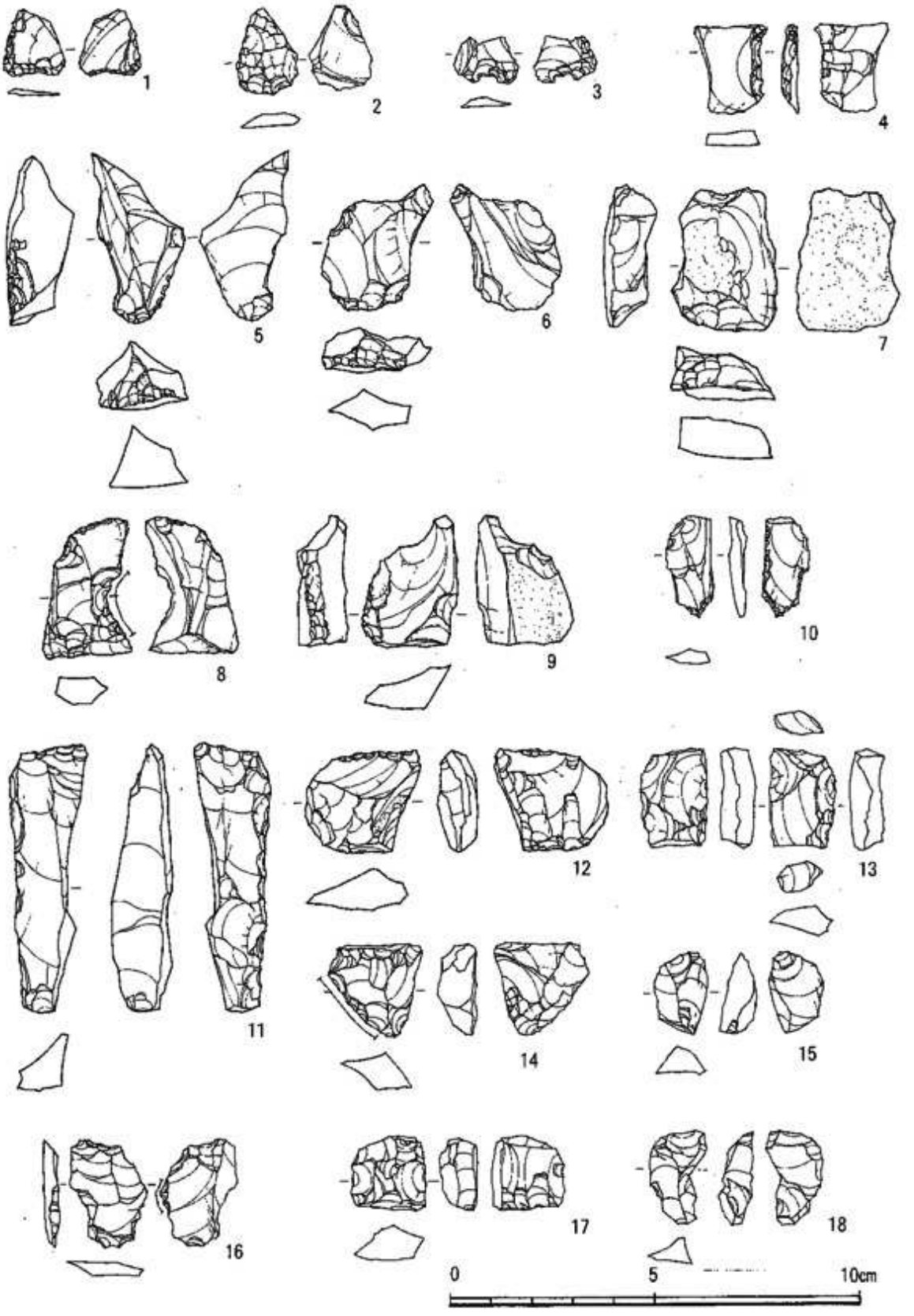
(3)　3号住居跡出土石器

3号住居跡は北久根山式土器を主体とした、切り合い関係もなく、最も良好な状態である。従って当住居跡から出土した石器組成が遺跡の性格を知る重要な資料となり得る。

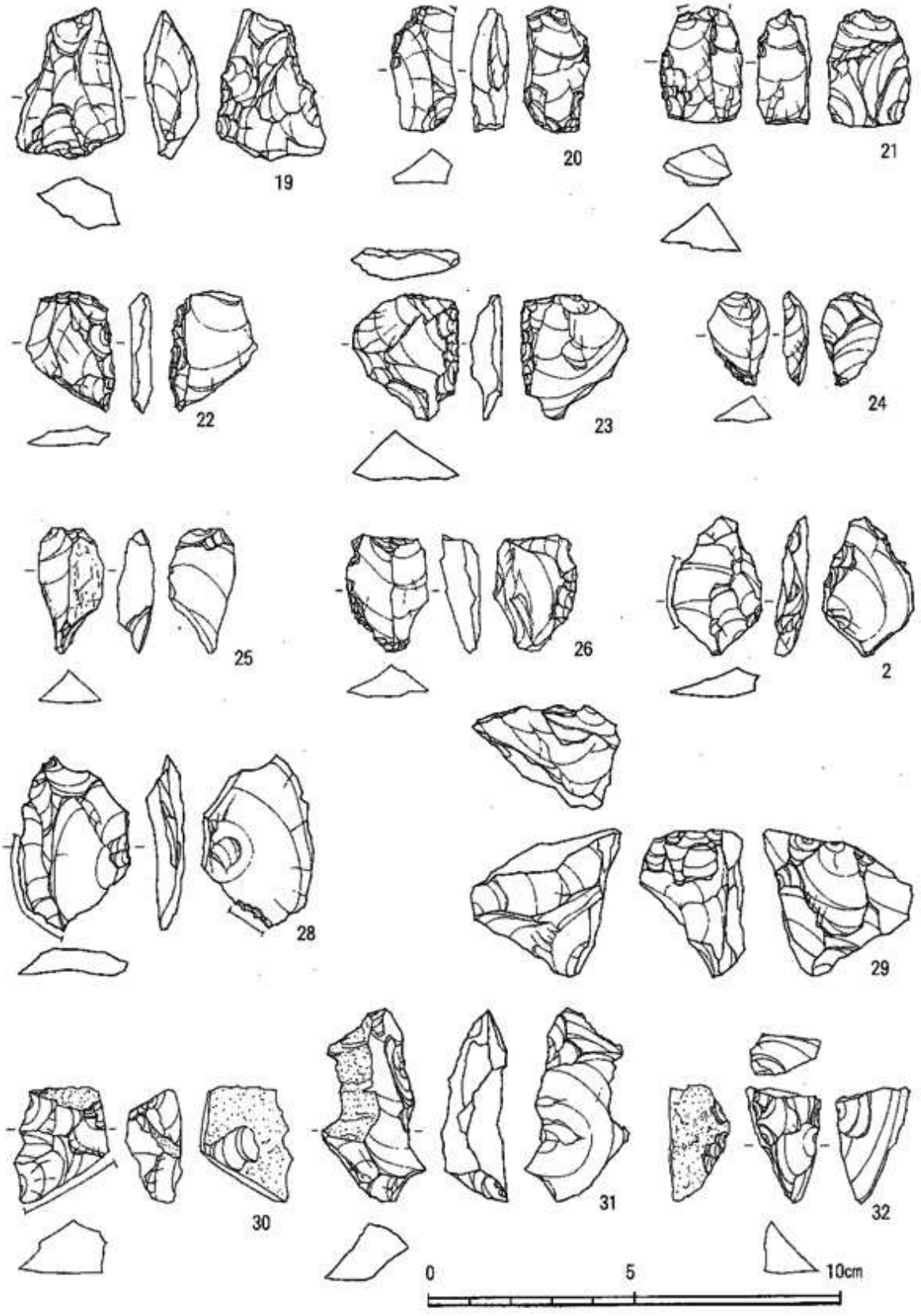
剥片石器									礫石器						
石鏃	石匙	掻器	楔形	石錐	RF	UF	石核	砕片	扁平斧	磨製斧	石錘	磨石	敲石	石皿	砥石
25	1	5	17	1	5	1	19	249	10	1	13	4	1	8	1

改めて当住居跡出土石器組成を見ると剥片石器、礫石器類が万遍なくあるが、ここで注目されるのは、石鏃、扁平打製石斧、石錘である。他石器が基本的に住居内作業用とすれば、狩猟、採集、漁撈、栽培等の屋外作業の具体的な道具とされる扁平打製石斧は大分県ではこの時期に出現したと考えられており、出現期の扁平打製石斧の形態、石器組成で占める割合等の指標となり得るものである。扁平打製石斧の形態で特徴的なものは、第183図54に見られるやや大形の両側辺に抉入部を有するものであり、加工はほとんど整形を意識しただけの粗いものである。この形態はいわゆる分銅型と呼ばれるものであるが、県内ではほとんど出土しないためこの時期特有の形態として把握される。

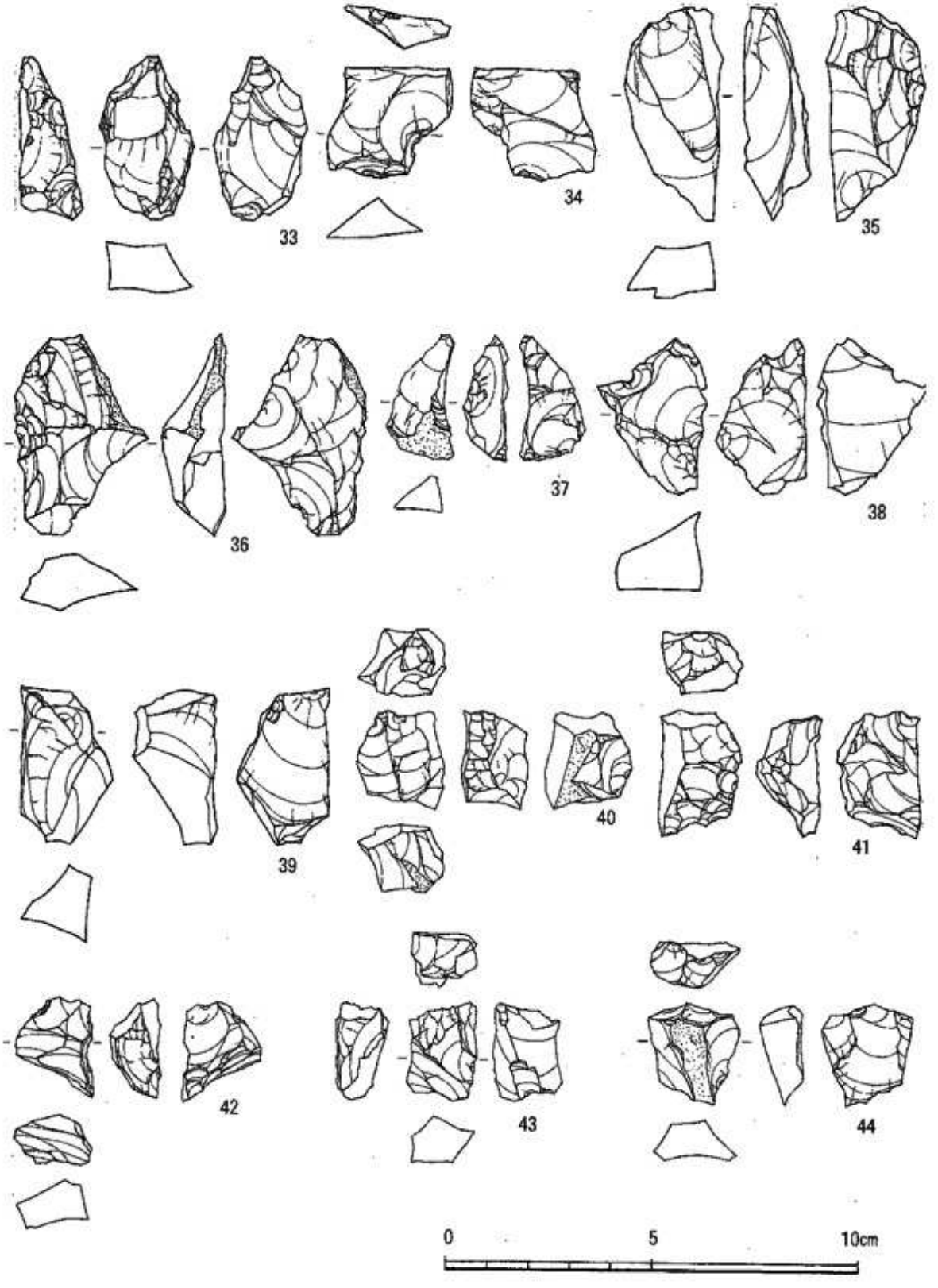
また、石錘は遺跡に隣接する河川での漁撈具として使用されたものと思われる。遺跡周辺は深見川、佐田川の合流地点にあたるため、漁撈がかなりのウエイトを占めていただろうことは遺跡内での石錘の出土量からも想定できる。当住居から13点が出土しており、重量も50g～100g～400gと様々である。



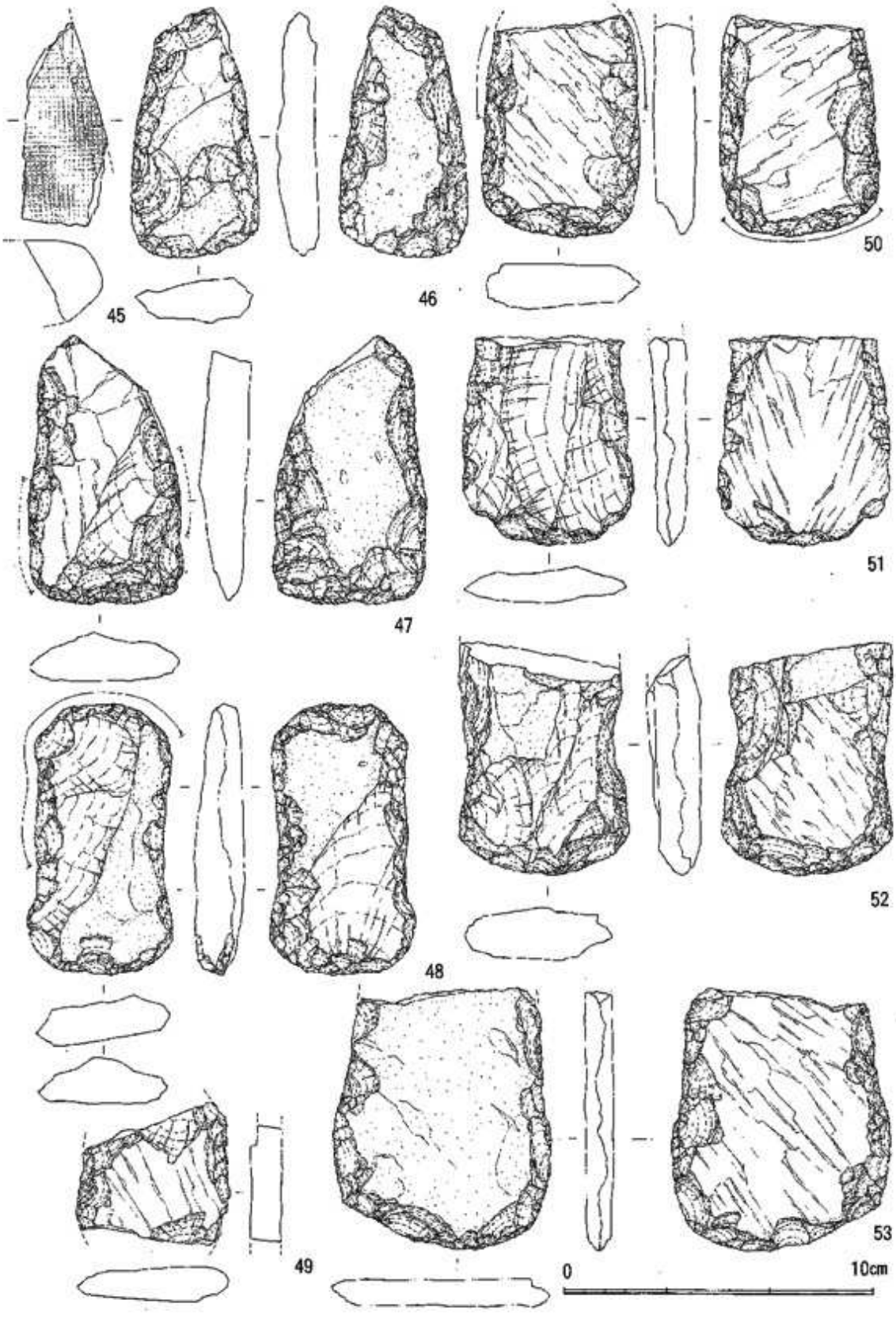
第179図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土石器（１）



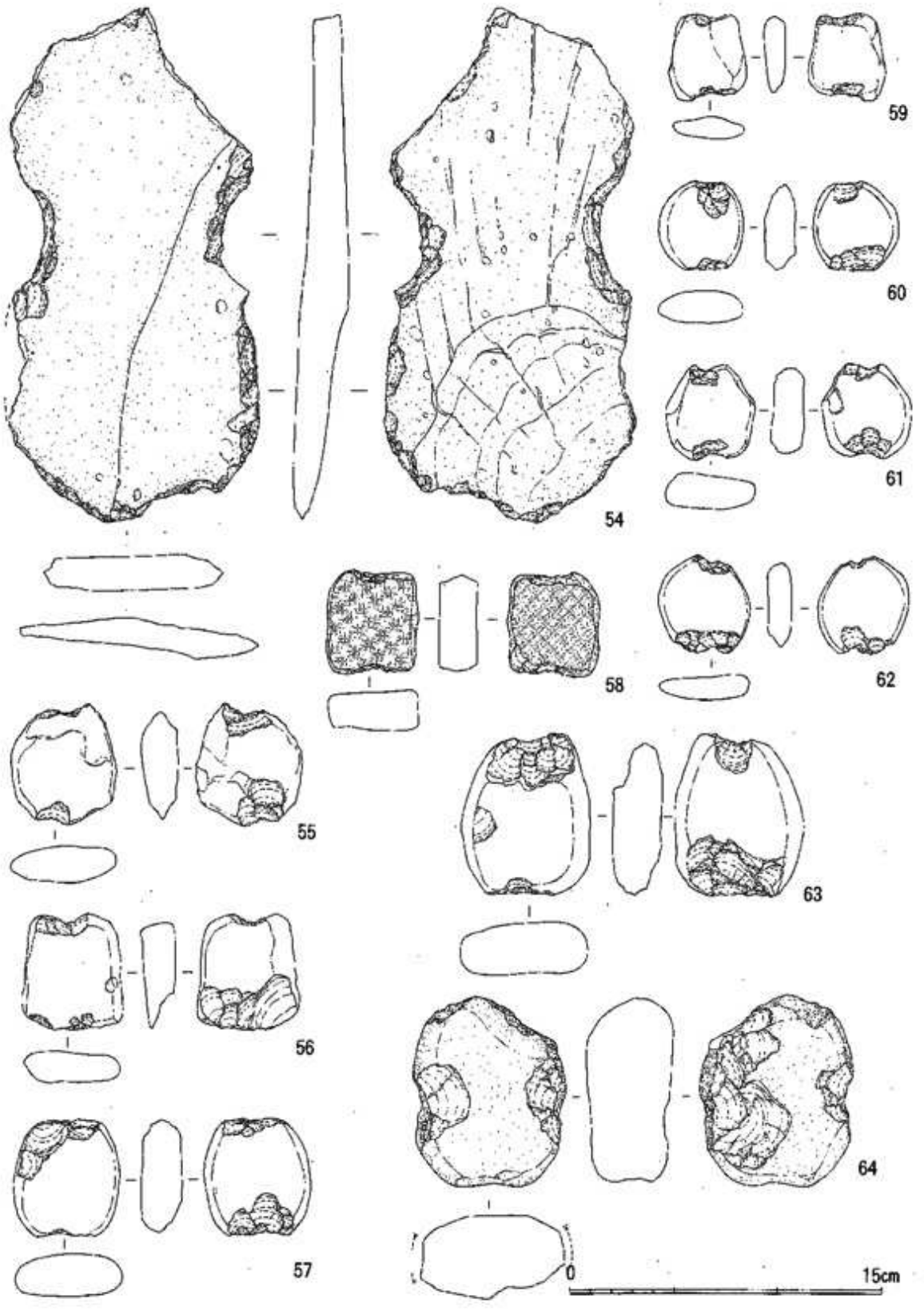
第180図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土石器（２）



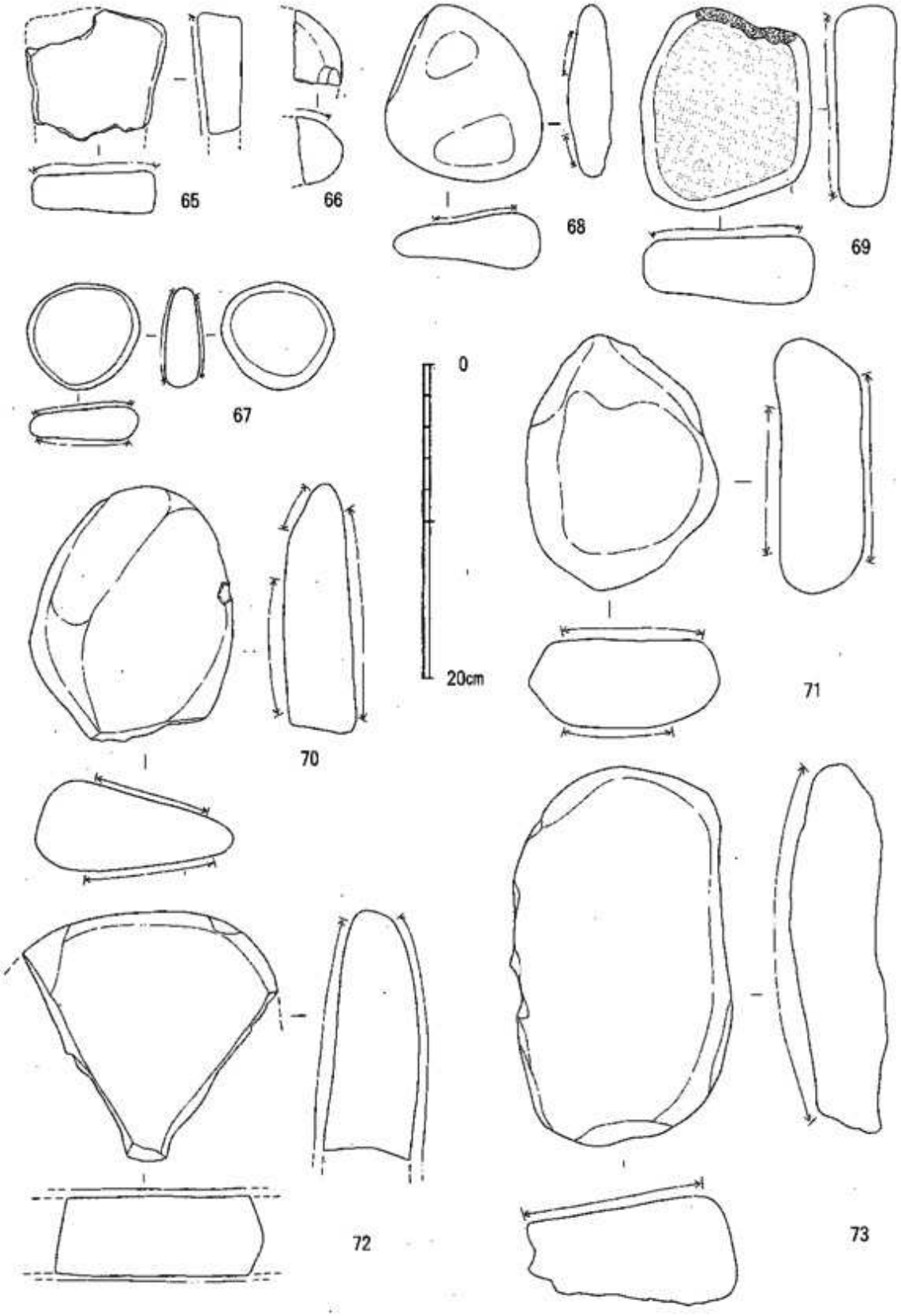
第181図　飯田二反田遺跡3号住居跡出土石器（3）



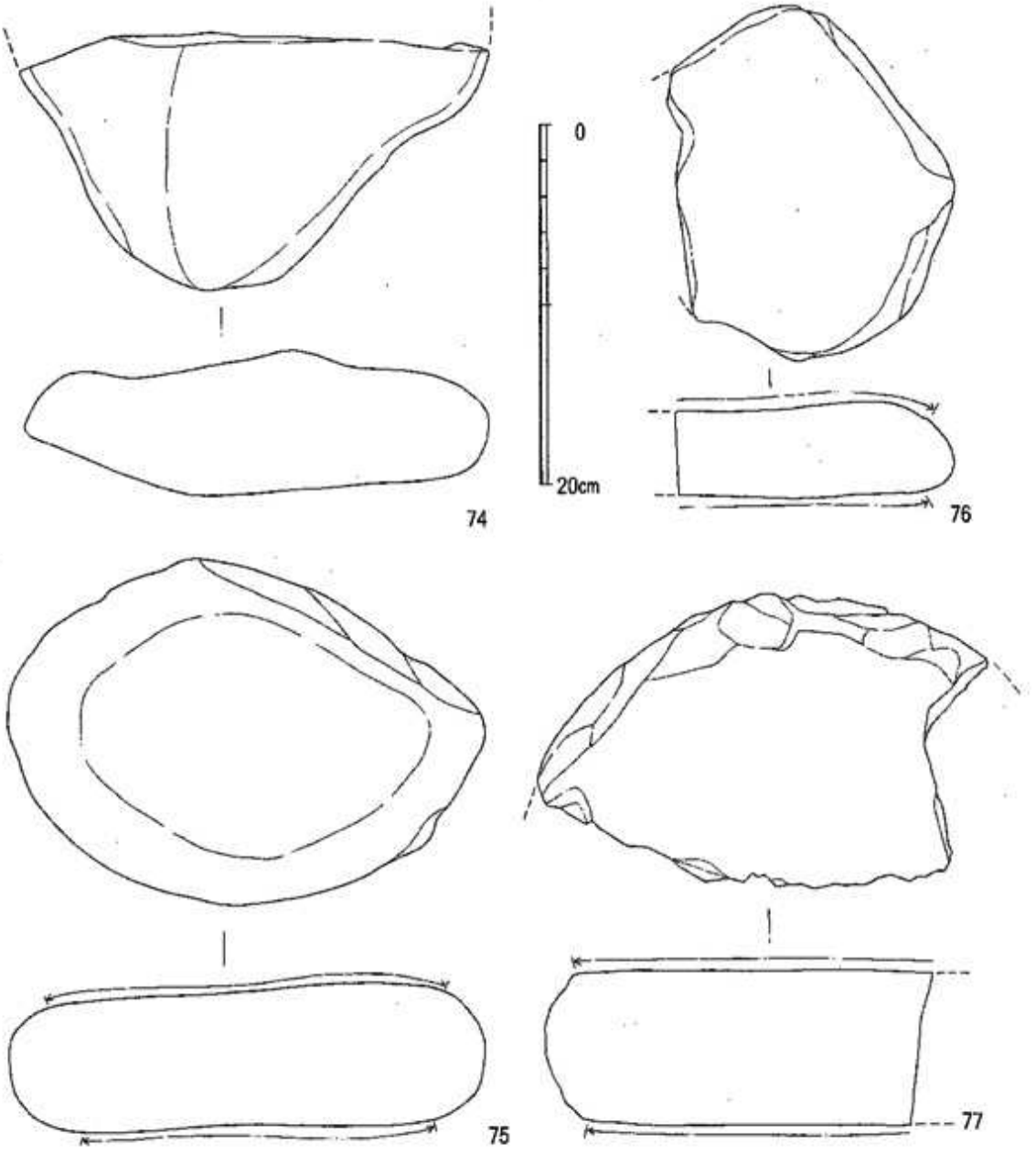
第182図　飯田二反田遺跡3号住居跡出土石器（4）



第183図　飯田二反田遺跡3号住居跡出土石器（5）



第184図　飯田二反田遺跡３号住居跡出土石器（６）



第185図　飯田二反田遺跡3号住居跡出土石器（7）

単位(cm、g)

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
1	石鏃	姫島産黒曜石	(1.6)	1.6	0.1	0.4	23	楔形石器	姫島産黒曜石	3.1	2.6	1.2	4.2
2	〃	〃	2.1	1.5	0.3	1.1	24	〃	〃	2.2	1.5	0.6	1.3
3	〃	〃	(1.1)	1.6	0.2	0.4	25	〃	〃	3.1	1.6	0.8	2.8
4	掻器	〃	2.1	1.9	0.3	1.4	26	R F	〃	2.8	2.1	0.8	3.6
5	〃	〃	4.3	2.2	1.5	8.3	27	〃	〃	3.4	2.2	0.8	3.6
6	〃	〃	3.2	2.2	1.0	5.5	28	〃	〃	4.3	2.6	0.5	6.8
7	〃	〃	3.5	2.5	1.0	11.0	29	石核	〃	3.5	3.7	2.6	19.3
8	〃	〃	3.3	2.2	0.5	4.4	30	〃	〃	2.9	2.3	1.3	6.7
9	〃	〃	3.1	2.3	1.0	5.8	31	〃	〃	4.7	2.6	1.4	10.3
10	R F	〃	2.4	1.1	0.3	0.9	32	〃	〃	2.8	1.8	1.2	5.0
11	楔形石器	赤色頁岩	6.5	1.8	1.3	16.5	33	〃	〃	4.0	2.2	1.2	10.6
12	〃	姫島産黒曜石	2.4	2.8	1.0	5.7	34	〃	〃	2.7	2.6	1.0	6.8
13	〃	〃	2.3	1.6	0.8	4.0	35	〃	〃	5.2	2.3	1.2	14.9
14	〃	〃	2.2	2.8	0.9	3.8	36	〃	〃	4.9	3.2	1.4	13.5

15	〃	〃	1.9	1.3	0.9	1.6	37	〃	黒色黒曜石	3.0	1.5	0.8	
16	〃	〃	2.6	1.9	0.3	1.6	38	〃	姫島産黒曜石	3.8	2.7	1.9	13.5
17	〃	〃	1.8	1.8	0.8	3.1	39	〃	〃	3.8	2.2	2.0	11.3
18	〃	〃	2.3	1.5	0.6	1.5	40	〃	〃	2.3	2.1	1.6	7.1
1	〃	サヌカイト	3.6	2.6	1.0	9.9	41	〃	〃	3.0	1.5	1.5	8.1
20	〃	〃	3.0	1.6	0.8	4.1	42	〃	〃	2.5	1.9	0.9	3.9
21	〃	姫島産黒曜石	2.8	2.0	1.1	6.3	43	〃	〃	2.5	1.6	1.1	4.1
22	〃	サヌカイト	2.9	2.2	0.4	3.4	44	〃	〃	2.4	2.3	0.8	4.2

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	備考
45	磨製石斧	蛇紋岩	(9.8)	(4.1)	(4.0)	一部敲打痕が残る
46	扁平打製石器	安山岩	12.2	6.3	1.8	完形品
47	〃	輝石安山岩	13.1	7.5	5.0	両端が敲打により鈍い
48	〃		13.1	7.2	2.4	完形品
49	〃	安山岩	(7.0)	7.5	1.6	刃部近くのも残存
50	〃	輝石安山岩	(10.5)	7.8	2.0	基部欠損、両端一部敲打
51	〃	〃	(10.1)	8.5	1.8	基部欠損
52	〃		(10.0)	8.3	2.6	基部欠損
53	〃	輝石安山岩	(12.6)	10.6	1.4	基部欠損
54	扁平打製石器	〃	24.6	(12.3)	2.3	両端部に快入部
55	礫石錘	安山岩	5.9	5.1	1.8	71g
56	〃	〃	5.6	4.7	1.5	62g
57	〃	〃	5.6	5.1	2.0	81g
58	〃	〃	4.6	4.4	1.8	81g　ほぼ全面研磨、再利用品
59	〃	〃	4.3	3.7	1.0	21g
60	〃	〃	4.3	4.1	1.5	35g
61	〃	〃	4.6	4.3	1.6	51g
62	〃	〃	4.6	4.5	1.1	32g
63	〃	〃	7.8	6.3	2.3	176g
64	〃	〃	9.1	7.4	4.1	402g
65	砥石	〃	(8.0)	(9.0)	2.8	片面のみ利用
66	磨石	〃	(4.5)	(3.0)	(3.0)	片面のみ利用
67	〃	〃	6.4	7.2	2.2	表裏面利用
68	〃	〃	11.2	10.0	2.8	片面のみ利用
69	敲磨石	〃	13.0	11.0	4.2	片面摩滅、一部敲打痕
70	石皿	〃	16.2	13.2	4.4	表裏面利用
71	〃	〃	16.4	12.4	5.2	表裏面利用
72	〃	〃	(16.0)	(16.4)	(5.6)	表裏面利用
73	〃	〃	24.2	14.2	7.0	片面のみ利用
74	〃	〃	(26.6)	(14.5)	8.0	表裏面利用
75	〃	〃	27.0	18.6	7.6	表裏面利用
76	〃	〃	(16.0)	20.0	5.0	表裏面利用
77	〃	〃	(25.2)	(16.8)	8.8	表裏面利用

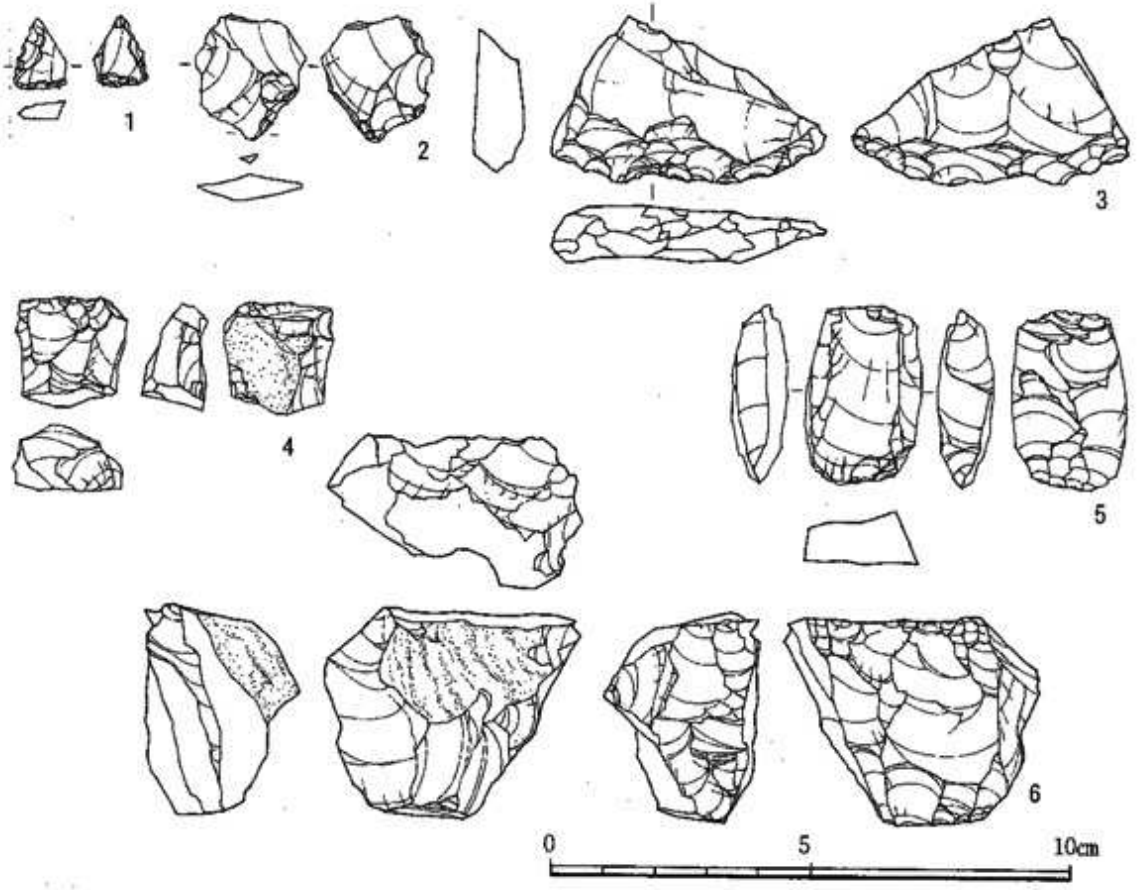
表 30　飯田二反田遺跡３号住居跡出土石器観察表

(4)　４号住居跡出土石器

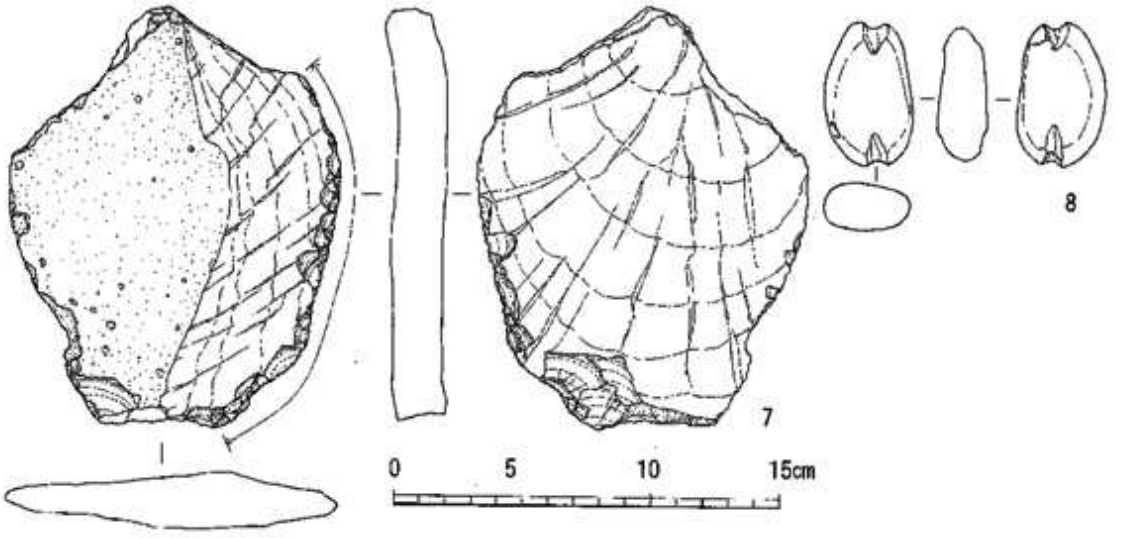
４号住居跡は１号溝によりその大部分が撹乱されており、出土石器もそのほとんどが紛失したものと考えられる。

わずかに石鏃２点、扁平打製石器、石錘、摩石、石皿数点が確認されたに過ぎない。しかし、出土した石鏃２点も台風により紛失してしまった。

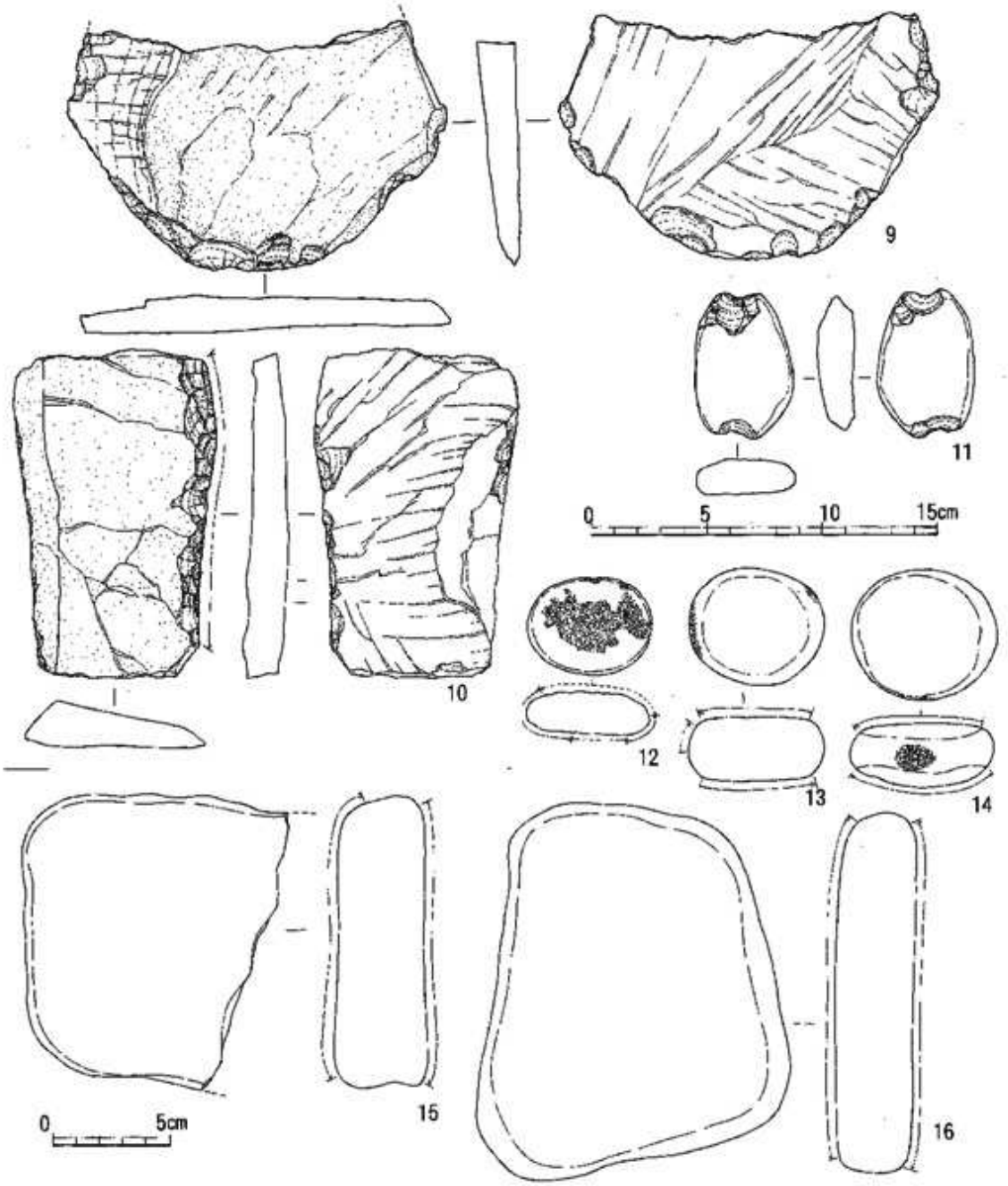
ここでは注目すべき遺物は、第 187 図第 18 図７、９、10 で、これらは扁平打製石斧の素材となる輝石安山岩の大形剥片に２次的加工を施し、掻器として利用したと考えられる。これらの石器は当遺跡からは比較的多く出土しており、扁平打石製石斧と共伴する大形石器として把握される。石錘は２点出土しているが、内１点は凝灰岩製の切目石錘で当遺跡唯一のものである。石皿２点はいずれも表裏面が摩滅している。



第186図　飯田二反田遺跡4号住居跡石器（1）



第187図　飯田二反田遺跡4号住居跡石器（2）



第188図　飯田二反田遺跡4号住居跡出土石器実測図（3）

単位(cm、g)

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
1	石鏃	姫島産黒曜石	(1.4)	(1.0)	0.3	0.6	4	楔形石器	姫島産黒曜石	3.4	2.2	1.0	8.5
2	石錐	姫島産黒曜石	2.4	2.1	0.6	2.0	5	石核	〃	1.9	2.1	1.2	5.0
3	掻器	サヌカイト	3.2	5.3	1.0	16.7	6	石核	〃	4.9	3.9	2.9	44.5

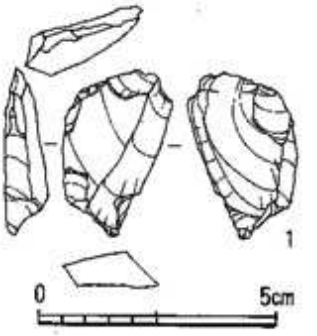
No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	備考
7	扁平打製石器	輝石安山岩	16.0	13.0	2.0	片側のみ刃部利用
8	礫石錘	凝灰岩	5.5	3.5	2.0	35g切目石錘
9	扁平打製石器	輝石安山岩	(9.8)	(31.6)	1.6	
10	〃	〃	14.0	8.6	1.7	片側のみ刃部利用

11	礫石錘	安山岩	6.1	4.2	1.6	48g
12	敲磨石	〃	1,.8	8.4	3.6	ほぼ全面摩滅、敲打痕
13	〃	〃	11.8	10.2	5.4	表裏面摩滅、部分的に敲打痕
14	〃	〃	12.8	11.2	5.6	表裏面摩滅、部分的に敲打痕
15	石皿	〃	(25.2)	(22.0)	8.0	表裏面摩滅
16	〃	〃	32.8	26.6	6.8	表裏面摩滅

表 31　飯田二反田遺跡４号住居跡出土石器観察表

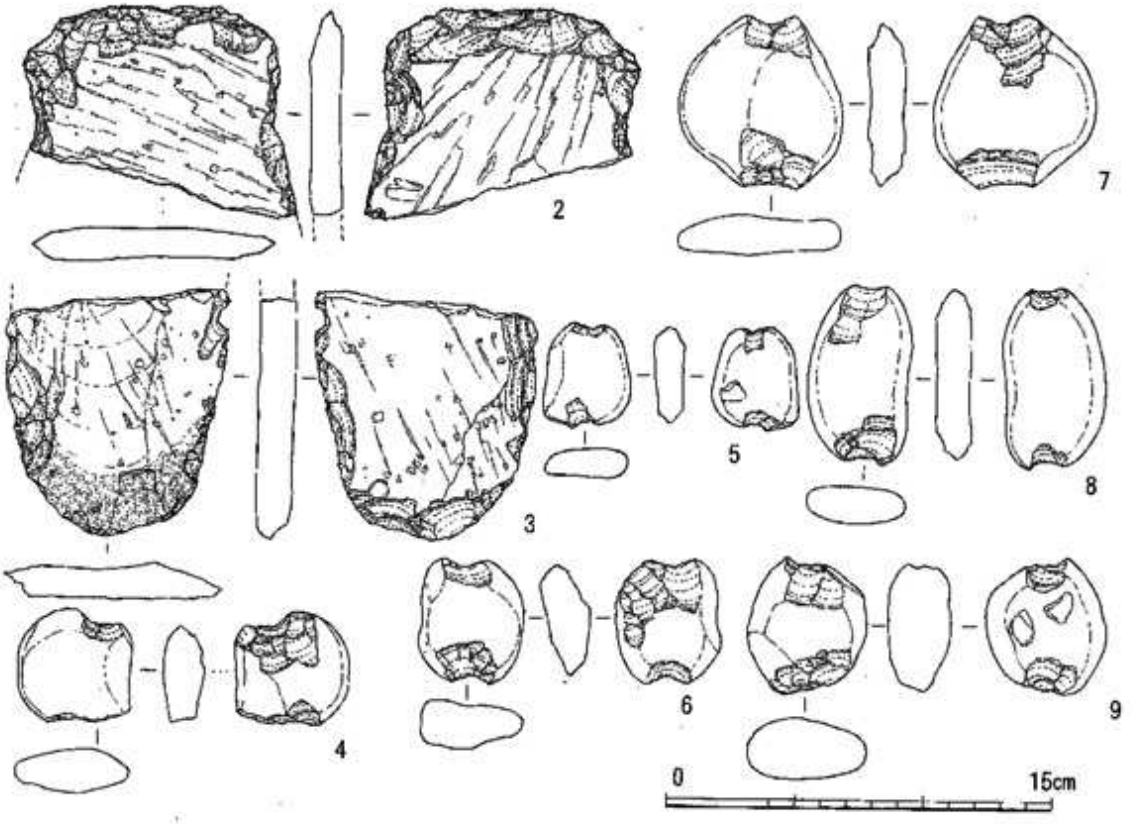
(5)　５号住居跡出土石器

５号住居あとは、北久根山式土器を主体とする時期で、住居跡は調査区の東端にあたるために３分の１程しか発掘されていない。しかし、石器は石鏃、石錘、石核、扁平打製石斧、石錘、磨石、石皿などが出土しており、石器組成そのものは他住居と同様である。扁平打製石斧はいずれも欠損しており、わずかに基部、刃部が残存する。

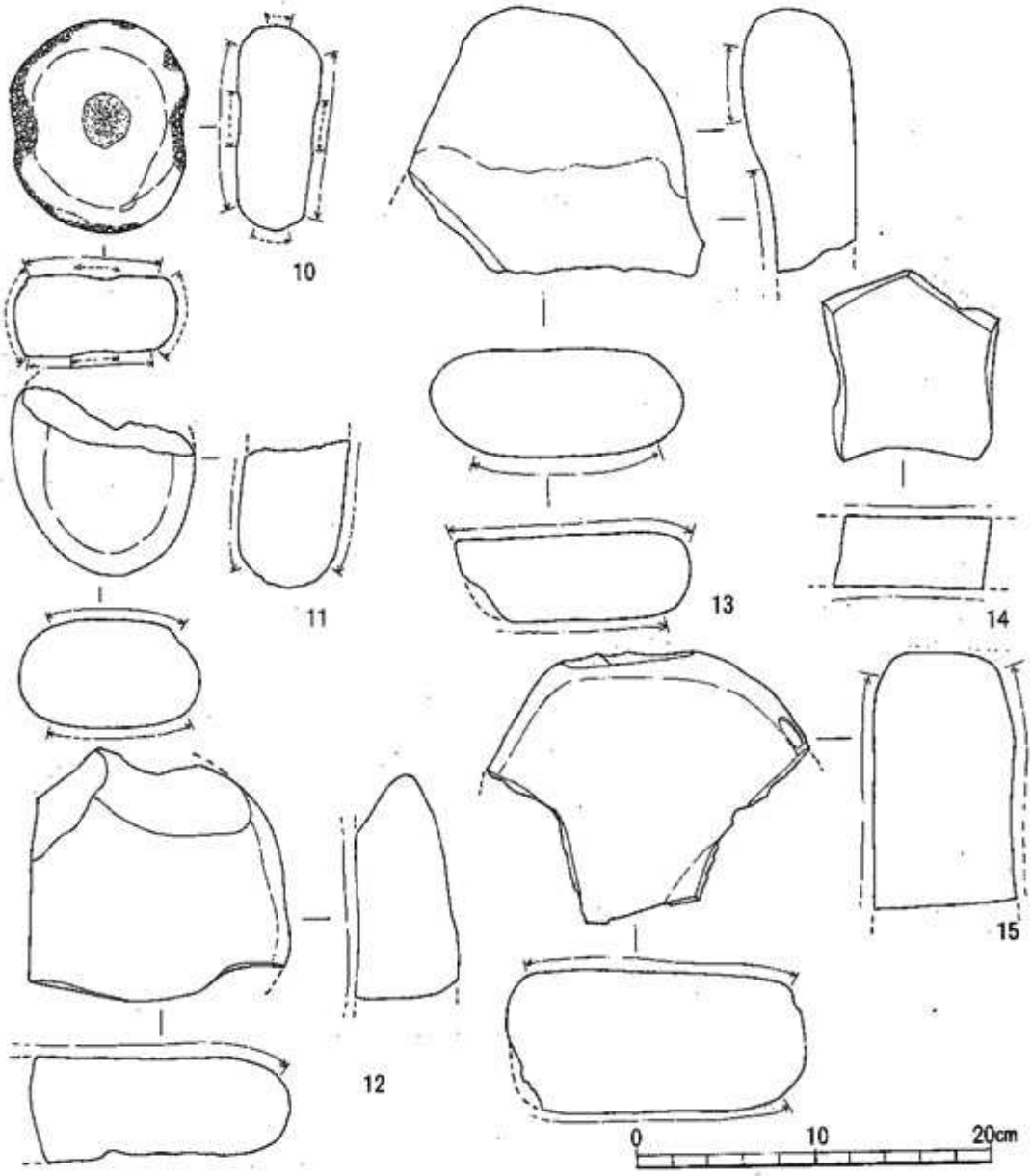


第189図　飯田二反田遺跡５号住居跡出土石器(１)

石錘はいずれも礫石錘で重量は 20 g～90 g と比較的そろっており、安山岩製。磨石には、表裏面に凹みがあり、さらに縁辺部に敲打痕が残るといったような多面利用のものもある。



第 190 図　飯田二反田遺跡５号住居跡出土石器実測図（２）



第191図　飯田二反田遺跡5号住居跡出土石器実測図（3）

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
1	楔形石器	姫島産黒曜石	3.2	2.2	0.9	4.8

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	備考
2	扁平打製石斧		(8.0)	(10.5)	1.3	基部のみ
3	〃	輝石安山岩	(9.3)	(8.5)	1.4	刃部のみ
4	礫石錘	安山岩	4.3	4.5	1.6	35g
5	〃	〃	4.0	3.4	1.2	20g
6	〃	〃	4.0	4.7	1.8	35g
7	〃	〃	6.5	6.4	1.4	87g
8	〃	〃	6.8	3.8	1.4	45g
9	〃	〃	5.2	4.6	2.4	68g
10	凹石　磨擦石	〃	12.0	9.4	5.0	表裏に凹み
11	磨石	〃	(10.0)	(10.4)	(5.8)	表裏面摩滅
12	石皿	〃	(14.0)	(14.6)	(5.8)	片面のみ利用
13	〃	〃	(15.0)	(17.0)	(6.2)	表裏面利用
14	〃	〃	(10.0)	(9.0)	(4.0)	表裏面利用
15	〃	〃	(15.0)	(18.4)	(8.0)	表裏面利用

表32　飯田二反田遺跡5号住居跡出土石器観察表

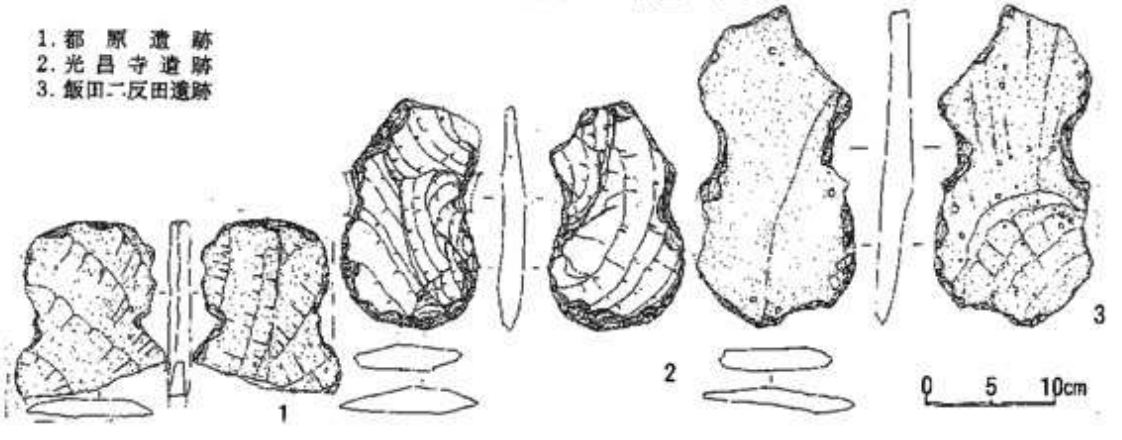
(6) 昭和６３・平成元年度調査区出土石器

包含層から出土した石器組成は下記一覧表のとおりであり、組成のバランスから見ればほとんど変化は見られない。しかし、この中には若干縄文時代早期遺物の混入があることは出土石鏃の形態や使用された石材から明確であるが、概して言えば、ほぼ後期住居２～３軒分の保有量が包含層から出土したような状況である。剥片石器石材は姫島産黒曜石が主体となり、わずかにサヌカイトと黒色黒曜石が出土しているが、石核はすべて姫島産黒曜石である。扁平打製石斧は大部分輝石安山岩が主な石材として使用されるが、完形品は１点のみであり、他は基部が欠損したものが多い。形態的には刃部幅が狭いものと広いものの２種類が主体を占め、若干基部が平坦なものや両側辺部に抉りが入る分銅型のものがある。また、扁平打製石器とした、非常に大形の剥片の一辺に２次加工を施し刃部とした物が数点出土している。全体的に粗雑な作りであるが、中には円形に整形されたものもある。また、刃部の摩滅が著しいものがあり、明らかに使用によるものであるが、その用途は不明である。

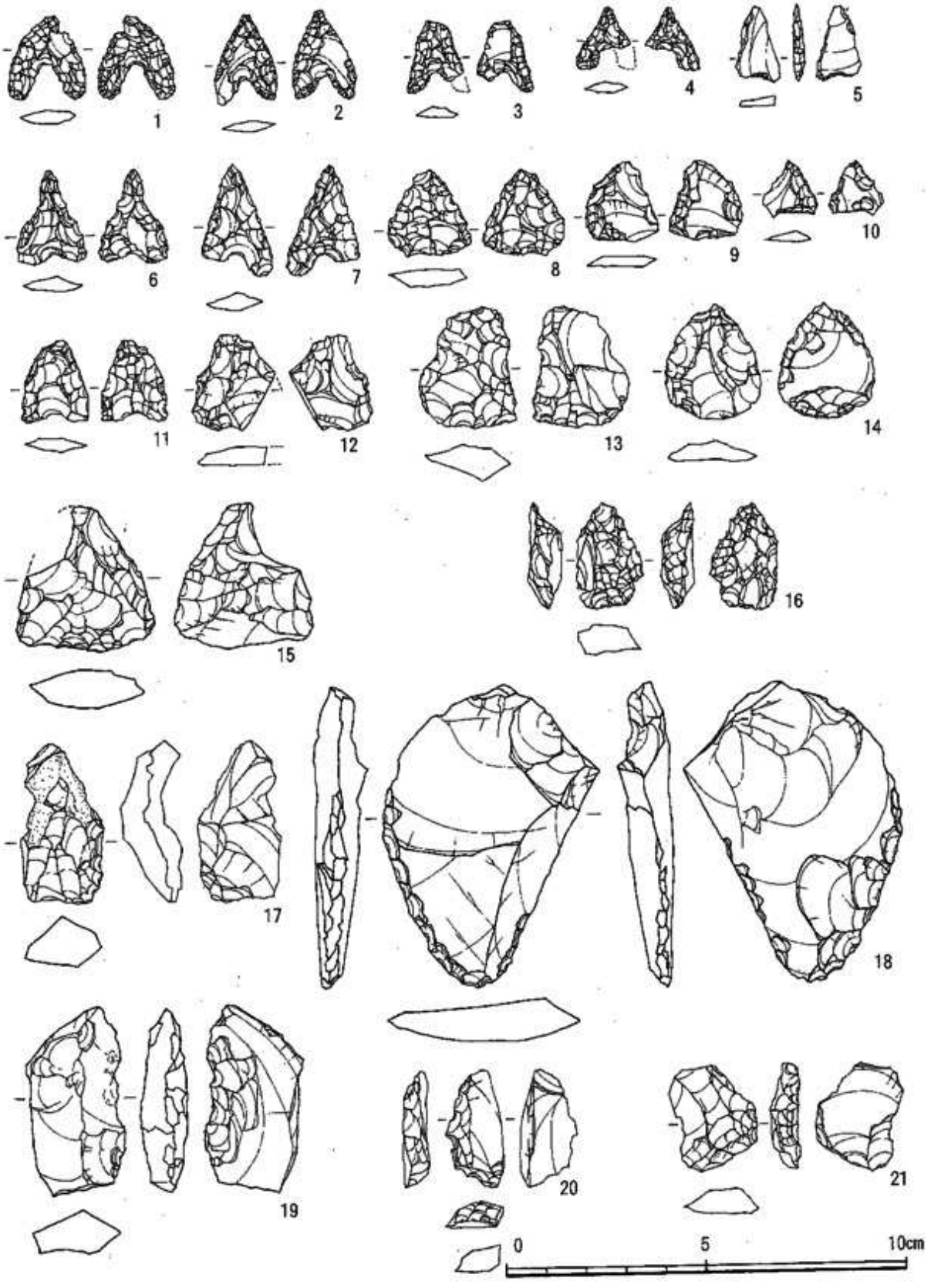
剥片石器									礫石器						
石鏃	石匙	掻器	楔形	石錐	ＲＦ	ＵＦ	石核	砕片	扁平斧	扁平石	円形	磨斧	石錘	磨石	敲石
30	3	7	29	6	25		51	705	19	4	3	9	53	6	2

凹石	砥石	石皿
2	0	2

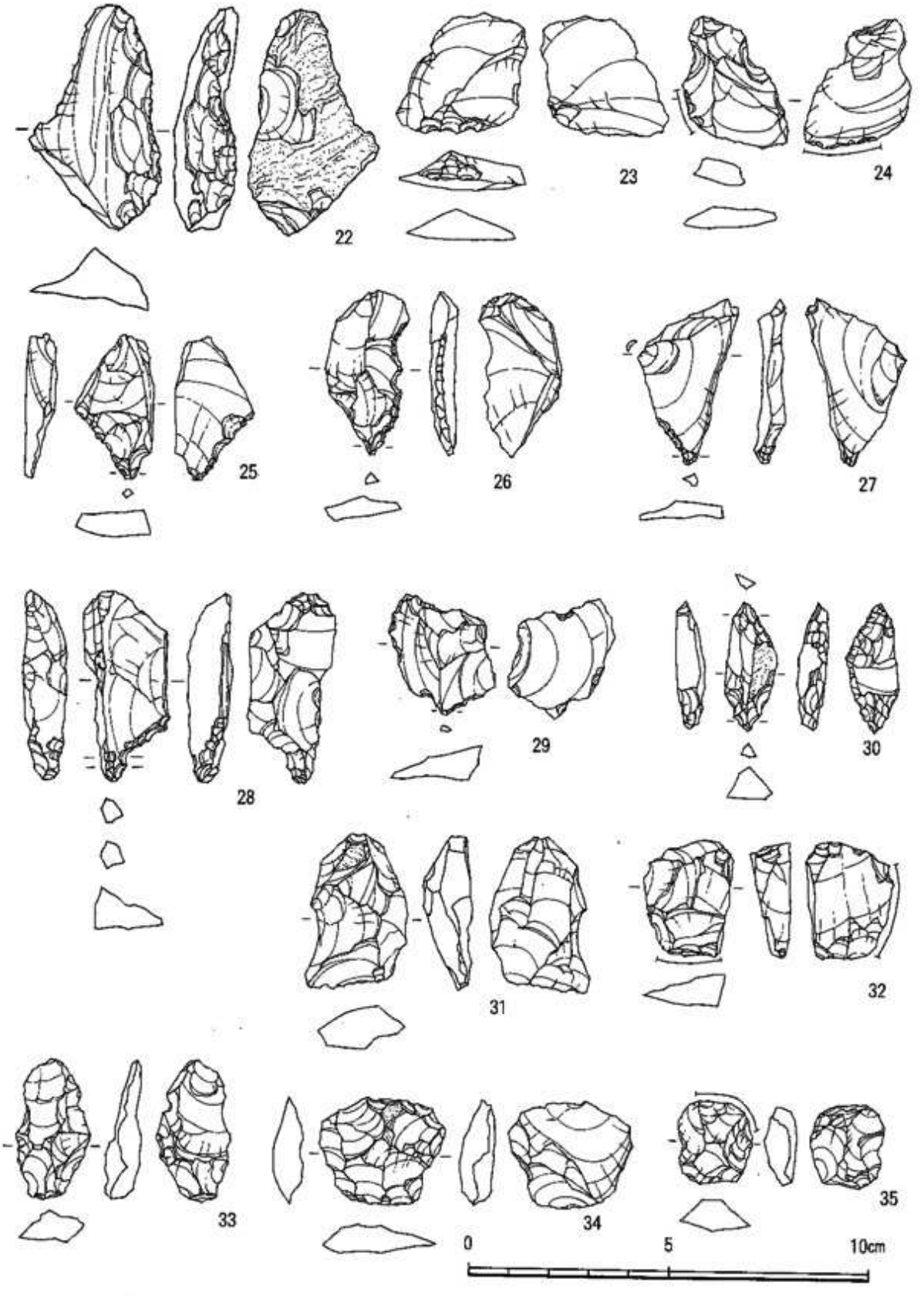
県内で出土する両側に抉りのある分銅の石斧は、整形加工だけといった粗雑な作りの大形品が多く、これまでに縄文時代後期の前半～中葉の遺跡だけで出土する傾向がある。しかし、この形態の石斧は一遺跡せいぜい１～２点が出土するのみで決して主体となることはない。現在まで、当遺跡の他に九重町都原遺跡と大野町光昌寺遺跡で出土しているだけである。まだ県内では類例が多くなく、この形態の石斧およびこれに共伴する特徴的な石器について断定することは現状では困難であるが、この分銅型石斧には形態が「ノ」の字を呈する石斧や刃部直上の両端に抉入を有し、幅の狭い基部の石斧が共伴する可能性がある。



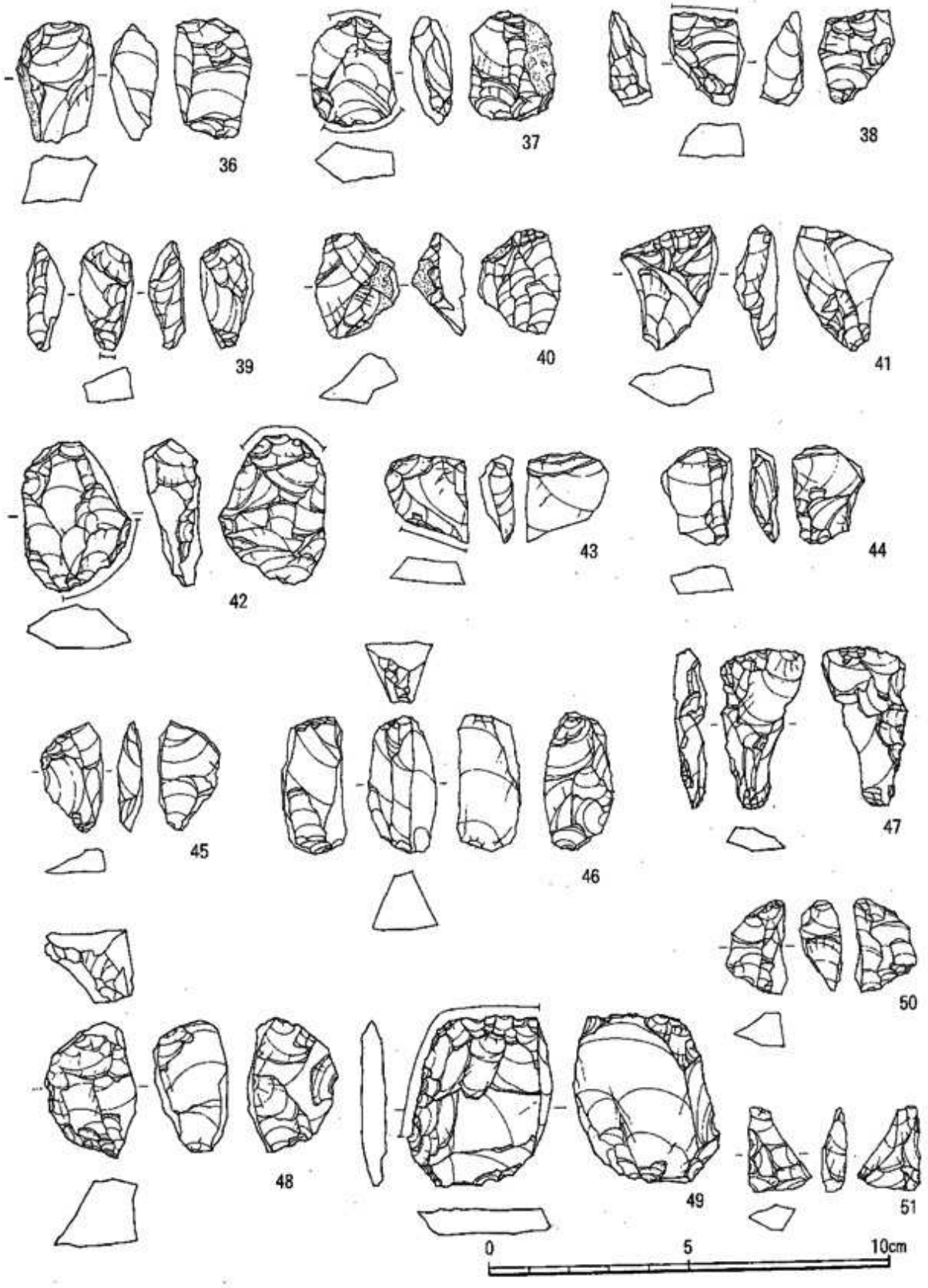
第 192 図　大型快入石斧（分銅型）実測図



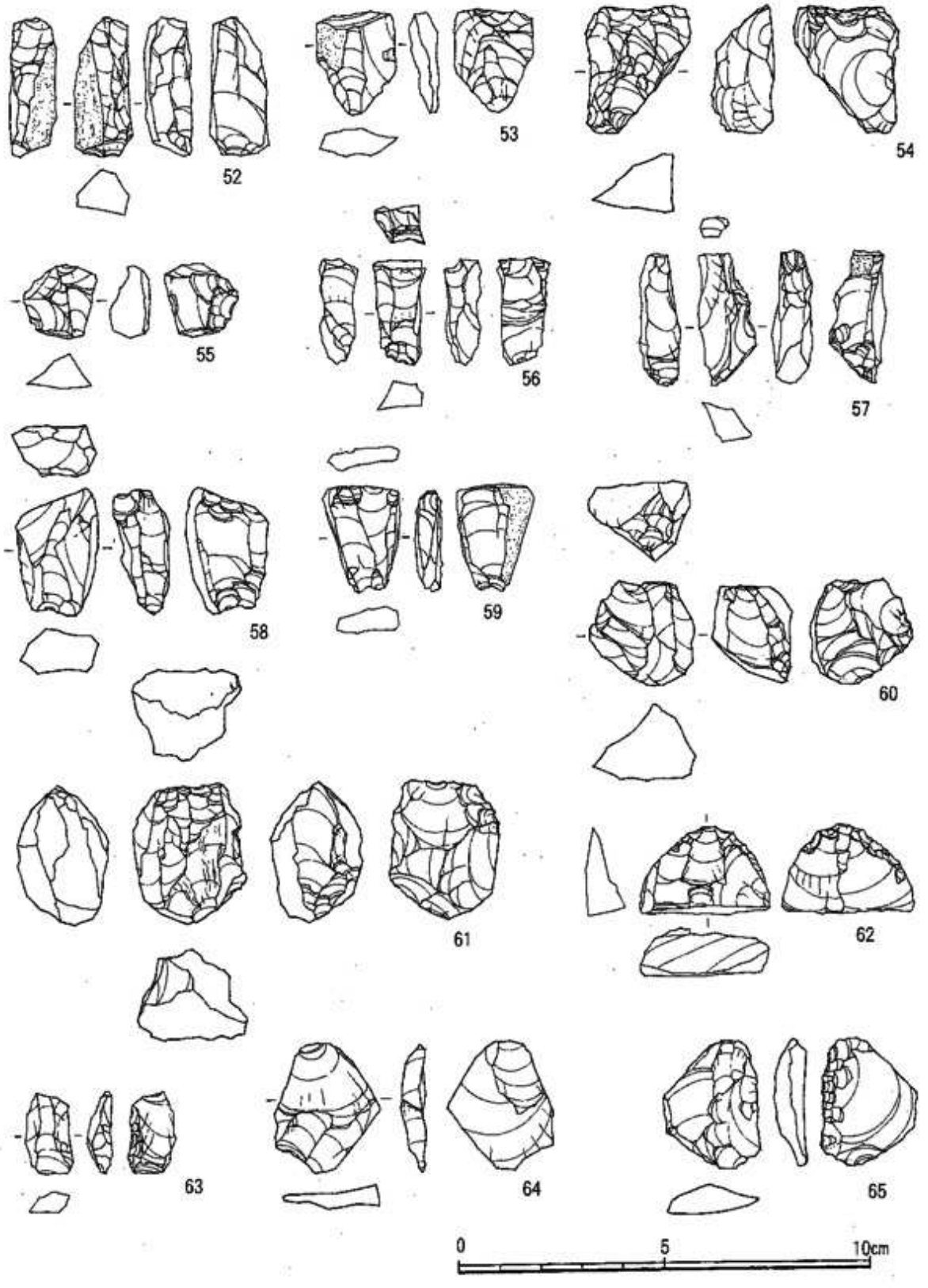
第193図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土石器実測図（1）



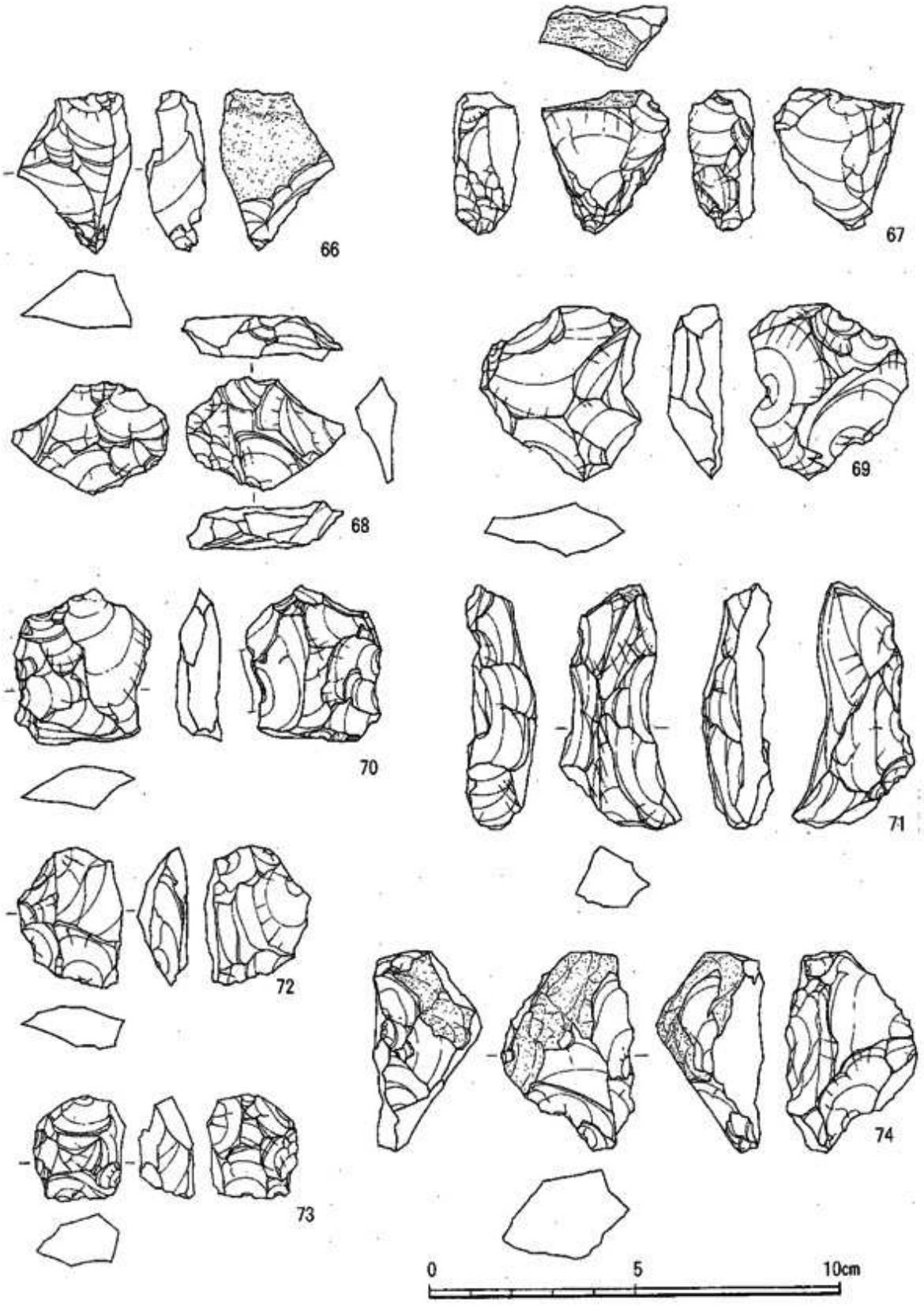
第194図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土石器実測図（2）



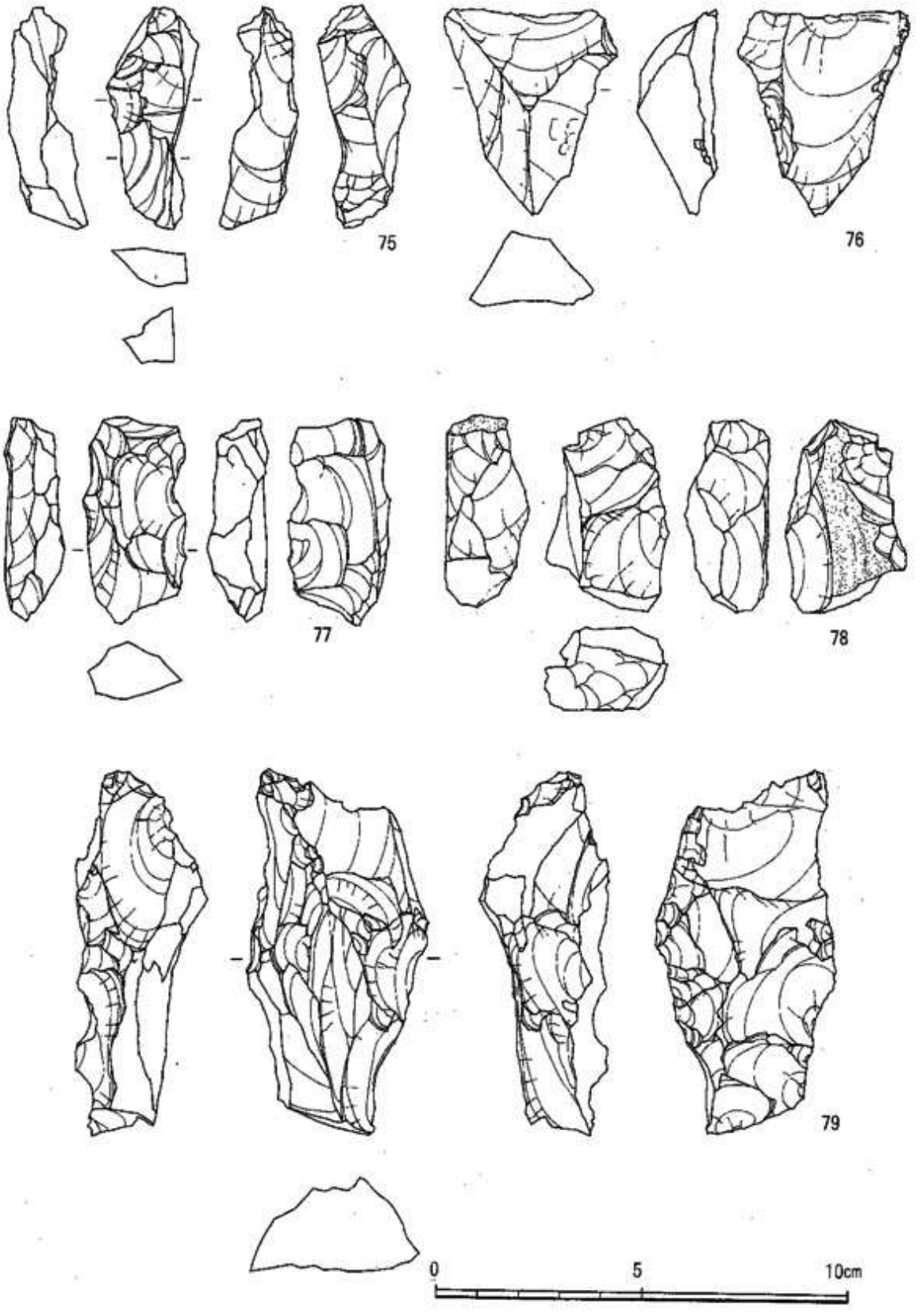
第195図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土石器実測図（3）



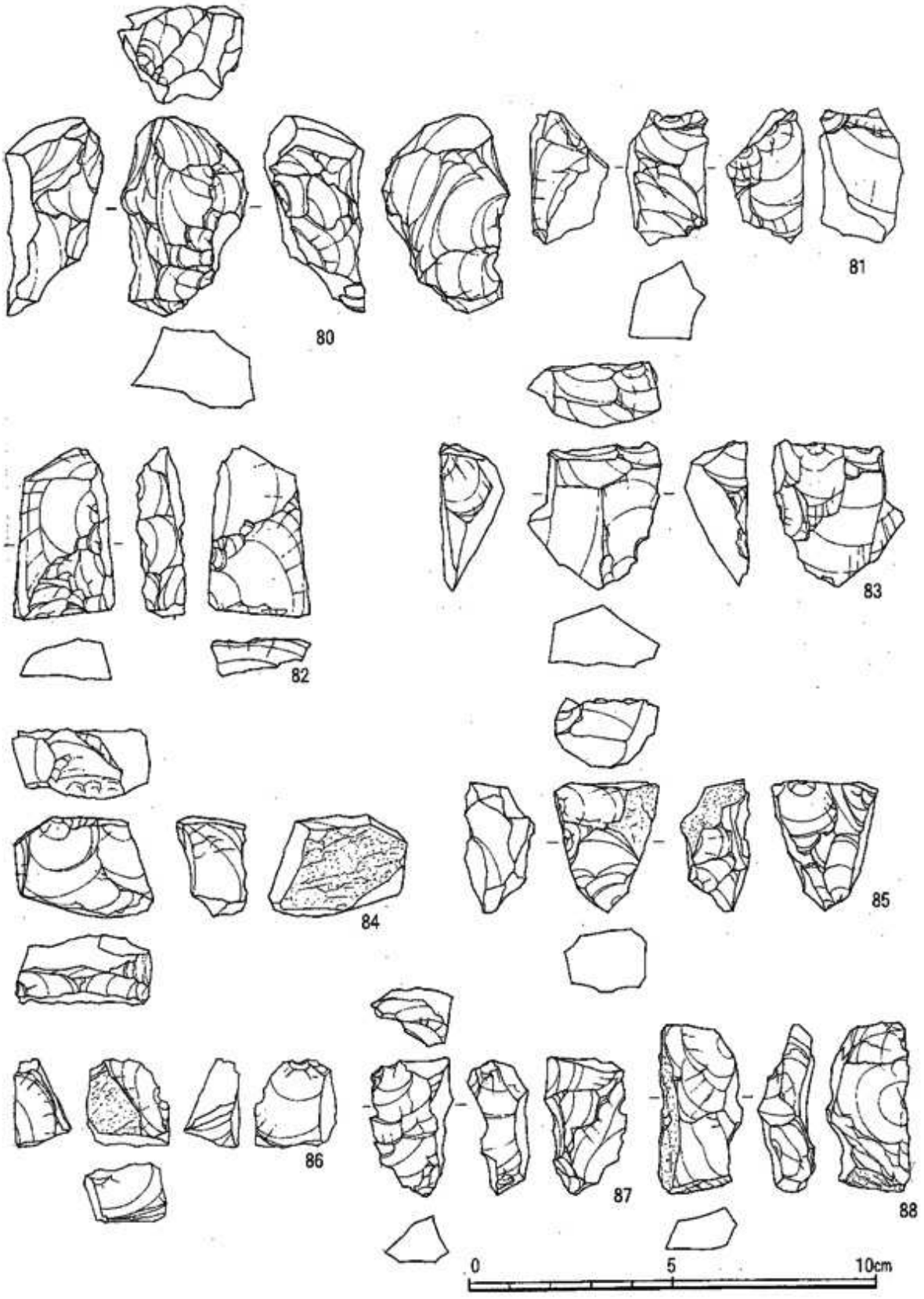
第196図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土石器実測図（4）



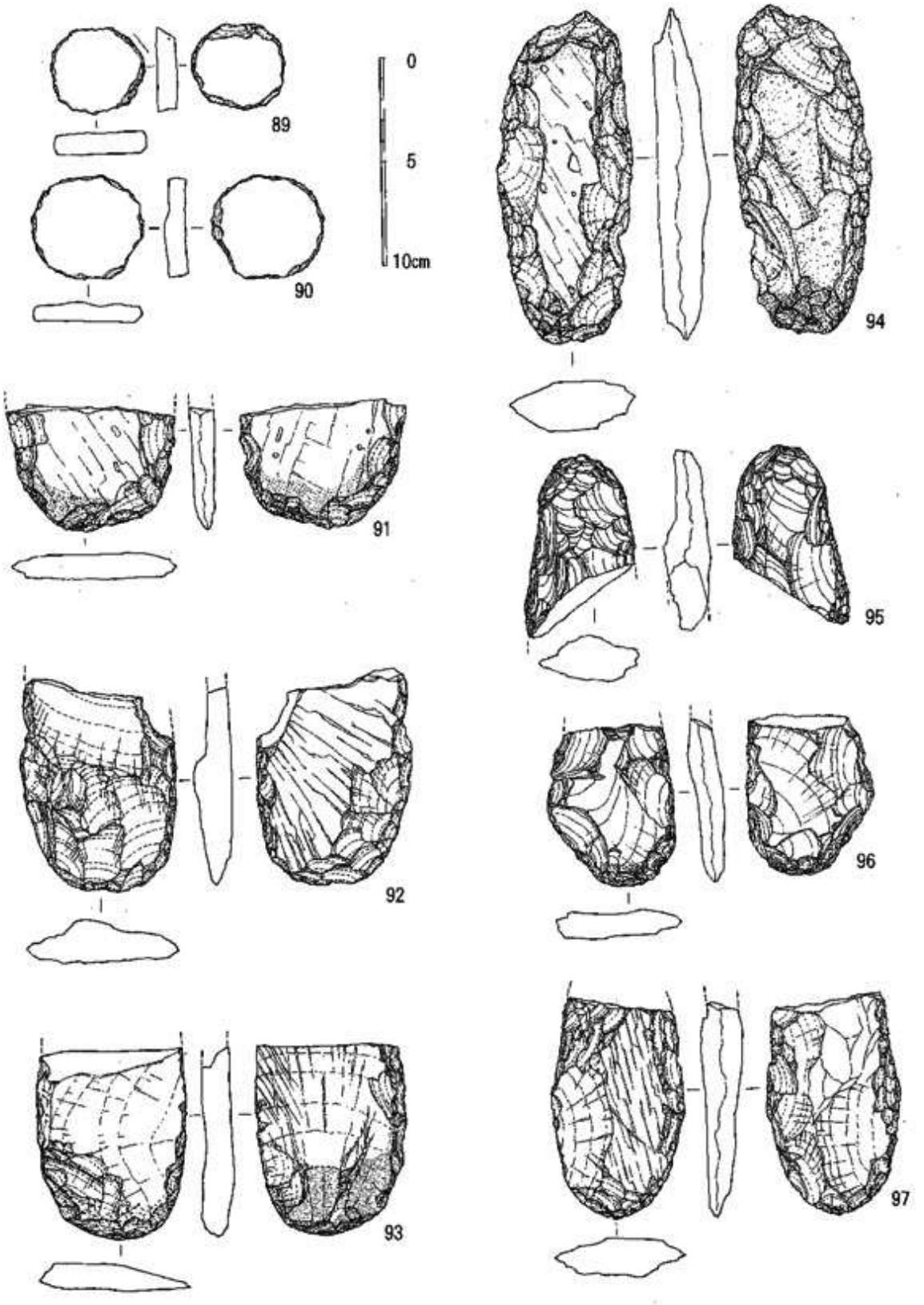
第197図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土石器実測図（5）



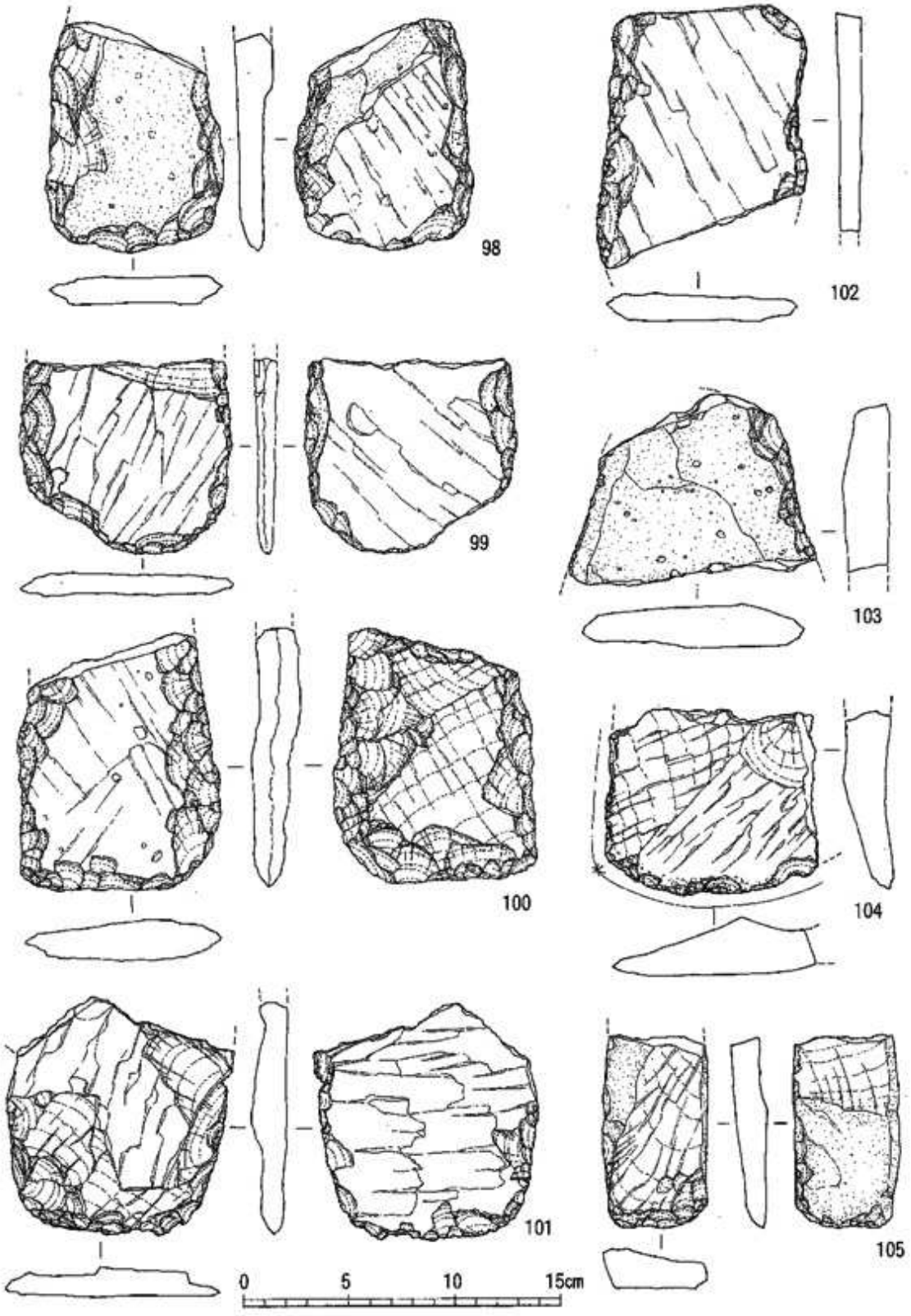
第 198 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土石器実測図（6）



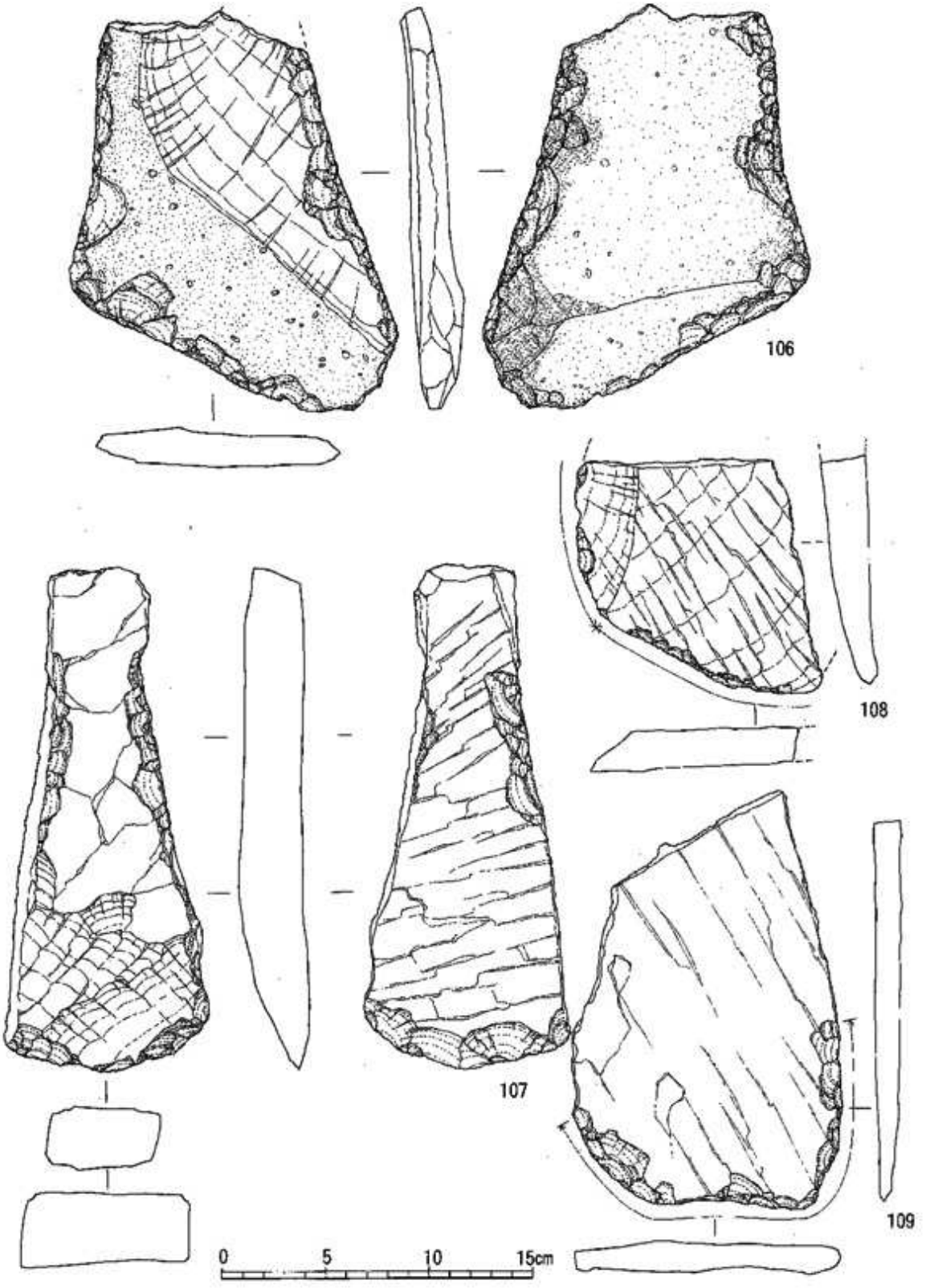
第199図　飯田二反田遺跡昭和63・平成元年度調査区出土石器実測図（7）



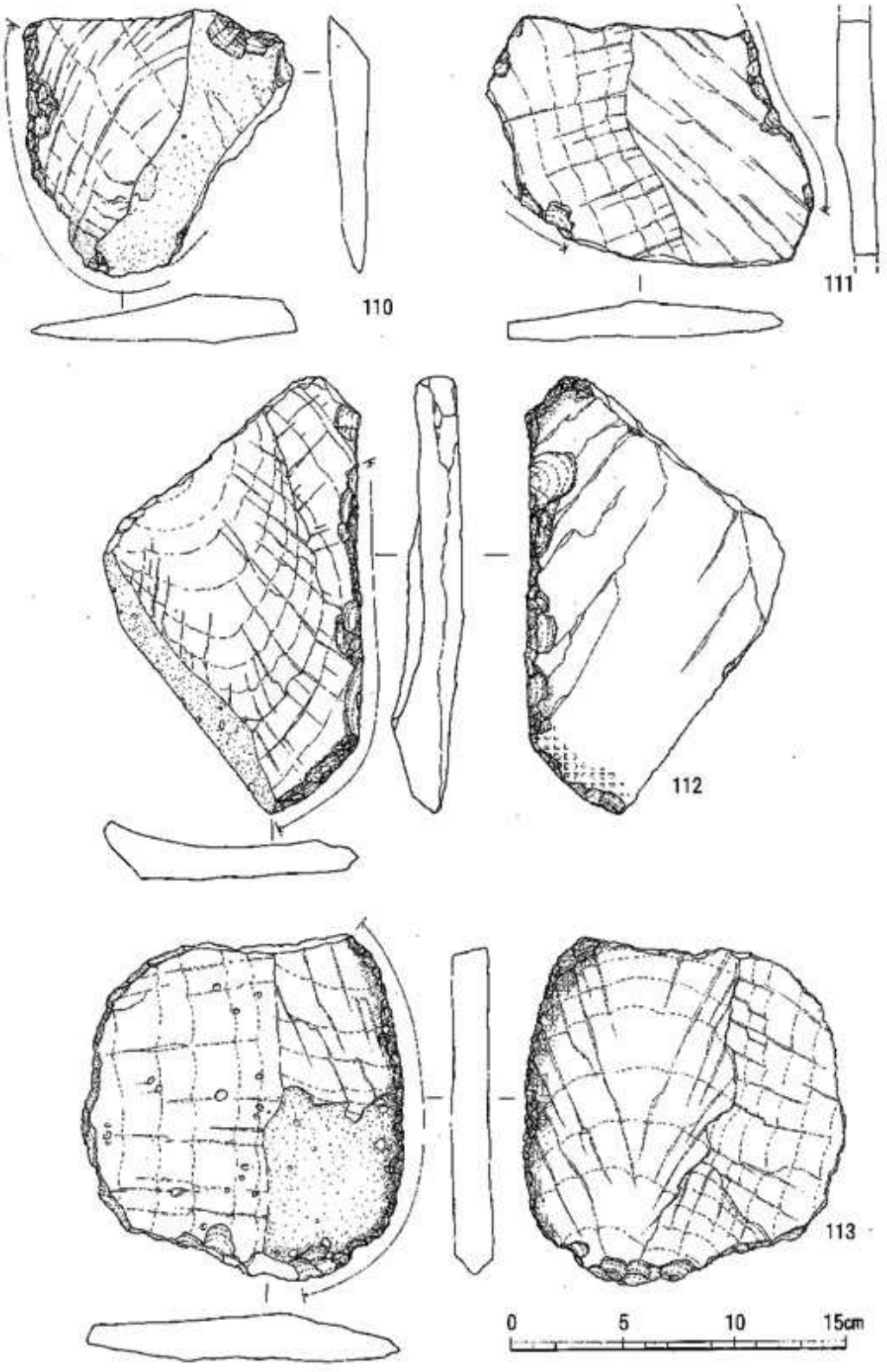
第 200 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土石器実測図（8）



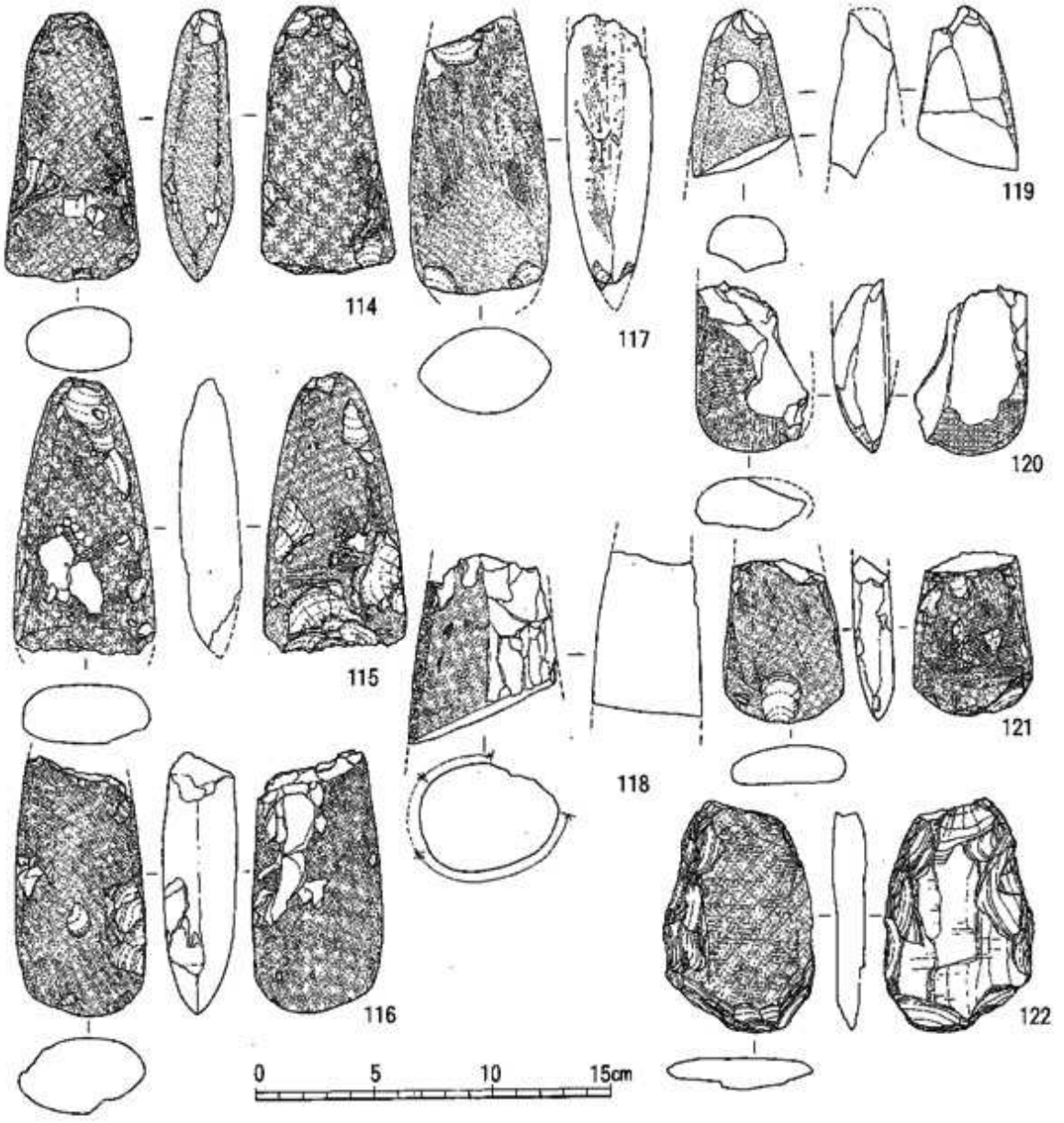
第 201 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土石器実測図（9）



第 202 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土石器実測図（10）



第 203 図　飯田二反田遺跡昭和昭和 63・平成元年度調査区出土石器実測図（11）

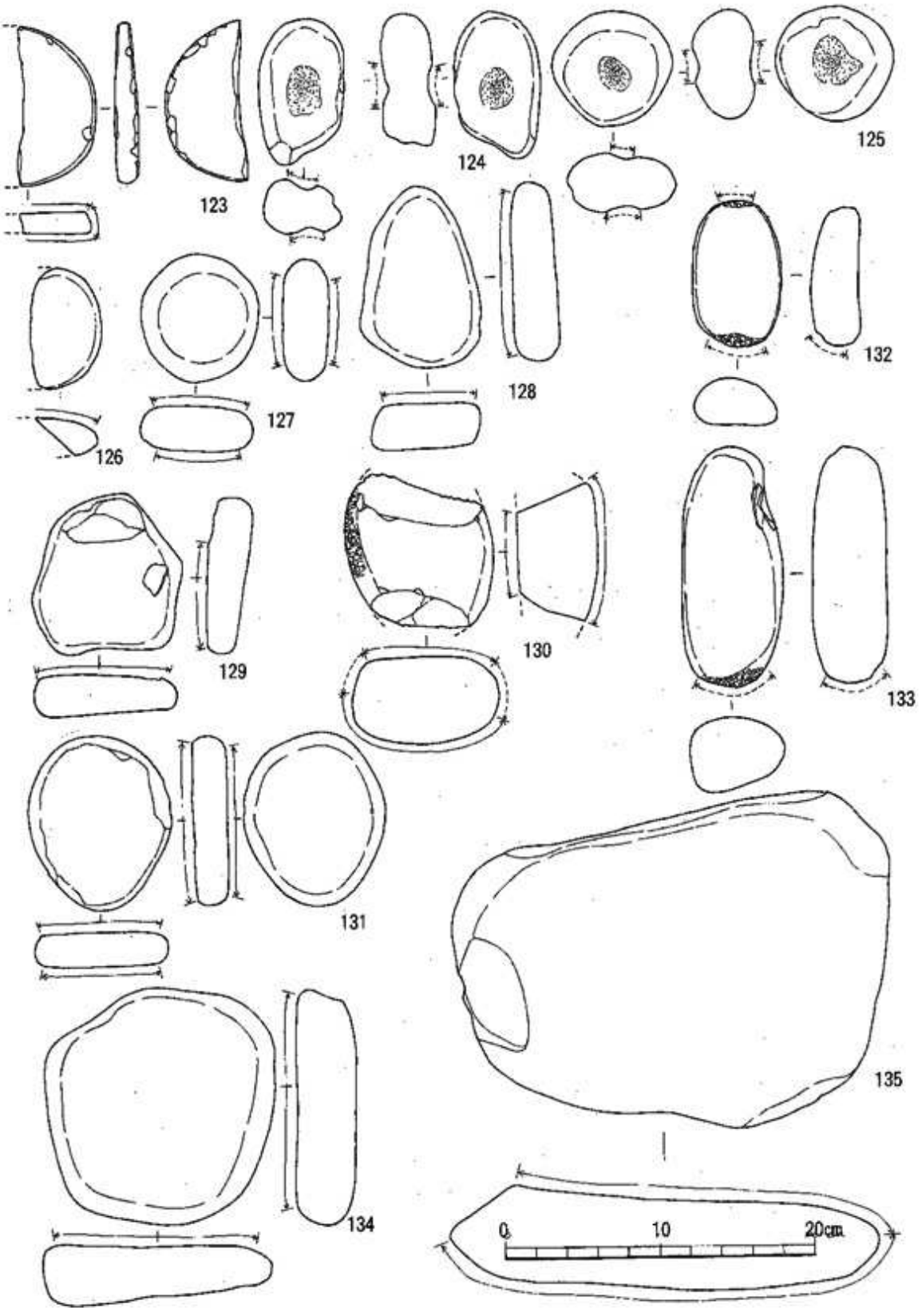


第 204 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土石器実測図（12）

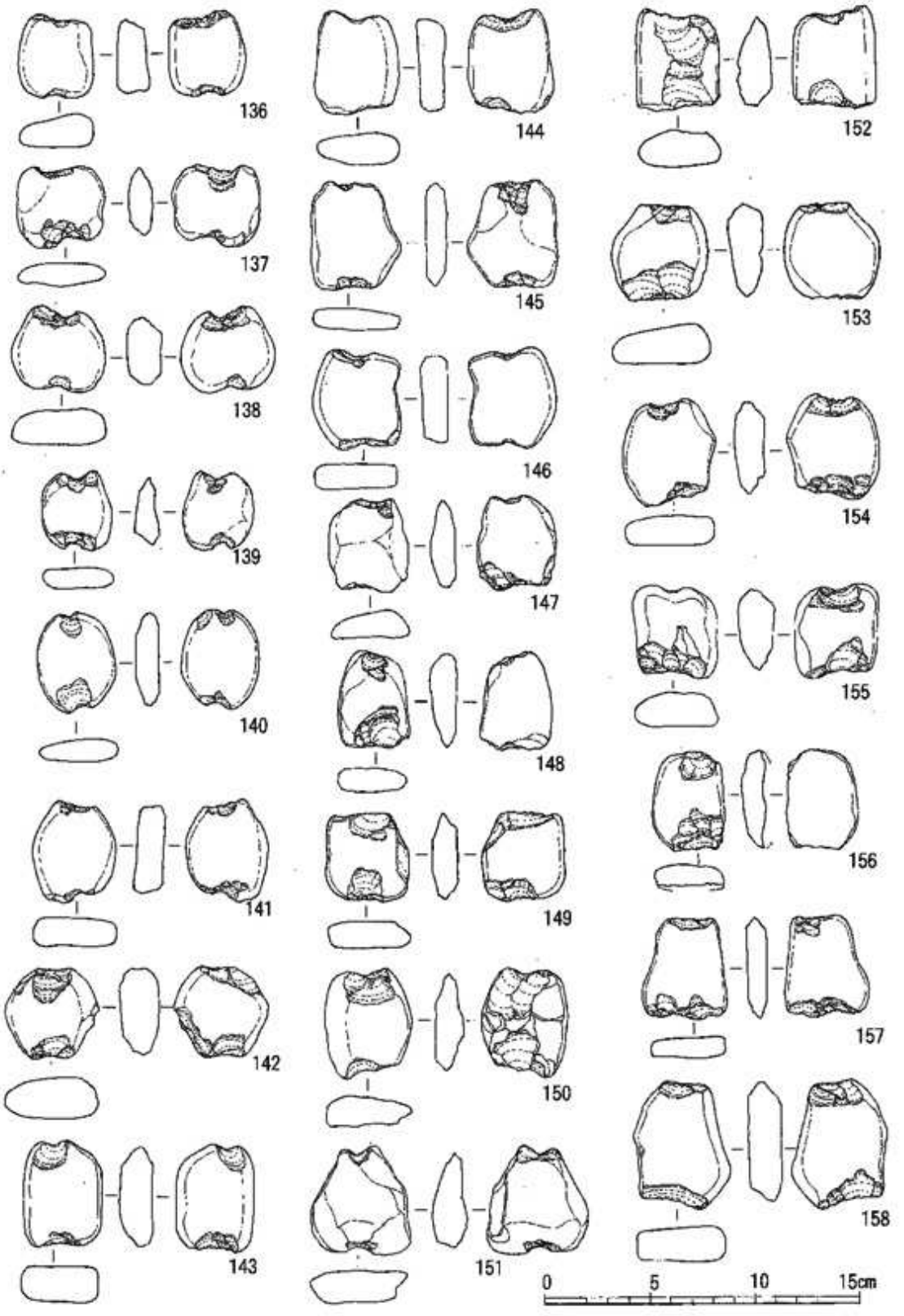
(7)　磨製石斧

磨製石斧の石材は、蛇紋岩、粘板岩、硬質砂岩からなり、完形品は１点のみであるが、刃部を再加工したものもある。復元すると縦長約 12cm、幅６cm程度の大きさのものが考えられる。

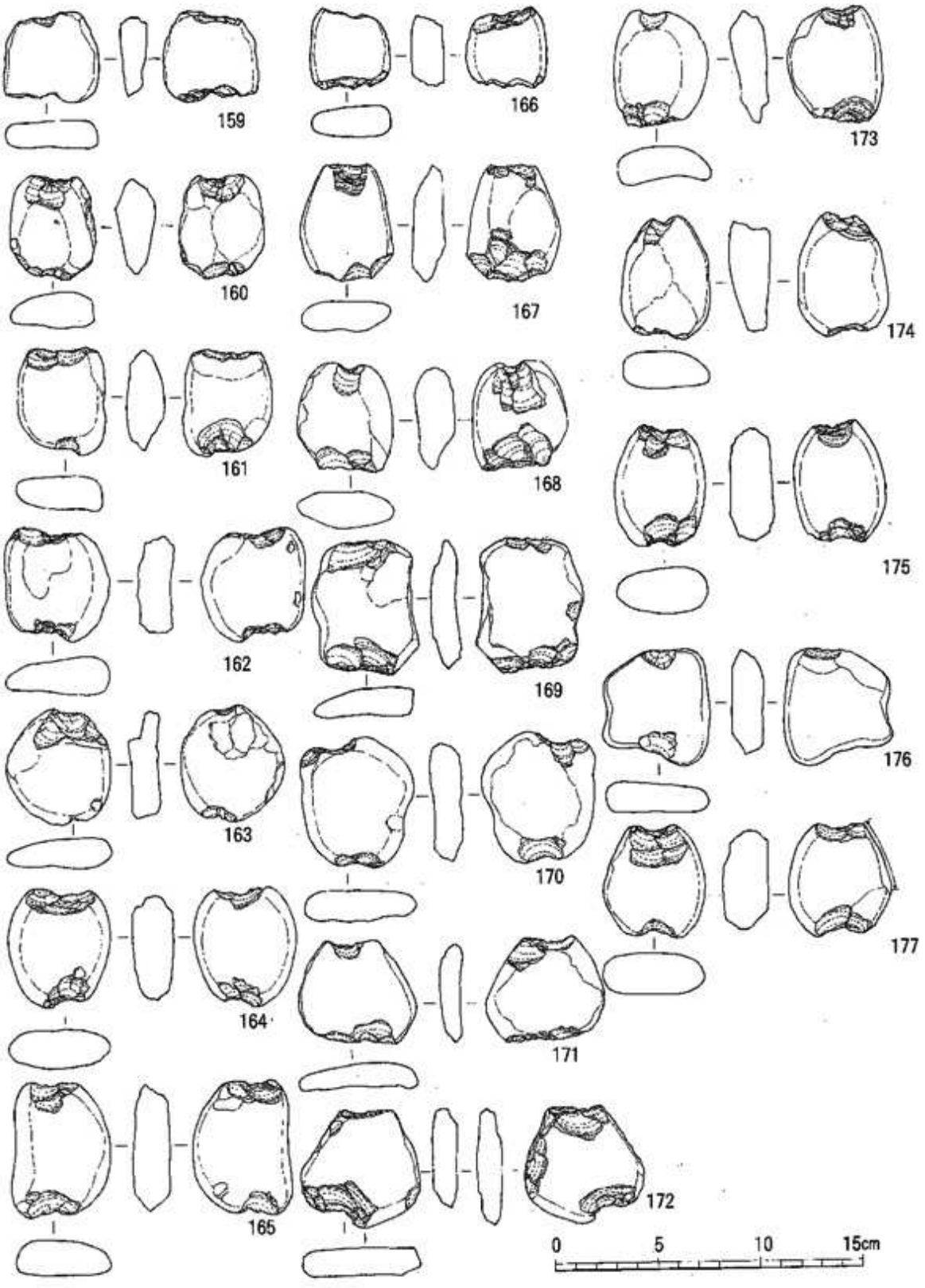
表面にかなり敲打痕が残った石斧が多く、敲打整形後に研磨したことが伺える。第 204 図 120 以外は両刃で、使用による刃部欠損が見られる。122 は扁平打製石斧であるが、片面の平坦部を研磨している。当遺跡出土の扁平打製石斧では唯一研磨を施したものである。



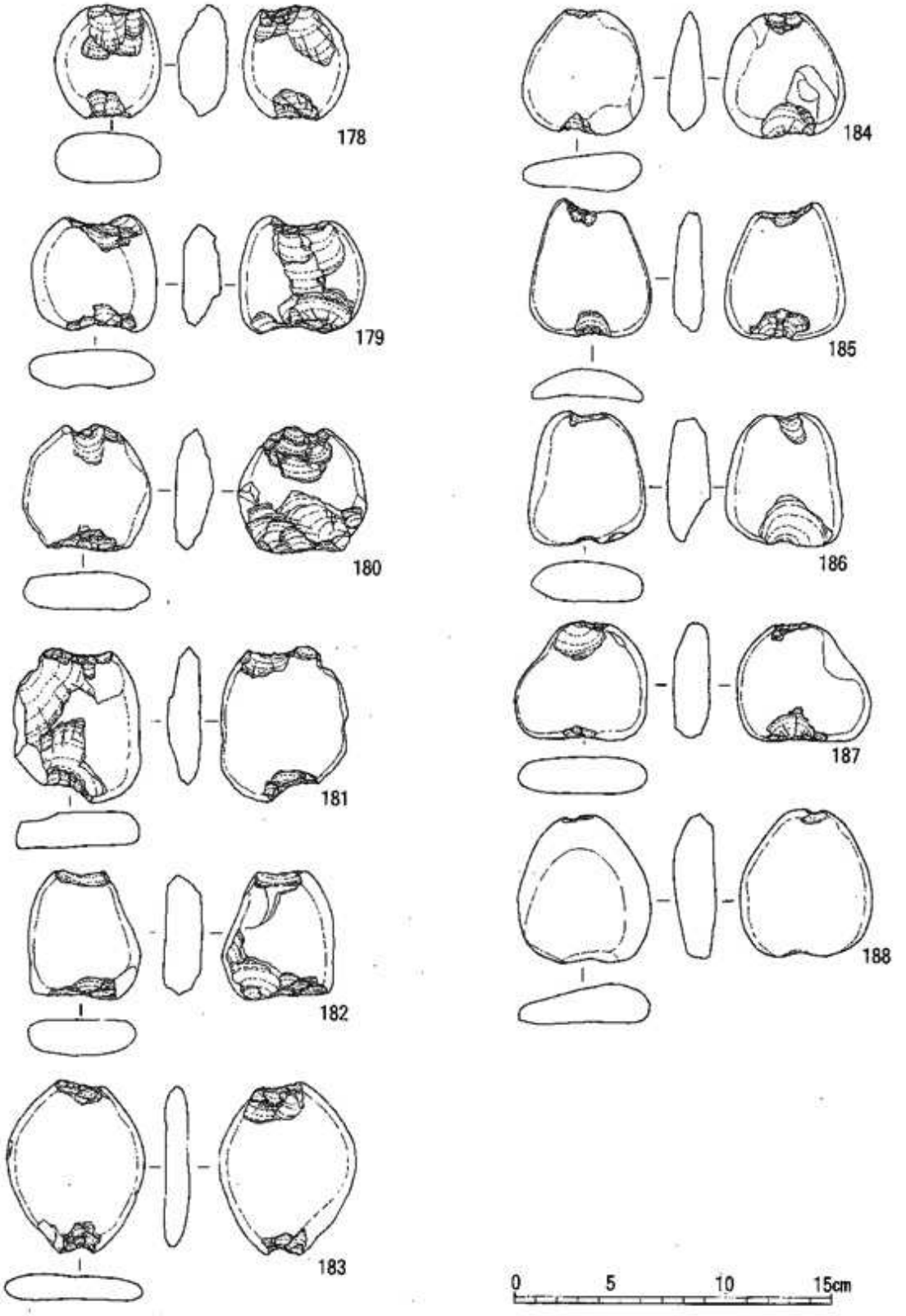
第 205 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土石器実測図（13）



第 206 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土石器実測図（14）



第 207 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土石器実測図（15）



第 208 図　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土石器実測図（16）

単位(cm、g)

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	出土区	No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	出土区
1	石鏃	黒色黒曜石	2.0	1.9	0.4	1.1	4C-7b	45	楔形石器	姫島産黒曜石	2.6	0.6	0.6	2.1	2B-2g
2	〃	メノウ	2.2	1.5	0.3	0.9	4B-10e	46	〃	〃	3.4	1.5	1.5	8.2	2B
3	〃	チャート	(1.8)	(1.4)	0.3	0.7	3B-4j	47	〃	〃	3.8	2.0	0.7	3.8	2B-149
4	〃	黒色黒曜石	1.6	(1.3)	0.3	0.3	3B	48	〃	〃	3.2	2.2	1.7	11.0	2B-4e
5	〃	姫島産黒曜石	1.8	1.0	0.3	0.5	2D-6b	49	〃	サヌカイト	4.1	3.6	0.7	14.4	2D-139
6	〃	〃	2.3	1.7	0.4	1.0	2D-2a	50	〃	姫島産黒曜石	2.3	1.4	1.0	2.8	2C-723
7	〃	〃	2.8	(1.7)	0.5	1.3	2B-373	51	〃	サヌカイト	2.1	1.5	0.6		1C-149
8	〃	黒色黒曜石	2.1	2.0	0.5	2.2	2D-8c	52	〃	姫島産黒曜石	3.5	1.4	1.0	5.7	2D-6b
9	石鏃未製品	姫島産黒曜石	2.0	1.8	0.3	1.1	2D-516	53	〃	〃	2.4	1.8	0.7	3.1	2C-289
10	石鏃	〃	1.3	1.3	0.2	0.3	3D	54	〃	〃	3.1	2.5	2.5	8.4	2B-2g
11	〃	〃	2.0	1.6	0.3	1.1	3C-7j	55	〃	〃	1.7	1.6	0.9	2.0	2D-377
12	〃	〃	2.3	(2.1)	0.5	2.4	4B-6b	56	〃	〃	2.5	1.0	0.9	2.6	3b-5c
13	石鏃未製品	〃	3.0	2.4	0.9	5.0	2D-317	57	〃	〃	3.2	1.5	0.8	3.6	2C-5i
14	石鏃	〃	2.8	2.3	0.6	3.2	4B-10e	58	〃	〃	3.0	2.0	1.2	7.2	3B—8e
15	〃	〃	3.5	3.4	0.9	8.3	2B-3j	59	〃	〃	2.5	1.9	0.6	8.4	2C-3B
16	石鏃未製品	〃	2.5	1.7	0.8	3.4	3B-4j	60	〃	〃	2.6	2.5	1.9	10.0	2C-2g
17	掻器	〃	3.9	2.1	1.4	8.3	3B-4j	61	〃	〃	3.2	2.7	2.2	18.6	2D-83
18	〃	サヌカイト	6.5	5.5	1.0	37.5	2B-383	62	〃	〃	2.1	3.1	1.1	5.7	4C-3b
19	〃	姫島産黒曜石	4.5	2.3	1.2	11.9	3B-4j	63	〃	〃	1.9	1.2	0.5	1.1	3D-4a
20	〃	〃	2.9	1.4	0.6	2.5	2B	64	〃	〃	3.1	2.3	0.5	3.1	2D-377
21	〃	〃	2.5	2.1	0.7	3.7	3D-2a	65	〃	〃	3.1	2.7	0.7	4.5	4C
22	〃	〃	5.6	3.4	1.5	15.7	2C-7b	66	石鏃	〃	3.8	3.1	1.4	10.6	1C-8g
23	〃	サヌカイト	3.0	3.2	0.9	6.0	4B-8j	67	〃	〃	3.2	3.8	1.5	13.3	2B
24	石匙	姫島産黒曜石	2.7	2.8	0.6	4.1	4C	68	〃	〃	2.7	3.8	0.9	7.8	2C-6i
25	石錐	〃	3.6	2.0	0.7	4.6	2C-6j	69	〃	〃	4.2	3.2	1.4	15.6	2B-10g
26	〃	〃	4.0	1.9	0.6	4.2	2C-351	70	〃	〃	3.6	2.9	1.3	11.2	2B-117
27	〃	〃	4.2	2.0	0.4	3.6	3B-1g	71	〃	〃	5.8	2.5	1.5	18.1	4C-5f
28	〃	〃	4.7	2.1	0.8	8.1	4C	72	〃	〃	3.4	2.1	1.1	7.6	2C
29	〃	〃	3.1	2.4	0.7	4.2	2C-4j	73	〃	〃	2.6	2.0	1.3		4C-5e
30	〃	〃	3.1	1.2	1.2	2.5	4C	74	〃	〃	4.9	4.2	2.5	30.4	2C-53
31	楔形石器	チャート	3.7	2.4	1.2	9.4	2C-1a	75	剥片	〃	5.4	2.4	1.4	12.9	2B-3c
32	〃	赤色頁岩	2.9	2.1	0.9	6.6	4C	76	〃	〃	4.9	2.9	1.9	22.2	3D-144
33	〃	サヌカイト	3.5	1.8	1.0	4.2	3B—5h	77	〃	〃	4.9	4.3	1.4	16.1	4B
34	〃	姫島産黒曜石	2.6	3.1	0.8	5.8	4B-8g	78	〃	〃	4.6	3.0	2.1	25.8	4C
35	〃	〃	2.0	1.8	0.8	2.8	4C	79	〃	〃	8.7	2.1	3.0	80.7	3C-10i
36	〃	〃	3.0	1.7	1.1	5.9	3B	80	〃	〃	5.1	2.3	2.2	27.8	2C-6i
37	〃	〃	2.7	2.2	1.0	5.6	2C-3b	81	〃	〃	3.1	3.2	1.9	10.9	4C-6a
38	〃	〃	2.1	1.8	0.9	3.7	2C-10c	82	〃	〃	4.0	3.2	1.0	10.7	4C-147
39	〃	〃	2.6	1.3	0.8	2.9	2C-3j	83	〃	〃	3.4	2.5	1.5	13.5	4C-166
40	〃	〃	2.7	2.0	1.1	4.4	2C-2c	84	〃	〃	2.4	1.9	1.6	13.8	3D-3e
41	〃	〃	3.3	2.3	1.0	5.4	2C-853	85	〃	〃	3.1	1.8	1.6	11.4	2C-1h
42	〃	サヌカイト	3.6	2.6	1.2	11.6	2C-3b	86	〃	〃	2.0	1.9	1.4	5.4	3D
43	〃	〃	2.0	2.0	0.8	3.5	2C-10a	87	〃	〃	3.2	6.8	1.3	7.3	2C-10c
44	〃	姫島産黒曜石	2.4	1.7	0.7	2.9	3D-192	88	〃	〃	4.0	8.5	1.1	11.1	2C-10f

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	出土区	備考
89	円形石器	安山岩	4.0	4.5	1.0	1C-8i	
90	〃	〃	5.0	5.5	1.0	4C-7g	
91	扁平打製石斧	輝石安山岩	(6.0)	(8.1)	1.2	1F	刃部のみ
92	〃	〃	(10.3)	(7.5)	1.9	1C	基部欠損
93	〃	安山岩	(9.1)	7.2	1.3	2C	基部欠損
94	〃	〃	16.0	6.7	2.5	1C-5f	完形品
95	〃	頁岩	(8.5)	(5.2)	2.1	2C	基部のみ
96	〃	〃	(7.8)	6.1	1.3	2C	基部欠損
97	〃	輝石安山岩	(10.6)	6.5	2.0	2D	基部欠損
98	〃	安山岩	(10.8)	8.5	1.8	4C	全体的に摩滅
99	〃	輝石安山岩	(9.0)	10.1	1.1	2C	基部欠損
100	〃	安山岩	(12.0)	9.5	1.9	1D	基部欠損
101	〃	輝石安山岩	(11.1)	10.4	1.2	2C	
102	〃	〃	(12.0)	(10.0)	1.2	4C	刃部欠損
103	〃	〃	(8.3)	(11.7)	2.1	3D	基部欠損
104	〃	〃	(8.7)	10.1	2.0	5B	刃部欠損
105	〃	〃	(9.0)	5.0	1.5	2B	
106	〃	〃	(19.2)	16.0	2.1	?	
107	〃	〃	23.8	9.8	3.1	?	

108	扁平打製石斧	輝石安山岩	(11.2)	(10.7)	2.1	1 C	
109	〃	〃	(20.0)	13.1	1.4	5 A	
110	扁平打製石器	〃	11.2	12.0	1.8	?	
111	〃	〃	(10.5)	(13.0)	1.7	4 C	
112	〃	〃	19.5	11.5	1.8	2 C	
113	〃	〃	(15.0)	14.5	1.7	?	
114	磨製石斧	粘板岩	11.2	5.7	3.0	2 C	敲打痕
115	〃	砂質砂岩	11.5	6.0	2.5	1 C	
116	〃	蛇紋岩	(11.0)	5.5	3.1	3 D	
117	〃	砂質砂岩	(11.5)	6.0	3.6	3 B	全面に敲打痕
118	〃	?	(7.5)	(6.0)	4.5	1 C	
119	〃	?	(7.0)	(4.1)	(2.5)	2 C	
120	〃	?	(7.0)	(5.0)	(2.5)	2 C	片刃石斧
121	〃	粘板岩	(7.0)	(5.1)	1.6	2 C	
122	〃	結晶片岩	9.7	6.2	1.4	2 C	片面のみ研磨
123	円形石器	安山岩	10.4	(4.8)	1.4	2 C	整形のち全面研磨
124	凹石	〃	9.6	5.6	3.2	4 A	表裏面に凹み
125	〃	〃	7.4	7.8	4.0	3 B	表裏面に凹み
126	磨石	〃	8.0	(4.6)	(1.1)	2 C	片面のみ摩滅
127	〃	〃	8.2	7.6	3.0	2 C	表裏面摩滅
128	〃	〃	11.8	7.8	2.8	2 D	片面のみ摩滅
129	〃	〃	10.0	9.4	2.8	2 C	片面のみ摩滅
130	〃	〃	(9.4)	9.6	5.2	5 B	表裏面摩滅,側面敲打痕
131	〃	〃	11.2	9.2	2.2	3 D	表裏面摩滅
132	敲打石	〃	9.4	5.8	3.0	1 D	両端に敲打痕
133	〃	〃	15.4	6.6	4.8	2 C	片端に敲打痕
134	石皿	〃	15.2	15.0	3.8	4 B	片面摩滅
135	〃	〃	27.6	21.2	5.6	2 D	表裏面摩滅

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	出土区	重量	No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	出土区	重量
136	礫石錘	安山岩	4.0	3.6	1.5	2C	32 g	163	〃	〃	5.6	5.1	1.4	2B	46 g
137	〃	〃	3.8	4.2	1.1	2B	23 g	164	〃	凝灰岩	5.7	5.0	2.0	2C	67 g
138	〃	〃	4.0	3.9	1.6	?	37 g	165	〃	安山岩	6.6	4.7	1.8	2C	71 g
139	〃	〃	3.8	3.4	1.2	2C	15 g	166	〃	〃	4.0	3.9	1.6	3D	26 g
140	〃	〃	4.7	3.8	1.1	2D	25 g	167	〃	〃	5.5	4.6	1.6	2B	42 g
141	〃	〃	4.9	4.0	1.3	?	36 g	168	〃	軽石	5.2	4.7	1.9	2D	52 g
142	〃	〃	4.3	4.5	1.8	2C	47 g	169	〃	安山岩	6.5	4.9	1.2	3D	59 g
143	〃	〃	4.7	3.7	1.5	2C	50 g	170	〃	凝灰岩	6.4	5.4	1.5	?	69 g
144	〃	砂岩	4.9	4.0	1.3	2C	41 g	171	〃	安山岩	4.9	5.7	1.1	1C	40 g
145	〃	安山岩	5.1	4.3	1.0	2D	33 g	172	〃	〃	5.7	5.9	1.1	1C	59 g
146	〃	〃	4.0	4.8	1.2	2D	43 g	173	〃	〃	5.7	4.6	1.7	2D	58 g
147	〃	花崗岩	4.4	3.8	1.2	2B	19 g	174	〃	〃	4.4	6.0	2.0	2D	55 g
148	〃	安山岩	4.6	3.5	1.3	1D	23 g	175	〃	〃	6.0	4.4	2.2	2C	81 g
149	〃	〃	4.1	4.0	1.2	2C	35 g	176	〃	〃	5.7	5.2	1.5	2C	73 g
150	〃	〃	5.2	4.1	1.3	3B	31 g	177	〃	〃	5.5	5.0	2.2	2C	74 g
151	〃	〃	5.2	4.7	1.7	2C	42 g	178	〃	〃	5.0	5.3	2.3	2B	83 g
152	〃	〃	5.7	4.6	1.7	3D	43 g	179	〃	〃	5.4	5.5	1.8	?	76 g
153	〃	〃	4.4	4.6	1.7	1D	43 g	180	〃	〃	5.9	6.0	1.8	1B	95 g
154	〃	〃	4.7	4.4	1.4	2C	44 g	181	〃	〃	7.2	6.0	1.6	1C	102 g
155	〃	〃	4.2	4.1	1.8	2C	41 g	182	〃	〃	6.0	5.3	1.8	1D	74 g
156	〃	〃	3.4	4.6	(1.0)	2D	(26) g	183	〃	〃	8.1	6.5	1.2	2B	82 g
157	〃	〃	4.0	4.7	0.9	2D	28 g	184	〃	〃	5.8	5.7	1.7	2B	62 g
158	〃	〃	6.1	4.6	1.6	?	74 g	185	〃	砂岩	5.6	6.3	1.6	?	87 g
159	〃	〃	4.4	4.6	1.3	?	38 g	186	〃	安山岩	6.3	5.5	2.0	2C	80 g
160	〃	〃	4.1	4.9	1.9	2C	48 g	187	〃	〃	5.5	6.3	1.7	2C	85 g
161	〃	砂岩	4.3	5.2	1.8	2C	56 g	188	〃	〃	6.9	6.3	2.0	2B	95 g
162	〃	安山岩	5.1	5.1	1.6	2D	59.5 g								

表 33　飯田二反田遺跡昭和 63・平成元年度調査区出土石器観察表

(8)　礫石錘

当遺跡から出土した石錘の総量は 89 点で、包含層からは 53 点が出土している。飯田二反田遺跡検出住居跡は 5 軒であるが、さらに出土石器組成あるいは遺跡分布状況から判断して見る

と、推定7軒の住居が存在する可能性が強い。この7軒全てが石錘を各戸で所有したとすれば1軒当たりの石錘保有量が12点から13点程度であることが推定される。この13点の保有は当遺跡で最も残存状況の良好な3号住居跡と一致する。これまで礫石錘の一括出土は長野県前の原遺跡の10個や県内大野町光昌寺遺跡で18個等があるが、およそ10～20個の対で使用された可能性がある。

包含層出土の53点は安山岩、砂岩、凝灰岩、軽石が素材であり、その重量は若干のばらつきはあるものの、およそ20 g～80 gの幅で収まるような比較的軽量の石錘であると言える。

当遺跡の場合、遺跡に隣接して深見川があり、ちょうど小河川である津房川と佐田川の合流地点にもあたるために、小規模河川で活発な漁撈活動が行われたものと思われる。

第209図は県内縄文時代後期、晩期の比較的多く礫石錘を出土した遺跡の重量分布対比図であるが、その分布状況から大きく100 g以下に集中して分布する遺跡と200 g～300 gを越す重量の石錘を有する遺跡に分けることができる。

その2分類された遺跡の立地条件を見ると、前者は飯田二反田遺跡や大野町光昌寺遺跡等であるが、これらは内陸部にあり、遺跡近辺に小河川を有する特徴を持つ。後者は姫島村用作遺跡、豊後高田市上野遺跡、三光村佐知遺跡、挾間町北原遺跡、犬飼町下野遺跡、大分市横尾貝塚等で、これらは海岸部や大型河川に接近して存在する段丘上に位置する。

河川の規模あるいは河川深度に石錘の重量が関係するかどうかは現状では断定することはできないが、県内資料から見てその可能性があることを問題提議しておきたい。

市町村名	遺跡名	時期	河川名	立地	石錘の種類と量	報告書名
姫島村	姫島用作遺跡	晩期	海岸部	微高地	礫石錘(11)	「姫島用作遺跡」1991　姫島村教委
豊後高田市	上野遺跡	後期	桂川	微高地	礫石錘(1) 有溝石錘(7)	「上野遺跡」1990　豊後高田市教委
三光村	佐知遺跡	後期	山国川	沖積知	礫石錘(16)	「佐知遺跡」1989　大分県教委
挾間町	北原遺跡	後晩期	大分川	台地	礫石錘(18)	
犬飼町	下野遺跡	晩期	大野川	台地	礫石錘(11) 切目石錘(17)	
大野町	光昌寺遺跡	後期	茜川	台地	礫石錘(20) 切目石錘(1)	
大分市	横尾貝塚	後期	乙津川	低段丘	礫石錘(3) 有溝石錘(1)	「横尾貝塚発掘調査概報」1982　大分県教委　礫石錘未報告分多数
宇佐市	尾畑遺跡	後期	伊呂波川	低段丘	多数(未整理)	「宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」1988　大分県教委

表34　県内礫石錘多数出土遺跡一覧

また、表34は大分県内の縄文時代後晩期で礫石錘を比較的多数出土した遺跡の一覧であるが、礫石錘に若干切目石錘や有溝石錘が共伴する遺跡が多く見られ注目されるが、犬飼町下野遺跡で切目石錘17点が出土した以外は1～2点だけしか出土しないのが通常である。

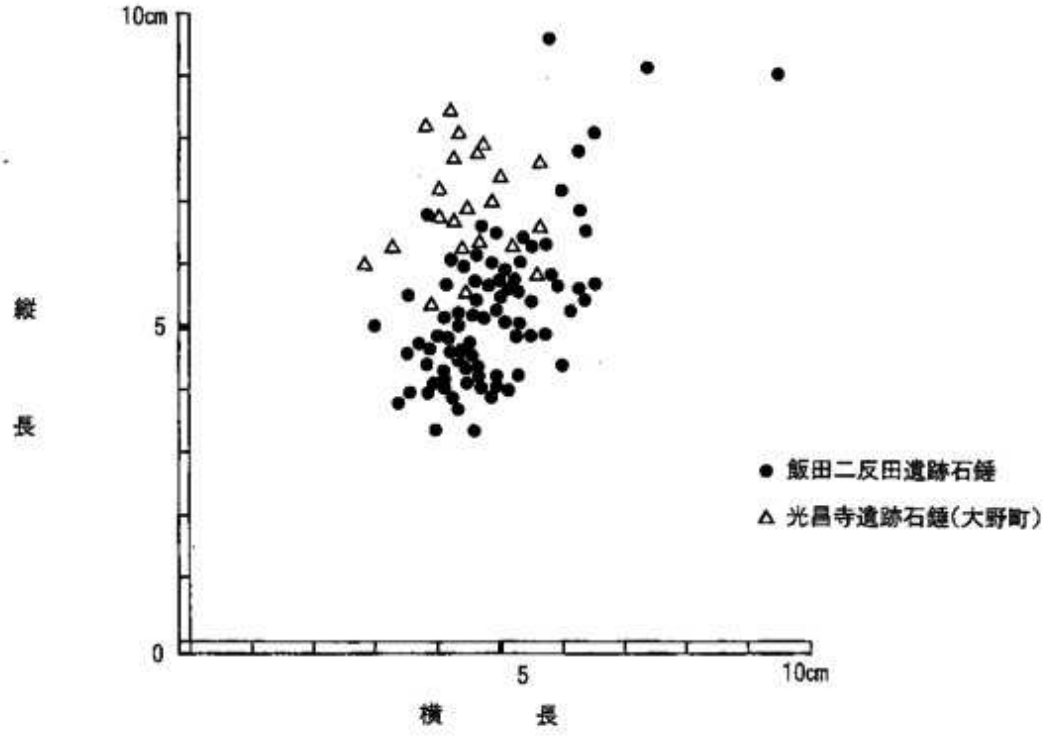


表 35　飯田二反田遺跡出土石錘縦横比

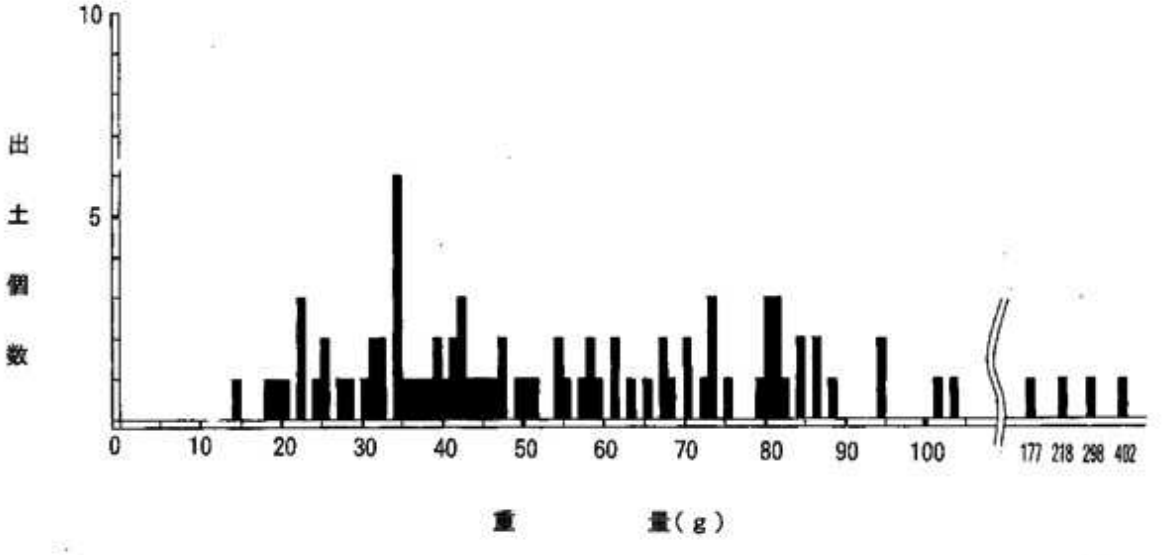
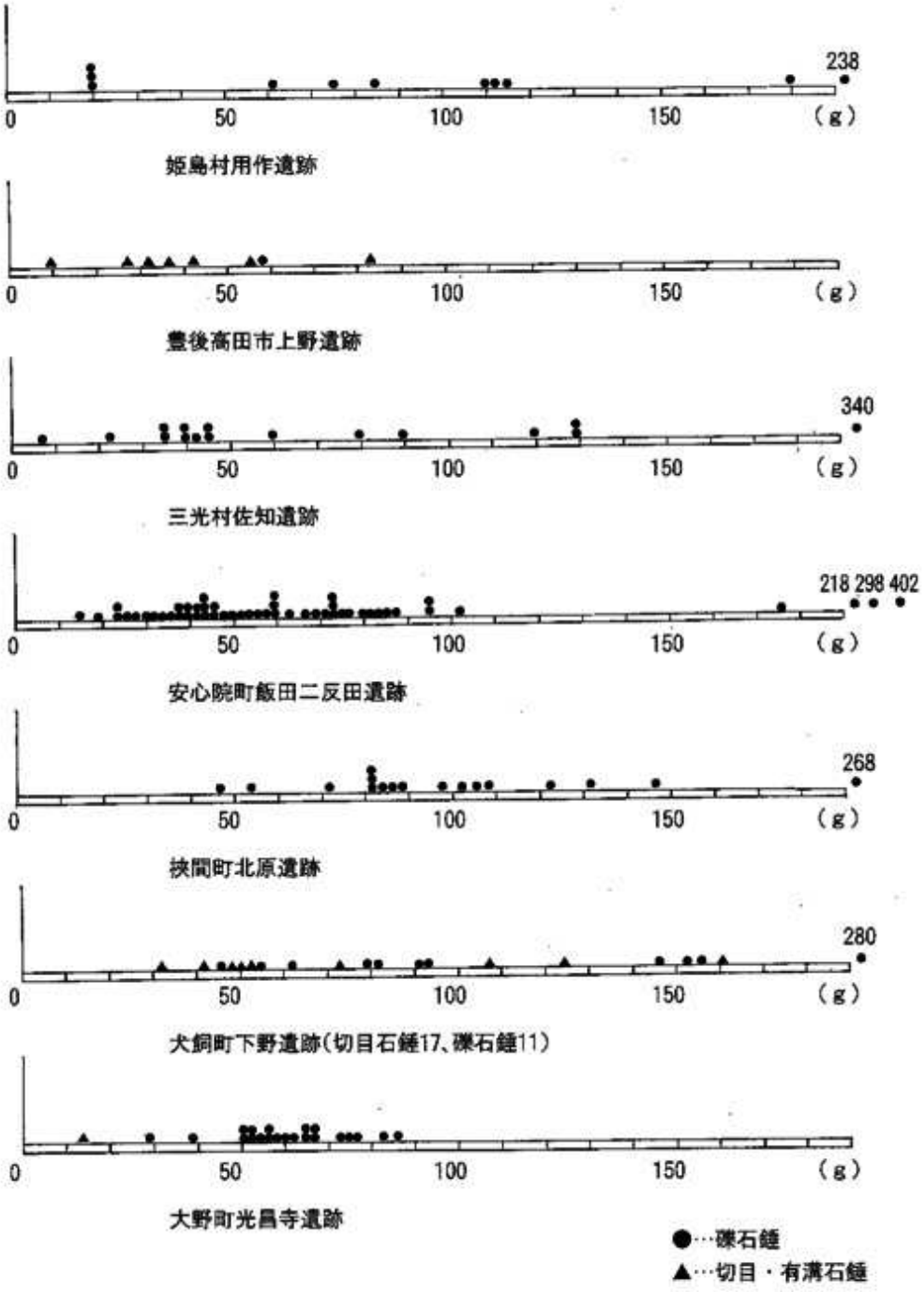


表 36　飯田二反田遺跡出土石錘重量別個体数



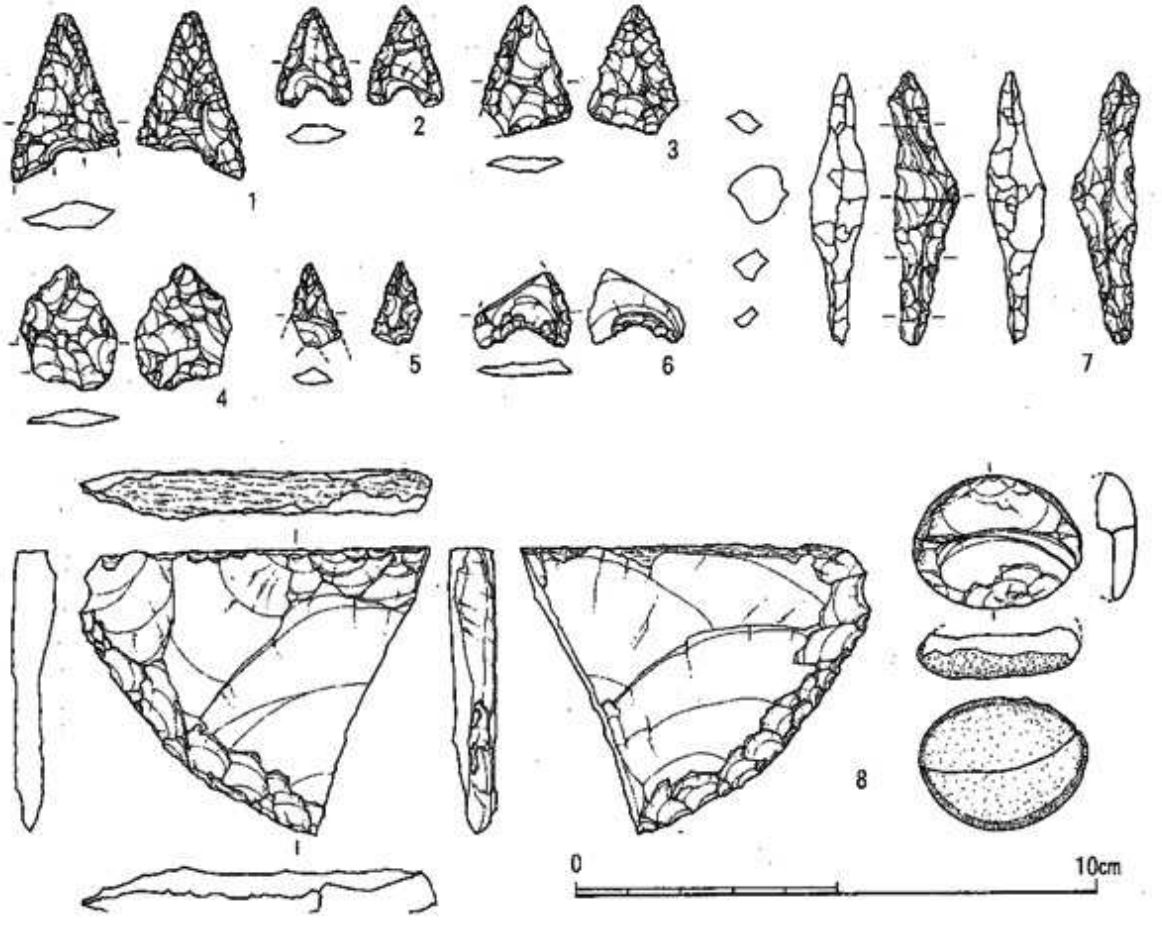
第 209 図　県内縄文時代後・晩期出土石錘重量分布図

(9) 溝遺構出土石器

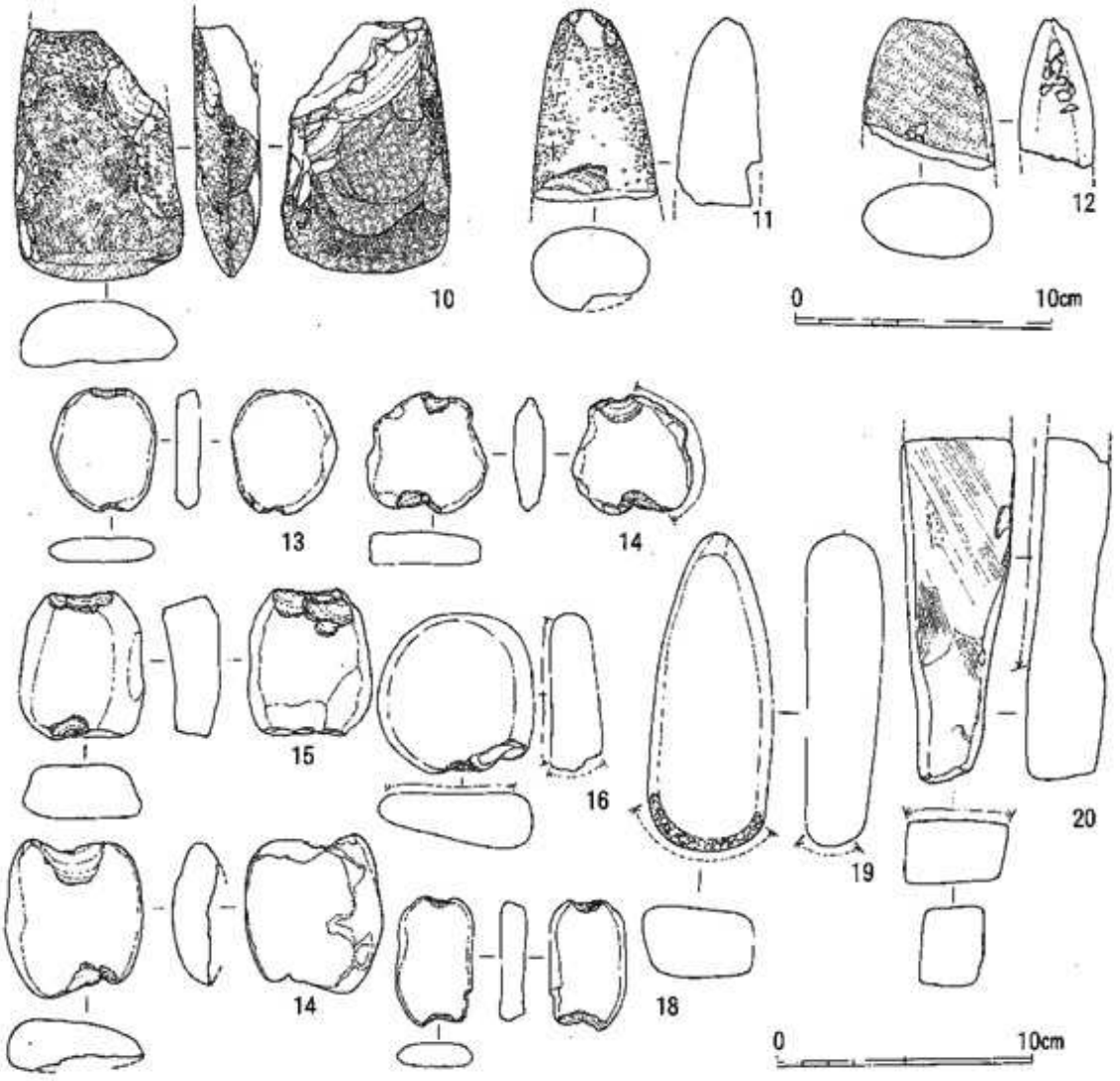
遺跡からは南北に各１条及び中央に２条の計４条が検出されており、特に中央部の１、２号溝は１号、２号、４号住居跡を切り込んでいる。各溝遺構からは流れ込みによると考えられる遺物が出土している。第210図７は３号溝から出土した姫島産黒曜石製の異形石器であるが、両先端が尖る形態を呈しており、一応尖頭器様石器としたが、石錐の可能性もある。また、８はサヌカイト製の削器である。約半分は欠損しているが、復元すると半月形の横刀形石器状になるものと考えられる。

第211図10～12は磨製石斧であるが、いずれも表面に敲打痕が残っており、敲打整形の後に研磨したものである。10は表裏面に研磨痕が顕著に見られる。また、11、12は基部の一部だけで欠損している。13～18は扁平な礫の両端を打ち欠いただけの礫石錘で重量も26g～89gと比較的軽量のものである。16は安山岩製の磨石であるが、縁辺一部が敲打により欠損しており、19とともにハンマーストーンとして使用したことが伺える。

20は安山岩製の砥石であるが、一面だけが使用されるがその面は荒く、いわゆる荒砥石と考えられる。



第210図　飯田二反田遺跡溝遺構出土石器実測図（１）

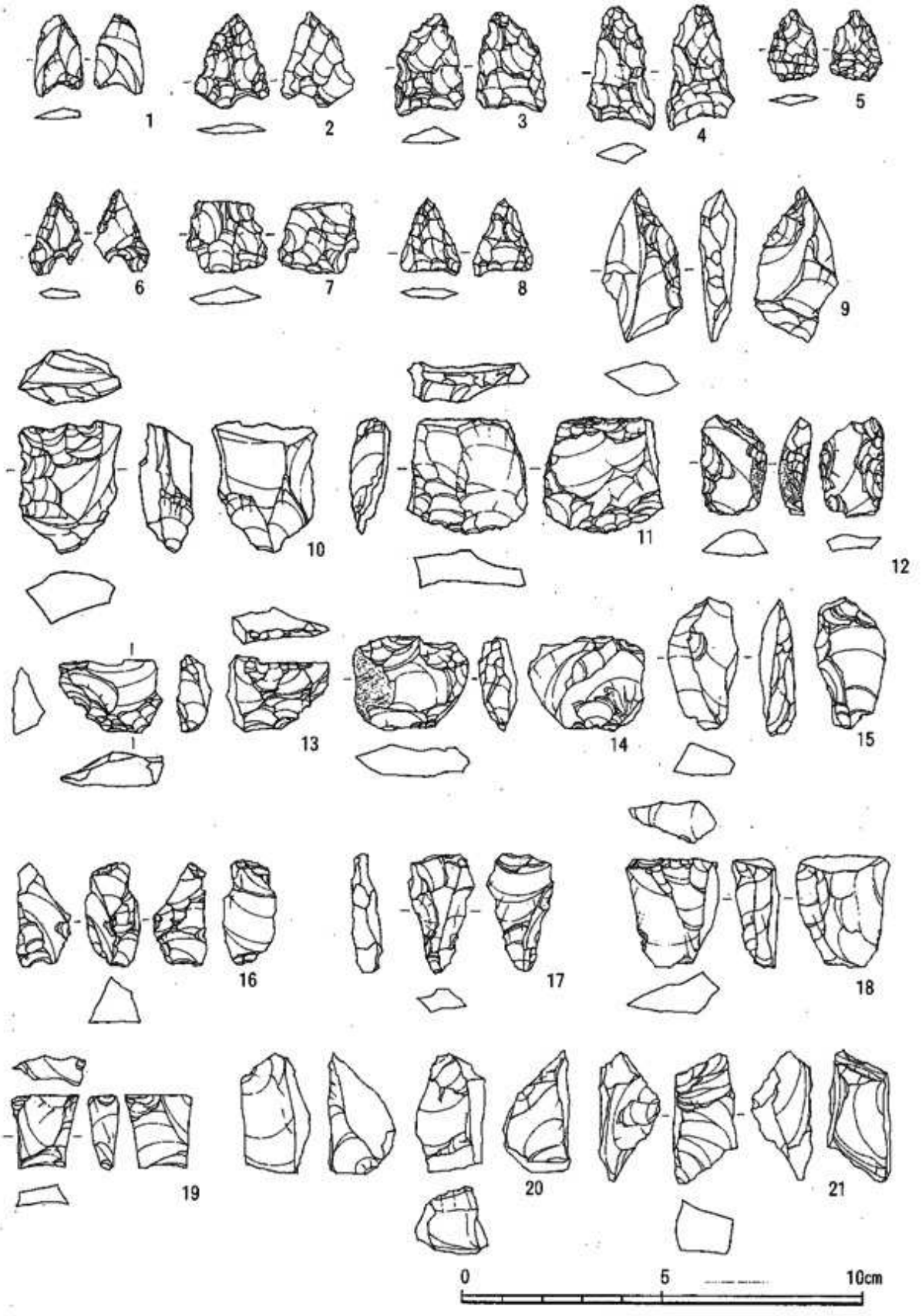


第 211 図　飯田二反田遺跡溝遺構出土石器実測図（2）

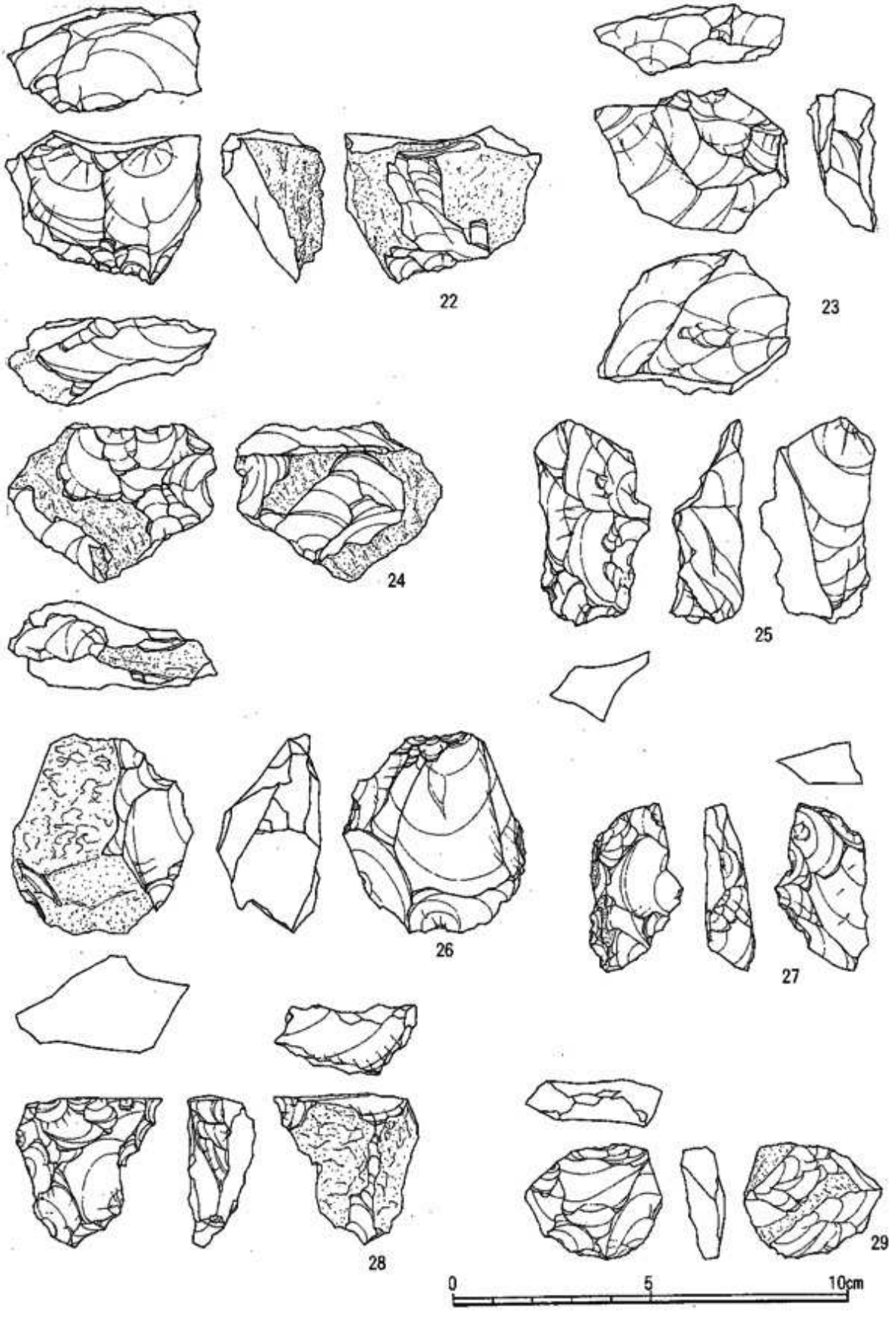
単位(cm、g)

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	出土区	No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	出土区
1	石鏃	黒色黒曜石	(3.2)	(2.1)	0.5	2.1	溝3	11	磨製石斧	不明	(7.4)	(4.9)	(3.2)		溝2-b
2	〃	サヌカイト	1.9	1.4	0.3	0.8	溝1-2	12	〃	〃	(5.9)	(5.1)	2.9		溝3
3	〃	姫島産黒曜石	2.3	1.7	0.3	1.1	溝1-2	13	礫石錘	凝灰岩	6.8	4.0	0.9	26	溝2-b
4	〃	〃	2.8	1.8	0.4	1.4	溝1	11	〃	〃	4.7	4.6	1.3	33	溝3-c
5	〃	〃	(1.6)	(0.9)	0.3	0.3	溝3	15	〃	安山岩	5.6	4.8	2.0	89	溝2
6	石鏃	姫島産黒曜石	(1.4)	1.8	0.3	0.5	溝3	16	敲磨石	〃	6.2	6.1	2.2		溝3-b
7	尖頭器様石器	〃	5.2	1.2	1.0	3.8	溝3	17	礫石錘	軽石	6.1	5.3	(2.0)	64	溝2-c
8	削器	サヌカイト	5.4	6.7	0.9	36.0	溝1 2	18	〃	安山岩	5.0	3.0	0.9	23	溝4
9-a	剥片	姫島産黒曜石	2.5	3.2	0.8	5.9	溝2	19	敲打石	〃	12.2	4.7	2.7		溝1-2
9-b	〃	〃					東区	20	砥石	〃	(13.3)	4.4	3.0		溝2-c
10	磨製石斧	粘板岩	(9.8)	(5.5)	2.5		溝1-2								

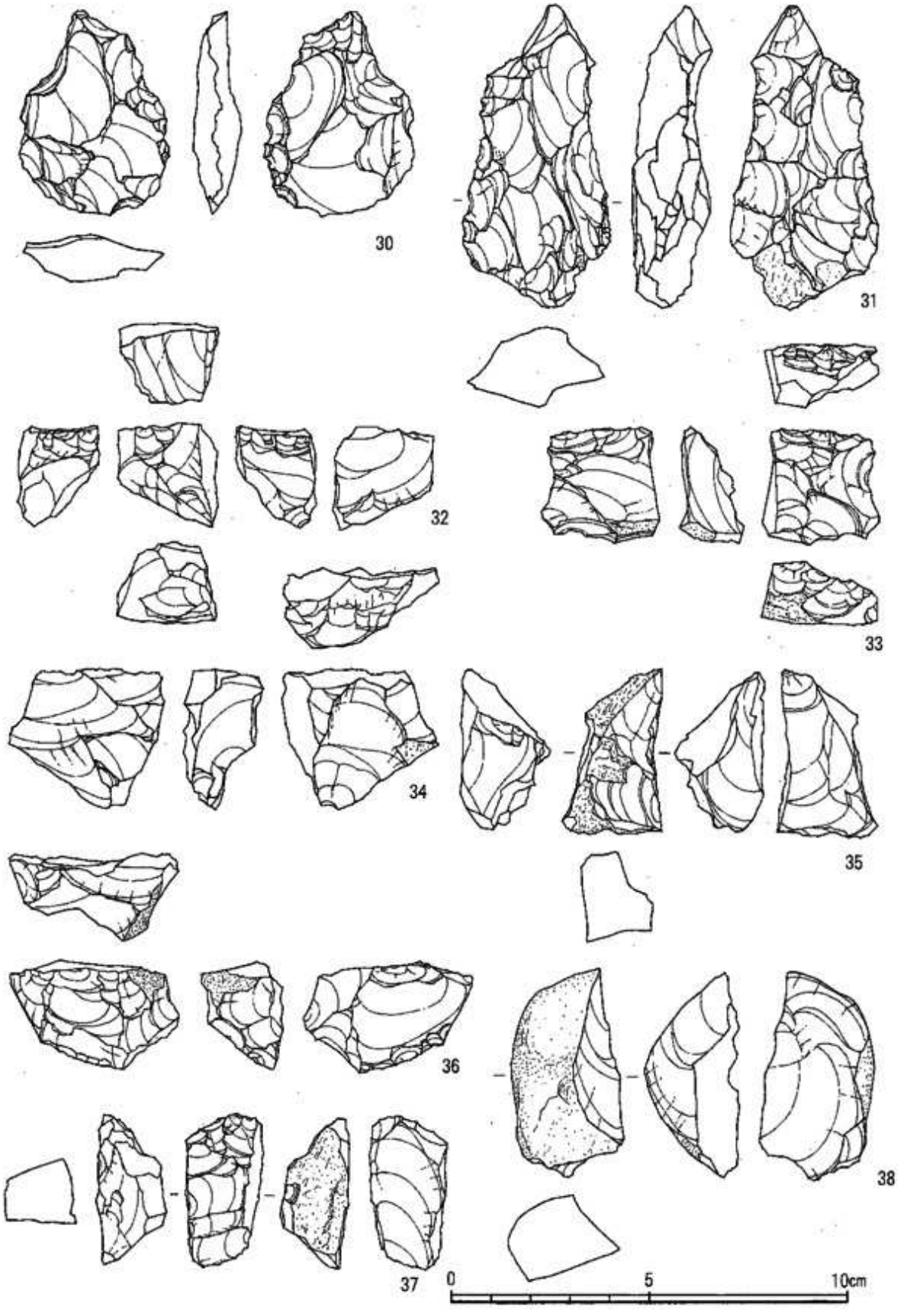
表 37　飯田二反田遺跡溝遺構出土石器観察表



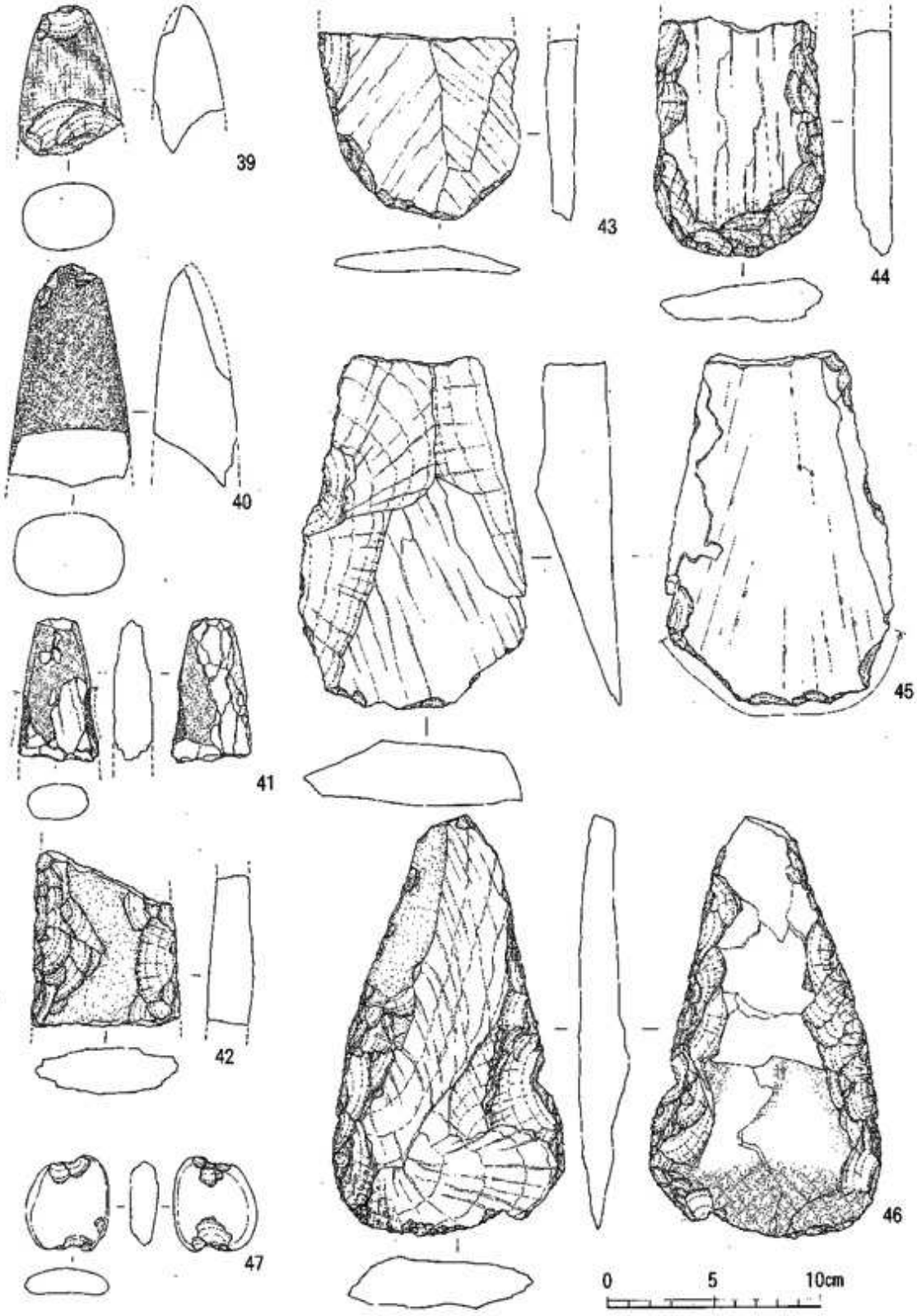
第212図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土石器実測図（１）



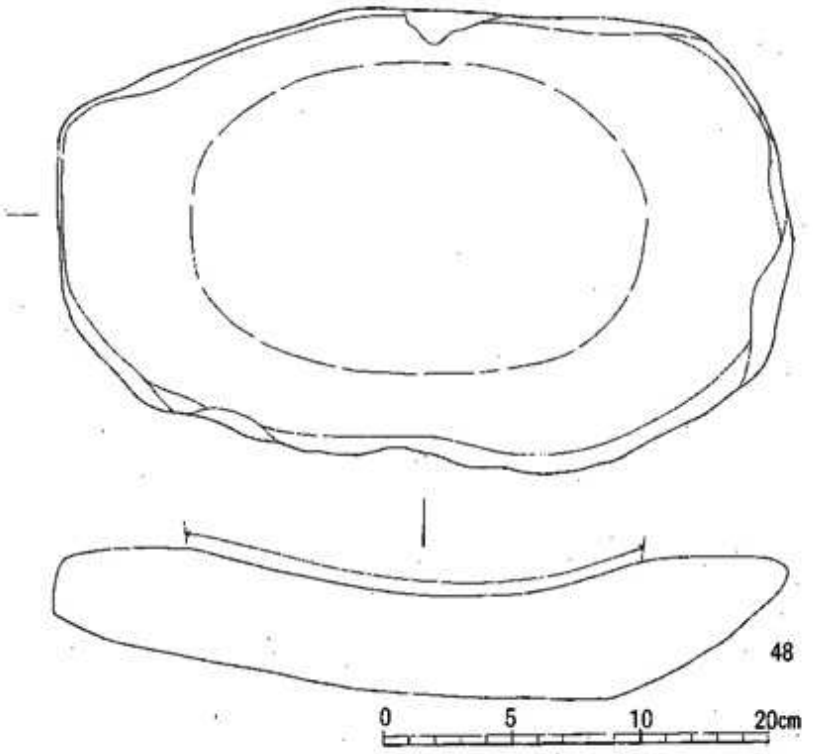
第213図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土石器実測図（２）



第 214 図　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土石器実測図（３）



第215図　飯田二反田遺跡平成2年度調査区出土石器実測図（4）



第216図　平成２年度調査区出土石器実測図（５）

単位(cm, g)

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
1	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.6	0.5	1.6	20	石鏃	姫島産黒曜石	3.0	1.7	1.6	6.8
2	〃	〃	2.3	1.8	0.3	1.0	21	〃	〃	3.1	1.5	1.4	6.7
3	〃	〃	2.4	1.7	0.6	1.7	22	〃	〃	4.0	4.9	2.6	38.5
4	〃	〃	3.0	1.7	0.5	2.0	23	剥片	〃	3.9	4.7	1.5	23.0
5	〃	〃	1.7	1.2	0.3	0.5	24	石核	〃	4.1	5.1	2.1	35.6
6	〃	〃	2.0	(1.3)	0.3	0.6	25	剥片	〃	5.3	2.8	1.9	17.6
7	〃	〃	(1.8)	2.0	0.4	1.5	26	石核	〃	4.9	4.6	2.7	44.9
8	〃	〃	1.8	1.5	0.3	0.7	27	〃	〃	4.3	2.3	1.2	9.8
9	掻器	サヌカイト	3.8	2.1	0.6	5.0	28	〃	〃	3.8	3.8	1.8	18.3
10	〃	姫島産黒曜石	3.2	2.5	1.2	9.5	29	〃	〃	2.9	3.3	1.0	9.6
11	楔形石器	サヌカイト	2.8	2.9	0.8	8.1	30	〃	〃	5.1	3.7	1.1	16.2
12	掻器	姫島産黒曜石	2.3	1.6	0.7	3.2	31	〃	〃	7.6	3.7	2.0	38.8
13	楔形石器	〃	1.8	2.5	0.8	3.3	32	〃	〃	2.4	2.4	1.8	12.5
14	〃	〃	2.3	2.8	0.8	6.3	33	〃	〃	3.1	2.4	1.3	11.3
15	〃	〃	3.2	1.8	0.8	4.2	34	〃	〃	3.5	3.7	1.9	19.0
16	〃	〃	2.5	1.3	1.3	3.9	35	〃	〃	4.5	2.4	2.5	17.4
17	〃	〃	2.9	1.7	0.7	2.4	36	〃	〃	2.7	4.3	1.9	18.8
18	石核	〃	2.7	2.2	1.1	6.1	37	〃	〃	3.8	1.8	1.7	12.8
19	〃	〃	1.8	1.6	0.7	2.1	38	〃	〃	5.2	2.8	1.9	28.5

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	備考
39	磨製石斧	?	(7.1)	(4.8)	(3.3)	
40	〃	?	(10.5)	(5.8)	(4.0)	全面に敲打痕
41	〃	結晶片岩	(6.7)	(3.8)	(1.8)	中軸線両端に敲打による快入部
42	〃	輝石安山岩	(8.2)	(7.0)	2.1	胴部のみ
43	〃	〃	(8.7)	(9.5)	1.5	基部欠損
44	扁平打製石斧	〃	(11.2)	8.0	1.8	基部欠損
45	〃	〃	16.4	10.8	3.5	完形品
46	〃	サヌカイト	19.6	11.0	2.3	完成形品
47	礫石錘	安山岩	4.5	4.0	1.3	29.3g
48	石皿	〃	57.0	35.0	8.0	

表38　飯田二反田遺跡平成２年度調査区出土石器観察表

第3章　まとめ

1．縄文土器の検討

本遺跡では、５基の縄文時代後期の竪穴住居跡を中心とする遺構と周辺の包含層から大量の土器が出土している。１・２号住居跡を除き異なる時期の資料であり、これらは第１章で述べたようにⅠ～Ⅳ類に分類される。各竪穴の出土量は一定ではないが、有文・無文ともに各種のセットがほぼ揃っている。ここでⅠ～Ⅳ各類の特徴を再度まとめると。

Ⅰ類土器群は、有文鉢・深鉢・浅鉢・皿からなる。有文土器は磨消縄文による文様を主体とし、縄文をもたず沈線のみによって施文するものは少ない。沈線は断面U字形で幅５～６㎜とやや広いものがほとんどである。有文鉢・深鉢は波状口縁を呈し器形も類似するが、縄文や口縁部肥厚帯の造りだしの有無によって細分される。文様は口縁部と胴部文様帯に別れるが、いずれも波頂部とその下位を中心とし口縁部にはＳ字状文と対向列点文を、胴部には入組文と渦巻文・半同心円文を施す。有文浅鉢や皿にも同様の文様を描くが、縄文はＲＬがほとんどでありＬＲは非常に少ない。これに伴う無文土器の深鉢は、波状口縁を呈し口縁部が開き胴部の張る器形を示す。また、底部には平底と上げ底があるがその中でも高台状の上げ底となるものが一定量存在することが特徴と言える。Ⅰ類の有文土器、とりわけ鉢・深鉢に認められる文様や器形等の諸要素は、当地域における後期前葉の小池原上層式土器[注1]（鐘崎Ⅰ式）に比定されるものである。

Ⅱ類土器群は、有文土器および無文土器ともに鉢・深鉢・浅鉢等から構成され、小池原上層式の次に編年されている鐘崎式土器である。有文土器は幅２～３㎜の沈線により入組文や渦巻文などの文様を施し磨消縄文によるものは極めて少なく、Ⅰ類と縄文の有無は完全に逆転する。有文土器の鉢・深鉢は器形等の要素によりさらに細分されるが、主体となる有文鉢Ａ・深鉢Ａ類の頸部と口縁部はⅠ類に比べ非常に短くなり、文様構成にもやや乱れを生じているものが多い。また、有文深鉢Ｄ類や有文深鉢Ａ・Ｂ類が少数ながら一定量存在することも重要な要素の一つである。無文土器においても明瞭な器形変化を見せ、深鉢では肥厚した短い口縁部からすぐにやや張り出した胴部にいたる頸部の未発達な器形となり、波状口縁を呈するものも波形の弱く四隅がわずかに隆起するものが主体となる。従って、頸部から口縁部がやや長く延びる器形を呈するものは少数となる所にも本類土器群の特徴の一つがあると言えよう。底部はそのほとんどが平底またはわずかに窪むものであり、高台状の底部はほぼその姿を消す。

Ⅲ類土器群の文様はⅡ類と同様の沈線によるが、有文鉢Ａ・Ｂ類、有文深鉢Ａ・Ｂ類の文様構成は平行する数条の直線的な横走沈線を主とし、途中に入る渦巻文なども同心円状を呈するなど明らかに退化したものとなる。また、有文鉢・深鉢Ａ類の口縁部は肥厚しないものが多く

なり、口縁部がやや長く外に開き文様は胴部上半に集中するB類の存在も新しい要素のひとつである。これらのⅡ類の系統を引く有文土器の割合も3号住居跡では約6割と依然主体を占めるが、減少傾向にあることは明らかである。そして、本類の指標となるものとして口縁部、頸部、胴部が各々明瞭な有文深鉢Cが新たに出現する。この深鉢C類の多くは磨消縄文（疑似縄文）による文様帯が口縁部と胴部に設けられ、器形・文様ともにⅡ類の有文深鉢の系譜からは発生し得ないものである。また、有文深鉢D類についてもこれと同様の器形を示すものが認められる。これらに伴う有文浅鉢については良好な資料に恵まれないが、無文深鉢にも新たな変化が看取される。Ⅱ類の代表的な深鉢であった口縁部が肥厚し頸部の未発達な器形を呈するものは少なくなり、波状・平縁口縁ともに頸部から口縁部がやや長く延び、胴部は張り出し屈曲するものとそのままあまり張らずすぼまるものが主体となる。これらに伴う底部は平底およびわずかに窪む上げ底であるが、底径10cm前後以下の比較的小さいものが多いようである。これらの土器群は、北九州市の下吉田遺跡Ⅳ期土器[註2]や菊水町式土器[註3]と呼ばれるものに近い。

Ⅳ類土器群は出土量がやや少なく、代表となる有文深鉢・浅鉢についても諸要素が網羅されてはいないが中心的な資料は出土していると考えられる。有文深鉢A類の口縁部は「く」字状に内傾し、口縁部と胴部上半に磨消縄文（疑似縄文）による文様帯を描く。有文深鉢B類は口縁部が外に開く以外はA類と同様の器形をとり、口縁部と胴部に縄文（疑似縄文）帯を施す。有文浅鉢は口縁部が外反しながら開き、口縁部外側にやや狭い縄文帯を、胴部上半に数本の横走沈線によって画する磨消縄文帯を施文する。沈線間にゆるい連続波状文を加えること等はⅢ類には認められなかった新たな要素である。また、鐘崎式系土器及びその系譜を引くと考えられるものはほぼ姿を消し、有文土器（深鉢・浅鉢）における外来系への転換はほぼ完了したと言えよう。この他、特種なものに注口土器があり、渦巻文の退化と思われる「の」字状文様が施されている。これらに伴う無文深鉢は平縁と波状の口縁が存在するが、器形には大差はないようである。

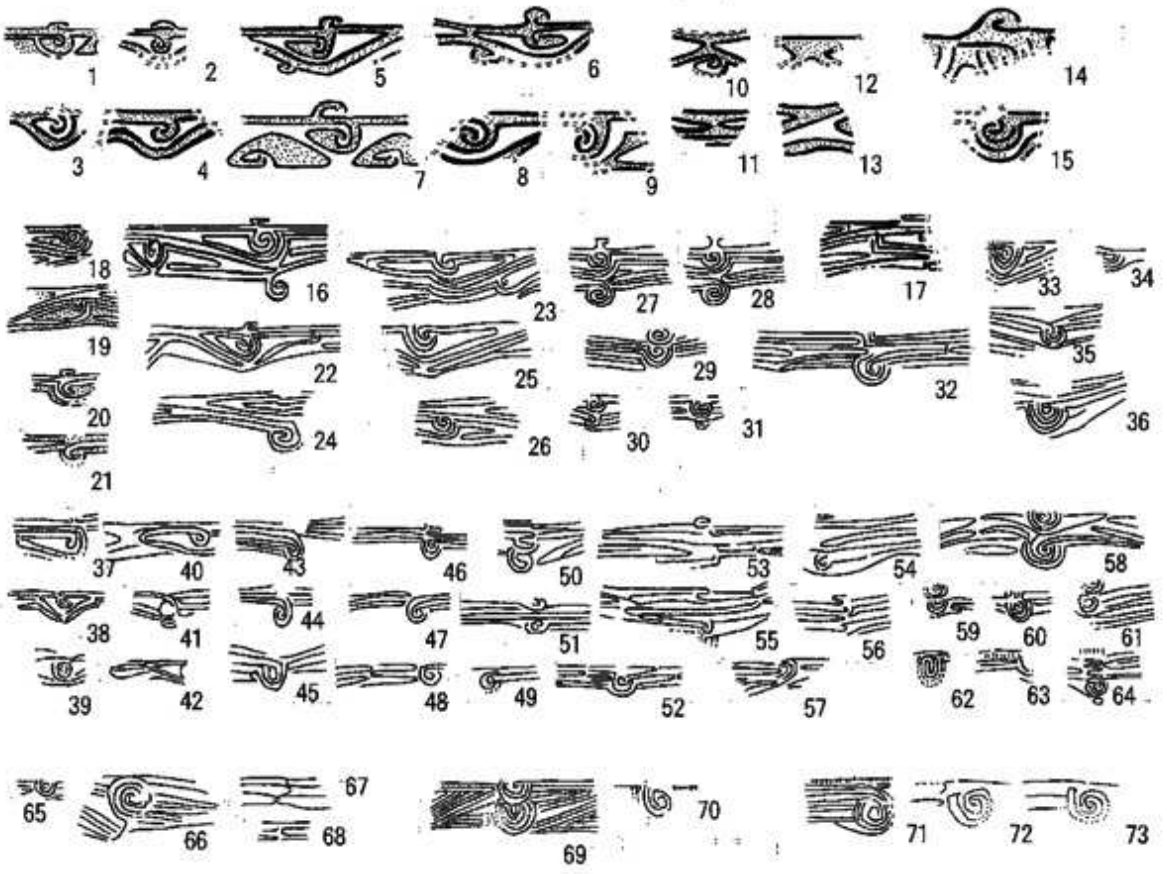
次に各類土器の遺構別の出土状況を見ると、1・2号住居跡では、数点のⅠ類土器が認められるもののほぼⅡ類土器群によって完全に占められ、Ⅲ・Ⅳ類土器はほぼ皆無と言える。また、4号住居跡はⅠ類土器群、5号はⅣ類土器群のほぼ単純であり、前後の土器は全くと言える程出土していない。これに対し、3号住居跡においてはⅠ～Ⅲ類土器の各類が出土しているが、土器炉に用いられているのはⅢ類の有文深鉢C1であり、この他の有文土器もⅢ類ーⅡ類ーⅠ類の順に少なくなる。従って、3号の出土からⅠ・Ⅱ類の有文土器を除いたものがⅢ類土器を構成すると理解されるが、鐘崎式と呼ばれるものはこの間のやや長期にわたる存在を示す。

以上の出土状況と各類土器の諸要素から、本遺跡出土の各土器群はⅠ類土器群ーⅡ類土器群ーⅢ類土器群ーⅣ類土器群と考えられるが、Ⅰ～Ⅲ類土器に含まれる鐘崎式系土器についてはさらに検討を要する部分も少なくない。

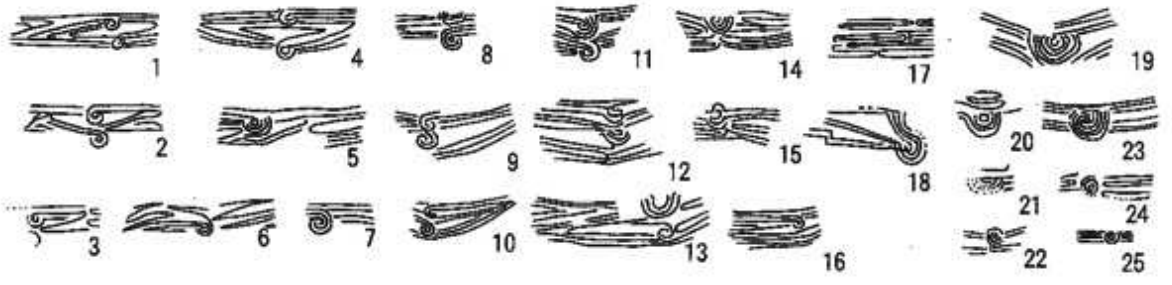
当地域における縄文時代後期前葉から中葉の土器編年については、賀川光夫[註4]や乙益重隆[註5]・前川威洋による小池原上層式一鐘崎式一北久根山式を基本とし、坂本嘉弘[註6]、西健一郎[註7]、田中良之[註8]、松永幸男、水ノ江和同[註9]、後藤晃一[註10]などによる検討や細分案がある。また、山口信義[註11]は、北九州市の菊水町遺跡出土の土器を北久根山式に並行するものとして菊水町式土器の設定を行っている。近年、北九州市の下吉田遺跡を皮切りに、福岡県椎田町山崎遺跡・石町遺跡[註12]、同県豊津町節丸西遺跡[註13]、豊前市中村石丸遺跡[註14]、同県大平村上唐原遺跡[註15]、同土佐井遺跡[註16]、大分県三光村佐知遺跡[註17]、中津市ボウガキ遺跡[註18]、宇佐市尾畑遺跡[註19]、豊後高田市上野遺跡[註20]、別府市羽室遺跡[註21]、朝地町田村谷遺跡[註22]、庄内町十合野遺跡[註23]、などの各遺跡において当該期の住居跡が調査が行われ、その総数は100 基に迫ろうとし膨大な量の資料が蓄積している。下吉田遺跡や田村谷遺跡および山崎遺跡の報告書では出土資料の検討と編年が行われており、この間の状況が明らかになりつつるものの、やや混乱をきたしている部分[註24]も認められる。

一方、小池原上層式から鐘崎式が出現することは、口縁部から頸部にかけての器形上の隔たりや施文具の変換などのヒアタスが認められることからその間に両者を繋ぐ資料が存在するとしても、胴部文様構成等からもほぼ疑いないようである。しかし、小池原上層式の標式遺跡である小池原貝塚の全体の報告書が未刊であることや、その後の小池原上層式土器のまとまった出土が少なかったこともあって、同式土器の発生と展開およびセット関係や文様構成などの詳しい実態については充分に解明されているとは言い難い状況にあった。これを受け、最近では小池原上層式土器とその前後の土器について地域の実態と異なる強引な見解・意見[註25]がだされ、混乱に拍車をかけている部分もある。また、鐘崎式土器については当初からその細分が議論され、複数の細分案が出されているが、最近では田中良之・松永幸男による編年案が広く受け入られている。これは、小池原上層を鐘崎Ⅰ式とし、従来の鐘崎式をⅡ式とⅢ式に細分したもので、鐘崎Ⅱ式はモチーフの変化はないがⅠ式より胴部文様が圧縮し集線・渦文化し、Ⅲ式になるとさらに圧縮と変化が進行するとされる。この編年では鐘崎Ⅱ式の胴部文様のモチーフは小池原上層式と基本的に変わらないとしたため、前述の東九州の各遺跡ではごく少数の鐘崎Ⅱ式と圧倒的多数の鐘崎Ⅲ式から構成されることとなり、鐘崎Ⅱ式の単純期の存否と鐘崎Ⅲ式の更なる細分[註26]が議論されることとなった。そこで、これらの問題について各遺跡の一括の資料と見なされるものを主材料として検討することとする。

まず、小池原上層式土器（鐘崎Ⅰ式）の文様構成の把握を行った後、以後の文様変遷について見ることとするが、本遺跡4号住居跡のⅠ類有文鉢・深鉢土器には文様の全体モチーフが判明しているものが少ないため、最近の調査によって良好な資料を出土した十合野遺跡の文様パターンを検討する。第217図1～11は、十合野遺跡出土の小池原上層式の鉢形土器の波頂部の下位に施工される同部主文様を抽出したもので、12～15はその連結部分の文様である。これらは、二本単位の幅広沈線による区画文様を基本的に描くが、上下の入組文の下側が左または右



第 217 図　小池原上層、鐘崎式、同式系有文鉢・深鉢胴部文様



第 218 図　山崎遺跡 7 号住居跡出土鐘崎式有文鉢・深鉢胴部文様

にやや長く延びＪ字状を呈する１・３、５～８と、短く鉤手状となる２・４、３本以上の沈線により半同心円状の文様となるものの三類からなる。この中ではＪ字状となるものが多数を占め大中小の鉢に各々施文されるが、鉤手状となるものや半同心円状の文様はやや少ないがモチーフとして確実に存在し、鉤手文は比較的小形の鉢に、半同心円文はやや大形の鉢に施されることが多いようである。連結部分は上下の縄文帯を接合するものであるがややバラェテイが認められる。この他、縄文をもたず沈線のみによるものも少数存在する。また、橋状把手を付すものは中～小形の鉢であり、大形の鉢・深鉢にはほとんど認められない。ここで提示したものが小池原上層式の有文土器（磨消縄文）の全の文様要素とその構成を網羅している訳ではないが、その主要モチーフは前述の３つと考えられる。そして、この他に沈線のみにより半同心円文を描くもの（Ｉ類有文鉢・深鉢Ａ２）が伴うことも注意[注27]される。

次に、主として本遺跡１号住居跡出土の鐘崎式土器鉢・深鉢の胴部主文様について示したものが16～36である。この中で、18～20と十合野遺跡出土の16・17は、小池原上層式のＪ字や鉤手のモチーフを保ち田中・松永の鐘崎Ⅱ式に入るものであるが、21以降は次の鐘崎Ⅲ式に相当することとなる。しかし、これらは施文方法から見ると、四方の主文様の一ヵ所から始まりその後連続した施文行為により全体の文様（連続施文[注28]）が完成する16～36と、四方の波頂部の下位において文様が完全に途切れ各々分割または独立した文様（分割施文）となる37～64に分離することが可能[注29]である。連続施文では入組文や渦巻・半同心円文など主要文様と展開は小池原上層式と基本的に変わらないが、沈線の多条化（７～９条）と直線化の傾向が認められる。そして、このグループは先に述べた小池原上層式に認められた三つの主要文様モチーフを基本的に踏襲し、２・４→21、５～９→16・18・19・20・22～26、14・15→32～35へ移行はスムースであり、27・28についても16等と基本的には同様の変化と考えられる。17は、やや幅広沈線によるものであるがこの段階において新たに出現した文様のパターンの一つ見なされ、36へとつながるものか。従って、小池原上層式からの移行は、縄文の減少・消失や施文工具の変換はあるものの直接的な変化と考えられる。[注30]

分割施文のグループは鉤手文や半同心円文等の主要文様の変形が進行し、主文様の左右の沈線は横・斜め方向に平行しさらに直線化するものや、多条沈線のほか本数が４条前後に減少したものも多くなる。すなわち、22・23等の鉤手モチーフは37・38・40へと変化し、さらに24→43～49、29・30→50～52、半同心円文も32～35→53～59、多条沈線文は36→60～64へと移行すると考えられる。従って、文様変化の方向からも連続施文→分割施文と推定し得るが、ここで他遺跡の住居跡出土の資料と対比すると、福岡県山崎遺跡７号住居跡では大量の鐘崎式土器が出土しているが、第218図のように文様構成の明らかなものや復元可能なものはほぼ分割施文に限られ、連続施文の土器は存在するとしてもごく僅かと言えよう。また、出土資料の量はやや少ないが同様の現象は、中津市ボウガキ遺跡１・２号住居跡、豊後高田市上野Ｊ

1号住居跡および本遺跡2号住居跡にも共通して認められ、これらの遺構出土の鐘崎式土器は分割施文の土器群に属する。このように、単純資料の存在からも両者の間に時期差があることが裏付けられる。一方、田中・松永の設定した鐘崎Ⅱ式が、東九州における多くの調査例の中にもまとまった一括資料として出土することがなく全体のセット把握が困難な状況から、両氏の鐘崎Ⅱ式に先の連続施文の土器群を補完したものが、鐘崎Ⅲ式については分割施文の土器により代表されるものが、より実態に則すると言えよう。そこで、混乱を避けるため田中・松永の様式名をそのまま用いるが、当地域においては連続施文に代表されるものを鐘崎Ⅱ式とし、分割施文を主とするものを鐘崎Ⅲ式と呼ぶこととする。

その後、鐘崎式の系譜を引く文様は本遺跡4号住居跡、山崎遺跡2号住居跡、菊水町遺跡出土例に認められるようにモチーフはさらに変化が進む。第217図65～73に示したように半同心円または同心円状を中心とし、左右には4条前後と10条前後の多条の沈線を平行または斜行させるものとなる。これらの文様は、鐘崎Ⅲ式までの鉢・深鉢の器形と異なった、頸部がやや長く外に伸びる新出の鉢・深鉢に施される。すなわち、文様としては鐘崎式系であるが器形は鐘崎式からは系譜をたどることの出来ない外来系の土器であり、その多くは条痕調整を主とし有文土器の代表的存在とはなり得ないものとなる。この時期に至り鐘崎式系の土器に替わり、本遺跡のⅢ類深鉢Cなどの新たな外来系土器が有文土器の中心となり、次のⅣ類土器に引き継がれるのである。この土器の主体が変化することからすれば、本遺跡出土のⅢ・Ⅳ類土器群は鐘崎式系と言う呼称ではなく別の型式名を冠するべきものであろう。

また、田中・松永によれば鐘崎Ⅲ式期から東九州と西九州とでは地域差が鮮明となるとされるが、上記の検討からすれば、地域差の出現はこれを溯り鐘崎Ⅱ式期からすでに顕在化していたものと考えられる。つまり、東九州では鐘崎Ⅱ式期から縄文の極端な減少と文様モチーフの変形が始まるが、この段階の有文鉢・深鉢の外面はミガキややや丁寧なナデ調整を主とし精製土器の範囲にあるものの全体として粗製化への兆しが看取される。そして、鐘崎Ⅲ式期においてはさらに文様の変形が進み、ナデまたは巻貝条痕等の調整によるものが多くなり、粗製化が一層進みもはや精製土器とは言えないものも少なからず存在する。そして、次の段階に至ると精製土器の主体は新たな外来系土器に転換し、在来の文様モチーフは痕跡的残存とも言えるほどなる。さらに、これは粗製土器の変化[註31]とも連動した大きな土器変化であることも注目される。これに対し、西北・中九州では鐘崎Ⅲ式期においても文様モチーフの崩れは少ないことは田中・松永の指摘どおりであり、有文（精製）土器の主体の変化は次の北久根山式になってからである。また、同式の精製鉢・浅鉢の成立は鐘崎式からでは決してなく、当該期の東～北九州の外来系土器の中に求められるものである。

小池原上層式・鐘崎式土器は、九州が生み出した最初の磨消縄文土器であり初期の斎一性とともに九州内部における地域性をも色濃く反映していることが特徴[註32]と言える。これまでの検討

のような東九州における鐘崎式の有文（精製）土器の粗製化は、後期以降の東日本からの磨消縄文土器文化の波状的な伝播を最初に受けた地域における文化の受容と定着の過程を示すものであり、九州の他地域とは異なる様相を示すのは自明であろう。

註1　乙益重隆・前川威洋「縄文後期文化　九州」『新版考古学講座』3　1969、田中良之・松永幸男「後期土器について」『荻台地の遺跡』荻町教育委員会　1983

2　佐藤浩司「考察（下吉田遺跡出土の縄文後期土器について）」『下吉田遺跡』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1985

3　山口義信「周防灘・響灘沿岸地域における北久根山式併行期の土器」『研究紀要』第3号　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1989

4　賀川光夫「各地域の縄文式土器　九州」『日本考古学講座　3」1956、「所謂鐘ヶ崎式土器の層位出土の新例（小池原式の設定）」『大分県地方史』第34号　1964

5　註1乙益・前川文献と同じ

6　坂本嘉弘「宇佐平野の縄文時代後期の土器」『石原貝塚・西和田貝塚』大分県教育委員会　1979

7　西　健一郎「鐘崎式土器について」『九州文化史研究所紀要』第25号　1980

8　註1田中・松永文献および田中・松永「広域土器分布圏の諸相」『古文化談叢』第14集　1984

9　水の江和同「小池原上層式・下層式に関する諸問題」『古文化談叢』第27集　1992、「九州の縁帯文土器」『古文化談叢」第30集（上）　1993

10　後藤晃一「宇佐平野周辺における磨消縄文土器の編年」『考古論集　潮見浩先生退官記念論文集』　1993

11　註3文献と同じ

12　小池史哲『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告書－7－』　福岡県教育委員会　1992

13　末永弥義・棚田昭仁『豊前国府　および節丸西遺跡』豊津町教育委員会　1990

14　1988年度福岡県教育委員会調査

15　1987年度福岡県教育委員会調査

16　高橋　章編『土佐井地区遺跡』大平村教育委員会　1990

17　坂本嘉弘編『佐知遺跡』大分県教育委員会　1989

18　村上久和他『ボウガキ遺跡』中津市教育委員会　1992

19　小林昭彦他『一般国道10号宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』　1988　大分県教育委員会

20　後藤一重他『上野遺跡』　豊後高田市教育委員会　1990

21　高橋　徹『羽室遺跡発掘調査概報』　大分県教育委員会　1983

22　村上久和他『朝地田村遺跡』　朝地町教育委員会　1986

23　1992年度庄内町教育員会調査　大分県文化課坂本嘉弘氏教示

24　主に鐘崎Ⅱ式とⅢ式の識別をめぐる部分と北久根山式との併行関係に認識の差異が認められる。

25　西脇対名夫「伊木力遺跡出土縄文時代後期土器の検討」『伊木力遺跡』多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室　1990、および註９水の江文献などをその代表とする。

26　註２文献の中で佐藤は、下吉田遺跡出土後期土器をⅠ（小池原上層式）期、Ⅱ（鐘崎①式）期、Ⅲ（鐘崎②式）期、Ⅳ（鐘崎③式）期、Ⅴ（菊水町式）期、Ⅵ（辛川式並行）期に分けている。その変化の大網には異論はないが、鐘崎Ⅲ式を二分すること及び鐘崎Ⅱ式としたものの当否にやや問題がある。③式は本人も述べているように北久根山式並行であり後で示すように鐘崎式の範疇からは除外すべきと考える。また、鐘崎Ⅱ式として掲げたものに田中・松永の言う鐘崎Ⅱ式のモチーフを有する確実な例は見当たらないようである。

　註18・22文献では、村上が鐘崎Ⅲ式を新古の二段階に分けている。田村遺跡の鐘崎式は縄文があまり施されない点では東九州的であるがモチーフは中九州に近い連続施文であり、１・２号住ともほぼ同時期に比定されるものと考えられる。また、近接する田村東遺跡では中九州からの持ち込みと思われる北久根山式も出土しており、全体的に遺跡の地理的位置を良く反映している。

27　この他、浅鉢・皿等の文様についてもＪ字、鉤手、半同心円の文様パターンが認られるが、中でも半同心円文を主とするようである。

28　この文様は、一筆描の文様と表現したほうがより的確とも思えるのものである。

29　小破片の場合、いずれか判別不能なものも存在するが、連続施文の一群は沈線の幅・深さなどが一定したより丁寧なものといえる。

30　これは本遺跡４号住居跡、十合野遺跡１号遺構、国東町下堀田遺跡など単純遺跡・資料の存在からもほぼ確実であろう。また、小池原上層式の口径20～30cm余りの鉢・深鉢には頸部と口縁部ともに短い一群があり、これから鐘崎式への器形変化も比較的スムーズにたどることができる。

31　粗製土器は、小池原上層式と鐘崎Ⅱ・Ⅲ式、本遺跡Ⅲ・Ⅳ類土器群では器形に明らかな違いが認められることは前述したが、鐘崎Ⅱ・Ⅲ式期はより在地性が強く看取される。

32　これについては田中・松永、沢下などの指摘どおりである。田中・松永註１・８文献、

2．縄文時代の竪穴住居跡の検討

(1) 東北部九州の縄文時代後晩期の住居跡と集落の調査・研究状況

飯田二反田遺跡の縄文時代の調査では、縄文時代早期の集石炉１基と、後期の竪穴住居跡５基と、上部を削平され屋外炉状になった住居跡１基・集石遺構１基が検出された。これまでの県内の縄文時代の調査で、縄文時代早期の集石炉や炉穴を検出することはあっても、住居跡を検出することは稀であった。

それでも現在まで、県内で報告されている縄文時代の住居跡と考えられる竪穴遺構は、中津市ボウガキ遺跡の楕円形と方形の２基の縄文後期の鐘崎式土器の時期の住居跡、豊後高田市上野遺跡の鐘崎式土器の時期の円形住居跡、別府市羽室遺跡の縄文後期の北久根山式土器並行期の円形住居跡、大分市横尾貝塚の後期初頭の中津式土器と西和田式土器を出土する円形住居の一部、野津町内河野遺跡の三万田式土器の時期の方形住居２基と不整円形住居１基、同町生野遺跡の三万田式土器の時期の方形住居、大野町松木遺跡の三万田式土器の時期の方形住居、石井入口遺跡の縄文時代晩期中葉の方形住居、朝地町田村谷遺跡の２基の鐘崎式土器の時期の方形住居があり、最近でも庄内町十合野遺跡で方形住居と２基の円形住居が調査されている。こうした県内の住居跡のうち1983年段階までに明らかになっていたものについては、すでに高橋信武が「大分県史　先史篇Ⅰ」で集成し、当時の九州で報告されている住居跡の資料と供に、その変遷について論じている。

ところが近年、北九州市から南に延びる国道10号線のバイパス工事や、豊前地域の圃場整備事業に伴う発掘調査で、縄文時代後期の小池原上層式土器・鐘崎式土器・北久根山式土器・西平式土器の各時期の竪穴住居を検出する集落跡の調査が相次いでいる。これまでのこの周防灘西岸地域の縄文時代後期の住居跡の調査は、北九州市下吉田遺跡で、鐘崎式土器から北久根山式土器並行期の円形と方形の住居跡のほか、先に挙げた豊後高田市上野遺跡の円形住居や、ボウガキ遺跡の２基の住居跡が調査されていただけである。この他、集落跡としての研究は、宇佐市立石貝塚で、縄文時代後期前半の土器集中分布と小規模貝塚が馬蹄形状に分布することから、そのような形状の集落が存在したと論じられたこともある。

しかし、前述した事業に伴う発掘調査で明らかになった、福岡県椎田町山崎石町遺跡・同県豊前市中村石丸遺跡・同県豊津町節丸西遺跡・同県大平村上唐原遺跡・大分県三光村佐知遺跡・同県宇佐市尾畑遺跡の住居跡の数は、多い遺跡で20基以上である。こうした相次ぐ住居跡の調査は、この地域の縄文時代後期の集落研究にとって、新たな段階の到来を意味する。

(2) 集落としての飯田二反田遺跡

こうしたなか、飯田二反田遺跡では５基の竪穴住居と、壁を消平された可能性のある石囲炉１基が調査され、大分県で初めて、縄文時代の集落の一部を明らかにすることができた。調査

の範囲が限られており、全容を知ることはできないが、小池原上層式土器の時期の１基、鐘崎式土器の２基、北久根山式土器の時期の２基の竪穴住居跡と、住居跡の壁が削平された可能性のある石囲炉１基が検出され、３時期にわたることが確認された。

そこで、縄文時代後期前半の時期で、比較的広域に調査している遺跡の状況を見る。豊後高田市上野遺跡は圃場整備事業に伴い発掘調査を実施した遺跡である。この遺跡では広範囲に、試掘調査をしたが、検出された遺構は円形住居１基のみであった。また、宇佐市尾畑遺跡では道路建設に伴い約14000㎡を調査したが、検出した縄文後期前半の遺構は隅丸方形の住居跡１基のみであった。さらに、朝地町田村谷遺跡でも、圃場整備事業に伴い、広範囲に試掘調査を実施したが、検出された遺構は方形住居２期であった。最近では、庄内町十合野遺跡で、圃場整備事業に伴い広範囲の試掘調査を実施し、時期の異なる方形と円形の住居跡を検出した。

このように、東北部九州で検出される縄文時代後期前半の集落は、１～２基の竪穴住居が検出される場合が多く、未調査区や削平された住居跡があったとしても、２～３基単位の竪穴遺構で構成される集落であった可能性が強い。飯田二反田遺跡の住居も、各時期１～３基の遺構であり、遺跡が周辺に広がっていたとしても、多くて同時期に５～６基の竪穴遺構で構成される集落であったと考える。

(3) 縄文時代後期前半の住居形態と飯田二反田遺跡の住居

飯田二反田遺跡で検出された住居跡の形態は、方形（４号住居）、隅丸方形（１号住居・２号住居）、円形住居（３号住居・５号住居）がある。時期も方形（小池原上層式土器）一隅丸方形（鐘崎式土器）一円形（北久根山式土器）と変遷するかに見える。そこで、近年東北部九州で明らかになっている縄文時代後期の住居跡から検証してみる。

まず、小池原上層式土器の時期の住居跡は、福岡県山崎遺跡で中央に石囲炉のある４号隅丸方形の住居跡が、土佐井遺跡で中央に敷石石囲炉がある６号円形住居跡が検出されている。また、大分県側では、三光村佐知遺跡で楕円形の可能性のある、中央部に石囲炉を持つ住居跡が報告されており、宇佐市尾畑遺跡では隅丸方形の石囲炉のある住居跡が調査されている。最近でも庄内町十合野遺跡で中央に石囲炉のある小型の方形住居が検出されている。

次に、小池原上層式土器から鐘崎式土器の時期の住居跡は、朝地町田村谷遺跡で２基の方形の住居が検出されている。また十合野遺跡では円形住居跡が検出されている。この時期に後続する鐘崎式土器の時期の住居跡になると、山崎遺跡で方形住居跡が２基、円形住居跡が１基検出されており、北九州市下吉田遺跡では方形と円形の住居跡が各１基調査されている。大分県側では、豊後高田市上野遺跡で石囲炉のある円形住居、中津市ボウガキ貝塚で楕円形と石囲炉のある隅丸方形の住居跡が報告されている。

さらに、北久根山式土器並行期の住居は、隣接する山崎・石町遺跡で４基の円形住居と隅丸方形住居１基が報告されており、大分県でも三光村佐知遺跡で円形住居が、別府市羽室遺跡で

円形住居が１基報告されている。

以上が東北部九州でこれまで明らかにされている縄文後期前半の住居跡である。この状況はら見ると、飯田二反田遺跡の最古の時期である小池原上層式土器の時期の住居は、隅丸方形・方形・円形がある。また、同じように鐘崎式土器の時期にも方形・隅丸方形・円形が認められる。そして、北久根山式土器並行期になると、方形と円形が認められるものの、円形住居が目立つ。このことから、飯田二反田遺跡で見られた住居跡形態の変遷は、この地域の住居跡の形態変化の一端を表していると言える。しかし、小池原上層式土器の時期にも隅丸方形や円形、鐘崎式土器の時期にも方形や円形の住居があり、規則正しく変遷したわけではない。むしろ、縄文後期前葉の小池原上層式土器の時期に、方形・隅丸方形・円形の住居があり、後期中葉になるに従い、円形住居を選択していったものと理解できる。

(4) 飯田二反田遺跡の住居内施設

飯田二反田遺跡では５基の竪穴住居と壁が削平された可能性のある住居跡１基を検出した。しかし、５号住居の半分以上が調査区範囲外に広がるため、住居の床面の全てが観察できたものは、壁が削平された可能性のある住居跡を含め５基であった。それによると、床面で検出した遺構は、中央部の炉跡・その近くの川原石を立てた立石・柱穴がある。

飯田二反田遺跡で検出された炉跡には石囲炉・土器炉・地床炉の３種類が認められる。石囲炉は、鐘崎式土器の時期である１・２号住居跡と壁が消平された住居跡に見られ、いずれも炉床の石はない。また１号住居跡の炉は東北方向に半円形に並ぶ石列があり、さらにその延長方向に炭化物を多量に含む部分が広がっており、複式炉の可能性がある。地床炉は小池原上層式土器の時期の４号住居跡で検出された。また土器炉は北久根山式土器の時期である３号住居跡で検出されている。

そこで、近年報告や調査された遺跡を見ると、石囲炉は、福岡県山崎遺跡３号・７号住居、下吉田遺跡１号・３号住居、土佐井遺跡６号住居、大分県佐知遺跡16号遺構、尾畑遺跡、上野遺跡などで、小池原上層式土器から鐘崎式土器の住居の施設として検出されている。特に、山崎石町遺跡と土佐井遺跡では炉床に石を敷く例が報告されており、石囲炉でも形態差が認められる。また、土器炉も山崎遺跡２号住居で飯田二反田遺跡と同時期の北久根山式土器の時期の住居跡に使われている。その一方、同時期の佐知遺跡４号遺構や羽室遺跡の住居では地床炉が検出されている。そして、北久根山式土器の時期以降は、土佐井遺跡５号住居や山崎遺跡６号住居のように石や土器を用いた炉は設置されなくなり、地床炉へと変化して行く。先にあげた、大分県大野川流域の生野遺跡や内河野遺跡の三万田式土器の時期の住居にはこうした炉はなく、すべて地床炉である。

このように、住居に伴う炉は、縄文時代後期前葉には、炉床面の石の有無による形態差があるが、石囲炉が主流を占める。そして、北久根山式土器の時期から土器炉あるいは地床炉へと

変遷し、後期後半には地床炉となって行く。

次に飯田二反田遺跡では、４号住居（小池原上層式土器）の床面中央部、１号住居（鐘崎式土器）石囲炉の北側の床面、壁が消平された可能性のある石囲炉の北側に、扁平な川原石を立てて埋める立石が検出された。こうした、床面の施設は、宇佐市尾畑遺跡の小池原上層式土器の時期の住居跡、福岡県大平村上唐原遺跡の鐘崎式土器の時期の２基の住居跡、大分県三光村佐知久保畑遺跡の小池原上層式土器の時期の住居でも検出されている。

この住居床面の立石が確認されているのは、現在大分県と福岡県の県境の山国川下流域から宇佐平野、そして飯田二反田遺跡のある駅館川流域と、豊前南部地域に限られている。飯田二反田遺跡の調査では、用途・目的などを知ることはできなかったが、今後の類似資料の増加や精緻な調査を持ちたい。

縄文時代後期の住居跡の調査例は年々増加しているが、柱穴が明確なものは多くない。下吉田遺跡・佐知遺跡４号遺構・尾畑遺跡・上野遺跡・羽室遺跡などでは、住居の輪郭や炉跡などは検出されたものの、ふさわしい柱穴は確認できていない。そうしたなか、飯田二反田遺跡では住居に伴う柱穴が比較的明瞭にとらえられた。それによると、２・３・４号住居跡は、中央の炉を囲むように、４ヵ所配置されている。こうした柱穴の配置は、飯田二反田遺跡で検出された小池原上層式土器・鐘崎式土器・北久根山式土器の各時期に見られる。また、鐘崎式土器の時期である１号住居は中央の炉を囲むように、東に開く「こ」の字形に７ヵ所配置されている。こうした柱の配置は、山崎遺跡の鐘崎式土器の時期である７号住居と同じである。この他、山崎遺跡の北久根山式土器の時期の２号住居や、土佐井遺跡の小池原上層の時期の６号住居は円形にめぐる壁にそって10本近い柱穴が並んでいる。

このように、大分県や福岡県東部の縄文時代後期前半の竪穴住居は、これまでの発掘調査から見ると、柱穴が不明確なものと、整然と検出されるものがある。前者は、上屋の重さが柱を固定化することになり、穴を掘削せずに構築していた可能性がある。また、後者は、柱を立て固定化することで、上屋を安定させていたものと考える。いずれにしろ、柱穴のあるものでも、柱の配置にはバラエティがあり、こうした構造の違いが、時期的なものか、建物の機能の違いを表すものかは、今後の調査による資料の増加を持ちたい。

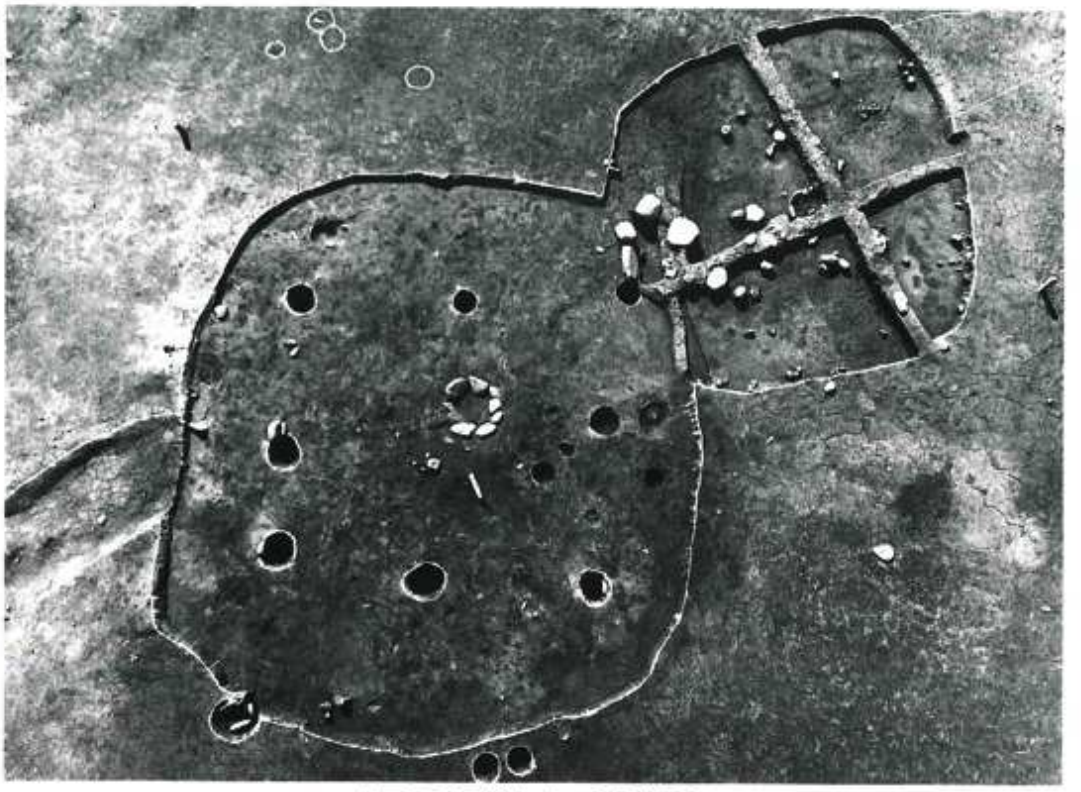
以上のように、飯田二反田遺跡の調査は、大分県で初めて複数の時期の住居が明らかになり、縄文時代の遺跡を集落として考える格好の材料となった。しかも、住居内の構造も明瞭に把握することが出来た。今後こうした資料の増加も予想され、現在でも、豊前地域で同様な遺跡の発掘調査が相次いでいる。飯田二反田遺跡の資料も、九州の縄文時代の集落を研究する上で、良好な資料を提供できるものと考える。

写　真　図　版

飯田二反田遺跡遠景（その1）

飯田二反田遺跡遠景（その2）

図版2

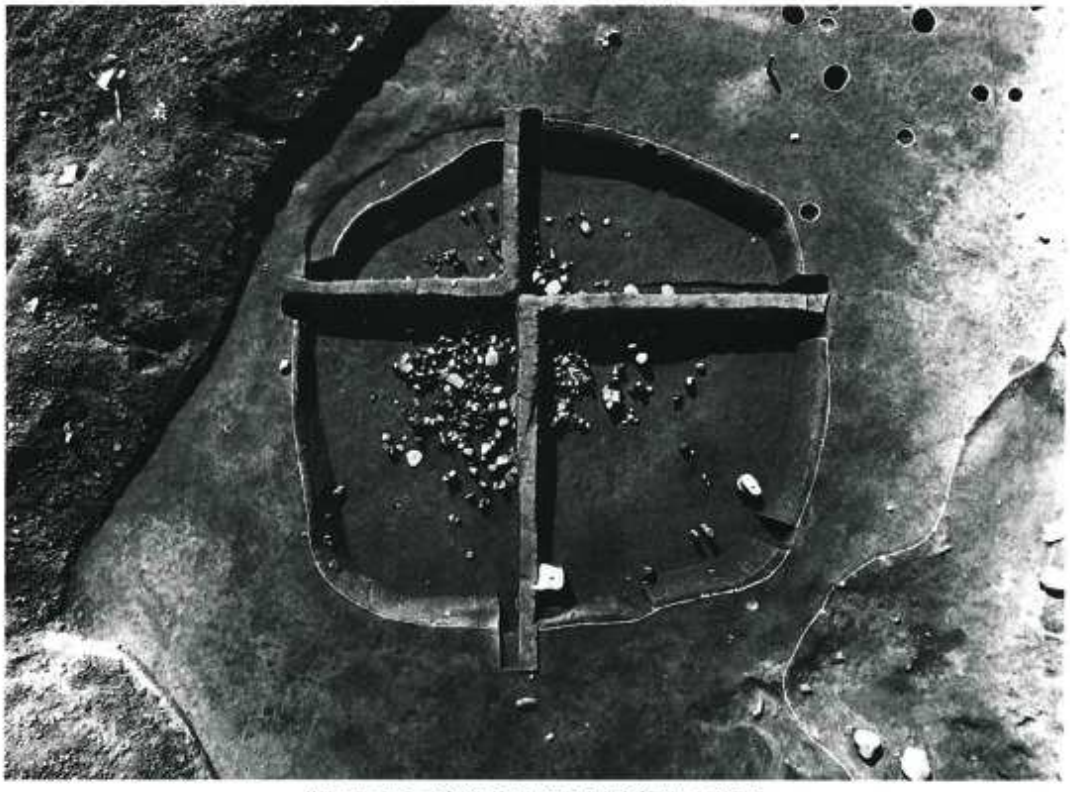


飯田二反田遺跡１・２号住居跡

飯田二反田遺跡１号住居跡

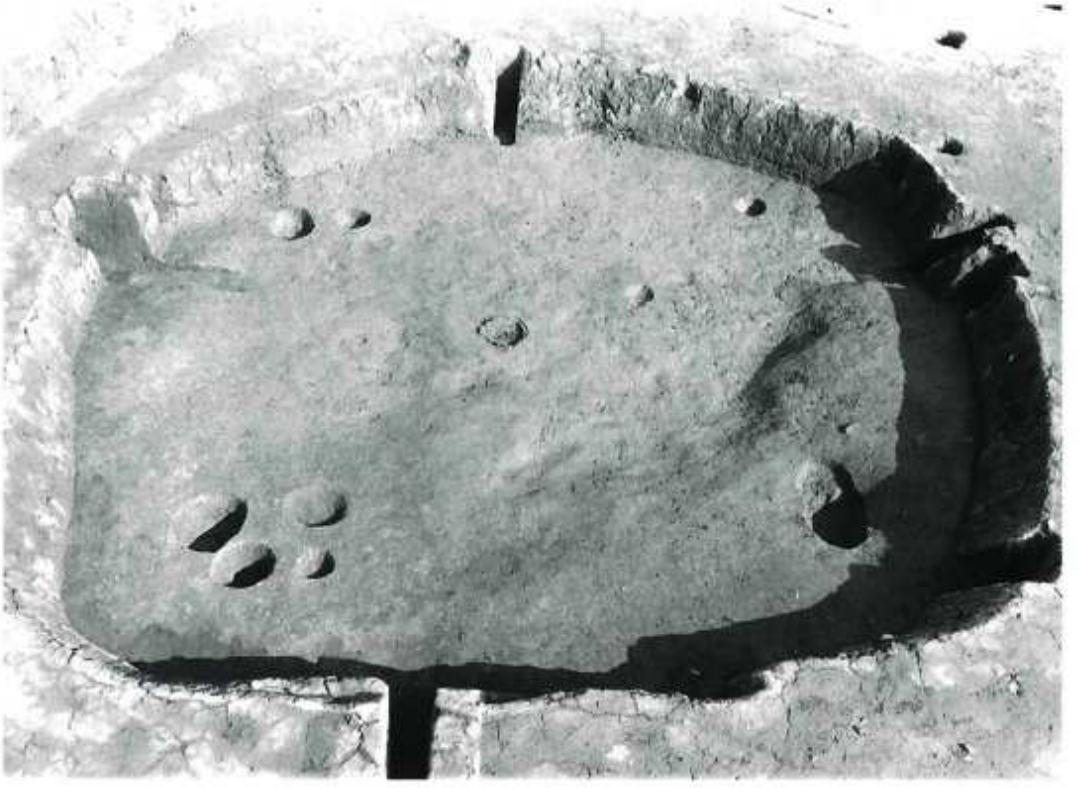
図版3

飯田二反田遺跡２号住居跡

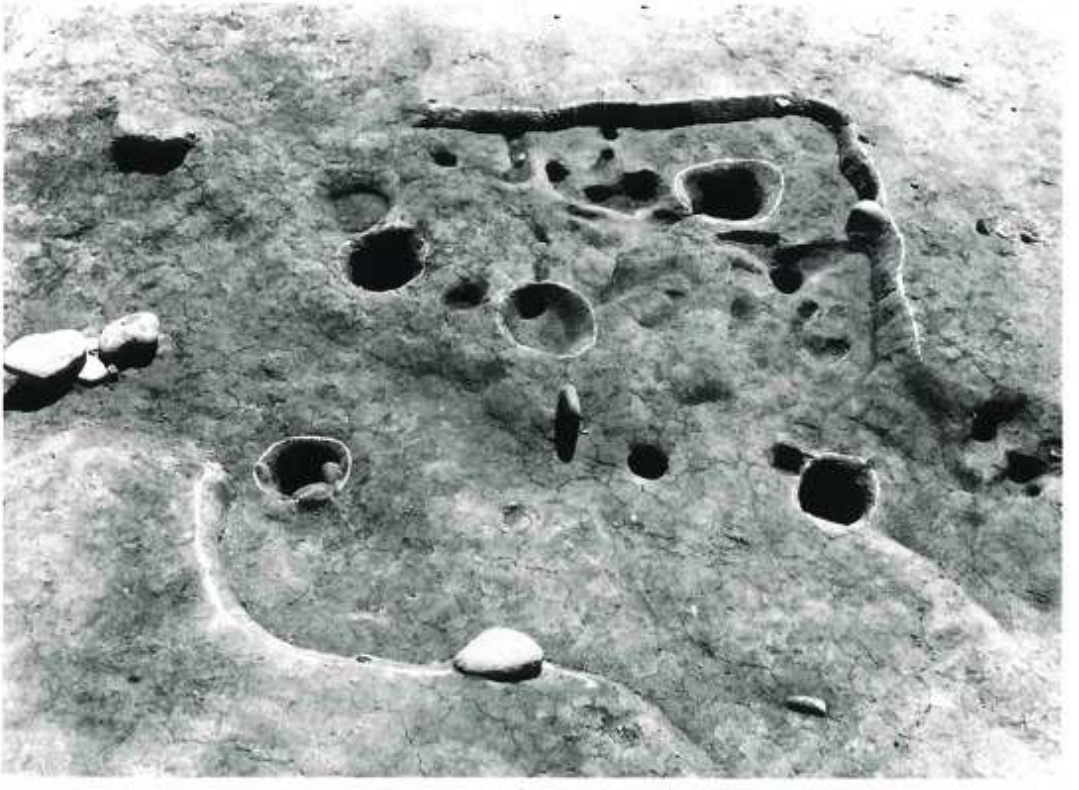


飯田二反田遺跡３号住居跡遺物出土状況

図版4



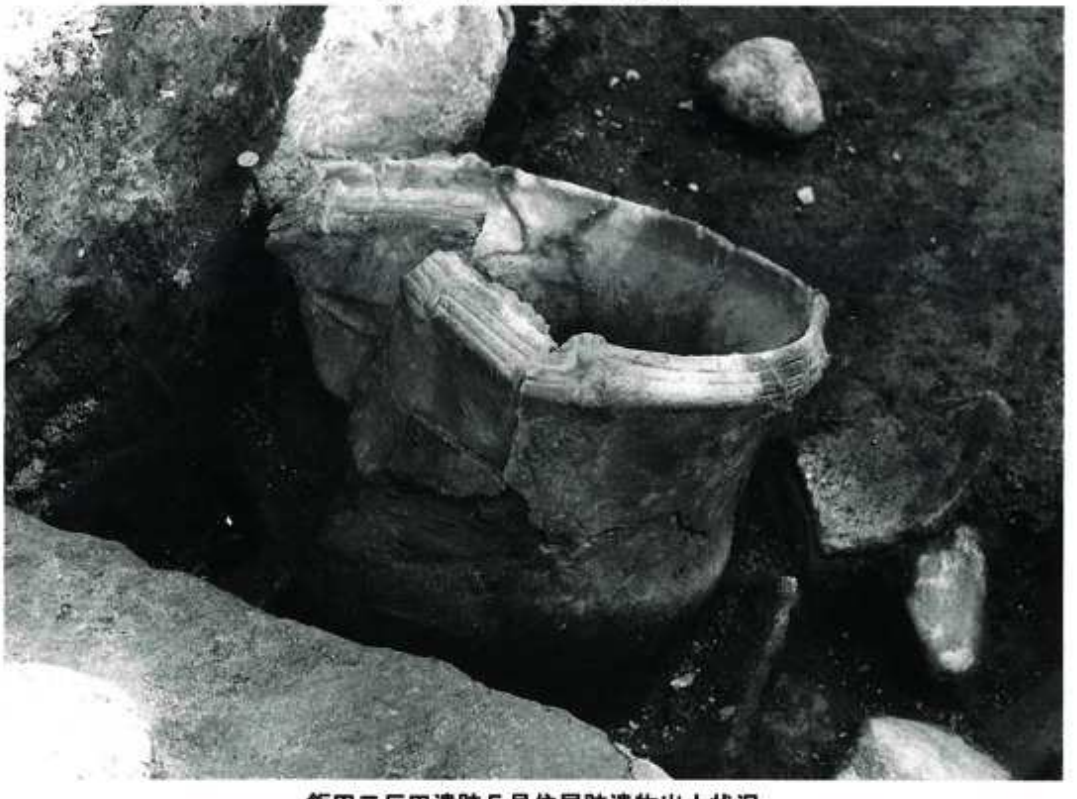
飯田二反田遺跡３号住居跡



飯田二反田遺跡４号住居跡

図版5

飯田二反田遺跡5号住居跡

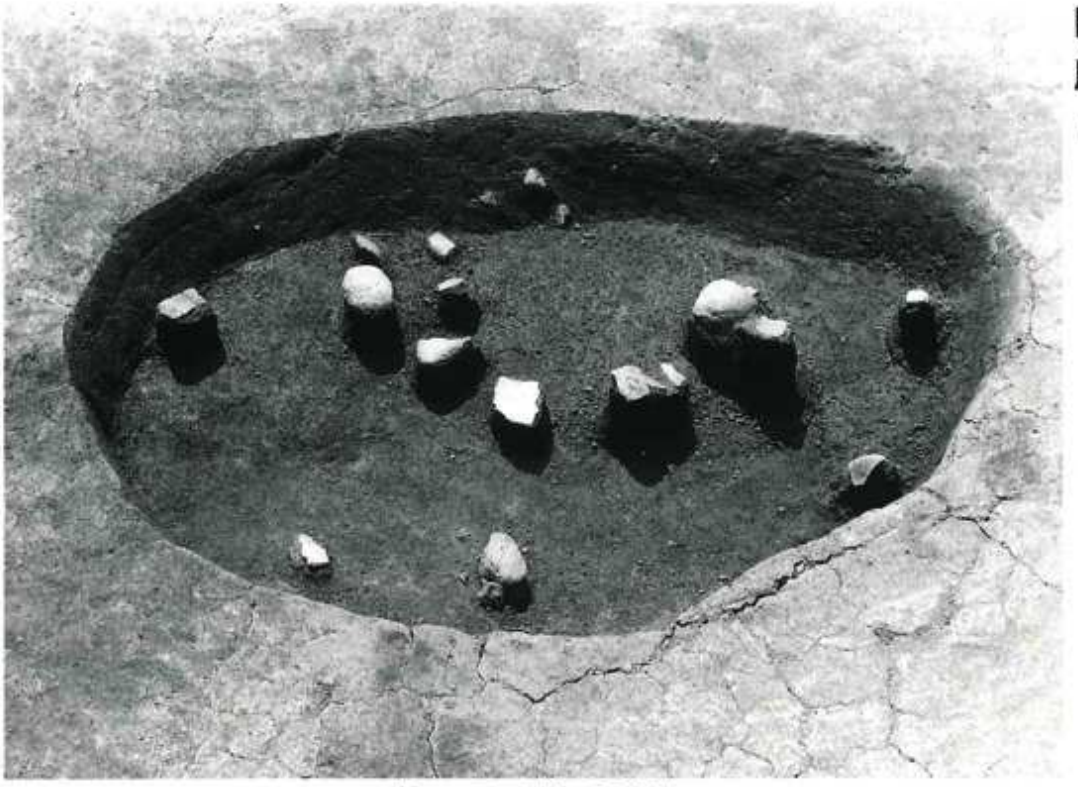


飯田二反田遺跡5号住居跡遺物出土状況

図版6

飯田二反田遺跡屋外炉

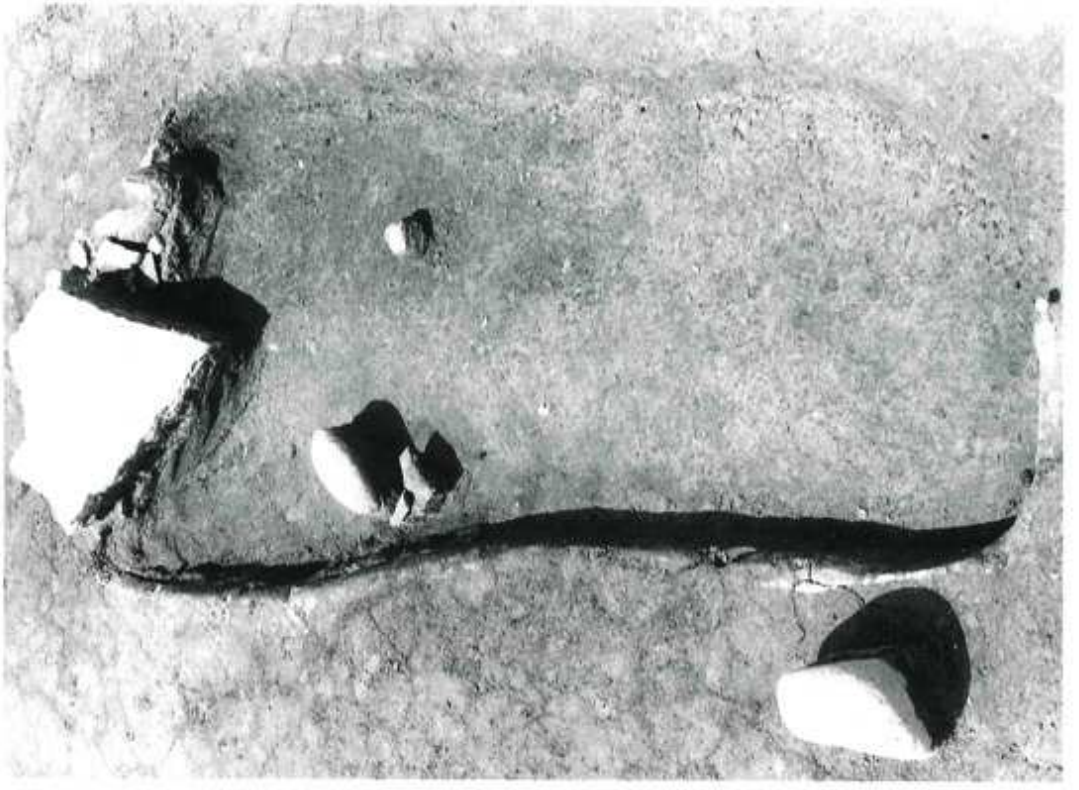
飯田二反田遺跡1号土坑



飯田二反田遺跡２号土坑

飯田二反田遺跡３号土坑

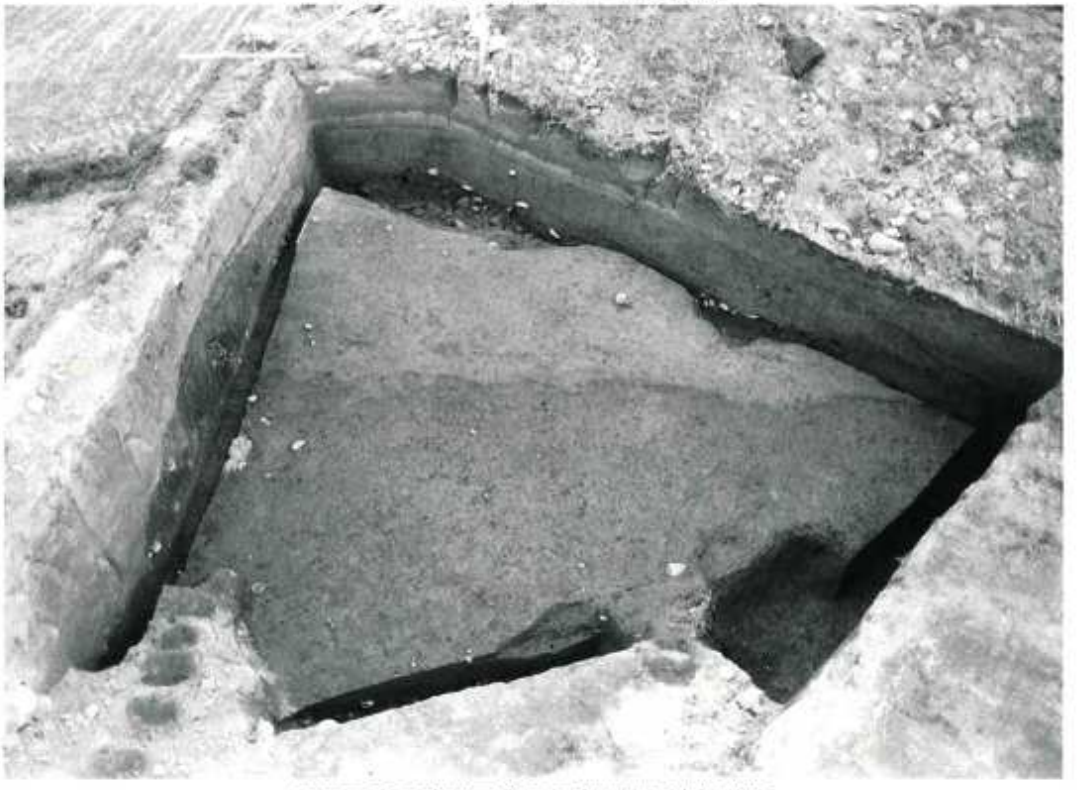
図版8



飯田二反田遺跡4号土坑

飯田二反田遺跡6号土坑

飯田二反田遺跡１号掘立柱建物跡



飯田二反田遺跡平成２年度調査区完掘状況

報　告　書　抄　録

ふりがな	はんだにたんだいせき
書　　名	飯田二反田遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	（Ⅰ）
編著者名	松本康弘ほか
編集機関	大分県教育委員会
所 在 地	〒870　大分県大分市府内町3丁目10番1号　℡0975－36－1111
発行年月日	1993年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′	東経 °′	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はんだにたんだ 飯田二反田	おおいたけん うさぐん 大分県宇佐郡 あじむまちおおあざ はんだ 安心院町大字飯田	44522 3	109012	33° 27′	131° 22′	88401～ 910331	1,600	道路建設

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯田二反田	集落跡	縄文	住居跡	縄文土器、石器	

宇佐別府道路埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）

飯田二反田遺跡

1993年3月31日

発　行　大分県教育委員会

印　刷　明治印刷株式会社